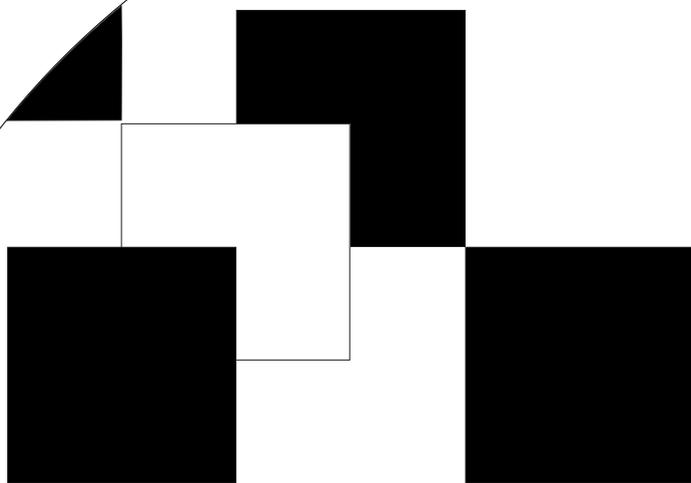


# 革命の

# ヨーロッパ



オイゲン＝ローゼンシュトック＝ヒュシー 著

宮島直機 訳

The Eugen Rosenstock-Huessy Fund dedicates this e-book of  
Miyajima Naoki's translation of Out of Revolution  
to the memory of

Feico Houweling,

translator of Out of Revolution into Dutch,  
our friend and fellow board-member.

This Japanese edition is completed by Miss Fumie Nakamura,  
the Editor in Chief of Tousuishobou Publishing Company.

We all are very grateful for her contribution.

And to her assistant Mr. Jukiya Kakizawa, too.

## 献辞

この本をグリーン夫妻 Henry Copley Greene and Rosalind Huidekoper Greene  
及びその一族に捧げる

私の父の庭園では大地が  
流浪の身で苦しみを重ねたあなたを  
いとも懇切に受け入れることでしょう…  
ゲータ『ナウジーカ』第1幕・第4場より（邦訳『全集』未収録。平山令二訳）

## 謝辞

この本の出版に際しては、つぎの方々にお世話になった。まずは原稿を読んで歴史家として有益な提案をしてくださったセントルイス＝ワシントン大学のゲルハルト教授 Prof. Dietrich Gerhard、校正読みをしてくださったダートマス大学の同僚ライト教授ご夫妻 Prof. W.K. Wright and Mrs. Wright、カロリング朝時代の建築に関する著作から写真を転載することを認めてくださったプレスラウ（プロツワフ）大学のツェラー教授 Prof. Adolf Zeller、ハンス＝スバルツェンスキ氏 Hanns Swarzenski の『13世紀のドイツ絵画 Die Deutschen Buchmalerei des XIII. Jahrhunderts, Berlin, 1936』から写真を転載することを認めてくださったベルリンの芸術家協会 Verein für Kunstwissenschaft in Berlin、ホセ＝クレメンテ＝オロスコ Orozco による十字架を斧で切り倒すキリスト像の壁画を転載することを認めてくださったダートマス大学のベイカー記念図書館、『フランスでは如何にして子供は書き方を学ぶか How the French Boy Learns to Write, Harvard University Press』からの引用を認めてくださったブラウン氏 Mr. Rollo Walter Brown、キプリングの『ジャングルブック』からの引用を認めてくださったロンドンのワット社 A. P. Watt and Son, London とニューヨークのダブルデイ＝ドラム社

Doubleday, Doran & Co., New York さらにキプリングの遺族の皆さん the heirs of Rudyard Kipling、ベネ Stephen Vincent Benét の詩『ジョン＝ブラウンの遺体 John Brown's Body』からの引用を認めてくださったファーラー＝ラインハート社 Farrar & Rinehart、『壁の落書き Handwriting on the Wall』からの引用を認めてくださったリトル氏 Arthur D. Little、『革命時代の社会・政治思想 The Social and Political Ideas of the Revolutionary era』からの引用を認めてくださったマッケロイ氏 Robert McElroy、『アメリカ史の新しい視点 New Viewpoints in American History』からの引用を認めてくださったシュレジンガー教授 Prof. Arthur Meier Schlesinger、フランスについて論じた第5章で『フランス用語集 French Terminologies in the Making』からの引用を認めてくださったスワン氏 Harvey J. Swann。

イエナ市（ドイツ）のディートリヒス氏 Eugen Dietrichs は、第1章「第一次世界大戦を終えて」で言及した『ヨーロッパの革命・国民性・国家形成 Die Europäischen Revolutionen, Volkscharakter und Staatenbildung, 1938』の出版元だが、アメリカで英語版を出版するに際して内容を書き改めるつもりだとお伝えしたところ、寛大にも予定していた英訳の出版を諦めてくださった。ハーバード大学・フォッグ博物館 Fogg Museum・ゲルマン博物館 Germanic Museum in Cambridge の図書館スタッフの方々、とくにダートマス大学図書館のスタッフの方々には著者の難しい注文に辛抱強くお応えいただいた。

以上のような支援なら、どんな研究者も得ることが可能なものだが、さらに著者は、戦前の学問の善き伝統を守ろうとされた方々の反対にも敢えて対抗しなければならなかった。ハーバード大学で政治学を担当されている畏友フリードリヒ教授 Prof. C. J. Friedrich は、まだ著者がドイツにいる時から英語版を出版することの難しさを心配され、すでに1932年にヘアツォーク氏 Paul Herzog やエルゼ博士 Dr. Gerald Else に出版の準備を依頼されていた。結局この準備は無駄に終わることになったが、逆に勇気づけられた著者は、そのおかげで英語版の出版を諦めずに済んだのである。その後もフリードリヒ教授は、引き続きお世話くださった。

友人のトマス氏 Thomas H. Thomas には歴史地図の作成でお世話になった。またカボット教授 Prof. Richard Cabot は、この本の出版が不可能と思われたときに、稀に見る寛大さと誠実さで出版を実現すべく努力してくださった。

献辞を捧げたグリーン氏は2年を掛けて著者の英文を完璧なものに訂正してくださいました。またグリーン夫人がいなければ、出版が実現することは無かったことであろう。

この本は、以上で述べたような知人・友人の協力があって初めて出版することができたのである。まさにこの本のテーマであった「靈感 inspiration」・「異能 genius」・「才能 talents」や「思想 thought」・「言葉 language」・「執筆 writing」は個人だけのものではなく、多くの人間を1つに結び付けるものだと行うことが証明された形になった。

1938年6月21日

バーモント州・ノーウィッチ市にて  
オイゲン＝ローゼンシュトック＝ヒュシー

#### 《著者紹介》

著者のオイゲン＝ローゼンシュトック＝ヒュシーは1888年、ベルリンでユダヤ人銀行家の息子として生まれた。ベルリン大学で法学の博士号を獲得した後、1912～14年にライプチヒ大学で教鞭をとり、1914年に始まった第一次世界大戦ではベルダン近くの戦線で将校として戦った。

戦争中に友人のローゼンツワイク Franz Rosenzweig とユダヤ教・キリスト教に関する議論を手紙を交換する形で展開し、すでにキリスト教に改宗していたローゼンシュトック・ヒュシーはローゼンツワイクに改宗を決意させそうになるが、最後にローゼンツワイクはユダヤ教に留まる決意を固める（彼らが交換した手紙は1935年に『書簡集 Briefwechsel mit Franz Rosenzweig』として出版され、キリスト教徒とユダヤ教徒の対話として古典的な地位を認められることになる。英語版は“Judaism Despite Christianity”）。

1915年にスイス人のマルグリット＝ヒュシー Margrit Huessy と結婚し、1925年にスイスの慣習に従って妻の姓を合わせ名乗ることにした（もともと彼の姓はローゼンシュトックのみ）。戦後は大学の教職に戻ることなくシュトゥットガルト市にあったダイムラーベンツ社で働くことにして、1919～21年にドイツ初の工場労働者のための雑誌を創刊して編集に従事した。1921～22年にはフランクフルト（＝アム＝マイン）で労働者アカデミーを創設・指導し、成人教育のパイオニアとなった（ちなみに1929年には、世界成人教育協会 World Association for Adult Education の会長に選ばれている）。

1923年にブレスラウ（ブロツワフ）大学の法学部・教授として教職に復帰し、1924年に新しい社会科学の在り方を探求した『魂の応用学 Angewandte Seelenkunde』を出版する（のちに英語版“Practical Knowledge of the Soul”がWipf & Stock社から出版される）。1925年には、それをさらに発展させた『社会学 Soziologie』を出版。さらに、カトリック教徒の友人ウイッティヒ Joseph Wittig が破門されると、2人で『教会の時代 Das Alter der Kirche』を書いて1928年に出版している。さらにブレスラウ（ブロツワフ）市では、1928～30年に農村で労働者・農民・学生に共同生活を体験させるキャンプを組織したりしている（のちにアメリカで平和部隊として展開される運動の原

型となる)。

1931年に『ヨーロッパの革命 Europäische Revolutionen』を出版しているが、この本で彼はヨーロッパ史の専門家として認められることになる。その内容をさらに発展させて1938年にアメリカで出版したのが本書『革命のヨーロッパ Out of Revolution』である。

1933年にヒトラー政権が登場するとアメリカに亡命し、ハーバード大学で2年間、教えたあとダートマス大学に移る。そこで1957年に定年退職するまで社会哲学の教授として教鞭をとる。フランクリン＝ローズベルト大統領が1933年に開始したニューディール政策の一環として展開した「民間自然保護団 Civilian Conservation Corps」のリーダーを育成するため、1940年に「ウィリアム＝ジェームズ＝キャンプ Camp William James」をバーモント州はタンブリッジ Tunbridge で開設する。

1940～60年に著作活動も活発に展開し、1945年には『キリスト教の将来 The Christian Future』、1956～58年には従来の『社会学』を発展させて2巻本として出版している。第1巻で展開した新しい社会科学の方法によって、第2巻では新しい人類史が展開されている。1963年には独特な言語論を展開した『人間の言葉 Die Sprache des Menschengeschlechts』を出版している。1950年代にはドイツの大学（ゲッティンゲン・ベルリン・ミュンスター）で、また1960年代にはアメリカの大学（コロンビア・カリフォルニア＝サンタクルーズ）で講義をおこなっている。

1937年から1973年に死去するまで、バーモント州のノーウィッチ Norwich に住んでいた。

## 革命のヨーロッパ

### 目次

献辞／謝辞	iv
著者紹介	vii
訳者からのお断り	xvii

序文：ハロルド＝バーマン (Harold J. Berman)	3
プロローグ 第一次世界大戦と世界革命	11
第1章 第一次世界大戦を終えて	13
第2章 革命を成功させる秘訣	26
第3章 失われつつあるヨーロッパの伝統	35
第1部 レーニンからルターへ：世俗世界の革命	41
第4章 ロシア：ユーラシア大陸の穀物工場	43
第1節 ブルガリアへの旅	43
第2節 母なるロシア	45
第3節 ソ連時代のロシア	54
第4節 インテリゲンチヤ (知識人)	62
第5節 インテリゲンチヤ (知識人) の例：レーニン	72
第6節 社会革命党の敗北	74
第7節 ボルシェビキ党の勝利	76
第8節 ロシア革命で使われていた言葉の特徴	81
第9節 マルクス主義の功罪	84
第10節 資本制経済が抱えている問題	91
第11節 労働者に自分本来の生活を取り戻させる方法	95
第12節 資本制経済の本当の犠牲者	99
第13節 ドストエフスキーとトルストイ	102
第14節 第1次ロシア革命と第2次ロシア革命	105
第15節 敗戦と革命	110

第16節 第一次世界大戦と世界革命	112
第17節 大不況	118
第18節 裏切り者のユダ	119
第19節 ロシア革命とフランス革命	122
第20節 メーデーの登場と歴史の終焉	125
第21節 ロシアにおけるカレンダーの改変	132
第22節 人種論の登場	134
第5章 フランス：	
小さな1地方に生まれた偉大なヨーロッパ人	138
第1節 革命のドラマ	138
第2節 フランス革命の意味	148
第3節 「ヨーロッパ」の意味	151
第4節 「ヨーロッパ」発祥の国ギリシャ	153
第5節 フランク王国の登場	156
第6節 パリとライン川	162
第7節 パリからベルサイユ宮殿へ	170
第8節 新教徒ユグノーとイエズス会	174
第9節 無責任な貴族の特権	177
第10節 「市民」が「国民」になることの意味	181
第11節 ボルテールとルソー	193
第12節 フリーメーソンとは何か	208
第13節 「至上の法 Law Paramount」であった成文憲法	211
第14節 十進法	217
第15節 キュリー夫人	221
第16節 「フランス」とは何か	224
第17節 フランス人の時間意識と空間意識	226
第18節 フランス社会の保守性	228
第19節 ユダヤ人解放	231

第 20 節	キリスト教徒とユダヤ人	234
第 21 節	新しい「救済論」	244
第 22 節	ドレヒュス事件	246
第 23 節	「自国民中心主義 <u>nationalism</u> 」とユダヤ人	249
第 24 節	誰がフランスを統治するのか	251
第 25 節	アダムとイブ：死を招く男女の愛	258
第 26 節	「理性 <u>reason</u> 」の落とし穴	261
第 27 節	パリの農民たち	269
第 28 節	フランスの個人主義 vs. イギリスの伝統主義	270
第 6 章	イギリス：ヨーロッパ世界の構成国	272
第 1 節	イギリス革命の特徴	272
第 2 節	イギリス王国	276
第 3 節	「コモンロー <u>Common Law</u> 」(王国法) の登場	283
第 4 節	「コモンロー」の復活	291
第 5 節	数字好きの国の財務大臣	295
第 6 節	「個別事例 <u>particulars</u> 」と先例を重視する思想	299
第 7 節	オリバー＝クロムエルの家系	304
第 8 節	新しい世界像の誕生	307
第 9 節	盗まれた「革命」	316
第 10 節	全能の「下院 <u>House of Commons</u> 」	321
第 11 節	議会の管理下に置かれた教会	325
第 12 節	「公共心 <u>public spirit</u> 」について	335
第 13 節	「教会会議」の終焉	338
第 14 節	「貴族 <u>gentleman</u> 」が使っていた言葉	340
第 15 節	11月5日の事件	349
第 16 節	名誉革命のヨーロッパ的意味	359
第 17 節	3つの「復古」	362
第 18 節	最初の「イギリス連邦 <u>Commonwealth</u> 」の崩壊	365

第 19 節	ブルジョアジーとの妥協： スポーツマン精神と自由主義の登場	369
第 7 章	ドイツ：森と讚美歌の国	377
第 1 節	イギリスの兵役廃止はイギリス国内のみ	377
第 2 節	ドイツ革命(宗教改革)の位置づけ	379
第 3 節	マルチン＝ルター	383
第 4 節	ドイツの役人	385
第 5 節	軍政分離	390
第 6 節	世俗法による一体的な統治体制の確立	391
第 7 節	「領邦君主 <u>Landesherr</u> 」の良心	397
第 8 節	預言者と国王：教会と国家	403
第 9 節	「陛下 <u>Eure Hoheit</u> 」の意味	407
第 10 節	ルター派の「領邦君主」と カトリック派の「領邦君主」	412
第 11 節	大学教授の独特な役割	413
第 12 節	マキャベッリもボダン <u>Jean Bodin</u> もいなかったドイツ	423
第 13 節	独特な大学のリーダーシップ	428
第 14 節	ドイツの音楽／ 閑話休題：「ドイツ文化 <u>Kultur</u> 」という言葉について	439
第 15 節	ドイツの森	440
第 16 節	「幹」と「枝葉」の関係	445
第 17 節	ゲーテの『ファウスト』	449
第 18 節	口先の批判だけになったルター派の末裔	455
第 19 節	ヒトラーの登場が意味すること	462
第 20 節	「領邦君主」に対するルター派の無抵抗主義	466
第 21 節	俗人の聖化	468

休題閑話 Transition ..... 471

第8章 ポリビオス Polybius の政体循環論 ..... 473

第1節 キリスト教とポリビオスの政体循環論 473

第2節 政治の世界で「汝の敵を愛せよ」(キリストの教え)  
が意味すること 479

第3節 梯形(雁行)編隊で行進 482

第4節 公的秩序すら超えたもの vs. 公的なもの 488

第5節 「国民性」とは何か 494

第6節 政治用語の対照表 497

第7節 ヨーロッパ人とは何か 499

第2部 ローマ帝国からアメリカまで：

2つの教皇革命 ..... 503

第9章 帝国なき皇帝 ..... 505

第1節 個別の国民か、それともヨーロッパ人か 505

第2節 皇帝の宮廷と各地の皇帝領 506

第3節 ダンテの『神曲』と「最後の審判」 518

第4節 「死者の日 All Souls' Day」：  
「最後の審判」の民主主義 525

第10章 教皇革命 ..... 535

第1節 皇帝 vs. 教皇 535

第2節 遠い過去に投影された新しい未来 537

第3節 経済革命 545

第4節 パウロに助けられたペテロ：  
「教皇革命 Papal Revolution」 547

第5節 「教皇革命」の開始 548

第6節 十字軍とスコラ学 563

第7節 「目に見える visible」教会の登場と

ラファエルの傑作 568

第8節 「キリストの敵 Anti-Christ」の登場 571

第11章 イタリア＝ルネサンス  
（「第2の教皇革命 Guelphic revolution」） ..... 581

第1節 教皇あつてのイタリア＝ルネサンス 581

第2節 「鍵の兵士 Schlüsselsoldaten」 583

第3節 教皇の外交術 585

第4節 イタリア半島の勢力図 588

第5節 統治は「一時的 hourly」たるべし 592

第6節 「景観 Landschaft」の登場とその政治的意味 596

第7節 貧しき聖フランチェスコ 602

第12章 ポリビオス再論 ..... 613

第13章 オーストリア＝ハンガリー帝国の遺産 ..... 626

第14章 伝統を打ち砕いた石臼 ..... 641

第1節 抑圧されていた過去の復権と大衆の登場 641

第2節 古い神々との決別 650

第3節 ヨーロッパの将来 654

第15章 アメリカ革命 ..... 663

第1節 独立戦争 663

第2節 2つの「平等」 668

第3節 失敗した「先駆けの革命 precursor」 674

第4節 「中途半端な革命 half-revolution」 683

第5節 アメリカ革命の特異性 687

第6節 新世界アメリカ 696

第7節 「アメリカに対する神の約束 promise of America」と  
「自然法 natural law」 702

第8節 「法として適切であるか否か due process of law」条項 708

## エピローグ：

「非日常の社会経済学 The Metanomics of Society」……	712
第16章 時代区分の意味 ……………	715
第1節 歴史の教科書について	715
第2節 「国民の記憶 nation's memory」とは何か	718
第3節 「国民の記憶」と歴史家がやるべきこと	722
第4節 「近代はルネサンスに始まる」：19世紀の神話	726
第5節 「細部に拘る <sup>こだわ</sup> microscoping」か 「遠い過去を見通す <sup>みとお</sup> telescoping」か	733
第17章 革命の将来 ……………	736
第1節 個人の <sup>なま</sup> 生の声を聴くべし	736
第2節 国民同士の対話にも耳を傾けるべし	739
第3節 自然の摂理に <sup>こ</sup> 抗して	740
第4節 必要とされる時に必要なことをなすべし	747
第5節 第一次世界大戦後の世界	757
第6節 人類の多様性	763
第18章 デカルトとの決別 ……………	771
第19章 生き延びるにはユーモアのセンスが必要 ……………	787

## 訳者からのお断り<sup>ことわり</sup>

この本の価値は、日本におけるヨーロッパ史研究に欠けた視点を提示していることにあると考えています。まずは第一次世界大戦がヨーロッパ人に対して持った意味の深刻さ。第1章をお読み頂ければ判りますが、ヨーロッパ人にとって第一次世界大戦は、さしずめ日本人にとっての太平洋戦争だったようです。日本人にとって第一次世界大戦は、せいぜい青島のドイツ軍を攻撃したくらいで済んでおり、ドイツ領だった太平洋諸島は労せずして入手しました（それが太平洋における野放図な戦線拡大の原因になっています）。しかし著者が書いている通り、この本の構想は第一次世界大戦の戦場体験から来ています。第一次世界大戦がヨーロッパ人にとって持った深刻な意味に対する問い掛け、これが我々日本人のヨーロッパ研究で欠落している重要な視点の1つです。

それに日本のヨーロッパ研究に決定的に欠けているのは、ヨーロッパ人の考え方を決める上で重要な役割を果たしているキリスト教的な判断枠組み（つまりはキリスト教の教義）です。たとえば堀米庸三の『西欧精神の探求』は（NHKが放送大学を開始するに当たって企画した試験放送で、のちにNHK出版が1冊の本として刊行）、「西欧精神の探求」と謳いながら実は「精神の探求」になっていません。「制度の探求」に留まっています。

その点で、ヒュシーのこの本は「精神の探求」そのものです。「まさかそこまでキリスト教（西欧に話を限るとすればカトリック教）の影響があったとは！」というのが日本人の正直な反応ではないでしょうか。我々日本人は自分たちの「迷信」を棚に上げて、どこかでキリスト教を「迷信」と考えている様に思えて仕方ありません。創造神の存在や処女からキリストが生まれたとか、死んでからキリストが生き返ったなどといったことが事実か否かはともかく、彼らが前提にしている考え方の枠組みはキリスト教（ないしはカトリック教）の教義であって、これを無視して「精神の探求」は不可能です（同様に日本人の自然崇拜や祖霊信仰を無視して日本人の「精神の探求」

も不可能でしょう)。

この本の内容は難物でした。山本七平を読んで少しは一神教のことを知っているつもりでしたが、判らないことばかりでした。パーマンを訳したときは、まだ法制度(「制度の探求」!)がテーマでしたから何とか分かりましたが(『法と革命』I,II 中央大学出版部), それこそ「精神」を共有しない訳者にヒュシーの書いていることは謎だらけでした。オランダ語訳を完成されたハウエリンク Mr. Feico Houweling 氏の助力が無ければ、とても翻訳を続けることは出来なかったでしょう。引用されている文章の典拠、難しい英文の解説、興味深いの意味がよく判らない図表の説明など(豊富な図表と地図の存在もこの本の特徴です。), 何とか訳者なりに理解して日本語で表現し直すことが出来たのは、ひとえにハウエリンク氏のおかげです。ま



12 使徒の宣教地域に区分されていた世界

スペインで作成されたにも拘らず、東方が上部に描かれ、西欧は下部・左の隅に追いやられている。776～1203年の修道院が所蔵していた世界地図は、このようなものが多い

た昨年、癌で亡くなられる前に後事を託すということでハウエリンク氏に紹介して頂いたデルフト大学のクレーゼン Prof. Otto Kroesen 教授にもお世話になりました。

理想を言えば立派な本の形で読んで頂きたかったのですが、諸般の事情で本の形にするのは諦めざるを得ず、ヒュシー財団のサイトに掲載して頂くことにしました。ヒュシーのお孫さんたちが管理・運営されている財団、とくにレイモンド=ヒュシー Mr. Raymond Huessy 氏には感謝したいと思います(ちなみに氏は許雷蒙という中国名をお持ちですので、以下では許雷蒙先生とします)。このような形で翻訳を公表できることになったのは、ひとえに許雷蒙先生のおかげです。

許雷蒙先生といえば、翻訳の過程で難解なヒュシーの英文理解に苦慮する小生を助けて頂いたことにも感謝しています。とくに第15章：アメリカ革命とエピローグの第16～19章の訳出に際しては、さんざんお世話になりました。

訳者がこの本(邦訳タイトルは『革命のヨーロッパ』)のことを知ったのは、パーマンの『法と革命 I, II』を訳したときでした(東方正教会とカトリック教会の違いを見事に説明した『法と革命 I』には、かつてワルシャワ大学・日本語学科講師ヘンリク=リプシツ Henryk Lipszyc 氏に紹介して頂いた山本七平『ユダヤ人と日本人』以上に感心させられました)。定年退職までの数年間でまず『法と革命 II』, ついで『法と革命 I』を翻訳しました。

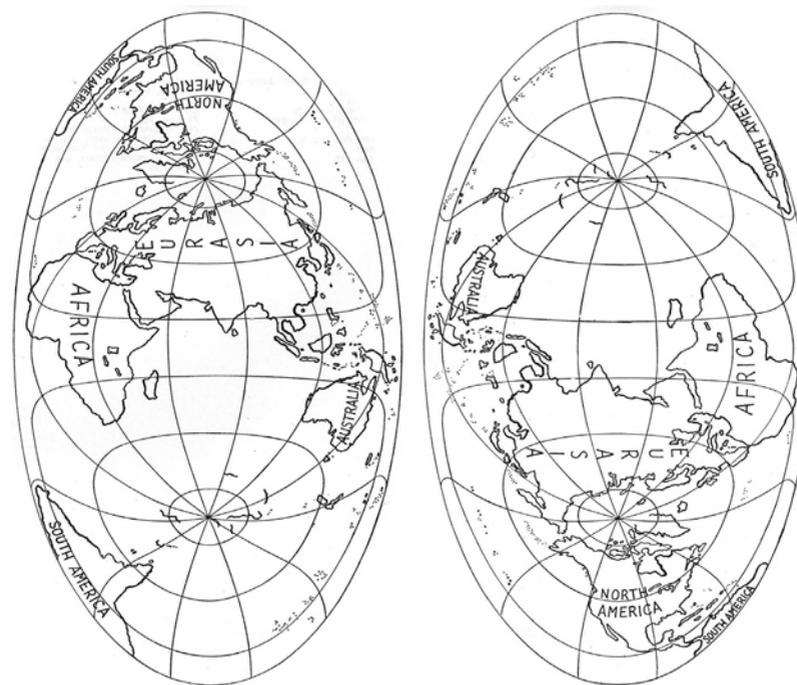
そして定年退職後にやることに決めていたのが『革命のヨーロッパ』の翻訳でした。しかしパーマンの本と違って、こちらは本当に悪戦苦闘する羽目になりました。何度も途中で投げ出したいになりましたが、そのつど気を取り直すことが出来たのは、ハウエリンク氏の丁寧なご支援・助言のおかげでした。またハウエリンク氏が亡くなられてからは、許雷蒙先生に筆舌に尽くしがたい支援・助言を頂きました。

我々と彼らのあいだで前提になっている「精神」が違ってからのなのでしょう、私にはチンプンカンプンの文章も、ハウエリンク氏や許雷蒙先

生にはピンと来るようなのです（それに許雷蒙先生は孫の立場でいろいろ見聞きされていたようで、そんな逸話めいた話も役に立ちました）。文章によっては「翻訳」というより「説明」になっている箇所が多々あります（前提になっている「精神」が違っている日本の読者に、機械的な単語の置き換えは無意味です）。また不要と思われる繰り返し、説明のやり直し、邦訳の読者には不要と思われる説明箇所は省略してあります。いわゆる「忠実な」翻訳ではありません。書かれている内容を読みやすい日本語で表現することを心掛けました。また原書では、各章が番号なしの節に区分されていますが、邦訳では節にも番号をふってあります。文中でどこか参照して欲しい箇所を指示するのに訳書のページ数を挙げられないので、章と節の番号で参照すべき箇所を指示しました。

この翻訳は、あくまでも訳者が理解できた範囲で日本語に表現し直したものです。訳者が誤解している可能性もあります。まったくの的外れということはないと思いますが、「ない」と言い切れる自信はありません（特に「エピローグ」の第17章と第18章）。なお、華麗・多彩な古典からの引用は（著者は典拠を示すことにあまり関心がなかったようで、ほとんど典拠が示されていません。そんな時にお世話になったのがハウエリンク氏と許雷蒙先生でした）、なるだけ既存の権威ある邦訳から引用することにしました。ただし全ての古典に邦訳があるとは限らず、あっても引用個所を特定できず、訳者の下手な翻訳で済ませている箇所もあります。また訳語で誤解されそうなもの、あるいは原語を示した方がよさそうなものは原語を訳語のあとに併記してあります。少々、煩雑になりますがご了解ください。

なおドイツ語とフランス語の単語やフレーズの意味について、中央大学法学部の親愛なる元同僚の平山令二先生（ドイツ関係）と小林正幸先生（オーストリア関係）、相田淑子先生（フランス関係）にお世話になりました。末尾ながら厚く御礼、申し上げます。また、聖書からの引用は、岩波書店の旧約聖書翻訳委員会訳・新約聖書翻訳委員会訳を用いました。訳文も判りやすく、解説も詳しくて素人にはお勧めです。



中心を欠いた世界

革命のヨーロッパ

## 序文 ハロルド＝バーマン

この本が最初に出版されたのは60年も前のことだが（初版は1938年。バーマンの序文は1998年に再版されたとき掲載）、いまだにその内容は古さを感じさせず、読む者を魅了して止まない。しかし、この本は内容に相応しい評価がされてきたとは、とても言えない。伝統的な歴史学と余りにも違っていたため、伝統に拘る歴史学者に無視されてきたのである。「さまざまな革命を分析してみせた」と称する歴史家に至っては（Crane Brinton, *The Anatomy of Revolution*, 1938, 1952, 1965）、この本を抜き下ろす書評を4つも書いている。このことで思い出すのは、18世紀のイタリアの歴史学者ヴィーコ Gambattisa Vico である。ヴィーコは生きてるとき完全に無視され、死んでからも長い間、評価されなかった。しかし、いまではアメリカ中の大学で偉大な先駆者として評価されている。ヴィーコの著作を読むために特別の授業が用意されるまでになっているが、ヒュシーも遠くない将来、新しい歴史学の提唱者として高く評価されることになるであろう。

この本を読めば、「歴史学 history」がどうあるべきかよく判る。高度に専門的なことが素人にも判るように、やさしく解説されている。歴史家として特別な訓練を受けていなくても、我々がどこから来て、どこに向かっているか理解できるように説明されている。また歴史家にとっても、この本は役立つ内容になっている。歴史とは何か・歴史はどう書かれるべきかが、判りやすく説明されている。この序文では、まずヒュシーの「歴史観 theory of history」を紹介してみたい。ついで、それがこの本でどう具体化されているか紹介してみたい。

## I

ヒュシーによれば、ヨーロッパ史は大きな転換期を迎える時になると、同じ「課題 motif」が繰り返し登場してくる。またヨーロッパ史は、この繰り返し登場してくる「課題」を念頭に時代区分をする必要があるという。

そこで歴史家は、まず繰り返し登場してくる「課題」を見抜く必要がある。ヒュシー自身は、ヨーロッパ史が新しい時代の「生みの痛み birth throes」ともいべき「大事件 great upheavals」によって区分されると考えている。「大事件」とは、記念日となって残っている出来事であり、新しい政治制度・宗教・思想を生み出すことになった出来事のことである。また「時代を画する make epochs in history」ような出来事は、民衆が「その情熱 collective passions」を爆発させるときに発生している。

したがって歴史家たる者、事件が起きた日時を確認するだけでは不十分であり、歴史を長期的な視野で捉えるべきである。「細部に拘り、無意味な事実を収集するだけに終わることを避けるため、また事実に根拠づけられない歴史法則を主張することを避けるため avoid the Scylla of disordered detail and the Charybdis of meaningless generalities」、歴史家は世代や世紀を単位に歴史を捉えるべきなのである。「科学的」とか「客観的」と称してきた19～20世紀の歴史学は、ただ細かな史実を収集してきただけであった。歴史の大きな流れを見ようとして来なかったのである。

ヒュシーにとって、歴史とは彼自身が経験した歴史、彼と同世代の人間が経験した歴史、ヨーロッパの自殺行為ともいべき1914年の戦争を引き起こすことになった歴史を意味していた。ドイツ軍の兵士として彼がベルダン Verdun の戦線で経験したこと、また彼と同世代のヨーロッパ人が第一次世界大戦で経験したことが原因で、「新しい歴史観 new basis for understanding history」が登場して来ることになった。その結果、新しいヨーロッパ観、延いては新しい世界観を「自分自身のもの our own autobiography」とすることができたのである。ヒュシーは、これまで各国別でしか考えられて来なかった革命が、じつは全ヨーロッパ的な革命であったことを明らかにしているが、同時に19～20世紀の「史実崇拜の realist」歴史学が、無意識のうちに自国中心の歴史を前提にしていたことを明らかにして見せた。

ヒュシーの「歴史観」を知れば、社会科学や人文科学にデカルト René

Descartes 的な自然科学の手法を持ち込むことが間違っていることも理解できる。人々を理想の実現に向けて一致団結させる「言葉の力 power of language, or speech」を信じていたヒュシーは、客観的であることの如何わしさを主張して止まらなかった。いまでは多くの優れた研究者が、彼のこの考え方に賛同するようになっている。しかし、それでも社会科学や人文科学（「歴史学、もしくは歴史の人間的な側面の研究 “science” of history or “humanity” of history」もそこに含まれている）は、相変わらずデカルト的である。しかし、デカルト的な方法が間違っているというヒュシーの主張に耳を傾ける者が増えてきているのも事実である。歴史のあり方を決めるのはデカルトが重視した数字などではなく、人間の「情熱」や伝統なのだということが認識されるようになって来ている。ところが凡庸な歴史の書き手(博士論文・教科書・専門論文などの書き手)は、相変わらず数字の収集と分析しか頭になく、伝統的なやり方で歴史を説明するだけである。

ヒュシーは「彼独自のやり方 personal style」で歴史を叙述しているが(これを優れた歴史家であるページ＝スミス Page Smith は、「きわめて反アカデミックな手法 fiercely anti-academic language」と呼んでいる)、彼がそんな方法に拘るのは、「それ以外の方法では自分の歴史観を説明できないから essential to the statement of his vision」(ページ・スミスの言葉)なのである。

「歴史には実現すべき目標があり history is purposive」、それが何かということは歴史を見れば判るといのがヒュシーの「歴史観」である。歴史の大きな流れを読み取ってくれば、我々が将来どうなるかを知ることができると彼は言う。「目指すべき目標 purposes of history」を何とか実現するために、同じ「課題」が繰り返し登場して来ると言うのである。ただし、歴史家は自分の結論を読者に押し付けるようなことが有ってはならない。なぜなら、歴史学は物理学や化学ではないからである(真実は1つとは限らない)。ヒュシーは、読者に自分の結論を押し付けるようなことはしていない。ヨーロッパの歴史や伝統を読者自身に考えさせ、読者自身が答えを見つけることを期待している。この本の最後の文章が、そうした彼の「歴史観

historiography」をよく物語っている。「ベスビオ火山の灰のうえに再建された街で飲むワインの味は、また格別なはずである。私がこの本を書いたのは、生き残りを望む者が自分だけで無いはずだと確信していたからであった」(第19章の最後の文章を参照)。

## II

ヨーロッパの近代史は900年前<sup>まえ</sup>ローマ教皇の指導下に、カトリック教会が皇帝・国王・領主による教会支配を排除した「教皇革命 Papal Revolution」に始まるというのがヒュシーの考え方である。この革命を契機に、ヨーロッパでは繰り返し革命が起こることになった。イタリアでも(都市国家の登場)、ドイツでも(宗教改革)、イギリスでも(名誉革命)、フランスでも(フランス革命)、アメリカでも(独立戦争)、ロシアでも革命が起きた。どの革命も一見すると国別に起きてるように見えるが、じつは全ヨーロッパ的な規模の革命であった。また1914年に第一次世界大戦が勃発し、さらに1917年にロシア革命が起きたことから判るように、どの革命も目標の実現に失敗していた。

ヒュシーによれば、ヨーロッパ人の夢は国境を超えてヨーロッパを1つに統合し、さらに全人類を視野に入れつつヨーロッパの再生を実現することであった。第一次世界大戦から2世代<sup>へ</sup>を経たいま、やっとその夢が現実のものになろうとしている。

この本では、まずロシア革命が紹介され、そのあとで18世紀・17世紀・16世紀の革命へと話が進められていく。歴史を逆<sup>たど</sup>に辿っていくのである。ヨーロッパを1つに統合する切っ掛けになった1075-1122年の「教皇革命」は、最後になってやっと登場してくる。おかげで読者は馴染み深い出来事から読み始めることができるが、ヨーロッパが1つになる話の開始まで(これこそが著者のテーマであった)何百ページも読み進めなければならないことになる。

マルクス Karl Marx に言わせれば、「歴史を<sup>けんいん</sup>牽引して来たのは革命であっ

た revolutions are the locomotives of history」。しかし革命が歴史を<sup>けんいん</sup>牽引してきたのは、ヨーロッパだけであった。ドイツ・イギリス・フランスで起きた革命をマルクスは「ブルジョア革命」とか「資本主義革命」と呼び、そのあとに「プロレタリア革命」ないしは「社会主義革命」が続くと考えていた。彼が「革命」と認めるのはこの2つだけで、16世紀以前に起きた革命が「封建制度」の実現を目指す「革命」であったと彼は考えていない。このマルクスの時代区分法、つまり中世の封建制度が革命によって近代の資本主義制度に変わり、さらに社会主義制度に変わるという時代区分法は、不幸なことに社会主義制度を採用したロシアだけでなく、ロシア以外の国でも採用されてきた。この時代区分法の最大の問題は、11世紀末～12世紀初めに起きた革命が無視されていることである。この革命は、それを起こしたローマ教皇グレゴリウス7世に<sup>ちな</sup>因んで「グレゴリウス改革」と呼ばれているが、最近この出来事が「中世前期 low Middle Ages」と「中世盛期 high Middle Ages」を<sup>へだ</sup>隔てる革命的な出来事であったと考えられるようになってきた。これを「教皇革命」と呼んだのは、ヒュシーが最初である(この本の構想が最初に登場して来るドイツ語版 Die Europäischen Revolutionen: Volkscharaktere und Staatenbildung, 1931を参照)。カトリック教会の変革が革命的な意味を持っていたことを彼は見抜き、またそれがのちの世俗世界の革命(カトリック教会の変革に対抗して起きた革命であった)に大きな影響を与えたことを彼は初めて指摘して見せたのである。その結果、マルクスの「経済決定論 economic determinism」が間違っていることが証明されることになった。いずれの革命も経済のあり方のみならず、政治・社会・法制・宗教など、あらゆるものを変えてしまったのである。また、それは1国で始まりながら全ヨーロッパに広がっていった。

この本の第8章「ポリュビオスの政体循環論」で、ヒュシーはヨーロッパ各国の革命の共通点、およびヨーロッパ各国がどのようにして共通のヨーロッパ文化を<sup>つく</sup>創ることになったかを説明している。ポリュビオスの政体循環論によれば、王制が腐敗すると専制になり、つぎに専制が貴族制に

取って代わられる。さらに貴族制が腐敗すると寡頭制に取って代われ、寡頭制はやがて民主制に取って代わられるが、民主制も腐敗して衆愚制になり、ふたたび王制が登場して来ることになる。しかしヒュシーに言わせれば、ヨーロッパで政体は循環していなかった。ヨーロッパでは、王制・貴族制・民主制が共存していた。同じように、封建制・資本主義体制・社会主義体制も共存していた。第12章で彼は再度、ポリュビオスに言及しているが、そこで彼はヨーロッパ各国の革命に見られる共通点を挙げている（最初からヨーロッパ全体が問題になっていた「教皇革命」にも、同じ共通点が見られる）。どの革命も数世代、続いたあとで終わりを迎え、革命が終わると今度は革命に対する反動期があつて、そのあとで革命は「終焉 Golden Age」を迎えていた。この革命の周期についてヒュシーは、政治・経済・法制面のみならず、言葉や芸術なども取り上げて論じている。

もちろん、この本にも多くの問題があるが、みごとな洞察に満ち溢れていることは否定できない。たとえばアメリカ革命（独立戦争）に関する著者の指摘は、たいへん興味深い。1776年のアメリカ革命は、17世紀のイギリス革命（ピューリタン革命）が持っていた貴族的・「共同体的 communitarian」・伝統主義的な特徴と、フランス革命が持っていた民主的・個人主義的・合理主義的な特徴を共に有していたと言うのである（この特徴は現在のアメリカについても指摘できる）。

どの革命も、まず過激な運動として始まり、結局は決別するはずだった過去との妥協で終わっている。1938年にこの本を初めて出版したとき、すでにヒュシーはロシア革命が1934年に「終焉」を迎え始めたとして書いていた。スターリン Iosif Stalin はロシア史とロシア語の大切さを強調するようになり、それまでの過激な国際主義を放棄し始めたのである。ロシア革命は、「終焉」を迎えるのに50余年、掛かったことになる。

『革命のヨーロッパ』が出版されてから60年が過ぎたが、いまだにヒュシーが提唱した「新しい歴史学のあり方 new science of history」は歴史家に影響を与えていない。それどころか歴史家の視野はますます狭いものにな

り、歴史学が目指すべきものからますます遠ざかっている。現在と未来にとって過去が何を意味するか理解するようになった歴史家は、ほんの2・3人に過ぎない（それも、やっと晩年になってからである）。歴史家が問題にするのは細かな史実に過ぎず、未来にとって重要な意味を持つ出来事や、かつて父祖たちの「情熱」を掻き立てた言葉などは無視されたままである。問題にされているのは、相変わらず「諸勢力 forces」や「諸条件 conditions」だけである。

ヒュシーは偉大な予言者でもあった。そして偉大な予言者の例にもれず、彼も生きているあいだは無視され、死後やっと注目されるようになった。独特なスタイルで書かれたこの本は、歴史とはどう考えられるべきものなのか、どうすれば21世紀の歴史学が人類の未来を予測できるのか示してくれている。

## 第1章 第一次世界大戦を終えて

歴史は、理想を実現したいという「人間の情熱 our passions」によって作られてきた。「人間の情熱が1つに結集されること collective passions」で作られてきた。新しい統治体制・国境線・陸軍や海軍・学校制度・整備された道路網・法制度の登場などが可能であったのは、「1つに結集された人間の情熱」のおかげであった。個人が戦争・革命・冒険行ぼうけんこうのような「共同事業 common enterprise」に踏み切ることができたのも、「1つに結集された人間の情熱」のおかげであった。歴史の転換期には、「政治 political effort」が「人間の情熱」を「1つに結集 unanimity and coherence」してきたのである。

国や文化が違えば「情熱 passions」の内容も違ってくる。たとえばピューリタンは、性欲を好ましくないものと考えてその抑制よくせいに熱心であった。またロシア人は性欲の抑制には無関心で、株の売買や競馬で発揮される人間の投機本能を抑制することに熱心であった。どんな「情熱」を抑制よくせいするかによって生み出される人間のタイプは違ってくるし、社会のタイプも違ってくる。

「理性の時代 Age of Reason」には「情熱」が無視されたままであった。「人間は歴史の進展で情熱と無縁になっていく increase of Reason was the summary of human history」と信じられていたからである。しかし「理性と啓蒙 Reason and Enlightenment」の追求や科学の発展（それが敬意に値する成果を挙げてきたことは認めざるを得ない）を可能にしたのも、じつは「人間の情熱」であった。

そこで本書では、「人間の情熱」がどのように歴史を動かしてきたかを示してみたいと思う。漠然と歴史を眺めていると、統治のあり方や「公共心 public morals」のあり方を決めてきた「人間の情熱」は、およそ「法則 order」とは無縁のように思えてくる。しかし、そこには一定の「法則」が存在する。そもそも「人間の情熱」には、終わりということがない。「人間の情熱」は、それが強ければ強いほど止まるところを知らないからであ

る。人間は1つの夢を実現しても、それで満足することがない。かつて我々の父祖たちは「理性 Reason」のために死ぬことを厭わなかったが、彼らが死すら厭わなかったのは、「知識の獲得によって人間のあらゆる問題が解決できると確信していたから find the apples of knowledge and eternal life, both in one」だけではなかった。「人間の情熱」故でもあった。

個人や国民が理想の実現に「情熱」を燃やすことができなくなったら、そのとき個人や国民は歴史の舞台から退場するしか無くなる。「人間はつねに情熱を燃やしている必要がある The heart of man either falls in love with somebody or something」。情熱を燃やせなくなったとき、「人間は正気でなくなる heart falls ill」からである。「人間の心はつねに情熱によって満たされている必要がある The heart can never go unoccupied」からである。そこで問題となってくるのが、あることに対する「情熱」が覚めたあと何に「情熱」を燃やすかということである。

それにしても、どのようにして「人間の情熱」は歴史を作ってきたのか。はたして、その痕跡を辿り直すことは可能なのか。

我々が犠牲を払ってもよいと考えるのは、どんな時どんな場合なのであろうか。金銭的な犠牲だけでなく、場合によっては生命すら犠牲にしてもよいと考えるのは、どんな時どんな場合なのであろうか。あるいは、何を犠牲に値すると考え、何を犠牲に値しないと考えるのであろうか。

「情熱」を感じるからこそ我々は犠牲を払うのを厭わないのであり、我々が払う犠牲のおかげで我々の生き方は変わり、我々の統治制度は変わるのである。「情熱」のために犠牲を払うことができるのは人間だけである。そのおかげで人間はよき統治制度を手に入れることができた。

この本のテーマはヨーロッパの歴史である。ヨーロッパの歴史に関しては、すでに様々な形で研究がなされてきたが、ヨーロッパの歴史研究を最初に提唱したのは1803年にドイツ語の雑誌『ヨーロッパ Europa』を創刊したシュレーゲル Friedrich Schlegel であった。彼は当時の「革新派 moderns」が忘れていたことを指摘してみせた。つまり、人類の歴史は何千年も前の

古代エジプトや古代バビロニアで始まったのではなく、1000年前にヨーロッパで始まったのである。1000年に渡るヨーロッパの歴史がうまく説明できなければ、何も説明したことにならないと言うのである。つまりヨーロッパの歴史がうまく説明できるか否かによって、人類の歴史がうまく説明できるか否かが決まってくるのである。

この本の構想は、第一次世界大戦の塹壕のなかで生まれた(1917年に私はベルダン Verdun の前線に、1人のドイツ兵として駐留していた)。あの戦争で前線にいた兵士たちは、銃後の国民と違ったことを経験していた。あの戦争で殺され、傷ついた兵士の経験が次の世代の子供たちに受け継がなければならない、我々に未来はない。第一次世界大戦の経験を踏まえた歴史研究の方法や歴史叙述のあり方を完成させるまでは、歴史家にとって戦争は終わったことにならない。少なくとも私にとって、戦争は終わったことにならない。

誰もが、あの戦争のことを忘れたがっている。戦後に起きた様々な出来事に感けて、我々はあの戦争のことを忘れようとしている。歴史家も第一次世界大戦までの歴史を「戦前の歴史」で片付けてしまい、あの戦争が持っていた本当の意味を探ろうとしない。100年前のナポレオン戦争と同じ戦争であったとか、年表の項目が1つ増えただけだといったことで片付けようとしている。

しかし、あの戦争は年表の項目を1つ増やしただけの戦争ではなかった。あの戦争の後、全く新しい時代が始まったのである。歴史を書き換えてしまうような戦争、過去が持っていた意味を変えてしまうような戦争、それが第一次世界大戦であった。あの戦争のあと、男女関係のあり方や家族のあり方が変わってしまっただけでなく、「生きることに意味づけ conviction」まで変わってしまったのである。過去が違って見えてくるようになった。第一次世界大戦を経験したことで、ヨーロッパを国別に分けて考えることが間違っていることに我々は気づいたのである。あの戦争で経験したことの意味を理解できない人間には、「歴史を語る資格はない he would not deserve any history」。あの戦争を経験した後も歴史を書き換え

る必要性を認めない人間には、「歴史を語る資格はない」。「そんな人間は、あの戦争で人間であることを止めてしまった Their souls had been killed in the World War」のである。

この本に何か取り柄があるとすれば、第一次世界大戦の経験を踏まえてヨーロッパ史の書き換えを試みたということより、むしろ第一次世界大戦が持った意味を直視しようとしていることである。読者は自分の経験に照らし合わせて、私の主張が当たっているか否かを判断できるはずである。そうすることで初めて読者との対話も可能になってくる。第一次世界大戦（これを「世界革命 World Revolution」とか「ヨーロッパの自殺行為 Suicide of Europe」、あるいは「アメリカによるヨーロッパの制覇 Crusade of America」と呼ぶ者もいる）が持った特別な意味を認めないと言うなら、その根拠を示すべきである。第一次世界大戦を経験した読者なら、その特別な意味を認めるはずである。

第一次世界大戦を経験していながら、その特別な意味をまったく認めようとしない読者が居るかもしれない。この本が「戦争と革命の業火 hellfire of war and revolution」から生まれて来たことに衝撃を覚えない読者は、その特別な意味を認めようとしない読者の1人と言える。

しかし、第一次世界大戦が持った特別な意味を認めてくれる読者も多い。そんな読者なら、私が第一次世界大戦の過酷な経験が忘れ去られようとしていることに警鐘を鳴らしている理由がよく判るはずである。人間は忘れる名人であり、とくに過酷な経験を忘れる名人である。

科学の世界で新しい発見が可能であったのは、何かに驚嘆し、またそのことに執着し続けてきた者がいたからであった。無関心からは何も生まれて来ない。ニュートンが万有引力の法則を発見するまで多くのリングが木から落ちていたし、第一次世界大戦前にも多くの生命が戦争で失われていた。しかし、「戦争を終わらせるための戦争 War to end War」と言われた第一次世界大戦は、それまでの戦争とは丸で違った戦争であった。神聖視されていた「国民・民族 nation」といった考え方が、じつは「とんでもない

シロモノであったことが判明した really discoverable」戦争であった。

第一次世界大戦のおかげで、過去も未来も違って見えるようになった。人間に対する考え方も変わってしまった。物理学でプランク Max Planck が起こした革命（量子論）、動物学でダーウィン Charles Darwin が起こした革命（進化論）、経済学でマルクス Karl Marx が起こした革命、神学で自由主義神学が引き起こした革命に匹敵する革命を、第一次世界大戦は歴史学の実験分野で引き起こすことになったのである。

人間が生きていくためには、「この世 Earth」・「あの世 Heaven」・「他者 Society」の3つが欠かせない。その具体的なあり方は時代によって違っているが、いつの時代も人間はこの3つを必要としてきた。しかし混乱・無秩序・意見対立などが、その存続を脅かして来たことも事実である。とくに第一次世界大戦前に歴史観 vs 自然観・物理学 vs 神学の対立が深刻になっており、第一次世界大戦の勃発はその結果であった。もっとも、専門家を自称していた大学の研究者たちは大戦の勃発を予想しておらず、大戦の勃発に驚いていた。

私が以下で展開してみせるような歴史観を獲得することができたのは、第一次世界大戦を経験したおかげである。人間にとって何が大切で何が大切でないかを教えてくれたのが、あの戦争であった。何百万・何千万という人間が犠牲になったあとで、やっと歴史とは「自分自身の歴史 autobiography」のことであるということが判ってきたのである。

私には、舞台上ショーを見ているように歴史を傍観していることはできない。ヨーロッパで数々の帝国が登場して来たこと、アジアで多くの文明が消えていったこと、古典主義とロマン主義の登場と衰退など、これまで輝かしい歴史上の出来事とされて来たことが第一次世界大戦のあと、およそ無意味としか思えなくなった。この戦争で死んでいった2000万人の兵士が、その事実を突き付けたのである。歴史とは、すなわち「自分自身の歴史」に他ならないことが判ったのである。それまで重要だと考えられてきた無数の史実も、そのすべてが無意味だと判ったのである。そんなもの

は図書館の本に積もった埃ほこりのようなもので、およそ無意味である。

しかし、もし歴史が「自分自身の歴史」になれば、エデンの園で「知恵の木 tree of knowledge」の実を取って食べたからといって、「不死の木 tree of life」の実を取って食べることが禁じられることは無くなるかもしれない(歴史に関する知識が生きたものになり、現実の問題を解決するのに役立つかもしれない)。

第一次世界大戦を経験した世代は、いわばエデンの園で「知恵の木」の実を食べてしまったのである。そのことを正直に認めさえすれば、あるいは問題を解決する方法が見つかるかもしれない。傍観者の立場に立って歴史を見ていると、我々の過去は混乱しているだけで未来も暗いということになる。しかし、我々がお互いに人間としての連帯感を忘れず、人間として共感しあう心を失わなければ、まだ希望はあるというのが私の確信しているところである。

まずは歴史を「自分自身の歴史」として読むことから始めよう。そうすれば過去や現在だけでなく、未来にも関心が向かうはずである。

ただ気になるのは、はたして人間にそんなことができるかということである。少なくとも今のままでは、現代人が歴史を「自分自身の歴史」と考えることはないであろう。刺激だけを追い求め、驚くほど過去を忘れるのが得意な現代人にとって、歴史を「自分自身の歴史」として読むことなど、そもそも不可能であろう。幸いなことに、人間は過去を記憶とどに留めておく方法をいろいろと工夫してきた。この本では政治的な出来事と教会関係の出来事を重視している。ある国がどんな出来事を記念日として残し、どんな出来事を記念日として残さなかったのかということを確認すれば、その国の教育のあり方や伝統いっが何時いつどう変わったかを知ることができる。昔から人間は、記念日・祭日・「聖なる日として労働を避ける安息日 holiday」・食事の作法・休暇の取り方・宗教的な儀式や象徴などの形で過去を記録してきた。歴史家は、この記録を活用すべきである。

「聖なる日として労働を避ける安息日」が設けられたのは、政治的な理

由からであった。しかし、それが休日として定着するには10年や20年の歳月では不十分であった。少なくとも3世代から4世代の歳月が必要であった(1世代は30年とされるから、およそ1世紀が必要ということになる)。それに、本当にそれが定着するためには、それを休日とする集団が定着を目指して一致団結、努力する必要がある。個人だけでは、どう足掻あがいても定着させるのは不可能である。本当に定着させるには、何世代もの人間が継続的に努力する必要がある。

この本では1世代以上、忘れ去られることがなかった出来事や史実だけを問題にすることにした。特定の個人や、短期間しか記憶とどに留められなかった出来事などを問題にすることはしていない。この本が主として問題にするのは、人間の歴史にとって大きな意味を持った革命である。また具体的な中身なかみ抜きの抽象論を展開したり、統計的な数字だけを問題にしたりすることもしない。

無名の戯曲家が書いたドラマ・施ほどこしに感謝する乞食つぶやの眩くらき・司祭が信者に与える祝福の言葉・群衆の怒りの言葉など、その全てが人間の歴史にとって重要な意味を持つ。ガイ＝フォークス Guy Fawkes による国会議事堂爆破の失敗を記念した11月5日の行事(ガイ＝フォークスの人形を子供たちが引き回したあとで焼いてしまうイギリスの行事)、モーツァルトのオペラで有名な「フィガロの結婚」のような話が登場してきたこと(貴族を笑い者にしたこのオペラの登場は、貴族の権威失墜と平民の台頭をよく象徴している)、煉獄すべにいる全ての死者が天国いに行けるように祈る日(11月2日。11月1日の「全聖人の日」の翌日にカトリック教会が定めた祝日で、この日にカトリック教徒は墓参りをする)、アッシジの聖フランチェスコ St. Francesco of Assisi が歌ったという「太陽讃歌 Canticle of the Sun」などは、歴史を説明するうえで重要な出来事である。私は、こうした出来事の意味を大切にしたいと思う。人間には自分のことを説明する能力が備わっているが、自分のことを公共の場で正直に話すようなことはしない。注意しなければならないのは、ときに言葉は真実を隠すということである。しかし真実を隠そうとすればするほ

ど、また言葉が簡単であればあるほど、言葉は重みを持つようになる。花嫁が祭壇のまえで隣にいる男を夫とするか否かを答えるとき、2人の男女が子孫を残せるか否か、つまりは人類が存続できるか否かが決まるのである。この結婚の儀式ひとつ取ってみても、その背後に隠されている歴史は我々に見えてこない。花嫁の簡単なイエス・ノーの返事が、動物と人間の違いをよく表している。

祭壇の前の花嫁のように、人間は自分の秘めた決意や選択を言葉にする。しかし毎日の記録を長く（たとえば1000年間）見ていなくても、人間が本当に目指しているものは知ることができる。歴史上、重要な意味を持つ出来事は、非日常的な場で明らかにされるからである。結婚式における花嫁の言葉のように、人間にとって重要な意味をもつ出来事が起きると、特別な言葉・歌・約束・法典が登場してくる。そんな特別な言葉・歌・約束・法典を確認することで、人間は自分の将来を知ることができる。

過去の記録は無限にある。無限にある過去の記録から、我々は意味ありと考えられるものを選択して来ることになるが、当然のことながら我々には、選択の正しさを確認する手段を読者に提供する義務がある。

私個人が有しているかもしれない偏見や迷信の有無を読者に確かめてもらうため、私は話を過去からでなく現在から始めたいと思う。現在についてなら、読者も私の選択が正しいか否かを判断できるはずである。同時代人として、私と同じことを経験しているからである。

話をロシア革命から始め、そのあとフランス革命・イギリス革命（名誉革命）・ドイツ革命（宗教改革）と時間を遡って説明して行くことにする。この4つの革命は、いずれも世俗世界の支配権を巡って世俗の権力が起こしたものであった。この4つの革命を比較することで明らかになって来るのは、それが相互に影響を与え合っていたということである。また結論として言えることは、4つの革命によって提起されなかった問題が第一次世界大戦によって提起されたということである。「帝国 Empires」・「正義の戦い Crusades」・「教会 Churches」・「国籍 Citizenship」・「支配権 Authority」は第

一次世界大戦で問題になったことだが（いまでも問題になっている）、それを生み出したのは1789年のフランス革命でもなければ、1688年のイギリス革命でもなかった。それはもっと古い時代に登場してきた問題であった。

この本の第2部では、第一次世界大戦の結果として見えてきた4つの革命の共通点を指摘してみたい。アメリカ革命（独立戦争）は、その特徴である二律背反的な性格（徹底した世俗主義 vs カトリック教会からの大きな影響・アングロサクソン中心主義 vs さまざまな移民の存在）ゆえに、どう理解したらよいか判断が難しい。そこでアメリカ革命だけは別の章を設けて説明することにした。アメリカ革命は、4つの革命とは違った特殊な革命である。他の3つの革命と共通する特徴を有してはいるが、それでも特殊な革命である。

どの国でも戦争や革命を経験すると、それまでの歴史が正しかったか否かが問題になってくる。この本では全人類的な規模、少なくともヨーロッパ的規模の出来事にのみ注目することにしたが、それは第一次世界大戦のあと必要とされているのが全世界を視野に収める歴史であって（少なくともヨーロッパ全域を視野に収める歴史でなければならない）、各国別の歴史ではないからである。

この本で取り上げるのは900年という長期の歴史である。また、これまで知られていなかった事実や新しい発見も紹介していくことになる。普通なら専門家相手の論文を50年ほど書き続けたあと、10巻くらいの著作集に纏めるところだが（できることなら私もそうしたかったし、そのために論文を書いてきた）、今回はそのやり方を採用しないことにした。専門家相手に論文を書いているだけでは、ヨーロッパの復興に貢献できないことが判ったからである。さまざまな問題をすべて1冊の本に収めるとなると、いろいろ間違いを犯す可能性が増えることになるが、それもやむを得ない。歴史の女神クリオはユーモアのセンスがあるようで、一方で正確さを我々に要求しながら、他方で我々が正確さを追求すればするほど正確を期すことを難しくする。

この本1冊に<sup>すべ</sup>全てを収めるということを考えなければ、さらに多くのことが論じられるのだが(たとえばルター派の「堅信礼 Konfirmation」が持った意味、イギリスで「太陽の日 Sunday」が「安息日 Sabbath」になった理由、シェイクスピアやトルストイ、宗教画家グリネワルト Matthias Grünewaldが歴史で果たした役割、19世紀文学におけるセックスの問題など)、それは<sup>あきら</sup>諦めざるを得なかった。大学で学生たちにマリオ・プラーツの『19世紀ロマン主義における肉体・死・悪魔』(Mario Praz, *The Flesh, Death and the Devil in Nineteenth Century Romanticism*, Oxford UP, 1933)を読むよう勧めているが、私にとってもっと重要なことは、自分が提唱する新しい歴史学のあり方をアピールすることである。マリオ・プラーツの重要性を論じることは<sup>あきら</sup>諦めざるを得なかった。

かつて私は、この本に書いたようなことをドイツ語で本にしたことがあった(Rosenstock-Huessy, *Die Europäischen Revolutionen und der Charakter der Nationen*, Stuttgart, 1951, 1961)。そのときに採用した分析方法は伝統的で、視野も限られた不十分なものだったが、この本では取り上げなかった多くの事実がその本に紹介されている。専門家の皆さんには、ドイツ語の本も参照して頂ければ幸いである。

史料集やヨーロッパ各国の文化・政治用語辞典も、この本に収録することを考えた。史料そのものを読んで頂くことも重要だし、フランス・イギリス・ドイツ・ロシア各国の文化や政治の相互依存関係を示す用語辞典を作ることも重要だからである。ラジオが普及し始めた第一次世界大戦後の世界では、とくにこの種の辞典の存在は重要である。たとえば、1931年にドイツ宰相ブリュニング Heinrich Brüning が行なったラジオ演説を例に挙げるができる。彼が演説で使った「魂 Seele」というドイツ語について、フランスの新聞は「道義 morale」、イギリスの新聞は「忠誠心 loyalty」に相当する言葉と論評している。「魂」というドイツ語、「道義」というフランス語、「忠誠心」という英語は、それぞれドイツ人・フランス人・イギリス人の心を熱くする言葉である。そんなことは、どの辞典にも書かれていない。しかし、それぞれの言葉で交わされる「日常会話 viva

voce」のなかでは、こうした言葉が大きな効果を発揮しているのである。

この「日常会話」を手がかりに、ヨーロッパ人の「自分自身の歴史」を約1000年間、現在から過去へと辿り直してみようというのが私の意図したことであった。とくに最後の20年間が重要である。つまり我々の世代が経験した悲惨な戦争体験ぬきでは、ヨーロッパの歴史を語ることはできないということである。

人類全体の歴史にくらべればヨーロッパの歴史は短く、せいぜい27世代を数えるに過ぎない(27×30≒900)。我々にとって、それは過ぎ去った過去というより現在そのものである。失敗・災害・恐怖・悪癖・失望で一杯の歴史だが、残された記録を頼りに<sup>たど</sup>辿り直すことができるのはヨーロッパの歴史だけである。それは過ぎ去った過去のように思えるが、じつは現在そのものなのである。

そこでこの本では、過去900年間の出来事を、いま目の<sup>まへ</sup>前で起きていることのように扱うことにする。それはまだ我々のなかで伝統として生きているからである。

ただし、ヨーロッパ全域を1人の人間だけでカバーするのは不可能である。私1人が<sup>すべ</sup>全てのヨーロッパ人を代弁することなどできるはずがない。他者との連帯が大切だとは言っても、私1人で<sup>すべ</sup>全てのヨーロッパ人と連帯する<sup>かけ</sup>訳にはいかない。それに私個人の好みとか偏見といった問題もある。しかし、もし読者の協力を得ることができれば、私が抱えている問題も解決することができる。読者自身が属する国のことなら、私よりも読者の方が詳しいはずである。その国の言葉・スポーツ・習慣・作法などについて、もっと<sup>くわ</sup>詳しいことを付け加えてくれることが期待できる。

読者の自発的な協力があれば、この本の間違ひも減らすことができる。読者の<sup>みな</sup>皆さんには、フランス・イギリス・ロシア・イタリアの歴史について、ご存知のことをぜひ付け加えて頂きたい。その分、この本の内容はより<sup>くわ</sup>詳しくなり、またより均衡が取れたものになるはずである。

読者の協力が期待できなければ、私も1000年ちかい歴史を1冊の本で

論ずるなどといったことは考えなかったであろう。この本に書かれていることをヒントに、読者も過去に起きた革命が我々の未来を決める現在の問題でもあることを納得して欲しい。

ふつう1冊の本では、1つのテーマしか扱うことができない。しかも一言で済むようなことを、1冊の本では長々と論じることになる。かつて歴史の何たるかが判っていなかった私は、同じことをただ繰り返すだけで要領を得なかった。歴史の何たるかが判ったのは、第一次世界大戦を経験してからであった。革命こそがヨーロッパの歴史を解く鍵だと判ったのである。戦後20年間、私が取り組んできたのは革命の問題だけであった。果たしてそれで良かったのかどうか。戦後の世界は急速に変化している。その変化ぶりは、まるでギリシャ神話に登場してくる変幻自在のプロテウス Proteus のように捉えどころがない（プロテウスは予言力がある海の老人だが、何にでも変身できるので変身に疲れるのを待って老人の姿に戻ったときに予言を聞くことができた）。ところが、私は20年間、革命の問題だけを考え続けてきたし、これからも考え続けていくつもりである。時代の変化に取り残されることは間違いないが、私自身そのことを十分に承知しているつもりである。私は、あえて時代の変化を無視してきた。そんな人間が1人くらいいてもよいのではないかと考えていたからである。

従来の政治思想は、「進歩の神話に囚われすぎていた poured the strong wine of progress into the water of human traditions」。「私は革命の伝統を大切にしたいと思う I wish to pour the water of patience into the strong wine of revolutionary excitement」。第一次世界大戦を経験した同じ世代の人間が、意味のない進歩の神話に惑わされないことを願うのみである。

戦後の15年間は全てに「急ぎすぎた too early」。急ぎすぎると人間、自分を見失って仕舞うことになる。我々の知性・意志・努力など、すべてが無駄になってしまう。また焦りを募らせると、「果たすべき使命 secret destiny」も果たせないことになる。

そこで私は、あえて急がないことにした。意図的にグズグズすることで、

時間の経過を少しでも遅らせたいと思う。現代人は何ごとにも急ぎすぎる。

「時間は本来の意味を失ってしまった The end of time is close upon us, in the technical sense of the word」。第一次世界大戦が終わって4年たち、全世界に向けてラジオ演説ができるようになった現在、時間が有り余るようになった。「経済学者たち economists of plenty」はさまざまな余裕を約束してくれるが、とくに余りそうなのが時間である。有り余っている時間を有益に過ごすのは難しい。有益な時間の過ごし方、これこそが人類史上、最大の課題であった。余暇を有益に過ごす方法を見つけてくるより、働き続けている方が簡単である。どれくらい働いてどれくらい休むか、時間を適切に配分する方法を見つけてくるのは簡単でない。

革命が起こるたびに、時間に対する考え方が変わってきたことも考慮に入れる必要がある。現在・過去・未来の意味が変わったのである。革命が起こるたびに時間に対する考え方が変わり、生き方が変わるようになった。適切な現在・過去・未来の関係（聖アンブロシウス St. Ambrosius の言う「時間のあり方 temporum tempora」）が、革命のたびに問題にされてきた。古い時間のあり方が革命のたびに、ガラス製の体温計のように粉々に壊されてきた。空間の3次元より、時間の3次元（現在・過去・未来）の方が遥かに重要な意味を持っていることに我々は気づいていない。

「新しい革命学 new science of revolutions」によって、なぜ人間の決断は「早すぎたり too early」「遅すぎたり too late」するのか、また「適切なとき timeliness」はどうすれば判るのか解明してみたい。こんなことを書いてしまうのは「早すぎる」かもしれないが、読者のなかには本文まで読む時間的な余裕がない方もいらっしゃる可能性がある。

この本では、人類がどのようにして時間を無駄にしないように努力してきたか（永遠に生きられない人間にできることは、それだけである）、またその努力がどのように無駄にされてきたかを説明するつもりである。

## 第2章 革命を成功させる秘訣

保守派にとって「革命を成功させる秘訣 *arcana revolutionis*」など恐怖の的のはずだが、いまや革命は憧れの的となっており、「名士 *highly respectable people*」ですら革命を成功させることを夢見て「秘訣」を学んでいる。

フランス革命のあと各国の保守派は王政復興の必要性を確信するようになり、ジャコバン派との戦いを開始した。アメリカの政治家モリス *Gouverneur Morris* ですら、1815年に王政復興が実現したことを喜んでいて、つぎのように言ったそうである。「アメリカ人よ、喜べ。ブルボン王朝が復活した」。いま多くの国で「自国民中心主義者 *nationalist*」は、「白色革命 *revolution against the Hydra of Marxism*」を準備している。左派によるものであれ右派によるものであれ、革命には残虐行為が付きものである。しかし、銀行家・学者・聖職者までが「白色革命」を待ち望んでいる。

平和が30～50年と続いて秩序が維持されていたところでは、革命が起こることなど誰も考えなかった。誰もが革命のことなど忘れてしまったようであった。革命の可能性を口にしたりすれば、時代遅れの人間ということになりそうであった。しかし保守派ですら革命を望み、反動よばわりされることを嫌う現在である。過激派だけが革命を望んでいる訳ではない。保守派までが革命を待ち望むようになって、「法と秩序 *Law*」・「正統性 *Legitimacy*」・「忠誠心 *Loyalty*」などといった言葉が人の心を熱くすることが無くなった。労働者や「貴族 *gentlemen*」のみならず、法律家・將軍・提督のような人たちまでが革命を考えるようになった。

第一次世界大戦まで対外戦争とは、国にとって麻疹みたいなものであった。「名士」ですらやむを得ないものと考えていた。しかし第一次世界大戦のあと対外戦争は、どの国にとっても「やむを得ないもの」でなくなった。戦争は政策遂行の手段でなくなったのである。そもそも戦争を起こすことが不可能になった。戦争を起こすことは「神々の黄昏 *Twilight of Gods*」(ヨーロッパの衰退)を意味するどころか、「ヨーロッパの終焉 *finis Europae*」を意

味するようになった。経済活動の規模がグローバルになったことから大陸国家でもないかぎり、1国だけで経済・軍事の問題を処理することは不可能になった。ヨーロッパで1国だけが戦争を起こすことは不可能になった。第一次世界大戦でそのことが明白になった以上、ヨーロッパの国が戦争を始めることは無いであろう。ヨーロッパでは、1国が戦争を起こせる時代は終わったのである。航空機で1時間に300マイル(約480キロメートル)も移動できるようになった時代に、国境から国境まで1000マイル(約1600キロメートル)も無いような国が戦争を起こす時代は終わったのである。

もちろん、こうした現実はまだ十分に認識されていない。政治家についても同様で、政治家がそのことを十分に認識しているとは言えないが、さすがに彼らは現実的である。

彼らが戦争の可能性を口にする場合、大陸規模で複数の国と軍事同盟を締結することを前提にしている。戦争が政策遂行の手段である時代は終わったことを、政治家はよく知っているのである(少なくともヨーロッパでは)。

ふたたび1国だけで戦争を起こすことが可能になる時代がやって来るともしれないと言う読者がいるかもしれないが、その可能性は無視してよい。なぜなら、第一次世界大戦後のヨーロッパでは内戦の可能性が高まっており、国家間で戦争が起こる可能性は少なくなっているからである。政治家は対外戦争を煽ることを止めて内戦を煽るようになった。

内戦が国民の支持を得るようになってきているが、こんなことは歴史上初めでのことである。イタリアの黒シャツ隊、ソ連(ロシア)のコムソモール(共産主義青年同盟)、ドイツの突撃隊は国内の敵を攻撃することに専念しており、そのことで英雄視されている。

アイスキュロス *Aeschylus* 時代のギリシャでは、内戦のことを「鶏闘 *cock-fight*」と呼んでいた。鶏がバルシャ伝来の珍しい鳥であったため、そんな名前と呼ばれたのである。それほど当時のギリシャでは、内戦は珍し

い出来事であった。

内戦は最も忌むべき戦いと考えられてきた。内戦は「騎士道の精神 code d'honneur」と無縁で、親類縁者・友人・仲間が敵味方に分かれて殺しあう戦いであった。インディアン・黒人・フン族・異教徒を相手の戦いなら、なぜ戦うのかその理由が理解できた。遠く離れて住んでいた彼らは、自分たちと無縁な人間だと思われたからである。しかし対外戦争の時代は、いまや終焉を迎えようとしている。

ジェファソン Thomas Jefferson は20年間隔で「ちょっとした革命 nice little revolution」を起こすことを提案していたが（革命によって変革を継続させることができる）、彼には新しい時代の到来が判っていたのである。その頃から、すべてがグローバルに展開されるようになっていた。国単位でなく、地球単位で物事を考えることが必要になっていたのである。遠く離れて住んでいるか否かは、もはや問題でなくなった。

1914年に駐仏ドイツ大使のシェーン男爵 Baron von Shoen が対仏宣戦布告をフランス政府に告げに来たとき口にしたとされる言葉、「開戦はヨーロッパにとって自殺行為を意味する C'est le suicide d'Europe」や、モロッコで開戦の報を聞いたフランスのリヨテ Hubert Lyautey 元帥が口にした言葉、「ヨーロッパで戦争が始まったって？それは戦争でなく内戦だ」は象徴的である。

第一次世界大戦の結果、内戦の時代が始まったのである。平和運動も、この現実に対応する必要がある。旧来型の平和運動が可能なのは、戦争遂行能力を持つアメリカだけになってしまった。ヨーロッパで戦いを望む者は、内戦しか起こせなくなったことをよく知っている。そこで彼らは革命を望むようになった。第一次世界大戦前にフランスのブリアン Aristide Briand・イギリスのマクドナルド Ramsay MacDonald・ドイツのパウアー Otto Bauer ら社会主義者が革命に失敗したのは、内戦を避けようとしたからであった。

ヨーロッパの社会主義者は対外戦争に反対だっただけでなく、内戦も避けようとしていた。ドイツ社会民主党の党首エーベルト Friedrich Ebert は「革

命を嫌うことベストのごとし」と言われていたが、彼が嫌っていたのは内戦であった。そこで社会主義を信奉する労働者に代わって、前線から帰ってきた兵士が内戦を起こすことになった。

彼らは塹壕のなかで戦争の恐ろしさを思い知らされていた。敵側の塹壕にいる兵士も自分たちと同じ兵士であり、同じ戦争の犠牲者であることを彼らはよく知っていた。1914～18年に塹壕で経験したことから、彼らは「万国の兵士たち！回れ右して（祖国に帰り）団結せよ！」と唱えるようになった。

彼らには「万国の労働者、団結せよ！」より、こちらの方が本物だと実感できたのである。予想もしていなかった戦場の残酷さを経験させられて、なすべきことがよく判っていたのである。

マルクスは「階級意識 class-consciousness」という言葉で労働者に団結を呼びかけたが、その意味を本当に理解したのは兵士たちであった。ドイツでナチ党（国家社会主義党）が元兵士たちを動員しようとしたが、まさか元兵士が「新しいタイプのプロレタリアート proletarian in a new aggregate form」であるとは考えていなかった。ナチ党に言わせれば、農民・労働者・職人は「同じ仲間 thoroughly brotherly lot」であって、敗戦の責任者であるユダヤ人が敵であった。「国同士 nations」が敵対することは無くなったのである。

ナチ党のやり方はマルクス主義者のやり方の焼き直しであった。マルクス主義者にとって敵であったのは、王侯貴族や資本家であった。それがジャーナリストとユダヤ人に代わっただけである。マルクス主義者もナチ党も、ヨーロッパで戦争の時代が終わったことをよく知っていた。彼らは戦場から持ち帰った武器でお互いを攻撃し合っていたが、戦争の時代が終わったことはよく知っていた。レーニン Vladimir Lenin は戦争をしてまでロシア領を守るつもりはなかったし、ヒトラー Adolf Hitler も戦争でドイツ人の血を流すのは嫌っていた。流すのは国内のユダヤ人の血であった。フランス紙とのインタビューで、「戦争をすればドイツのエリートが死んでしまう。だから戦争をすることなど有り得ない」と答えていた。

レーニンもヒトラーも、農民や労働者が対外戦争に興味がないことをよく知っていた。しかし、手元にある武器は使いたかった。そこで国内で使うことにしたのである。ムッソリーニ Benito Mussolini も同じであった。ソ連（ウクライナ）のドネツク炭鉱が国有化されたときと同様、イタリアでもアグロ＝ポンティーノ Agro Pontino 湿地帯の干拓事業や通貨リラを強くする政策によって、穀物・資金・原料・家屋・土地が没収された。それは内戦の一種であった。ムッソリーニ宛であれスターリン宛であれ、電報はまるで前線から送られてきた戦況報告のように読み上げられ、戦時の経営者に認められたような権限が「非常事態 emergency」を理由に経営者に認められた。対外戦争が「非常事態」に取って代わられることになったのである。リンカン Abraham Lincoln の奴隷解放令やローズベルト F. D. Roosevelt のニューディール政策も同じであった。「非常事態」が対外戦争と同じ意味を持ったのは、他の国でも同じであった。領土をめぐる外国との戦いが、自然相手の戦いに取って代わられたのである。6000年も続いた対外戦争の時代が終わり、新しい戦いの時代が始まったのである。しかし、そのことに誰も気づいていない。革命が対外戦争に取って代ったことに気づいていない。

こうして、戦争といえば内戦を意味するようになった。革命によって内戦が開始されると国は敵対する2つの集団に二分され、その関係はまるで敵国どうしのようなった。共通の言葉や共通の伝統が失われ、だれもが自信喪失の状態に陥っていった。昔からの伝統・受けてきた教育・築き上げた富に対する誇りが失われてしまい、だれもが株価の変動と新聞の報道に振り回されるようになった。現代人の健忘症には驚かされるばかりである。自分の信念・伝統・教育のすべてを忘れ去ってしまったようである。

平和で安全だった日常が突如として内戦と「非常事態」に取って代われ、「ながい顎鬚の大佐 long-bearded colonels」や「着飾った若者 gilded youth」が狂喜することになった。国家どうしの戦争の時代が終わり、国内で階級と階級が争う「階級戦争 class-war」の時代が始まったのである。「知識人

literati」までが冷静さを失い、極左や極右を支持するようになった。

革命が好きに時に起こせるようになり、我々の未来は革命をどこまでコントロールできるかで決まってくるようになった。革命が多く起きるようになって、「革命学 science of revolutions」の構想すら可能になった。この革命の時代を生き延びるためには、かつて我々の祖先が持っていた原始的な本能を取り戻す必要があるであろう。

カッサンドラのように（トロイの女王カッサンドラはトロイの滅亡を予言したが、だれもその予言に耳を貸そうとしなかった）、未来に起きる不幸を嘆くことしかできない者に革命を論じる資格はない。未来に起きるはずの大惨事に、冷静に対処できる者だけが革命を論じることができる。第一次世界大戦と2つの革命（ロシア革命と戦後ドイツの混乱）を経験した我々には、革命が言われているほど素晴らしいものとは思えない。

愛する者を失ったからといって、我々は生きるのを止めるわけにはいかない。生きるということは、涙と喜び・絶望と希望を共に味わうことを意味する。革命さえ成功すれば全てがよくなると考えるのは、単純に過ぎる。街頭で誰かが射殺されるのを見れば、誰もがショックを受ける。人類の歴史を「自分自身の歴史 autobiography」と感じることができる者なら、新しい時代のためだからといって簡単に人殺しができる訳がない。葬式で遺族とともに涙を流しても、洗礼式に出席すれば笑顔が戻ってくる。また船の遭難に際して涙を流しても、船の進水式では笑顔が戻ってくる。今あらゆる所で変化が求められている。しかし、その変化は「誇れる形の変化 change with honor」でなければならない。過去を辱めるようなことがあってはならないし、未来を崇め奉るようなことがあってもならない。

「誇れる形で変化すること」は難しい。ふつう人は、風見鶏のように風向きに合わせて「信念 creed」を変えてしまうものである。誇りなど無きに等しいやり方で、簡単に「信念」を変えてしまうものである。

革命の時代に物事を自分の意志どおりに変えることは難しい。「信念」を毎日くるくる変えるのが当たり前になっている現在、人間にできることは

限られてくる。危険なのは、すべての変化を惰性で受け入れてしまうことである。十分に考え、心から納得して変えるには、ながい時間が必要とされる。

「誇れる形で変化する」には、相反することを同時に実現しなければならない。あまりにも誇りを重視すると、変化を受け入れることができなくなる。また変化を機械的に受け入れるだけでは、「人間が秘めている可能性 potentialities of the soul」を十分に発揮することはできない。

革命は「大きな飛躍 great forward leaps」を意味する。「自然は飛躍する Natura facit saltus」のである（18世紀の科学者は自然界の変化を連続的に考えており、それを「自然は飛躍しない Natura non facit saltus」と表現していた。その格言を振ったもの）。しかし人間が死に絶えることはないし、国が減び去ることもない。人間には「不思議な力 finest forces of the soul」が備わっているからである。兵士・革命家・企業戦士も立派だが、みずからの家庭を築くために父母のもとを去っていく花嫁も立派である。花嫁の姿こそが「誇れる形の変化」である。花嫁は両親のもとを去って新たに自らの家庭を築き、子供を育てることになる。彼女は放棄すると同時に獲得するのである。

人間が活動を止めることはない。革命がどんなものになるかは、人間の活動しだいである。いま革命の時代が始まろうとしているが、革命の破壊力を我々はうまく利用する必要がある。水と火をうまく利用してきたように、革命の破壊力をうまくコントロールする必要がある。それに成功するか否かで、我々の未来は決まってくる。

これまで革命は、静寂と平和を壊すだけだと考えられてきた。これからは、革命を使って新しい社会を築くことになる（そのことを証明するのが、この本のテーマである）。トンネルや道路をダイナマイトで建設するように、革命を使って新しい社会を建設するのである。

ジェファソンの夢は、革命という「無法状態 lawlessness」によって社会を作り変えることであった。我々に残された道は、それしかない。ただ、「無法状態」と「合法状態 law」のバランスを取るのがむずかしい。水と火は、

おたがいに相容れない存在である。それでも人間は、水と火をうまくコントロールして利用してきた。「王に忠実な革命家 loyalist revolutionary」とは語義矛盾だが、人間には、この語義矛盾を解決する能力がある。人間のなかには王党派的な要素と革命家的な要素が共存しており、黒か白かのようになり二者択一の関係にはない。王党派的な要素が80%、革命家的な要素が20%という場合もあれば、王党派的な要素が51%、革命家的な要素が49%という場合もある。ラテン語の諺「人間に関係のあることで私にとって無関係なことはない nil humani a me alienum」は、我々の諺でもある。人間には「革命によって壊したいという気持ち heart」と、「大人しく従いたいという気持ち soul」が共存している。我々の心のなかには、戦争と平和が共存しているのである。

かつて祖国のために戦うことが名誉とされ、本人が平和を愛する人間なら一層名誉あることと賞賛された。しかし内戦しか存在しない時代になって、かつての兵士は平和を愛する国民ではいられなくなった。語義矛盾はあるが、「国王に忠実な革命家」にしかなくなつたのである。秩序と秩序破壊を同時に好む者、遵法精神と無法精神が共存する人間にしかなくなつたのである。

語義矛盾を解決することは簡単でないが、その方法を探る必要がある。この本で私がやろうとしていることも、それである。地球が狭くなって、言葉が光のように高速で地球を駆け巡り、人間が飛行機で高速移動できるようになった現在、革命が持つ意味は一層大きくなっている。

対外戦争が内戦に変わった以上、将来の革命は国民の連帯に依存せざるを得ない。異教徒・異端者・フン族を相手に戦っていたときは、相手を人間以下だと軽蔑していれば済んだが、いまではそれも不可能である。すべての人間は平等だとされており、しかも内戦は同じ国民どうしの戦いである。それが判っただけでも、第一次世界大戦の時よりは「立派になった spiritualization」のである。

世界的な連帯の必要性が認識されるには、ながい時間が必要であった。

世界は1つという考え方は古くからあった。「保守的な革命家」ないしは「革命的な保守派」になった元兵士諸君に、ぜひこの本を読んでいただきたい。かつて革命がどうであったかが判るはずである。国のために戦っていた兵士も、じつは国のためだけでなく人類のためにも戦っていたのである。これは古くからあったパラドックスであった。このパラドックスこそが人間社会のあり方を変えてきたのである。

とくに指摘して置きたいことは、革命が生み出したものが簡単に無くなるということである。この本で説明する革命では、さまざまなタイプの人間や制度が生まれてきたが、それが未来に起きる革命でも無くなることはないであろう。

多くの犠牲を払って革命が生み出したものは「革命耐性 revolution-proof」を持っている。なぜそうなのかを理解しないかぎり、我々に未来はない。

### 第3章 失われつつあるヨーロッパの伝統

現在も進行中の混乱のなかで、危機に晒されているヨーロッパの伝統とは何か。日常的なものを例示することで、過去の革命が成し遂げてきた成果を示してみたい。

第一次世界大戦が終わって生活が正常化し始めたとき、だれもが戦前のやり方を取り戻せると思っていた。芸術家・企業家・研究者・聖職者・発明家たちは、戦前の仕事に戻っていった。「平和 Landfriede」（もともと中世に皇帝や国王が公布した復讐・報復禁止令を意味した言葉）が戻ってきたと思ったからである。ヨーロッパでもアメリカでも、そう思われていた。この「平和」制度が生まれたのは、はるか昔のことであった。一時的に制度が機能しなかったこともあったが（たとえば、ゴールドラッシュ時のカリフォルニア）、すぐにその機能は回復した。「平和」は、どんな犠牲を払っても守るべきものだと考えられていたからである。

ところがいま世界中で起きていることは、この大切な伝統に反することである。銃撃戦・暴動・スト・誘拐・ユダヤ人殺しが大規模に起きているだけでなく、それが「生命力 vitality」・「階級意識 class-consciousness」の証拠とされて賞讃の的になっている。しかし、それは「暴力のための暴力」に過ぎない。フランスのソレル Albert Sorel やイタリアのパレート Vilfredo Pareto は、鉄を溶かす時やコンクリートを混ぜる時のように、あるいは豚の生体解剖をする時のように、政治の世界にも「熱力学の法則 thermodynamic laws」（どんな場合でも貫徹する法則）が存在すると考えており、自分たちの政治理論が実際に齎す結果には無関心であった。イタリアの黒シャツ隊やドイツの茶シャツ隊（突撃隊）は私設の軍隊だが、労働組合や消費者組合を結成するような感覚で結成されている。復讐や報復を理由にした殺人が、「人種論 strong racial sentiment」を根拠に正当化されるようになった。第一次世界大戦のあと、はるか昔に無くなったはずの考え方や行動様式が復活してきたのである。この暴力行為を礼讃する新しい考え方の

世界は1つという考え方は古くからあった。「保守的な革命家」ないしは「革命的な保守派」になった元兵士諸君に、ぜひこの本を読んでいただきたい。かつて革命がどうであったかが判るはずである。国のために戦っていた兵士も、じつは国のためだけでなく人類のためにも戦っていたのである。これは古くからあったパラドックスであった。このパラドックスこそが人間社会のあり方を変えてきたのである。

とくに指摘して置きたいことは、革命が生み出したものが簡単に無くなるということである。この本で説明する革命では、さまざまなタイプの人間や制度が生まれてきたが、それが未来に起きる革命でも無くなることはないであろう。

多くの犠牲を払って革命が生み出したものは「革命耐性 revolution-proof」を持っている。なぜそうなのかを理解しないかぎり、我々に未来はない。

### 第3章 失われつつあるヨーロッパの伝統

現在も進行中の混乱のなかで、危機に晒されているヨーロッパの伝統とは何か。日常的なものを例示することで、過去の革命が成し遂げてきた成果を示してみたい。

第一次世界大戦が終わって生活が正常化し始めたとき、だれもが戦前のやり方を取り戻せると思っていた。芸術家・企業家・研究者・聖職者・発明家たちは、戦前の仕事に戻っていった。「平和 Landfriede」（もともと中世に皇帝や国王が公布した復讐・報復禁止令を意味した言葉）が戻ってきたと思ったからである。ヨーロッパでもアメリカでも、そう思われていた。この「平和」制度が生まれたのは、はるか昔のことであった。一時的に制度が機能しなかったこともあったが（たとえば、ゴールドラッシュ時のカリフォルニア）、すぐにその機能は回復した。「平和」は、どんな犠牲を払っても守るべきものだと考えられていたからである。

ところがいま世界中で起きていることは、この大切な伝統に反することである。銃撃戦・暴動・スト・誘拐・ユダヤ人殺しが大規模に起きているだけでなく、それが「生命力 vitality」・「階級意識 class-consciousness」の証拠とされて賞讃の的になっている。しかし、それは「暴力のための暴力」に過ぎない。フランスのソレル Albert Sorel やイタリアのパレート Vilfredo Pareto は、鉄を溶かす時やコンクリートを混ぜる時のように、あるいは豚の生体解剖をする時のように、政治の世界にも「熱力学の法則 thermodynamic laws」（どんな場合でも貫徹する法則）が存在すると考えており、自分たちの政治理論が実際に齎す結果には無関心であった。イタリアの黒シャツ隊やドイツの茶シャツ隊（突撃隊）は私設の軍隊だが、労働組合や消費者組合を結成するような感覚で結成されている。復讐や報復を理由にした殺人が、「人種論 strong racial sentiment」を根拠に正当化されるようになった。第一次世界大戦のあと、はるか昔に無くなったはずの考え方や行動様式が復活してきたのである。この暴力行為を礼讃する新しい考え方の



ハンス＝ブルクマイヤー

新しく実現した職業選択の自由。16世紀

登場で、かつて部族や家族による復讐や報復を無くすために登場してきた「神の休戦 trêve de Dieu」運動が再認識されるようになった。たとえば11世紀には復活祭までの4日間（四旬節）、キリストの刑死と復活を祝うために戦闘が禁止された。この4日間の休戦が、やがて恒久平和の実現に繋がるのである。我々は、900年も前に作られた制度の恩恵を受けているのである。

ヨーロッパで職業選択の自由が確立したのは、ドイツにおける宗教改革のおかげであった。いまでは農民の子供が医者になることができるし、召使の息子が地主になることもできる。また、肉屋の息子が銀行家になることもできる。これはルター Martin Luther をはじめ多くの修道士・修道女が、修道院を出て生業に就いたからであった。彼らは修道院に入るときに家族と縁を切っており、家族の職業を継ぐわけにはいかなかった。職業選択が自由になった由縁である。「神の休戦」を実現するのも大変だったが、職業選択の自由を確立させるのも大変であった。こうして親から子へと受け継がれていた職業が、本人の意志で自由に選べることになった。

ところが第一次世界大戦のあと、この職業選択の自由が失われることになったのである。「就業者数を制限する制度 numerus clausus」が登場してきたし（この制度で有名だったのは、大学に入学できるユダヤ人学生の数を制限するもの）、ドイツでは農民の子供は農民になることが義務づけられるようになった。また、公共事業に何十万という数の労働者が半強制的に駆り出されたりするようになった。移民にもいろいろ条件が課せられるようになり、移民が不可能になっている。特定の職業が一定期間、就労することを禁じられたり、逆に政府が就業者数を増やしたい職業に若者を割り当てたりしている。まるで家畜の飼育数を計画するように、飛行機の操縦士・学校教師・時計職人の数が毎年、決められたりしている。もともと公立の学校には職業選択の自由があったはずだが、いまではそれが制限されるようになった。400年の伝統を守り抜こうとしている公立学校がない訳ではないが、そんな学校は廃校の運命にある。

危機に瀕している制度として、ほかにも「寄付 donations, endowments, voluntary gifts」の制度がある。この制度が登場してきたのはイギリスだが、「寄付」の制度があったおかげでイギリスでは多くのことが実現できた。個人が自分の財産を自由に処分できる私有財産制度のおかげで、宗教・芸術・科学・社会事業・医学は大きく発展することができた。故人が残した遺言は、国王と雖も変更することが許されなかったからである。国王の干渉を許さない金持ち貴族が1万人もいたおかげで、イギリスでは「寄付」による様々な活動が可能になった。国王の介入を許さない裁判制度に守られて、イギリスでは様々な社会活動が花開いたのである。ところが現代の独裁者は、この伝統すら壊そうとしている。高い相続税を課したり（累進課税制度の採用）、財産権に制約を加えたりするようになった。独立採算でやってきたオックスフォード大学に補助金を与えることで、政府が大学行政に口を挟むようになったのも、そのよい例である。ドイツでは、遺言の権利すら侵害されるようになった。ドイツは反共国家ということなので私有財産は保護されているはずだが、裁判なしで私有財産の没

収がおこなわれている（ユダヤ人の財産没収がそのよい例である）。「統制強化 Gleichschaltung」ということで、奨学基金・ロータリークラブ・病院・図書館・学校・芸術家協会・消費者団体・サッカー協会・「労働組合の休養施設 lodges」の理事長や理事たちがナチ党員と交代させられ、企業・工場・百貨店までがナチ党の支配下に置かれるようになった。とくに問題なのが、契約自由の原則が踏みにじられていることである。ニューハンプシャー州がダートマス大学を州立大学にしようとしたとき、ウェブスター Daniel Webster は大学側の弁護士として州政府の介入から大学を守ったが（合衆国憲法が保証した契約の自由を根拠にした）、この裁判があったのは、ほんの100年前のことであった。ウェブスターが守ろうとした契約自由の原則は、少なくともヨーロッパでは風前の灯火となりつつある。

アメリカ革命とフランス革命によって、さらに人類の進歩が加速されることになった。2つの革命が「信仰・信条の自由 freedom of mind」を保障した結果、個人が生み出したアイデアを権利として尊重する「特許 patents」や「著作権 copyrights」の制度が生まれてきたからである。個人が自分の「能力 talents and genius」に安心して投資できるようになったのである。発明を奨励する法律が作られ、発明を奨励する新しい制度が登場してくることになった。いままでは作家・作曲家・発明家が、スピノザ Baruch Spinoza のようにアルバイトに精を出すことは無くなった（スピノザは生活のためにレンズ磨きをしていた）。進歩のスピードが一層加速されることになった。職業が世襲されることがなくなり、個人が自由に職業を選択できるようになった。個人はその気になれば、何時でもチャンスに賭けることができるようになった。

それがいま失われようとしている。大企業が映画・芸術・発明を支配するようになって、化学・電気・技術・医学などの分野で個人の自由が奪われている。法律による個人の自由保護を求める声が高まってきている。

「神の休戦」・職業選択の自由・遺言の自由・著作権の保護はヨーロッパ特有の制度だが、ヨーロッパに特有な制度はそれだけではない。「神の休

戦」のほかにも、ヨーロッパ中世が生み出した重要なものがある。それが高等教育を受けつ大学であった。ルネッサンスと宗教改革以前、すでにヨーロッパには大学が存在していた。重要な問題に関して神学者や法学者は大学で自由に意見を述べることができたが（大学の外では、異端視されかねない意見陳述は危険であった）、これは古代ギリシャにもアラブ世界にもなかったことであった。

大企業が個人の自由を奪っていることは指摘したとおりだが、それ以外にも子供・労働者・職人などが大企業によって搾取されるのを防ぐ制度も必要とされている。そのために必要な法律や制度が議論されているが、大切なのは議論でなく行動である。伝統的な制度をどう引き継いで、どう搾取を防止していくか考えてみる必要がある。

問題なのは、新しい試みが既得権と相容れないと思われることである。革新派は伝統派を非難・攻撃するし、伝統派は既得権を守ることしか考えない。そのよい例が労働者の権利をめぐる争いである。労働者は自分たちの権利を主張するばかりだし、経営者は既得権を守ることしか考えない。今ここでこの種の問題を議論するつもりはないが、ヨーロッパが生み出した制度が人類の可能性を大きく広げたことだけは確かである。その制度のおかげで人類は効率的に作業ができるようになり、新しい可能性を発揮することができるようになった。警察制度が登場してきたおかげで他者の暴力に備えて自らを訓練する必要がなくなったし、政府が裁判所の判決に介入できなくなったおかげで、私の遺言は死後も守られることになった。しかし、どの制度も多くの犠牲があつて初めて実現したものであることを忘れてはいけない。

皮肉なことに、多くの古い制度が残っていたからこそ進歩も可能になったのである。古い制度を如何に残すか、これこそが進歩を願う我々の最大の関心事である。進歩と発明の歴史は大切にしなければならないが、これは進歩に反対する保守派にとっても大切な歴史のはずである。人間には多様な側面があり、その多様性が尊重される必要がある。多様性を捨てたと

き、人類は衰退するしかなくなる。また、人類に多様性を保障してきた制度も衰退するしかなくなる。かつて存在した様々な権利を守るためには、ときには古い枝を新しい木に接木することも必要なのである。

とくに進歩派に言っておきたいことだが、進歩派が新しい制度を実現する時、多くの人間が犠牲になっているという事実である。また、保守派にもつぎのことを言っておきたい。つまり古い制度も新しい樹液が提供されないかぎり、やがて衰退する運命にあるということである。

我々に残された伝統的な自由とは、つぎのようなものである。

	実現した自由	適用された原則	自由を保証した制度
20世紀	健康に育つ自由	労働がもつ公的な性格	成人教育や生産現場の分散化
19世紀	能力発揮・思想・言論・競争の自由	個人のアイデアが持つ公的な性格	著作権・特許・成文憲法
17世紀	寄付の自由	遺言がもつ公的性格	独立した裁判所
16世紀	職業選択の自由	教育がもつ公的性格	公立学校
15世紀	教師どうしの競争	学問がもつ公的性格	大学
11世紀	職人の移動の自由	世俗世界の公的性格	治安判事による犯罪の取締

## 第1部 レーニンからルターへ： 世俗世界の革命

## 第4章 ロシア：ユーラシア大陸の穀物工場

### 第1節 ブルガリアへの旅

1927年に「強制労働 compulsory labor service」の調査でブルガリアを訪れたときに修道院とホテルに宿泊したが、どちらでも丁寧な持て成しに感銘を受けた。まるで夢を見ているような経験であった。

高い山のなかにあった修道院を訪れたとき、乞食の一家が修道士の持て成しを受けていた。ポロをまとった男の子（複数）と父親は、長年にわたり週2回、定期的に修道院を訪れているとのことであった。ブルガリアでは、乞食は社会制度の1つになっていた。この家族は週に2回、スープに在り付く権利を永久に保障されていたのである。キリスト教徒、とくに修道士にとって貧者への施しは最高の美德であり、乞食は施しの機会を与えてくれる大切なお客さんであった。乞食がいなければ施しの美德を発揮する機会が無くなるからである。

その修道院では（そこはブルガリアで一番の金持ち修道院であった）、何千という数の巡礼が訪れ、彼らは何百という部屋のほかに、ポーチやベランダで夜を過ごしていた。修道院長が言うには、南京虫・シラミ・のみ・蚊なども被造物であって神の庇護のもとにあり、それを殺すなど以ての外であった。1500年ものあいだ修道士は乞食の世話をしてきたし、巡礼は虫に噛まれた身体を掻き続けてきたのである。彼らは、まるでビザンツ教会のキリスト像のように金箔に包まれていた。

ところが西欧スタイルのホテルにいたブルガリア人は、ひどく居心地が悪そうであった。ベルリン大学で17世紀のドイツに関する論文で博士号を取ったというブルガリア人はソフィア市の市議をしているとのことであったし、パリで勉強してきたというブルガリア人は素晴らしい本を書くつもりだということであった。彼のデスクは書きかけの原稿で一杯だったが、ブルガリアで彼の書く本は出版される見込みは皆無であった。



シベリアを征服・併合する前のロシア

そもそも本の市場が存在しなかった。靴職人や仕立屋のようにツルノボ市 Turnovo の街角でも、弁護士が「法律事務所 shops」を構えていた。しかし彼らの仕事といえば、文盲の農民に脱税の方法を伝授することくらいであった。弁護士自身も「プロレタリアート intellectual proletariat」の1人に過ぎず、弁護士の数が多すぎるだけでなく（必要とされる数の3倍はいた）、彼らは外国で教育を受けた「異邦人 foreign-born in spirit」であった。無為徒食の教会と「異邦人のインテリ foreign-minded intellectuals」、これがブルガリア正教会圏が抱えている最大の問題であった。宗教と教育のあり方に問題があるこの国では、未来がどうなるかは神のみぞ知るといったところであった。

## 第2節 母なるロシア

1917年以降のロシア（ソ連）は、革命前のロシアと全く別の国であった。ソ連の指導者にとって、ツァーリが支配していたロシアは存在していなかったかのようであった。

1900年の「母なるロシア little mother Russia」は、人口の66%がロシア正教徒からなる本来のロシアと、フィンランド・ポーランド・バルト3国（こちらはプロテスタントとカトリック教徒の国で、ロシアにはないヨーロッパ的な国）から構成されていた。

シベリアと中央アジアを合わせた面積はヨーロッパ＝ロシア（ウラル山脈より西のロシア）の3倍あったが、人口はヨーロッパ＝ロシア（1億1400万人）の1割強（1350万人）に過ぎなかった。

ロシアは地球総面積の6分の1を占める大国であった。フランスの40倍の広さである。またブレスト＝リトフスク条約でロシアが失った旧ロシア領の国（ドイツ語で「周辺国 Randstaaten」と呼ばれていた国で、まずドイツとオーストリアが独立国として承認し、のちに協商国も独立国として承認した）だけでも、ドイツの1.5倍の広さがあった。

1914年のロシア農村の所帯数は2500万で、これはフランス革命が起きた1789年のフランスの農村所帯の数（2400万）とほぼ同じであった。

鉄道が敷設される以前からヨーロッパ＝ロシアが1つに纏まっていたのは、ボルガ川があったおかげであった。ボルガ川がなければ、ヨーロッパ＝ロシアが1つの国として機能することはなかったであろう。モスクワとザンクト＝ペテルブルクの間にバルダイ丘陵地帯 Valday Hills があるが、この丘陵地帯が人間の往来を妨げることはなかった。全長859キロメートルにおよぶ運河網が張り巡らされていたからである。かつて運河から運河へ船を移動させる時は、人力が頼りであった（その様子は有名なレーピン Ilya Repin の絵画「ボルガの船曳き」から見える）。モスクワからザンクト＝ペテルブルクに行く途中にボロチョク Volotschok（バルダイ丘陵地帯の東側）

という名前の町があるが、これは「船を引っ張る volotschitsch」という意味の動詞からきている。

船の航行が可能なボルガ川の長さは1900マイル（約3000キロメートル）に達し、その流域面積は200万平方マイル（320平方キロメートル）になる。どの地域からもバルト海に運河が流れており、ボルガ川はヨーロッパ大陸と交通網で繋がっていた。この地域には約160もの文化を異にする集団が住んでいたが（スラブ人やドイツ人が移住してくるまで、この地域にはフィンランド＝ハンガリー系やトルコ系の原住民が住んでいた）、彼らはヨーロッパからの影響で生活水準が上がり、医療も改善されて爆発的に人口が増えていた。そんな集団のなかに、人為的に狭い地域に閉じ込められた550万人も

拡大するロシアの国土面積	
15世紀	56万平方キロメートル
16世紀	872万平方キロメートル
17世紀	1439万2000平方キロメートル
18世紀	1708万平方キロメートル
19世紀	2231万1992平方キロメートル

の特異な宗教集団がいた。ユダヤ人である。最初にユダヤ人解放（ユダヤ人であることを理由に差別されなくなる）を実現したのはフランスだが、1900年のユダヤ人の人口比はフランス全人口の僅か0.22%に過ぎなかった（8万7000人/3900万人）。ところがロシアでは、ユダヤ人の人口比は4.2%であった（525万人/1億2800万人）。ロシアで日常的に起きていたユダヤ人虐殺や法的な差別などを考えるとき、この人口比の高さは忘れるべきでない。僅かしかユダヤ人がいなかったフランスでさえ、ドレヒュス Alfred Dreyfus 事件を解決するのに12年以上も掛かっており、それも内戦を思わせるような激しい争いが起きていた。

ブレスト＝リトフスク条約でロシアから分離独立した国は、宗教や歴史がロシアと違っていただけでなく、社会・経済的にもロシアと違った国

であった。たとえば1900年のフィンランドに文盲の人間は一人もいなかったが、ロシアには1000人のうち891人が文盲であった。またポーランドでも、農村的な地域が中心だったロシア領ポーランドでさえ1892年に農村が4万2500、都市が500あったが、ロシアには48万6000の農村に対して都市は650しかなかった。ポーランドの農村と都市の比率が100対1であったのに対して、ロシアの比率は1000対1であった。1890年のロシアの鉄道線路の長さは1万3000キロメートルに過ぎなかったが、イギリスのそれは20万キロメートルであった。とくに違っていたのが発行されていた新聞・雑誌の数で、ロシア全土で802種類に過ぎず、しかもその半数ちかくは（342種類）、モスクワとザンクト＝ペテルブルクで発行されていた。

ロシアに特徴的だったのは、私有地が少なく共有地（農村が所有）が多かったことである。農地の84.6%が共有地であったのに対して、私有地は15.4%に過ぎなかった。共有地は課税のために農村に与えられた農地であった。農民の自治組織「ミール Mir」は共有地の耕作のために労働力を動員する組織であって、自治権は与えられていなかった。そこで課税することは「動員 rolling off, rolling up」、課税単位は「労役提供者 tjaglo」と呼ばれていた。

1861年に農奴解放が実現したが（リンカン Abraham Lincoln がアメリカで黒人奴隷の解放令を公布したのも同年）、リンカンの奴隷解放令が実際に実現したのは1900年だったのに対して（黒人に選挙権が認められる）、ロシアですべての農民が農地を手に入れたのは1932年になってからであった。

1861年に解放された農奴の数は2200万人で、農奴1人につき15.5エーカー（6.2ヘクタール）の農地が与えられた（全部で約3億4000万エーカー）。1917年に、さらに2億5000万エーカーが与えられたが、そのうちの3分の1は賃貸地であった。ソ連の農地面積は5億3000万エーカーあったとされているが、それはこの2つの数字を合計したものである。

ロシアの農民人口は全人口の85.5%ということになっているが、注意

しなければならないのは「農民 peasant」という言葉の意味である。ロシアでは、この言葉は必ずしも「専業農家 farming population」を意味しない。ロシアでは農民のほぼ3分の1は兼業農家で、自宅で織物・ロウソク・木材・毛皮の製造や金属加工を行っており、だからこそ60ある「県 guberniya」のうち29もの「県」が穀物を輸出できたのである。兼業農家が多い理由としては、農地が痩せていることもあった。ロシアの中央部と南部には豊かな農地が広がっているが、その面積は95万平方キロメートルに過ぎない(テキサス州の2倍)。空気が乾燥しており、ふつう気温は華氏40～55度(摂氏4.4～12.8度)、ときには華氏75度(摂氏24度)になることもあった。

人口密度が高い「県」は(1平方マイルに70人以上)8つに過ぎない。ロシアの農民はこの500年間ロシア全土を放浪しており、ロシア農民がヨーロッパ農民のように定住した自営農民であったと考えるべきでない。むしろ彼らは遊牧民・行商人・遍歴職人・傭兵に似ていた。それが結果的にロシアの領土拡大を助けたのである。

1581年にシベリア進出が始まり(コザック隊長イェルマーク Ermak がシビル汗国 Sibir Khan を征服)、18世紀にはカリフォルニア州北部を流れるロシア川 Russian River まで到達している。これはロシア皇帝だけの偉業ではなかった。「ムジーク Moujik」と呼ばれていた放浪ぐせのあるロシア農民の偉業でもあった(彼らを「ドイツ農民 Bauer」や「アメリカ農民 farmer」と混同すべきでない)。

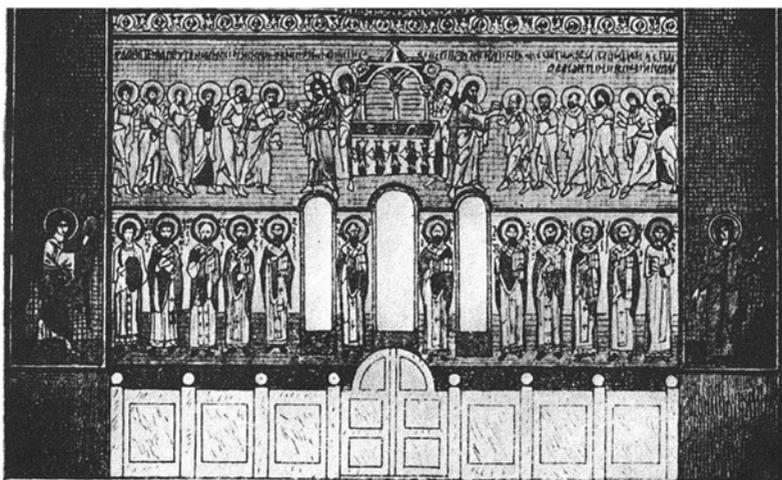
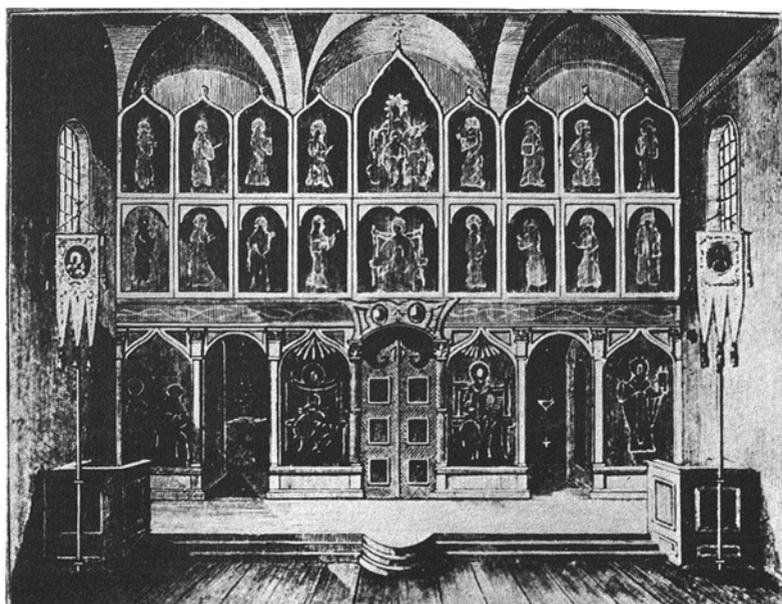
ロシアの有名な法学者ソコロフスキー Paul von Sokolovski によれば、ロシア南部では砂漠化が続いており、これがロシア人の性格形成に大きな影響を与えていたそうである。ロシアでは春になると農民の大移動が起きていたが、その理由は長いあいだ謎であった。その謎に答えを与えてくれたのがピョートル大帝であった。つまり「外への関心」がその理由だったのである。ロシアは国民のいない国、ロシアよりヨーロッパに関心を持っていた国、領土拡張だけを威信強化の手段と考えていた国であった。ロシアと外の世界を結びつけていたのは、ロシア産の木材と亜麻であった。ロシア

は外国との貿易なしではやっていけない国であった。皇帝や貴族は、資金不足になると森から木を切り出してくればよかった。18世紀にイギリス海軍が建設可能であったのは、ロシア産の木材のおかげであった。「ムジーク」(ロシア農民)に課税する訳にもいかず、課税できるとも考えていなかったロシア政府は、陸軍や海軍に払うお金も役人に払うお金も、外国に木材を売って手に入れるしかなかったのである(のちに木材の代わりに小麦を売ることになる)。1904年に鴨緑江の木材を投機買っていた大貴族がいたが、彼らは日露戦争の勃発を予想していたのである。粘土の脚をもった巨人ロシアは、政府を組織するために資金を必要としていた。

ロシア政府がロシア人のものでなかった証拠に、小麦を輸出していた地域の周辺では飢餓が常態化していた。小麦の供出を強制して飢餓を引き起こしていたボルシェビキ政権は、このロシア政府のやり方を真似ただけであった。

ロシアが西側にあった国々を併合したのは、こうした事態を避けるためであった。ロシアの西側にあった国々はロシアよりうまく組織されており、ヨーロッパとの繋がりも緊密で小麦の輸送に便利であった。さきほどロシアの農奴解放令とアメリカの奴隷解放令が同じ年に公布されたことを指摘したが、両国はこの150年間、西方に向かって領土を拡大していた点でも似ていた。とくにロシアにとってバルト海への進出は重要であった。まるでテキサス州・ユタ州・ネバダ州が東部13州を併合するようなものであった(後進地域が先進地域を併合するという有り得ない現象)。

フィンランド・ポーランド東部・コーカサス地方を併合し、さらにスウェーデンからバルト海沿岸地方を奪ったロシアは、そのおかげで先進的な地域の制度や伝統を継承することができた。ドイツ騎士修道会領であった地域でドイツの港や大学を手に入れ、ポーランドの職人や農民、ユダヤ人の商人に課税するのである。おかげでロシアは、本来のロシアでも徴税制度を確立する余裕が持てた。もし西方で領土獲得ができていなかったら、ロシアの徴税制度は確立が遅れていたはずである。それを支配者の無能のせい



イコノスタシス

至聖所（ミサが執り行われる場所）が信者に見えないようにするために作られた障壁。  
イコンが描かれている

にするのは酷である。ロシアは国土の4分の1が沼地と荒地で、しかも毎年20万平方キロメートルの土地が砂漠と化していた。ロシアの自然は少しずつ荒廃していたのである。自然の荒廃はロシアに限られた問題でなかったが、ルソー Jean Jacque Rousseau の自然礼賛を信じ切っていたヨーロッパ人には、ロシアの砂漠化は信じられない事態であった。スイスのヌシャテル Neuchâtel で葡萄畑に囲まれて生活していたルソーの自然礼賛は児童戯として見過ごせても、アメリカやロシアで進行していた自然破壊は児童戯として見過ごす訳にはいかない。フランス革命を成し遂げた革命家たち、バージニア州の綿プランテーションの所有者、ボストンの快速帆船クリッパーの船員までが自然の提供する資源を無限大だと信じて疑わなかったのである。

とくにロシアの状況は深刻であった。農民は農地の改良に関心を示そうとしなかった。ロシアの農民は自分の畑に撒くべき肥料を、平気で隣に住む「ドイツ人 Nemez」（文字通りの意味はロシア語をしゃべれない者）に売り払っていた。逆にドイツ人農民は、肥料の撒布が重要なことをよく知っていた。彼らはロシアの農民と違って定住しており、また農地の改良に励む本物の農民であった。ドイツ人農民を教育したのはカトリック教会であった。自然は人間の方で改善すべきだし、改善できるものだと教えたのである。ところがロシアの教会は、カトリック教会のように自然が改善可能なものだとロシア人に教えることはなかった。10世紀にアトス山で修道院群が建設され始めて以来（著者は922年に修道院の建設が始まったと書いているが、それがどの修道院であったかは書いていない。最初の本格的な修道院はメギスティス・ラウラ Megistis Lavra で、それが建設されたのは963年である）、1000年もの間東方正教会は、古くからあった形を変えることがなかった。彼らが遣って来たことは、神を称え、神に感謝し、神に祈ることだけであった。

同じ伝統がロシアの教会にも生き続けていた。ロシアの教会には、古いキリスト教に特徴的な楽天主義が蔓延していた。カトリック教会のように教皇・改革派・清教徒が争うこともなく、古い伝統に安住し続けていた。

復活祭で東方正教会はキリストの復活を子供のように喜ぶが、彼らが喜ぶ様子はカトリック教徒やプロテスタントには奇異にしか思えない。ロシア教会の楽天主義をよく象徴しているのがラスプーチン Grigori Rasputin の手紙である。エルサレムに巡礼に出かけたとき、彼はつぎのような内容の手紙を書いていた。「エルサレムで目にしたカトリック教会は、復活祭に際して悲しそうであった。我々のようにキリストの復活を喜んでいるようには見えなかった。我々の復活祭では、動物までがキリストの復活、そして春の復活を喜んでいる。彼らを批判するつもりはないが、キリストの復活を告げる教会の鐘が鳴り響くとき我々が感じる喜びは、彼らには判らないようである」。

こうした東方正教会の古い体質が判っていれば、ボルシェビキ政権が教会に対して採った態度が格別、目新しいものでないことも理解できるはずである。かつて東方正教会は、「この世 world」を変えるように説いたことは一度もなかった。そんなことには、まるで無関心であった。教会は「ムジーク」(ロシア農民)に神と交信する道具を1つ用意していた。それがイコン(聖人画)であった。ボルガ下流の広大な土地に放り出された「ムジーク」(ロシア農民)は孤立無援であった。広大なロシアの大地のなかで、「ムジーク」(ロシア農民)は一本の野草に過ぎなかった。そんな無力な「ムジーク」(ロシア農民)に教会が用意したのがイコン(聖人画)であった。イコン(聖人画)は自分が住んでいる寒村や掘立小屋を忘れさせ、神が支配する広大な世界を実感させてくれた。イコン(聖人画)は広大なキリスト教世界との一体感を感じさせてくれる道具であり、神の力を保障してくれる大切な道具であった。

クロンシュタットのヨアン＝セルギエフ Ioan Sergiev of Kronstadt がその著書『我が生涯 My life in Christ』で、つぎのように書いている。「イコン(聖人画)に描かれている個々の聖人は、私にとって重要ではなかった。イコン(聖人画)に描かれている聖人が神と我々の距離の近さを示していることが重要であった。あらゆるところに存在する神が我々にとって遠い存在である

はずはなかった。我々は家にイコン(聖人画)を飾っているが、イコン(聖人画)の存在によって我々は、神と聖人がいつも我々を見守っていることを知るのである」。

ボルシェビキ政権は、イコン(聖人画)の数がすなわち信者の数だと考えていた。イコン(聖人画)を自宅に飾っていることが、すなわち信者であることの証拠だと考えていた。ところが聖職者ですら、イコン(聖人画)を自宅や事務室に飾っているとは限らないのである。最後のロシア皇帝ニコライ2世のもとで宗務院長を務めたポベドノスツェフ Konstantin Pobedonostsev は事務室にイコン(聖人画)を飾っていなかったし、そのことを彼は自慢にしていた。イコン(聖人画)は絵画に過ぎないというのが彼の言い分であった。しかし、広大なロシアのなかで孤立無縁の「ムジーク」(ロシア農民)に教会の存在を誇示するには、それしか方法がなかったのである。広大なロシア全土で存在を誇示するはずの教会が孤立した寒村でその存在を誇示するには、イコン(聖人画)を飾らせるしか方法がなかったのである。経済のグローバル化が実現した今では、国土の広さや距離は特別な意味を持たなくなった。そこで以前とは逆に、教会の方が孤立することになった。ラジオが普及した現在、もはやロシアの教会はロシア全土で存在を誇示する必要性が無くなったのである。信仰に代わって知識が重要になってきた。信仰の問題は、とくに教会が担当する必要性が無くなっていった。

イコン(聖人画)の存在から明らかになるのは、ロシアの教会が革新や進歩と無縁だったということである。ロシアの教会は神を賛美し、神に祈りを捧げるだけであった。1914年のロシアの教会は、900年前の東方正教会と同じ教会であった。神を称え、神に祈りを捧げるだけで「世直し transform the world」や、「この世」を悪魔の支配から解放することを考えたりすることはなかった。

またイコン(聖人画)は、第一次世界大戦までのロシアを象徴する存在でもあった。つまり教会が広い外の世界を代表し、農村は孤立したひ弱な

存在に過ぎなかった時代を象徴していたのである。ボルシェビキ政権は、そんなアイコン（聖人画）を嫌っていた。また、そんなアイコン（聖人画）が象徴する時代を嫌っていた。信仰だけを重視し、知識を軽視する古い時代を嫌っていた。

ボルシェビキ政権がアイコン（聖人画）を嫌ったのは、それが孤立したロシアの農村を象徴していたからである。アイコン（聖人画）を敵視したことが問題ではなかった。アイコン（聖人画）は工業化に対する障害の象徴であった。ボルシェビキ政権が推進した「反宗教政策 atheism」が間違っていたのは、アイコン（聖人画）を信仰の証拠だと考えたことであった。

### 第3節 ソ連時代のロシア

広大な「母なるロシア」、何億という「ムジーク」（ロシア農民）が住んでいたロシアに、第一次世界大戦後まるで違った国が登場して来ることになった。

革命後のロシアで「社会主義農業計画局 Institute for the Economy and Organization of Socialist Agriculture」は、つぎのような計画を発表した。ソ連（社会主義共和国連邦）は5つの地域に分割され、つぎのような生産物が割り当てられることになった。

	生産物	生産地域
第一地域	大麻・砂糖用蕪（砂糖大根）・飼料用蕪・トウモロコシ・大豆・タバコ・綿・向日葵・豚	ウクライナの南西部・黒土地帯 クバン地方北部・極東の一部
第二地帯	亜麻・乳製品・野菜・豚	バルト海沿岸地方・モスクワ周辺・ウラル地方

第三地帯	絹・紅茶・ぶどう・オレンジなど	クリミア南部・コーカサス地方 中央アジア
第四地帯	肉牛・羊	ブリアート・モンゴル共和国 ボルガ地方南東部のステップ
第五地帯	将来の農用地として確保しておく 森林地帯	アルハンゲルスクから太平洋にかけての地域

地域の割り当てに際して、ヨーロッパ＝ロシアとシベリアが区別されることはなかった。つまり、ヨーロッパやザンクト＝ペテルブルク、モスクワを中心にしたロシア観とは無縁な考え方が採用されたのである。ロシア全土が1つの国として認識され、ロシアをヨーロッパ的な地域とアジア的な地域に分けて考えるヨーロッパ由来の偏見が無くなっていた。1921年に開かれた第10回共産党大会では、つぎのような決議が採択されている。「諸民族間の不平等が廃止されると共に、かつて存在していた経済的な不平等も廃止された。これまでロシアの周辺部は、中心部の工業地帯によって原料供給地域になることを強制された植民地・半植民地のような存在であったが、それが無くなった」。

まるで「中心部」は犯罪者扱いであった。その「中心部」とは、じつは「母なるロシア」に他ならなかったのである。「ムジーク」（ロシア農民）の「母なるロシア」は「周辺部」の地位に格下げされ、第10回党大会の決議文は丸で犯罪者の懺悔の告白であった。こうして「中心部」と「周辺部」は同格となった。ロシア全土は、「ソビエト共和国連邦」が工業生産のために役割を割り当てた地域の集合体となったのである。ジンギスカン支配下の時と同じであった。ロシア人の感情など、まったく無視されていた。かつてモンテスキューは『法の精神』のなかで、「フランスについて考えるときも、マダガスカルについて考えるときのように感情抜きでいたい」と書いたことがあったが、レーニンもロシア人に対して、母国ロシアを感情抜きで植民地のように考えるよう求めたのである。「母なるロシア」の廃



ソ連の地図 (1935年)

墟のうえに、2000万平方キロメートルの広さをもつ穀物工場が建設されたのである。これがロシア革命の成果であった。ロシアの国土は、そこに住むロシア人の帰属感を無視して「抽象化 abstraction」され、国土に対して特別な感情を持つことが許されなくなった。

ふつうアメリカで「農民 farmer」といえば、100エーカー (40ヘクタール) ほどの農地を持った自営農民を思い浮かべる。第一次世界大戦前

のロシアでストルピン Pjotr Stolypin が実施した改革も、そんな農民を作ることを目指していた。彼らは「クラーク kulak」(富農) と呼ばれていたが、ボルシェビキ政権は彼らを敵視していた。穀物栽培をする広大な「ソフォーズ Sovchoz(Sovetskoe Chozjajstvo)」(国営農場) 建設と並行して、「クラーク」(富農) 退治が進められた。その結果、3000万エーカーの農地が「ソフォーズ」(国営農場) に与えられた。不作に備えて農場は大規模なものになった。もっとも大きかった「ソフォーズ」(国営農場) は、ロードアイランド州ほどの広さがあった (2万2000平方キロメートル)。これは、かつてドイツに存在していた「領邦国家 Land」の広さに匹敵するほどである。ベルギー王国・ザクセン侯国・マサチューセッツ州なら100万もの人間が住んでいる広さであった。ロシア領ポーランドに隣接していたドイツのシレジア (シロンスク) 地方はドイツでも特に人口密度が低い地域であったが、そんなところでも20万人が住んでいた。ところが、このロシアでもっとも広い「ソ

フォーズ」(国営農場) に住んでいたのは、たった1万7000人に過ぎなかった。第一次世界大戦で前線にいたことのある兵士なら、荒涼とした無人の土地がどんなものかよく判るはずである。我々は「荒涼たる戰場 emptiness of battle-field」と呼んでいたが、そんな荒涼たる無人地帯がロシアで初めて利用されることになったのである。自然との戦い (砂漠化や旱魃との戦いも含む) に多くの若者が動員された。「ソフォーズ」(国営農場) で働いていた労働者の95%が30歳以下の若者であった。しかも、その90%は機械工であった。自然との戦いは機械を使った戦いであった。いわゆる農業労働者は10%に過ぎなかった。効率を上げるため、作業はすべて規格化されていた。1930年の小麦の生産目標は、1927年に「クラーク」が生産していた1億プードル (36億ポンド) であった。

それは国民に対する政府の容赦ない戦いでもあった。第一次世界大戦前なら考えられないことであった。第一次世界大戦までなら、どの国の政府も経済体制まで変えることは考えなかった。政府たるもの経済を保護し発展させるべきであって、銀採掘業・農業・石油業・建築業などを政府が潰しに掛かることなど考えられないことであった。ボルシェビキ政権は、この政府と産業界の関係を変えてしまったのである。「クラーク」(富農) を排除する作戦の過程で、何億人もの人間が犠牲にされた。

1927年には、まだボルシェビキ政権は「クラーク」(富農) が提供する小麦を必要としていた。「クラーク」(富農) が輸出用の小麦を自発的にボルシェビキ政権に提供してくれることは期待できなかったが、だからと言ってボルシェビキ政権は「クラーク」(富農) を保護することで小麦を手に入れようとしなかった。エンゲルス Friedrich Engels の「必要から自由へ jump out of the realm of necessity to the realm of freedom」(本来の意味は必要に迫られて働くのではなくて、好きなときに働くという共産主義の理想) ではないが、小麦が必要だということで「クラーク」(富農) に自由を認めると、腐敗が蔓延して「クラーク」(富農) による他者の隷属化が起るとボルシェビキ政権は考えていたのである。そこでボルシェビキ政権は「クラーク」(富

農)から農地を奪うことにした。「共産党だけが生産手段をコントロールできる」(ハンガリーの共産主義者ルカーチ Georg Lukács)からであった。伝統的な生産様式が破壊されてしまうことになるが、ボルシェビキ政権はまったく意に介さなかった。景気のあり方はイギリスが決め、思想のあり方はフランスが決めるが、生産のあり方を決めるのはボルシェビキ政権であった。経済体制のあり方や財産権の問題にボルシェビキ政権が関心を示したのは、それが計画経済で問題になるときだけであった。ボルシェビキ政権の権限は絶大であり、だれもその命令に逆らうことはできなかった。経済的な理由を根拠に政治的な特権を要求する者がいたら、そんな者は抹殺すればよいのである。ロシアで「クラーク」(富農)が抹殺されるのを見て、周辺の国は脅威を感じていた。周辺の国は既存の制度を守る義務があると考えており、「クラーク」(富農)が抹殺されることに無関心でいれなかった。

ロシアでは、消費財の生産量と再生産のために投資されるべき資本の量を決める「五カ年計画 piatiletka」で、抹殺されるべき階級が決められることになった。まず抹殺が決まったのが「クラーク」(富農)であり、それからの5年間(あるいは10年間かもしれない、15年間かもしれない)、食糧不足による飢餓を覚悟しなければならないことになった。100万人の土木技師が必要と「五カ年計画」で決められると、それと同数の芸術家(ロシア語で「専門家 spets」と称された)がいなくなることを意味した。ボルシェビキ政権が「過去の存在 has-beens」という場合、それは文字どおり「存在を止める」ことを意味したのである。

詩人・貴族婦人・資本家などが「過去の存在」であった。彼らは「ただ存在している physical nakedness」だけであって、社会的な有用性は認められず(ローマ法でいう「商取引の対象となり得ないもの extra commercium」)、存在が黙認されているだけなのである。彼らは労働力となり得ない無用な存在であって、ソ連市民となる資格もなかった。「五カ年計画」の登場で、19世紀の役人には想像も付かなかったような強大な権限がソ連の役人に与えられることになった。我々がソ連の統計を信用せず役人の権限に注目

するのも、これが理由になっている。ソ連の生産量は、「五カ年計画」で再生産のための投資額がどうなるかによって如何様にも変わり得るからである。ソ連に関しては統計の数字など問題でなく、その実験的な試みによってソ連がロシアや世界をどう変えるかが問題なのである。

ロシアの変化ぶりを再確認してみよう。

#### a. 産業分野

	工業	エネルギー業	運輸業	農業	建設業	その他
1927/28年	14%	1.4%	16.6%	41%	17.2%	9.8%
1932/33年	22.8%	4.1%	17.2%	30.4%	12%	13.5%

#### b. 所有形態

	国有部門	協同組合	私有部門
1928年10月1日	51%	1.7%	47.3%
1933年10月1日	63.6%	5.3%	31.1%

#### c. 生産物

	消費財	流通財	生産財
1928年10月1日	42.7%	18%	39.3%
1933年10月1日	35%	20.5%	44.5%

以上のことから、つぎのようなことが判る。

まずロシアでは、「五カ年計画」が憲法のような役割を果たしていたということである。「五カ年計画」で農地に工場が建てられることが決められたし、その工場をどこに建てるかも「五カ年計画」で決められた。また労働者も、物資のように「生産される」のである。人間は労働力の提供者に過ぎなくなり、電力と同じく生産のための1要素に過ぎなくなった。「人間を労働力に From Body to Force」が丸でキリスト教の教義のように変更不能となり、「五カ年計画」は聖なる存在と化したのである。ボルシェビキ政権は個人から自由を奪っていった。そもそもボルシェビキ政権は、個人などに関心がなかった。個人が存在することすら認めていなかったのでは

る。第一次世界大戦で多くの血を流し、切り刻まれ、飢えたロシアは、国家としての体を成さなくなっていた。ロシアを国家として生き返らせることが戦後最大の課題であった。ロシア革命がまずやろうとしたのが、この課題の解決であった。死に体となったロシアに「起きて歩め」（イエスが奇跡によって足萎えを癒して足萎えに命じた言葉）と言うには相当に勇気が必要であったが、それをボルシェビキ政権は言っていたのである。電気を生み出せる者、新しくエネルギーを生み出せる者は歓迎されたが、そうでない者には関心を示さなかった。逆に死に体となったロシアに電気ショックを与えて生き返らせることができる者は、すべての罪が許されることになった。否、そもそもソ連で個人が罪を意識することは無かった。ソ連では、個人は罪から解放されていたのである。とくに人間が生きていくうえで欠かすことのできない「性愛 love」の問題が、単なる「性 sex」の問題に解消されていた。レーニンの妻クルプスカヤ Nadezhda Krupsukaya が働き蜂の生態について本を書いているが、その本で「性愛」は「情熱 passion」と無縁なものとして、単なる「性」にされている。ソ連の若者は「性」に特別に関心を払うことが無くなったのである。「性」は特別なことでなくなり、タブーでも秘密でもなく、キリスト教徒に特有の「強迫観念 obsession」でもなくなった。

「性」を特別視する考え方は、個人を特別視する 19 世紀ブルジョアの考え方であった。しかし忘れてならないのは、ボルシェビキ政権が罪そのものをなくした訳ではないということである。彼らは古い罪を復活させただけであった。個人に責任がなくても、公的な場で罪ありとされたのがキリスト教以前のヨーロッパであった。制度の欠陥すら個人の罪とされるようになった。この罪を犯した者に、やり直しは許されなかった。

どんな文化も秩序がなければ存続し得ない。それも自動再生が可能な秩序でなければならない。さらに文化がそれなりの水準を維持するためには、革新・改善・修復・再建が求められる。決まった生活様式を守らせることで人間を教育することも必要であった。この教育の問題こそ最大の歴史的

課題であり、またこの本の課題でもある。

歴史上、さまざまなタイプの人間が生み出されてきたが（たとえば「市民 citizen」・「貴族 gentleman」・「キリスト教徒 Christian」など）、ロシア革命が生み出したのは「生産に役立つ usefulness in the process of production」タイプであった。たしかに生産も人間に必要なものではある。蒸気・電気・水・力のように、工業化された世界では原料と並んで必要なものである。

第一次世界大戦で 1500 万人が死亡したとされるロシアでは、熟練工・技術者・経済学者などが極端に不足し、ボルシェビキ政権は教師・技術者・熟練工などを「五カ年計画」で「生産する」ことが余儀なくされた。そうしなければ、こうした職種の人間はロシアに存在しなくなるからであった。ところでダンテ Dante Alighieri の『神曲』に登場してくる煉獄では（煉獄は罪を犯した者が償いをして天国に行く準備をする所）、個人が生前にどう生きたかによって天国に行けるか否かが決まることになっていたが、「五カ年計画」が支配するソ連で個人の罪は問題にされず、革命までの社会制度の罪が問題とされた。社会制度が原因で個人も罪ありとされたのである。

個人の罪が問題にされるのではなく、労働力を提供する人間として罪を科せられ配置転換を強制されるのである。ボルシェビキ政権は個人が犯す罪には無関心で、個人は労働力の担い手としか考えられていなかった。「五カ年計画」で扱われる原料や資材と変わらない「物資 material, object」に過ぎなかった。かつて「ムジーク」（ロシア農民）は「母なるロシア」が面倒をみるべき「弱者 minor」に過ぎなかったが、ソ連でも相変わらず「弱者」であった。「ムジーク」（ロシア農民）に個人の資格は認められなかった。「母なるロシア」では「無力な神の子 helpless child of God」に過ぎず、ソ連では「原料・資材と同じ孤立した労働力の提供者 atom of the raw materials and labor forces」に過ぎなかった。

ボルシェビキ政権は「ロシア」を国名に使わなかった（正式な国名は「ソビエト社会主義共和国連邦」）。世界革命を実現するためには、「ロシア」という特定の国の名前は邪魔になった。「五カ年計画」が目指していたのは、

「ソ連の工業化を成功させ、社会主義体制を強化することで先進国を追い越し、資本主義より社会主義が優れていることを証明すること」であった。

ロシアのプロレタリアートは、ロシアとは関係のない資本主義との戦いを義務として課せられることになった。そのことに関して、つぎのようなことを書いていた者がいた。「ソ連の報道を見ていると、まるで第一次世界大戦のときに重要な戦線から提出された戦況報告のようである」(G. Grinko, El Plan Quinquenal de los Soviets, Madrid, no date)。ロシア人は、ロシアと関係のない社会実験を始めたのである。しかし、そんなことが可能なのであろうか。世界革命など本当に可能なのであろうか。スペイン・アメリカ・ドイツ・フランスなどで起きていることは、すべて世界革命の実現に向かうための第1歩なのであろうか。ロシアは本気で世界革命の実現を目指しているのであろうか。この問題も、この本の大切なテーマである。

以上で第一次世界大戦前のロシアとソ連時代のロシアを比較してみたが、その担い手であった人間とその考え方については、まだ論じていない。ロシアの支配階級たるインテリゲンチヤ(知識人)と、彼らがどのようにしてヨーロッパ生まれのマルクス主義を受け入れていったかを、つぎに論じてみたい。両者を結合してみせたのがレーニンであった。両者の原型を破壊することで両者を結び付けてみせたのがレーニンであった。ヨーロッパ的なマルクス主義を捨て去れなかった者は、生き残ることができなかった。いまソ連を支配しているのは、ヨーロッパ的なマルクス主義を捨て去ることで「針の穴」(イエスは金持ちの天国入りのむずかしさをラクダが針の穴を通るよりむずかしいと言った)を通ることができた少数派である。

#### 第4節 インテリゲンチヤ(知識人)

いまロシアを支配しているのは誰なのであろうか。公式にはプロレタリアートということになっているが、共産党に加入が認められているのはプロレタリアートの出身者ではない。共産党に加入が認められるためには、

一定の条件を満たす必要があった。「五ヵ年計画」を受け入れるのはもちろんだが、それ以外に個人的な性格も重要であった。第一次世界大戦までロシアを支配していたインテリゲンチヤ(知識人)に比べると、ソ連を支配している共産党員(知識人)の数は少なく、同じ条件を満たして加入が認められた者の集まりだけに支配者としての結束力はつよい。

ロシア革命後、最初の15年間は月給が225ルーブリ以下の者だけが共産党員になれた。彼らはダンスをすることも禁じられ、贅沢な生活は御法度であった。いまでもソ連では、公の場では恋人にキスをすることも問題視されている。第一次世界大戦以前にインテリゲンチヤ(知識人)として認められるには、政府の迫害を受けていればよかった。投獄されたり、シベリア流刑になったり、あるいは身分証明書を持たずに偽名を使って「人民narod」のあいだで暮らしていれば、それがインテリゲンチヤ(知識人)であった。彼らは「良家good family」の出身者であった。レーニンの父親ウリヤノフ Ulianov は学校教師だったし、トロツキー Trotsky は大地主の出身であった。また、トロツキーの友人であったビルコフ Pavel Birkov は貴族(皇帝の親衛隊将校)の出身であった。ロシアのインテリゲンチヤ(知識人)は、けっしてプロレタリアートの出身者ではなかった。すでに1825年、ナポレオンがロシア遠征を行なったときにモスクワ防衛戦に参加したロストプチン伯爵 Count Rostoptschin は、アレクサンドル1世に従ってパリに赴いて次のように言ったそうである。「フランス人が革命を起こして貴族から特権を奪い、それを自らのものとした理由は理解できるが、ロシアの貴族が自ら特権を放棄するために革命を起こすことなどあるだろうか」。

長いあいだ私欲を捨てて戦ってきた貴族出身のインテリゲンチヤ(知識人)は、その後どうなったのであろうか。1886年、彼らは自らの過去と財産を捨て去ったが、そうすることに躊躇した者は憐憫と軽蔑の目で見られることになった。彼らは、まるで初期のキリスト教徒のようであった。「私は悪魔を拒否する。悪魔と関連あるすべてのものを拒否する」(Tikhomirov, La Russie, Paris, 1886)。

ロシアほど文学作品が歴史で重要な役割を果たした国はヨーロッパには無い。少なくとも、ピョートル大帝の時代以降はそうであった。ロシア以外の国では、「団体 corporation」と「身分 estate」が政治のあり方を巡って争うことで文化が作られてきた。ところがロシアでは逆で、文化（文学）が政治のあり方を決めたのである。ロシア以外の国で政党を組織したのは「団体」であり「身分」であった。ところがロシアでは、新聞と文学が政党を産み出し存続させていたのである。ロシア以外の国では、個人は「団体」や「身分」の一員であった。ところがロシアでは、個人は個人として孤立しており、個人が「団体」や「身分」に属することはなかった。

しかしヨーロッパから教育制度が導入され、ロシアでも個人が行動を起こすようになった。文学作品を使えば、個人が社会的な影響力を振ることができるようになったのである。革命前のロシアで詩人や文学者が大きな影響力を振るい得た由縁である。多くの詩人や文学者が亡命を余儀なくされたり、投獄されたりしている。支配者も改革を推進するために文学を利用した。たとえばピョートル大帝は、自分が推進する改革に反対する者を戯画化した演劇を書いたりしている。エカテリーナ2世も風刺文学を発表するために雑誌を創刊し、自ら戯曲やエッセーを発表している。政治風刺の伝統はいまでも生きており、ソ連の新聞は政治的な戯画を掲載する欄を特別に設けている。

ロシアでは、文学を通じて人は組織を作り、政治活動を行うのである。貴族か否かは問題にならなかった。問題になったのは、どんな文学を好むかということだけであった。文学に関する評論が数多く発表され、数多くの月刊雑誌が創刊された。200～300ページの部厚いものも珍しくなかった。そんな月刊雑誌を中心に政党が結成された。文学が政争の道具とされたのである。そんなところでは、純文学は存立の余地がなかった。

厳しい検閲制度があったおかげで、行間を読んだり行間を読ませたりする技術が登場してきた。検閲をパスするような作品でも、作家は行間を読ませることに腐心するようになった。

ピョートル大帝の強引な欧化政策、さらに若者を外国で勉強させたり、招聘した外国人に学ばせたりしたおかげで、ロシアの文学者はロシア社会と距離を置いた外国人のような態度を取るようになった。それもロシアに批判的な態度であった。

ロシア初の詩人とも言えるべきカンテミール侯 Prince Cantemir (1708-1744) はパリで教育を受け、ロシア社会を奇妙で異質なものを感じていた。彼が書いたものには、そんな彼の批判的な態度がよく現れている。つぎに登場して来たのがカラムジン Nikolay Karamzin (1765-1826) であった。彼はヨーロッパを旅行したあと、有名な『ロシア人旅行者の手記』を書いている(1791-92)。それまでロシア人にとって、ヨーロッパの芸術家や科学者は翻訳の世界に登場してくる人物に過ぎなかった。それを、もっと身近なものにして見せたのがカラムジンであった。カラムジンのこの本のおかげで、ヨーロッパの芸術家や科学者は知人のように感じられるようになった。またカラムジンは、『ヨーロッパ通信 Vestnik Evropy』と題した雑誌も刊行している。ザンクト＝ペテルブルクをヨーロッパへの窓にするというピョートル大帝の夢は、この雑誌にも受け継がれていた。

ナポレオン戦争の経験は、ロシアにとって貴重なものとなった。パリまで進軍したロシア軍には、多くのインテリゲンチヤ（知識人）が将校として参加していた。1814年4月15日にコンコルド広場で連合軍が神に感謝する聖歌「テデウム Te Deum」を唄ったとき、6人のロシア正教の司祭が参加していた。パリ遠征は、カラムジンが書いていることを実際に体験する貴重な機会であった。ヨーロッパから帰国した若い貴族たちは、ふたたび文学の世界に帰って行ったが、彼らが直面した現実には厳しいものであった。検閲と亡命と牢獄が彼らを待っていたが、それでも彼らは挫けなかった。1825年は、そんな彼らの殉教の年となった。ロシア政府が変革の約束を破り、若い貴族たちは蜂起を敢行したのである。ピョートル大帝がヨーロッパに旅立った1697年以来、ロシア帝国はヨーロッパの技術を導入したおかげで発展することができた。そのことは皇帝なら誰もがよく知って

いた。エカテリーナ2世はフランスの啓蒙思想家ボルテール Arouet Voltaire やディドロー Denis Diderot と文通していたし、自分の政策に関してゲッティンゲン大学のシュレーザー教授 August von Schloezer がどう評価するか、とても気にしていた。そんなロシア政府が、変革するという約束を破ったのである。ザンクト＝ペテルブルクを建設し、官僚制を整え、軍隊を編成できたのは思想の自由があったからであった。その思想の自由が放棄されたことが明白になったのである。1825年は、ロシア史にとって重要な年となった。

ことの次第は単純明快であった。「革命家たちと歩調を合わせて改革に精を出してきた」皇帝アレクサンデル1世が、「精神的にも肉体的にも疲れ果ててしまった」のである。「彼の考えていたことは、すべて裏目に出てしまった。彼を長いあいだ支持してきた者やその政策のおかげで、彼の臣下たちは訳が判らなくなっていたが、必要に迫られてそんな臣下を攻撃する羽目に陥って皇帝は心を痛めていた」(Clemens Metternich, Memoirs, vol. 1, p.332, New York, 1880)。

1825年12月、革命家たちはアレクサンデル1世のあとを継いだ末弟ニコライ1世に忠誠を誓うことを拒否し、次弟コンスタンチン大侯の就任を要求して蜂起を敢行した。兵士は将校たちが主張するフランス由来の立憲主義が何を意味するかまるで判っておらず、「憲法 Constitution」をコンスタンチン大侯夫人と勘違いして「コンスタンチン大侯万歳、憲法万歳」と叫んでいた。ロシアでは、彼らを支持する者は1人もいなかった。蜂起の参加者のうち、指導者の詩人ルイレーエフ Kondraty Ryleev は1826年に絞首刑に処せられ、バスツージェフ Aleksander Bestuzhev は兵卒に降格されたあとコーカサス戦線に送られた。また公爵だったオドエフスキー Aleksander Odoevski は爵位を剥奪されたあとシベリアの炭鉱に送られ、ポレジャーエフ Aleksander Polezhaev も兵卒としてコーカサス戦線に送られた。プーシキン Aleksander Pushkin は奇跡的にシベリア流刑を免れるが、自分の領地で警察に監視されながら暮らすことになった。

彼らデカブリスト(蜂起が12月に起きたことから、ロシア語で「12月」を意味する「デカブリ」に因んでこう呼ばれている)の妻たちは、夫につき添ってシベリアに赴いて行った。夫たちと苦労を共にするためであった。その崇高な行為ゆえに「デカブリストの妻 Dekabristka」は「理想的な妻」の代名詞になっている。ロシア人女性は、その犠牲的精神ゆえに称えられることになった。法的に解放されているに過ぎない欧米の女性を超えた存在なのである。

そんな新しいロシア人女性を初めて文学作品に登場させたのがプーシキンであった。『エフゲーニ＝オネーギン』の女主人公タチヤーナである。1825年以降のロシア社会の様子は、グリボエドフ Aleksandr Griboedov の喜劇『知恵の悲しみ』によく現れている。役人と軍人に衝突する者は危険人物と看做され、狂人扱いされるのである。1825年以降のロシア社会は、いわば「奇形と化した hunched back」のである。

当時のロシアのインテリゲンチヤ(知識人)は、西欧派とスラブ派に分かれて対立していたとされているが、どちらも問題にしていたのはロシアのことではなくてヨーロッパのことであった。歴史の教科書からフランス革命が削除されるような圧政が支配し、文学の世界には悲観論が蔓延していた。『現代の英雄』(レールモントフ Michail Lermontov が書いた小説)は何もできない自分を責め、周囲の者を苦しめるのである。またゴゴリ Nikolai Gogol は、社会悪を暴いてみせた最初の作家となった。そしてゲルツェン Aleksandr Gerzen は、そんな彼らが最後に行き着くところを作品にし、また自ら実践して見せた。1843年に彼が書いた小説『誰の罪か』の主人公は、折角の知識と行動力を生かす場所がロシアで見つからずに亡命することになる(ゲルツェン自身も1847年に亡命)。

ロシアがクリミア戦争で敗北し、さらにニコライ1世が死亡したこともあって、ロシアにも変化の兆しが訪れてくることになった。それまでの苦労がやっと報われることになったのである。ゲルツェンはロンドンで喜びの『鐘』を鳴らすことになった(同名の雑誌を創刊)。亡命者であったにも

関わらず、まるで彼は<sup>せつしょう</sup>摂政の地位を約束された重要人物のようであった。イギリスにやってきた高位の有力者が、「犯罪者」ゲルツェンに表敬訪問<sup>おこな</sup>を行っていたのである。この変化は国家や教会など、ロシアのあらゆる場所<sup>おこな</sup>で確認することができた。ザンクト＝ペテルブルクでは、牢獄も流刑も<sup>あくじ</sup>悪事ではなくなっていた。

新しい時代の到来は、ツルゲーネフ Ivan Turgenev の『その前夜』が象徴していた。さらに1861年に彼が書いた『父と子』では、主人公は「ニヒリスト」なる言葉で呼ばれた。「ニヒル」とはラテン語で「無」を意味し、新しい未来を切り開くためには古い世界と縁を切る必要があることを彼は指摘して見せたのである。

しかし、新しい未来は簡単に訪れて来なかった。絶望したツルゲーネフは『けむり』を1867年に発表して、農奴解放令は何も解決しなかったし『父と子』に登場してくる改革派の試みは<sup>すべ</sup>全て失敗に終わったと断言した。ツルゲーネフの言うとおりであった。「インテリゲンチヤ Gebildete Gesellschaft」(知識人)は救いようのない状態に<sup>おちい</sup>陥っていたのである。出口なしであった。

インテリゲンチヤ(知識人)が社会主義に走ったのも当然であった。社会主義が文学の新しい主題となった。社会主義者たちはプロレタリアートの階級意識について語っていたが、ロシアにプロレタリアートなど存在しなかった。マルクスとエンゲルスがランカシャー Lancashire の紡績工場にいたプロレタリアートに期待したような階級闘争は、ロシアでは起こり得ないことであった。『資本論』を最初に外国語に翻訳したのはロシア人だったが、そのロシアには資本家もプロレタリアートもいなかった。ちょうど20年前にトルストイ Leo Tolstoi がゲーテ Johann W. von Goethe のいたワイマールの学校制度を研究したときのように、社会主義者はマルクスを熱心に研究していた。ヨーロッパ音楽を取り入れた時も、ロシア人は同じように熱心であった。

ロシア人にとって、マルクス主義はヨーロッパから輸入した新しい思想

であった。ヨーロッパでは、それは危険視された新しいユートピア思想であった。しかしロシア人にとってマルクス主義は、ロシアがヨーロッパを<sup>こ</sup>超えるチャンスを与えてくれる思想であった。この思想をロシアで現実できれば、ロシアのインテリゲンチヤ(知識人)はヨーロッパを<sup>こ</sup>超えることができるのである。それに成功すれば、何世紀ものあいだ苦しめられてきたヨーロッパ＝コンプレックスから解放されるのである。それは「遅れた obsolete」ヨーロッパを見返してやるチャンス<sup>か</sup>を意味した。ロシアの「ニヒリスト」たちは、ヨーロッパの伝統的な秩序を破壊し兼ねないヨーロッパ製の爆弾を手に入れたのである。

1863年にチェルヌイシェフスキー Nikolai Chernyshevskii は、小説『何をなすべきか』を書いて若者に社会主義の必要性を説いたが、おかげで20年のシベリア流刑に<sup>しよ</sup>処せられることになった。さらにツルゲーネフは1877年に『処女地』で、新しいマルクス主義の実現を<sup>めざ</sup>目指す若者を<sup>えが</sup>描いている。彼らの言う「マルクス主義」は資本制社会が存在しないロシアのマルクス主義であり、プロレタリアートのいないロシアのマルクス主義であった。こうしてロシアのインテリゲンチヤ(知識人)は、「人民のなかへ」<sup>はい</sup>入っていくことになった。

1880年になると、もはや政府とインテリゲンチヤ(知識人)のあいだに妥協の余地はなくなっていた。さらに1890年には、ロシア革命は<sup>き</sup>避けられないものになっていた。80年代と90年代をとくに重視するのは、この時代がのちの革命家たちにとって忘れられないものになっていたからである。革命家たちにとって、農業の進歩とか学校制度の改善、あるいは憲法の制定などは、もはやどうでもよいことであった。その程度のことで、ロシアは変わりそうにもなかったからである。

ロシアには、目に見えない地下水脈が流れていた。1880年以降、<sup>きそん</sup>既存の社会秩序を<sup>まった</sup>全く認めず、<sup>みずか</sup>自らを社会と無縁な場所に置く集団が登場してきたのである。「ニヒリスト」たちであった。彼らはヨーロッパ中の大学に在籍していた。スイスのベルン大学だけでも、600人ものロシア人学生

が登録していた。全員が生活費にこと欠いており、学生・インテリゲンチヤ・陰謀家・政治家を一緒にしたような存在で、既存の社会秩序に対して「拒否 no」の意志表示をしていた。全員が世界を変える使命を負っていると考えており、自分の生活・財産・家族・信仰などは全く問題にせず、ただ「人民のなかへ」<sup>はい</sup>入っていくことしか考えていなかった。自分の家族ことも、将来のことも、知的な関心のことも、すべてを犠牲にする覚悟<sup>かくご</sup>であった。彼らが皇帝や大侯を暗殺するときは自分の良心を押し殺し、さらに「この世」の利害関係と無縁な場に自分を置いていた。その狂信的な態度は、スペインの異端審問官以上であった。異端審問官も死後の救済は願っていたが、「ニヒリスト」たちはそうではなかった。彼らの念頭にあったのは、ヨーロッパを追い越すことだけであった。ヨーロッパに<sup>まき</sup>先駆けてロシアに未来社会を築<sup>きず</sup>くのである。ヨーロッパ人は19世紀的な進歩の世紀が続くと確信していたが、ロシア人はそれが終わったことを革命によって証明しようとしていた。ヨーロッパの文化・文明など、もはやどうでもよいことであった。それはブルジョア的なものに過ぎなかった。自由もブルジョア的なものに過ぎなかった。良心・名誉・信仰も、すべて「無 nihil」なのである。

革命家は全員が牢獄生活を経験済みであり、全員が壁や床を叩いて発信するモールス信号の会話に精通<sup>せいつう</sup>していた。これこそが彼らにとっての名誉であった。既存のロシア社会にとって、革命家は「最低の人間 pariahs」に過ぎなかった。大学では怪しげな学生組織に所属し、外国留学から帰ってくると非合法活動を始め、投獄され、出獄するとまた非合法活動に戻るかと思えば、ふたたび外国に亡命し、帰国すると今度はシベリア流刑になるか牢獄<sup>ろうごく</sup>入りであった。その繰り返しが革命家の生き方であった。彼らを待っていたのは、つねに「別離 separation」であった。祖国との「別離」、自由との「別離」、家族との「別離」、社会的地位との「別離」、快適な生活との「別離」である。

そんな「別離」<sup>みずか</sup>を、彼らは自らの意志で選んだのである。そのことが彼らを一層<sup>かがや</sup>輝ける存在にした。自分が属する階級を裏切り、人間らしい感

覚を捨て去るのである。こうしてロシアには、2つのタイプの息子が登場して来るようになった。従順で信心深く、軽蔑の対象となっていた「小役人 chinovnik」の息子と、革命家を志す息子<sup>こころざ</sup>である。革命家の生涯は修道士の生涯のようであった。皇帝の忠実な臣下である両親と別れ、それまでの仕事を諦め<sup>あきら</sup>、子供を持つことを諦め<sup>あきら</sup>、財産を諦め<sup>あきら</sup>、普通の市民としての生活を諦めるのである。すべてが革命のためであった。どんな修道士にも負けないほど彼らは禁欲的であった。規律が厳しいイエズス会士やトラピスト会士も顔負けの禁欲ぶりであった。フリーメーソンの入会式で課せられる厳しい試練も、革命家たちが直面したシベリア流刑や亡命生活、死刑の可能性に比べるとお遊びに過ぎなかった。全てが史的唯物論を信じるがゆえに、自ら自発的に選んだこと<sup>みづか</sup>であった。

1870年から1914年まで、ロシアでは何千人、いや何万人という数の革命家が苦難を味わっていたが、フランス革命のときボーマルシェ Caron de Beaumarchais・ボルテール Arouet Voltaire・デイドロー Denis Diderot たちは、ロシアの革命家ほどの苦難は味わっていなかった。それだけに、ロシア革命はフランス革命より悲劇的な革命であった。ロシアでは、大きい苦難を味わった者だけが政治の世界で勝利者となった。それも革命家個人の勝利ではなくて革命家集団の勝利、革命の後継者たちの勝利であった。

唯物論者のボルシェビキたちは、自分たちがキリストに似ていると言われたら驚いたことであろう。しかしロシアのインテリゲンチヤ(知識人)は、他者の苦難を背負っていたということではキリストとよく似ていた。デカブリストが流した涙も流刑者の苦悩も、テロリストの勇気も「ニヒリスト」の禁欲も、すべて無駄ではなかったのである。

ロシアで苦難を背負っていたのはプロレタリアートではなかった。自発的に殉教の道を選び、あえて禁欲の道を選んだインテリゲンチヤ(知識人)であった。

だからこそロシアでは、プロレタリアートが支配することはなかったのである。苦難に耐え、試練を乗り切った革命家たちがプロレタリアート

を支配することになった。1880年代にラブロフ Piotr Lavrov・カレーエフ Nikolai Kareev・ボロンツォフ Mikhail Vorontsovらがロシアは誰が支配すべきか議論したとき、彼らは修道士のように世俗的な欲望に無関心で禁欲を旨とする革命家を考えていたが、マルクス主義がこの種の宗教的議論を放棄させてしまった。彼らが宗教的な議論を放棄したのは、彼らが革命以外の問題に無関心になっていたこともあったが、それよりも革命家たちはヨーロッパのプロレタリアートを模倣することに熱心で、貴族的なものを極端に嫌っていたことが原因になっていた。

革命家たちがどれほど貴族嫌いを装っていても、ロシアを支配しているのがプロレタリアートでないことは一目瞭然であった。プロレタリアートはボルシェビキのように苦難を経験しておらず、ロシアを支配する資格に欠けていた。プロレタリアート出身であるだけではボルシェビキ党に加入することはできなかった。ボルシェビキ党に加入するには革命家でなければならなかった。第一次世界大戦以前に活躍していた革命的な精神の持ち主でなければならなかった。

## 第5節 インテリゲンチヤ（知識人）の例：レーニン

第一次世界大戦までロシアのインテリゲンチヤ（知識人）が払ってきた犠牲は、けっして無駄ではなかった。そのことをレーニンの例で示してみよう。証人はレーニン夫人のクルプスカヤである。

「革命家にとって玄関から裏口へ通り抜けできる大きなアパートは、秘密警察の尾行をまく大切な場所であった。レーニンは、そんなアパートがどこにあるかをよく知っていることで有名であった。またレーニンは化学物質にも精通していて、本にあぶり出し文字でメモを取ることもできた」。クルプスカヤがレーニンと知り合ったのは、1894年に『人民の友とは何か』という彼の論文がザンクト＝ペテルブルクの集会で読み上げられたときであった。

1896年にレーニンが投獄されたとき、「フィアンセ」のクルプスカヤも投獄されることになった。その後、レーニンはミヌシンスク、クルプスカヤはウファに流刑に処せられることになったが、ロシア正教の司祭が2人の結婚式を主宰していたおかげで、クルプスカヤはレーニンに同行してミヌシンスクに行くことが許された。

革命家になると価値観が逆転する例は、クルプスカヤの母親の例で確認することができる。クルプスカヤの母親は金持ちのブルジョワ出身であったが、自分の娘夫妻と一緒にミヌシンスクに行くと言ったのである。「彼女は信頼できる同志となった。警察の家宅捜索が予想されると非合法の書籍を隠してくれたし、投獄された同志に筆記用具を差し入れたり、同志から伝言を頼まれたりしていた。シベリアでも外国でも我々と一緒に、いつも家事を引き受けてくれた。我が家に入出入りする同志の面倒を見てくれたし、手紙を外套やベルトのなかに縫い付けてくれた。あぶり出し文字で手紙を書いてくれたのも彼女であった」。娘にロシア式ストーブの扱い方を教えたのも彼女だったし、娘が外国にいるときは料理の本を送ったりしていた。またレーニンがミヌシンスクからプスコフに移動させられたとき、レーニンが毛皮のコートを持っていなかったので自分のマフ（円筒状の毛皮製品で、手を中に入れて温めるのに使う）を持たせている。彼女のマフは裏地も毛皮でできていて、とても暖かかったそうである。

1905年まで、レーニン夫妻はミュンヘン・ロンドン・ジュネーブに住んでいたが、1905年にこっそりロシアに戻っている。1907年、レーニン夫妻はスイスに出国して、さらにパリに移っているが、最終的にガリツィア地方（当時はオーストリア領）のポロニンに落ち着いていた。そこならロシアに非合法文書を持ち込むのに便利だったし、「ロシア議会 Duma」に議席をもつ社会民主党とも連絡が取りやすかったからである。1914年にオーストリア警察は、レーニン夫妻をロシア政府のスパイと勘違いして彼をスイスに追放した。一文無しだったレーニン夫妻は、今度はクルプスカヤの叔母に助けられることになった。彼女はノボセルギエフスク Novo

Serhiyevsk で女学校の校長を 30 年間もやっていたが、貯金・銀製スプーン・アイコン・洋服・現金 4000 ルーブル・2000 ドル以上の金貨などを、妹であったクルプスカヤの母親に贈与してくれていた。現金はクラクフ(当時はオーストリア領)の銀行に預けられていたが、ウィーンの古物商がオーストリア政府による没収をなんとか防いでくれたので、これをレーニン夫妻は利用することができた。皮肉なことにノボセルギエフスクの年老いた女校長先生は、彼女の愛したものを全てを破壊しようとしていた革命に資金提供したおかげで、自分は食べるものにすら事欠くハメに陥ることになった。

レーニン夫人のクルプスカヤは熱心なキリスト教徒であった。ホームシックで健康を害していたが、それでもレーニンと一緒であった。彼女の遺体はロシア正教の教えに反して火葬に付され、レーニンたちは墓地で「クルプスカヤのまだ暖かい遺灰を入れた骨壺が届くまで」2 時間も待たされた。

クルプスカヤの献身ぶりも見事であったが、1917 年に実現した見返りの成果も予想を超えたものであった。

## 第 6 節 社会革命党の敗北

1825 年から 1905 年までロシアの革命は全て失敗していたが、社会革命党の革命も失敗していた。社会革命党の古くからの党員にボルシェビキ政権は容赦しなかったが、その容赦ない弾圧ぶりもロシア革命の大きな特徴の 1 つである。残念なことだが、それがなければロシア革命は世界的な影響力を持ち得なかったであろう。ボルシェビキ党と社会革命党の対立のおかげで、ロシア革命は世界経済が直面していた問題に対して 1 つの解答を示すことができた。

1881 年に初めて「人民のなかへ」入っていったグループは、「土地と自由」党を名乗っていた。この党名はアメリカの「自由な土地党 Free Soil Party」を思わせるが(その党是は Soil, free speech, free labor and free men), ロシアの「土

地と自由」党は非合法で、活動家は孤立した状態で活動するしかなかった。貧しい農村に出かけて行って「ムジーク」(ロシア農民)と接触した彼らは、そこで初めて孤立状態から解放された。彼らが「ムジーク」(ロシア農民)と親しくなったのは当然であった。彼らはヨーロッパで受けた教育のおかげで社会主義者になっており、ロシアには存在しない工場労働者の代わりに「ムジーク」(ロシア農民)を革命に動員しようとしていた。1861 年の農奴解放令は農奴に土地を与えておらず、実質的に農奴解放は実現していないと考えてた彼らは、土地を農奴に与えることを要求した。それは「ムジーク」(ロシア農民)たちの要求でもあった。「ムジーク」(ロシア農民)こそが社会革命党の支持基盤であった。彼らはロシアの農村を変えるため、「ムジーク」(ロシア農民)の本能に訴えたのである。1918 年まで社会革命党は人気があり、党員の数も多かったことを考えると、なぜ彼らがロシアを統治することに成らなかったのか不思議に思えてならない。ロシアの人口の 85% を占めていた「ムジーク」(ロシア農民)のためにすべてを捧げ、「ムジーク」(ロシア農民)を代表していた彼らが、なぜロシアを統治することができなかったのか。

そこには、「歴史の鉄則 iron laws of history」が存在していた。この本を読んだ読者なら、それが何なのか判るはずである。社会革命党は失敗すべくして失敗したのである。

ここでは、つぎのことだけを指摘するに止めたい。つまり社会革命党は、「ムジーク」(ロシア農民)と同じ間違った考え方に支配されていて、当時の歴史状況に対する判断を誤ったのである。

社会革命党と「ムジーク」(ロシア農民)は、ロシアの農村を変えさえすればロシアも変わると考えていたが、それは革命のやり方として間違っていた。彼らは農村を理想化し過ぎていたのである。理想主義者がよくやる間違いである。人間のことを大切に考えるあまり、家族・農村・国などを理想化し過ぎてしまうのである。人間ひとり 1 人を大切に考えるあまり、ロシア全体の問題が視野から消えてしまったのである。人間ひとり 1 人、

農村ひとつ1つを大切に考えていては、政治は行えない。当時のロシアで問題だったのは、広大な大陸国家ロシアを1つに纏める方法であった。

ロシアでは木材を輸出するのも小麦を輸出するのも、領土拡張と同様に中央政府の仕事であった。ところが社会革命党は「ムジーク」（ロシア農民）の苦悩しか念頭になく、「ムジーク」（ロシア農民）に土地を与えることしか考えていなかった。たしかに人間的な配慮であったが、肝心のロシアが抱えていた基本的な問題に彼らは気づいていなかった。「歴史の鉄則」を無視しては、資本制がロシアの農村に与える影響は見えて来ない。フランスの40倍以上もの国土を持つ広大なロシアを救うためには、これを統治するための統治機構が必要であった。機能不全の統治機構を根本から改変するためには、社会革命党のセンチメンタリズムでは不十分であった。

## 第7節 ボルシェビキ党の勝利

ボルシェビキ党はセンチメンタリズムと無縁であった。気高い理想とは丸で無縁であった。歴史の進歩に遅れを取らないためにはどうすべきか、これだけが彼らの関心事であった。彼らに言わせれば、「ムジーク」（ロシア農民）の農村に未来はなかった。目指すべきはヨーロッパの革命と同じ資本制経済の排除であった。まだ資本制経済の存在しないロシアと、すでに資本制経済の欠陥に苦しめられていたヨーロッパがなすべきことが、1871年のパリコミュンで示されていると彼らは考えていた。パリコミュンの担い手はプロレタリアートであった。彼らはパリ郊外に住み、近代的な工場で働く労働者であった。農地から切り離され、機械の一部と化した労働者であった。彼らはキリスト教からも切り離されていた。

ボルシェビキたちは（彼らは正真正銘のマルクス主義者であった）、ロシアに資本制経済が存在しないことを正直に認めていた。そこで、やがて自分たちが破壊することになる資本制経済をまず登場させることが必要だと考えていた。社会主義経済は、そのあとで登場してくるのである。壮大だが

奇妙な理屈であった。「我々は資本制経済を敵視していた。ロシアでは資本制経済は始まったばかりなので、その発展を急がせる必要があった。我々は資本制経済を敵視していたが、それ無しでは社会主義経済は実現できないからである。殺すためには、まず生まれてもらう必要があった」。

この奇妙な理屈は、当時のロシアのインテリゲンチヤ（知識人）が直面していたジレンマの産物であった。しかもジレンマに直面していたのは、ヨーロッパで教育を受けたインテリゲンチヤ（知識人）であった。彼らは、ヨーロッパの問題を自分の問題だと考えていた。また彼らは、ロシアがヨーロッパでないことに失望したヨーロッパ人でもあった。1054年の教会分裂以来（ローマのカトリック教会とロシア教会の出自であるコンスタンチノーブルのビザンツ教会が、教義をめぐる対立でお互いを破門する）、ロシアはヨーロッパの歴史と関わり合いを持つことがなかった。ふたたびロシアがヨーロッパと相見えることになるのは、18世紀になってからである。18世紀の啓蒙思想と、それが切っ掛けで始まったフランス革命、さらにはフランス革命の申し子であるナポレオンが、はるばるモスクワまで遠征して来たときのことであった。ヨーロッパで産業革命が始まり（それは資本制経済の結果であった）、それがロシアに鉄道や工場を齎し、ロシアの農村にあった産業を破壊してしまったことを彼らはよく知っていた。

資本制経済は「自国民中心主義 nationalism」を齎すと彼らは考えた。資本家と「自国民中心主義」が密接な関係にあると考えたのである。ロシアでは、資本制経済も「自国民中心主義」も負の側面しか見せていなかった。

ところがフランスにとって、19世紀の「自国民中心主義」は当り前のことであった。何世紀もかけて磨き上げられたフランス語は素晴らしいフランス文学を生み出したし、華麗なパリはフランス全土を代表する首都であった。

ところが「ヨーロッパへの窓」に過ぎなかったザンクト＝ペテルブルクは、ロシア全土を代表する首都ではなかった。ヨーロッパの文物を輸入する港に過ぎなかった。それにロシアが西部に領有していたポーランドや

バルト地方は、ロシアと違って国民的な纏まりを有していた。ポーランドの繊維産業の都市ウッジのロシア人教師は、ポーランド人にロシア人になることが当然だと思わせることはできなかったし、リトアニアの首都ビルニウスでリトアニア人にロシア化が当然だと納得させることもできなかった。またラトビアの首都リガに住むドイツ人をロシア人に変えることもできなかった。そんなことを考えること自体が馬鹿げている。なぜなら、19世紀の民主主義体制を前提にした「自国民中心主義」は、経済的にも歴史的にも国民的な纏まりがなければ絵に描いた餅に過ぎないからである。

ところが1880年頃になると（この年は、目に見えない「ニヒリスト」の革命運動が地下水脈として流れ始めたときでもある）、ロシア政府はヨーロッパの「自国民中心主義」を真似て西部地域のロシア化を開始したのである。1878年から1917年までは、ロシア政府がオーストリアやバルカン地方を領有してロシア化しようとした時期であった。第一次世界大戦でロシア政府が犯した「戦争犯罪 war-guilt」がこのロシア化政策であった。

ボルシェビキ党は、このロシア政府の失敗を教訓にしたのである。彼らは「自国民中心主義」と逆のことを目指すことにした。「自国民中心主義」が齎した結果に失望していたし、ヨーロッパを追い越すことにも情熱を燃やしていたからである。ロシア革命が何であったのかを理解するためには、このことを忘れるべきでない。

「ヨーロッパ人」であったボルシェビキたちは「ムジーク」（ロシア農民）と妥協することを拒否し、ヨーロッパ的な基準をロシアに当て嵌めようとした。また「失望したヨーロッパ人」であったボルシェビキたちは、まだヨーロッパで実現していないパリコミュン（1871年）の理想をロシアで実現することにした。ヨーロッパ人に代わってヨーロッパの問題を解決しようとしたのである。彼らが目指したモデルはパリコミュンであった。レーニンがパリコミュンをつねに念頭に置いていたことは有名である。1917年にやるべきことを決めるのに、レーニンは1871年の出来事を参考にしていた。モスクワの革命政権がコミュン政府の存続日数を越えたと

き、彼はつぎのように言ったそうである。「これでやるべきことはやった。我々は誇りに思うべきである」。

子供じみてはいると言えば子供じみているが、ヨーロッパを基準に考えることに慣れている者にとって、それは当然の結論であった。ロシア人であったにも拘わらず、彼らはヨーロッパのマルクス主義者たろうとしたのである。ヨーロッパを出し抜くためには、そうするしかなかった。

自分の活動結果が将来どうなるか、当の本人には判らないのが世の常である。19世紀最大の叙事詩『戦争と平和』でトルストイは、当時の英雄崇拜を皮肉ってロシア人にこんな警告を発していた。「将来が見通せるなどと自惚れるべきではない。人間がやったことの歴史的な意味など、人間に判るはずがない。そんなことを判ろうとしても無駄である」。

しかしマルクス主義者であったボルシェビキたちは、ロシアの将来が見通せると考えていた。ヨーロッパから持ち帰った持参金を、なんとか処女ロシアに与えたかったのである（ヨーロッパ産のマルクス主義をまずロシアで実現してみたかった）。

マルクス主義の特徴は、「歴史に法則があること *consciousness of historical hour*」である。したがってロシア人が成し遂げたことを評価するためには、マルクス主義の何たるかも知っておく必要がある。それにマルクス主義は、独自の革命理論を持っていた。

マルクス主義によれば、歴史は階級闘争と革命の産物であった。ロシア革命によって開始された世界革命は、革命の法則に従って展開される必要があった。ロシア革命は革命の法則が適用された一例に過ぎなかった。マルクス主義理論を身に付けさえすれば、歴史を操作できるのである。

ホラチウス *Quintus Horatius* は、こんなことを言っていた。「人間はすべてのことを知る訳にはいかない *Nec scire fas est omnia*」。しかし今では、ベーコン *Roger Bacon* の「知識は力なり *Scientia est potentia*」が信じられている。

私がこの本を書いたのは、この「知識は力なり」が世界の社会主義者を誤った方向に導いたことを示すためである。自然が相手なら「知識も力に

なりうる」が、人間が相手ではそうはいかない。ボイラーの内部で水蒸気がどうなっているか人間は知っており、だからこそ水蒸気を人間のために利用することができる。同じことが電気・石油・石炭などについても言える。しかし隣人がゴロツキと知ったからといって、それで安全が保障されるわけではない。何も知らない人たちに囲まれていると、知ってしまったことで無力感を味わうことになりかねない。機械を発明したからといって、機械に関する知識を使って周囲の人間に影響力を振るえるわけではない。知識とは言っても、知識の種類が問題である。人間が自然を支配できるのは、組織を作るのに必要な知識を持っているからである。

組織を作ることによって自然を支配することになった「人間集団 society」は、つぎに知識を持った個人によって支配されることになった。このマルクス主義の考え方は世界にとって重要な意味を持つ。もしこの考え方が世界に広まれば、すべての国で個人による支配が実現することになる。マルクス主義は自然の何たるかを説明するだけでなく、宇宙のこと、「人間集団」のことまで説明できることになっており、混沌とした自然現象を知識によって支配するように、「人間集団」も知識によって支配しようとする。このとき、禁欲をみずからに課した者は特別な存在になってくる。人間の情熱とか欲得を使って「人間集団」を支配する場合、支配する者は情熱とか欲得よくとくから超然あきらとしている必要があるからである。「多くの人間を支配したいと望む者は、多くのことを諦めなければならない」(ゲーテ Johan Wolfgang von Goethe)。

ロシアのインテリゲンチヤ(知識人)は「ニヒリズム」を掲げ、みずからの家族・国民・階級と無縁な場に自分の身を置いていたが、そうすることで「人間集団」を自然と同じように支配できると考えるようになった。善・悪の判断を停止してしまったのである。

## 第8節 ロシア革命で使われていた言葉の特徴

ロシア革命で使われていた言葉は、自然科学用語であった。もし辞典を作るなら、こんなものになったことであろう。多いもの＝大衆、よいもの＝ボルシェビキ党、社会＝協同組合など。人間の利害関係は所属する階級によって決まることになっていたし、階級の様子は統計の数字で示されていた。人間の歴史も数字で表わされていたのである。

彼らの言葉の使い方は前例のないものであった。どんな革命でも、人々を新しい方向に向かわせるために前例のない言葉の使い方をするものである。だれもが知っている言い回しや使い古された言い回し、日常的な会話用語で人間を熱狂させることは不可能である。そんなものは、右から左へと聞き流されるだけである。革命家の演説は新しい言葉を使わなければならない。新しい言葉だけが人々の注意を引くからである。

「耳ある者は聴くべし」(マタイによる福音書 11:15)とは聖書という言葉だが、これはあくまでも個人が相手の場合に限られる。政党が相手にするのは大衆であって、政党は大衆受けする言葉を使う必要がある。社会主義者の言葉は聖書という言葉とまるで違っていた。祈りの言葉と違って、聞きなれた母国語や伝統的な表現を使ったりしなかった。慣れ親しんだ日常用語を使うことはなかった。非日常的な言葉を使うことで、慣れ親しんだ日常生活から人々を切り離すのである。ここ50年から100年の間に起きた革命では、つねに非日常的な言葉が使われてきた。ときには保守主義者と思われていた政治家までが、非日常的な言葉を使っていた。その場合に特徴的だったのが、社会現象をまるで自然現象のように考えていたことである。

現代世界は、数字・図表・グラフなどで溢れ返っている。それが人々を説得する有効な方法だからである。都市・国家・帝国では、統計数字を根拠に統治がなされている。しかしエジプトのファラオやローマ皇帝アウグストゥス Augustus のように、生身のユダヤ人を数字と考えたダビデは神から罰を受けることになった。

大衆を相手にする場合、高尚な詩歌を引用して見せても相手にされない。演説でも書籍でも、まず日時と数字で話を始めることが大切である。内容がよく判らなくても、判ったつもりになれるからである。数字には不思議な魔力が潜んでいる。時代によって魔力を発揮するモノは違っているが、現代は数字が魔力を発揮する時代である。高尚な気持ちや良心が嫌いな大衆は、やたらと数字を好む。賃金や税金・軍艦や武器・失業者や学生など何でもよい。必要に応じて政治家は、我々の前に様々な数字を並べてみせる。大衆はご立派な説教には反応しないが、数字には鋭く反応する。

それに数字は無味乾燥である。売春・犯罪・スラム街などについて触れるのが不謹慎とされているのは、我々が「裏の世界 reverse of the medal」を恥じているからである。隠語を使って表現するのも、そのためである。性欲に関わる体の部位はタブーであった。イギリスでは、つい最近まで股・性器・膀胱などは存在しないことになっていた。1852年（ビクトリア朝の最盛期）に出版された『英語辞典 International Thesaurus of English Words and Phrases』で編者のロジェー Peter Roget は、言葉を6つのカテゴリーに分類していた。「時空 time and space」・「無機物 inorganic matter」・「有機物 organic matter」・「五感 five senses」・「知性 intellect」・「意志と感情 volition and affections」である。ところが人体は独自のカテゴリーに属させず、ほかのカテゴリーやその下位項目に散在させていた。糞便は「清潔さ」の項目に登場してくるし、性器は「生産」の項目に登場してくる。また、胃は「貯蔵庫 receptacle」の項目に登場してくる。

ボルシェビキたちが挙げる数字は、とくに無味乾燥であった。彼らは数字の中身について、まるで無関心であった。娼婦も数字に過ぎず、糞便も肥料にしてしまえば問題ないと考えていた。数字にしてしまえば「裏の世界 hinterland」も問題にならないのである。ロシア革命では、「楽しさ」・「美しさ」・「真実」・「善」などは重視されなかった。普段は目に付かない人間の暗い面が重視され、明るい面は軽視された。愛情や情熱が軽視され、冷酷さや無関心が奨励された。「衣食足って礼節を知る Erst kommt das Fressen,

dann kommt die Moral」である（プレヒト『三文オペラ』岩波文庫、116ページ）。人間が持っている無関心・不審・強欲を支配下に置きさえすれば、その人間を支配することなど簡単だと考えられていた。人間の善意に訴えても効果はないが、数字なら人間の動物的な側面に効率よくアピールできるのである。何も持たない「プロレタリアート」は疑い深く、素敵な内容の演説を聞くと騙されているのではないかと、利用されているのではないかと考える。「プロレタリアート」は理想とは縁がなく、判るのはビジネスの話だけであった。信じられるのは数えられるモノだけで、まず鋼鉄や石炭の年間生産量、つぎに輸入量・賃金高・輸出货量・増産量・資本蓄積高・資産償却高が挙げられる。そして最後に世界経済が登場し、世界大戦・世界革命・世界秩序が登場してくるのである。

脳と胃が歴史を動かしているのである。ところがボルシェビキ政権は革命後の人口を推定するのに、第一次世界大戦前の人口をそのまま当て嵌めていた。その結果、工場労働者が戦前より優遇されることになった。農民が8000万人いたのに対して工場労働者は800万人しかいなかったが、そのことは無視された。革命で死んだ人間の数の方が、第一次世界大戦で死んだ人間の数より多かったことも無視された。支配層の数が戦前の半分以下に減少していたことも無視された。しかし注意深い人間なら、この数字のトリックを見破るのは簡単である。

ボルシェビキ政権は数字によるトリックを成功させたが、政治の世界で数字のトリックが使われるのはロシアに限られたことではない。しかしロシアでは、ボルシェビキ政権が独裁的な権力を持っていた。彼らだけが数字を利用することができたのである。物事を大きさとか長さで表現している限り、人間は数としてしか扱われない。ボルシェビキ政権は建築物に四角形を好み曲線を嫌ったが、それはボルシェビキ政権が数字大好き人間によって支配されていたからである。

ところが1934年にスターリンは、この種の建築物が失敗だったことを認めた。建築物に限らず、絵画・服飾など全てにバロック調のデザインを

導入することを彼は認めたのである。おかげでロシアは数字の呪縛<sup>じゅばく</sup>から解放されることになった。そのときのスローガンは、「ロシアは正道を歩む Russia Goes Main Street」であった。プロレタリアートによる言葉の支配が終わり、感情に訴える演説が登場してくることになった。1934年にゴークキー Maxim Gorky は、文学者会議でロシア文学の古典を復権させている。ロシア革命は「復古期 period of Restoration」を迎えたのである。かつてスターリンの同志であった革命家たちがつぎつぎと粛清され始めたのも、その現れであった。ボルシェビキ政権はツァーリズムに復帰し始めたのである(ただし資本制経済ぬき)。ピョートル大帝がロシア映画に登場するようになったことも、トロツキーに代表されるような革命家の時代が終わったことを示していた。

## 第9節 マルクス主義の功罪

ロシアには、歪<sup>ゆが</sup>められた形のヨーロッパ文化が登場してきた。悪意に満ちた風刺・植民地で行なわれていたような搾取・空虚な「自国民中心主義 nationalism」などである。さらに、それが暴力<sup>ともな</sup>を伴って登場してきた。歪められた形のヨーロッパ文化のなかには、マルクス主義も含まれていた。マルクス主義は既存のヨーロッパ文化に対する強烈な抗議であった。ヨーロッパ人が誇りにしていた自由は、既存の秩序のなかで深刻な問題を抱えていた。マルクスの抗議は、この問題に対する最後の抗議であった。マルクスにそれができたのは、彼がまさにヨーロッパの中心部で育ったからである(産業社会学者のルプレ Frédéric Le Playによれば、ヨーロッパの中心部とはセーヌ Seine 川とウエーゼル Weser 川に挟まれた地域のことである)。そこは、ヨーロッパでもっとも先進的な工業地帯であった。

マルクスが生まれたのは1819年で、ナポレオン法典が施行されていたライン川沿いの地域であった。彼の家族は、フランス革命のお陰<sup>かげ</sup>で解放されたユダヤ人の一家であった。彼がよく知っていたのは工業が盛んな大

都市だけであった(ラインラント地方・ベルリン・ブラッセル・パリ・ロンドン・ウエストファリア地方)。彼はボン大学やベルリン大学で勉強していたが、べつにドイツ哲学に興味があった訳ではなかった。既存の秩序を擁護<sup>りゆうく</sup>するのに熱心であったドイツの理想主義哲学を、彼は「シジフォスの<sup>ろふく</sup>労苦 Sisyphian work」(無駄な努力)と嘲笑していた。ナポレオン戦争は、フランス革命を終わらせないための試みだと彼は考えた。世界中に自由の旗印を広めるためにフランス革命は終わらせてはならないのである。

そこから、マルクス主義の最初の基本テーゼが出てくる。つまり世界を本当に変えるためには、革命は「世界的規模であること World-Wide」が必要なのである。革命は「世界革命 total revolution」でなければならないのである。また、フランス革命の普遍的な理念を受け入れた者だけが歴史に参加する資格を有するのである。いかなる科学も普遍的でなければ科学の名に値<sup>あた</sup>しない。

ただしファシストは、この「普遍性 totality」の理念を悪用した。本来の意味を変えてしまったのである。国土を神聖視して世界全体を視野<sup>おさ</sup>めることをせず、一国内に「普遍的秩序 totalitarian order」を確立しようとした。人間を国別に分けて考えている限り、人間は人間本来の姿を取り戻すことはできない。それはヨーロッパ人の場合も同じである。国の違いを超えた関係を築き上げない限り、ヨーロッパ人は人間でなくなる。イタリア人・ロシア人・ドイツ人であることに拘<sup>こだ</sup>まっている限り、彼らは人間とは言えない。人間は国の違いを超えて手を携<sup>たず</sup>えようとするが、それは人間にもともと備わっている自然な感情なのである。

マルクス主義が持っている普遍主義的な考え方は、その意味で重要である。たとえば、19世紀を毒した「自国民中心主義」をマルクス主義は批判した。アメリカの南北戦争の結果アメリカで奴隷解放が実現したが、同じ頃<sup>もつ</sup>に実現したロシアの農奴解放についてアメリカで言及されることはない。資本制経済が確立しつつあった国とロシアを比較するなど以ての外<sup>ほか</sup>という訳<sup>わけ</sup>である。1854年に国際万博が開催されたロンドンの「水晶宮殿

Crystal Palace」は、フランス革命が実現した普遍的なブルジョア思想の勝利とは考えられず、あくまでもイギリスの繁栄を象徴するものだと考えられた。これをマルクス主義は批判したのである。

ヘーゲルに言わせれば、国王が死んだとか戦争に負けたなどといった史実はどうでもよいことであった。それは個人的な思い出に過ぎないのである。子供が祖父母にキスして貰ったことを懐かしがるようなものである。それは大人になるために必要なことかもしれないが、あくまでも個人的な問題に過ぎない。人間として覚えていなければならないのは、もっと大切なことである。人間にとって大切なことを実現した出来事である。

大切な問題がまず提起され、ついで議論され、そして普遍的な原則が解決策として登場してくる。たとえば、フランス革命が実現した平等の原則がそれである。平等の原則は、「ムジーク」(ロシア農民)・ユダヤ人・黒人・白人・男・女の違いに関わりなく、すべての人間に適用される原則であった。このフランス革命の成果を我々は失うことになるかもしれない。平等の原則が放棄されてしまうのである。そうなれば、フランス革命は無意味だったことになる。生きている人間にとって重要なことは、その原則が全ての人間に適用されるか否かということである。無数にある史実のなかで我々にとって重要なのは、全ての人間に適用される原則を生み出した出来事だけである。その他の出来事は興味を引くかもしれないが、あまり重要なことではない。無駄な試み・先駆者・大騒ぎも、全ての人間に適用される原則を生み出すか否かで評価が決まってくる。全ての人間に適用される原則こそが伝統主義を打破できるのである。マルクス主義は、この原則主義を歴史ある哲学から引き継いできている。

マルクス主義の2つ目の基本テーゼは、ニーチェ Friedrich Nietzsche のいう「永劫回帰 permanent recurrence of the same」である。マルクス主義の経済用語では、これを「再生産 reproduction」と呼んでいる。「我々は商品を生産する。つまり資本を活用して収入を得る。これが生産 production である。しかし再生産 reproduction の意味はもっと広い。金鉱から金が取れなくなっ

たら、我々は金に代わるものを見つけてこなければならなくなる」。しかしマルクスとエンゲルスは、この言葉をもっと広い意味で使っていた。2人は「再生産」という言葉を経済的な意味以外にも使っていたが、このことに「俗流マルクス主義者 vulgar Marxists」は気づいていない。私に言わせれば資本の蓄積も「再生産」の一種であり、政府も「再生産」される。こうなるとマルクスが考えていたことと関係なくなるが、たとえ立派な大統領や立派な国王がいても、いつかは憲法も「作り変える remake」(つまり再生産する)が必要になる。同じ王朝が長く続くと、王朝は腐敗して革命が起きる。そして新しい王朝が登場して来ることになる。また2大政党制が機能不全に陥ると、やはり革命が起きて新しい制度が登場し、新しいタイプの大統領が登場してくることになる。

人間は1人で自由に物事を決めている訳ではない。環境とか他者からの影響を受ける。ふつう大統領が代わったり国王が代わったりすると人は喜ぶものだが、その際に大統領の選び方とか王朝の継続期間まで考慮に入れている訳ではない。また国王や大統領の性格が、育て方や育った場所によっても違ってくることまで考慮に入れている訳ではない。こうした人間の至らなさに気づかせてくれるのが革命である。革命は、理想とされる社会の実現を目指して起きるのだが、戦争はその点で大きく違っている。戦争では、せいぜい勝った側が負けた側の政治制度を変えることくらいしかできないが、革命は新しい政治制度を創り出すのである。革命とは、社会のあり方を根底から変えてしまうような創造的な運動なのである。もちろん、メキシコで120回も起きているような「革命」は、ここでいう革命ではない。ここでいう革命とは、人間社会のあり方を「根底から変えてしまうような totalitarian」革命なのである。

マルクス主義の3つ目の基本テーゼは、以上の2つの基本テーゼのように普遍的でも革命的でもなく、また人を納得させるようなものでもない。ボルシェビキに言わせると、マルクスはプロレタリアートの苦しみをよく理解しており、またプロレタリアートを苦しみから解放する方法を一番よ

く知っていたことになっている。

しかし、この問題を論じていたのはマルクスだけではなかった。マルクスには多くのライバルがいた。マルクスによれば、資本制経済では資本家は労働者が生み出した価値をすべて労働者に渡さず、その一部を自分のポケットに入れてしまう。これを彼は「搾取 exploitation」と呼んでいたが、それは資本家が道義的に許されないことをしているという意味を込めたかったからであった。資本家は、仲間であるはずの労働者から不当な利益を得ているとマルクスは考えたのである。

ここでマルクスの言い分を聞いてみることにしよう。彼は細かな数字を挙げて自分の言い分が正しいことを証明しようとしている。彼もボルシェビキや近代の社会科学のように、数字によるトリックで我々を納得させようとする。

ここ 100 年のあいだ近代的な工場では、賃金と価格は生産する商品ごとに決められていた。たとえば、1000 足の絹のストッキングが発注されたらと仮定しよう。この 1000 足のストッキングに対して儲けをいくにするかをまず決め、さらに奇妙な方法でコスト計算がされていた。まず労働者の時給を \$0.4 と仮定して、つぎに 1 足のストッキングを生産するのに必要な労働時間を 30 分だと仮定する。マルクスが生きていた頃は、労働者に支払われる賃金だけが「生産的な賃金 productive wage」と考えられ、労働者以外の社長・事務員・掃除婦・用務員・会計係などの賃金は「生産的な賃金」の 1 倍・2 倍・3 倍といった形で大雑把に決められていた。地代や光熱費なども同様であった。

非生産的な賃金 = ホワイトカラー + 利息 + 税金 + 光熱費など = 生産的な賃金 × 2.5 = \$0.5

材料費 = \$0.4

生産的な賃金 = \$0.2

ストッキング 1 足を生産するのに必要な経費 = \$1.1

こうして肉体労働が重視されることになった。ホワイトカラーの仕事は、2 次的な意味しかないと考えられたのである。間接的な経費は、まるで働かない雄のミツバチのように無駄なものと考えられ、肉体労働者だけが働き蜂のように生産に貢献していると考えられていた。社会を支えるのは肉体労働者だけなのである。そこで間接的な経費の削減こそが社会の進歩に貢献すると考えられた。

資本家は発注を待つだけでなく、まず商品を生産して、それから市場を開拓することもあった。その場合はストッキング 1 足に \$1.5 という値段を付けることもできる。そのことをマルクスは、「資本家が労働者を騙した」と考えたのである。たとえ最初に \$1.1 の値段を付けて労働者には \$0.2 しか払わないと決めていても、もっと高い値段で売れるなら労働者にはもっと高い賃金を払えるはずである。

何の根拠もなく時給や値段を決めてしまうこと自体、問題である。カウンターの反対側にて資本家のやり方を監視している共産主義者が、労働者の賃金を安くしようとする資本家を批判するのはよいとしても、彼らは賃金の決め方を簡単に考え過ぎている。実際には事態はもっと複雑である。資本家が 1 つの商品しか作ってないことなど稀で、普通は複数の商品を生産している。ある商品は高く売れるかもしれないし、ある商品は資本家が決めた値段で売れるかもしれないが、損をしてでも売らざるを得ない場合もありうる。

部門 1：予定していた値段の 2 倍の値段で売れる商品を生産

部門 2：予定していた値段より 10% 高く売れる商品を生産

部門 3：予定していた値段で売れる商品を生産

部門 4：予定していた値段より 10% 安くしか売れない商品を生産

部門 5：予定していた値段より 25% 安くしか売れない商品を生産

部門 1 と部門 2 の労働者は賃金が低すぎることになるかもしれないが、

部門4と部門5の労働者は賃金が高すぎることになる。

マルクスは、彼が生きていた頃の資本制経済が破壊的な効果を社会に齎していたことを証明するために数字のトリックを使っているが、資本制経済は必ずしも低賃金を宿命としているわけではない。場合によって労働者の賃金は低すぎたり高すぎたりするのである。利益における労働者の取り分が社会問題となる訳でもない。資本家が挙げる利益は搾取とは無関係である。

革命後のロシアで搾取が問題にされたこともないし、ローザ＝ルクセンブルク（マルクスの後継者と呼ぶ唯一の人物）の晩年の著作でも、搾取が問題にされたことはない。資本家と労働者の階級闘争なるものは、夫婦のあいだで展開される閨の争いや若者と老人のあいだで展開される世代間闘争、あるいは隣人どうしで展開される境界線闘争と同じで、存在する場合もあれば存在しない場合もある。夫が妻を利用しているだけの不幸な夫婦生活もあれば、妻が夫を利用しているだけの不幸な夫婦生活もあるが、幸せ一杯の夫婦生活も存在する。階級闘争の場合も資本家が労働者を搾取している場合もあれば、労働者が資本家を搾取している場合もある。さらには1850～82年のイギリスのように、労働者と資本家の関係が平和でマルクスをガッカリさせたような場合もある。1846～1914年のイギリスの労働者は、資本家と一緒にあって世界を搾取していた。また1918～1923年のドイツでは、労働者は「雇い主 employer」と一緒にあって「資産家 capital-owning class」を搾取していた。この時ドイツの労働者は、生活水準を上げるか現状維持を満喫していたのである。ハイパーインフレで資産はゼロ近くにまで目減りしたが、労働者の賃金は目減りしなかったからである。

革命後のロシアでは、労働者が農民を搾取していた。何百万人もの労働者の賃金は革命後、一貫して払い過ぎの状態が続いており、1933年になってやっと事態を改善する努力が始まった。革命後のロシアで採用された有利な賃金制度のおかげで、労働者以外のすべてのロシア人は労働者に

搾取されることになった。1914年を基準に比較すると、農民の生活水準は70%低下したが、工場労働者の生活水準は120%上昇していた。

無能な計画立案者は暫定的であったはずの賃金を固定化してしまい、一時的には労働者を喜ばせたが、最後はどうにもならない状態を招くことになった。資本制経済で問題になるのは人間の再生産をどうするかということであって、生産的な労働に支払われる賃金の額などではない。革命後のロシアは工業化が進んだ世界との競争を強いられるなか、本当は何が問題なのか労働組合やマルクス主義者、それに資本家にも教えることができたはずである。商品生産をめぐる課題など、いまでは問題にならないくらい改善されている。大切なのは人間の再生産をどうするかということである。

## 第10節 資本制経済が抱えている問題

マルクスが提起した大切な問題は、2つの提題に絞ることができる。この2つの提題はマルクスが言っていたことと矛盾するかもしれないが、この提題を使えばマルクスを困らせていた問題もうまく説明できるし、なぜマルクスがマルクス特有の説明方法を選んだのか、その理由もうまく説明できる。また、この2つの提題はマルクスが持っていた偏見と無縁であって、マルクスが矛盾と呼んでいるものが実は矛盾でも何でもないことがここから判る。

最初の提題は、19世紀が飛躍的に生産性を上げた世紀だということである。我々の祖父たちには思いも寄らなかった膨大な量の商品が、信じられないような低価格で我々に提供されるようになった。それを可能にしたのは市場経済である。自動車の製造工場は毎年、生産数を増やして新しい市場に自動車を供給するようになった。製造台数を倍増させればコストも下がり、利益が増えて一層の低価格化が可能になった。

ここ150年間、世界中で新しい市場の開拓が進められてきた。資本制経済が諸悪の根源として攻撃されてきたが、その一方で市場の開拓が進めら

れていたのである。歴史の教科書にこんな記述がある。「この150年間は通貨を巡る混乱が続いてきたが、これからの150年間は価格の激しい変動で混乱が起きることになるだろう。そのおかげで無数の人間が富を築いたり破産を経験したりすることになるが、それは経済法則に関する知識が少しでもあれば防げる現象である。それは神の意志などではない。ふつう罪に対する罰であるとか、人間に善行を促す見えない力の所為だと考えられているが、価格の変動で起きる混乱は無知が齎すものである。バクテリアが発見される以前に医学が置かれていた状況とよく似ている」。市場が拡大したり縮小したりすれば価格が変動するのは当然であって、問題はそんなことではない。市場の拡大や縮小で経営者は利益を上げたり損失を被ったりするが、そのとき経営者は労働者のことなど念頭にない。新しい市場を開拓するためなら、自国の政治・道義・教育の問題など無視することが許されると経営者は考えている。ところが1250年に都市が建設されたときは（ヨーロッパの都市は計画的に建設されており、自然発生的・無計画的に登場した都市はない）、都市建設の責任者は職人への配慮を忘れなかった。男女が夫婦になったときのように、お互いは一蓮托生だと信じられていたからである。このように血縁関係がなくても、人間がお互いに強い絆で結ばれていた時代を、我々は封建制の時代とか家父長制の時代と呼んでいる。

資本制社会が登場してくるまでは、経営者と労働者の関係は荘園内の領主と農民の関係に似ていた。ところが資本制社会になると、経営者は労働者を傭兵のように考えるようになった。資本制経済になって労働者の賃金は飛躍的に上昇しており、資本制経済で賃金が下がったわけではない。搾取は賃金を下げる形で実現したのではなかった。労働者の賃金は、17世紀の傭兵よりも高くなっていった。労働者の賃金も傭兵の賃金と同じで、戦いで勝利できたか否か（作った商品が売れたかどうか）、どれほどの戦利品が獲得できたか（どれほど儲かったか）に掛かっていた。

近代的な工場の経営者と労働者の関係は、「搾取する」・「搾取される」という関係ではなかった。労働の成果が奪われるような関係ではなかった

のである。経営者と労働者の関係が決められた時間内に限定されただけであって、それで生産性が上がったり労働の成果が上がったりした訳ではなかった。労働の成果が奪われるようなこともなく、ただ賃金が時給の形で支払われるようになっただけである。

資本制経済の新しさは、時給が原則とされたことである。人間の生活習慣にあわせて労働が行われていた資本制以前の経済のもとでは、日給制しか存在しなかった。経営者は、日照時間・食事時間・睡眠時間・家族と過ごす時間・休息の時間を全部あわせて24時間しかないことを念頭に、労働者を働かせていた。掃除婦を雇うということは、掃除婦の生涯時間から丸1日を奪うことを意味した。

ところがカールツァイス＝イエナ Karl Zeiss Jena（ドイツが東西に分割されたとき、名門カメラ会社カールツァイスの一部が東ドイツに残った）の労働者と会社の関係は、掃除婦とその雇い主の関係と違ったものになっていた。会社は労働者の一日を買う訳ではない。労働者が会社に24年間いたと言っても、それは1日8時間、1週48時間、1年2400時間、24年×2400時間、働いていたという意味であって、文字どおり24年間会社に拘束されていた訳ではない。

近代の労働者は近代以前の労働者（たとえば、さきほどの掃除婦）と全く違った時間の過ごし方をしていた。賃金を受け取るために売った時間は、もはや労働者のものではない。それは経営者の経営計画に書き込まれたデータの1つに過ぎない。経営者は商品を生産するために生産計画を立てるが、そのとき人間的な要素は計算に入れてはならないのである。経営者の労働時間も、生産計画に組み込まれた抽象的な時間に過ぎなかった。すべては投資した資本に対して支払わなければならない利息の大きさに関係してくるのである。国によっては2月の日数を28日としていても、利息は30日で計算している所もあった。資本制経済の登場をよく思っていなかった時代遅れの人間は、資本制経済が登場してくるまでの時間のことを「神が創造した時間 God's time」と呼んでいたが、資本制経済下での時間は「人間

が作り出した時間 manufactured time」であった。

工場の生産計画書では、労働者も水や電気と同じ扱いであった。生産計画書には、水は1日につき3時間、電気は6時間、労働者は8時間から10時間だけ使用する予定だと書かれている。いずれも経費の問題として登場してくるだけである。従って工場で働く労働者は、「労働力 labor-force」であって人間ではない。労働者は、工場の門を潜った途端に自分の生活から切り離される。人間ではなくなり、単なる「労働力」となるのである。

資本制経済のもとで行われる搾取とは、つまりこのことなのである。マルクスはそのことを感じ取っていたが、明確に意識することはなかった。

どの工場の労働者も、まるで鉱山で働く労働者のように交代制で働くようになった。交代要員は部品の交換と同じで、誰であってもよい。交代制で働く労働者は自分本来の生活（収穫祭を祝ったり、葬式に出席したり、家族のもとに帰ったりすること）から切り離されるが、それを取り戻すために労働者は何をすればよいのか。

自分本来の生活を失った労働者は、労働意欲をなくしてしまう。実験助手として大切な実験のために何日も徹夜していた化学者も、染料工場の労働者になると3時半にはデスクの跡片付けを始めて、4時の帰宅に備えるようになる。

「労働者が存在していること自体、資本制経済が崩壊の宿命にあることを意味する。なぜなら、労働者は人間であることを止めた存在だからである」とマルクスは書いているが、このマルクスの指摘は正しい。労働者にとって、休日も労働日の延長に過ぎない。労働者の「休憩時間 leisure time」は、伝統的な休日である日曜日（教会に行き祈る日）・自然界のリズム・労働者の生活のリズムと無関係である。労働者は「その他大勢」の1人に過ぎなくなっている。「その他大勢」の1人も組織化されていけば、「その他大勢」の状態から抜け出すことも可能だが、組織化によって自然界のリズムや生活のリズムが取り戻せる訳ではない。組織化された労働者はハイ

キング・映画・講演に行っても（あるいはメーデーに参加しても）、それが自分の意志で決めたことなのかどうか、あるいはそれが本当に必要なことなのかどうか判断できなくなっている。労働者は単なる「労働力」であることを止める以外、自分本来の生活を取り戻すことはできないのである。「人間の生涯のなかで1年以上、続かないことに価値はない」とゲーテは言っている。単なる「労働力」に過ぎない労働者も、3年・5年・7年を掛けて自分本来の生活を取り戻せばよいのである。「搾取」を賃金の下落と考えたマルクスは、このことに気づいていなかった。労働者にとって問題なのは賃金が減ることではなく、「人間扱いされないこと loss of status」なのである。

## 第11節 労働者に自分本来の生活を取り戻させる方法

労働者に自分本来の生活を取り戻させるにはどうすればよいのか。この問題を真剣に考えたのがマルクスとエンゲルスであった。歴史を動かしているのが拡大を続ける資本制経済であり、ウエリントン公爵の銅像がある王立株取引所が世界市場と繋がっていることを明らかにしてみせたのも彼らであった。しかし、彼らはやりかけた仕事を完成させることはなかった。そこで彼らに代わって私が彼らの仕事を完成させることにする。

労働者は、賃金が低すぎるから搾取されているのではない。経営者は労働者の過去も未来も考慮に入れようとしない。労働者は、このことに抗議の声を上げるべきなのである。

契約は自由だからということで、経営者は労働者から労働力や技能を買い、出社を求め、頭脳の提供を要求する。労働者の技能を作り上げてきた昔からの伝統や、労働者の性格を作り上げてきた周囲の人たちの努力などは、すべて労働者の個人的な問題に過ぎないとされる。長い時間を掛けて作り上げてきたものに対して給料が支払われるのではなく、いままぐ商品生産に利用できる「労働力」に対して給料が支払われるのである。現代社

会は商品の交換によって機能しており、人間も「労働力」を売ることを予定された商品に過ぎない。人間は生殖の神秘によって生まれ、長い時間を掛けて教育を受け、訓練されて規律を身に付ける。しかし労働者を1時間・1年間・10年間と雇う経営者は、こうしたことには無関心である。そんなことは学校・両親・友人などが心配すればよいことなのである。経営者にとって労働者は「神の被造物 growing child of God」などではなく、番号を付された単なる「労働力」、生産性や信頼性が数字で評価される単なる「労働力」に過ぎないのである。1時間あたりXYZカロリーを消費して7325エルク erg (1グラムのものを1センチ移動させるのに必要な労働の単位)の仕事をする機械と同じ存在に過ぎないのである。その過去も未来も問題にされることはない。電気・石炭・リネンなどと同じ物に過ぎないのである。労働者は毎日同じ作業を繰り返すことが期待されているが、実際には長く働ける場合もあれば、すぐ働けなくなる場合もある。しかし50年働こうが5日働こうが、工場で繰り返される単調な作業は労働者の過去や未来にとって意味のないものである。

1時間は60分と決められた機械的な時間の世界、それが工場にいる労働者の世界である。労働者が自分本来の生活を取り戻すためには、別の世界を見つけ出してくる必要がある。経営者にも労働者と同じように、2つの違った世界が存在する。経営者のスミス氏は暴君かもしれないが、それでも彼は1人の人間であり、父親であり、夫であり、独り者のときは暴君の父親のもとで暮らしていたという過去がある。また、やがて子供たちは結婚して自分の家庭を持つようになり、もう彼の命令には従わなくなるだろうという未来もある。彼には経験済みの過去と、将来に実現するつもり計画や目的があって、幸せに感じているはずである。過去から現在、現在から未来へと時間は繋がっており、過去も未来も現在と同じ重みがあると感じているはずである。やがて訪れてくる死が人生の大切さを教え、若い時代にしかできない冒険の必要性を自覚させてくれる。この世界では過去も未来も積極的な意味を持つ。なぜなら、過去や未来のおかげで家族は

存続が可能になり、そのあり方が決ってくるからである。

ところが資本制経済が支配する世界では、過去も未来も存在しない。過去や未来は学校や博物館で歴史として保存されているが、経営者にとって問題なのは現在だけである。過去と未来は、自然のなかで機械的に刻まれる時間の一部に過ぎないのである。

「2つの違った世界」とは、このような世界である。1つの世界では、自分や他人を個性ある1人の人間として扱いながら、もう1つの世界では自分も他人も単に労働力を担う「肉体 body」としか考えない。1つの世界では「個性 soul」を持つ人間として扱われながら、もう1つの世界では単なる「肉体」に過ぎないものとされる。ところが人間にとって本来、両者は不可分・不可欠なものである。「肉体」は「働くため working」に必要であり、「個性」は「生きていくため living」に必要である。この両者が不可分・不可欠なところから、人間には第3の世界を切り開くことが必要になってくる。それが「考える thinking」ということである。我々は「考える」ことで新しい世界を創造することができる。しかし、さしあたり「考える」能力については触れることをせず、話をマルクスが問題にした2つの世界に限定することにする。

忘れてならないのは、「2つの違った世界」は我々が作り出したものだということである。どちらかの世界を選択するのも我々自身である。過去も未来も問題にしなければ、木材・電気・人間の能力は商品として売買の対象になるが、過去と未来を問題にすれば(つまりその再生産に我々が責任を持つことになれば)、木材・電気・人間の能力は本来の「個性」を取り戻し、人間は本来の生活を取り戻すことができる。

たとえば、ゴム・パルプ・子供・詩人が不足するようになれば、経営者もその再生産に関心を持つようになるはずである。世界が違って見えて来るはずである。ゴムの木を植えたり、森林回復のために植林を始めたたりするはずである。また森林監督官の養成や農村の再開発も始めるはずである。それまで経営者は、そんなことに無関心であった。

芸術家・土木技師・作曲家・広報係を雇いたいと思った経営者は、ふつう『タイムズ』紙や『ヘラルド』紙に広告を出すのが、その方法が通用しなくなる可能性がある。たとえ何百人・何千人が応募してきても、経営者が求めるレベルの能力を誰も持っていないかもしれない。そんなときでも、経営者は「労働力」の再生産には無関心である。経営者が単なる「労働力」として労働者を雇い、最後には駄目にして破棄してしまう事実、これこそが資本制経済が抱える最大の問題である。

市場経済ほど商品生産に適した制度はない。これを国有化しても、なんら問題の解決にはならない。あらゆる種類の商品を即座に生産してみせる市場経済の優れた点、これを国有化によって無くしてしまう社会主義体制に未来はない。

生産を継続するためにはバックアップ体制が不可欠である。ロバに石臼を引かせ続けるためには、つねに交代用のロバを飼っておく必要がある。石炭を燃やし続けるためには、たえず新しい炭鉱を開発するか、石炭に代わる新しい燃料（たとえば石油）を見つけ出してくる必要がある。人が絵を描き続け、教育を続け、買い付けを続け、発明を続け、建物を建て続け、計画を立て続けるには、同じことをしたいと考える後継者を育成する必要がある。後継者の育成に貢献できていないことに負い目を感じている経営者は、信じられないような金額の寄付を教育機関に寄せるものだが、教育機関も本当に将来、必要とされる人材を育成できていない。

以上で、資本制経済が齎す本当の問題点を指摘してきた。資本制経済は安価な商品を大量に生産することを使命としており、労働者に人間らしい生活を取り戻させることには無関心である。フォード方式で安価な車を大量に生産することも必要だが、フォード氏が労働者の過去も未来も無視して労働者を人間扱いしないことを何とかすることも必要である。

マルクスは、この資本制経済が抱えている問題点をうまく説明できなかった。またマルクスが挙げる豊富な事実に幻惑されて、そのことに誰も気づかなかつた。その結果、社会主義体制を採用したボルシェビキたちは

資本制経済が抱えている問題点を誤解することになった。資本制経済のもとでは、経営者は労働者に払うべき賃金を払っていないと考え、労働者に高い賃金を保障したのである。その考え方が間違っていることは、すでに指摘した通りである。資本制経済のもとで労働者は、経営者と一緒になって農村共同体・封建制社会・原始社会など古い経済体制を搾取していた。資本制経済は、絶えず新しい市場を開拓するために古い経済体制を搾取し破壊することが宿命づけられている。市場の拡大が止まったとき、資本制経済は存続できなくなるからである。また古い経済体制がなければ、古い経済体制に特有の人間関係のお陰で労働者と経営者の間に存在する関係は存続できなくなる。

## 第12節 資本制経済の本当の犠牲者

いま世界中で労働争議が絶えないが、その理由は伝統的な人間再生産の枠組みを提供していた古い経済体制が、資本制経済によって破壊されているからである。しかしロシアに直接、影響を与えているのは、資本制経済の国で生産される安価な商品である。外国から輸入される安価な商品のおかげで、ロシアの国内産業は衰退を余儀なくされる。ロシアは、新しい市場の開拓に熱心な資本制経済の犠牲者である。自由貿易を認めれば、安価な輸入品と競争できない古い経済体制の国は衰退するしかない。皮肉なことに資本制経済は古い経済体制の国がないと新しい市場開拓ができず、自らの存続ができなくなってしまう。古い経済体制の国では、伝統的な人間再生産の枠組み（教会・芸術・休日など）を維持する経費は生産される商品の値段に含まれている。ところが資本制経済は伝統的な人間の再生産に必要な経費を無視しており、生産する商品の値段を安くすることができる。

荘園領主は、荘園で働く労働者の生活に責任を負っていた。領主と領民は不可分の関係にあったからである。ところが労働者を時給で雇っている農場経営者は荘園領主を破産させ、領主が維持していた学校・教会・病院

を廃墟にしてしまう。しかも農場経営者は、自分がやってしまったことに気づいていない。資本制経済の経営者は、まるで陶磁器店に突っ込んでいく猛牛のように伝統的な共同体を破壊してしまう。資本制経済の経営者は、伝統的な経済体制を破壊することで生き延びていくのである。経営者と労働者は、資本制経済が破壊する旧い経済体制がなければ存続できないのである。

マルクスは資本制経済の経営者と労働者が、旧い経済体制の国を搾取している事実に気づいていなかった。またインフレのおかげで、経営者と労働者が国内の伝統的な階級制度を破壊していたことに気づいていなかった。工業化が進んだ国の工場内部をいくら探ったところで、労働争議の本当の理由は見えてこない。フランスやイギリスでは、国内で搾取が行われていなかったからである。資本制経済は、経営者と労働者だけでは維持できない。新しい市場開拓が不可欠なのである。また社会体制と政治体制の維持に掛かる経費を負担せず済むからこそ、経営者は利潤が得られるのである。資本制経済の国が帝国主義政策を採用せざるを得ない理由もそこにあった。つねに労働者に対して責任を負う封建領主と違って、資本制経済のもとで経営者は労働者を時間単位で雇うことが可能であり、秩序維持に必要な警察や貧民救済などは政府が面倒を見てくれる。それに経営者は、できることなら責任を問われ兼ねない国内より、責任を問われることのない外国の市場で利益追求することを好む。外国なら、伝統的な秩序を破壊しても責任を追求されることは無いからである。経営者と労働者は搾取する側において、搾取される側には旧い経済体制下の集団・階級・国がある。「資本制経済は、旧い経済体制を排除して資本制経済体制に変えていく。また排除すべき旧い経済体制が存在するからこそ存続できる経済体制なのである」(ローザ＝ルクセンブルク)。資本制経済にとって、植民地獲得を目指す帝国主義政策は必然なのである。だからこそ第一次世界大戦が始まったとき、どの国の労働者もマルクスが期待したように反戦のために団結することとはなかった。

1914年の労働者は、戦争に積極的に協力した。社会主義政党も不本意ながら労働者の意向に従っていた。ロシアの有名な社会主義者プレハノフ Georgii Plekhanov は開戦の報道に歓喜したとされているが、それはマルクス主義者にとってショッキングな出来事であった。フランスやドイツの労働者も同じであった。彼らも祖国のために戦ったのである。ハンガリーのマルクス主義者ルカーチ György Lukács も、つぎのように書いている。「第一次世界大戦で労働者たちが一致団結して戦争に反対できなかったことは重要である。第一次世界大戦までの労働運動が失敗だったことを意味するからである」。労働者は資本家に搾取されていなかった。イギリスの労働者は、1846年にイギリスの農村を犠牲にして安い穀物を手に入れたランカシャーの綿工業労働者に象徴されるように、搾取されていなかったのである。

第一次世界大戦のとき反戦に立ち上がったのは、ロシアの労働者だけであった。彼らが反戦に立ち上がったのは、マルクスが言ったように何も失うものがなかったからではなく、まだロシアに旧い経済体制が残っており、資本制経済の国に搾取されていたからであった。

つまり資本制経済を無くす革命は、もっとも遅れた国で始まったのである。進歩史観によると、進歩の先頭に立つ国はますます進歩のスピードを早めていくことになっているが、革命に関しては進歩史観も間違っている。まずロシアで革命が始まったのは、ロシアがもっとも遅れた国だったからであった。「我々は工業化の実現に向って全速力で進むことになる。何世紀ものあいだ続いていた遅れを取り戻し、社会主義体制を実現することになる。ロシアは金属工業の国、機械化農業の国、電化された国になる。ロシアで自家用車が普及し、ムジーク(ロシア農民)がトラクターを操るようになったとき、先進国の資本家どもは何と云うか。遅れているのは我々でなく、彼らこそ遅れた国であることを思い知るはずである」(スターリン)。このスターリンの言葉は、ロシアとヨーロッパの関係をよく象徴している。

## 第13節 ドストエフスキーとトルストイ

1860年代（ロシアで農奴解放が行われたのは1861年）、ツァーリ体制にインテリゲンチヤ（知識人）が絶望し、革命を目指していた若者がナロードニキとして「人民<sup>ナロード</sup>」のなかに姿を消していったあと、古くからあったロシア人の改革に対する情熱は消え失せようとしていた。しかし、それでも微かな残り火を感じ取っていた作家が2人いた。1870年から第一次世界大戦が始まるまでロシア人が窒息死せずに済んだのは、この2人の作家のおかげであった。その作品はロシアが世界に誇れる傑作である。ヨーロッパ人が人間の何たるかを理解できるようになったのは、ドストエフスキーとトルストイのおかげであった。小説というヨーロッパ起源の形式を使って、2人は人間の何たるかを見事に描いて見せたのである。それはフランスの作家にも、イギリスの作家にも、ドイツの作家にもできなかったことであった。彼らは一步一步、ロシアの農民・行商人・兵士・囚人などの日常に迫っていったのである。

ドストエフスキーの小説『白痴』・『虐げられた人々』・『死の家の記録（シベリアでの強制労働の記録）』・『悪霊』などは、こうした努力の成果である。ドストエフスキーが描いて見せた人物は、ロシア革命に登場してくる人物を思わせる。ドストエフスキーを読んでいると、まるでロシア革命に登場してくる人物の心中を覗き見しているようである。ドストエフスキーは現実的な問題には無関心で、国家や政府の必要性を認めようとしなかった（この点では、マルクスと同じである）。国家や政府の必要性を認めないところから、彼には教会のような秩序しか考えられなかった。『カラマーゾフの兄弟』（ドストエフスキーの小説のなかでも一番よくできている小説である）でアリョーシャが聖人と信じていた長老に、つぎのように言わせている。「教会が国家になるのではなくて、国家が教会になるのだ。そのことをよく覚えておきなさい」。秩序維持を軍隊や警察に依存するような政府は、存在するに値しないのである。『カラマーゾフの兄弟』に登場してくる人物は、ヨーロッ

パ的な人間とは丸で別物であった。下劣で意志が弱く、そのくせ残酷であった。しかも激し易くて、何をしでかすか予測がつかない人間であった。彼らは丸で放浪癖が付いた遊牧民のようであった。

ドストエフスキーの小説の主人公は浪費癖があり、酒癖が悪く、そのうえ冷酷であった。ときに激情を爆発させ、神を呪い、犯罪者になるが、それは彼に帰るべき家がないからであった。ドストエフスキーの小説には、14歳に家を出て工場に働きに行き、プロレタリアートになって帰るべき家をなくした若者の姿が見事に描かれている。ふつう若者は父親のもとを去り、当て所ない放浪を14歳から30歳の間に経験するが、最後には落ち着き先を見つけて大人になるものである。ところが『未成年』の主人公は、最後まで放浪を止めることがない。彼は生涯「未成年でin becoming」、永久に大人にならないのである。人間には、こんな「永久革命」的な側面があることを忘れるべきでない。

社会を機能させるためには、人間のそんな側面を何とかしなければならぬ。ところが人間は自分を取り繕いたがる。上品で意志が強く、人間味があって知性に溢れている振りをしたがるものである。また社会を機能させるためのルールも、そんな人間を前提に作られている。ドストエフスキーは、そんな前提を覆ってしまった。人間は浪費癖があり、酒癖が悪く、冷酷だというのである。地獄こそが人間に相応しい場所だというのがドストエフスキーの人間観であった。人間は、そんな自分の本質を自覚すべきだとドストエフスキーは言う。マルクス主義が重視するプロレタリアートの階級意識も、つまりは属すべき場所を持たず、社会秩序の外に置かれたプロレタリアートの意識なのである。属すべき場所を持ち、平和に暮らしている者なら必要としない意識であった。ところがロシアのインテリゲンチヤ（知識人）は、それを必要としていた。

ドストエフスキーの小説に登場してくる人物は、それまで誰も指摘することがなかった人間の負の側面が生み出した人物であった。彼らは、ロシア革命に登場してくることで世界的な存在となった。目に見えなかつ

た人間の暗い深遠部が、目に見える歴史の表舞台に登場してきたのである。人間は創造する力のほかに、破壊する力や自虐・憎悪・怠惰・妬み・冷酷・強欲・嫉妬などの感情を持つ。そんな負の側面を共有することで、人間はつよい連帯感を持つのである。ドストエフスキーは、そんな人間の負の側面を純粋で単純な革命家として小説に登場させたのである。

ロシア革命は、ドストエフスキーが小説に描いて見せた人物を現実の世界に登場させた。ロシア革命は、人間の持つ破壊的な性格を利用して経済問題を解決しようとしていた。人間が持つ破壊的な性格は社会の存立を危うくする。そこで、ふつう社会はそれを隠そうとする。ところがロシア革命は、革命家たちの破壊的な性格を新しい社会の建設に利用しようとしていた。

ボルシェビキ政権は労働者のための投資と称して、たえず制度破壊を行っていた。そのおかげで資本制経済が経験するような大不況に見舞われることはなかったが、制度破壊が日常化して、ダイナマイトのように日常的に役に立つ道具でありながら、すべてを破壊するために利用されることになった。人間の暗い深遠部を制度破壊の道具として社会制度のなかに組み込んでしまったボルシェビキ政権は、ドストエフスキーが描いた人物を現実の世界に登場させることになったのである。

トルストイはドストエフスキーのようにシベリア流刑にはならなかったが、ロシア社会から隠遁して修道士のような生き方をしていた。彼の考え方はアジアで人気を呼び、ビリューコフ Paul Biryukov が編集した『トルストイの手紙』には、アジア解放を実現するためのヒントが数多く登場してくる。ロシア革命はアジアの解放に大きく貢献していたが、トルストイが果たした役割も大きかった。

トルストイもドストエフスキー同様、社会問題に対して具体的な解決策は示していない。またドストエフスキーほど教会に忠実でなく、教会のあり方にも批判的であった。民衆相手の「山上の垂訓」は評価したが、使徒相手のキリストの言葉は評価しなかった。革命後のロシアでもトルストイ

は聖人扱いされていたが、それは民衆を重視することで革命に味方したからであった。ドストエフスキーが個人の内面を問題にしたのに対して、トルストイは民衆を問題にしていた。ただしトルストイの念頭にあったのは「国民 nation」ではなくて、「ムジーク」(ロシア農民)であった。「知恵 consciousness」を身に付けて憲法制定を要求する「国民」ではなくて、エデンの園を追われる以前のアダムのような純粋無垢な「ムジーク」(ロシア農民)であった。彼らは、権力者が自由に操ることができる民衆であった。

トルストイに解決策が提示できる訳がなかった。彼は「ムジーク」(ロシア農民)を賞讃したが、そのおかげで「ムジーク」(ロシア農民)は純粋無垢のまま放置されることになった。こうしてトルストイは、ドストエフスキーが登場させた純粋で単純な革命家のほかに、さらに「人民」崇拜を付け加えたのである。その「人民」たるや我慢強く、受動的で、従順この上ない自然と同じ存在であった。

ロシア革命の結果、ロシアに文学は存在しなくなった。文学の代わりに数字を重視する計画経済が登場してきたのである。詩人は文字どおり「空気と化し in the air」、『セメント』(Fyodor Gladkov, Sement, 1925)と題される小説が登場してきた。「空気と化した」詩人に代わって、コンクリートが登場してきたのである。

## 第14節 第1次ロシア革命と第2次ロシア革命

レーニン(本名はウリヤノフ Ulyanov で貴族の出身)は、いわばヨーロッパがロシアに遣わした全権大使であった。ヨーロッパの資本制経済がロシア市場で行っていた搾取を止めさせるための全権大使であった。

1904～1905年の日露戦争で敗北したロシアでは、ブルジョアジーが議会制を要求していた。しかしプロレタリアート不在のロシアに社会主義革命の可能性はないと考えたレーニンは、この改革運動に参加しなかった。ところが「社会主義革命」が戦艦ポチョムキンの反乱で始まったのである。

マルクス主義とは無縁だった水兵が、1905年にプロレタリアートの代りを演じたのである。1905年に始まった革命の嵐のなかで、工場・クラーク(富農)・労働者がロシアにも登場してくるようになった。しかし、小説『サーニン』(Mikhail Artsybashev, Sanin, 1907)に描かれているような「サーニン主義 Saninism」(個人主義・性愛賛美・エログロナンセンス・恋愛の自由)に若者が毒され、1905年の革命熱は落胆と失望のなかで冷めていくことになった。

それから9年間、ロシアの若者は革命のことを忘れていた。この9年間はヨーロッパ全土が、やがて訪れてくる破局を忘れようとしているかのようであった。ヨーロッパが戦争のことを忘れようとしていたように、ロシアの若者は革命のことを忘れようとしていた。この「試練 temptation」(イエスは荒野で悪魔から信仰の強さを試される。『マタイによる福音書』4:1~11)の時代に「サーニン主義」に毒された者は脱落していったが、毒されなかった者は強力な革命戦士となっていった。

レーニンも、そんな革命戦士の1人であった。ところがレーニンの師ともいべきプレハーノフは、そうではなかった。第一次世界大戦が始まるとプレハーノフは革命を裏切り、開戦を支持したのである。ほかの多くの革命家も彼に従うことになった。

「なぜロシアの専制を打倒しようとしているロシア人を助けないのか」。ミュンヘンで1914年8月1日、前線に向かうドイツ兵に兵舎に戻るよう呼びかけたロシア人革命家がいたが、この呼びかけは重要である。このロシア人革命家は、第一次世界大戦がロシア革命の開始を意味することを理解していたのである。もし第一次世界大戦がなければ、ロシア革命もなかったはずである。平和であれば、「資本制経済に搾取されていた植民地」ロシアに住む1億5000万の人間を蜂起させるのは不可能であった。彼らを兵士として動員し、前線に集めることで初めて革命は可能になったのである。さらに私有財産と高い賃金を前提にすれば、社会主義の勝利は不可能であった。ところが戦争が社会主義の勝利を可能にしてくれた。1917年

にロシア工業は、その98%が軍需品を生産していた(民生品を生産していたのは2%に過ぎない)。ロシア工業の98%はすでに国有化されており、国有化されていなかったのは2%に過ぎなかった。国内市場は存在せず、鉄道網も道路網も存在しなかった。ボルシェビキ政権は「白紙委任状 tabula rasa」を手にしていたのである。また戦争のおかげで、ロシア教会の圏外にあった西部地域(カトリック教会圏に属していたポーランドなど)に独立のチャンスが訪れてきた。独逸軍が占領した地域では、私有財産を前提にしたヨーロッパ的な農業・手工業・教育の伝統が復活してくるようになった。

ケレンスキー Aleksander Kerensky は、議会制民主主義を実現するために西部地域の再占領を目指すことになった。国民を単位とする議会制民主主義が可能な地域は、ポーランドなど西部地域だけであった。西部地域の再占領のために戦争を継続するというケレンスキーの選択肢は間違っていたように思えるが、ケレンスキーの構想からすれば当然の結論であった。ツァーリ制度を廃止することで、ケレンスキーは意に反して革命を始めてしまったのである。ケレンスキーは民主主義が実現さえすれば、1792年のフランス人のようにロシア人も「祖国防衛 national defense」に立ち上がると考えたのである。しかし、ロシア人にそんなことを期待するのは無理であった。ロシア化政策を求めるような「自国民中心主義 nationalism」はヨーロッパ化したロシアの支配階級にしか浸透せず、ロシア人の大部分を占めていた「ムジーク」(ロシア農民)はツァーリ(ロシア皇帝)個人に忠実であった。それがザンクト=ペテルブルクの腐敗した政治家たちには判っていなかった。そのよい例がラスプーチンの暗殺であった。ラスプーチンは、暗殺者のユスポフ Felix Yusupov よりもロシア的であった。ユスポフはラスプーチンを自宅に招いて毒を盛り、さらに拳銃で撃って殺害したが、彼はヨーロッパ化した支配階級の一員らしく、ラスプーチンがツァーリに独逸軍との単独講和を受け入れさせると考えたのである。しかし、ラスプーチンは「自国民中心主義者」でもなければ民主主義者でもなかった。そのようなヨーロッパ的な思想は彼にとって無縁であった。クロンシュタットの

イオアン Ioan Kronshtatskji と同様、ラスプーチンが皇帝に語っていたのは稚拙なキリスト教の伝統に過ぎなかった。素朴なロシア人らしく、彼にとって戦争はどんなものでも悪であった。どんな犠牲を払っても避けるべきものであり、止めるべきものであった。彼が戦争に反対だったのは、犠牲が大きいからではなかった。愛国心に燃えていたのは、インテリゲンチヤ(知識人)が書く新聞記事を読んでいた都会の人間だけであった。彼らは祖国の危機と言われて興奮したが、自分たちが直面している現実を冷静に見つめ、なすべきことを決める能力を持っていなかった。愛国心に燃えていた連中に言わせればラスプーチンは迷信の塊であったが、ラスプーチンは彼らの迷信(愛国心)とは無縁であった。

ラスプーチンは、この迷信(愛国心)の犠牲になったのである。彼らはラスプーチンを殺すことで、ロシアに流れていた最後の血流を止めてしまった。ツァーリ(ロシア皇帝)と「ムジーク」(ロシア農民)をむすぶ最後の血流に止めを刺したのである。ラスプーチンが殺されると、ツァーリ(ロシア皇帝)は非ロシア的なヨーロッパ型の立憲君主になってしまった。ロシアはヨーロッパの資本制経済の支配下に置かれ、支配階級は公爵・男爵・伯爵などと称していたが、ヨーロッパの資本家たちの操り人形に過ぎなかった。ツァーリ(ロシア皇帝)が借款のためにパリに赴いたとき、ヨーロッパの資本家たちはロシアを見放すことにしたのである。1889年にツァーリ(ロシア皇帝)は、借款を認めてもらう代わりに革命を称えるフランス国歌「ラ・マルセイエーズ」を自分の前で演奏することを認めていた。ツァーリ(ロシア皇帝)はヨーロッパの経済的支配に依存しながら、「ムジーク」(ロシア農民)の伝統的な感情にも配慮するという離れ業を演じるようになった。ヨーロッパ化された支配階級は、ドイツ生まれの皇后があまりにも信心深いのに辟易させられていたが、ヨーロッパ的な合理主義を身につけていた彼らには、ツァーリ(ロシア皇帝)に対する「ムジーク」(ロシア農民)の伝統的な忠誠心が理解できなかった。支配者と被支配者が共有する信仰を利用すれば、国の進路を変えることも可能であった。たとえそれが講和

を目指す難しい航路であっても、進路を変えることは可能であった。船が政治的混乱という難所を通り抜けるためには、政府の合理的な判断など何の役にも立たない。民主主義体制のもとでは、とくに戦争と外交の問題は解決が難しい。なぜなら、途中で妥協によって止めるわけには行かないからである。そのことは1904～05年の日露戦争・第一次ロシア革命・第一次世界大戦・ボルシェビキ革命の歴史を見れば理解できる。

1904年に、すでに第一次世界大戦の前兆は見えていた。「世紀末 Fin de Siècle」の退廃を敏感に感じ取っていたジョイス James Joyce は、小説『ユリシーズ』で物語が展開する日を1904年6月16日に設定している。彼は1904年がヨーロッパ人にとって重要な意味をもつ年であったことを感じ取っていた。ヨーロッパ世界の崩壊を意味する第一次世界大戦の前兆(ニーチェ Friedrich Nietzsche は、これを「耐え難い緊張感 Tortur der Spannung」と呼んでいる。Nachgelassene Fragmente 1887-1889)が、すでにこの年に感じ取られていたのである。

1904年、まずバルト海沿岸に住むエストニア人がロシアからの独立を求めて蜂起を起こし、ついで有色人種(日本人)が初めて白人を戦争で打ち負かすことになった。

1904年に第一次ロシア革命が始まり、民主主義者・自由主義者・人道主義者も喜んで革命を支持した。しかしレーニンは革命を支持しようとしなかった。このときロシアが日本との戦争を止めていけば、ボルシェビキ革命は起きなかったはずである。ところがロシアは戦争を止めず、その翌年に2つの重要な事実が確認されることになった。まず初めて兵士たちが前線で顔を合わせることができたということ、そしてブルジョア的な自由主義や国民主義がロシアでは無力だということである。

## 第15節 敗戦と革命

ロシアのように統治制度が確立していない国には、敗戦は当然であった。戦いが不利になってくると、支配者は戦争を続けるか平和を選ぶか決めなければならなくなる。さらに大臣や将軍たちのように命令を待つのではなく、国内の騒動を平和的な手段で解決するか武力によって解決するかを決断しなければならなくなる。どう講和を結ぶかを決めるのも支配者である。重要なことは、ただ降伏するか開戦するかといったことを決めるだけでなく、日々の変化する情勢を読みながら講和の方法を見付けてくることである。支配者（国王・大統領・ツァーリ・議会・独裁者）が戦争を止めるか否かを自分で決められなくなったとき、その支配者は支配者でなくなる。そのとき支配者は存在理由を失ってしまい、権威を失ってしまうからである。

1917年に講和を実現できなかったケレンスキーは、権威を失ってしまった。講和を実現できる者がロシアの支配者であった。ロシアが独立国として存続できるか否かが問題になっていたとき、政策の違いや法制定の問題など無視すべきであった。そのことがケレンスキーには判っていなかった。

1917年に一両の寝台列車がレーニンをチューリヒからロシアに運んでいた。レーニンをロシアに帰すことにしたのはドイツ軍であった。列車に乗り込むとき、レーニンはプロイセンの軍国主義者と取引したことを問題にされないよう、フランス・ドイツ・スイスのマルクス主義者が賛成していたことを示す文書を手に入れていた。のちに彼がザンクト＝ペテルブルクで影響力を振るようになったのは、決して過激な左翼主義者だったからでも農民による土地占拠を認めたからでもなく（農民の土地占拠を認めたことでローザ＝ルクセンブルクはレーニンに批判的であった）、ブレスト＝リトフスク Brest-Litovsk でドイツと講和を結んだからであった。革命のために戦争を止める勇氣を持っていたのはレーニンだけであった。当時のロシアのインテリゲンチヤ（知識人）は、誰もが愛国心の虜になっていた。「ム

ジーク」(ロシア農民)の心を失っていなかったラスプーチンと、亡命生活が長かった革命家レーニンだけは愛国心と無縁であった。レーニンがロシアに帰ってきたのは、ロシアで社会主義革命を実現するためであった。そのためなら、彼は何でも犠牲にするつもりでいた。戦争を終わらせて社会主義革命を実現するためなら、西部地域(バルカン半島・ベッサラビア地方・ポーランド・フィンランド・ラトビア・リトアニア)を失うことなど問題でなかった。「どんな犠牲を払っても平和を実現する」と宣言したとき、レーニンは完全に孤立していた。愛国心の虜になっていた者にレーニンの態度は理解できなかった。孤立状態が続いたが、それでもレーニンは態度を変えようとしなかった。「ロシアで社会主義を実現するためなら、領土を少し失うことなど問題ではなかった」(『不幸にも講和を結ばざるを得なかった理由について』 Collected Works, vol. 26, pp. 442-450, Moscow, 1972)。

世界革命のためなら、ロシア領を失うことなど問題でなかった。ロシア人に課せられた世界史的な使命を達成するためなら、西部地域を失うことなど問題でなかった。

それは合理的な計算と信仰・本能のぶつかり合いであった。戦争継続を支持する者は感情的な言葉を使って戦争継続を主張していたが、社会主義革命を支持する者は丸で医者を書く処方箋、あるいは化学者が書く化学方程式のように冷静で無味乾燥な言葉を使って停戦の必要性を説いていた。結局レーニンが勝って、ブレスト＝リトフスク条約が調印されることになった。その結果、1917年秋にシニカルで冷徹な言葉を使うボルシェビキ政権が登場してくることになった。

ボルシェビキ政権は、厳しい亡命生活が生み出したレーニン特有の考え方に縛られていた。いつ暗殺されるかもしれないという不安、生活費に事欠くかもしれないという不安、現実を無視した理想主義が間違っているかもしれないという不安にレーニンは苛まれていた。そこでレーニンは誰もが物質的な豊かさを求めており、精神的な豊かさなど無視してよいと考えるようになっていた。もちろん自己犠牲の精神とか自制心、規律も重視

されていたし、何百万人もの人間のために目指すべき目標を提示することも忘れていなかったが、彼は人間の「感性 sensualism」は無視していた。国全体の物質的豊かさのために個人の禁欲が義務づけられた。五ヵ年計画では、小麦・鉄・綿・電力の増産だけが重視されることになった。そのとき個人に突き付けられたのは、科学的な数字（ノルマ）であった。レーニン<sup>あ</sup>は、<sup>うそ</sup>当てにならないブルジョアジーの嘘と混同されるのを恐れていた。

愛国心に酔った脳に対抗するため、レーニンは「内臓の発する言葉 language of diaphragm」使ったが、ソ連邦の創設者たちにとってそれが「神々<sup>せんたく</sup>の宣託 semi-god」となった。だからこそ彼らは、レーニンの遺体を古代ギリシャの創設者たちの遺体のように防腐処理してレーニン廟<sup>びやう</sup>に安置したのである。ふつうレーニン廟<sup>びやう</sup>の訪問者はキリスト教の聖遺物を訪れる巡礼者に例えられるが、<sup>ほこり</sup>埃をかぶった聖人の遺骸と違って（こちらは目に見えない神の存在を象徴する）、レーニンは民衆に食料と衣類を提供したエジプトのファラオのような存在であった。

戦争継続<sup>とな</sup>を唱えていた愛国的な知識人にとって、重要であったのは戦争に勝つことであったが、レーニンがロシアに齎<sup>もたら</sup>したのは「ムジーク」（ロシア農民）が望んでいた停戦であった。彼は「理性 Reason」が高みを目指<sup>めざ</sup>すのを禁じ、民衆を見ることを命じたのである。自由を求め、理想を目指<sup>めざ</sup>す愛国心を彼は信じていなかった。「自由とはブルジョア的な偏見<sup>す</sup>に過ぎない」という彼の言葉は、ブレスト＝リトフスク条約が締結されたときの状況に照らして理解されるべきである。

## 第16節 第一次世界大戦と世界革命

第一次世界大戦がなければ、ロシア革命は起きなかったであろう。戦争が始まって兵士が動員され、その兵士たちをボルシェビキ党が影響下に置いて、ツァーリ（ロシア皇帝）にできなかったこと（講和の実現）を実現することになった。

ロシアは奇妙な状況に直面していた。ロシアとヨーロッパを結び付けていたのは、もはや経済的な関係でなくて戦争であった。戦争のおかげでソ連邦が生まれ、領土も住んでいる人間もロシア時代と違ったものになっていた。ロシアは純然たる「ユーラシア大陸」国家になったのである。有名な冒険旅行家ピュクラー＝ムスカウ Herman von Puckler-Muskau は、100年前<sup>まえ</sup>につぎのように書いていた。「私の本がまず取り上げたのはヨーロッパ、そのつぎにアフリカ、さらにアジアである。ロシアを別に扱うことにしたのは、ロシアが1つの大陸を形成しているからである」。

ロシア革命の結果、ロシアは独自の大陸国家を形成することになった。ただし新大陸の形成という意味でなく、経済的に独自の国家を形成したということである。第一次世界大戦のおかげで、ロシアは世界中に影響力を振<sup>ふ</sup>るうことになった。世界各地で共産主義運動が展開されたピーク時は1919年で、それ以降の共産主義運動はロシア政府を中心に展開されることになった。その結果、ロシアはピョートル大帝以来、緊密に維持していたヨーロッパ世界との関係を絶<sup>た</sup>つことになった。西部地域を併合していたおかげでロシアはヨーロッパの市場経済体制の一部を構成していたが、西部地域を失うとヨーロッパのみならず、世界から孤立することになった。しかしボルシェビキ政権は、そのことに気づいていなかった。それでもヨーロッパを念頭に世界革命の実現を考えていたため、彼らは国名から「ロシア」を削除してしまった。初代駐米大使トロヤノフスキー Oleg Troyanovsky がアメリカ大統領ローズベルト Theodore Roosevelt に信任状を提出したとき、そこに「ロシア」という国名は使われていなかった。「ソビエト社会主義共和国連邦」という国名を名乗ることで、社会主義革命を世界に伝播すると宣言していたのである。世界に革命を広めることを宣言しながら、じつは世界から孤立していたことに彼らは気づいてなかった。

ボルシェビキたちはフランス革命、なかでもロバスピエール Maximilien Robespierre とエベール Jacques Hébert を研究し、左派と右派の領袖<sup>りょうしゅう</sup>処刑をフランス革命最大の失敗だと考えていた。「フランス革命は、<sup>みずか</sup>自らが生んだ

子供を生贄に供していた」のである。しかし彼らは、フランス革命とロシア革命の違いに気づいていなかった。1789年から1815年まで続いたフランス革命では、まず3年半のあいだ国内で革命が展開され、そのあとで23年間も対外戦争が展開されていた。しかしロシア革命では、3年半の対外戦争まずがあり、そのあとで革命が始まるのである。

対外戦争が長く続いたフランスでは、革命がどこかに消えてしまった。そこで1830年にふたたび革命を起して、フランスとヨーロッパでブルジョア革命を成功させる必要があった。2回目の革命で登場して来た「ブルジョア国王 bourgeois king」を見れば、支配権を獲得した階級がどの階級だったのかが判ろうというものである。1789年に始まったドラマは、1830年のエピソード（終章劇）でやっと終わりを迎えたのである。

ロシア革命は、まずプロローグ（前哨戦）で始まっている。1904～05年に起きた出来事は「第一次ロシア革命」と呼ばれているが、それは次に起こる「第二次ロシア革命」の前哨戦だったからである。「第二次ロシア革命」の指導者たちは、ロシアにプロレタリアートが登場してくる40年も前からプロレタリアートの登場を待ち続けていた。マルクス主義の理論に適合していたのはフランス革命であった。フランスでは、まずプロレタリアートが登場してきて階級意識が形成され、指導者はプロレタリアートの階級意識に訴え掛ければよかった。ところがロシアでは、ボルシェビキ政権はプロレタリアートの登場を待ち続ける訳にはいかなかった。プロレタリアートが登場する以前に、すでに階級意識の必要性を唱えるインテリゲンチヤ（知識人）がいたからであった。マルクスは「プロレタリアートの解放はプロレタリアート自らが行なうことになる」と考えており、インテリゲンチヤ（知識人）がプロレタリアートに代わってプロレタリアートを解放することは想定していなかった。ところがロシアでは、プロレタリアートの解放はインテリゲンチヤ（知識人）の仕事とされたのである。ロシアのインテリゲンチヤ（知識人）は1世紀ものあいだ圧政に耐えてきたが、それを根拠にレーニンは、無理に「歴史法則」（ブルジョア革命があっ

て初めてプロレタリアートによる社会主義革命が可能になる）を貫徹させようとしたのである。社会主義は19世紀中頃にブルジョアジーが生み出した理論であったが、無神論・思想の自由・科学至上主義もブルジョアジーが生み出した考え方であった。

フランス革命に幻惑されていたロシア人は、第一次世界大戦の意味を誤解していた。ナポレオン戦争がフランス革命の理念をヨーロッパ中に広めていたのと違って、ロシア革命に先立つ3年間の世界大戦は、それまで誰も想像していなかったような流血と破壊をヨーロッパに齎していた。ヨーロッパにとって世界大戦そのものが革命であった。大規模な流血と破壊が齎した絶望に比べれば、社会主義革命の脅威など問題ではなかった。

第一次世界大戦が終わってから時間が経てば経つほど、ヨーロッパに対するロシアの影響力は低下していった。第一次世界大戦がロシア以外の国に与えた影響については後で見ることにして、ここではロシア人が気づいていなかったことを指摘するに留める。彼らが自分たちの孤立状態に気づくには10年の歳月が必要であった。自分たちが置かれた孤立状態に気づいたとき、1918～20年に持っていたような共産主義に対する関心は無くなっていた。解決に失敗した1917年の経済問題に関心を持つようになったのである。その解決のために懸命の努力が始まった。レーニンは戦時経済のためにドイツ人が作り上げた体制がどれほど効率よいものであったか誉め称えるようになり、これが1929年に始まる「五ヵ年計画」に結び付くことになった。「五ヵ年計画」は、いわばボルシェビキ政権が採用したヒンデンブルク Paul von Hindenburg 流の現実主義路線であった（ヒンデンブルクは1930年以降、大統領特権を使って議会の政党と関係なく組閣を行っていた。ワイマール共和国の民主主義理念より政治的な安定を優先したわけだが、ボルシェビキ政権の「五ヵ年計画」も、共産主義の理念を捨てた現実主義的な政策の産物であった）。ソ連邦で、ドイツの戦時経済体制と似た体制が大規模に展開されることになった。「五ヵ年計画」でソ連邦の孤立状態を解消し、その存続を最優先させることになった。

1929～34年の「五ヵ年計画」は、第一次世界大戦が齎した現実をやつとロシア人が受け入れることにした結果であった。ロシアのインテリゲンチヤ（知識人）は第一次世界大戦の勃発を予測していなかったし、ロシア革命もロシア国内の階級闘争として始まった訳ではなかった。第一次世界大戦は、ヨーロッパの国と国が戦った「内戦」であった。第一次世界大戦が各国の置かれていた経済的な条件や地理的な条件に応じて、その特徴を浮き彫りにした。ドイツは統治効率のよさゆえに中央ヨーロッパの主人公となり、イギリスは世界中から資源と人員を動員できることを証明して見せた。そしてロシアは、統治制度の後進性を暴露することになった。

マルクスの下部構造・決定論は、考えられていた以上に正しかったと言える。経済的な条件が変わると人間の考え方も変わるというのがマルクスの下部構造・決定論であった。1917年ころのロシア人は、第一次世界大戦後に世界革命が実現すると考えていた。彼らは第一次世界大戦が、マルクスの想像もしなかったような変化を下部構造に生み出していたことに気づいていなかったのである。第一次世界大戦を戦った普通の兵士が、そうとは知らずに革命を起こしていた。ハムレットのように、兵士たちは戦場の惨状を知らないマルクス主義者に対してこう言ったはずである。「傷の無い身に気づかい無用 our withers are unwrung」（小田島雄志訳『シェイクスピア全集』白水Uブックス23『ハムレット』132ページ）。

フランスのブルジョアジーは、すでに1750年ごろ革命の前哨戦を開始していた。そのとき既に彼らは、その後40年間、繰り返し登場してくることになる問題を念頭に置いていた。ところが第一次世界大戦は、誰も想像しなかった新しい問題を生み出していた。その問題が真剣に取り上げられるようになるのは、1929年の大不況以降のことである。すでに問題の深刻さを指摘する者がいなかったわけではないが、1929年の大不況に直面した政府や政党は、そのほとんどが1914年以前の状況を念頭に対処していた。つまり絶えざる進歩や、間違いなく向上していく生活水準に対する揺ぎない確信を前提に対処していたのである。クレムリンを占拠してい

たボルシェビキたちも例外でなく、彼らも1933年にシカゴで開催された「進歩の世紀」見本市と同じ幻想に囚われていた。マルクスによれば、物質的な条件が変われば理論も変わるはずであった。第一次世界大戦で物質的な条件が変わってしまったのなら、戦後の世界にマルクスの理論は適用できないはずであった。それは政党や個人にはどうすることもできないことであった。第一次世界大戦で、マルクス主義も自由主義も終焉を迎えていたのである。

マルクス主義者だけでなく、世界中の人間が戦前の考え方にしがみ付いていた。1924～29年には、誰も戦後に登場して来た新しい状況の存在を認めようとしなかった。戦前の状況がすぐに戻ってくるものと信じて疑わなかったのである。なかには例外的な人物もいた。たとえばシオドア＝ローズベルトは、1929年以降にアメリカが直面することになる状況を1912年に予見していた（この年の大統領選挙で彼は企業の身勝手な利益追求を批判したが、その考え方がのちにニューディール政策で有名なフランクリン＝ローズベルトに引き継がれることになる）。しかし、人間の考え方は容易に変わらないものである。日々さまざまな情報を処理している人間の脳は、すばやく何事にも反応しているように見えるが、それは個々の情報を処理する場合に限られる。考え方の枠組みは、容易に変わらないものなのである。脳細胞は死滅する一方で再生されることがない。その代わり、他の細胞に比べて何十倍も長生きする。そのためか環境が変わっても、考え方の枠組みは何世紀ものあいだ変わることがない。とくに法律家は容易に考え方を変えようとしな。アメリカの法律家は1934年になっても、300年前のイギリスのコモンローを適用していた。

第一次世界大戦後になっても相変わらず資本制経済（市場の拡大・繁栄・成長・進歩などを実現するはずであった経済体制）を前提に問題の処理を考えていたということでは、マルクス主義者も自由主義者も間違っていた。マルクス主義者は戦前に登場してきた社会理論を戦後の状況に適用することを考え、自由主義者は戦前にしか通用しない経済政策の適用を戦後になっ

でも考えていた。第一次世界大戦が持った意味を考えるのに、戦前に通用していた考え方の枠組みを適用していたのである。戦争は、ただ一時的に歴史の流れを中断しただけだと考えられていたが、じつは世界が置かれている状況を根本から変えてしまっていたのである。1929年にアメリカで始まった大不況の本当の原因は、第一次世界大戦と戦後のベルサイユ体制であった。またロシアで戦後に始まった「五ヵ年計画」は、ボルシェビキ政権が世界革命の夢を放棄して、ロシアを戦時にも国家として存続できるようにするための政策であった。それにもかかわらず、それがマルクス主義的な政策であると誤解されていた。

## 第17節 大不況

経済学者に言わせれば、1929年にアメリカで始まった大不況は経済的なものだったが、この大不況は戦前まで繰り返されていた景気循環とは根本的に違ったものであった。1912年までの不況は不景気に過ぎなかったが、1929年の大不況は第一次世界大戦で資本制経済が崩壊してしまった結果であった。たとえばサンジェルマン条約でオーストリア帝国は解体されたが、それは大規模化していた市場を再び小さな市場に分割するという歴史の流れに逆行する試みであった。「後退 regress」を「前進 progress」と言い換えたところで、状況を変えることはできない。ところが戦後に各国が採用した政策がそれであった。第一次世界大戦の戦勝国は、可能なかぎり広い世界市場の創設を考えるべきであった。「自由な経済活動を世界中で可能にするため、世界を一つの市場に変える」。この条項さえあれば戦後の条約はすべて不要になっていたし、世界平和が実現していたはずである。しかし、こんなことを1919年に提案していれば、暗殺されていたかもしれない。いまでも外交の世界では、この言葉は「禁じ手 tour de force」である。

第一次世界大戦から導き出すべき教訓とは、商品の絶えざる生産こそが

人類を一つに結びつける唯一の方法だということである。ところが各国がまず手をつけたのが、自国の人口回復と権威回復であった。各国民の人口回復や権威回復では人類の結末は実現しない。商品の生産だけが人類の結末を実現できた。やがてロシア人も、このことに気づくようになった。資本制経済を採用している国でさえ、商品の生産を優先することで人類を一つに結び付けることより、自国の人口回復と権威回復を優先させていたのである。ましてや資本制経済を採用していない国においておやである。世界中で自国民優先の政策が採用されることになった。

## 第18節 裏切り者のユダ

マルクスは視野が狭すぎた。論理的な一貫性に拘り過ぎて、現実を無視したのである。第一次世界大戦が齎した革命的な変化を各国政府が無視できたあいだは、マルクスの視野の狭さも表面化することはなく、ちょっとした変化までが「革命」と呼ばれるようになった。いまや「革命」は、あらゆるところに存在する。映画の登場やナイロンの登場までが「革命」と呼ばれるようになり、真空掃除機の登場が「革命」と呼ばれるようになった。しかしマルクスがいう「革命」は、そんな意味ではない。

マルクスは経済問題についてはよく判っていたが、人間については素朴な農村の主婦ほどの知識もなかった。そんなマルクスの視野の狭さが第一次世界大戦の結果、明白になった。第一次世界大戦後、人間は訓練によってどうにでも変わりうるものが判ってきたのである。ロシアで人間はあらゆる喜びを奪われ、単なる「生産機械 body economic」と化していた。支配者たちは「プロレタリアート」を自称していたが、彼らは革命精神に燃えた修道士のような存在であった。19世紀にロシアの貴族やインテリゲンチヤ（知識人）が耐えてきた苦しみと殉教が、それを要求したのである。

人間はイデオロギーを使って自分の真意を隠そうとする。人間は合理主義者が考えているほど単純ではない。マルクスは、人間が真意を隠すため

身につけていたイデオロギーを剥ぎ取ってみせた。利益追求こそが人間の真意であることを暴露してみせたのである。しかし、それで人間の本质が変わったわけではない。マルクス主義者ですらイデオロギーを使って自分の真意を隠そうとする。アッシジの聖フランチェスコが「我が兄弟のロバ brother donkey」と呼んだ自分の肉体を、人間は捨てる訳にはいかない（精神を重んじた聖フランチェスコにとって自分の肉体はロバと同じで、重要ではなかった）。労働にとって肉体は必要不可欠である。その労働が原因で「世界中で嘆きの声が上がっている waft a sigh from Indus to the Pole」(Alexander Pope's poem, Eloisa to Abelard, 1717)。労働者も個人では何もできないが、団結すれば束縛の鎖を外すことができる。神の呪いが労働を人間に強制することになったとされているが（エデンの園で神の禁令を破った人間の父祖アダムは、罰として労働を課せられることになった）、それは呪いであると同時に祝福でもあった。労働者個人にとって呪いであっても、そのおかげで労働者は団結することが可能になったからである。

世界の労働者を団結させようとしたボルシェビキ政権の意図は立派だったが、立派な意図だけでは何も実現できない。またボルシェビキ政権はペルン Perm 市にユダの銅像を建ててユダヤ人の裏切りを後世に残そうとしたが（ペルン市は内戦期に赤軍と白軍が争奪戦を繰り返した重要な都市であった）、これなどボルシェビキ政権の立派な意図を無意味にしてしまう行為であった。20世紀は裏切りの世紀であった。ドイツでナチ党が台頭できたのも、裏切り行為による敗戦という神話が信じられたからであった。人間は卑劣な動物で、リーダーが信じられるあいだはリーダーの言うことに従うが、リーダーが信じられなくなると平気でリーダーを裏切る。弱い者が強い者に仕返しをする唯一の方法が裏切りである。ニーチェはワグナーを裏切り、それをワグナーに対する勝利と呼んでいたが、これなどキリストを裏切ったユダの現代版である。現代の小説には、ユダはキリストと対をなして登場してくる。世俗の問題に疎いキリストと違って、ユダは権力と成功を望む世俗的な本能の持ち主であった。イギリスの小説家ロレンス

D.H.Lawrence が『力こそ全て Blessed Are the Powerful』を書くような現代において（大国の政府が手に入れたがるのも「力 power」である）、ユダは「力」信仰の象徴であった。ユダなら、ローマ軍をエルサレムから追い出してユダヤ王国を再建できたかもしれない。ユダなら、難を逃れるためにキリスト教に改宗することも無かったはずである。人間は、どんな苦難に直面しても祖国を裏切るようなことはしないものだと思われていたが、ボルシェビキ政権はロシアを裏切ってみせた。ロシアを裏切ったとき、彼らはユダの意味に気づいたのである。

ユダは心理分析の小説や共産主義者の小説で好んで取り上げられた人物であった。キリストと同時代の優れた支配者ならアウグストゥス帝 Caesar Augustus がいるのではないかということになりそうだが、彼は異教徒であってキリスト教とは無縁な人物であった。ところがユダは違っていた。ユダ的な現実主義こそ、原罪を償うために生まれてきたキリストの対極にいる我々の本質なのである。「手で労する者に美徳の持ち主などいない No manual worker can be virtuous」とアリストテレスも言っている。

製造機械の歯車に過ぎない労働者は意志薄弱で信用できず、いつ裏切るか判らない。それも悪意からではなく、無力で恐怖に怯えているからである。もっとも、こう言ったからといって信頼できる立派な人間がいないということではない。大衆の一員でいる限りそうだとただけである。オーストラリアの原住民のように、狩り立てられる一方のプロレタリアートは「恐怖に怯えている We are afraid」。このようにプロレタリアートが弱気なのは古い自由主義・個人主義を受け入れにくせに、プロレタリアート独自の価値観も持ち合わせていないからである。プロレタリアートは、いかなる理想も価値観も持ち合わせていない。これが、いわゆる「高度文明社会 higher civilization」の現実なのである。

トロツキー Leon Trotsky によれば、プロレタリアートのこの現実否定の姿勢は永久に維持されるべきであり、それこそがプロレタリアートの歴史的な使命なのである。ロシア革命で統治制度の変革が終わった訳ではな

かった。ボルシェビキ政権にとって、革命は永久に続くものであった。なぜなら、最良の統治制度など存在しないからである。トロツキーが繰り返し言っていたように、「ソ連邦も革命によって破壊せねばならない」のである。こうして資本制経済を採用している国とマルクス主義者の対立・抗争が、永遠に続くことになった。革命が必要でなくなるのは、「最後の審判」で「この世」が終わりを迎える時である。フランス革命のときエベール Jacques René Hébert は大衆の自治能力を信用していなかったが、ボルシェビキ政権も大衆の自治能力を信用していなかった。大衆は搾取や統治の形態に関係なく、つねに気まぐれで<sup>あ</sup>当てにならない存在であった。そこから、ボルシェビキ政権に特有の「終末論 eschatology」が登場してくることになった。襲撃・無法・破壊は「世界が終末<sup>むか</sup>を迎えるとき Last Day of Creation」まで続き、最終的には地上に平和が訪<sup>おとず</sup>れるが、それまで流血・暴力・背信・紛争・戦闘が続くのである。つまり平和は歴史（世界）が終わるときになって、やっと実現するのである。

なぜ、このような「終末論」が必要になるのか。それはボルシェビキ政権が<sup>な</sup>情け容赦のない革命家の<sup>ふ</sup>振りをするためであった。いま（この本の初版が出版されたのは1938年）ロシアを支配しているのは経済秩序の維持者に<sup>す</sup>過ぎないが（帝政時代の「小役人 Chinovnik」以下である）、それでも彼らは真っ赤なマントを着た革命家の<sup>ふ</sup>振りをしたがっている。いかなる理想とも無縁なくせに、アメリカ＝インディアンの<sup>きとうし</sup>祈祷師のように、皮膚を赤く染めたがっている。迫害に苦しめられてきたことを理由に狂信的な理想主義者の<sup>ふ</sup>振りをしているが、じつは形あるモノしか信じない支配者なのである。

## 第19節 ロシア革命とフランス革命

なぜボルシェビキ政権は赤旗を国旗にしたのか。なぜ彼らは理想を馬鹿にしたのか。ブルジョア国家の理想論を彼らは敵視していた。なぜなら、それはロシアのインテリゲンチヤ（知識人）が追いつき追い越す目標

としていたヨーロッパそのものだったからである。洗練されたヨーロッパ文化に対抗するため、彼らは「ことさら粗暴な言葉 language of complete denudation」を使うことにした。ブルジョア革命の洗練された言葉を超越するためであった。

ボルシェビキ政権にとって革命とは、何かを実現するための手段でなく目的そのものであった。そこで「永久革命 perpetual revolution」なる奇妙な言葉が登場してくることになった。奇妙ではあったが、戦後の革命家たちはこの言葉を受け入れていた。ヒトラーやムッソリーニまでが、スターリンのように「革命」という言葉を好んで使うようになった。平和で秩序立った状態は、生命力あふれる状態に対する裏切りだと考えられた。こうしてダーウィンが提唱した「生存競争 struggle for existence」は「永久革命」に姿を変えたのである。秩序・安定・平和・安全は価値の無いものとされるようになった。それは<sup>あんぐ</sup>暗愚や<sup>きょうだ</sup>怯懦を意味した。とくに資本制経済は<sup>あんぐ</sup>暗愚の<sup>さい</sup>最たるものだとされた。なぜなら、それはもともと革命によって生まれたものだからである。革命によって生まれてきた者が先祖の実現した革命の遺産に<sup>きせい</sup>寄生して<sup>い</sup>生きているのは、恥ずべきことであった。

ボルシェビキ政権は自分たちの信念を吐露することより、フランス革命の指導者たちが<sup>かぶ</sup>被っていた<sup>ひ</sup>仮面を<sup>は</sup>引き剥がすことに熱心であった。それこそが「永久革命」の「永久革命」たる<sup>ゆえん</sup>由縁であった。フランス革命と違って、ロシア革命は反ブルジョア・反自由主義・反民主主義・反国民主義であった。既存の秩序の破壊こそがロシア革命の使命であった。「永久に破壊し続けること perpetual dissolution」など現実には不可能であったが、そもそもボルシェビキ政権は<sup>むじゅん</sup>矛盾した事態を前提にしていた。彼らは資本制経済から学び・買い・借金していた。彼らが破壊を目指していた資本制経済がなければ、彼らは存続できなかったのである。プロレタリアートはブルジョアジーを否定してこそそのプロレタリアートであった。「拒む nihil」こそこそプロレタリアートのなすべきことであった。そこで家族・国家・法制度・芸術・宗教を彼らは<sup>こぼ</sup>拒んだのである。

ロシア革命を理解するためには、フランス革命をよく知る必要がある。ロシア人はフランス革命を目標にしていた。フランス革命とナポレオン戦争は別物だとする誤謬を犯してはいたが、フランス革命は乗り越えるべき目標であった。つぎの章でフランス革命を考察する際にフランス革命と第一次世界大戦の関係を考察することになるが、そのときフランス革命が全人類的な出来事であることを指摘するつもりである。フランス革命で展開される現実とイデオロギーの関係は、ボルシェビキ政権の何たるかを理解するのに役立つ。フランス革命の自由・平等・博愛の精神が世界のどこでも通用するのは、すべての人間が「理性と判断能力 reason」を持つからだ。フランス人は考えた。その考え方は、ロシア革命がマルクスの労働価値説を根拠に世界革命を考えた以上に普遍性を持っていた。フランス革命で登場してきた「フランスは唯一不可分 France une et indivisible」という考え方が、世界中で「自国民中心主義 nationalism」を生み出すことになった。

スターリンはロシアがヨーロッパの資本制経済の草刈り場であり、ヨーロッパに搾取されていると考えていた。19世紀のあいだロシアは、パリを中心としたヨーロッパ文明の周辺国に過ぎなかったと考えていた。フランス革命の理念の担い手であったナポレオン1世は、モスクワまで行きながら何もできずにモスクワの大火で撤退を余儀なくされた。フランス革命の理想がロシアで農奴解放を実現することになったのは、ナポレオン3世の時代になってからであった(1861年)。フランスからの影響はロシアにとって問題提起になっても、問題解決にはならなかったのである。

19世紀は、「理念 ideas」が大きな影響力を振るった不思議な世紀であった。1861年のフランス革命の「理念」の浸透の方が、1812年の「ナポレオン軍 Grand Armée」の侵攻よりも大きな影響をロシアに与えたのである。周辺国に対するフランス革命の影響力のおかげで、パリはその輝きを取り戻すことになった。またフランス革命の輝きがヨーロッパ文明に与えた影響には、はかり知れないものがあつた。アルゼンチン・ルーマニア・スエデン・エジプトなどはフランス革命から受けた影響を認めており、今後も

フランス革命の輝きが失われることはないであろう。

ロシア革命に対して中立の立場などあり得ない。ロシア革命は全面的に支持するか、それとも全面的に拒否するかしかあり得ない。フランス革命はロシア革命以上に中立の立場を取るのがむずかしい。なぜなら、ヨーロッパ人の感覚や価値観はフランス革命によって決定づけられているからである。

「フランス革命が囁く、自由という甘美な言葉 soft language of liberty in France」に耳を傾けるまえに、まずはロシア革命の信条と教義に耳を傾ける必要がある。

## 第20節　メーデーの登場と歴史の終焉

革命後のロシアでは、人間は壁を作るために積み上げられたレンガのような扱いを受けてきた。革命後のロシア文学で読むに値する僅かな例外が、グラトコフ Feodor Galdkov の小説『セメント』である。セメントのように形のないものは、すべて消滅していく様子がうまく描かれている。革命で人間はセメントと化していた。人間のみならず、あらゆるものがセメントになっていた。思想家・作家・詩人は「空気のような存在 man in the air」であった。彼らは存在するに値しない者、消え行く者だったのである。顔を持った人間、笑ったり泣いたりする人間も、労働者の刻印を押された瞬間に人間であることを止めてしまう。日々繰り返される工場での労働の結果、子供っぽく純朴だった労働者の顔は、やがて国が期待する工場労働者の顔に変わっていく。1000年の遅れを取り戻すために、ロシア人はロシアの工業化を目指して禁欲的に働くことになった。彼らを見ているとシオンの山にいた見張りのように思えてくるが(『エレミア書』31:6)、彼らにとってシオンとは日々の労働を行なう工場であった。我々の肉体に物理的・機械的な側面があることは否定できないし、それが手で触れることのできる形あるものであることも否定できない。しかし機械的な作業は変化がなく

て退屈である。鉦石を砕く機械・ハンマー・スチームローラーは、同じ動作を繰り返す「反歴史的な anti-historical」存在である。

このような機械的な繰り返しを重視する考え方は、チベット仏教のマニ車おなと同じである。チベット仏教では、マニ車まわが回った数だけお祈りをしたことになるそうだが、機械的な反復作業も繰り返される動作であるということでは同じである。有名なソ連映画に『世界を揺るがした10日間』があるが、ロシア革命が世界をさほど揺るがしたと我々は感じていない。ファシズムとナチズムは（それぞれイタリア革命・ドイツ革命とどう関係していたかについては後述する）、この単調で退屈なマニ車の回転音に対する反逆であった。ファシズムとナチズムは人間の感情を化学記号や動物学の用語で表現したり、男女間の愛情の結果を説明するのに染色体の話を持ち出したりするのに反感を持っていた。ところが自然を崇拜するロシア人は化学記号が大好きであった。またロシア人は、医学を新しい宗教のように信じていた。善悪の違いなど問題でなく、問題なのは健康であるか否かであった。それこそが「労働力」として使い物になるか否かに関わる重要な問題だったからである。そこでモスクワで何百人もの医者が養成され、ソ連の北部や東部に送り込まれていった。医師と物理学者は、人間を「労働力」の担い手あたと考える新しい「福音（よき知らせ）gospel」の宣教師であった。

5月1日のメーデーは、そんな労働者が一体感を味わえるときであった。彼らは丸まるで春を迎えた自然界のように若返り、無限の力を感じるのである（もともとメーデーは、春おとずの訪れによって自然が再生したことを祝う祭典であった）。ただし彼らは、もはや個性を持った人間ではない。

自然崇拜は人間の弱さを強調する。太陽・月・雨・天候に支配されると考える人間は、太陽・虹・流星・樹木などを崇拜するようになる。ロシア革命は、こんな弱い人間に対処せねばならなかった。そのためにボルシェビキ政権が採用した方法は、自然が再生することを強調することであった（ナチ政権もメーデー以外に、ゲルマン人の自然崇拜の儀式を採用していた）。ただし、それは詩に登場してくるような自然でなかったし、古代人

が信じたような恐ろしい自然でもなかった。何千人もの人間が一緒になって歌うコーラス、あちこちに設置されたラウド＝スピーカーうたを使って唄われるコーラスのような、機械的な「自然」であった。それは集団催眠の技術を使って実現される「自然」であった。何千人もの人間が一緒になると、大衆は集団催眠かかに罹る。スタジアムに集められた1000人の子供が、ザール地方の労働者に対する抑圧を歌にしていたのを思い出す。「ドイツ人労働者は凄まじい憎悪によって奴隷状態しを強いられている」。こうしたコーラスのメンバーは自分の意志を持っていない。1人になれば、まるで無力である。ひとり1人の子供は、口わかにしている歌詞の意味も判っていないはずである。しかし皆で一緒になると、意味の判らない歌詞も唄える。このような大衆集会で唄われる歌は内容のない空虚なもので、聞いていると胸が悪くなる。しかし、それを学校で教わるような詩と同じ基準で評価してはならない。学校で我々は、詩を花のように大切にするように教わった。ところがプロレタリアートのコーラスは、工場からでる蒸気のようなものである。扇動者は工場の蒸気を周辺あふに溢れさせ、花のような詩は毒ガスによって枯れてしまう。その結果、大衆は一斉いっせいに同じ行動むに向かうことになる。

労働者の祭典だとされている5月1日のメーデーは、労働者の何たるかをよく表あらわしており、またそのことに対して労働者は当然の評価を受けている。かつてクレマンソー Georges Clemenceau は、彼が愛してやまなかった個人主義に反対する「劣った人間 Untermensch」のデモについて、つぎのようなことを書いている。「この情けない光景に直面して、誰もが過去の栄光そうしつの喪失に同情を禁じえないであろう。我々の息子たちは過去が葬り去られ、やがて訪れてくることになる破局をまえに、原始人の野蛮状態こそが望みうる唯一の希望となる時を迎えることになる。そのとき彼らが味わう苦痛は頂点に達するが、この苦痛を終わらせるべきだと考えることもなく、またこの運命に立ち向かうために必要な方法も思い浮かばない。そのとき我々は、世界の崩壊を覚悟しなければならなくなる。」

「気づかぬうちに我々はそんな運命に屈服し、殴られても痛みを感じなくなり、さらに歳を取るとともに知覚を失って、死に至る道に脚を踏み出して行くことになる。土から生まれ土に帰っていく人間にとって、揺り籠がすなわち墓場なのである。容赦ない退行が始まり、最後まで生き残った人間は、どこか判らないところに消えていくことになる。こうして素晴らしい世界に誕生することで始まった人間の戦いは、最悪の形で終わりを迎えることになる。それまで悪い側面を何とか押さえ込んできた人間を取り巻く環境が変わり、劣った人が優れた人間を凌駕する時代が訪れてくる。だれも最善を目指さなくなり、環境がさらに悪化すると人間・動物・樹木は生気を失い、輝きを失ってしまう。原始状態への退行を止めることができなくなり、優れた人間は劣った人間の台頭を抑えきれなくなる。こうして今に至るまで続く退行（それは昔に覆われていて目に見えない）、何世紀も続いた無関心によって必定のものとなった敗北が運命づけられるのである。」

「私には都市が崩壊していく様子がよく見える。人間が人間でなくなり、その命が終わりつつあること、また思想・芸術が崩壊していく様子がよく見える。」

メーデーのデモを見たとき、上流階級の人間が何を感じたかをクレマンソーは説明している。そのときクレマンソーは「**苦**」とか「**劣った人間**」という言葉を使っているが、こうした言葉については、さほど深刻に考える必要はない。第一次世界大戦以前、すでにクレマンソーはヨーロッパ文明（思想・科学・芸術）の崩壊を予測していた。彼が使っている「**苦**」という言葉は、現代の「大衆 masses」と同じ意味である。労働者は失うものが何もなく、そして全てを手に入れることになっていた。「労働者は自分たちを縛っている鎖以外に失うものは何もない」（マルクスとエンゲルスが起草した『共産党宣言』末尾にある言葉）のである。

労働者が望んでいたのは、最初から何も変わらないことであった。忘れられた存在、無名の存在で過ぎない労働者に、優れた人間になることな

ど期待してはいけない。労働者にとって優れた人間など無縁な存在である。皿洗いの仕事にしか関心のない労働者が、テーブル上の料理皿に関心が向く訳がない。ドイツの労働歌のなかで、労働者は「夜の人間 people of the night」と呼ばれていた。炭鉱や工場で働く労働者に、フランス革命の「明晰さ clarté」を期待することなど無理である。労働に縛られた者は「地下人 subterranean」である。昔話によく地下に住む「小人 gnomes and dwarfs」が登場してくるが、それは昔話が地下にある火と土をよく知った者、あるいは地上にある空気と水をよく知らない者の話だったからである。我々が内に秘めている暗黒面は、ふだんは明晰な思想や暖かい心によって抑えられている。しかし、それが無くなったわけではない。それを近代の機械が目に見える形で掘り起こしてくる訳だが、そのとき地下の火や土にも希望が生じてくる。そこで下等動物の呻き声が地下から聞こえてくることになるが、それが詩人の優雅な言葉や哲学者の深遠な言葉によって消えることはない。「夜の人間」と「見張りの者たち」（『エレミア書』31:6）は日々の労働に明け暮れるだけで、長期的なビジョンとは無縁である。「科学的社会主義 scientific socialism」は、人類学と民俗学を重視してきた。民俗学が問題にする先史時代は、労働者が持ちうる唯一の長期的なビジョンであった。1921年にドイツ社会民主党と袂を分かった左派は、そのリーダーであったレデブア Georg Ledebur に「人類学と民俗学の最新の研究成果を党の綱領に盛り込むよう要求している」。ブレストッド James Henry Breasted の『良心の誕生 The Dawn of Conscience』（ブレストッドは『旧約聖書』の十戒をエジプト文明が準備したと考えた）とかフレイザー James George Frazer の『金枝篇 The Golden Bough』などを読むと（フレイザーのこの本は現代の未開人や古代の宗教を論じてイギリスで物議を醸した）、古代イスラエル・古代ギリシャ・古代ローマを子供に学ばせる必要性はなく、むしろ大切なのは古代インド・古代アフリカ・古代エジプト・古代シュメール・古代チュートン・古代ケルトであって、いわゆるギリシャ・ローマの古典よりこちらの方が魅力的だということになる。

古代には歴史が存在しなかった。だからこそ労働者は古代文明を好むのである。労働者は歴史の犠牲者であった。国王・預言者・教皇の戦士として戦ってきたのは労働者であった。彼らは、大砲の餌食になるのはもうゴメンだということである。世界中の支配者たちは歴史に夢中になってきたが、そんな状態から抜け出るには先史時代に帰ればよい。ヨーロッパ嫌いでヨーロッパの帝国主義に批判的だったあるアメリカの政治家は、つぎのようなことを言っていた。「歴史のない国こそ素晴らしい。アメリカには短い歴史しかないが、もっと短くできれば、もっとよい」。彼はヨーロッパの出身だったが、アメリカをこよなく愛し、アメリカを祖国として選んでいた。ジョイス James Joyce の『ユリシーズ』で主人公も、こんなことを言っている。「歴史なんて悪夢以外の何ものでもない」。こうした言葉を手掛かりにすれば、現代の大衆（労働者）が先史時代に憧れる理由が判ろうというものである。大衆は教会や国家のことは考えない。彼らは自分たちの単調な生活が、魂だの心だのといった面倒なことで邪魔されるのを嫌っている。だからこそ先史時代の儀式に憧れるのである。

つまり正統とされるボルシェビキ政権の考え方によれば、5月1日のメーデーは歴史に意味を認めず、先史時代を復活させるための儀式ということになる。それを永遠に繰り返すために革命が継続されるのである。革命が終わるとき、プロレタリアート独裁も終わる。したがってプロレタリアートによる独裁は、資本制経済による侵略や反動勢力からソ連邦を守るために必要な一時的手段に過ぎないのである。プロレタリアート独裁だけでなく、統治制度・法制度・国家も一時的な手段に過ぎず、それは歴史が生み出したものとして排除されることになる。人類を救済するためには、歴史は排除されねばならない。とくに人間の頭脳と心から歴史は排除されねばならない。

無階級社会の実現、これこそがボルシェビキ政権の目指している目標であったが、そのためには歴史時代を排除して先史時代に戻る必要があった。それまでソ連では、無階級社会を実現する基地たるべく、レーニン

やスターリンに率いられた禁欲的なインテリゲンチヤ（知識人）が支配することになった。その支配はメーデーの登場から始まり、歴史が終わるときまで続くのである。奇妙なことに外部の人間が無階級社会の兆候をソ連で指摘すると、マルクス主義者から叱責の声が飛んでくることになる。ソ連は無階級社会を実現するための通過点に過ぎず、そこに無階級社会の兆候を見つけるなど、とんでもない暴挙なのである。ボルシェビキ政権が毎年、生産計画を立案しているあいだは、生産が「自発的に naturally」に行われることなど有り得ないのである。あるいはストリンドベリ Johan August Strindberg の戯曲に登場してくるローマ教皇は、「歴史の最後の一瞬 last syllable of recorded time」（小田島雄志訳『シェイクスピア全集』白水Uブックス29「マクベス」第5幕・第5場、161ページ）に辿り着いた後も動き続ける時計の音を聞いて、勝ち誇ったような笑みを浮かべていた（「最後の審判」のときになっても世界は消滅しなかったのである）。ボルシェビキ政権の「見張りの者たち」も革命はまだ終わっておらず、無階級社会はその兆候すら無く、プロレタリアートは日々その歴史的使命を果たし続けていなければならないと言いつけるのである。

ボルシェビキ政権によれば、人間の歴史は3つの時代に分けられる。まずロシア革命までの時代。それは階級闘争の時代であり、戦争・王朝交代・英雄などの時代である。つぎにレーニンが始めた革命の時代。それは大衆による歴史排除の時代であり、それを象徴しているのがメーデーの開始である。またメーデーは歴史のない3つ目の時代、つまり無階級社会の到来を予兆させる時代。無階級社会の時代になると人間は自然の一部となり、先史時代に帰るのである。

現在、我々は新しい時代の到来を目にしているのであろうか。なぜなら、メーデーが始まったのはロシアだけではないからである。つまり、すべての人間には先史時代に帰りたがる傾向が見られるのである。人間は永久に変わることのない存在であり、人間がやることには、もともと歴史とは無縁な側面も存在する。歴史研究と称して詩人の消化不良と詩作の関係や支

配者の不幸な結婚生活を、<sup>び</sup>微に<sup>い</sup>入り<sup>さい</sup>細を<sup>うが</sup>穿って調べる現代においては、人間には歴史と無縁な側面も存在していることを知るのはいは良いことである。

人間にとって生・死・食料・衣類・喜び・苦痛などは、いつの時代になっても変わることがない。この地球上で繰り返される世代の交代も、政治家の活動によって妨げられることはない。ただし時間が経過しても変化しないもの、さらに知るに<sup>あた</sup>値するほど変化しないことは、そう多くない。もともとキリスト教は、現世における時間の経過と現世の変化に無関心であった。とくに東方正教会（たとえばギリシャのアトス山にある修道院）は、現世とはおよそ無縁な世界であった。東方正教会は、現世の誘惑を排除するのに熱心であった。アトス山の修道士たちにとって、現世は悪夢以外の何物でもない。神を見ることができるとは、現世の誘惑を排除できた者だけだとされていた。ボルシェビキ政権の唯物論は、一見すると東方正教会の教義とまるで無縁のように思えるが、じつはよく似た考え方が前提になっている。「我々が生き様を、すべて神はお見通し Die Weltgeschichte ist Weltgericht」（シラー Friedrich Schiller）と考える者にとって（シラーは歴史が舞台上で展開される演劇のようなものだと考えていた）、ロシア革命の素朴な現世否定は一種の清涼剤<sup>せいりょうざい</sup>のように思えたものである。しかし歴史の舞台のうえで展開されるのは、喜劇だけとは限らない。目に見えないところで悲劇が起きていることも多い。

## 第 21 節 ロシアにおけるカレンダーの改変

ロシアでカレンダーに手が加えられ始めたのは、1918 年のことであった。もともとロシア人はユリウス歴を使っていたが、革命後にヨーロッパで使われていたグレゴリオ歴が導入された。これで対外交渉はやり<sup>やす</sup>く<sup>な</sup>ったはずだが、地方のボルシェビキ政権のなかにはフランス革命を<sup>まね</sup>真似て月名を変更したり、イースターやクリスマスに代えて農民運動の指導者名を記念日として使ったりするような所が出てきた。しかし中央政府の統

制が確立してくると、こうした各地の勝手なカレンダー改変は禁止された。中央政府が初めてカレンダーに改変を加えたのは 1929 年 9 月のことで、週 7 日制を 5 日制に変更するものであった。安息日を廃止することでカレンダーから宗教色をなくすというのが建前上の理由であったが、本当の理由は工場を<sup>かど</sup>休みなく稼働させて置くためであった。労働者は 5 つの色（班）に分けられ、4 つの色に属する労働者が昼・夜の区別なく働いているとき、5 つ目の色に属する労働者が休息することになっていた。夫婦<sup>いゑど</sup>と雖も、同じ色に属していない限り一緒に休みを取ることはできなかった。家族の数が多いと一緒に休みを取ることはもっと難しくなり、その結果、家族の<sup>きずな</sup>絆が失われることになった。

この「色分け制度 colour system」は 1932 年に廃止され、週 7 日制が復活して労働日は 6 日に増やされた。7 日目は全員が休めることになり、フランスの革命歴を<sup>まね</sup>真似た 10 日を単位とするカレンダーが導入される可能性は無くなった。1936 年に決められたカレンダーがその後、長く使われることになるが、それでも他の国にない特徴があった。

365 日を 12 ヶ月に分けるのは他の国と同じだが、週 7 日制と週 6 日制が併用されることになった。労働者・工場・休日には 6 日制が採用され、政府・対外関係には 7 日制が採用された。休日は各月の 6・12・18・24・30 の日とされ、2 月は 30 の日が無いので 3 月 1 日が休日とされた。

革命後も最初の 10 年間は革命前と同様、祝日の数は多かったが、10 年後には 5 日ある重要な祝日と、10～12 日ある<sup>さほど</sup>左程重要でない祝日が設定された。5 日ある重要な祝日として、まず 1 月 22 日がレーニンの日とされた。もともと 21 日がレーニンの死亡記念日、22 日が 1905 年の「血の日曜日」記念日とされていたが、それが 22 日に一緒に祝われることになったのである。レーニンの誕生日は 4 月 22 日だが、この日は祝日になっていない。ついで重要なのが 5 月 1 日と 2 日のメーデーであり、さらに 11 月 7 日と 8 日が 1917 年の十月革命を記念する祝日とされた。それほど重要でない祝日として青年・婦人・スポーツ・反戦の日が設定されたが、い

ずれもメーデーと同様、人間の優<sup>すぐ</sup>れた活力を記念する祝日とされた（さしずめ新しい多神教の登場といったところか）。労働・若さ・女性・平和こそが世界の再生を可能にしていると考えられたからである。それこそが秩序形成の基本であり、しかも永久に存在するものとされた。

ソ連のカレンダーとヨーロッパのカレンダーを<sup>くら</sup>比べてみよう。ロシア人は労働を公的なものとし、レジャーを個人的なものとした。一見すると、これはヨーロッパ人のやり方と逆のように思える。ヨーロッパ人は平日に個人として働き、日曜日にだけ仲間と教会に集うからである。しかしロシア人のやり方は、工業化された世界ではどこでも見られる現象なのである。イギリスやアメリカでも、日曜日を教会に集まる日とする慣習は失われつつある。メイド・ウェイター・ドラッグストアや娯楽施設の従業員・タクシードライバー・電話交換士などは、日曜日以外に休みを取るようになっている。工場の生産性を維持するためである。一部の労働者の日曜日が休日でなくなっていることが当然視されるようになっており、その点でヨーロッパとロシアのあいだに基本的な違いはない（違いがあっても程度の<sup>さ</sup>差に過ぎない）。アメリカのある工場では1年を13ヶ月に分け、どの月も日数を28日と決めている。毎月の生産高を正確に把握するためである。生産性と生産される商品の数が最優先されて、住民と一緒に祝う祝日などは無視されている。このままだと宗教活動に熱心で毎日曜日に教会に集まる人と、工場<sup>おな</sup>で交代しながら24時間、働く人は同じ地域共同体に属することが無くなってしまうことになる。

## 第22節 人種論の登場

ロシア人は歴史を無くすことにして、カレンダーから歴史的な行事を排除してしまった。生産活動だけを残すことにしたのである。しかし生産活動とは同じことの繰り返しを意味する。それが長く続くと、人間の精神は深刻な影響を受けることになる。人間から自由な精神を奪ってしまうから

である。それを避けるためには、生産活動だけを重視する考え方を変えるしかない。

ところがボルシェビキ政権を倒すことを目指した反革命運動は、この考え方を変えることに成功しなかった。そこでボルシェビキ政権に対抗してヨーロッパに登場して来た「国家社会主義運動 national revolutions」は、先史時代の神々を復活させることにした。それも国民的英雄は排除され、北欧神話・母性・父性・人種・民族などが高く評価されることになった。階級闘争に対抗して人種論が登場してきたのである。生産活動だけを重視する考え方に対して、人種論が<sup>たいじ</sup>対峙されたのである。生産活動も人種も時間の経過とは関係なく、それが時間の経過によって変わることもない。歴史に変化を齎<sup>もたら</sup>すためには、プロメテウスが人類に火を齎<sup>もたら</sup>したときのような画期的な出来事が必要になってくる。

いま人種論が花盛りだが、それは生産活動一辺倒の共産主義に対抗するうえで一番、簡単な方法だからである。人種論も歴史を重視するふりをしながら（たとえば紀元前753年にローマ人が登場してきたと主張する）、実際は変わることがない人間の側面を強調することで歴史を排除している。人間が生まれたり空腹になったりする事実は、いつの時代でも変わることがない。しかし歴史が問題にするのは、そんなことではなくて一回限りの出来事なのである。

生産活動だけを重視したり、人種の違いだけを重視したりする歴史家は、もはや歴史家の名に値しない。1936年5月1日のメーデーの日、ドイツ人はファラオと奴隷の時代のエジプト人のように生きること、そして4000年続く政体を作り上げると宣言した。

4000年という時間の長さを念頭に置けば、15年単位や30年単位で起こった出来事など無意味に思えてくる。そこで現実を無視した神話が幅<sup>き</sup>を利かすことになった。細部の正確さなど無視され、歴史の捏造<sup>ねつぞう</sup>が平気<sup>おこな</sup>で行われることになった。永遠を前提にした者にとって、細部の正確さ<sup>など</sup>等どうでもよいことに思えてくるからである。

そんなことが世界中で起きており、トルコ・ロシア・ドイツ・イタリアなどで歴史の書き換えが行われている。民族であれ個人であれ、本当に望んでいることは何とかして手に入れるものである。生産活動中心主義であれ人種論であれ、大衆が正しいと信じていけば正しいことになってしまう。景気変動の波に飲み込まれてしまった事業家は、自分で景気をどうすることもできないのと同じである。ただ救いがあるのは、それでも選択肢が複数あるという事実だけである。

まともな歴史家なら、特定の集団の一方的な言い分に加担するようなことがあってはならない。生産活動中心主義や人種論にどう対抗していくかは、歴史家に課せられた重要な使命である。特定の集団の言い分や考え方は、危機や絶望のなかで当局の意を受けた者が「これぞ真実」と提唱するものである。そこで提唱される新しい神話・新しいカレンダー・新しい社会秩序は、あくまでも事実の一部に過ぎない。労働・民族・体制・若さのような、捉え所のないスローガンに対抗するのは不可能である。そんなスローガンを掲げて行進してくる集団を止めることはできない。

どれほど難しくても、敵対する2つの考え方やカレンダーから一纏まりの現像を作り上げることが重要なのである。現実は一時的な主張より複雑なものである。それに、そもそも敵対する相手の考え方やカレンダーを変えさせることなど不可能に近い。生産活動中心主義の考え方ですら、その登場には大変なドラマ（ロシア革命）が必要であった。もちろん、この本の著者は生産活動中心主義や人種論を受け入れるものではない。両者に未来は存在しないからである。我々がやるべきことは、生産活動中心主義や人種論に代わる新しい理念を提供することである。

生産活動を重視するボルシェビキ政権にしても、それに対抗して登場してきた国家社会主義にしても、個人の存在を認めない彼らが重視するのは革命家のポーズと敵対的な態度である。新しい歴史観も新しいカレンダーも、その根は同じであることを彼らはよく知っている。こうした非歴史的なものに対する関心の登場は、1世紀以上も前に登場して来た個人主義（フ

ランス革命）に対する反動の結果である。フランス革命は人種論にも生産活動中心主義にも反対であった。フランス革命は、個人の力や個性の発揮を可能にした革命であった。フランス革命が成し遂げたことを評価するためには、生産活動を重視する考え方を忘れて、劇的な演出を重視する考え方を採用する必要がある。

## 第5章 フランス：

### 小さな1地方に生まれた偉大なヨーロッパ人

#### 第1節 革命のドラマ

フランス革命は、まるで舞台上で演じられる演劇のようであった。つぎつぎと劇的な場面が展開される演劇のようであった。1789年6月23日にミラボー Comte de Mirabeau は次のように叫んでいた。「我々が銃剣に屈することは無い Nous ne cédon's qu'à la force des baionnettes !」。もっとも、これは近くに国王軍がないことを知ったうえで、恰好を付けるために口にした台詞であった。聖職者と貴族の特権廃止が実現したのは、同じ年の8月のことであったが、それを決めた国民議会の議場は熱狂した議員で大騒ぎになっていた。マルス広場での憲法宣誓の集会、「理神祭 festival of Reason」の開催、国王・王妃・多くの貴族たちの処刑など、これら全ては意図的に演出された劇的な場面であった。

ダントン Georges Jacques Danton が処刑人に対して言ったような「気の利いた台詞 bon mot」は、ロシア革命で発せられることはなかった。「私の頭を市民に見せるのを忘れるな。それだけの価値がある頭だからな。N'oubliez pas de montrer ma tête au peuple. Elle en vaut la peine。」

ベルサイユ宮殿からパリ市内に国王一家が移送されたときの様子とか、国民公会で議員たちが披露してみせた雄弁などは、演劇に負けない魅力に満ち溢れていた。パリのパンテオンには、フランス革命当時議論に夢中になっていた議員たちの彫像が残されている。彼らの熱い言葉がナポレオンを生み出し、偉大な革命軍を生み出したのである。ナポレオンに率いられた革命軍は、フランスの東にいた独裁者たちを倒すべく東進して行くことになる。

フランス革命が勃発したときから、すでにそのユニークさに注目していた同時代人がいた。たとえばクロプシュトック Friedrich Klopstock は「大胆

なガリア人たちの議会 bold Diet of Gaul」の登場を「人類の夜明け a new day of mankind」と呼んでいたし、ゲーテ Johann W. Goethe は1792年のバルミー Valmy の戦いを、「新しい時代の始まり a new era in the history of the world」と呼んでいた。

バスチーユ牢獄の鍵がマウントバーノン Mount Vernon (バージニア州北部) にあったジョージ=ワシントン George Washington の屋敷に送られて保管されることになったが、おかげで1789年7月14日のバスチーユ牢獄の襲撃は、アメリカの独立宣言と関連づけられることになった。

フランス革命で初めて人間の意志が、歴史上の出来事と結びつけて考えられるようになった。人間は自分がやっていることを理解するようになったし、理解していることを行動に移すようになった。それまで歴史とは、訳のわからない偶然の出来事・災難・運命の巡り合わせ、危機・策略の連続としか考えられていなかったが、それが理解可能なものになったのである。

こうして、すべてが突然「明晰に clair」になった。人間は突然、世界の出来事を理解できるようになった。このことをヘーゲル Friedrich Hegel は、つぎのように書いている。「それは人類史上、初めてのことであった。初めて人間は世界を理解できるようになった。世界史は意志を持つようになった。神と人間のあいだで和解が成立し、人間は世界の出来事を支配できるようになった」。フランスで旧体制が崩壊し、人間は世界を支配できるようになったのである。

フランス革命は人間の自由意志と危機が生み出した偶然の結果であり、それが成功したのは奇跡だと革命当時は信じられていた。しかし、そのことがいま忘れ去られている。ロシア革命は、1世紀もの長きにわたって冷徹な計算のもとで準備された革命であった。そのため我々は偶然の面白さが判らなくなっている。革命は計画されて起こるものだと考えられるようになったが、そのようなことは実際にはない。計画された革命は成功しない。1934年にオーストリアで社会民主党による革命が失敗したのは、それが

計画された革命だったからである。革命に付き物の殺人や破壊行為は、あらかじめ計画できるものではない。革命は激情の産物なのである。嫉妬心が殺人を実行させるのである。劇場で演じられる演劇と同じように、激情が革命や反乱を起こすのである。フランス人は劇作家と同じように、「道徳・理性 Reason」に反することがあるから革命が起きるのでないことをよく知っていた。「道徳・理性」にできることは、革命をコントロールすることだけである。フランス革命は計画・陰謀・故意などと無縁であった。理不尽な世界が「道徳・理性」と結びついたとき、フランス革命が可能になったのである。フランス語の「革命 Révolution」という言葉は、ロシア語・英語・ドイツ語・イタリア語のそれと意味が違っている。まず、そのことを説明しておきたい。

19世紀の歴史家たちは、フランス革命の勃発を1789年5月の全国三部会の召集と結びつけて考えており、ミラボーの銃剣に関する発言もフランス革命の勃発を意味するものと考えられていた。しかし1789年当時、誰も革命のことなど考えていなかったのである。ミラボーやデムラン Camille Desmoulins、あるいは在仏外交官が書き残したものでは、1789年6月から7月の出来事は「革命」と呼ばれていない。当時は「反乱 rebellion, insurrection」とか「内乱 civil war」という言葉が使われていた。改革派が要求していたのは、古い権利の復活とかフランスの「再生 régénération」であった。ミラボーが好んで使っていたのも「再生」という言葉であった。改革派は新しい秩序の登場を望んでいたが、保守派は改革派の主張が伝統に反するとして反対していた。

そこに「革命」という言葉が登場して来ることになった。7月14日にバスチーユの牢獄がパリの群衆に襲撃され、その翌日に扇動家のデムランをはじめ宮内長官のリヤンクール公爵 duc de Liancourt、駐仏アメリカ大使のモリス Gouverneur Morris たちがこの出来事を「革命」と呼んだのである。バスチーユ牢獄が襲撃されたという事実を彼らは「道徳・理性 Reason」に「適っている」と判断して、それを「革命」と呼んだのである。その後26年

間（つまり1815年の王政復興まで）、フランスでは偶発的な事件がまずあって、ついでそれが「道徳・理性」に「適っている」否かを判断するというやり方が採用されることになった。「道徳・理性」に適った偶発的な事件を支持する者が「革命家 revolutionary」であり、支持しない者が「反革命家 counter-revolutionary」であった。哲学者コンドルセー Marquis de Condorcet によると、「革命家」という言葉は1789年になって初めて登場してきたことである。イギリスで「革命家 revolutionist」と呼ばれたのは、1688年以降（名誉革命後）のホイッグ党員であった。アメリカで独立戦争を初めて「革命戦争 Revolution War」と呼んだのはパトリック＝ヘンリー Patrick Henry で、1791年のことであった。独立戦争中は、まだアメリカに「革命家 revolutionary」は存在しなかったからである。当時「革命家」という言葉は「反逆者 insurgent」を意味していて、法と秩序を求めてイギリス軍と戦っていたアメリカ人は、自分たちを「反逆者」とは考えていなかった。

フランス語で「革命家」という場合、それは「道徳・理性に従って革命を支持する者 men who stood with their reason on the side of the revolution」を意味した。革命に関する英語の言葉は（「革命化する revolutionize」、[「超革命的 ultra-revolutionary」、[「反革命的 counter-revolutionary」など）、すべてフランス語起源である（それぞれに対応するフランス語は révolutionner, ultra-révolutionnaire, contre-révolutionnaire)。もともと事物を客観的に表現するだけの言葉であったものが、のちに主観的な感情を表現する言葉に変わることはよくあることだが、「革命」というフランス語もその1つである。「革命」という言葉は、「重装歩兵密集方阵 phalanx」・「百人隊 centurion」などと同じように、もともとラテン語にあった言葉であった。ただ、それほど使用頻度が高くなかっただけである。それが突然、国王に対して使われることになった。「反乱ではありません、陛下。それは革命です Ce n'est pas une révolte, sire, c'est une révolution !」。国王に対して使われたことで、この言葉は一挙に広まることになった。まず不定冠詞が付いた状態（une révolution）から定冠詞が付いた状態（la révolution）に変わり、ついで大文字で始まる固有名詞（Révolution）

に変わったのである。もともと戦闘・戦争・侵略といった言葉と対をなす政治用語で、反乱・扇動・暴動と同じような意味で使われていたが、それが独特な意味を持つ言葉に変わってしまった。「革命、それは私のことだ La Révolution, c'est moi」という表現の方が「国家、それは私のことだ L'Etat, c'est moi」という表現より大きな影響力を持つことになった。「国家 l'état」・「政府 le gouvernement」・「教会 l'église」・「国王 le roi」・「神 Dieu」といった言葉より、「革命」という言葉の方が権威を持つようになり、大きな影響力を持つようになった。

「言葉がもつ影響力の大きさは、その言葉の派生語の数から知ることができる。言語学者のフェロー Jean-François Féraud によれば、1789 年以前には革命 Révolution という言葉しかなかったが、それが 1789 年の革命後になると動詞 révolutionner、名詞・形容詞 révolutionnaire が派生しており、結果的には 14 の派生語が登場している」。

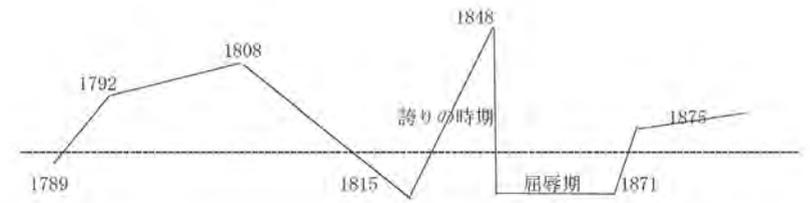
さらにイギリスでは、「革命家」を意味する revolutionary (révolutionnaire に由来) が、もともと使われていた revolutionist に取って代わることになった。ただし、このフランス語由来の言葉が英語として定着するのには 1 世紀近く掛かっている。ほかにもフランス語に由来する言葉として「首相 Prime Minister」(もともと First Lord of the Treasury と呼ばれていた) や「自由党員 Liberal」(もともと Whig と呼ばれていた) などがある。

7 月 14 日のバスチーユ牢獄の襲撃事件以後、リヤンクール公爵が国王に対して使った「革命」という言葉がフランス中で使われるようになった。その夏、フランス全土が「大恐怖 Grande Peur」に支配されることになるが、それは誰もが旧秩序の崩壊を本能的に感じ取っていたからである。ゲーテも未完の戯曲『かくし娘 Die natuerliche Tochter』で主人公に、つぎのようなことを言わせている。「大同団結して偉大な生活を営んだ人々が相互の愛の力で日々、新たなる統一を達成しようと抱き合うことは無くなったのです。みな逃げてしまって、一人ひとり冷やかに自分の殻に引きこもっています」(『ゲーテ全集』第 5 巻、潮出版社、234 ページ。「かくし娘」第 5 幕・第

8 場より)。「大恐怖」は、古くからあった伝統的な秩序が崩壊してしまったことに対する民衆の本能的な反応であった。何の根拠もない恐ろしい噂が流布していたが、大切なのは噂の内容ではなかった。大切なのは、安全が保障されなくなると誰もが感じていたことであった。これまで、1789 年の夏に「大恐怖」が始まった原因は不明だとされていたが、じつは「大恐怖」は簡単に説明できる。犬や馬は雷雨の予兆を感じ取ることができると言うが、1000 年も続いた社会秩序の崩壊を人間が感じ取れないはずがない。従来の歴史学は「大恐怖」を特別な出来事と考えて来たが、人間が本来もち合わせている能力からすれば当然、起こり得た現象であった。

1789 年の革命勃発から 1794 年のテルミドールの反動までは、革命に対処するために「道理・理性」に適った方法を見つけ出すべく模索が行われていた時期であった。最初に試みられたのがイギリスのやり方で、地方自治を導入すれば問題は解決すると考えられていた。フランス全土で地方自治の制度が導入されたが、それはフランスがまだ国家として成立していなかったルイ 4 世 Louis IV (921-954) の時代に戻ることを意味した。当然のことながら問題の解決にはならなかった。1791 年 7 月 23 日にコンドルセーは、こう言っている。「2400 万の人口と 2 万 7000 平方マイルの国土をもつ国で、はたして共和制は機能するのだろうか」。同年、ロベスピエールもナポレオンも同じ意見であった。バスチーユ牢獄の襲撃が成功した 2 日後、指導者の 1 人もこう考えていた。「両隣に 2 つの強国が存在するフランスのような国は、国王に統治権を委ねるしか方法はない」。まだ連邦制というアイデアは存在しなかったし、共和制が可能だとも考えられていなかった。当時存在していた共和国は、いずれも貴族支配の国であった。ベネチア・スイス・ジェノバ・アメリカ(ジェファソン Thomas Jefferson 以前のアメリカ)は、いずれも少数者が支配する国であった。なぜ当時のフランス人が王政よりも貴族政を嫌ったかは後で見ることにして、ここでもフランスの革命家がどれほど真面目だったかが判る。彼らは真剣に革命のあるべき姿を模索していたのである。街頭で練り広げられる革命は、議会に

いる政治家によってその意味が解釈され、政策として実現に移された。「道理・理性」に従ってパリの街頭や広場で展開される運動の意味が解釈されたのである。バスチーユの牢獄が破壊されたため、バスチーユの牢獄なしで強力な行政権をどう実現するかという問題にフランス人は直面することになった。そこで歴代の革命政府は、つぎつぎと新しい政策を試用することになった。まず1791年、気まぐれな国王を統制する「憲法 law paramount」が制定された。1792年には「国民公会 Convention nationale」が対外戦争に国民を動員して専制君主たちと戦いを始め、「血まみれの旗が掲げられた」（フランス国歌）。さらに1794年になるとロバスピエールは革命を守るために、極端な革命派も反革命派も排除するようになった。イギリス的な王党派も、ボルシェビキ党のようなエベール派も排除されたのである。1795～98年の「総裁政府 Directoire」は、対外戦争を進めながら国内では穏健な政策を採用するようになっていた。この「総裁政府」の試みが1798年に失敗すると、つぎにフランス国民が期待を寄せたのは対外戦争で成功を収めていたナポレオンであった。国内問題の解決は延期され、革命が掲げる理念と秩序回復を実現することがナポレオンに期待された。ナポレオンは革命が生んだ英雄であった。彼がイタリアの戦場からジョゼフィーヌ Joséphine に宛てた手紙を読むと、まるで恋人のために花火を上げているかのように戦場の様子を詩に書いている。恐怖政治が吹き荒れた時代に「革命は我が子を貪り食っている」と言われたものだが、革命に貪り食われたのはナポレオンであった。彼は第三身分の代表であった。第三身分の才能・要求・情熱を一身に体現した英雄であった。ただし、彼を英雄にしたのは彼自身ではない。革命が彼を英雄にしたのである。そこで彼が革命を裏切ったとき、彼は英雄であることを止めた。彼の母親レティチア Letitia は彼の出世ぶりを知って、こう言ったそうである。「すてきなこと。でもそれが何時まで続くことやら」。ナポレオンが革命の子であることを止めたとき、彼の出世も終わることになった。最初の妻ジョゼフィーヌと離婚してオーストリア皇女マリー＝ルイーゼ Marie Louise と結婚したり、



ルイ16世の甥を気取ったりしたことで、ナポレオンはフランス国民の支持を失うことになった。タレーラン Charles Maurice Talleyrand-Perigord とフォーシェ Joseph Fouché はナポレオンを見捨てて、ルイ18世を選んだのである。

ルイ18世は革命の支持者ではなかったが、1815年に亡命先から帰国したとき、革命の成果を否定することはしなかった。「自分の帰国によって変わったことと言えば、よきフランス人がひとり増えたということだけである」。こうして革命は終わったのである。教会と貴族の財産を買った者の権利は保障され、ルイ18世は自ら署名した「憲章 Charte」によって、1791年の「憲法」が制定した立憲君主制を受け入れたのである。

フランス革命が持った意味を考えるまえに、簡単にその後の歴史を確認して置くことにする。1789年に始まった革命は1815年に終わり、王政復古で再登場したブルボン王朝による支配は1830年まで続くことになる。シャルル10世の馬鹿げた政策で教会や貴族の土地を買った者の所有権が脅かされ、革命で獲得されたさまざまな権利が脅かされることになったが、1830年の七月革命でブルボン王朝が追放され、その恐れはなくなった。七月革命はフランス革命の終りを告げる事件であった（1905年のロシア革命がロシア革命の始まりを告げる事件であったのと違って、逆になっていることに注意。このことについては、すでに第1章で指摘した通りである）。1789年のときのようにラファイエット Marquis de La Fayette が国民軍司令官に任命されたが、彼の老いた姿は革命の終焉を象徴していた。しかし革命の展開ぶりは1789年と同じであった。一方に街頭で革命運動を主導する民衆がいて、他方で民衆の要求を政策として実現する政治家がいた。武装した共和主義

者たちはパリ市庁舎に集まり、ギゾー François-Pierre-Guillaume Guizot・ティエール Louis Adolphe Thiers・タレーラン Charles Maurice de Talleyrand-Périgord たちは、セヌ川の対岸にあったブルボン宮殿に集まっていた。そして1789年のときと同じように、革命の行方を決めたのは武器を持たない政治家たちであった。ギゾー・ティエール・タレーランの助言に従って、「中将 lieutenant general」の制服を着た「フランス人の王 le roi des Français」(「フランスの国王 le roi de France」でないことに注意) ルイ＝フィリップ Louis Philippe は、フランス国旗を身につけてセヌ川に掛かった橋を馬で渡り、パリ市庁舎に向かったのである。群衆は市庁舎に陣取った共和派がどう出るか固唾を飲んで見守っていたが、この危機的な状況を救ったのは共和派のラファイエット La Fayette であった。彼は市庁舎のバルコニーにルイ＝フィリップと現れ、ルイ＝フィリップを抱擁して見せたのである。

1830年の七月革命の後フランス革命は第3幕を迎え、ブルジョア階級の虚栄と傲慢が演じられることになった。ラファイエットのおかげで武装した共和派を何とか抑えることができたフランスは、資本制経済を開花させることになった。フランスは、カーライル Thomas Carlyle が「俗物 giganity」と呼んだ「中産階級 juste milieu」の天国となった。1830～48年は、フランス社会が腐敗に塗れた時代であった。ルイ＝フィリップはイギリスの「中産階級」が好んだ蝙蝠傘(イギリスの上流階級はそれを馬鹿にしていた)をいつも持ち歩き、国王でありながら「中産階級」に敬意を表していた。20世紀の今でもフランスでは、蝙蝠傘は政治的な権威の象徴とされている。1908年のスト騒ぎのときパリ警視総監だったレピン Louis Lépine は、大きな蝙蝠傘をつねに持ち歩いていたことで有名である。警視総監が武器の代わりに蝙蝠傘を持ち歩いていたのである。「せいぜい稼ごたまえ Enrichissez-vous」とは、ルイ＝フィリップのもとで様々な大臣職を務めたギゾーの言葉である。ラマルティエヌ Alphonse de Lamartine は当時のことを、つぎのように回想している。「フランス人は、ルイ＝フィリップと中産階級の退屈な時代にうんざりしていた。当時のフランス人が求めて

いたのは、フランスの栄光と対外進出であった」。

つぎに演じられることになる第4幕は屈辱の舞台であった。1848年に共和派の労働者が街頭にバリケードを築き、今度こそは1830年の失敗を繰り返すまいと決心していた。しかし、結局は前回以上の屈辱で終わることになった。ふたたび「中産階級」の王にしてやられたのである。1848年の血なまぐさい弾圧のあとに登場してきたのは、ナポレオン3世による帝政であった。1875年に1票差で廃位が決定するまで、彼がフランスを統治することになった。

ナポレオン3世による統治は恥と幻滅で終わることになった。クレマンソー Georges Clemenceau によると「フランス人が渋々受け入れた第2帝政は、フランス人にとって決定的な意味を持った。第2帝政のおかげでフランス革命の果敢な精神は失われ、自由な精神の優位性を信じる者もいなくなった」。第4幕の舞台でフランス革命の精神・成果・考え方や革命戦争の意味が失われてしまい、その挙句が普仏戦争の敗北とプロイセン軍のベルサイユ宮殿駐留であった。さらにパリコミューンの参加者5万人がパリから追放された。

第5幕で共和制が確立することになった。1789年の革命が求めていた「共和国 république des camarades」の登場であった。つまり、バスチーユの牢獄拔きの強い行政権の確立であった。パリコミューンにどう対処するかを議論するためベルサイユ宮殿で1871～79年に開かれていた議会は、ベルサイユ宮殿に象徴される王政の伝統を守りつつ共和制を要求するパリ市民と妥協して、1789年7月14日を自由が実現した日として祝祭日とすることにした。大統領も、ベルサイユ宮殿で上・下院の議員による投票で決められることになった。1919年の混乱のなかで、もし大統領選挙がパリ市内で行われていたら、クレマンソーが大統領に選ばれていた可能性がある。実際に静かなベルサイユ宮殿で大統領に選ばれたのは、精神を病んでいたデシャネル Paul Deschanel であった。

5幕から構成されたフランスの革命劇は、いつ始まっていつ終わった

のかハッキリしている。「フランス的な精神 esprit」の「明快さ clarté」で一杯である。

序幕：1789年7月14日：バスチーユ牢獄の破壊。

夏一杯：「大恐怖」の支配。

第1幕：1789～1792（95）：国内で革命が進行した時期。

1792（95）：対外戦争で革命を輸出した時期。

第2幕：1815～1830：ブルボン王朝が復活。しかし革命の成果は保持された時期。

第3幕：1830～1848：七月革命でブルジョア王朝が登場。誇りで一杯の時期。

第4幕：1848～1871：二月革命でナポレオン3世の帝政登場。敗戦とパリコミュン。屈辱の時期。

第5幕：1875：第3共和制の確立。

## 第2節 フランス革命の意味

フランス革命のドラマを振り返ってみると、そこに法則のようなものが見えてくる。1789年に伝統が破壊されたとき、正体不明の力が洪水のようにフランスを襲ってきた。洪水の力が増大しているときは、まず洪水を止める努力がなされた（1792年まで繰り返された憲法制定の試み）。しかし部分的な体制の見直しで革命の波を止めることは不可能であった。やがて水位の上昇が止まり、まず水面に顔を出す努力がなされたが、国内で足場となる地面が見つからないため、対外戦争を仕掛けることになった。それだけがフランスにとって生き残る唯一の方法であった。1815年に水位の上昇が止まり、大きな変化と災害のあとフランス国内に足場となる地面が確保されることになった。

ところが1830年に革命の成果が失われつつあることに気づいたフランス人は、革命の成果を守るために恒常的な堤防を築くことにした。しかし

築かれた堤防は脆弱で、革命の成果が失われていく状況は改善されなかった。

1848～75年は、ふたたび革命の成果を守る努力がなされた時期であった。しかし、かつて栄光に満ちていた革命劇の再演は退屈なものであった。その象徴がナポレオン3世である。

ナポレオン3世が革命劇の再演に失敗したのは、もはや彼を必要とする革命の波が存在しなかったからである。彼は何度も戦争を起こしながら、「わが帝政は平和のためにある L'Empire, c'est la paix」などと宣言せざるを得なくなっていた。

第5幕における第3共和制の確立については後で論じることにして、ここでは革命の大きな流れを指摘するに留める。第一共和制の登場は、もし伝統的な秩序が破壊されなかったら有り得ないことである。哲学者のクザン Victor Cousin に言わせれば、「第一共和制時代のフランスは、国家が存在しない危機的状況のなかにあった」。「共和国 la République」という名前に騙されてはいけない。また多くの革命家が「合法的な手段 legalité」の重要性を説いたからといって、それで「合法的な手段」の採用が保障される訳でもない。

フランスの政治体制が安定したのは、革命が勃発してから26年後のことであった。それまでフランスには、政治体制を安定させる法的な根拠が存在しなかったのである。「革命こそが法制度の生みの親であった Une révolution est la larva d'une civilization」(Victor Hugo, Europe Littéraire, 19 Septembre 1833, p. 239)。

革命による急激な変化から「緩やかな変化 evolution」への移行は、ただ時間が経過すれば実現するわけではない。1840年より1855年に革命が前進しているとは限らない。歴史学を自然科学のように、時間の奴隷と考えるべきでない。そのことは、1789～1815年：「混乱 inundation」の時期、1815～30年：「待機 incubation」の時期、1830～48年：「誇り pride」の時期、1848～75年：「屈辱 humiliation」の時期と区分できたことから判る。

歴史学は数学と違うのである。歴史には必ず「飛躍 leaps and bounds」が存在する。

下記の図表に問題がないわけではない。しかし少なくとも歴史の展開を直線的な時間の経過としか考えない考え方、まるで距離を測るように考えることが間違っていることを示すくらいの意味はある。

上記の図表について詳しくは、もっと多くの革命を考察したあとで論じることとする。ロシア革命が今後どのように展開していくか判らないが(著者がこの本を書いていたのは1930年代。まだソ連邦は崩壊していなかった)、フランス革命との違いを念頭に置いておくことは重要である。

歴史には物理現象のように、繰り返される法則はない。しかし「人間が歴史として記憶に留めたものは消え去ることはない nothing disappears which the hours of men have conceived in their womb」。太陽の出没で数える日数や星座の出没で数える年数と、「歴史 hours of men」は同じ時間でも、質が異なる。歴史上の出来事は、何世紀も隔てた出来事であっても、お互いに共鳴し合うものなのである。

ロシアでは1825年と1861年に、政府と鋭く対立する反政府集団が登場してきた。政府と反政府集団のあいだで妥協が成立することはなく、これがロシア革命の遠因となった。ロシア革命が勃発する2世代前の1860年代に登場してきた「ニヒリズム」は、1世紀も経つと忘れ去られるが、それでもその影響は残ったのである。フランスの場合、1685年のユグノー(プロテスタント)の追放がのちの時代に大きな影響を与えることになった。一見するとユグノーの追放が1789年のフランス革命に影響を与えるなど考えられないことだが、ロシアで1825年のデカブリストの反乱が1917年のロシア革命に影響を与えたように、ユグノーの追放がフランス革命に大きな影響を与えていた。もしユグノーの追放がなければ、フランス革命はフランスの外に広がっていくことはなかったであろう。ユグノーの追放があったおかげで、フランス革命はフランスを越えて普遍的な意味を持つことになったのである。ユグノーの追放はキリスト教の教義に反していただ

けでなく、人間に対する扱いとしても正義に反することであった。フランス革命は、このような正義に反する人間の扱い方を拒否する運動であった。したがって、プロテスタントを容認するだけでは済まない問題であった。キリスト教世界や最古の大学(パリ大学)の変革も含めて、革命が必要になった所以である。個人の意志を尊重するためであった。

### 第3節 「ヨーロッパ」の意味

ロシアの40分の1の広さしかないフランスが、ヨーロッパの中心である。このことだけでも注目し値することだが、さらに「ヨーロッパ l'Europe」はフランス革命が生み出したものだというのも重要である。いまはロシアを中心とするユーラシア大陸が世界に影響力を振るっている時代なので、こう言うと奇異に聞こえるかもしれないが、19世紀の平均的なヨーロッパ人は、パリこそが「ヨーロッパ」の中心だと信じて疑わなかった。ユゴー Victor Hugo に言わせれば、パリは「ヨーロッパのメッカ Mecca de civilization」なのである。

第一次世界大戦を経験したユダヤ人作家のラビッジ M. F. Ravage は『ヨーロッパの狂気 Malady of Europe』を書いたし、国際連盟の提唱者であったローズ＝ディキンソン G. Lowes Dickinson は『無秩序なヨーロッパ European Anarchy』を書いてヨーロッパを再構築する必要性を説いた。

ところでアメリカの学校では、イギリスがヨーロッパに属していると教えられている。たとえばネブラスカ州のアメリカ人にとって、イギリスはヨーロッパの国なのである。ところが1927年にオックスフォード大学出版部から出た『ヨーロッパ史』(R. B. Mowat, A History of Europe and the Modern World 1500-1918)には、エリザベス1世もクロムエル Oliver Cromwell もピット父子 William Pitt the Elder and the younger も登場してこない。著者は「ヨーロッパ世界について理解を深めるためにこの本を書いた」そうなので、うっかり言及するのを忘れたとは思えない。彼にとってイギリスは、

ヨーロッパの国ではないのである。イギリスを除いた地域がヨーロッパなのである。

ロシア人もロシアをヨーロッパから排除してしまっている。1869年にダニレフスキー Nikolai Danilevski は『ロシアとヨーロッパ』を書いて、ロシアはヨーロッパではないと主張していた。おかげでこの本はスラブ派のバイブルになったが、彼がロシアをヨーロッパでないと主張した根拠は、1730年までロシアの大部分が、ヨーロッパに属すると考えられていなかったということであった。いまヨーロッパ＝ロシアはウラル山脈以西だと考えられているが、当時はドン川以西がヨーロッパ＝ロシアだと考えられていた。シュベングラー Oswald Spengler も「ヨーロッパ」という言葉を使っていない。彼が使っていたのは「西 Occident」という言葉であった。しかし、「西」も意味が曖昧である。地理学者のリッター Karl Ritter が次のようなことを言っていた。「アメリカが発見されて以来、ヨーロッパは西でなくて東に存在することになった」。

ディズレーリ Benjamin Disraeli の言葉も例として挙げることができる。ビクトリア朝時代のイギリス政界を描いた小説『ロゼアー Lothair』で、彼は次のようなことを書いている。「キリスト教世界をヨーロッパと呼ぶことにしたのは失敗であった。致命的な失敗であった。ヨーロッパは地球全体の4分の1の面積すら無いからである」。

キリスト教世界を「ヨーロッパ」と呼ぶことにしたのは失敗だったか否かはともかく、現実にはそう呼ばれることになっている。この新しい呼び方を無視するわけにはいかない。この新しい呼び方を無くしたければ、それこそ「葬り去る be buried」しかない。ディズレーリの言葉は、そのよい切っ掛けになるかもしれない。地球全体の4分の1以下しか占めていないヨーロッパは、もともと「キリスト教世界」と呼ばれていた。

「キリスト教世界」という呼び方はフランスが登場してくる以前のものであった。

「ヨーロッパ」という呼び方はフランスで登場してきた。

「地球 Globe」という発想はロシアで登場してきた。

「ヨーロッパ世界 European civilization」という場合の「ヨーロッパ」に、1つの纏まりをイメージしてはいけない。「キリスト教世界」とか「地球」という場合は1つの纏まりを意味するが、「ヨーロッパ」という場合は多様性が前提になっている。ヨーロッパの文明・文化・科学・芸術・聖堂などという場合、スペイン・スエーデン・アイルランド・ダルマチア地方などがそこに含まれている。「ヨーロッパ」とは多様な国や地域の集まりなのである。多くの矛盾を抱え、かつ多くの成果を上げてきた「ヨーロッパ世界」の強みは、それを構成する国々が自由を謳歌していたことであった。バラバラの色破片で万華鏡ができていようなものである。

「ヨーロッパ」とは地理概念ではなくて価値概念なのである。こんなことを言うとドイツやロシアの物書きに叱られそうだが、「ヨーロッパ」とは「同じヨーロッパ世界に属しながら独自性を失わない多くの民族の集まり independence of many nations in one universal civilization」であり、これに代わる新しい概念が登場してこない限り、この概念が有効性を失うことはないであろう。

#### 第4節 「ヨーロッパ」発祥の国ギリシャ

「立派なヨーロッパ人 gute Europäer」(Friedrich Nietzsche, Die fröhliche Wissenschaft, 1882, p. 377) が「ヨーロッパ」という場合、そこにはどんな意味が込められているのだろうか。それは「東方」に対して「西方」が示した好意ある反応であった。そのよい例として、中世にフランクの騎士がスルタンの軍隊に勝ってエルサレムを征服した時のことを挙げるができる。彼らは「東方」にあったキリスト教の聖地を取り戻し、迷信からくる恐怖や人身御供の習慣から解放され、エルサレムで生まれたキリスト教に対する悪魔的な迷信から解放されることになった。

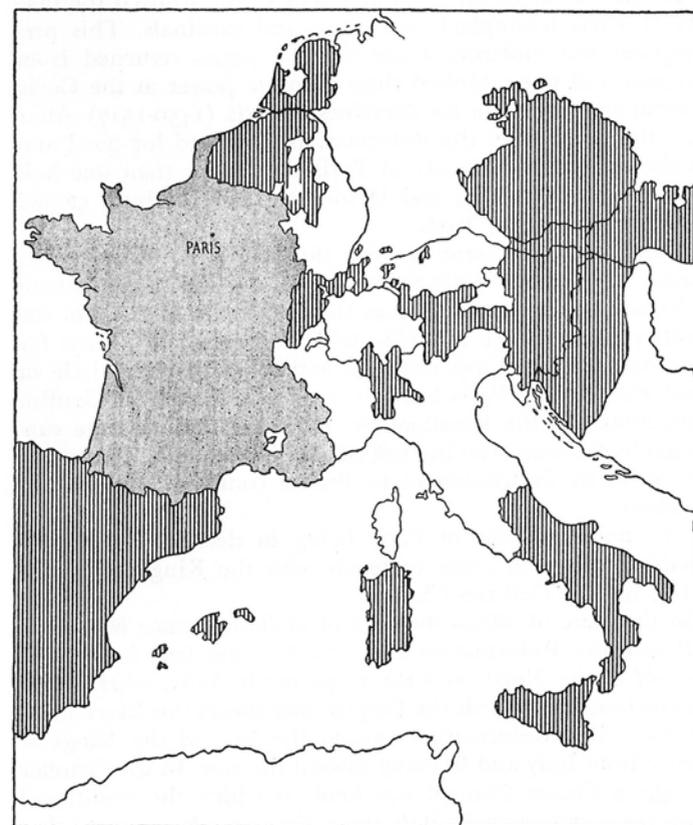
フランクの騎士たちは『旧約聖書』の言葉をエルサレム征服の理由として挙げていた。「東から私はあなたの子孫を来させ、西からあなたを集める」(『イザヤ書』43:5)。また、つぎのようにも言ったはずである。「すでに神は東から我々の子孫を来させたが、西からも我々の子孫を来させるだろう。神はエルサレムで犯された間違いを正し、真の信仰が取り戻されることを見る最初の証人たる西の子孫を使って、それを実現させることになるだろう」。

以上で引用した言葉は、フランスの年代記作家ノジャンのグエイベール Guibert de Nogent のものだが、この言葉はフランス革命のときにフランス人がギリシャに対して言った言葉でもあった。フランス革命のおかげで、ヨーロッパ人は古代ギリシャに憧れるようになった。

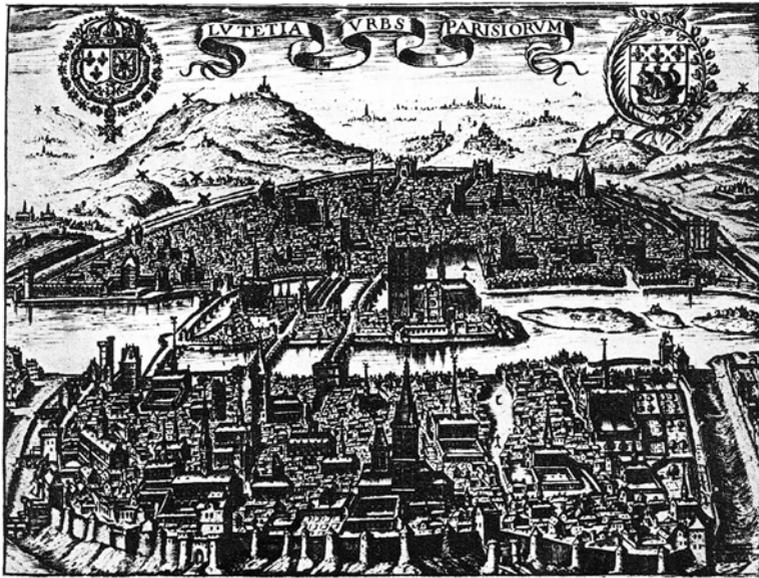
「エルサレム」を「ギリシャ」に置き換えれば、19世紀にトルコの軛からギリシャとクレタ島を解放した情熱が、1789年のフランス革命に起因することが理解できる。ヨーロッパ中がギリシャの独立戦争を応援したのである。バイロン卿 Lord Byron がギリシャの独立運動に参加したのも、そのためであった。また1897年のギリシャ＝トルコ戦争のとき、カリフォルニア大学バークレー校の学長だったウイーラー Benjamin Wheeler は、学生に古代ギリシャに対する崇拜熱を植え付けている。

第一次世界大戦後にギリシャは小アジアに領土を拡大したが、これも19世紀を通じて西欧列強が支持してきたギリシャ支援の一環であった。しかし、小アジアへの領土拡大の試みはケマル＝アタチュルク Kemal Atatürk によって阻まれることになった。1万人のギリシャ人が地中海に追い落とされてトルコ共和国が誕生し、古代ギリシャを復興する試みは失敗に終わった。ここでも第一次世界大戦は大きな変化を齎していた。19世紀には誰もが身代金を払って助けたがっていたギリシャは、普通の国になり下がったのである。近代の「ヨーロッパ精神 l'esprit de l'Europe」がギリシャ礼賛の原因になっていた。フランスでは学者も政治家も何かを書いたときは、その最後に必ず失われたギリシャに敬意を表する言葉を付け加えたも

のである。19世紀には、クレマンソー Georges-Benjamin Clemenceau・ルナン Joseph Renan・テーヌ Hippolyte Taine も、同じようにギリシャ礼讃を行っていた。ゴビノー de Gobineau に至っては、中世の英雄アマデイス Amadis de Gaula を読んだ詩を書いていた時、古代ギリシャを思って涙を流していたそうである。「ああ、アテナイよ、アテナイよ、アテナイよ」。ドイツでは、有名な詩人が「ギリシャ、我らの永遠の恋人 Hellas, ewige unsere Liebe」と謳っていた。19世紀は「ギリシャ礼讃の世紀 Grecianizing century」であった。オリンピックも、スポーツで勝敗を競うことで世界を1つにするという



フランス（黒く塗りつぶされている部分）にとって脅威であったハプスブルク帝国（縦じま模様の部分）。1535年頃



1610年のパリの様子

理想を掲げるギリシャ礼讃の一例である。かつてギリシャが「西方」に影響を与えたように、「西方」が自らを「ヨーロッパ」と呼ぶようになったとき、「西方」は「東方」に援助の手を差し伸べたのである。ことは我々ヨーロッパ人の価値観に関わってくる。ここでは、さらに「ヨーロッパ」の再興が理想として登場してきた原因を振り返ってみることにする。

## 第5節 フランク王国の登場

いまから1000年前、シャルルマーニュ Charlesmagne はフランク王国の概念を拡大させた。ハンガリーにまで遠征して支配領域を広げ、フランク王国はツールのサン＝マルタン St. Martin de Tours 時代にあったガリア人の国ではなくなっていた。しかしビザンツ帝国と対立な関係にあった彼にローマ帝国を再興するつもりはなく、そこで王国をヨーロッパ規模に拡大

すると宣言したのである。その中心が「フランク王国 Francia」であり、「フランク王国」を中心にスペイン・イタリア・バルカン地方・ドイツ・デンマークなどが1つに包括されていた。クレタ島を中心<sup>ほうかつ</sup>に国境線を持たなかった古いヨーロッパと違って、彼の新しい王国はダーダネルス海峡とジブラルタル海峡を国境線とする新しいヨーロッパであった。古代のヨーロッパより北に位置し、その中心地もはるか北の方にあった。

「シャルルマーニュのヨーロッパ」という考え方は、いまでも機能している。ヨーロッパの影響が広がっていく場合、たとえば『ヨーロッパからの使者 Vestnik Evropy』(1866～1918年に発行されたロシア改革派の雑誌)のように、それは「フランク王国」の中心部から東に向かって行くのである。

しかし「シャルルマーニュのヨーロッパ」は、やがて「ローマ帝国」と呼ばれるようになった。「ヨーロッパ」という言葉は使われなくなったのである。「ヨーロッパ」という言葉が復活してくるのは、ルネサンス期になってからのことであった。1450年に教皇ピウス2世 Pius II (俗名アエネアス＝シルウィウス Aeneas Silvius) はヨーロッパに関する本を書いて、ヨーロッパが古典古代と関連を持っていたことを讃<sup>たた</sup>えていた。また彼の同時代人ロレンツォ＝バラ Lorenzo Valla (『コンスタンチヌスの寄進状』が偽作であることを証明した人物)も、「西方 Occident」に代えて「ヨーロッパ」を使うことを勧め<sup>すす</sup>めている。それから100年後、地理学者のウエヘル Christian Wechel は、神聖ローマ皇帝カール5世に「処女王 The Queen Virgin」の姿にしたヨーロッパの地図を献上している。また、その弟子のポステル Guillaume Postel はウエヘルの地図について、つぎのように説明している。「女性の姿をしたヨーロッパは、頭がスペイン、フランスが左肩、ドイツが胸、イタリアが右腕、トルコとポーランドが腹部になっている」。さらに彼は、つぎのように付け加えている。「この地図からキリスト教世界が1つであり、ヤペテ(セム、ハムとならぶノアの息子。ヨーロッパ人の祖先とされる。『創世記』6:5～10:5)が世界で主導権を握っていることが示されている」。

ここでも「ヨーロッパ」がキリスト教世界と同じ意味で使われており、

しかも世界で「主導権 hegemony」を持っていること、また様々な国に分かれていても「一体 unity」であることが示されている。「ヨーロッパ」は政治的には「一体」でなくても、精神的に「一体」であると信じられていたのである。

このように政治的に分裂していたにも関わらず、ヨーロッパは精神的に「一体」であった。そのおかげで、17世紀は「ヨーロッパの世紀 Theatrum Europaeum」たり得たのである。それでもヨーロッパは「キリスト教世界」と呼ばれていた。たとえば1690年にイギリス人が将来の大陸政策のあり方を決めるとき、「キリスト教世界」・「ヨーロッパ」・「世界」のいずれをヨーロッパ大陸の呼称として採用するか迷っていたようである（『ロゼアー Lothair』を書いていたときのディズレーリも同じであった）。1690年に「勢力均衡 balance of power」を大陸政策の原則と決めるとき、その理由をつぎのように説明している。「我々の前任者たちは、ヨーロッパにある2つの王朝のあいだで均衡を維持する政策を採用することを原則としていた。そうすることでキリスト教世界の仲介者たろうとしたのである。中立の立場を維持することでキリスト教世界から批判と反発を招くことを避けようとしたのである。そうすることでイギリス人がヨーロッパで忘れ去られることがないように、またイギリスという国が存在していることを忘れ去られないようにしたのである」。

1799年には、ドイツの詩人ノバーリス Friedrich Novalis が『キリスト教世界かヨーロッパか Die Christenheit oder Europa』と題した論文を発表して自分たちの世界の呼称をはっきりさせようとしたが、すでに遅きに過ぎたようであった。少なくともドイツでは、もはや2つの呼称は意味が違っていた。その原因を作ったのはフランス革命であった。1524年にイスラム教徒のトルコ人と同盟を結んでいたフランス、1683年にウイーンの戦いでトルコ軍が敗れたことにヨーロッパ中が喜んでいいたとき、腹を立てて自分の部屋に籠りきりになったルイ14世のフランス、『ペルシャ人の手紙 Lettres Persanes』が読まれ、『千夜一夜物語』が最初に紹介された国フラン

スが、革命によってキリスト教世界であった過去を捨て去ったのである。

フランス語で「ヨーロッパ L'Europe」というと、それは「哲学者の国」・「芸術家の国」・「思想家の国」・「民主主義の国」・「共和制の国」・「ファッションの国」といった意味になる（つまり「フランス」を意味する）。またフランス革命のすこし前に、ある大臣がルイ16世に次のように書いていたそうである。「フランスはヨーロッパの中心です」。「ヨーロッパ旅行」・「ヨーロッパの基準」・「ヨーロッパ文学」・「ヨーロッパ文化」などといった場合、実際にはフランスが念頭に置かれているのである。

フランス以外の国がフランス的な意味で「ヨーロッパの中心」とされたことは嘗てなかった。第一次世界大戦で「中欧（独逸） Central Powers」は「多くの坊 Bochs」・「フン族 Huns」・「野蛮人 barbarians」・「犬畜生 Autres chiens」などと呼ばれることはあっても、「ヨーロッパ人」と呼ばれることはなかった。「中欧」とは地理的な意味に過ぎず、フランスのように「ヨーロッパの中心」になることはなかった。フランスはヨーロッパのあり方を決める国であった。それは古典古代に先祖返りしたキリスト教世界であった。そこには3つの主義が存在していた。すなわち、民主主義・自由主義・国民主義である。フランスには、この3つの主義が存在していた。

すでに中世のキリスト教時代に、フランスがヨーロッパの模範だとする考え方が存在していた。フランス国王の侍医であったコルベユ Gilles de Corbeil は、1224年に次のような詩をラテン語で書いていた。「すべての国が模範としているフランスでは、教会が信仰のあり方を正すであろう」。1789年には教会が「理神論 natural orthodoxy」に取って代わられたが、「すべての国が模範としている」ということでは、1789年も中世のキリスト教時代と同じであった。

フランス人の国民意識は「理神論」によって形成されていたが、ヨーロッパで国民意識を形成していたのは文学である。フランスがヨーロッパの中心であるためにも、文学が必要であった。その書き手だったのが「聖職者 = 知識人 clerics」（彼らは有名な『知識人の裏切り Julien Benda, La Trahison

des Clercs, 1927』に「フランスの作家たち écrivains de France」として登場してくる)であった。パリでフランスを模範とする考え方が登場し、それをナポレオン軍の兵士たちがヨーロッパ中に広めたのである(さらに世界中に広まっていく)。

フランス革命を敵視した者も、「ヨーロッパ」という呼称には賛成であった。ドイツ浪漫派のリーダーたちは、1810年に『ヨーロッパ Europa』と題した雑誌を創刊しているし、1813年にプロイセン国王はフランスと戦うべく動員令を発したとき、つぎのように公言していた。「この戦いはヨーロッパの善意の者も支持している戦いである」。さらに1814年、対仏大同盟を結成していた連合国は、教皇抜きで(つまり世俗権力だけで)「ウィーン体制 European Concert」を作り上げた(1856年には、イスラム教国のトルコもウィーン体制に参加している)。またユダヤ人解放運動の指導者たちも、洗礼を受けてキリスト教徒になればヨーロッパ世界への参入が可能になると考えていた。さらに、こんな例もある。1830年代に民主主義体制を採用していない国で革命運動が始まったが(「若きポーランド」・「若きドイツ」・「若きイタリア」など)、こうした運動を総称するときは「若きヨーロッパ」と呼んでいた。

ドイツ人とイタリア人がナポレオン3世統治下のフランスと戦ったとき、彼らが掲げた理念はフランス革命から借用したものであった。民主主義・自由主義・国民主義はフランス革命が生み出した理念だが、それがドイツとイタリアの統一を可能にし、アメリカで奴隷解放を可能にし、ロシアで農奴解放を可能にしたのである。さらに1867年、イギリスとドイツで普通選挙が実現したのもフランス革命のおかげであった。

19世紀は、ヨーロッパ中にフランス革命の理念が普及していった世紀であった。フランス革命の理念に賛成しない者がいたのも事実だが(イギリスのディズレーリやロシアのスラブ主義者)、それでもフランス革命の理念は普及していった。フランス革命が掲げた自由・平等・友愛の理念は、製造業者・銀行家・芸術家・医者・ユダヤ人・著作家・ジャーナリスト・商

人など自由を求める人たちに支持されたが、彼らはヨーロッパ人たろうとした人たちでもあった。彼らはフランス革命が掲げる理念の支持者であった。

ヨーロッパ独特の制度や文化はフランスから東へ、さらにヨーロッパを越えて世界に広まっていった。それを準備した長い歴史は無視できないが、そのあり方を最終的に決定したのがフランス革命であった。フランスではフランス革命の影響力が誇張され勝ちだが、フランス人は間違っていない。フランス革命がヨーロッパのあり方を決めたからである。

アメリカ人なら、フランス革命の影響をヨーロッパに限定することに反対するであろう。しかし、アメリカはフランス革命以前に革命(独立戦争)を経験しており、ヨーロッパで国王や皇帝に苦しめられていた国民とは区別されるべきである。もっとも、話が南米にまで及ぶと事情は違ってくる。たとえば、ベネズエラ・コロンビア・ボリビアの独立に貢献したボリバル Simon Bolivar は、フランス革命から影響を受けていた。

フランス人にとって、「ヨーロッパ」には特別な思い入れがあった。この場合の「ヨーロッパ」とは、古代ギリシャや古代ローマを意味していた。フランス人は、意図的に「ヨーロッパ」の意味を古典古代に限定していた。なぜなら、古典古代の世界と革命後のフランスの領域が一致していたからである。

現在の「唯一不可分のフランス la France une et indivisible」は、かつてフランス国王が統治していた「フランク人の国 Francia」であった。その根拠になっていたのが古典古代の世界である。ニース(もともとギリシャ人の植民都市ニカイア)・サボア地方(かつてローマ帝国領であった)・アルザス(ローマ帝国時代のアルサティア)＝ロレーヌ地方(ローマ帝国時代のロタリンギア)がフランス領なのは、フランス人が古典古代のヨーロッパこそヨーロッパ本来の姿だと考えていたからであった。フランスはカエサル時代のガリア地方と同一視されたのである。カエサルの『ガリア戦記』では、ライン川・地中海・アルプス山脈・ジュネーブ湖(レマン湖 Lacus Lemannusとも呼ばれ

る)がガリア地方に属していた。またナポレオン1世がフランスに併合したオランダは、1830年の七月革命でベルギーとオランダに分割されたが、このベルギーという国名も古典古代(ラテン化したケルト系のベルガエ族)に由来する(この族名を国名に採用するアイデアは、どこかの学校教師が思い付いたことだったようである)。フランスは自国名に「ガリア」を採用することはなかったが、北側の隣人には古典古代の国名を採用させていたのである。ゲルマン人やフランク人が住んでいたフランドル地方をケルト人の名前と呼ぶことにしたこととの関連で、つぎのようなエピソードを紹介しておきたい。第一次世界大戦後にフランス代表と同列に扱われていたベルギー国王アルベールについて聞かれたフランス人は、こう答えたそうである。「奴ほど間抜けなドイツ人野郎はいない Il n'y a pas de plus Boche」(ベルギーの南半分はフランス語圏だが、フランス人に言わせればフランス語を使っているベルギー人はフランス人でない)。

## 第6節 パリとライン川

カエサルが征服したガリアの「9分の1」(カエサルが征服したガリアの3分の1がベルガエ族の居住地だったが、さらにその3分の1が現在のベルギー領)であったベルギーをフランス領に併合したのはナポレオン3世だったが、いまだにフランスでは「自然な国境線 natural frontier」という考え方が生きている。隣国は、その考え方の犠牲になることを覚悟しなければならない。その最たるものがウイルソン Woodrow Wilson 大統領の提唱した「14カ条 Fourteen Points」であり、それを認めたパリ講和条約である。アメリカ大陸は大西洋と太平洋に囲まれており、「自然な国境線」という考え方は受け入れられ易いが、それでもカナダ・メキシコ・プエトリコ・バミューダ・アラスカ・ハワイなどに「自然な国境線」が存在する訳ではない。

フランスの歴史は国境問題を考えるうえで、とても参考になる。フランス革命よりおよそ1000年前、ローマ帝国に属していたガリア・ゲルマ

ニアがフランク人によって征服されてフランク王国となった。フランク王国が3つに分割されたとき、ガリアの3分の1は西フランク王国として残り、さらに3分の1(ブルゴーニュと南部)はフランク王国から失われ、残る3分の1は東フランク王国となった。そのとき東フランク国王の居住地であったトレーブ Trèves (ドイツ語でトリアー Trier, ラテン語で Augusta Treverorum) は中世を通じてつねにガリア(神聖ローマ帝国)の首都と考えられ、またそこは大司教座の所在地でもあった。それに終止符を打ったのがナポレオン1世であった(1806年)。またアーヘン Aachen (フランス語でエクス=ラ=シャペル Aix-la-Chapelle) は、国王が戴冠式を行なう場所であった。さらにカエサルが征服したガリア地方のシュトラスブルク Strassburg・バーゼル Basel・ウオルムス Worms・シュパイヤー Speyer (いずれもライン左岸の都市である) は、中世を通じて皇帝の居住地であり金融の中心地であった。

西フランク王国の中心はセーヌ川沿いのイル=ド=フランス地方 Ile de France で、パリやベルサイユもここにある。この地名はフランスの誇りであった。第一次世界大戦後に初めてフランスの首相クレマンソー Georges-Benjamin Clemenceau がアメリカに行ったときの客船も、「イル=ド=フランス号」であった。

イル=ド=フランス地方は「フランク王国のなかのフランク王国 Francs des Francs」であった。「フランク王国の中のフランク王国」という呼び方から、ガリアの地を征服にやってきたフランク人がどれほど優れた入植者であったかが判ろうというものである。またイル=ド=フランス地方は、フランス国王の本拠地であった。しかし、その本拠地から支配領域を拡大することは考えられていなかった。ローマ帝国時代にあったような組織を維持していたのはカトリック教会だけであったが、ガリア教会(ローマ教皇の権威を認めないフランス独自のカトリック教会)は西フランク王国より広い領域をカバーしており、フランスの教会ではなかった。司教たちはフランス国王の統治下には置かれていなかったのである。しかしフランス国王

はガリア教会はおろか、カトリック教会全域に及ぶ権威を誇っていた。それこそがフランス国王の権威の源泉であった。神聖ローマ帝国は東フランク王国を支配していたドイツ人のものであり、カトリック教会の中心はローマにあった。それに対してイル＝ド＝フランスはキリスト教思想の中心であった。「ドイツは帝国を支配し、イタリアは教権 sacerdotium の中心である。それに対してフランスはキリスト教思想 studium の中心である」。このキリスト教思想を研究する学校をセヌ左岸の聖ジェネビエーブの丘 Montange de St. Geneviève に設立したのが、アベラール Pierre Abélard であった。

アベラールは典型的なフランス人であった。彼が経験した「悲劇 calamities」（アベラールは、のちに Historia Calamitatum と題した経験談を書く）については、よく知られている。エロイズとの恋愛は、彼女の後見人であった叔父の怒りを買って、アベラールは何者かに襲われて去勢されてしまった。みずからの肉体的欠陥を償うかのように、アベラールは精神の冒険に乗り出す。ヨーロッパで初めて「聖霊 Paracletus」を名前に冠した教会を建てたのである。それまでヨーロッパでは、だれも「聖霊」がカトリック教会の「組織 Body」や「教義 Soul」から独立できるとは考えていなかった。アベラールは、自らの肉体的欠陥を補うかのように、全霊全身を「聖霊」に捧げる決心をしていた。そして、その名前を冠した教会を建てたのである。彼は知力を尽くす戦いに情熱を傾けることになった。『是と否 Sic et Non』と題した論文によって、彼はスコラ学の基礎を築いたのである。

「華麗さ brilliance」・「明快さ clearness」・「明晰さ lucidity」を本領とするフランスの方法論は、アベラールに始まり、それが今でも我々の考え方の基本になっている。それについて少し説明をして置きたい。

アベラール登場までの1000年間、カトリック教会では多くの教父や神学博士が活躍していた。彼は経験豊富で、その権威はアベラールの時代にも強固であった。アベラールは彼らの権威を権威として認め、個人的な都合で伝統の重みを簡単に捨て去るようなことはしなかった。ただし、アベラールは「科学 science」に「集大成 complete totality」が不可欠だと考えていた。

権威とされている者を1人に限定することをしなかったのである。1人の権威だけが口にする意見は、そのまま権威と認めなかった。権威とされている者の意見をすべて集め、それを比較・検討することにしたのである。権威ある者たちの意見が常に一致するとは限らず、ときに矛盾することもあった。このアベラールのやり方こそ「科学」の始まりなのである。この方法なら、聖なる伝統にも矛盾が存在することを示せるからである。アベラールが実現してみせた権威「集大成 Summa」のおかげで権威批判が可能になり、権威から解放されて自由に判断することが可能になった。「集大成することで自由を手に入れること Freedom through totality」、アベラールが目指したのがこれであった。同じようなことがその後もスコラ学者によって実行されることになるが、その先鞭を付けたのがアベラールであった。

アベラールの危険な試みとその評判のよさに危機感を募らせたパリの司教は、それに対抗して聖堂学校を設立した。このアベラールの学校とパリ司教の学校の競争があったおかげで、パリにおける神学研究は大きく発展することになった。当時のヨーロッパで宗教教育のための学校は珍しくなかったが、考え方が違う2つの学校が共存していたのはパリだけであった。2つの違った考え方をする学校が用意されていること、これがヨーロッパの基本的なやり方になった。2つの違った考え方が競争することで、思想の発展が可能になったのである。お互いに対立する考え方が同時に存在することで、一層の発展が可能になったのである。個人としての人間は、同時に違った存在であることはできない（医者は医者であり、少年は少年であって、祖母は祖母でしかない）。ところが思想は、「是と否 pro and con」が「対話 dialectic」を展開することで新しい考え方を生み出してくるのである。パリでは、少なくとも2つの違った考え方をする神学博士のグループが存在することになったが、こんなことは思想史上初めてのことであった。

マルクス主義者は「対話方式 dialectical method」を歴史展開の説明に使っているが、もともとこの方法は哲学を教えたり、思考を展開したりするときに使われていたものである。ヨーロッパ人にとって重要なのは「対話

dialogue」である。この本では、マルクス主義者が意味を狭めてしまった「対話」の意味を本来の伝統的なものに<sup>もと</sup>戻したいと考えている。

パリで始まった2つの学校の「対話」は、やがてヨーロッパ人にとって<sup>か</sup>かせないものになっていった。ヨーロッパで起きた革命で、大学が大きな役割を果たすようになった理由がこれである。ヨーロッパに「自国民中心主義 nationalism」の時代が訪れ、それぞれの国民が独自性を主張し始める以前は、ヨーロッパ中から学生がパリに集まり、ヨーロッパ的な思想の<sup>と</sup>剣を<sup>す</sup>研ぎ澄ましていたのである。

パリはヨーロッパ全体の頭脳であり、全キリスト教世界の中心であった。パリには、ガリアの王都だとフランスの王都だとかいった地域的な制約は存在しなかった。中世のフランスが国土統一に熱心でなかった理由は、これである。パリは王都というより、<sup>さまざま</sup>様々な学問がヨーロッパ中から集まってくる港のような<sup>ところ</sup>所であった。ヨーロッパ中のキリスト教思想を映し出す鏡のような存在であった。「鏡 speculum, mirror」という言葉は中世ヨーロッパで流行りの言葉であったが、この言葉を使い始めたスコラ学者は、違った意見を比較対照することで新しい思考の道を切り開いたのである。我々は、この伝統を引き継いでいることを忘れてはいけない。思考はつねに「対話」によるべきなのである。個人の思考だけで真理に到達することはできない。真理に到達するためには、他者との「対話」が<sup>か</sup>かせない。ある意見には、かならず反対の意見や違った意見が登場してくる。物理的な意味で他者と<sup>お</sup>あ<sup>つ</sup>折りを付けることは、それほど<sup>むずか</sup>難しいことではない。相互の無関心が平穏な状態を維持してくれるからである。しかし新しい思想は、そんな平穏な状態を壊してしまう。新しい思想は、<sup>かな</sup>らずそれに反対する思想を生み出す。永遠に続く違った意見や思想の「対話」によって政党が生まれ、戦争が起こり、階級闘争が始まるのである。

国王にもカトリック教会にも依存しないパリ大学の誕生、これこそがヨーロッパの革命的な性格をよく物語っている。パリ大学の存在は、ヨーロッパ中<sup>じゅう</sup>に影響を与えることになった。ではフランス自身はどんな影響を

受けたのか。フランス革命が中世のパリ大学から影響を受けることはなかった。中世のパリが持っていた影響力をパリから<sup>うば</sup>奪ったのはフランス革命であった。中世のパリはヨーロッパで最大の都市であった。教皇・枢機卿の決定より公会議の決定を優先する「公会議主義 Counciliarism」も、パリで主張された考え方であった。アビニョンからローマに帰還した教皇は、「公会議主義」を拒否して絶対的な支配権を確立するが、1517年にはルターによる宗教改革が始まって、パリ大学のスコラ学も影響力を<sup>うしな</sup>失うことになった。パリに代わって影響力を発揮するようになったのは、ドイツの都市ウイッテンベルク Wittenberg・ハイデルベルク Heidelberg・マールブルク Marburg であった。

1530年にスペインのビーベス J. L. Vives は、パリ大学のスコラ学者を「えせ対話論者 pseudo-dialecticos」と呼び、「パリ大学は創立から800年も<sup>た</sup>経っており、<sup>もうろく</sup>毫碌してしまっただとまで言っていた。こうして、パリはフランスの首都でしかなかった。それまでパリは、ガリア人のものでもなければフランス人のものでもなかった。そこで展開された高度な学問は、キリスト教世界全体のものであった。パリがフランスの首都になったことで、大きな変化が訪れることになった。

パリがフランスの<sup>と</sup>枠に閉じ込められることになり、パリに住んでいた50万の人間は、バロア王家やガリア教会（ローマ教皇の権威を認めないフランス独自のカトリック教会）と<sup>お</sup>あ<sup>あ</sup>折りを付けざるを得なくなった。これが後のフランス国家形成の出発点となった。ドイツで宗教改革が始まるまで、フランス国王は北のイギリスと南のイタリアしか念頭になく、東方への関心はミューズ Meuse 川（ドイツ名：マース Maas 川）<sup>ど</sup>どまりであった。ところが宗教改革が起きて、フランス国王は関心を東方に移さざるを得なくなった。1551年10月に「国王会議 Crown Council」で対イタリア作戦が議論されていたとき、メッツ Metz・ツール Toul・ベルダン Verdun に（つまりフランスの国境沿いに）カール5世が軍隊を配置したという情報が入ってきた。そのとき元帥 Maréchal であったビエイユビル François de Scépeaux de Vieilleville

は、カール5世の軍隊に攻撃を仕掛けるべきだと進言した。長年の非現実的な対イタリア政策は放棄されることになったのである。こうしてフランスの東方政策が始まることになった。

それから5年後の1557年8月、サン＝カンタン St. Quentin の戦いでフェリペ2世がフランスに勝利したとき、カール5世は「なぜ息子はパリにいないのか」と尋ねていた。パリが外国軍に占領される可能性があったのはイギリスとの百年戦争のときだったが、1557年以後も起こり得ると考えられていたのである。フランス国王の新しい対外政策が原因で、パリは外国軍による占領の可能性に直面することになった。脅威は東方から来るはずであった。東方からの脅威が増すにしたがって、パリはフランス国王の軍事力に頼らざるを得なくなっていた。

フランス国王に対して、パリは自分の立場の弱さを自覚させられたのである。1917年までのロシアは首都ザンクト＝ペテルブルクに搾取されていたが、1789年までのパリはフランス国王に搾取されることになった。カトリック教会の中心であったパリ大学は(1276年にはトマス＝アクイナス、1410年にはジェルソン Jean Charlier de Gerson が全欧からやって来た学生相手に講義をしていた)、その伝統に相応しいやり方でフランス国内のプロテスタントに対処することになった。ルターの「異端運動 heresy」に対して「主張の正当性 raison d'être」を一切認めず、およそ妥協の可能性はないと考えたのである。カトリック教徒とプロテスタントの殺し合いを避けようとした「大法官ミシェル＝ド＝ロピタル Chancelier Michel de l'Hôpital」に対して、パリ大学は「大法官のミサだけは出席したくない Que Dieu nous protège de la messe du chancelier」と言っただけなのである。カトリック教会は、あらゆるところに「異端運動」の兆候を見ていた。「大法官」が死ぬとすぐに「サン＝バルテルミの虐殺事件 Saint Barthélemy」が起こっている。1572年8月24日の夜、シャルル9世の妹とアンリ＝ド＝ナバル Henri de Navarre (プロテスタントでありながら後にカトリックに改宗し、アンリ4世として即位して宗教戦争を終わらせることになる)の結婚式場から始まったプロテスタントの大

虐殺事件である。

パリ大学の強硬な態度をまえに、フランス国王は為すすべを知らなかった。「プロテスタントがフランス国王の座に就くようなことがあってはならない。なぜなら、王領を支配できるのはカトリックの伝統を受け継ぐ国王だけであり、ガリア教会(ローマ教皇の権威を認めないフランス独自のカトリック教会)が国王と認めるのはカトリックの国王だけだからである。小さな領土を支配しているに過ぎないプロテスタントの国王は、ガリア教会で受け入れるわけにいかない」。ガリア教会に対するフランス国王の義務を強調するパリ大学は、こうしてフランスの将来を決定することになった。

このパリがもつ特殊な伝統をアンリ4世はよく知っていた。1589年に王位に就いたとき、彼はパリをフランス王国の「真髄・鏡 l'abrégé et le miroir」と呼んでいた。また臣下たちもパリを「フランス王国の魂・中心 l'ame et le coeur de la France」と呼んでいた。しかし、パリ大学はアンリ4世の宥和政策に反対であった。1590年5月14日、1300人の聖職者がパリ大学の学長を先頭にパリでデモ行進をしている。「アンリ4世は異端として破門されたことがあり、教皇から赦免を得ているとは言えカトリックへの改宗がどこまで本気なのか信用できない。彼はフランスの王位に就くべきではない」というのが、彼らの言い分であった。パリ大学は「ローマ教皇以上に教皇的 more papal than the Pope」であった。自分たちの宗教的な伝統ゆえに傲慢になり、国王とすら対決しようとしたのである。

アンリ4世は1593年にカトリックに改宗し、ミサに出席することを口実にパリに出かけて行って(「パリはミサに値する Paris vaut bien une messe」と言ったそうである)、パリを占拠してしまった。パリ大学は国王の統制下に置かれ、宗教よりも政治を優先させる「政治優先派 Politiques」が登場してくることになった。パリの国際的な影響力は失われたが、ここに初めてフランス国内の平和や国富の追求、国民の繁栄が優先される「国益優先 raison d'état」の考え方が確立することになった。

こうして、パリ大学は衰退期を迎えることになった。近代のアベラール

とも言うべきデカルト René Descartes はパリを離れ、オランダのフラネケル大学に移っている。『方法序説 Discours de la Méthode』で、彼は神学の下僕に過ぎなかった哲学を独立した学問分野として確立した。デカルトはカトリック教会と縁を切ったのである。デカルトについて詩人のラフォンテーヌ Jean de La Fontaine は、つぎのように言っている。「かつて神のように崇められていたデカルトは、いまや人間のものとは思えない異能エスプリの持ち主とされるようになった Ce mortel dont on eut fait un Dieu dans les siècles passés, et qui tient le milieu entre l'homme et l'esprit」。

このとき以降、フランスをはじめヨーロッパ全域に「人間のものとは思えない異能エスプリ l'esprit」という不思議な言葉が登場して来るようになった。「聖霊 Holy Ghost」の代わりに「人間のものとは思えない異能エスプリ」という言葉が使われていれば、そこはフランスないしはヨーロッパであるということになる。デカルトがパリを後にしたことからも判るように、「人間のものとは思えない異能エスプリ」は反カトリック的な概念なのである。つぎに問題になってきたのは、この「人間のものとは思えない異能エスプリ」の持ち主をどうやってパリに留め置くかということであった。パリがこの「人間のものとは思えない異能エスプリ」の持ち主を留めおくことができたとき、パリはふたたびヨーロッパと世界の中心となるのである。それを可能にしたのがフランス革命の勃発であった。

## 第7節 パリからベルサイユ宮殿へ

1594年以降、パリはさまざまな特権を奪われて衰退していった。1645年にはパリの市庁舎にルイ14世の彫像を置くように命ぜられたが、その彫像たるやルイ14世が反抗的なパリを足で踏みつけている姿であった。

この彫像は1687年に市庁舎から移動させることが認められたが、ルイ14世はパリからベルサイユに居を移すことでパリに恒久的な罰を与えることにした。パリにあった古いルーブル宮殿は1675年から手を加えられ

ることがなくなり、1805年まで放置されることになった。1682年5月2日、ルイ14世はベルサイユ宮殿に居を移している。2200頭の馬と、1500人の役人と聖職者が同行していた。連日の宴会で、10万本のロウソクが燃やされたそうである。ベルサイユは10万の人口を誇っていた（19世紀以降の都市化の進展にも関わらず、いまでは3万人しか住んでいない）。またベルサイユは、芸術センターでもあった。1680年のことだが、イタリアは建築・彫刻・絵画・造園・噴水の全てにおいてフランスに敵わないと評した人物がいた。「ベルサイユだけでフランスは他国を凌駕できた」。この人物は、つぎのようにも言っていた。「ベルサイユ宮殿は1つの都市、いや1つの世界であった」。

フランス国王はパリ市民の忠誠心を信用せず（ボルテール Arouet Voltaire は『ルイ14世の世紀 Le Siècle de Louis XIV』でパリ市民のことを、「とてもフランス国民とは思えない plus bourgeois que citoyen」と言っていた）、「パリ市民を脅して黙らせる épater les bourgeois」ことにした。「王との謁見を待つ部屋では、生まれ・役職・王の命に依りて、謁見を望む者は毎日、違ったドアから入室を許されることになっていた。もちろん、枢機卿・大司教・大使・公爵・元帥・州知事・代官・高等法院長など、ベルサイユにやって来る高位高官たちも同様であった」。「ベルサイユ宮殿はフランスの栄光そのものであった」。

ルイ14世は、その「異能エスプリ」のおかげで、自然が課したさまざまな障害を克服することができた。たとえばベルサイユの噴水は、まったく水のないところに作られている。ルイ14世に関する情報を『メモワール Mémoires』に残したサン＝シモン公爵 duc de Saint-Simon によれば、ルイ14世は自然を征服することに喜びを見出していた。そしてそれに成功していたのである。ルイ14世がフランスの抱えていた物理的・社会的障害を克服できたのも、この「異能エスプリ」のおかげであった。しかし、ルイ14世は何のためにこんな能力を必要としたのか。リシュリュー Cardinal de Richelieu が残した遺言にこうある。「我が職務の目指したところは、自

然がガリアに宿命づけた国境をガリアにとって有利なものに変え、ガリアの国王を真にガリア人のものに変え、ガリアがフランスを意味するように変えて、古いガリアを新しいガリアに変えることであった」。

リシュリューが目指したのは、キリスト教以前の秩序を復活させることであった。キリスト教化の開始を象徴するサンルイ（聖王）の後継者ルイ14世は、古代ガリアの絶対君主となって身分制議會を廃止してしまう(1614年を最後に三部会は召集されなくなる)。さらにルイ14世は東方に向かって征服と侵略を開始する。1557年のサン＝カンタンの敗北が忘れ去られることはなかった。東方進出の試みが毎年繰り返されることになったのである。神聖ローマ帝国の領地であったシュトラスプールを1681年に征服したルイ14世は、つぎのような銘文のメダルを発行している。「ガリア全域がフランスのものになった Gallia Germanis Clausa」。つまり、古代ガリアがフランスを征服したのである。

「聖王 St. Louis」がキリスト教的な国王であったことを理由に、聖職者・貴族・都市に対してフランス国王が持っていた伝統的な権限に代えて、ガリアに対するカエサルカエサルの絶対的な支配権を復活させることが目指されていた。しかし、その過程でフランス国王を待っていたのは、予期せぬ落とし穴であった。協力者を求めることなく、国王だけで自己アピールに努めている間は問題がなかった。ルイ14世は日曜日にベルサイユ宮殿を国民に開放し、誰もが宮殿に入って王族や国王を間近に見られるようにしていた。レーニンレーニンは死後その姿を国民のまえに晒すことになったが、ルイ14世は生前に自らの姿を国民のまえに晒すことにしたのである。国王のハンカチ・足台・シャツ・咳・笑顔みぢかを身近に見て、国民はそれを楽しむことができた。

しかしルイ14世も人間であった。「太陽王 Roi-soleil」と雖も、いつかは西の空に沈む時がくる。パリを無視するためにベルサイユに来たのはよいとして、国王が眠っているときや政務に従事していないとき、あるいは国王が幼少のときにフランスの面倒は誰が見るのか。そこで国王の協力者として登場して来たのが、聖職者・王族・貴族であった。ルイ14世の時代(1680

- 1715)には聖職者、ルイ15世がまだ幼少であった時期(1715 - 1722)には王族、ルイ15世が成人してからは貴族が権勢けんせいをほしいままにすることになった。

聖職者・王族・貴族に特権を与えたことで、国王はパリ市民の非難・攻撃さげすに晒されることになった。ただし、パリ市民の不満は聖職者・王族・貴族の特権とくけんに向けられていたのであって、国王が作り上げた統治制度そのものに向けられたのではなかった。そこで、ふつう教科書では余り問題にされない聖職者・王族・貴族の特権乱用らんように注目してみることにするが、そもそも特権乱用だけでは革命は起きない。権力や統治に腐敗は付き物である。革命によって腐敗を排除しようとするのは、世間知らずの若者だけである。革命には暴力や無法が付き物で、悪い秩序でも無秩序よりマシとされる理由がこれであった。アンリ4世が国王として受け入れられたのも、無秩序より秩序の方が重要と考えられたからであった。フランス人やパリ市民が気まぐれだったからではない。ボルテールもこんなことを言っている。「秩序は遅れてやって来るが、必ずやって来る」。

フランス人にも我慢強さや革命を嫌う気持ちがあることを知っておくため、当時のフランス人が何を問題にしていたか見てみることにしよう。彼らが問題にしていたのは国王の個人的な贅沢ぜいたくではなかった。国王の愛人は贅沢の限りを尽くしていたが、貴族が擅ほしいままにしていた権勢くわに比べれば、問題になる金額ではなかった。無駄遣いが多かったのは事実だが、無駄遣いは当時のフランスに限られたことではない。当時のフランス人が問題にしていたのは、統治者の腐敗であった。しかし、それは真面目なルイ16世ですらどうすることもできないことであった。当初は、それが国王個人によるものなのか制度に由来するものなのかハッキリしていなかった。ところがルイ16世が正直者で礼儀正しいことが判ったとき、彼らは革命を開始したのである。

ロシア革命のときのニコライ2世、ピューリタン革命のときのチャールズ1世、南北戦争のときのブキャナン James Buchanan 大統領（リンカーンの

前任者で南部諸州の連邦離脱を防げなかった) の場合も同じであった。3 人とも個人的には善良な人物であった。それでも彼らは革命を防げなかった。彼らの個人的な善良さが、逆に制度の抱えている問題を浮き彫りにしたのである。制度の問題は、支配者個人の感情や性格で解決できることではない。

大切なのは、国家として存続可能か否かということである。国民は支配者の個人的な資質をさほど問題にしない。ルイ 16 世が断頭台の露と消えたのは、彼が悪い国王だったからではなかった。彼が人間以上の存在になれなかったからであった。統治制度を支えていた聖職者・王族・貴族の腐敗を、国王はどうすることもできなかった。そこで革命後のフランスに登場してきたのは、聖職者・王族・貴族と無関係な支配者であった。革命は、ルイ 16 世が国王であることに反対ではなかった。ルイ 16 世が 1792 年まで国王でいたのは、だれも中央政府が弱体化することを願っていなかったからであった。フランス人は、けっして王政に反対だったわけではない。彼らが存続を認めなかったのは、聖職者・王族・貴族であった。皇帝になったナポレオン 1 世ですら、フランス革命の原則には忠実であった。フランスを 1614 年以前の三部会の時代に戻そうとした 1790 年の穏健派「コルドリエ＝クラブ Club de Cordeliers」と違って、フランス人は中央政府の重要性を十分に認識していた。コルドリエ＝クラブは、ルイ 16 世の真の後継者であったパリ市民によって排除されることになった。ベルサイユ宮殿の役人たちに代わって、革命を成功させたパリの役人たちがフランスに君臨することになった。

## 第 8 節 新教徒ユグノーとイエズス会

聖職者にとって、国王はどうしようもない頑固者であった。1685 年にルイ 14 世は新教徒ユグノーを国外追放にしてしまったが(曾祖父のアンリ 4 世にとって彼らは友人であり、フランスのよき選良であった)、ユグノーがい

たからこそ、ルイ 14 世は「聖職者の言い分 reason of theology」に対抗して「国王の言い分 raison d'état」を主張できたのである。ところがユグノーを追放してしまったため、「国王の言い分」が通らなくなった。マンテノン夫人 Madame de Maintenon とイエズス会が共謀して「ナントの勅令 Edit de Nante」を廃止し、ユグノーはフランスから追放されることになった。多くのユグノーが外国に逃れたが、なかにはパリに逃れて行った者もいた。「パリは国王の直轄都市 grande ville de Paris」であり、「竜騎兵 Dragonnades」はパリに滞在するユグノーに対して「フォンテーヌブロー勅令 Edit de Fontainebleau」(1685 年に「ナントの勅令」を廃止した勅令)を厳格に適用できなかったからであった。約 1 万人のユグノーがフランスに残っていたが、彼らは飽く迄も非合法的な存在であって、これがフランスの不安定要因になっていた。彼らを迫害したのはフランス各地の聖職者だったが、もはやフランス各地の聖職者たちはパリ大学の神学部(つまりはローマ教皇)の指示に従おうとしなくなっていた。またパリ大学の神学部の方も、フランスの聖職者のやり方を認めるつもりはなかった。ガリア教会(ローマ教皇の権威を認めないフランス独自のカトリック教会)は、もはやパリ大学の神学部の権威を尊重しようとはしなくなっていた。「フォンテンブロー勅令」は、そんなガリア教会の勝利を意味したし、ローマ教皇に忠実なイエズス会は、その結果を認めざるを得なかった。イエズス会はイギリス・オランダ・ドイツをプロテスタントに奪われていたが、フランスだけは手放したくなかったのである。イエズス会はその国際的な名声ゆえに、かつてパリ大学の神学部がカトリック教会圏で占めていたような地位を取り戻すつもりでいたが、フランスでその夢を実現することは不可能であった。それほどフランスは外部からの影響に否定的になっていたのである。1590 年から 1761 年まで、イエズス会はフランスで嫌われていた。だからこそリシュリューはユグノーも参加した科学アカデミーをパリに創設して、パリ大学の代わりにしようとしたのである。その成果がパスカル Blaise Pascal の登場であった。パスカルにフランス革命の始まりを見ることができる。パスカルは、トマス

= アクイナスやボナベンツラ Bonaventura のような「寛大さ magnanimity」がないと言ってイエズス会を批判した。神秘さを放棄して、あまりにも「理屈 reason」一辺倒になったイエズス会を批判したのである。彼が書いた『田舎の友人に宛てた手紙 Lettres Provinciales』はイエズス会の権威を崩壊させ、さらにフランス語による散文の手本を提供することになった。有名人が書いたものが読まれるからと言って、それが文学として優れているとは限らない。パスカルも、あるいは『田舎の友人に宛てた手紙』以上に文学として優れたものを書けたかもしれないが、だからといって『田舎の友人に宛てた手紙』の価値が損なわれる訳ではない。あるアメリカ人が『田舎の友人に宛てた手紙』にガッカリしたと言っていたが、その理由を聞くと、あまりにも皮肉や嫌味な内容が多いということであった。彼は大学で文学を専攻しており、パスカルが大学で学んだ文学的な枠組みをはみ出しているのが気に入らなかったようであった。フランス人がパスカルを評価するのは、パスカルが一人でイエズス会に戦いを挑んだからである。それは1775年のアメリカ独立戦争で、イギリス正規軍との戦い（レキシントン・コンコードの戦い）を前にしたミニットマン Minuteman（1分で動員できるということでこの名があるアメリカ軍の不正規部隊）の勇敢さに匹敵するものであった。

パスカルは勇敢であったが、けっして無謀ではなかった。男らしく戦ったが、謙虚さと自制心も失っていなかった。パスカルも時間より空間を重視する（つまり歴史を軽視する）科学者であったが、それでも孤独な人間にとって空間が途轍もなく恐ろしいものであることは知っていた。「ほとんどの犯罪は、空虚な部屋のなかで孤独のまま1時間も安心して過ごせない人間の特性から来ている」と彼は書いているが、戦うキリスト教思想家パスカルの面目躍如たるものがある。空虚な部屋が齋す恐怖は、孤立した個人にはどうすることもできないものである。人間は「仲間 community」なしに、この問題を解決することはできない。彼が『パンセ Pensées』を書けたのも、ポール＝ロアイヤル Port Royal という「ジャンセニスム

Jansenisme」(カトリック教会内部の改革派)のセンターがあったおかげである。「キリスト教的な愛 love」なしにパスカルの思想は存在し得ない。

つまりパスカルは、フランス革命を準備した偉大な人物の1人であった。まずイエズス会のフランス撤退を準備し、デカルトによる知的革命を支持し、人間にとって「仲間」が不可欠な存在であることを証明して見せたのである。彼の短い生涯(1623 - 1662)には、フランス人の特徴が凝縮されている。感性を大切にす合理的主義者や、勇気と信念の人にして詩人の心を忘れないのがフランス人であった。

パスカルとポール＝ロアイヤルは、宗教改革と対抗宗教改革によって発生した知的な行き詰まりを解決する手段を提供することになった。1761年にイエズス会はフランスから追放され、そのおかげでフランス国王はパリとの戦いで国際的な視野の協力者を失うことになった。1761年にデイドロー Denis Diderot は、つぎのように書いていた。「イエズス会を追放した結果、フランス国王は専制的な権力を失ってしまった」。

## 第9節 無責任な貴族の特権

中世的な制度を近代化するに際して、フランスは3つの地域を1つに纏める必要に迫られていた。1)キリスト教世界の中心地たるパリ、2)フランス各地に王領地を有する王国の中心地イル＝ド＝フランス地方、3)古代のガリア地方を管轄下に収めるガリア教会(教皇の権威を認めないフランス独自のカトリック教会)。

3つの地域はどれもが中心地たろうとしていたため、容易に1つに纏められなかった。フランスの国内統一は、イギリスやドイツに比べて遅れていた。ドイツは1517年にルターのおかげで国内統一が始まっており、イギリスも1688年の名誉革命で国内統一が開始されていた。ところがフランスは、ルターのおかげでキリスト教世界の中心でなくなり、国内統一が実現できたのは(つまり「旧体制 ancien régime」を終わらせたのは)、1789年になっ

てからであった。

フランスの両隣には、劇的なやり方で国内統一を実現したドイツとイギリスが存在していた。両国に遅れを取っていたことでフランス人は焦っていた。250年続いた焦りの結果が革命の勃発であった。解決策を外国から借りてくるわけにもいかず、かといってルターの宗教改革やイエズス会の対抗宗教改革を無視することもできなかった。選ばれたのはイギリスのやり方であった。しかしイギリスのやり方も3つの地域を統合するには不適切であることが判明したとき、イギリス＝モデルの適用に反対していた勢力が影響力を発揮することになった。イエズス会である。しかし国際的な役割を果たすはずであった彼らも、フランスを去ることになった。フランスが革命という独自の方法にたどり着くことになったのは、そのときである。フランス革命の結果、やっとフランスは国内統一を実現することができたのである。

フランスが国内統一を実現するためには、貴族たちが持っていた封建的特権を廃止する必要があった。貴族たちの封建的な特権のおかげで、フランスはパッチワークのような様相を呈していた。「ロレーヌ Lorraine では、まるで郵便馬車の馬を交換するように適用される法律が変更されている」とボルテールは書いている。同じことがピカルディー Picardy・アルトワ Artois・ポワツウ Poitou・ブルターニュ Bretagne・アキテーニュ Aquitaine・ノルマンディー Normandy などの各「地方(邦) pays」についても言えた。こうした「地方(邦)」では特有の慣習法に加えて、ブルグンド族・ゴート族・フランク族の慣習法が効力を有しており、さらにローマ法や教会法も効力を有していた。そこに国王・教皇・司教が認めた特権が付け加わったのである。また領主独自の判断も、その地域の法律として効力を認められていた。イギリスやアメリカが誇りにしていた地方自治の権利は、フランスでは「地方(邦) pays」に「慣習法 coutumes」として認められていた。ちなみに「地方(邦) pays」は1700年には「祖国 patria」を意味し、いま「祖国 Patrie」の意味で使われている言葉は1700年には「ベアルン地

方 pays de Béarn」や「ラングドック地方 pays de Languedoc」のように、「地方(邦) pays」の意味で使われていた。当時のフランス人にとって自分の権利を保障してくれるところ、つまり出身地であり故郷であったのは「地方(邦) pays」であった。ニューヨーク州にニューロシェル New Rochelle を建設したのは、「ナントの勅令」が廃止されて迫害に直面したロシェル市の新教徒ユグノーたちであった。フランスのロシェル市こそが彼らの「地方(邦) pays」だったからである。ロシェル市の城塞は30年に渡って彼らを守ってくれていた。フランス人にとって、「地方(邦) pays」は無くてはならないものであった。ユグノーには司教区も教区も存在せず、あったのはユグノーに認められていた特別な「地方(邦) pays」だけであった。「地方(邦) pays」なしには、法が保障する権利も無意味であった。

無数の「地方(邦) pays」を1つに纏めていたのは国王であった。国王が27万人の貴族と聖職者を統治していたのである。国王はそれぞれの「地方(邦) pays」の慣習法に従って各「地方(邦) pays」を統治していた。アメリカ大統領が、48ある州(1930年代当時)の憲法を念頭にアメリカ全体を統治しているようなものである(アメリカには、もともと統治権を有しているのは「州 state」であって、連邦政府は「州」が認めた範囲でのみ統治権を行使できるとする「州権優先論 state right theory」が存在する)。

イギリスで地方の領主たちが国王に対する反乱を成功させていたのと同じころ(1640～60年の清教徒革命)、フランスでも地方の貴族たちが国王に対して反乱を開始していた(1645年のフロンドの乱)。フランス国王はイギリス国王と違って貴族たちを押さえ込むことに成功し、貴族をベルサイユに集めることで「地方(邦) pays」から統治の担当者を奪ってしまった。貴族に代わって「地方(邦) pays」の統治を担当することになったのは、国王が任命した「代官 intendant」であった。貴族は不在地主と化して、たとえばロシュフール公 Duc de La Rochefoucauld がベルサイユの外にいたのは、50年間で20日だけであった。もともと「地方(邦) pays」統治の中心であった貴族の城は、夏の別荘や狩猟宿と化していた。1750年にベル

サイユの人口は10万人だったが、その大部分はフランス中から集められた貴族たちであった。パリに対抗するために国王が支払った代償がこれであった。国王は、パリの防壁を壊す道具として貴族を利用したのである。モリエール Molière の『町人貴族 Bourgeois Gentilhomme』を読むとき注意しなければならないのは、この事実である。『町人貴族』が書かれたころ、イギリスでも貴族が国王に対して反乱を起こしていたが、イギリスの貴族はフランスの貴族ほど町人（商人）に対して残酷な態度を取らなかった。国王との戦いで町人（商人）の支持も必要としていたからである。ところがフランスでは、ベルサイユに強制収容された貴族は商人を「下等な連中 crapules」<sup>さげす</sup>と蔑んでいた。ベルサイユに強制収容された貴族は、何の責任も負うことがなかった。そんな彼らこそ諸悪の根源であった。国王の「偉大さ grandeur」が貴族の卑小さを隠しているかぎり問題は起きなかったが、ルイ14世が死去するとベルサイユは卑小化していくことになる。尊大さだけが取り柄だったベルサイユの雄蜂たち（貴族）は、やがてパリのうるさい働き蜂（ブルジョア）を押さえ込めなくなるのである。

ベルサイユには「無能な特権階級 privileged class without functions」<sup>すく</sup>が巢食い、パリには「無役の働き者 a functioning society without privileges」<sup>むやく</sup>が巢食うことになった。「地方（邦）pays」の統治担当者であった貴族がベルサイユに集められたおかげで、フランスの「地方（邦）pays」は機能しなくなっていた。またベルサイユに集められたことで、貴族の特権の無意味さが目立つことになった。「地方（邦）pays」で統治を担っているときは、貴族の特権にも意味があった。国王から特権を与えられた貴族は「地方（邦）pays」の誇りであった。「地方（邦）pays」がパリの商人・知識人と対等に渡り合うことができたのは、貴族の特権のおかげであった。

この体制が壊れてしまったのである。「地方（邦）pays」は国王の「代官」によって支配されることになり、それまで称号・儀礼・特権で「地方（邦）pays」を飾り立てていた貴族の外衣が剥ぎ取られてしまった。貴族は、かつて負っていた社会的な責任を奪われ、<sup>やくた</sup>役立たずの存在になっていた。と

ころがフランス各地で活気づいていた都市は、ベルサイユとも「地方（邦）pays」とも違っていた。フランス人にとって、都市こそがフランスの「あるべき姿 juste-milieu」であった。都市は（とくにパリは）、<sup>かって</sup>けっして勝手気ままな個人の集まりではなかった。当時のパリをイメージするとき、工業都市のピッツバーグ Pittsburgh（アメリカ）・リバプール Liverpool（イギリス）・シャルルロワ Charleroi（ベルギー）を想像してはいけない。フランス革命で都市（とくにパリ）が実現を目指したのは、「無能な特権階級」でもなければ「無役の農民」でもなかった。1700～50年のパリには（1789年の人口は60万人）、それに代わる者が存在していたのである。都市がフランスの「あるべき姿」を実現するためには、いかなる意味でも革命は不要であった。当時の「工業 industrie」<sup>アンデュストリー</sup>というフランス語には、まだ「職人技 craftsmanship」という意味があった。当時のフランス語で「工業」という場合、それはフォードやGMの工場で行われているような大規模な機械を使った生産を意味しない。18世紀末から19世紀初めにパリで工業博が開催されたとき、そこに展示されていたのは家具・宝飾品・ゴブラン織りタペストリーであった。

フランス革命が目指したのは、働き蜂（ブルジョア）の集まるパリのあり方をフランス中に広めることであった。貴族に馬鹿にされていた「都市民 bourgeois」（商人・職人）に復讐の機会を与えることであった。つまり、「都市民」を「国民 citoyen」<sup>ブルジョア シトワイヤン</sup>にすることであった。それがフランス語でいう「文明化 civilization」<sup>シビリザシオン</sup>の意味であった。パリの「都市民」はベルサイユの貴族の無能・無役ぶりを見抜いていたのである。ベルサイユの貴族に「国民」の資格はなかったし、農民にも「国民」の資格はなかった。「都市民」だけにその資格があった。

## 第10節 「都市民」が「国民」になることの意味

この問題は、もっと詳しく見てみる必要がある。というのも、19世紀

にはフランス以外の国がフランスを真似ることになるからである。ナポレオン1世が予言したように、フランス革命の理念は世界中に広まっていくことになった。しかし「文明化」に成功した国はフランスだけであった。フランスではパリの「都市民」だけが、特権をもつ貴族でも無役の農民でもない者になれたのである。特権と無役の中間という特殊な地位のおかげで、パリの「都市民」は「国民」となることができたのである。

「工業」というフランス語がもつ独特な意味からも判るように、フランス語には他のヨーロッパ語にはない独特な意味を持つ言葉がある。「文明化」という言葉にしても、フランスでは「国民」形成と密接に関わっている。フランス「国民」には、国王も貴族も不要であった。フランスは民主主義の国だということになっているが、それは「民衆 people」の国という意味ではない。フランスで「民衆」という言葉は、「貴族 aristocrate」という言葉と同じように悪い意味で使われている。「貴族」でも「民衆」でもない「都市民」が民主主義を支えているのである。「国民」とは「民衆」のことを意味しない。パリの「民衆」とかフランドル地方の「民衆」というと、それは論理的な思考ができず、迷信まみれの浮浪者や農民を意味する。「国民」とは「民衆」のように迷信に囚われず、論理的な思考ができて議論が上手な者のことなのである。

また「国民」には、啓蒙の光を齎す者という意味もあった。プロメテウスのように人類に光と炎をもたらす「明けの明星」であり、人間に備わった能力を使って迷信を排除していく者という意味もあった。

英語には「この国の民衆 people of this nation」という言い方があって、「国(国民) nation」と「民衆 people」が同じでないことがすぐ判るが、フランス語でも「フランス国民 nation française」は、「フランスの民衆 peuple français」と同じ意味ではない。フランス語で「国民」と言った場合、その特別な意味が無視され勝ちなので注意する必要がある。

「国民」という言葉は誤用されることが多いので、もともとフランス語で意味したことを明確にして置くことが必要である。政治に関係する

英語は、そのほとんどがフランス語起源であることも知っておく必要がある。「首相 Prime Minister」しかり、「自由党 Liberals」しかり、「保守党 Conservatives」しかりである。

アメリカ人はイギリス人以上に「国民」という言葉の使い方に無頓着である。アメリカは「様々な移民(国民) all kinds of nations」によって構成されている国であって、アメリカ人のことを「国民」などと簡単に呼ぶべきではない。またイギリス人が至上とすべきは「イギリス連邦 Commonwealth of Nations」であって、「イギリス国民至上主義 Nationalism」であってはならないはずである。

フランスで「国民」という考え方が生まれたのは、「都市民 bourgeois」(商人・職人)のおかげであった。すでに1750年の段階で誰もが変革を期待するようになっていたが、彼らは貴族も農民も変革の主体になり得ないことを見抜いていた。収穫を待つばかりになっていたが、まだ収穫する者がいなかっただけであった。フランス革命にとって必要であったのは、リーダーとなるべき知識人であった(ロシア革命の場合は逆で、すでに知識人は存在しており、必要であったのは工場を建設して労働者を生み出すことであった)。フランス革命にとって必要であったのは、「都市民(第三身分 tiers état)」のリーダーとなるべき知識人を生み出すことであった(フランス人は誰もが知識人になりたがるが、その理由がこれである)。フランスでは、「都市民」がフランス人になるのに必要な経済的条件を整えていた。

新しい秩序が必要であることは、すでに劇場で演じられる演劇で指摘されていた。1789年の革命のアイデアは、すでに劇場で示されていたのである。かつて軽蔑され、無法者扱いされていた俳優たちが、いまだ現実となっていない将来の可能性を舞台に登場させていた。何をなすべきか、これをフランス人は劇場で学んだのである。

『町人貴族』を書いたモリエールは、まだ現状を追認しただけであったが、その100年後に「モリエールの後継者」が登場してきた。ポーマルシェ Caron de Beaumarchais である。彼はモリエールと違って現状に批判的であっ

た。彼はフランス国王の命令で独立戦争を戦っていたアメリカ軍に軍需品を供給して有名になり、『セビリアの理髪師』を書いて劇作家としても成功を収めていた。彼が1778年に書いた『セビリアの理髪師』の続編『フィガロの結婚』は、フランス革命の勃発を予知させるものであった。書き上げるのに4年も掛かっており、さらに検閲などを経て1784年に初演を迎えるが、そのときすでに革命の勃発が迫っていた。

『フィガロの結婚』では伯爵と伯爵夫人を召使やメイドと同列に扱っており、やがて登場してくる新しい主従関係を示唆していた。ポーマルシェは、法廷闘争・名声・金儲けの3つを同時に追求していたが、この3つは新しく登場してくる世界の構成要素でもあった。ポーマルシェの法廷闘争・名声・金儲けは、いずれも褒められたものではない。しかし彼は新しく登場してくる世界の預言者であり、先駆者であった。正直者の商人とはとても言えないポーマルシェであったが、天才であったことは確かである。

ロシアの知識人は普通のロシア人以上の存在でなければならなかった。しかしフランスの知識人は、普通のフランス人であれば十分であった。「モノ書き *littérateur*」に求められたのは「本物の才能 *génie, vrai génie*」と「異能 *エスプリ esprit*」であり、「フランス語の達人 *master of expression*」であることであった。それさえ持ち合わせていれば、少々のルール違反は大目に見てもらえた。ところが電気に政治的な意味を持たせたロシアのような世界では、電気工が英雄になれた。ゴーリキー Maxim Gorky が『日記』で紹介していることだが、レーニンは「ソビエト権力+電気=社会主義」ということを繰り返し言っており、そのことを知っていた1人の電気工が農村に行き農家のまへで、こんなことを言ったそうである。「お前たち農民は村の司祭に十分な食料を提供し、その代わりに司祭は教会で永遠に消えないという聖なる火を守ってくれている。私を村長に任命して給料を払ってくれるなら、私は村に電灯を点けて見せよう」。電気工の提案は受け入れられ、その村には電気工と電灯が司祭と聖なる火に取って代わるようになった。フランスでロシアの電気工のような役割を果たしたのが「異能エ

スプリ」の持ち主であった。彼は賞賛の的となるが、それは彼が政治の雲を操って稲妻を飛ばし、変化と再建を可能にしたからである。

フランス語の「異能 *esprit*」を英語に翻訳するのは不可能である。しかしフランスの政治史を理解するためには、この言葉は欠かせない。この言葉は、もともと「聖霊 *Holy Ghost*」を意味していて、それが「異能 *エスプリ*・*靈感*」の意味で使われるようになったのである。「*靈感 esprit*」はいつ誰に現れるか判らないが、「*靈感*」を受けた人間が統治を担当するのである。

フィガロは第4幕最後のコーラスのなかで、つぎのように唄っている。「生まれつき国王になれる者もいれば、羊飼いにしかなれない者もいる。その違いは、どこで生まれたかという偶然だけである。ところが*靈感*を受けた者は、すべてを変えることができる。王様は20人いても死んだらお仕舞いだが、ボルテールは永遠である」。フィガロがこう唄ったのは、彼の恋人シュザンヌに横恋慕するアルマビア公爵にみごと一本を取ったあとのことであった。下から見上げていたとき大きく見えた公爵も、じつは普通の男であったことが判明したのである。「公爵、あなたは自分が公爵だから偉いと思っていたのでしょうか。生まれた家が偶然、公爵家だっただけであって、あなたも普通の男と同じです」（モーツァルトの歌劇では第4幕最後のコーラスだが、ポーマルシェの演劇では第5幕の最後にフィガロが口にする台詞）。

『フィガロの結婚』では、生まれの良さなど意味がないと主張されていた。ポーマルシェは『フィガロの結婚』で得た利益を未婚の母を収容した施設に寄付すると約束していたが、それはともかく、この演劇をもっと詳しく見てみることにする。

『フィガロの結婚』は3時間もの大作で、誰もが失敗作だと思っていた。ポーマルシェは原稿を友人たちに見せたあと、あちこちのサロンで朗読して見せたが、賛否は別れていた。1779年に200ルイ金貨（約1000ドル）を失敗する方に賭けた者がいたほどである。検閲がO.K.を出したあと、王立劇場のコメディエール＝フランセーズ *La Comédie-Française* が上演するかどう

か決めかねていたとき、ボーマルシェはコメディ＝フランセーズに上演を働きかけている（検閲がO.K.を出していたので自分の身に危険が及ぶことはないと考えていた）。しかし、この演劇があまりにも有名になっていたため、警視総監は国王個人に確認を取ることにしている。原稿が読み上げられるのを聞いた国王と女王は、さきほど引用したフィガロのセリフの内容が危険と判断して、こう叫んだそうである。「上演などもってのほか。バスチーユが攻撃されないかぎり、上演などはもってのほかだ」。

バスチーユが実際に攻撃されるのは8年後のことだが、ルイ16世は『フィガロの結婚』の内容から、8年後に起きることを予見していたのである。演劇が政治的な変革を引き起こすことを『フィガロの結婚』は証明していた。

国王が反対した結果、逆に国民は上演を希望するようになった。バスチーユの攻撃に匹敵するほどの演劇なら、ぜひ見てみたいと国民は思ったのである。各地のサロンで『フィガロの結婚』について話をする機会があったボーマルシェは、「女性たち宛に」特別な序文を書いたほどである。社会風刺に関心があったロシアのエカテリーナ2世は、ザンクト＝ペテルブルクで『フィガロの結婚』を上演することまで考えていた。ところがフランスの「国璽尚書 Garde de Sceaux」がこれに反対し、『フィガロの結婚』に好意的でなかったアカデミー＝フランセーズ Académie française の院長シュアール M.Suard まで動員して、ロシアでの上演を中止させてしまった。

ただし王家の者が全員、上演に反対だった訳ではなかった。ルイ16世の弟アルトワ伯（1824～30年にシャルル10世として即位する反動派）のために1783年6月13日、『フィガロの結婚』がパリで上演されることになり、多くの貴族たち（親王・大臣・貴族夫人など）が招待されていた。上演が予定されていた劇場周辺の道路は、貴族たちの馬車で通行できないほどになっていたが、突如として国王は俳優たちに公演参加を禁止してしまった。貴族たちは「暴政だ！ 圧政だ！」と抗議の声を挙げたが、上演は実現しなかった。

ところが3ヶ月後の9月23日、ある「地方」で上演が実現した。上演を実現させたのは、やはりアルトワ伯であった。ボーマルシェがカットに同意した部分を試験的に上演してみるというのが、その理由であった。試験的な上演ということで、3人いた検閲官のうち1人が上演を許可したのである。しかし国王の禁止令は解除されておらず、国王はさらなるカットを命じていた。残る2人の検閲官が許可するか否かを決定することになっていたが、1人が許可せず、これで上演禁止が決まったかに思えた。

しかし、それ以上この問題にタッチすることを役人たちが拒否したため、ボーマルシェ自身が諮問委員会を招集した。委員会には、パリ警察長官・「国璽尚書」・大臣・検閲官がそれぞれ1人ずつ、さらに文学に詳しい人物が2人参加していた。『フィガロの結婚』の「生みの親」ボーマルシェの細部に渡る見事な説明が功を奏して、委員会は満場一致で上演を許可することにした。国王には問題箇所はすべてカットされていると報告していた。なかには『フィガロの結婚』が受けるわけがないと付け加える者までいた。さらに俳優たちは出演料を支払って頂きたいと国王に陳情し、そこで国王は1784年3月に禁止令を取り下げることにしたのである。

これで『フィガロの結婚』の上演問題は解決したかに思えたが、この演劇をめぐる政治喜劇は始まったばかりであった。ボーマルシェやその友人たちは、肝心な箇所を削除したことで評論家から悪評を買うことを心配していた。ところがアルトワ伯は、こう言って彼らを安心させていた。「『フィガロの結婚』は成功間違いない。上演を禁止していた国王に禁止を諦めさせたからである。政府との争いで勝利を取めたことで好評を博するはずである」。

ヨーロッパで「民主主義」といえば、それは「政府との争いで勝利を取めること」を意味した。1784年4月27日の上演は大成功で、10月2日までに50回もの上演記録を達成していた。ところがボーマルシェ個人は、多方面からの非難に直面していた。まず上演に反対していたシュアール院長がアカデミー＝フランセーズでボーマルシェを非難し、さらにパリ大

司教が教書でポーマルシェを非難した。シュアール院長に到<sup>いた</sup>っては、さらに自分が発行していた『パリ日報 Journal de Paris』を使ってポーマルシェを非難していた。

1785年3月2日、ポーマルシェは公開状を書いて反論した。「『フィガロの結婚』を上演するために獐<sup>どうもう</sup>猛な野獣どもを何とか黙らせたと思っていたら、今度は南京虫が文句を言い始めた」。

「南京虫 bug」呼ばわりされたシュアールは、ポーマルシェが「獐<sup>どうもう</sup>猛な野獣ども」と呼んだのは国王と女王のことで、不敬罪にあたるとしてポーマルシェを告発した。ポーマルシェは、そのおかげで若い犯罪者を収容するサンラザール St. Lazare 監獄に収監されてしまった（そのときポーマルシェは53歳であった）。国王はカード遊びの最中<sup>さいちゆう</sup>だったので、ポーマルシェに対する収監<sup>しゅうかん</sup>命令をスペードのエースに書いたそうである。

世論は二分されていた。一方で入場券の法外な値付けが悪評を買っていたが、他方<sup>しゅうかん</sup>で収監は不当だとする者も数<sup>かず</sup>多くいた。ポーマルシェは8日後に釈放<sup>しゅうかん</sup>されるが、不当な収監に抗議<sup>しゅうかん</sup>して暫く牢獄から出るのを拒否していた。決意が硬いことを示すために自分の馬車を売りに出したりするポーマルシェの抗議行動<sup>こま</sup>に困り果てた国王は、事態の解決を命じるしかなかった。ポーマルシェにサンミシェル St. Michel 勲章を授与することにしたのである（サンミシェル勲章の受領者は貴族になることができた）。しかし、すでに貴族であったポーマルシェはこの国王の申し出を断り、その代わりに年金を要求した。

その後どうなったのか。国王は大臣のカロンヌ Charles Alexandre de Calonne に命じてポーマルシェに詫<sup>わ</sup>びの手紙を書かせ、年金を王室費から支給することにした。そして8月17日、6ヶ月遅れの『フィガロの結婚』が大臣たちの前で上演されることになった。大臣たちもポーマルシェの「異能・靈感<sup>エスピリ</sup> esprit」は認めざるを得ず、そこで代わりにポーマルシェ個人を痛めつけることにした。しかし『フィガロの結婚』を見た大臣たちは、これを絶賛せざるを得なかった。

1785年8月19日にポーマルシェ自身を小トリアノン Petit Trianon 宮殿（王妃マリー＝アントワネットがイギリス庭園を造らせたベルサイユにある宮殿）に招き、国王一家は男女の羊飼いに扮<sup>ふん</sup>して彼を迎えた（身分の違いが判らないようにするためである）。また国王は、銀行家にして詩人の臣民ポーマルシェと並んで『セビリアの理髪師』（『フィガロの結婚』の前作）を鑑賞した。そのとき女主人公ロジーンを演じたのが、ほかならぬマリー＝アントワネットであった。パリ市民によるバスチーユ襲撃は、このときに決定づけられたと言ってよい。

1789年7月14日にパリ市民はバスチーユを襲撃した。ルイ16世が『狂った1日 The Mad Day』（『フィガロの結婚』の別名）を見たとき予想していた通りのことが起こったのである。ルイ16世が「これは反乱だ」と言ったとき、ロシュフコー＝リヤンクール公爵 duc de La Rochefoucauld-Liancourt が「いえ陛下、これは革命です」と訂正したとされる出来事である。こうして1594年にアンリ4世が征服したパリは、フランス国王の手から失われてしまった。

パリの出来事にヨーロッパ中が注目することになった。ドイツで情熱家として知られていた劇作家のシラー Friedrich Schiller は、フランスの出来事に呼応<sup>こおう</sup>して『劇場と革命 The Theater as a Moral Institution』を書き、またフランスの俳優たちは『狂った1日』を演じたばかりでなく、1794年にはシャンドマルス公園（革命当時は「練兵場 Champ de Mars」）で「理性の女神 Goddess of Reason」を演じる女優まで現れた。また俳優は初めてサンキュロット sans-culotte（当時の貴族が穿<sup>は</sup>いていた半ズボンでなく、長ズボンを穿<sup>は</sup>いていた職人や商店主を指す言葉として用いられていた）姿で舞台に登場したが、こうした俳優や女優の姿こそフランス革命に「生氣・活力 verve」を吹き込んだのである。劇場での拍手喝采<sup>はくしゅかつさい</sup>が、ついに例を見ない街頭の革命に変わるようになった。劇場で発生した波がフランス人を熱狂させ、新しい社会契約の締結を可能にしたのである。

フランス革命の伝統<sup>けいしやう</sup>継承に熱心であったのはクレマンソー Georges-

Benjamin Clemenceau であった。彼はフランス人の中のフランス人、革命家の中の革命家であった。『フィガロの結婚』の初演から150年後にクレマンソーは遺言を書いたが、自分の墓には『フィガロの結婚』の古い台本だけを入れるように命じている。それこそがクレマンソー家の世襲財産であった。

劇場で観客は変容するものである。劇場は若いフランスの国王と女王をダフニスとクロエのようなロマンチックな男女に変えたし、「民衆 roturier」を革命の主演に変えた。劇場は「平等 égalité」の何たるかを「民衆」に教える場となり、それを実現したのが「異能・靈感 esprit」の持ち主であった。フィガロも「天才 genius は何でも変えることができる」と言っていた。1人のボルテールにすら及ばなかった20人の国王たちの怒りが、言葉を巧みに操ることができた1人の「作家 écrivain」に乗り移ったのである。

フランス革命のあとサント＝ジュヌビエーブ St. Geneviève 教会（かつてアベラールが講義をした場所）は天才や英雄たちを葬った墓所パンテオンに変えられるが、第一次世界大戦後は「フランスを代表する作家たち écrivains de France」もそこに葬られることになった。「フランスを代表する作家たち」は、フランスがフランスであるために欠かせない存在であった。

それ以来、フランス人にとってフランス語は「崇拜の対象 culte」となった。あるアメリカ人教師が「フランスの子供は書き方をどう習得するか」調査したことがあった。このアメリカ人教師は、算数・地理・ラテン語・英語・ドイツ語・歴史などの科目と同様、それはフランス語をどう学ばせるかというカリキュラムの問題に過ぎないと考えていたようだが（イギリスやドイツの教師も同じ様に考えていたはずである。違いといえば、せいぜいラテン語を重視するか否かとか、歴史や生物学を重視するか否かといったところであるう）、フランスの実情はまるで違っていた。

フランスの教師なら、こう言うはずである。「上手なフランス語を書くためならラテン語も教えるべきである」。それがラテン語教師なら、こう言うはずである。「ラテン語を勉強すれば、フランス語がもっと上手く書

けるようになる」。フランスでは、どんな科目を担当する教師も、自分の担当科目を優先させることはしない。大切なのは、立派なフランス語を書けるようにすることである。「フランス人が重視するのは説得力ある話し方と書き方である。文芸評論家のブリュンチエール Ferdinand Brunetière が指摘しているように、フランス人は説得力ある話し方と書き方の重要性をよく認識しており、説得力あるフランス語を使って世界に影響を与えることが自分たちの使命だと考えている。学校はそんなフランス語を習得するための場なのである。19世紀は学校教育が急速に普及した時代だが、その結果フランス語崇拜熱は全国的なものとなった。たしかにフランスでも、ほかの国と同じように国語（フランス語）の変質は避けられない。しかし彼らは、それを防ごうと最大限の努力をしている。フランスの学校は、フランス語の純粋性を守る最後の砦なのである。そもそも学校たるもの、フランス語の純粋性を守るために存在しているのである。この方針に沿った学校制度のあり方や教育方針はフランス全土に普及しており、すべてのフランス人がそれを『よし』としている。よき国語の伝統を守るには、ただ『時代の風潮 spirit of the times』に抗していれば済むわけではない。学校制度を使って『積極的に not only defensive, but positive』伝統を守らなければならないのである」（Rollo Walter Brown, How the French Boy Learns to Write, p. 208 ff, Harvard UP, 1927）。

国民統合にとって、国語の問題は重要である。フランスでは、フランス語が国民統合のシンボルとなっているが、ロシア・チェコスロバキア・ハンガリーではそうはいかない（ロシアが多民族国家であることは周知のとおりであり、チェコ語とスロバキア語も似ているとはいえ別の言語である。またハンガリーも戦間期にはルーマニア人・スロバキア人・ドイツ人が数多く居住する地域を領有していた）。パリではフランス語が公用語として管理されているが、ロシア・チェコスロバキア・ハンガリーで公用語を1つにすることは難しい。つまり、国語は国民統合のシンボルとなり得ないのである。同じことはセルビアとクロアチア（セルビア語はキリール文字、クロアチア語はラテン文字を

使っているが言葉としては同じ)、オーストリアとドイツ(ともにドイツ語が公用語)についても言える。ところがフランスでは、国語は特別な(したがって複雑な)意味を持っている。

第一次世界大戦前にドイツの歴史家ランプレヒト Karl Lamprecht がフランス人と一緒に北フランスを旅行していたことがあった。北フランスはフランドル人が多いところだったが(フランドル人はドイツ語を使用)、ランプレヒトはパリがフランス全土にフランス語を強制するやり方を理解できなかった。彼は14もの違った言語を話す国民を支配していた第一次世界大戦前のオーストリア帝国を例に挙げ、フランス語を国民統合のシンボルとするフランス政府のやり方を批判した。フランドル人の村を車で通り掛かったとき、彼はこう言ったという。「この村の人たちはドイツ語を使っているので、この村にはフランス語を教える学校は1つしか存在しない」。それに対して同行していたフランス人は、こう言ってのけたそうである。「彼らが使っているドイツ語は言葉なんかじゃない。この村でしか使われていない方言に過ぎない ce n'est pas une langue, c'est un patois」。

このフランス人の返事にフランス人の国語観がよく示されている。フランス人にとってフランス語の純粋性を維持する手段が不可欠であり、その手段こそが「フランス文学 Literature」であった。書き言葉こそがフランス語にとって最も重要であり、フランス人に必要不可欠な「異能・靈感 esprit」の源なのである。そのよい例が国名を自分の筆名にしてしまった「世紀末 fin de siècle」の作家アナトール＝フランス Anatole France である。「フランス」とは地理的な概念でも国民的な概念でもなく、「異能・靈感」の源泉なのである。「異能・灵感」によって絶え間なく文学作品が生み出される場所、それこそが「人間らしさ humanism」の存在する所なのである。フランス革命が目指したのも、そんな「人間らしさ」の実現であった。

「フランス革命が生み出した制度 French Constitution」を理解するには、こうしたフランス人の涙ぐましい努力、つまり「異能・灵感」を絶やさない努力、「天才」の息づかいを感じ取るために彼らが払ってきた努力を忘

れてはならない。ベロック Hilaire Belloc (フランス人でありながらイギリスで英語の詩を書いて有名になった詩人)に言わせると、フランス革命は「普遍主義 belief in universal inspiration」の申し子であり、聖人や「聖霊 Holy Ghost」の導きに従っているということでは、イギリス人もフランス人も同じキリスト教徒なのである。「異能・灵感」(世俗化された「聖霊」)だけが世界を変革できるのであり、「異能・灵感だけがすべてを変えることができる L'esprit seul peut tout changer」のである。

## 第11節 ボルテールとルソー

フランス革命はフランス人の文学崇拝<sup>すうはい</sup>に由来していた。またロシア革命はマルクス主義に由来していたが、フランス革命でロシアのマルクス主義に相当したのが「ジャコバン主義 Jacobinism」であった。そこで、この「ジャコバン主義」の2人の立役者ボルテールとルソーの考え方を詳しく見てみることにする。19世紀のヨーロッパで起きたことを理解するためには、それが一番よい方法である。

偉人たちの墓所であるパンテオン(もともとサント＝ジュネビエーブ教会があったところ)に革命後まず収納されたのが、ボルテールとルソーの遺体であった。ボルテールは、自分の墓がどこになるかはっきりしないことに苛立っていた。ルイ14世の「不死の精神 immortal spirit」を受け継いだとされていたボルテールは、「旧体制<sup>アンシャンレジーム</sup>と革命の狭間で苦しんでいた。スイスとフランスの国境にあった彼の「狐の巣穴」(彼は自宅をそう呼んでいた)には2つの出入り口が存在していたため(新教徒ユグノーが支配するジュネーブ市とカトリック教会が支配するフランス)、彼は両方の敵に対処する必要に迫られていた。一方で聖職者を容赦なく非難・攻撃しながら、他方で迫り来る死に備えて墓所を確保しておく必要があった。そこで彼は死の年(1778年)、フランス政府が自分の死を察知するまえにカトリック教会で葬式を済ませてしまうよう手配したのである。死後、彼の遺体はパンテオンに移

されたが、1814年に王党派による反革命の動きが始まると彼の遺体は掘り返され、遺骨は空中に散布されてしまった。

ドストエフスキーが社会制度の悪、トルストイが個人の罪をそれぞれ問題にしたように、ルソーは社会制度のあり方、ボルテールは個人のあり方を問題にした。ボルテールもルソーも、安っぽいロマン主義とは無縁であった。トルストイとドストエフスキーが社会革命党の安っぽい感傷と無縁であったのと同じである。社会革命党は可哀想な「ムジーク」（ロシア農民）のために戦っており、「ムジーク」（ロシア農民）の魂を救済することが社会改革に繋がると信じていた。ロマンチストの彼らは、「ツァーリ」（ロシア皇帝）による支配体制を終わらせれば「ムジーク」（ロシア農民）の魂は救われ、農村に自由が齎されると信じていた。それが間違っていることを証明してみせたのがドストエフスキーであった。

「ツァーリ」（ロシア皇帝）による支配を終わらせても、「ムジーク」（ロシア農民）の魂は救済されず、農村が解放されることもなかった。社会革命党は、そもそも人間に対する考え方を根本から改める必要が有ることをドストエフスキーは証明していた。またトルストイは、「理想的な天と地 new heaven and earth」の実現を求め続けるという社会革命党の考え方が間違っていること、またロシアでしか通用しないような解決策は存在せず、ヨーロッパでもアジアでも通用するような全人類的な解決策を見つけるしか他に方法がないことを証明していた。

ルソーとボルテールについても同じことが言えそうだが、どこまで彼らの試みが成功したかを確認するのは困難である。彼らが使っていた言葉が6世代ものあいだ繰り返し使われていたので、まるで新鮮味のないものになってしまった。ジェファソン Thomas Jefferson・ベンサム Jeremy Bentham・スペンサー Herbert Spencer・ウイルソン Woodrow Wilson らがルソーやボルテールの言葉を多用していたおかげで、ルソーやボルテールの言葉が持っていた意味が判らなくなっている。

1759年にフランスが置かれていた状況は、パスカルがよく代表してい

た。1)パスカルの数学研究に示されるようなすばらしい科学の存在。2)パスカルの『田舎の友人に宛てた手紙』が批判したようなイエズス会に代表される「視野の狭さ Provincialism」。3)パスカルの『パンセ』が書かれたポール＝ロアイヤルのような信仰共同体の存在。

ポール＝ロアイヤルのような避難場所が存在しているかぎり、フランスの「都市民」が信仰と関係のない政治の問題に取り組むことはなかったであろう。ところが1750年にフランスで新しい政治体制の必要性が叫ばれるようになったとき、パスカルの『パンセ』は乗り越えられることになった。パスカルはこう書いていた。「私は自分が嫌いだ Le moi est haissable」。しかしルソーは『告白録 Confessions』の冒頭で、つぎのように書いていた。「自分と同じ人間仲間なにかまに1人の人間、あるがままの人間を見せてやりたい。その人間というのは、私自身である」。パスカルとルソーのあいだに革命的な違いが起きていたことが、この発言から確認できる。

宗教に逃避していた人物に代わって、「あるがままの人間 un homme dans toute la vérité de nature」が登場してきたのである。ルソーは、自らを新しい時代の人間、新しい世界の人間として提示して見せた。人間として、彼はけっして立派とは言えなかった。正式に結婚していたにも関わらず自分の子供を遺棄し、孤児院に預けるようなことをしていた。しかし、それには理由があった。ルソーは旧約聖書に登場してくるアダムの再来であった。そのアダムが、シオンの丘に住んだ最初の市民キリストに取って代わったのである。アダムは、妻がいた「あるがままの人間」であった。アダムが水を飲んでいたら、まだワインもビールも存在していなかった。アダムは、原罪によって人類が階級に分けられるまえの「あるがままの人間」であった。「アダムが耕しイブが紡いだとき、だれがジェントルマンであったか」（ワット＝タイラー Wat Tyler の乱の指導者ジョン＝ポール John Paul の有名な言葉）である。アダムとイブが神によって創られたとき、「あるがままの人間」であった彼らは自由であった。ジェファソンもこう言っている。「神は人間を創造したとき、同時に自由も与えてくださった」。つまり、人

間は生まれながら自由なのである。1800年に東部のアメリカ人がミシシッピ川やオハイオ川にやって来たときも、彼らは自由であった。オハイオ州政府を作ったのも、パリで商工会議所を作ったのも自由な人間であった。彼らは何をどうすればよいのか知っていたし、それを実現する能力も持っていた。

赤ん坊・老人・病人・気違いなどと違って、自由を与えられた人間は自立心の持ち主だったというのがジェファソンの人間観であり、ルソーの人間観であった。ところがロシア革命は、この人間観を単純化して「プロレタリアート崇拜 cult of proletariat」を作り上げたのである。しかしヨーロッパ人のなかに染み込んでいた都市文化は、ロシア革命が作り上げた「プロレタリアート崇拜」とは無縁であった。ルソーの生涯が示しているように、人間は年齢を重ねるとともに変わっていくものである。とくに40歳代や50歳代は、新しい思想や新しい芸術、新しい発見ができる素敵な年齢である。このことから、人間には生来、自由が備わっていることが判る。人間の肉体は、生まれた瞬間から他者との共存を宿命づけられており、その意味では自由でない。しかし人間には環境を変えたり、住む世界を変えたりする能力が備わっており、人間がその能力を発揮できるのは、人間に自由が与えられているからである。人類の始祖アダムには穴を掘ったり木を切ったりする能力があったが、ほかにも環境を変え、住む世界を変える能力も備えていた。アダムは創造神と同じように自由であったし、聖なる存在でもあった。そのことをゲーテは、つぎのように表現していた。「もはやアラーが世界を創造する必要はない。われわれ人間が世界を創造するからである」。

19世紀に、フランス語の「創造 création」という言葉は意味を変えてしまった(程度の差こそあれ、他の言葉も意味を変えている)。「創造」は神だけでなく、人間にも許される行為となったのである。人間は、住んでいる環境を作り変えてよいことになった。そのことは、たとえば「最新作 dernière création」を絶えず生み出し続けるファッション業界の例でも確認することができる。

る。古代ギリシャで世界の創造神と信じられていたデミウルゴスに代わって、「創造力 creative mind」をもった「天才」が登場して来ることになった。

グレーツイゼン Bernard Groethuysen が革命前にフランス中産階級の聞かされていた説教を調べたところ、職人たちの持つ「自助 doing it oneself」の精神が称賛されていたそうである。とくに称賛されていたのは、職人たちの技能・知識・能力であった。人類の始祖アダムが立派だとされたのは、彼が「自然の子 child of nature」だったからというより(このことも大切であったが)、「自然を手なずけた者 man who masters nature」だったからであった。彼は「あるがままの人間」だっただけでなく、道具を使うことができる人間、自分の行動を自分で決めることができる人間であった。

我々が行動を決めるとき、我々は誰もが同じチャンスに恵まれていることを前提に行動している。人類の始祖アダムも、小規模とはいえ資本ないしは能力を持った資本家であった。50エーカー(約20ヘクタール)の農地を耕す自営農民や、自分の能力を頼りに生活費を稼ぎ出す詩人と同じであった。つまりアダムによる自由な「創造」には、その前提として所有権が存在していたことになる。ルソーの場合も、土地・動産・資本・才能を所有していることが前提になっていたはずである。なぜなら、人間は自由な選択ができることになっていたからである。自由な選択を可能にするには、行動のチャンスが与えられていなければならない。つまりチャンスは社会的な資産なのである。自由があるか否かを見分ける簡単な方法は、チャンスが保障されているか否かを確認すればよい。チャンスとは、ルソーにとって「力の場 field of force」における電子のようなものであった(決定的に重要なもの)。誰もが少なくとも1回はチャンスが与えられること、これが肝要である。ジェファソンが「生れながらの自由」と言ったことの意味もこれであった。

ルソーが「あるがままの人間」として公衆のまえに自分を曝け出したとき、かれはアダムに対する常識的な考え方を改めてしまった。それまでは神による禁令を破り、知恵の木の実を食べてエデンの園を追われた後のア

ダムが問題にされていたが、ルソー以後はエデンの園を追われるまでのアダムに関心が払われるようになった。そのときのアダムは、火や水のように無垢で自然な存在であった。ルソーに代表されるようなフランス人の「自然な感情重視 sensualism」は、イギリス人やドイツ人とは無縁のものである。逆にイギリス人やドイツ人は哲学と無縁である。ドイツ人に至っては、哲学は神学と同じだと考えている。ところがフランスでは、哲学は民衆のものなのである。娼婦が通行人に声を掛けたとき、もし通行人が娼婦の提案を受け入れなければ娼婦はこう言って通行人を罵るはずである。「何という哲学者！ Quel philosophe!」。フランス語で「哲学する philosopher」と言えば、それは自分の感情についてよく考え、それを実行に移すことを意味する。

フランス革命が影響力を振るった時代、フランス以外の国はフランスに対して劣等感を抱いていた。当時のヨーロッパで精神分析を必要としていなかったのは、フランス人だけであった。あるアメリカの精神分析医が、なぜフランス人が精神分析を必要としないのか調査したことがあったが、パリから帰ってきたそのアメリカ人は、こう言ったそうである。「フランス人は精神分析など必要としていない。彼らは病院で（つまり、ふつう人が踊らないところで）踊っている！」

フランス人が劣等感に苛まれることがなかったのは、フランス人が人間の自然な感情をあるがままに受け入れていたからであった。彼らなら、鏡に映った醜い自分を見て失神することもなかったはずである。フランスでは、すでに中世期にアベラールが「自省 speculum」という言葉を「鏡 speculum」に映った自分の姿を見つめるという意味で使っていた。「自省」とは、自分の感情を見つめ直すことなのである。ゾラ Emile Zola の「芸術作品とは人間の感情が生み出すものである Une oeuvre d'art est un coin de la création vu à travers un tempérament」という有名な言葉も、同じ趣旨であった。「聖霊 Holy Ghost」に代わるものとして「異能・靈感 esprit claire」が登場してきたのである。キリスト教徒にすれば、それは「聖霊」を軽視する罪深い行為になるかもしれないが、人間の自由を重視する立場からすれば必ず

しも悪いことではない。人間は自由であり、創造力に溢れている。人間は資産を活用して社会に貢献する資本家なのである。「聖霊」を軽視する代わりに、自分のアイデアを実現する力を手に入れたのである。たとえアイデアの実現が困難であっても、人間は世界を変える力を手に入れたのである。だからこそ、ルソーは個人の自由を重視した。個人が自由に創造力を発揮できれば、「すばらしい世界 human paradise」を実現することも夢でなくなるからである。

「すばらしい世界」はアダムの時代に存在していただけでなく、南北アメリカの新大陸にも存在していた。ルソーは、新大陸に住む新しいアダムに期待を寄せていた。フランス人はヨーロッパを再生させるために、キリスト教徒よりも「高貴な野蛮人 bon sauvage」に期待すべきだと考えていた。パスカルはキリスト教徒にふさわしい謙虚さを重視していたが、ルソーは「高貴な野蛮人」の創造力を重視していた。その典型的な例がロビンソン＝クルーソーであった。ロビンソン＝クルーソーは腐り切った世界とは無縁な無人島にいたからこそ、奇跡のように創造力を発揮できたのである。またロビンソン＝クルーソーは古典経済学が前提にしていた経済人の典型であった。その意味でも、ルソーが理想化していたアダム像との関連性が強調されなければならない。ロビンソン＝クルーソーがどんな家の出身かとか、彼の漂流前の経験や無人島で使っていた道具がどうであったかなどは、どうでもよいことであった。大切なのは、彼が全ての作業を自分で熟していたということ、つまり罪を犯す前のアダムと同じ状態に置かれていたということである。

富の分配に不公平が生じているのを嘆くことがいま流行しているが、ロビンソン＝クルーソーのような経済人を前提にした経済体制では、このことは問題にならない。ロビンソン＝クルーソーで問題になるのは、生産と消費だけである。彼にとって分配は問題外のことであった。もともと経済学者は、分配の問題に無関心であった。

したがって自由主義体制の生みの親は、アダムとロビンソン＝クルー

ソーだということになる。生産と消費だけを問題にしているなら自由主義も信条にできたが、分配が問題になってくると自由主義は信条として維持できなくなる。第一次世界大戦で市場が世界規模に拡大したとき、自由主義の時代は終わったのである。個人から始まった新しい制度も、やがて世界中に広まって行くことになった。企業家精神に富み、自由で生産手段を手にした個人がいったん生産活動を始めたなら、それを止める方法はもうない。個人は世界を舞台に活動を開始することになる。こうした本性は信条・信仰・宗派に関係なく、すべての人間によって共有されている。

もともと人間は「同じ equal」であり、この世界も政治的な空間ということでは、どこも同じはずであった。では何故フランスやヨーロッパが世界に先駆けて発展を始めたのか。政治的な空間と自然の空間が同じなら、デカルトの考え方が政治的な空間にも適用可能ということになる。デカルトは神の概念を自然にも当て嵌め、自然は無限であり永遠であるとした。ところがコペルニクスの天動説によれば、人間は小さな惑星に存在する塵のような存在に過ぎない。これでは人間が永遠の存在から切り離されてしまうことになる。しかし『ヨハネによる福音書』によれば、この宇宙が創られるまえに「言葉 logos」がすでに存在していた。つまり人間は空間が存在し始める以前に、すでに時間の中にあって世界の終末（あるいは救済）に向けて成長を開始していたのである。空間とは、時間と一緒に初めて意味を持つことになる3次元の存在なのである。

デカルトによれば、時間は3次元ある空間にとって4つ目の付属的な存在に過ぎない。また人間の命は、天文学的な時間のほんの一部を占めているに過ぎない。その考え方を受け入れた現代人は、人間の命が時計によって機械的に測れるものだと信じ込んでいるが、人間には休息を取るための「安息日 Sabbath, Lord's Day」があり、「安息日」に人間は伝統的な生き方を続けるか、それとも新しい生き方を選ぶかを定めることができる。しかし自然は人間と違って、立ち止って考えることなどしない。ただ機械的に同じことを繰り返すだけである。人間は一瞬の出来事を永遠に続くものに変

えることもできるし（それが人を愛することの意味である）、同じ生き方を何世紀ものあいだ継続することもできる。ところがデカルトは、そのことが理解できていなかった。空間にしか関心がなかったデカルトには、時間もつ不思議な力が理解できなかったのである。フランス人が精神分析を必要としなかったことはすでに指摘したとおりだが、それはフランスで時間が空間に優っていたからである。ベルグソン Henri Bergson は人間が創造するとき、時間がどれほど大切かを指摘してみせたが（『新訳ベルグソン全集4』「創造的進化」竹内信夫訳、白水社）、それはまるでエリコの城壁を崩した角笛の響きのようであった（『ヨシユア記』6:20）。ベルグソンはフランス人でなかったが（父はポーランド系ユダヤ人、母はイギリス人）、パリでフランス人のために本を書いていた。ベルグソンを読めば、デカルトとルソーがフランス人にどれほど悪い影響を与えたかがよく判る。

こうしてフランス語の「異能・靈感 esprit」は「聖霊」であることを止めて個人の考え方や意見を意味するだけになり、そんな個人の考え方や意見が「天才 génie」によって「思想 ideas」に変えられることになった。人間は、情報伝達の経路である神経の寄せ集めに過ぎなくなったのである（人間機械論）。神秘的な神とか不滅の魂に代わって、自由な人間の「異能・靈感」が登場し、人間の「異能・靈感」によって仕組みが解明される自然が登場してくることになった。芸術・科学・産業などの創造的な行為が人間に可能になったのは、その結果であった。そのときフランス人は、2つの点で間違いを犯していた。まず空間と時間を論じる場合、時間を軽視して空間を重視し過ぎていた。しかも、そのことにフランス人は気づいていなかったのである。私自身がアメリカのある大規模図書館で確認したことだが、空間より時間を重視したフランス語の本は、その図書館には1冊もなかった。デカルトが神学を哲学に変えたとき、彼は空間のことしか念頭になかったのである。

1789年の革命時にフランス人が間違えた2番目のことは、かれらが「知的能力 mind」と「魂 soul」（もともと「最後の審判」で神の救済を待つ「魂」を

意味していたが、そこから未来を志向する人間の本性を意味するようになった)を明確に区別しなかったことである。「肉体と魂」や「肉体と知的能力」の関係について多くの本が書かれていたが、こうした2分法が適切か否かさえ問題にされなかった。たとえば、教会は「魂」と「肉体」は個人のものだと言うが、「知的能力」や「異能・靈感」(もともと神から人間に向かって発せられる「聖霊」を意味した)は個人のものではないと言う。また、個人が「魂」を持てるのは「神から発せられる聖霊 universal inspiration」のおかげだと言う。ところが革命後の聖職者はこのことを忘れて、「自然神 God of Nature」(自由な意志を持つ人格神でなく、自然を創り、法則を定めた「至高の存在 Supreme Being」)という考え方を受け入れたため、「知的能力」と「魂」の違いを無視することになった。「魂」が神から発せられる情報(啓示)の受信機に過ぎない「知的能力」だと考えられようになった。神から発せられる情報(啓示)を受けるのは「魂」だけのはずなのに、「知的能力」がそれに取って代わったのである。そこで「知的能力」には、神のことがまるで判らなくなってしまった。ところがデカルトは「知的能力」そのものを「至高の存在」である「自然神」と同一視したのである。そして、この考え方(「理神論 Deism」と呼ばれている)を最終的に確立したのがボルテールであった(ルソーではなかった)。いま大学で教えられている経済学はルソーの考え方に基づいているとされているが、経済学だけでなく哲学・心理学・政治学もボルテールの考え方に基づいている。

こうして我々は、2つの間違っただけの考え方に基づいて政治や社会の問題を解決しようとしている。我々は2つの考え方を当然の真理のように受け入れているが、2つの考え方は中産階級が経済活動を行うための道具に過ぎない。そのことを我々は肝に銘じておく必要がある。

ルソーは「自分自身」(パスカルはこれが大嫌いであった)を公衆のまえに曝け出して見せたが、だからといってルソーはそのことを好んでいた訳ではなかった。しかしルソーが提示した新しい個人のあり方から、人類の始祖アダムと新大陸の「聖なる野蛮人」が注目されるようになった。

ボルテールとデカルトはよく似ていた。1644年、デカルトは亡命先のオランダで『哲学原理 Principia Philosophiae』を書きあげたが、そのなかで彼は2つの原理の重要性を説いていた。1)まず何が正しいか知るために、すべてのものを疑ってみること。2)少しでも疑わしいものは、間違っていると考えること。

この2つの原理によって、既存の秩序はすべて崩壊させられることになった。たしかにデカルトは、こう付け加えている。「この原理は日常生活に適用すべきではない」。『哲学原理』を書きあげる以前に公表していた『方法序説 Discours de la méthode』でも、つぎのようなことを書いていた。「新しく家を建てるとき、古い家を壊したり、新しい建材や大工を用意したりする前に、まず新しい家ができるまで快適に住める家を用意する必要がある」。

つまり我々には、3つの家が存在することになる。1)完璧な知識を得るための新しい家。2)偏見で一杯の古い家。3)古い家から新しい家に移るまでの仮住まいの家。

アルエ Arouet という本名に代えてボルテール Voltaire と名乗り、出入り口がフランス側とスイス側にあるアパートに住んでいたボルテール、革命を支持する本を書いているが著者として名乗り出ることができず、原稿料を一文も稼いでいないのに貴族のような生活をしていたボルテールは、デカルト以上にこの3つの家を必要としていた。デカルトは熱心なカトリック教徒だということになっていたが、人生最後の20年間をプロテスタント各国に住んでいた。つまりプロテスタントの存在を認めていたのである。また「古い家から新しい家に移るまでの仮住まいの家」を当該国の法律や慣習にしたがって建てる必要があったが、彼のように外国人として住んでいれば、それほど難しいことではなかった。つまりデカルトにとって「仮住まいの家」は、さほど重要な問題ではなかったのである。

ところがボルテールの場合、プロテスタント国の法律や習慣を守るだけでは済まなかった。お互いに敵対関係にある「新しい家」と「古い家」

を同時に相手にする必要があった。「狐の巣穴」<sup>きつね</sup>と呼んでいた自分の家に入ってくる2つの敵と戦わねばならなかった。しかも彼は「精神の革命 *révolution des esprits*」を実現して「合理性の時代 *age of reason*」に備える必要もあった。ボルテールが「革命」という意味で使うまで、この「革命 *révolution*」という言葉は「星の公転 *rotation of the stars*」の意味でしか使われていなかったが、それを彼は「知的な *intellectual*」意味で使ったのである。ボルテールはデカルトのように孤立した存在でなく、当時のヨーロッパで「啓蒙運動 *enlightenment*」のリーダーとして有名であり、多くの読者が存在していた。「古い伝統的な家 *old house of tradition*」から「新しい科学の家 *new house of science*」への移行を可能にしてくれたのが、この多くの読者であった。革命を準備したのは、彼の読者たちであった。革命が避けられないものと感じられていたことは、ボルテールが書き残したもののから判る<sup>わか</sup>。

「20巻の書物があっても革命は起きない。革命を起こすのは、ズボンのポケットに突<sup>つ</sup>込<sup>こ</sup>めるような小さなパンフレットである」。「身のまわりで革命の勃<sup>はつ</sup>発<sup>はつ</sup>を予測させるような事件が頻発しているが、革命を体験することだけは避けたいものである」。「フランスでは全てが遅<sup>おそ</sup>れてやって来るが、必<sup>かな</sup>ずやって来る。ますます状況は悪化しており、なにか切<sup>き</sup>っ掛<sup>か</sup>けさえあれば革命が勃<sup>はつ</sup>発<sup>はつ</sup>することになるだろう。そのときは、とんでもないことになるであろう」。

革命の目的は、合理的に説明がつかない奇跡・啓示・聖人などが支配する世界に代わって、合理的で説明可能な世界を実現することであった。ボルテールによると、「自然現象を説明する方法として、つぎの2つが存在していた。1) 神がこの世界を創<sup>つく</sup>ったとき神が定めた法則に自然界は従<sup>したが</sup>っていると考える。この場合、神は自然界に介入することはない。2) 神は自然界を創造したあとも、たえず自然界に介入していると考える。それ以外の説明方法はない」。ボルテールは現在の我々と同様、法則に支配されている自然界のほかに、法則に支配されない「気まぐれな愛 *love*」・

「変化 *change*」・「慈悲 *grace*」・「驚愕 *surprise*」が支配する世界が存在することを知っていた。列車の予約と彼女へのプロポーズが同時に可能なのは、法則に支配される世界と法則に支配されない世界が存在するからである。列車は時刻表に従<sup>したが</sup>って運用されており、こちらは法則に支配されている世界である。しかし彼女にプロポーズするとき、彼女が結婚に同意してくれるか否かが判らないので胸がドキドキする。そのとき古い世界（独身生活）と新しい世界（彼女との共同生活）が同時に存在していることになる。進歩とは、古い世界がどんなものだったか覚えていて、新しい世界との距離を確認することである。道を歩いているとき自分のスタート地点が判<sup>わか</sup>らなくなると、堂々巡<sup>どうどうめぐ</sup>りをするだけになる。

法則に支配される自然界と気まぐれな人間の愛情が同時に存在すること、あるいは自然現象と人間による創意工夫が同時に存在することをボルテールは説明できないと言っていたが、我々はそれを当たり前<sup>あ</sup>の前<sup>まえ</sup>のこととして日常的に受け入れている。ところが偏見・無知・専制・独裁と戦う啓蒙運動の巨匠ボルテールにとって、この2つが同時に存在することは許せないことであった。旧い世界はつねに間違っており、新しい世界は常<sup>つね</sup>に正しくなければならなかった。旧い世界はフランスにとって問題解決の方法を提供できず、新しい世界だけが問題解決の方法を提供できたからである。

ボルテールもルソーと同じく、キリスト教的な二元論（法則に支配される自然界と法則に馴染<sup>なじ</sup>まない人間愛の対立、同じことの繰り返しと予想外の出来事の対立、慣習とそれに変更<sup>せま</sup>を迫る神の意志の対立など）は支持せず、一元論を支持していた。一元論は19世紀に流行した考え方であった。一元論のおかげで教会の問題に国家が介入するようになり、愛情の問題に法律が介入するようになった。また教育の問題に刑罰が導入されることになり、善意による慈善行為に政治が介入するようになった。平和のためだということでも戦争が認められるようになったのも一元論のおかげだし、男の問題に女が、また女の問題に男が口を挟<sup>はさ</sup>むようになったのも一元論のおかげであった。

1789年から1914年まで（あるいは1934年まで）世界を支配していたの

は、一元論であった。未来は明るく、過去は暗いと考えるのが一元論の歴史観（進歩史観）であった。自然科学の分野で一元論は、たしかに空間に関する知識を極限まで推し進め（コペルニクスやガリレオの時代よりも、プランクとボーアの時代の方が空間理論は進歩している）、それが人類のために果たした役割は大きい。一元論のおかげで人々のあいだに一体感が生まれ、人類は「一丸」となって自然に立ち向かうことができるようになった。一元論のおかげで宇宙に存在するさまざまな力を探り出し、数値化し、利用できるようになった。自然科学の研究で、すべての人間が協力できるようになった。オーストリアの天文学者とカナダの天文学者が協力して、同じ天体の観測をする時代になった。人間は一元論のおかげで、かつて神が占めていた位置に立つことになった。我々全員がアダムやロビンソン＝クルーソーになったのである。同じ事実を一緒になって観察し、同じ化学実験を一緒に行い、同じ計算結果を一緒になって確認できるようになった。

それぞれ住む国は違っても、心は1つである。この一元論のおかげで世界は素晴らしいものになったと信じられてきたが、一元論と無縁なはずの人間活動に一元論が悪い影響を与えていることに我々は気づいていない。自然に対する考え方が同じだからと言って、それだけで我々は1つに纏まることができるのであろうか。

革命のあとも革新は続いており、革新が終わりを迎えることはない。「革新が継続されていることを神に感謝しよう」（William De Witt Hyde が1903年に『ヨハネ黙示録』11：17をヒントに作成した詩より）。人間が手を加えなければ、地球が変わることはない。何百万年も前、地球は泥の塊に過ぎなかったが、そのときすでに地球上には変化するものと変化しないものが同居していた。変化するものが新しく採用されるには長い時間が必要であったが、それが一旦採用されると、こんどは変化を拒むことになった。

決まりきった運動の繰り返すと、自由な選択の可能性が同時に存在していたのが人間の世界であった。すでに指摘したように、ボルテールはそれが可能だと考えていなかった。ボルテールは、どちらか一方しか存在しな

いと考えていた。つまり機械的に繰り返される動きか、神が起こすような突然の変化のどちらかである。そして彼が選んだのが機械的な動きの方であった。それは論理的な合理性だけを認める考え方であり、きわめてフランス的な考え方であった。アベラールが『是と否 Sic et Non』で教父たちの相互矛盾する教説を見事に整理・説明して見せたように、ボルテールは自然現象を見事に整理・説明して見せた。人間の判断は言葉によるものなので、あとから訂正することができる。そこで「是と否」のどちらかに決めることも可能である。ところが神の判断は訂正が効かない。神の判断は植物や動物の形を採って現れるからである。神が創造した植物や動物の形を人間が「是か否か」と議論してみたところで無意味である。

啓蒙運動が間違っていたのは、この「是か否か」の論理を適用すべきでない対象にまで適用したことであった。19世紀のロマン主義者たちが敵視していたのが、適用すべきでない対象にまでアベラールの方法を適用しようとしたボルテールのやり方であった。シュレーゲル Friedrich Schlegel のつぎの言葉が、そのことをよく物語っている。「人間には時間を経ても変わらないものと、時間を経ることによって変わるものがある」。シュレーゲルはフランス革命と同時代の人物だが、ロシア革命のときも鳥類学者がボルテールの鳥類分類法を批判していた。「引退した役人や、ペリシテ人のために臼を引いていた盲目のサムソンのような役割を神に押し付けることができるのは、異教徒だけである」（自らの意志で何も変えることができない神は創造神ではない。サムソンについては、旧約聖書『士師記』16：21を参照）。

ヘーゲルとマルクスが「歴史の弁証法 dialectical process of history」で説明しようとしたのも、シュレーゲルが指摘したような時間の経過によって変わり得る現実であった。またロシア革命が前提にしていたのも、現実には時間の経過とともに変化し得るということであった。ところがボルシェビキたちは、あまりにもボルテール的でありルソー的であった。マルクスが指摘した人間のもつ非論理的側面を無視してしまったのである。また自由主義体制を否定するがぎり、ロシアがフランスやアメリカと共存することな

ど不可能なことが理解できていなかった。ボルテールもそのことは理解できなかった。しかし我々はそのことが理解できる。

ロシア革命は、フランス革命の一側面だけを受け継いだ鬼子であった。しかしフランス革命が哲学者の起こした革命であったのに対して、ロシア革命は普通の人間が起した革命、何百万人もの男と女が起した革命であった。彼らもフランス革命と同様に新しいものを創り続けたが、しかしフランス革命と違って過去の革命の成果も引き継いでいた。

つまり以上で展開してきたロシア革命やフランス革命の説明は、相当に単純化されたものなのである。ボルテールの考え方やマルクスの考え方だけで全てが説明できる訳でもないし、革命を説明するためにジャコバン派やボルシェビキ党の一員になる必要もない。黒か白かに単純化してしまうには、現実複雑すぎる。しかも問題は党派の違いを超えた人類的なものである。人類は存続に値するものなのか否か。神による創造は今も続いているのか。自然の歴史と人間の歴史は別物なのか否か。さらに「歴史の現実を総体として認識できる人間の能力 soul」は本当に存在するのかという問題もある。

## 第12節 フリーメイソンとは何か

ボルテールの時代でもあった18世紀、啓蒙運動に参加していた人たちがフリーメイソンを結成していた。フリーメイソンとは、ヨーロッパ中で知識人が結成していた政治組織であった。フリーメイソンのメンバーや芸術家・科学者たちは、新しい世界の実現を目指していた。彼らにとって創造神とは万物を創造しただけで、その後は自然界に介入することのない存在に過ぎなかった。ボルテールもフリーメイソンも、ロシアの無神論者のように神の存在を敢えて否定することはしなかった。ボルシェビキたちにとって革命とは、神を含めてすべてを破壊することを意味した。

ところがフランスの「精神の革命 révolution des esprits」は、「合理性の家

house of reason」が準備できるまでの「臨時の避難所 temporary shelter」に過ぎなかった。目指すべき目標は革命後の「合理性の家」造りであって、革命そのものは手段に過ぎなかったのである。そこで旧い家にあった家具はそのまま残され、啓蒙運動によって純化すればよいと考えられていた。旧い考え方から迷信だけを払拭すれば済むと考えられていたのである。

神も純化されるべき対象の1つだが、捨ててしまうには惜しいという訳である。「神が存在しないというなら、我々はそれを創るまでだ」とは、有名なボルテールの言葉である。ただし、その神は迷信と無縁な神でなければならなかった。「忌むべきものは破壊せよ Ecrasez l'infâme」というのも、ボルテールの言葉であった。ここで言う「忌むべきもの」とは、神を守り続けてきたカトリック教会のことである。我々は子供ではない。子供のようには神を信じるわけではない。しかし神の利用価値は判る。国家の利用価値も判る。マルクスのように国家の存在理由を否定したりはしない。しかしフランスの王政をはじめ当時の「旧体制」は、崩壊の危機に瀕していた。そこで彼らは新しい体制を作ることにしたのである。「旧体制は悪い体制である Ancien régime est vieux jeu」。悪い体制は作り変えればよい。そのためには新しく法律を制定すればよい。大人は立法者でもあった。ボルシェビキたちは法律を資本家の作ったものとして馬鹿にしていたが、ボルテールを読んでいたフリーメイソンたちは違っていた。彼らは法制度の重要性をよく理解しており、父親たちが制定した悪い法律は改正すればよいと考えていた。

神・自由・魂の不死、この3つがロベスピエール Maximilien Robespierre の「理念 idea」であって、彼はこれをフランス憲法の基本に据えるつもりでいた。その考え方はジェファソン Thomas Jefferson やフランクリン Benjamin Franklin にも共通しており、革命後に創るべき新しい体制の基礎となるべきものとされた。「理念」なしに新しい体制を創ることなど不可能である。新しい体制を創ろうとしている人間に「理念」のような価値観の源泉となるべきものは不可欠であり、それこそが「道理・合理性 Resaon」であった。フラ

ンスの立法者であった「<sup>ブルジョア</sup>都市民」は、「理念」をボルテールの書物から得ていた。彼らの創造力や硬い決意が効果を発揮するためには、「理念」が不可欠であった。哲学者と「<sup>ブルジョア</sup>都市民」の協力によって革命が実現することになった。ただしワインは古くても、ワインを入れる瓶は新しくする必要があった。つまり「理念」は旧いままでも、制度を駄目にして教会・王制・慣習は排除する必要があった。哲学者と「<sup>ブルジョア</sup>都市民」が目指していたのがこれであった。彼らは国王・聖職者・貴族を排除して、新しい制度を創ることを目指していた。

国王・聖職者・貴族の排除をフリーメーソンも<sup>めざ</sup>目指したが、彼らはさまざまな儀式の際に、ことさらそのことを強調していた。フリーメーソンとは、もともとゴシック建築やテンプル騎士団の時代に作られた石工の組織であったと信じられていたので、彼らがなぜ国王・聖職者・貴族を敵視したのか、その理由が<sup>わか</sup>判らない。

デカルトはフリーメーソンが「精神の革命」に不可欠なものだと考えていたが、おかげで<sup>そとわく</sup>外枠を無視して<sup>なかみ</sup>中身の<sup>こと</sup>しか考えない結果を招くことになった。教会ぬきの神・権威ぬきの統治機構・細則なしの法律を登場させることになったのである。そんな事態が最初に登場してきたのが、1710～30年のイギリスであった。当時のホイッグ党左派は、スコットランド統合に消極的だったイギリス国教会に批判的であった。宗派の違いを越えてスコットランドを統合することに熱意を抱いていたからである。ホブス Thomas Hobbs も『ビヒモス Behemoth or the Long Parliament』で、つぎのように書いていた。「イングランドとスコットランドは同じ島のうえに位置し、同じ言葉を使い、同じ国王に忠誠を誓っていながら、お互いを外国と考えているが、それは奇妙なことと言わざるを得ない。お互いを外国人<sup>よ</sup>呼ばわりするのは止めるべきである」。イギリスのフリーメーソンはスコットランドを外国とは考えておらず、同じ連合王国の一員と考えていた。2つの議会が統合されたのはクロムエル Oliver Cromwell の時代だが(1707年)、議会統合の翌年にフリーメーソンの統合も実現している。つまりイギリス

のフリーメーソンは国民統合に協力的であって、けっして革命的な組織ではなかったのである。ところがヨーロッパ大陸では、フリーメーソンは革命的な組織であった。「道理・合理性」の時代に「<sup>アンシャンレジーム</sup>旧体制」が大きく変化したとき、国民統合を超えた普遍的な「民主主義体制 national democracy」の担い手となったのである(モーツァルトの<sup>まてき</sup>『魔笛』には、そんなフリーメーソンのあり方がよく描かれている)。フリーメーソンには、もともと国民統合を超えた普遍主義的な側面が存在していた。なお、いまファシズム体制下のイタリアでフリーメーソンは迫害の対象になっているが、その原因は普遍主義的な側面というよりも、フリーメーソンのもう1つの特徴である個人主義的な側面にある。

### 第13節 「<sup>しじょう</sup>至上の法 Law Paramount」であった成文憲法

フランスに新しく登場してきた支配者は、その「理念」を現実の世界で形にして見せなければならなかった。<sup>こうしょう</sup>高尚な哲学の世界から、生活を<sup>か</sup>掛けた世界に降りてくる必要があった。その手段となったのが「<sup>しじょう</sup>至上の法」である成文憲法であった。民主主義体制との関連で「<sup>しじょう</sup>至上の法」という考え方を初めて採用したのはイギリスのピューリタン革命で、民主主義体制の実現を<sup>めざ</sup>目指していた「平等派 Lellers」であった。1648年のことである(もともと「<sup>しじょう</sup>至上の法」と考えられていたのは聖書であった。なお成文化するという考え方そのものは、すでに存在していた)。この「平等派」の考え方は、そのときイギリスで支配的であった「<sup>しじょう</sup>コモンロー Common Law」の考え方に敵対するものであった。「<sup>しじょう</sup>コモンロー」は貴族の法制度であり、貴族の特権・先例主義・慣習を前提にしていた。「平等派」の考え方はピューリタン革命でこそ実現しなかったが、その「理念」はアメリカで『バージニア州憲法』として実現することになる。

フランス革命でも多くの旧い特権に<sup>こう</sup>抗して、「理念」による支配が実現された。過去の伝統による支配に代わって「道理・合理性」による支配が

始まり、「諸地域のさまざまな慣習 laws of the land」に代わって、「合理的な単一の法制度 a law of Reason」が登場してきた。シャルルマーニュ以来諸身分が支えてきた王座に、国王に代わって座ったのは人間ではなくて、「道理・合理性」であった。革命歴3年（1795年）に制定された成文憲法は、個々の政治家の意見を超越した「道理・合理性」に基づく「至上の法」であるとされ、それが党派間の争いを超えた存在であるとされた。それがボルテールとロベスピエールの考え方でもあった。

「道理・合理性」に基づく「至上の法」という考え方はフリーメーソンに由来するが、それは彼らが人間の「知的能力 mind」に無限の信頼を寄せていたからである。「知的能力」は「道理・合理性」の指示に従うものであり、人間は日々の生活からくる誘惑より「至上の法」を重視するのである。成文憲法は、人間の「知的能力」や誇りに訴えるが故に「至上の法」として機能する。成文憲法は人間の不可分の権利を保障し、生命・自由・健康・名誉・財産を保障する。そうしたものを勝手に奪っていく支配体制、いつどんな理由で逮捕されるか判らないような支配体制、個人の私生活に土足で踏み込んで来るような支配体制、自由な企業活動を妨げるような支配体制、言論の自由を認めようとしない支配体制、「天才 génie」の存在を認めようとしない世襲貴族の支配体制の登場を防ぐのが成文憲法であった。

貴族と農民のあいだに位置していたフランスの「中産階級 middle class」（ブルジョア）は、「至上の法」によって人間の権利（「三色旗」に象徴される自由・平等・博愛）を守ることを信条としていた。「三色旗」は1789年の革命で国旗に制定されるが、そのとき「至上の法」たる成文憲法も制定された。ところが1871年にナポレオン3世がプロイセンとの戦争に敗れて「フランス本来の領土 natural Gaul」であるアルザス＝ロレーヌ地方をドイツに割譲することになり、さらにパリコミュンがドイツ軍によって鎮圧されて反革命の脅威にフランスは晒されることになった。政情の安定化と平和・秩序・安全のために「中道派 juste-milieu」のマクマオン元帥 Maréchal

MacMahon・オルレアン王党派 Orleanistes・ティエール Louis Thiers らは、ブルボン家出身のシャンボール伯 comte de Chambord を王位に就けることを画策した。シャンボール伯は白地にブルボン家の紋章（白百合）をあしらった旗を国旗とすることに拘ったが、それはフランス革命の成果（国民主権と平等の原則）を否認することを意味した。フランス国民は王政復活に反対しなくても、貴族の特権復活を認めるはずがないと確信していたマクマオン元帥は、こう言っている。「ブルボン王朝の旗が復活するようなことになれば、再び革命が始まるに違いない」。革命の熱気は醒めきっていたが、それでも伝統の復活を許さない程度には残っていたのである。こうしてフランスに共和制が登場してくることになった。共和制の登場は、満場一致という訳ではなかった。レーニンのブレスト＝リトフスク講和と同様、僅かな差で承認されただけであった。こうして「三色旗」は失われずに済んだのである。

このことからフランス革命が王政に向けられた革命でなく、貴族政に向けられた革命だったことが判る。1789年に貴族の特権が廃止された後もまだ3年のあいだ、ルイ16世は王座に留まっていた。彼が断頭台で処刑されたのは彼が貴族政を維持しようとしたからであって、イギリスのチャールズ1世のように国王として失格だったからではなかった。革命の継承者であったナポレオン1世、革命の成果を取り入れた「憲章 Chartre Constitutionelle」に忠実であったルイ18世、七月革命後の「ブルジョワ国王 Roi Citoyen」であったルイ＝フィリップ Louis Philippe、またその後制定された憲法も、すべて従うべきは伝統でなくて「道理・合理性」であると考えられていた。

しかし残念なことに、必ずしもフランス国民が「道理・合理性」に従うとは限らないし、目前の利害関係よりも「至上の法」を重視するとは限らない。また民主主義的な制度が確立されても、それが想定どおりに機能するとも限らない。利害関係者によるロビー活動で機能が歪められる可能性もあるし、文盲で鈍感な「大衆 masses」が民主主義的な制度そのものを壊

してしまう可能性もある。さらに、それまで指導的な立場にあった哲学者が、法律家や政治家に取って代わられる可能性もある。しかし「その本来の性格から by nature」、フランス国民は「至上の法」たる成文憲法は一致団結して守るのである。

フランスの住民が自分たちをフランス国民と自覚することになったのは、「フランス文学 belles-lettres, literatruue」のおかげであった。フランス語で言う「国民 nation」とは、「国民文学を共有する者 people who are enlightened, led, and inspired by the same literature」を意味する。そこでフランスの「作家たち écrivains」やヨーロッパ全域に広がるフリーメーソン、そして正しいフランス語を生徒たちに教える教師たちの役割が重要になってくる。「国民 nation」という考え方は近代になって登場してきたもので、近代になって登場してきた他の考え方と同様、古い考え方が「純化された purified」ものであった。「国民」はラテン語の「ナチオ natio」に由来する言葉で、もともとカトリック教会で信者を出身地によってグループ分けするために使われていた言葉であった。教会会議に出席していた神学者や支配者を、出身地ごとにグループ分けするために使われていたのが「ナチオ」であった。15世紀にフランス出身の「ナチオ」を率いていたのがパリ大学であった。

それが18世紀に世俗化され、教会と関係のない考え方となったのである。神学者に代わって作家や哲学者が登場してくるようになった。また、国王・聖職者・貴族に代わって登場して来たのがフリーメーソンであった。「国民」が登場してきたのは、その結果であった。ヨーロッパで「国民国家 national state」形成に成功したところでは、例外なく無理のない国境線が存在し、さらに「国民文学」とフリーメーソンが存在していた。つまり「国民」とは、「国民文学」と近代の哲学・科学が人為的に生み出したものなのである。

中世の「ナチオ」がカトリック信仰を共有していたように、「国民」も同じ「考え方 spirit」や思想を共有していた。また文学・科学・芸術・新

聞なども共有していた。お互いの違いを見つけ出してくるより、むしろ共通点を見つけ出してくる方が簡単であった。啓蒙思想の洗礼を受け、民主主義体制を確立していたヨーロッパとアメリカには、「国民」どうしの違いよりも共通点が多かったのである。かつてヨーロッパ人を1つに結び付けていたカトリック教会と同じように、共通の思想や「考え方」がヨーロッパ人を1つに結び付けていた。「知ること to know」が人間であることの証拠とされた。フランスの学校では古代や現代の外国文学も教えていたが、それは「外国文学の知識がない者は人間の資格がない」（サント＝ブーブ Charles-Augustin Sainte-Beuve）と考えられてからであった。

こうしてヨーロッパは、共通の文学によって一体化されていった。19世紀にはヨーロッパ中でギリシャ語の学習が義務化されたが、これは前例のないことであった。ヨーロッパ人は、プラトンやギリシャ悲劇について知っていることが義務とされた。19世紀のヨーロッパでギリシャ熱が燃え上がったことは、すでに指摘した通りである。しかしフランス人にとってギリシャを復活させることは、ほかの国にはない特別な意味を持っていた。なぜなら、フランス人にとって「国民」の存在は「自然な natural」ものだったからである。フランスで文学は古くからパリで作られていたが、文学が「国民」形成に貢献し始めると、パリだけが突出した地位を占めることになった。カエサル『ガリア戦記』に登場してくるガリア地方がフランスと同一視されるようになり、「ライン川の防衛線を守れ！」が防衛戦争のスローガンとなった。ところが、このことがパリにとって不幸の原因ともなったのである。1792年・1814年・1815年・1870～71年・1914～18年の5度にわたり、パリは危機に直面することになった。もっとも文化的な影響力ということでは、パリの得たものは大きかった。フランスは「国民国家」のモデルとされることになったからである。たとえばハンガリーでは、1867年の二重帝国形成後（オーストリア帝国内部でハンガリーは大幅な自治権を獲得して、事実上の王国を形成する）、ハンガリー科学アカデミーは公用語をハンガリー語に限定した。これはフランスの科学アカデ

ミーが公用語をフランス語に限定したことに対する対抗策であった。チェコ人も1918年の共和国形成後、ある夫人にお金を払ってチェコ語を公用語とする「サロン」をプラハに用意させたりしている。ドイツ化が徹底していたチェコでは、チェコ語による文学が存在しなかったからであった。第一次世界大戦後にドイツがオーストリア併合を考えたのも、同じ言語を公用語とする者が「国民国家」を形成することを当然視する考え方がフランスに存在していたからであった。フランスは古代ガリアの範囲を自国の「自然な」国境線だと主張していたが、これに対抗してドイツ人が古代ゲルマニアの範囲を自国の国境線と主張するようになり、両国は危機に直面することになった。ドイツのオーストリア併合を認めざるを得なくなったからである。何を根拠にオーストリア併合に反対するのか。ドイツは1789年のフランス革命の「主張 pharmacopocia」(自由主義・国民国家・諸国民の権利)をそのまま繰り返し、それを実現したのである。フランスの政治家エリオ Edouard Herriot は1931年3月26日付けの『新時代 L'Ere Nouvelle』に、つぎのように書いていた。「オーストリアがドイツと一緒にすることには反対である。なぜなら、国民国家はフランスのように1つの中心(パリ)を持ち、丸い円のように1つに纏まっていなければならないからである。ところがオーストリアとドイツが1つの中心を持ち、丸い円のように纏まることなど不可能である」。「国民国家」を丸い円に例えるエリオの言い分は間違っているが(アメリカにはニューヨークとワシントンが存在するし、ロシアにはザンクト＝ペテルブルクとモスクワが存在する)、当時の読者は彼の言い分に納得したはずである。しかし丸い円の例えで「国民国家」の問題が解けるはずはなかった。19世紀のヨーロッパ人は、「国民国家」が丸い円のように1つの中心しかもたないものだと誤解していたのである。そんな誤解が始まったのは、フランス革命からであった。

## 第14節 十進法

こうしたフランス人の考え方をよく表わしているのが十進法である。十進法のおかげでヤード＝ポンド法のような測定法(日本の尺貫法も同じ)は、ほぼ世界から姿を消してしまった(ただし、アメリカ・イギリス・オーストラリア・カナダ・ニュージーランド・南ア共和国ではヤード＝ポンド法が存続)。まず重さを測るのに、水が使われることになった。水1000グラム(1000立方センチメートルと同義)が1リットルと決められたのである。また長さは、赤道から北極点までの距離の1000万分の1を1メートルと決めて、メートル原器がパリに保管されることになった。このように、自然を基準に重さや長さを決めたのがフランス革命であった。人間の体や収穫物などを基準に決められた判り易いフィート(歩幅)・グレイン(小麦1粒の重さ)などは使われなくなった。

十進法は「人工的 not natural」に作り出された計算方法である。12(ダース dozen)・20(score)、112(hundred-weight)などを単位に計算するより、5とか10を単位に計算する方が「自然 natural」だと考えられたのである。しかし、この考え方は間違っている。たとえば「自然対数 natural logarithm」は「自然」という形容詞が付いているが、10を「底 base」としていない(10を「底」としているのは「常用対数 common logarithm」)。十進法は「合理的 reasonable」・「抽象的 abstract」ではあるが、「自然」ではない。

またフランス語の「自然」が持つ意味も十進法の考え方から知ることができる。フランス語で「自然 natural」という場合、「理想化された野蛮人 noble savage」は意味しない。フランス語で「自然」といえば、それは合理的な思考ができるロビンソン＝クルーソーを意味する。神に叱責されて顔を赤らめたアダムでなく、哲学者のボルテールを意味するのである。つまり「自然」という言葉そのものが不適切なのであって、このような場合は「道理・合理性 reason」という言葉(それも特別に大文字で書かれた REASON)を使うべきなのである。かつてアメリカ大統領を務めたことの

あるクインシー＝アダムス John Quincy Adams は、1821年に十進法について、つぎのようなことを言っていた。

「伝統的に使われてきた長さや重さの単位を全面的に新しくする作業は、議会にとって困難を極める作業である。なぜなら、長さや重さを測る作業は個人にとっても社会にとっても日常的なものだからである。どんな日常的問題を解決するにも長さや重さの計測は欠かせない。また、どんな仕事にも長さや重さの計測は不可欠である。資産の配分や保全、商人の売買や農民の農作業、職人の仕事、哲学者の思索、骨董商の古物探求、船乗りの航海、兵士の行進、軍事作戦の遂行や和平交渉など、あらゆる人間活動にとって長さや重さの計測は欠かせない。そこで義務教育において長さや重さの計測法を習得させることが必要になってくる。頭のなかにしっかりと刻み込み、生涯を通して忘れることがないようにすべきである」。

「それを急に変えようというのだから、男・女・子供の違いに関わりなく、それはすべての人間にとって深刻な意味を持つことになる。長さや重さの伝統的な計測法の単位と新しく導入される計測法の単位換算表をすべての家庭に配布し、また算数を教えることになっている義務教育の教科書にも反映しておく必要がある」。

「フランスでは、新しい長さや重さの計測法が導入されている。フランス革命がその切っ掛けであった。彼らは、新しい計測法によって人類の発展に貢献するつもりでいる。たとえ当面は失敗することがあっても、賞賛に値する試みである。それは、つぎのような原則に基づいていた。

重さと長さの単位が「決まった長さの単位 linear standard of measure」を基準にしていること。

「決まった長さの単位」は地球の大きさを基準にしていること。

「決まった長さの単位」を基準にして長さ・面積・体積の単位を決めていること。

蒸留水の体積がもっとも小さいとき（0℃）の重さを重さの単位としていること。

長さ・面積・体積・重さの計測単位を十進法によって計算していること。十進法が通貨・時間・気圧・温度・船の傾斜と速度、地球の緯度と経度、天体観測など、およそ「決まった長さの単位」を応用できるもの全てに適用されていること。すべての人間に使用が認められていること。重さなど全ての度量衡の単位は混乱を避けるため、それぞれ独自の名称を持つこと」。

「この方法によって度量衡の歴史に新しい局面が開かれたばかりか、人間の歴史にとっても新しい局面が開かれることになった。世界中の度量衡を統一しようというこの試みは、たいへん興味深いものである。成否の如何に関わらず、この大それた試みに乾杯したいし、それを導入しようとした国にも乾杯したい。導入の過程で様々な抵抗に直面し、当初は想定されていなかった修正が加えられることになったが、世界中に普及するまで、さらなる修正が加えられる可能性がある。しかし、この度量衡が世界中に普及することになれば、救世主イエスや哲学者たちが実現を目指した世界平和、すべてのキリスト教徒が望んだ世界平和の実現も夢でなくなる。共通の度量衡が普及することによって遠く離れた地域に住む人間どうしが友好的な通商関係を確立し、お互いに好意を抱くようになるはずである。そうすれば、それまで人間の心を支配していた悪魔は1000年のあいだ鎖で縛られることになり、人間の心を惑わすことはなくなるのである（『ヨハネの黙示録』20:2）。世界中でメートル法が使われるようになり、共通の度量衡が地球の隅々まで行き渡るようになるはずである」。

この報告が書かれた1821年には、まだメートル法はさほど普及していなかった。フランス科学アカデミーからイギリスにメートル法普及の会議に出席するよう招待状が送られ、さらにスペイン・イタリア・オランダ・デンマーク・スイスの研究者が協力を約束していたが、肝心のフランスが態度を変えてしまった。1792～1804年の12年間、フランスの革命暦には十進法が導入されていた。1日は10時間とされ、1時間は100分、1分は100秒と決められていた。それが1805年9月9日に廃止されることに

なったのである。船乗りも天文学者も相変わらず 60 進法を使い続けていたからであった。大陸国家のフランスは、この現実をどうすることもできなかったのである。また宝石加工業者や宝石商人も、伝統的な単位「カラット」を使うのを辞めようとしなかった。

そこで 1812 年、ナポレオンは妥協策として制度的な原則は十進法としながらも、伝統的に使われてきた重さや長さの単位使用も認めることにした。つまり「トワーズ toise」（約 6 フィート）とか、インチ・フィート・ダロス（12 デース）といった単位の使用が認められ、こうした単位も新しい度量衡の一部とされることになった。

クインシー＝アダムスも、つぎのように書いている。「フランスの計測法は素晴らしく一貫性のあるものだが、重さと長さに関しては妥協せざるを得なかった。重さと長さに関しては人間が必要としていることに対応するようにして、徹底的に数的な整合性を求める姿勢を弱めている。重さと長さに関しては客観性と多様性を犠牲にしており、また会計事務所の都合に合わせて計算のし易さを考えることはしていない。フランス人も、その経験から全ての四角形・立方体・円・球体、さらには地球の自転や天体の運行を十進法だけで処理できないことをよく知っていたからである」。

このことから、人間が関わってくると何であれ変えるのが簡単でないことがよく判る。ふつうは 2 歩進んでも、そのあとで 1 歩半は後退するものなのである。2 歩進んだあとで 3 歩後退するのを避けようと思うと、たいへんな努力が必要になってくる。

フランスで十進法が最終的に受け入れられたのは、1840 年のことであった。それまでは、農村が十進法を受け入れようとしなかった。またアメリカで十進法が採用されたのは南北戦争後のことであった（1865 年）。イタリヤとドイツはフランスを真似て、国内統一を実現したときに十進法を導入している。「常識 common sense」の持ち主とされているイギリス人だけは合理主義一辺倒のやり方を拒否したが、ほかのヨーロッパ諸国は全てが十進法を導入している。

もともとフランス人のレオミュール René A. F. de Réaumur が 80 度にしてきた氷点から沸点までの目盛りを、100 度に変更したのはスウェーデン人のセルシウス Anders Celsius であった。レオミュールの 80 度にするやり方がドイツやロシアで受け入れられたのに対して、フランスはセルシウスの 100 度にするやり方を受け入れている。これがフランス人のやり方であった。考え出したのがフランス人であるか否かは丸で問題にしない。アメリカ人であれドイツ人であれ、はたまたポーランド人であれ、フランス革命に参加した者には例外なくフランス国籍が与えられたのと同じやり方である。「自然現象を説明する方法と国籍は無関係である。過去が忘れ去られ、自然現象を説明する方法だけが残ったとしたら、それがどの国の人間によって考え付かれたものかを知ることは不可能になる」（Marie Curie, Pierre Curie, Chap. V）からであった。

## 第 15 節 キュリー夫人

こうしたフランス人の考え方をよく示しているのが、キュリー夫人の事例である。ロシア革命を説明した第 4 章でレーニンとその家族について紹介したので、フランス革命を説明する第 5 章では、放射線研究のパイオニアであるキュリー夫人のことを紹介することにする。

キュリー夫人は出身がポーランドであり、その意味でも純粋なロシア人でなかったレーニンと置かれていた立場が似ていて興味ぶかい。「私が育った家庭は権威主義的だったが、ポーランドがロシアの圧政下にあったこともその原因になっていた。当時の若者らしく、私も自分がポーランド人であることを誇りにしていた。しかし科学者になる道を選んだため、家族や故郷を後にすることになった。パリのソルボンヌ大学で 3 年間、物理学を学ぶことになったからである。カルチエラタン地区にあった建物の屋根裏部屋に住んでいたが、それは酷い所であった。お金が無かったからである。それでも私は幸せだった。1894 年の春にピエール＝キュリーと出会った

が、彼は私の貧乏暮らしを決して馬鹿にせず、私に研究の楽しさを教えてくれた。そして、こう言って求婚したのである。『一緒に自分たちの夢を実現しよう。国のために尽くそうという夢や人類のために尽くそうという夢もよいが、もっとも大切なのは科学者として成功することだ』。1895年7月に我々は結婚し、自分たちだけで家計の切り盛りをすることになった。それから11年間、我々はいつも一緒だった。理論研究も一緒なら、実験室での実験も一緒、講義の聴講も一緒なら、試験を受けるも一緒だった」(Oeuvres de Pierre Curie, publiées par les soins de la Société Française de Physique, Paris, 1908)。しかし夫のピエールがパリ工科大学 école supérieure de physique et de chimie industrielles de la ville de Paris で教えるようになると、キュリー夫人は1人で研究を行うことになった。3年間の孤独な研究中に、ウランとトリウムが放射線を放出していることを発見している。さらにウランよりも強い放射線を放出する鉱石を調べるなかで、ピッチブレンド(瀝青ウラン鉱)とトルバナイト(リン銅ウラン石)がウランよりも強い放射線を放出していることを発見し、そこでこの2つの鉱石にはウラン以外の物質が存在するはずだと考えるようになった。その物質を抽出するために化学的な処理が必要になり、その作業を夫のピエールは自分の仕事を辞めて手伝ってくれることになった。当時オーストリア領であったチェコのヨアヒムスタル Joachimsthal 鉱山からピッチブレンドを含む鉱石を1トン無償で提供してもらって、これを2人で処理することにした。

まず作業場を確保する必要があった。最初は機械類の商店であった小さなガラス張りの部屋を確保し、さらに使われなくなった物置を作業場にした。「物置の床は石炭だらけで、屋根はガラス張りだったが雨漏りが酷くて、屋根の役割を果たしていなかった。夏は猛烈な暑さで息が詰まりそうになるし、冬は鉄製のストープ1台しかないので寒いことこの上なかった。しかし当時ほど我々の生活が充実していたことはなかった。一日中、研究に打ち込めたからである。ふつう化学者が使っているような装置は何一つ

ない中で、我々は大量の鉱石を処理する必要があった。ふだん外でやっていた作業を部屋のなかでやらざるを得ないときは、悪臭を外に出すために窓を開けたままにしなければならなかった。家具といえば松で作った古いテーブルが幾つかあるだけで、我々はその上に精製したラジウムの結晶を並べていた。それを入れて置く箱がなかったからである。作業は過酷なものであった。数キロ単位で砕いた鉱石を大釜で熱し、何時間も鉄の棒で攪拌して液状にして、床に置いた大皿に流し込むのである。石炭と鉱石の粉で息が詰まるほどであった。しかし、あるとき暗くなってから物置に入って行ったとき、部屋の隅で淡い青色を発する我々の作業の成果を目にした。そのときの喜びは大きかった」(Oeuvres de Pierre Curie)。

それから12年後の1910年、キュリー夫人は最初の放射線会議を主宰することになるが、その会議でラザフォード Ernest Rutherford をはじめ、数多くの物理学者から賞讃の言葉を掛けられることになった。この会議で、放射線量の測定単位に「キュリー」を使うことが決定されている。1トンのピッチブレンドを処理して得られた純粋なラジウムの量は100分の1グラムに過ぎなかった。ちなみに国際度量衡局 Pavillon de Breteuil にメートル原器(長さの標準器)と並んで、ガラス管に入った20ミリグラムのラジウム塩が保管されているが、これが放射線量を測定する際の基準とされた。

夫が交通事故で亡くなった後、キュリー夫人は夫が占めていたソルボンヌ大学の物理学教授のポストを引き継ぐことになった。また、フランス医学アカデミーの会員にもなっている。推薦されてフランス医学アカデミーの会員になったのは、クレマンソー Georges-Benjamin Clemenceau とキュリー夫人だけである。キュリー夫人を医学アカデミーに推薦したのはソルボンヌ大学の同僚だったベクレル Henri Becquerel だったが、そのときベクレルはフランス科学アカデミーにあるモリエール胸像の銘(ソラン Bernard-Joseph Saurin による)を引用したそうである。「彼女は更なる栄誉をこれ以上、必要としていないが、我々は彼女の存在を必要としている Rien ne manque à sa gloire ; elle manque à la notre」。

このキュリー夫人の事例は科学進歩の可能性をよく示しているだけでなく、もともとフランス人でなかった研究者もフランス人として受け入れられる可能性をよく示している。国民とは「選択するもの becoming」であって「最初から存在するもの being」ではないのである。先駆者とか「天才 génie」と言われる者は、無意識のうちに国民の枠を超えて人類全体のために貢献するものなのである。人間に救いがあるのは、この不思議な衝動が人間に存在しているからである。この不思議な衝動なくして人類に未来はない。

## 第16節 「フランス」とは何か

フランス革命のときフランス全土が溶鉱炉に放り込まれ、かき混ぜられることになった。その結果、誕生したのが「唯一不可分 une et indivisible」のフランスであった。革命までフランスを支配していたのは、聖職者と貴族であった。また、さまざまな慣習法に支配された多くの「地方(邦) pays」がフランスには存在していた。革命後に登場して来た「唯一不可分」という言葉は、周辺国との対外戦争が始まった1792年に全てのフランス人が共有する所となった。演説・通貨・記念碑に、さらに法律・新聞記事でこの言葉が広く使われるようになった。「愛国派 patriotes」は穏健派が擁護するイギリス式の連邦制や地方自治に反対し、「唯一不可分」の政体こそがフランスに相応しいと考えて「祖国 patrie」という言葉まで創ってしまった。2500万人のフランス人を1つに束ねる中央集権的な国、これが「祖国」の意味であった。

「唯一不可分」という考え方が余りにも徹底し過ぎて、アルザス人(ドイツ系)やバスク人の独自性までが「地方分権主義 regionalisme」と決めつけられて排除された。この味気ない「地方分権主義」という言葉のおかげで、「地方(邦)」の生き生きとした声までが掻き消されてしまったのである。ピカルディー地方・アルトア地方・プロバンス地方・リムザン地方と

いった「地方(邦)」名を耳にすることがなくなり、「祖国」という言葉がそれに取って代わることになった。フランス全土が川の名前を冠した「県 department」に分けられることになったのである。かつて「フランスの島(イル＝ド＝フランス) Ile de France」と呼ばれていたパリ周辺地域も、「セーヌ県 Département de la Seine」と呼ばれることになった。セントヘレナ島で死亡したナポレオン1世の遺骸が1840年に廃兵院 Dome des Invalides に移されることになったが、この事実ほど当時のフランスを象徴している出来事はない。廃兵院の中央に置かれたナポレオン1世の石棺には、こんな言葉が刻み込まれている。「ナポレオン1世は自分の遺骸がセーヌ川の近くに移されることを願っていた。そこは彼が愛したフランス人の住むところだからである」。

川の名前を新しい地域名に採用し、その地域を中央から統制することに成功したのがナポレオン1世であった。もともとフランスには、地中海・大西洋・パリを運河で1つに結び付ける計画があった。中国のように運河で首都と地方を結び付ける計画である。そのために自然の川を堰き止めることすら計画された。フランスの公道網も、同じように中央集権化に貢献していた。革命が始まったとき、フランスにはパリと地方を結ぶ公道は28本あった。いまでもパリのノートルダム大聖堂に起点を示す標石が残されている。パリを通らない公道も97本あり、この97本の公道が総延長1万7000キロメートル、28本のパリから地方に通じていた公道は1万5000キロメートル、合わせてフランスには公道が3万2000キロメートルあった。私道が2万キロメートルほどしかなかったことを考えると、いかに公道建設がフランスで重視されていたかが判る。さらに19世紀になって鉄道が登場してきて、中央集権化が一層促進されることになった。この中央志向はパリのなかでも発揮され、凱旋門と無名戦士の墓があるエトワール広場がパリの中心になっている。

これこそが「論理的・一貫性 logical order」を重視し、十進法を採用するフランス流の「明晰さ clarté」なのである。十進法は、それを好まない国に

すら部分的に採用されることになった。フランス人が十進法の採用を徹底したおかげで、それを好まないからと言って無視すると拙い結果を招くことになったからである。イギリスですら、部分的に十進法を採用している。イギリスはフランスのように全面的に十進法を採用することはなかったが、部分的にでも十進法を採用できたのは、フランス人の徹底した「明晰さ」好みのお陰であった。

## 第17節 フランス人の時間意識と空間意識

フランス人は革命のとき、ユダヤ教に由来する旧いカレンダーに代えて新しいカレンダーも作るつもりでいた。「地方(邦) pays」に代えて「祖国 patrie」という言葉を作り出したときと同じ発想である。1週間は7日でなく10日になるはずであった。しかしフランス人特有の時間意識は、新しいカレンダー作りに現れているわけではない。新しいカレンダー作りは、どの革命にも見られる現象だからである。事実、革命後にフランスで試みられた新しいカレンダー作りは、フランス人の時間意識と無関係であった。1788～1790年に様々なカレンダーが作られていたが、私が確認できた最後のものが1893年のものである(『革命時代のカレンダー Calendrier de l'Ere Révolutionnaire』)。アベラールの愛人エロイーズや、アテナイの政治家ペリクレスの愛人アスパシアの日まで設定されていた。

フランス人が本当に作りたかったカレンダーは、ロシア人のようにメーデーの日(5月1日)を重視するだけのカレンダーではなく、毎日が新しさと「驚き surprise」で一杯のカレンダーであった。時間は常に新しさと「驚き sensations」を生み出すべきだと彼らは考えたのである。19世紀はニュースと新聞の世紀であった。

「ニュース」という考え方を生み出したのはフランス革命である。その結果生まれてきたのが「展覧会 exhibition」であった。毎年「展覧会場 salon」に「驚き」で一杯の芸術作品を集めて展示するのである。時代を同

じくし、嗜好と描き方を同じくする画家たちの作品が集められた。フランス絵画がヨーロッパ絵画のあり方を決めることになったが、その理由をボルテールは次のように説明している。「フランス人は音楽が苦手である。なぜなら音楽は国の枠を越えられず、普遍性に欠けるからである。ところが絵画は、どこの国でも同じ様に見える自然を相手にする芸術であって、普遍的である」(Oeuvres complète de Voltaire, vol.20, p.181)。自然を変えることができるのは時間だけであった。だからこそ印象派の絵画は、時間の経過とともに次々と新しい手法で描かれることになったのである。詩人も画家と同じように、つぎつぎと新しい手法を登場させていった。自然派・高踏派 Parnasse・象徴派・印象派などの詩人がそれである。

このフランス人の「展覧会」好きが、他の国にも伝搬していくことになった。フランス人のつぎに革命を経験したアメリカ人は、フランスについて「展覧会」好きである。しかしパリでは、つぎつぎと「展覧会」が開催され(1856年・1867年・1878年・1889年・1900年の世界万博)、このことからフランス人の時間に対する「拘りの精神 esprit」がいかに強いものであったかがよく判る。

時間だけでなく、空間も組織化して中央から統制すべきだと考えられた。フランス語で「組織化 organisation」とは、「道理・合理性に合った組織を作る」ことを意味する。つまり「機械的であり、かつ有機的な組織」を作ること意味するのである。このような考え方は、機械的なものと有機的なものを対立的にとらえるドイツのロマン派にとって有り得ないことであった。こうした時間意識と空間意識こそフランス人に特有のものである。パリが婦人服の流行を決める場所になったのも、このフランス人に特有の時間意識と空間意識のお陰である。11年ごとにパリで開催されるはずであった「世界博 world exposition」が開催されなくなり、毎年催されるはずであった絵画展が催されなくなってからも、パリは流行の最先端をいく都市であり続けた。しかし「新しさ contemporaneity」がないところでは、フランス人は天分を発揮できなくなる。美術館のなかには「新しさ」が存在する美

術館と「新しさ」が存在しない美術館がある。ルーブル美術館にあるのは過去の画家たちが残した作品だけである。ところがリュクサンブール宮殿の美術館にあるのは、いま生きている画家たちの作品であった。ルーブル美術館にある過去の画家たちの作品に「新しさ」は期待できない。「新しさ」を求める者にとって、ルーブル美術館は楽しいところではなかった。「新しさ」によって「想像を絶する驚き ingenious surprise」が与えられないかぎり、フランス人は創造力を失ってしまう。「新しさ」が失われると、保守的になってしまう。

## 第18節 フランス社会の保守性

新しいものが大好きで、新しいことを考え出すのが大好きなフランス人も、こと事業とか家族のことになると非常に保守的になる。

確かにフランスにも外国製の商品が溢れている。フランスが世界中から商品を輸入していることについて歴史家のアヴヌル M. Avenel は、つぎのように説明している。「フランスの農村に暮らす普通の農民も、遠い外国から運ばれてきた輸入品に囲まれて生活している。フランスで生産すれば高価で採算が合わないような輸入品なしでは、フランス人は生活できない。コーヒーはブラジルからの輸入品、砂糖はエヌ県とかパドカレー Pas de Calai 県で生産されているが、干し鱈はカナダのニューファンドランド島からの輸入品である。石油はインド洋とか黒海方面から輸入され、蠟燭は外国産の獣皮と化学処理されたゴミから生産されている。トラクターはアメリカ製だが、犁の刃先や車輪の芯棒に使う鉄はロレーヌ（当時はドイツ領）産である。帽子のリボンはマニラ産の麻かりガ（ラトビア）産の亜麻、屋根に葺く板や建材の梁はスウェーデン・ノルエーから加工済みのものを輸入していて、新聞紙もスウェーデン・ノルエーから輸入している。シャツ・タオルを作る綿はテキサス州（アメリカ）から、また外套用の毛皮は南アフリカとかオーストラリアから輸入している」（Viconte G. d'Avenel, Histoire

économique de la France, 1907)。

ただし、輸입品はフランスの製造業に役立つものに限定されていた。1914年当時、10人中9人のフランス人は農村に住んでおり、社会党も農業を保護する関税を支持していた。またフランスの製造業は、家族経営と個人資本に依存していた。フランス人は外国嫌いという訳ではなかったが、外国に移住することは考えておらず、また外国のやり方を取り入れることも考えていなかった。株式会社をフランス語では「匿名の会社 société anonyme」と呼んでいるが（こんな呼び方をしているのはフランス語だけである）、ドイツやアメリカでは企業に法人格を与えて、まるで企業が人間であるかのような扱い方をしていることを考えれば（アメリカ合衆国憲法の修正第14条は、もともと黒人の権利を保護するはずであった。これが法人格を認められた企業の権利を保護する条文になってしまっているのは残念である）、フランス人の「中庸の精神 juste milieu」は健在であることが判る。彼らは株式会社が人工的なものであることを「匿名 anonyme」という言葉で表現しているのである。「匿名」でない人間は信用できても、法人格を認められた企業は「匿名」の人間と同じで信用できないということである。

フランスでは夏季休暇が当然視されており、大工や靴屋は夏になると「田舎に行きます A la campagne」という看板を入り口に掛けて、平気で店を閉めてしまう。資本制経済の先駆者はフランス人だが、資本制経済の犠牲者になっていない。フランス人が資本制経済の大規模化に抵抗する理由がこれである。フランスの労働者は職人的な性格が強い。第一次世界大戦のとき、「フランス人兵士 poilu」1人、フランス人のインテリ1人を失う方が、1000人の「ムジーク」（ロシア人農民）を失うより世界文明にとって大きな痛手となると駐露フランス大使パレオログ M. Paléologue が発言して問題になったことがあった。彼にしてみれば、さらにフランス人の職人も加えたかたははずである。近代的な工場における単調な作業に対して、彼らは労働者による工場管理や無政府主義を唱えたりして抵抗した。つまり労働者が人間であることを重視したのである。ロシアのボルシェビキたちは「無

産大衆 proletariat」を使って資本家を個別に撃破したが、フランス人は資本制経済が自分たちを「無産大衆」に貶めることに抵抗したのである。1871年のパリコミュンは、そんなフランス人の抵抗の証しであった。当時のフランスの政治体制は多くの欠陥を抱えていたが、それでもフランス人を人間として尊重することを前提にしており、だからこそパリコミュンは失敗したのである。フランスほど共産主義革命に対して抵抗力を持つ国はないと言える。1924年にソ連で公表された統計が、そのことをよく示している。統計表を見れば判ることだが、労働人口に対する「無産大衆」の割合が一番少ないのがフランスである。

	労働人口	無産	半無産	支配層
イギリス（除アイルランド）	18400（千人）	16010（千人）	560（千人）	1830（千人）
ドイツ	33900（千人）	26000（千人）	3500（千人）	4400（千人）
イタリア	20000（千人）	14000（千人）	2500（千人）	3500（千人）
デンマーク	1350（千人）	850（千人）	100（千人）	350（千人）
ブルガリア	2500（千人）	1600（千人）	260（千人）	640（千人）
アメリカ合衆国	42000（千人）	27500（千人）	6500（千人）	8000（千人）
フランス	20900（千人）	10700（千人）	3900（千人）	6300（千人）

フランスの労働人口のうち半分は自営業が可能だが、イギリスではせいぜい15%しか自営業が可能でないことがこの表から読み取れる。

ただし各国の数字には注意が必要である。イギリスの15%はあくまでも本国だけの数字であり、イギリス連邦は考慮されていない。またフランスの場合も、数字だけに注目すると誤解する可能性があるので注意が必要である。「フランス国民 citizen」は「中庸 juste-milieu」の実現に成功し、そのおかげでフランスはマルクスの理論が通用しない国になることができた。平等な関係が徹底すると、資本制経済が最悪の事態を招くのを防ぐことができる。フランスは革命によって平等な関係が徹底することになったが、フランスを真似ただけの他の国では、「国民」のあいだに本当の平等

が徹底せず、「労働者 employé」は悲惨な状態に置かれることになった。アメリカの「労働者」は「雇用主」のままで臆することがない。なぜならアメリカには、かつて両者のあいだに不平等な関係が存在したことがないからである。ところがフランスでは、もともと聖職者や貴族が平民を支配していたあとで聖職者と貴族がベルサイユに集められて影響力を失うことになった。パリ市民が古い伝統を破棄して「真の平等 real equality based on ideas」を実現することができたのは、そのおかげであった。

## 第19節 ユダヤ人解放

フランス革命の結果、新しい社会勢力がヨーロッパに登場してきた。革命によって差別から解放されたユダヤ人である。ユダヤ人はキリスト教徒にとって厄介な存在であった。ユダヤ人は「キリスト教徒 Gentile」を「偶像崇拜者 pagan」と見なしていたからである。洗礼を受けて熱心に教会に通うようになって、キリスト教徒が「偶像崇拜者」であることには変わりはなかった。教皇も司祭も神学者もキリスト教徒であり、彼らを「偶像崇拜 paganism」から解放することは不可能だとユダヤ人は考えていた。そんなユダヤ人をキリスト教徒は忌み嫌っていた。私が知るかぎり、1789年にユダヤ人は「キリスト教徒」という言葉と「偶像崇拜者」という言葉を区別して使っていなかった。ユダヤ人はキリスト教を本物の宗教とは考えていなかったからである。本物の宗教とは、神によって選ばれたユダヤ人が信じるユダヤ教だけであった。ユダヤ人から見れば、キリスト教徒が唱える「主の祈り」の神は如何わしい神であった（人間が神にやるべきことを命じている!）。あるユダヤ人学者に言わせると、キリスト教徒の哲学・思想・概念などは迷信と同じで「気違い染みもの moral insanity」であった。キリスト教徒に改宗したと称する部族たちは上辺だけの信者であった。彼らが本当に受け入れたかったのはローマの文明であった。彼らにとってキリスト教は、ローマ文明を受け入れるための手段に過ぎなかった。ローマ

の文明に負けず劣らず古くから存在していたキリスト教は、文明化されたことを証明するための手段であった。教会は異教を極度に嫌っており、異教の排斥に熱心であった。教会が少しでも油断すると、とたんに異教的な要素が忍び込んできた。18世紀になるとヨーロッパ各国で異教的なものが復活してくるようになったが、フランス革命でユダヤ人が差別から解放されると、さらに事態が悪化することになった。

フランス革命の過激派であったジャコバン派は、一見するとキリスト教と無縁のようだが、彼らほどキリスト教に忠実な党派は存在しなかった。そんな彼らがユダヤ人を同じ人間として認めたのである。ユダヤ人とキリスト教徒が同じ人間であるとされ、全人類の祖先アダムは1789年に本当の意味で全人類の祖先となった。ユダヤ人もフランス人として認められることになったのである。

フランス人の使命感の強さはユダヤ人以上であった。自分たちほど使命感に燃えている国民は他に存在しないと彼らは自負していた。1789年に差別から解放されたのは、ユダヤ人哲学者のような特殊なユダヤ人だけではなかった。すべてのユダヤ人が差別から解放されたのである。フランス革命が実現した「平等 égalité」の意味がそれであった。ポーランドのユダヤ人もロシアのユダヤ人も人間であり、「理性 reason」を持つ存在なのである。「理性」を持つことで、彼らもヨーロッパ人になることができるのである。

1789年の理念が一番よく現れているのが、ユダヤ人解放であった。「ヨーロッパ人」の意味がキリスト教徒に限定されなくなったのである。1804年にナポレオン1世が教皇から帝位を受けたとき（つまり革命がカトリック教会によって正統性を認められたとき）、フランスは革命前の時代に逆戻りする危険性があった。しかし既にユダヤ人解放が1803年に始まっており、フランス革命の成果は解放された10万人のユダヤ人によって守られたのである。

解放されたユダヤ人はヨーロッパ人になっていった。「解放 émancipation」

に対するユダヤ人の答えが「同化 assimilation」であった。しかしマルクスの父親はトリール市（ライン川沿いにあったプロイセン領）で弁護士をしていたが、キリスト教に改宗していなかった。その息子がどんな反ユダヤ主義者にも負けないようなユダヤ人批判を展開したのは、自分がユダヤ人であることを認めたくなかったからである。彼が精通していたのはユダヤ人が直面していた経済的な問題であったが、ユダヤ人は商人や高利貸し以外にも必要とされる理由があった。

解放されたユダヤ人はヨーロッパ人になる道を選んだが、ヨーロッパが長い歴史を持っていたことをユダヤ人は忘れていた。ユダヤ人は、ただ近代への入口を用意したフランス革命のことしか念頭に置いていなかったのである。元ユダヤ人のプロイセン政治家ユリウス＝シュタール Friedrich Julius-Stahl はプロイセン国王（もちろんキリスト教徒である）の熱心な支持者で、「多数決でなく国王による裁決を Authority, not majority」を信条としていた。このシュタールのことをビスマルクは「それでも自由主義者であることに変わりはない」と評していた。ビスマルクが指摘しなかったのは、たとえシュタールが敬虔なキリスト教徒になったにしても、それを可能にしたのが30年前のフランス革命だったという事実である。シュタールがプロイセンの有力な政治家になれたのも、フランス革命が掲げた「平等」理念のおかげであった。こうしてヨーロッパのユダヤ人はフランス革命の理念である「自由 liberté」と「平等 égalité」の熱心な支持者となった。しかし彼らの支持には、ユダヤ教に基づく宗教的な裏づけは存在しなかった。ユダヤ人は「解放」に対する代価としてフランス革命の理念を支持しただけであった。ユダヤ人とキリスト教徒のあいだで意味ある対話が可能になるには、キリスト教徒が「解放」の現実を認める必要があった。ところが19世紀を通じて多くのキリスト教徒は「解放」を認めず、「平等」も認めようとしなかった。ユダヤ人が熱心な革命理念の擁護者になった理由がこれであった。

ユダヤ人は銀行をはじめ金融業を営んでいたのも、同じ銀行家や金融業

者であったキリスト教徒のブルジョア層と利害が一致したはずだという意見を耳にする。しかし、この意見は現実に疎く浅薄に過ぎる。ユダヤ人銀行家は、何世紀ものあいだ厳しい競争に直面していた。フランクフルト（アム＝マイン）のルター派の支配者は、同じプロテスタントのカルバン派が市内に住むことすら禁じていた。カルバン派の教会がフランクフルトに献堂されたのは、1780年になってからであった（フランス革命が始まる9年前のことである）。それまでカルバン派の教会は、フランクフルト市に隣接する村に置かれていた。革命後に支配階級となったフランスの資本家たちは、競争相手として新しく登場してきたユダヤ人を警戒するようになった。経済的な利害関係だけでは何も説明できない。反ユダヤ主義の背後には、キリスト教徒の中産階級がユダヤ人に対して抱いていた嫉妬や羨望の念が控えていた。事業をめぐる壮絶な競争があったことを忘れるべきではない。金融業や商業はユダヤ人だけのものではなかった。キリスト教徒も金融業や商業を営んでいたのである。

## 第20節 キリスト教徒とユダヤ人

フランス革命はフランス国内のユダヤ人を差別から「解放」したが、それでフランスのユダヤ人問題が解決したわけではなかった。フランス人は、キリスト教徒がキリスト教徒であるためにユダヤ人が必要不可欠であったことを理解していなかった。「解放」でユダヤ人問題は解決されなかったのである。たとえ個々のユダヤ人が「解放」されても、相変わらずユダヤ人問題は存在し続けていた。

ユダヤ人とは、高利貸・行商人・商人のことではない。旧約聖書や新約聖書には、様々な職業のユダヤ人（農民・職人・学者など）が登場してくる。ユダヤ人が高利貸・行商人・商人になったのは、西暦70年のユダヤ戦争でローマ軍に敗れて、エルサレムを追われてからであった。それ以後のユダヤ人は、イエスの生き証人として生き続けることになった。もしユダヤ

人がいなければ、イエスが存在したことなど誰も信じなかったはずである。キリスト教が歴史に登場できたのは、ユダヤ人がいたお陰であった。ユダヤ人がいなければ、イエスは金髪（きんぱつ）の英雄としてゲルマン神話に登場していたことであろう。イエスが蔑まれ、十字架（か）に懸けられて殺されることになったのは、ユダヤ人がいたからであった。フランス革命を指導した哲学者に言わせれば、何千年ものあいだユダヤ人が存在し続けてきたことなど重要でないかもしれないが、日々の平凡な生活があってこそ重要なことも実現可能なのである。もしユダヤ人がいなかったら、イエスの存在は嘘であったということになる。イエスなど居なかったと主張する文献は、山ほどある。フリードリヒ大王が牧師の一人に「イエスが実際に居たことなど誰も証言できない」と言ったところ、その牧師はこう答えたそうである。「ユダヤ人が証言できます」。

ユダヤ人も、生きていくためには仕事をしなければならなかった。だから彼らは商人になったのである。彼らが農民にならなかったのは、国を追われて土地との結びつきを失っていたからであった。ところが土地との結びつきを失わなかったキリスト教徒は、統治制度・農地・農業・農村・都市・機械などを「崇拜し idolize」、*「神のように崇める set them up as Gods」*ようになった。ところがユダヤ人は、現世と縁を切った聖職者のようであった。初めてユダヤ人の立場からキリスト教を説明したローゼンツワイク Franz Rosenzweig は、「ユダヤ人を暖炉のなかで燃えている石炭」に例えている。ユダヤ人は「信仰心に燃えているが故に厳格に戒律を守り、戒律に縛られているが故に何もできないでいる」（Franz Rosenzweig, *Der Stern der Erlösung*, Frankfurt am Main, 1921: 邦訳『救済の星』みすず書房）のである。ユダヤ人は統治機構・国家など、現世的なものとは丸で無縁であった。キリスト教徒と違って、帝国・産業・文明などを神聖視できないでいたのである。キリスト教徒は「異教徒 Gentiles」（ユダヤ人以外のローマ人・ギリシャ人など）に対してキリストの教えを説くことができたが、キリストの教えは丸で暖炉から放射される熱線のようなものであった。彼らは、その熱線によって世

界を変えることができたのである。ところがユダヤ人は、その真似ができなかった。

さらにキリスト教徒は自然を味方に付けていた。天候・土地・樹木・鹿・牛・金属・ライオン・羊などである。キリスト教徒は自然と一体であった。医者・庭師・薬剤師・家大工・橋大工・牛飼いたちは、人間が創造される以前から愛・信念・希望などによって自然をよりよい形にすることが運命づけられていた。こうした職業に就いた者は、自然の支配者であった。生涯、自然と共に生きるのである。ところがユダヤ人が関心を持つのは「この世が終わる時 end of time」(未来)だけであり、「終末論 eschatology」だけなのである。「この世が終わる時」(未来)に身を置いて、そこからすべてを考えるのである。死後のことを考えるとき、ユダヤ人はこう自問自答する。「この世が終わる時に救世主 Messiah が現れることを果たして自分は信じていたか」。ところがキリスト教徒が考えるのは、そんなことではない。「私は立派なことをやり遂げた。与えられた能力を発揮して、やるべきことをやり遂げた」。これがキリスト教徒の考えることなのである。ユダヤ人は自分の能力を発揮することなど考えない。キリスト教徒は権力を求め、支配することを好む。ユダヤ人が大統領や独裁者になることなど有り得ない。たとえ族長や国王になることがあっても、キリスト教徒のように支配することを自己目的化することはしない。そんなことにユダヤ人は関心を持たないのである。

以上で、いわば理論的にユダヤ人とキリスト教徒の違いを説明してきたが、ロシアの法制史家ソコロフスキー Pawel von Sokolowski に言わせると、ユダヤ人にも様々な能力の持ち主がいて、その点でユダヤ人も他の民族と同じだし、多様性という点でも他の民族と同じであった。ただ1つユダヤ人に欠けているものがあるとすれば、それは統治能力であった。「なかには統治を試みて成功した者もいたが、もともと彼らに統治能力は備わっていない」(Sokolowski, Die Versandung Europas, Berlin, 1929)。

この指摘は重要である。歴史に名を残すような支配者は、優れた統治能

力を備えている必要がある。時代を画するような偉業を成し遂げ、切手やコインに肖像が登場することになる。ところがユダヤ人は、時代を画するような人物とは無縁であった。彼らが優れた統治能力を備えた指導者を生み出せなかったと言っても、それでユダヤ人が駄目であるということにはならない。ただ彼らが世事に疎い聖職者のようだったと言っているだけである。新バビロニアの王ネブカドネザルは利口な支配者で、自分の言いなりにならなかったと言って大臣のダニエルを責めなかった(ダニエルはユダ王国が前586年にネブカドネザルによって滅ぼされたとき、エルサレムからバビロニアに連れてこられたユダヤ人の子。ネブカドネザルの夢の意味を解いて、その功で大臣に任じられていた)。ところがネブカドネザルの家来たちはそう考えず、ネブカドネザルの言いなりにならなかったダニエルを裏切り者だと糾弾した。ダニエルは大臣の職を解かれ、人間崇拜を禁じるユダヤ人の大臣がいなくなったので(ユダヤ教は崇拜の対象を神のみに限定)、ネブカドネザルを神と崇める声が諸国民のあいだから湧き上がってきた(詳しくは『ダニエル書』を参照)。第一次世界大戦後のドイツでダニエルのような役割を演じてみせたのが、同じユダヤ人のブリューニング Heinrich Brüning であった。彼も大衆の英雄崇拜を嫌っていた。聖職者のようなブリューニングは、ヒトラーのように大衆の英雄崇拜には応えなかったのである。

キリスト教徒は現世を重視するが、「終末 Eternity」にしか関心のないユダヤ人は現世に無関心である。何世代も先のことにしか関心のないユダヤ人は、いま目の前にある現実には無関心である。支配者の失敗でキリスト教徒が危機に直面しても、ユダヤ人は平気であった。キリスト教徒と違って、国王や皇帝なしでもユダヤ人は何とかやっていけるからである。それが原因で、キリスト教徒はユダヤ人に反感を持つようになった。とくに敗戦後は最悪であった。ユダヤ人が敗戦の責任者にされたからである。戦時にキリスト教徒が苦しんでいる時、仲間うちで盛大に儲けていたはずだという訳である。そんなユダヤ人に対して「大量虐殺 pogrom」(この言葉がロシア語起源であることから判るように、帝政ロシアの大量虐殺が有名)が開始さ

れるのである。

もちろん、生きていくためにユダヤ人はキリスト教徒と協力せざるを得ない。ただし、協力の仕方を決めるのはキリスト教徒の方であった。生きていくためにキリスト教徒に頼らざるを得なかったことから、ユダヤ人は不安定な心理状況に置かれることになった。不安に耐えられなくなったユダヤ人は神を信じられなくなり、悪魔の衝動に突き動かされることになった。信仰心を無くすると、残るのは好意を持たれない自分の仕事からくる不安だけである。こうしてイエスを裏切るユダが登場することになった。1789年にフランス革命が始まるまで、ユダヤ人はシャイロック（シェイクスピア『ベニスの商人』に登場してくる情け容赦のないユダヤ人高利貸）になるしかなかったが、すべてのユダヤ人が信仰心を無くした訳ではなかった。真面目なユダヤ人銀行家も数多くいたのである。問題だったのは個人の道徳心であって、職業ではなかった。キリスト教徒の農民が信仰心をなくすと、他人から土地を奪っても平気でいられるように、ユダヤ人が信仰心をなくすと金儲けのことしか考えなくなる。

普通のユダヤ人は他の人間と同じで、それ以上でもそれ以下でもない。ただユダヤ人は勤勉で落ち着きがなく、それが怠け癖のある悪意のキリスト教徒を不安がらせるのである。カイザリンク伯爵 Hermann Graf Keyserling が見抜いていたように、民族や国民として纏まると、人間だれしもやっかない存在と化す。ユダヤ人も人間である。人間だれしも不安定な心理状況に置かれると、何事もやり過ぎることになる。ユダヤ人の特徴は、何事につけ「やり過ぎる too much」ことであった。やり過ぎる慈善行為、利口過ぎるやり方、度を越した頭のよさ、過度の献身、過度の自己犠牲、目に余る自己主張の強さなどがユダヤ人の特徴である。

ガンベッタ・マルクス・ラーテナウ Walter Rathenau は、いずれも「やり過ぎた」人物であった。たとえばラーテナウだが、1918年にヒンデンブルクとルーデンドルフが戦局の悪さに怖気づき、皇帝・農民・大学教授・労働者が戦争の犠牲者をこれ以上増やすべきでないと思っていたとき、

ラーテナウだけはドイツ人を鼓舞し続けていた。のちに彼はドイツを裏切ったとして暗殺されるが、それは彼が軍人以上に軍人らしかったからであった。ユダヤ人がドイツ人軍人を侮辱したのである。

キリスト教徒がユダヤ人を嫌うのは、ユダヤ人個人が悪いからではない。ユダヤ人個人はキリスト教徒と同じ弱い人間である。キリスト教徒のユダヤ人嫌いは、もっと根が深い。「暖炉のなかで燃える石炭の火そのもの」(ユダヤ人は熱い信仰心ゆえに神が定めた戒律に縛られて身動きが取れなくなる。その状態をローゼンツウィクは、こう表現した)と、暖炉の周辺に熱線として放射されているだけのキリスト教徒では、水と油のように和解は不可能である。キリスト教徒は帝国を成長・発展させ、永遠に存続させていくことを考えるが、ユダヤ人はその先のことにしか関心がない。すべての帝国が消滅し、神が支配する時代が到来するときをユダヤ人は待っているのである。ファラオのエジプト王国・ネブカドネザルの新メソポタミア王国・アレクサンドロス大王の王国・ローマ帝国・神聖ローマ帝国は滅び去り、教皇も国王も大統領も死に絶えた後、神の支配するユダヤ王国の時代が始まるのである。ユダヤ人のこの考え方は、誰にとっても許しがたいものであった。ユダヤ人とキリスト教徒の共存が可能であるとすれば、それはキリスト教徒がユダヤ人以外の異教徒だけを相手にキリスト教の布教に専念するようになり、ユダヤ人がキリスト教徒や異教徒にユダヤ人であることを誇示しない場合だけだが、そんな時代が到来することなど考えられない。

凡庸な歴史家はユダヤ人問題が存在することを認めないし、認めたにしても解決策を提示することはしない。しかし街頭の市民は、本能的にユダヤ人問題が存在していることに気づいている。もっとも、ユダヤ人問題の解決を街頭の市民に任せると、マコーレー Thomas Macaulay の名誉革命史のような退屈な解決策を提示するか、トロツキーのロシア革命史のように、大衆任せの無責任な解決策を提示することになりそうである(ヒトラーを権力の座に据えたのは大衆であった)。ユダヤ人問題の存在を感じ取る街頭市民の本能は信用できるにしても、ユダヤ人問題の解決には、ユダヤ人・キ

リスト教徒・異教徒の立場も考慮に入れる必要がある。世界はこの3者から構成されており、3者のことを考慮に入れなければ世界の本当の姿は見えて来ないからである。文法の時制に過去・現在・未来があり、物事には始まり・途中・終わりがあるように、世界はユダヤ人・キリスト教徒・異教徒から構成されている。ただ時代によって構成の割合は違っており、構成の割合を知ることが世界史の理解に繋が<sup>つな</sup>がり、ユダヤ人問題の解決策を見出すことも可能になってくる。

フランス人が考えたように、3者を1つにしてしまえば解決できるというものでもない。異教徒・キリスト教徒・ユダヤ人を法的に対等<sup>あつか</sup>に扱ったところ、何も解決しない。時間をもつ意味が、異教徒・キリスト教徒・ユダヤ人で違っているからである。ヨーロッパでは長くキリスト教徒の暦が使われてきたので、そのことが判らなくなっている。時間に対するユダヤ人の考え方は独特である。異教徒（たとえばローマ人）やキリスト教徒は過去から現在を考え、さらに未来を予測しようとする。ところがユダヤ人は過去や現在には関心がなく、ただ「救世主<sup>メシア</sup>」が現れてユダヤ人を救ってくれる未来のことにしか関心がない。ユダヤ人が嫌われ、憎まれる理由がこれである。

聖書では神こそが「すべて Alpha and Omega」とされているが、神は「始まり Alpha」（創世神話）のことは考えない異教徒・キリスト教徒と、「終わり Omega」のことは考えないユダヤ人を創<sup>つく</sup>ってしまった。ユダヤ人は歴史が終わる前<sup>まえ</sup>に終わった時のことを考えるが、そのおかげで異教徒・キリスト教徒は歴史に目的があり、歴史は目的に向か<sup>む</sup>ってまっすぐ進んでいることが判るのである。また異教徒・キリスト教徒が歴史の始まりをつねに意識しているおかげで、歴史は形・美しさを持つことになるのである。

このように異教徒やキリスト教徒が「始まり」だけを意識し、ユダヤ人が「終わり」だけを意識するため、両者のあいだで妥協することは不可能である。ユダヤ人は、キリスト教徒・異教徒が間違っていることを証言するために自分たちは生まれてきたと考えている。それが神から与えられ

たユダヤ人の使命だと考えている。そんなユダヤ人に対して異教徒（古代のアステカ人・エジプト人・モアブ人・アッシリア人など）やキリスト教徒は、自らの宗教を対抗させ、その対立のなかで両者は違<sup>みずか</sup>いばかりを強調することになる。異教徒やキリスト教徒は過去を偶像化し、ユダヤ人は遠い未来に希望を託<sup>たく</sup>すことになる。

定期的にキリスト教徒がユダヤ人に対して迫害を加えるのは、この対立関係が原因になっている。ユダヤ人の「大量虐殺<sup>ポグロム</sup>」が起きるのは、この対立からくる心理的な抑圧状態を解消するためである。15世紀にカトリック教会が危機に直面したとき、あるいは1914年にロシアで旧体制が危機に直面したときに「大量虐殺<sup>ポグロム</sup>」が起きているが、それは危機の原因がユダヤ人の所為<sup>せい</sup>にされていたからであった。遠い未来に希望を託<sup>たく</sup>しているユダヤ人にとって、現存するキリスト教徒の制度など無価値に等しい。そんなものに希望を託<sup>たく</sup>しているキリスト教徒をユダヤ人は馬鹿にする。ドイツで「大量虐殺<sup>ポグロム</sup>」が猛威を振るっていたころ、あるユダヤ人ジャーナリストがナチズムを信奉するドイツ人女性の論文を推<sup>すい</sup>薦<sup>こう</sup>してやったことがあった。そのお礼に彼はゲッベルスとゲーリングに会わせてもらったが、会見から帰ってきてこう言ったそうである。「彼らは我々を迫害する振りをしているだけだ。あれは遊びに過ぎない。本気にすることはない」。

時間に対する考え方の違い（ユダヤ人は遠い未来にしか関心がなく、目の前の現実を重視するキリスト教徒を馬鹿にする）が原因で「大量虐殺<sup>ポグロム</sup>」が起きることは以上で説明した通りだが、空間に対する考え方の違いから戦争に対する考え方も違っており、それが原因で「大量虐殺<sup>ポグロム</sup>」が起きることを次に説明したい。念のために断わっておくが、ユダヤ人が戦争に意味を認めないのはユダヤ教徒としてであって、彼らが住んでいる国のために戦わないということではない。ドイツに生まれたユダヤ人がドイツ人として献身的に戦うことは有<sup>あ</sup>り得<sup>え</sup>る。しかしユダヤ教徒にとって国境線に意味はない。神は人間を創造したのであって、国民を創造したのでは無いからである。ところが、これがキリスト教徒には気に入らない。戦争の意味を認めず、

戦争を「インディアンごっこ playing Red Indians」としか考えないユダヤ人は憎悪の対象とされる。戦争未亡人や戦争孤児の涙の方が名誉ある戦死などより大切だと考えるユダヤ人は、非国民だということにされる。

ラーテナウがどれほどドイツのために貢献したか話を聞かされたあるドイツ人中尉は、こう答えたそうである。「そんなことは嘘だ。もし本当としたら、それはドイツにとって恥だ」。ラーテナウはユダヤ人でありながら第一次世界大戦でドイツが資源不足になることを予測し、戦時経済体制を確立するのに貢献していた。また1918年にルーデンドルフが敗北を覚悟したときにも、戦争継続を断固として主張していた。ユダヤ人がドイツ人以上に愛国的であることなど、あってはならないことなのである。そんな形で自分たちの失敗を指摘されることをドイツ人は嫌っていた。

1450～1517年にカトリック教会が宗教改革によって分裂の危機に直面したとき、やはり「大量虐殺」が起きている。お陰でカトリック教会は、ルターによる宗教改革を50年遅らせるのに成功している。また第一次世界大戦前にロシアの支配体制が危機に直面したとき、やはり「大量虐殺」が起きて支配体制は延命に成功している。いくら戦争が残酷だからと言ってみたところで戦争が無くならないのと同様、「大量虐殺」がいくら残酷だと言ってみたところで「大量虐殺」がなくなる訳ではない。先行きが暗いことが判っていても、人間は容易にそのことを認めないものである。第一次世界大戦後にドイツ人は敗北の責任を受け入れるのを拒み、敗北の責任はユダヤ人に押し付けられることになった。ユダヤ人にはドイツの敗北が最初から判っていたはずなのに、そのことをドイツ人に教えようとしなかったというのがその理由であった。敗北の責任はドイツ人にはなく、ドイツ人は敗北を恥じる必要などないのである。

狡知に長けた蛇がナイーブなアダムとイブを手玉に取ったのと同じであった（エデンの園で蛇に騙されたイブは、禁じられていた知恵の木の実をアダムと食してエデンの園を追われることになる）。目の前の現実を重んじるキリスト教徒と、遠い未来しか念頭にないユダヤ人では、相互不信は当然であっ

た。キリスト教徒は、木に花を咲かせて実を結ばせることしか考えない。自然とともに生きることの意味を見出すのである。芸術家・政治家・英雄などの才能に魅了されるのである。ユダヤ人と違って人間を崇拜し、さらに人間が作る制度や社会に魅了され、友情や自己実現に魅了されるのである。

ユダヤ人も「異教徒 Gentiles」（非ユダヤ教徒）も自らの神を讃えるのに熱心である。しかし「異教徒」はこの世界を創った神になることができるが、ユダヤ人はアダムの子孫に相応しく被造物の立場に徹する。言い換えれば、「異教徒」はこの世界に身を置いて綱を引き（目の前の現実しか見ていない）、ユダヤ人は天上に身を置いて綱を引く（遠い将来のみを念頭に置く）。ただ「異教徒」にはユダヤ人が握っている綱の端（遠い将来）は見えないが、ユダヤ人には両方が見えている。そこで何も知らない「異教徒」と、すべてをお見通しのユダヤ人の間で対立が起きることになる。「異教徒」とユダヤ人は隣人として生きていかざるを得ないが、残念なことに「異教徒」はユダヤ人のことにまるで無知である。彼らにとってユダヤ人とは商人や高利貸であり、惨めな恰好をした人間、貪欲で常に怖がっている排他的な連中に過ぎなかった。そんなユダヤ人がいないと自分たちは生きていけないと聞くと彼らは笑ったが、それは惨めな行商人に過ぎないユダヤ人には何もできないと思っていたからであった。そこにキリスト教が登場してきて、「異教徒」とユダヤ人を同じ神が結び付けることになった。さまざまな部族や都市国家がユダヤ人と一緒になって世界を構成することになった。「異教徒」のキリスト教化が進んで「異教徒」とユダヤ人の距離は近くなったが、それでもキリスト教徒になった「異教徒」とユダヤ人のあいだには基本的な違いが残っていた。そんなときに事態を一変させたのがフランス革命であった。

フランス革命でユダヤ人に対する差別が廃止されたが、このとき「救世主 Messiah」の役割を演じたのはユダヤ人でなくフランス人であった。パウロが『ローマ人への手紙』で約束した「解放」が1789年に始まったの

である。

## 第21節 新しい「救済論」

1789年のフランス革命まで、ヨーロッパには天上の神に選ばれたユダヤ人と地上の仕事に熱心なキリスト教徒が共存していた。カトリック教会は、両者のバランスのうえに成り立っていたのである。「最後の審判」を待ち望むユダヤ人と、この地上で絶えざる進歩の実現を生きがいとするキリスト教徒が共存するなかで、カトリック教会は秩序維持に懸命であった。

ところが1789年に、フランスでカトリック教会が秩序維持に貢献できないことが証明された。すでにパリはカトリック教会の中心であることを止めており（スコラ学の中心であったパリ大学は機能を停止）、また新教徒ユグノー（フランスのカルバン派）の追放と貴族の権威失墜によってフランスは宗教的に再生不能な状態に陥っていた。1200～1750年にフランスはカトリック世界の中心地であったが、それが機能停止に陥ってしまったのである。イエズス会もカトリック教会の活力を回復させることはできなかった。宗教改革に対抗するために作られたこの組織は、もともと失敗を宿命づけられていたのである（反革命はつねに不毛なものである）。1761年にイエズス会はフランスから追放されるが、それはイエズス会が所詮は一時凌ぎに過ぎないことをフランス人が感じ取っていたからであった。フランスに啓蒙思想家が登場してきた理由を考えると、1750年頃にフランスの教会が置かれていた状況を忘れてはいけない。ボルテールが『ソルボンヌの終焉 Tombeau de la Sorbonne』（ソルボンヌにあったパリ大学は、かつて神学の中心地であった）をパンフレットにして公にする一方で、パリでは新教徒ユグノーが大きな影響力を振るっており、また無責任な貴族たちは無神論を吹聴して憚らなかった。教会やシナゴーク（ユダヤ教徒の祈りの場）を凌ぐ形で新しく「救済論」が登場してきた所以である。カトリック教会に問題を解決する能力は期待できなかったし、草臥れ切ったユダヤ人にみずから

の「解放」を実現する余力は残されていなかった。それに教会は布教が仕事であり、シナゴークは神を讃えるのが仕事であった。新しく登場してきたイエズス会も、フランス人の目から見れば教皇の支配体制を維持するための組織に過ぎず、また高利貸のユダヤ人にも高貴な使命感は期待できなかった。

キリスト教とユダヤ教に代わるものとしてフランス人が掲げたのが「人間愛 Humanism」であった。教会のあり方に反対し、ユダヤ人の「解放」を目指していたフランス革命による「救済論」がこれであった。フランス革命は、キリスト教やユダヤ教に代えて「人間愛」を追求することで教会とシナゴークを「解放」したのである。もちろん「人間愛」の実現には制度が必要であった。1000年もの間カトリック教会を1つに統合していたのも制度であった。教会会議を招集した皇帝、病人の世話をしたり学校を経営したりした修道院、教義の統一を維持した教皇、神学を発展させたパリ大学などである。ところがイエズス会がカトリック教会の再生に失敗したため、ヨーロッパを1つに統合するものがなくなってしまった。統合するための手段が教会とシナゴークの廃墟のあとに新しく登場してくることになった。

それが科学・新聞・鉄道・研究所・議会・国際連盟・十進法などであった。新しく登場してきた「救済論」も宗教の一種であり、そこでユダヤ人も参加することが可能であった。19世紀の「救済論」も他の時代に負けず劣らず宗教的であり、それを中心になって唱えていたのが「天才 man of genius」たちであった。

多くのフランス人は、この「救済論」の信者であった。たとえば1870年にドイツ軍がパリに迫っていたとき、ガストン＝パリ Gaston Paris はフランス人がドイツの科学を馬鹿にしていたことを批判して、つぎのように言っていた。「科学にとって重要なのは真実の追及であり、それが現実に対して如何なる結果を齎すかは重要でない。また真実の追及においては、国・信仰・道義のためといった動機で真実を歪めることは許されない。正

直であることが不可欠である。さらに真実の追及においては、民族の違いは問題にならない。真実が追及される場所は、すべての民族にとって共通の祖国となる」。

ガストン＝パリの信念は確固たるものであった。そしてドイツ側でも、モムゼン Theodor Mommsen が同じ信念を披露していた（『ラテン碑文集 Corpus Inscriptionum Latinarum』第3巻の序文、1872年12月28日付）。「この仕事に支援を賜った方々に感謝の意を表したい。しかし残念なことに、世界はさまざまな民族に分裂し、お互いに対立している。この仕事の実現を助けるはずの好意と友情が失われ、敵対心は民族どうしに留まらず、個人と個人の間まで広がっている。かつて異民族のあいだに存在していた好意と友情の復活を願っている者が何人いるかわからないし、たとえ何人かいるにしても、その者たちの名前を公表するのは躊躇われる。狭量で気まぐれな群衆は何をしでかすかわからないからである。それでも古典研究は研究者たちを、狭量な民族の枠を超えて人間という共通の場に引き入れる神聖な役割を演じている。その結果、違った民族に属する有能な研究者の協力が可能になるのである。この仕事は、そんな役割を演じてくれることを希望する。民族ごとに分裂した人々を1つに結び付けてくれることを希望する。『ラテン碑文集』の仕事は継続されるはずである。そうすれば、かつて存在していた科学者の共和国 *respublica litterarum* が復活してくるはずである」。

## 第22節 ドレヒュス事件

フランス人が革命の精神に忠実でいられたのは、彼らが「人間愛」を信じている間だけであった。1870年にプロイセン軍がパリに迫っていたとき、誰もフランス人を助けようとしなかった。そのときフランス人は「人間愛」（ティエール Louis Adolphe Thiers はこれを「ヨーロッパ」と呼んでいた）に対する信頼を失い、革命の精神にも忠実で無くなったのである。1919年にクレマンソーが「人間愛」は美しい言葉だが、「もっと美しいのはフ

ランスという国名である」と言ったとき、革命の精神は消えうせていた。その結果起きたことについては、詳しく論じることはしない。ここでは議論の対象をユダヤ人問題に限ることにする。ユダヤ人が同化を考えていたのは、キリスト教徒が「人間愛」を信じていたからであった。しかしその時ですらユダヤ人は個人として同化したのであって、民族として同化した訳ではなかった。ユダヤ人問題は、フランス人が考えていたほど簡単ではなかったのである。

カトリック教徒として育てられたフランス人パイエル Aimé Pallière が第一次世界大戦後に気づいたのは、ユダヤ教こそが自分の信じるべき宗教だということであった。フランス革命でユダヤ人は解放されていたが、パイエルは「未知の宗教 *Le sanctuaire inconnu*」（ユダヤ教）を再発見していたのである。同じく熱心なカトリック教徒であったフランス人エロー Ernest Hello が書いた『神の言葉 *Paroles de Dieu*』は、私が知るかぎり最もフランス的・カトリック的な内容の本である。プロワ Léon Bloy（フランスのニーチェと称されている人物）が無神論を捨てて熱心なカトリック教徒になったのは、このエローの影響だとされている。プロワは1890年代にフランスで吹き荒れた反ユダヤ主義を、ゲッターで見かけたユダヤ人の高利貸や中古商の存在で説明していたが、あるときパリでモーゼを槍で突き殺している聖ゲオルギウス（ジョージ）を描いた反ユダヤ主義のプラカードを見て、ユダヤ人の存在が自分たちにとって重要であることに気づくことになった。モーゼを槍で突き殺す聖ゲオルギウスが、キリスト教を排除する異教徒に思えたのである。そこで彼は『救いはユダヤ人からくる *Le Salut par les Juifs*』という本を書くことにした。ユダヤ人に期待すべきことを確信したプロワは、フランス革命が見落としていた問題に気づいたのである。ユダヤ人問題がユダヤ人解放だけでは解決しない宗教的な問題であることに彼は気づいたのである（後にドイツでローゼンツワイク Franz Rosenzweig が同じことを指摘することになる）。

そのころフランスはドレヒュス事件で揺れていた。普仏戦争でプロイセ

ンに敗北したフランスでは、1887年ころからブーランジェ Georges E.J.M. Boulanger 将軍を中心に反ユダヤ主義を掲げた右翼運動（対独報復を主張）が展開されていた。その結果起きたのがドレヒュス Alfred Dreyfus 事件である。アルザス出身のユダヤ人（参謀本部に勤務する大尉）が「スパイ容疑 service d'espionnage」で逮捕されて有罪判決を受けたが、そのとき「金に汚いユダヤ人 filthy Jew」に対する敵意が煽り立てられた。パリで取材していたオーストリア紙の特派員ヘルツル Theodor Herzl はこの事態に衝撃を受け、それまで主張していた同化論を捨てて『ユダヤ人国家 Der Judenstaat』を書き、シオニズム運動（パレスチナにユダヤ人国家を建設することを目指す運動）を開始することになる。

シオニズム運動がフランスのユダヤ人解放政策の限界を示すことになった。解放政策がフランスで導入されたとき、まだ同化論は登場していなかった。つまり解放政策は、ユダヤ人の都合と無関係にジャコバン派が導入した政策だったのである。ユダヤ人解放はフランス人の「人間愛」からくる政策であって革命理念の実現に過ぎず、その点ではアメリカにおける奴隷解放と事情がよく似ている。ヘルツルは同化論を放棄できたが、フランスは「人権宣言」からユダヤ人だけを排除することはできなかった。それは革命の失敗を意味するからである。ドレヒュス事件は革命の成否を問うという深刻な意味を持っていた。ドレヒュス個人の問題を越えて「人権宣言」の意味を問う事件となっていたのである。

すでにフランス革命から100年近い時間が経過していたが、革命前に影響力を持っていたカトリック教会や軍隊が影響力を持っていることが証明されたのである。革命の理念が浸透するには、100年では不十分であった。ドレヒュス事件が解決するのは1906年のことで、それまで多くの「作家たち écrivains」が「人間愛」の重要性を説くことになった。ゾラ Emile Zola が有名な「我、糾弾す J'accuse」という記事を発表したのは『ユマニテ Humanité』（人間愛）紙であった。アナトール＝フランス Anatole France も「人権同盟 Ligue des droits de l'homme et du citoyen」を率いてゾラに協力していた。

勝手に国名を筆名に使っていた者としては（アナトール＝フランスの本名はフランソワ＝アナトール＝ティボー Francois-Anatole Thibault）、フランス建国の理念を何としてでも取り返したかったのである。

## 第23節 「自国民中心主義 nationalism」とユダヤ人

「解放 émancipation」によってユダヤ人問題が解決したわけではなかった。ユダヤ人問題は、トルコのアルメニア人問題、カリフォルニア（アメリカ）の日系人問題、ニューイングランド（アメリカ北東部6州）のアイランド人問題などとは性格を異にしていた。キリスト教徒にとってユダヤ人は無くてはならない存在であった。キリスト教徒の信仰心が弱まり、彼らが希望や愛を信じられなくなったとき（よき知らせである「福音 Gospel」を広め、希望や愛によって世界を救うのがキリスト教徒に課せられた使命であった）、ユダヤ人が危機の肩代わりをするのである。

しかし「解放」がユダヤ人問題のあり方を変えてしまった。「解放」の事実を無視することは不可能であった。ユダヤ人の「解放」を実現したフランス革命が、同時に「自国民中心主義」も実現していたからである。「解放」の事実を無視することは、「自国民中心主義」も無視することを意味した。ユダヤ人の「解放」も「自国民中心主義」も、ともにフランス革命の成果だったからである。ユダヤ人もキリスト教徒も同じ人間であると宣言したのは、「フランス国民 シトワイヤン citoyen」が支配するフランスであった。カトリック教会の神父が影響力を失ったとき、ユダヤ人もその宗教的役割を終えたのである（キリストが実在していた事実を証言できたのはユダヤ人だけであった）。フランス革命が生み出した「人間愛」の理念は無視できないものになっていた。ギリシャ哲学とローマ法が復活し、異教徒（ギリシャ人・ローマ人）・キリスト教徒・ユダヤ教徒の違いは問題でなくなっていた。新しいヨーロッパが誕生したのである。

1815年にルイ18世はユダヤ人解放の事実を受け入れ、そうすること

でフランス革命の理念も受け入れていた。ルソー J.J. Rousseau・ブリアン Aristide Briand・ディドロー Denis Diderot・バルトゥー Jean Louis Barthou・ジェファソン Thomas Jefferson・ウイリソン Thomas Woodrow Wilson・ウルストンクラフト Mary Wollstonecraft・マクドナルド Ramsay MacDonald らは、フランス革命の理念である「人間愛」の洗礼を受けていた。だからこそ彼らは信条・信仰・人種・肌の色など問題でなく、すべての人間は同じだと考えたのである。「自国民中心主義」とは、その理念を広める使命を自覚することであった。かつてユダヤ人にしか認められていなかった「救済論」(のちに教会が異教徒に広めていくことになる)は、1789年に生まれた「自国民中心主義」のおかげで全ての国民に認められることになった。「救済を競い合うナショナリズム messianic nationalism」の登場である。

ユダヤ人解放を旗印にできたおかげで、どの「国民 nation」(民族)も特別な存在となることができた。「神に選ばれた民族 chosen people of God」であるユダヤ人を解放する使命を負うことで、1789年以降に誕生した国民(民族)は「単なる民族 natural, pagan groups called nations」とは違ったものになっていた。それは未来に何かを実現するための国民(民族)であって、ただ存在することに価値を見出すようなもので無くなっていた。ユダヤ人が関係していたおかげで、神との結びつきを失う心配が無くなったのである(ユダヤ人は神に選ばれた特別な民族であった)。民族(国民)特有の文学が、聖書のように宗教的意味を持つことになった。国民(民族)に固有の詩も特別な意味を持つことになった。世俗的な芸術作品にも宗教的な意味が認められるようになった。ユダヤ人だけが「救済論」を説く特別な国民(民族)でなくなったあと、それに代わって登場してきたのが「自国民中心主義」であった。19世紀の「自国民中心主義」は、国民(民族)固有の文学・芸術・科学を信仰の対象とする新しい宗教になったのである。ユダヤ人の「救済論」に代わるものとして新たに登場してきた「自国民中心主義」の「救済論」には、もはや聖職者も預言者も存在しなかったし、いかなる教会も教義も関係していなかったが、それでもキリスト教の考え方が深く関わって

いた。

近代ヨーロッパが直面している危機の原因は、「自国民中心主義」が明るい未来を約束する十字軍と化したことであった。たとえば「約束の地アメリカ promise of America」は、将来の豊かな生活を移民に約束していた。ここで重要なのは将来に実現するはずの夢が約束されていることである。将来の夢に希望が託されることになると、過去に犯した失敗や傷ついた国民(民族)の誇りは忘れ去ることができる。将来の夢に向かって全員が前進し始めるのである。ユダヤ人に代わって「救済論」を担うことになった「自国民中心主義」は、もはやユダヤ人の存在を必要としなくなっていた。

ユダヤ人もこの「自国民中心主義」の波に乗って、シオニズム(同化を諦めてユダヤ人国家の必要性を説く)を主張するようになった。将来の神による救済しか念頭になく、目の前の現実に無関心であったユダヤ人が、ヨーロッパの現実に屈したのである。ドイツでは反ユダヤ運動が猖獗を極めていたが、もはや多神教徒・キリスト教徒・ユダヤ人の違いは無意味になっていた。人種・宗教・国の違いは意味を失って、なにを選ぶかは個人の選択に任されることになった。

## 第24節 誰がフランスを統治するのか

第一次世界大戦のときフランス大統領であったポアンカレ Raymond Poincaré は、1912年に『フランスを統治するのは誰か Ce que demande la Cité』を書いて「平等 égalité」の問題を論じていた。有権者・各県・学生・都市・村の「平等」である。しかし、パリや植民地について彼はまったく言及していない。ところが歴史家のアブヌルによれば(アブヌルについては、第18節の冒頭を参照)、この年にフランスの「資本金 mobile capital」の4分の1は、パリに集中していた。フランス憲法を支えていたのは、パリに集っていた人間のエネルギーであった。パリには、カトリック教徒・ユダヤ人・自由主義者が集まっていた。地方出身者もパリに集まっていた。ポーラン

ド人・イタリア人・ドイツ人・フランス人が顔を合わせたのもパリであった。かつて革命で戦った者と、革命後に登場してきた「天才」が遭遇したのもパリであった。「これまでと同じように、パリにはフランス中の英知が集うことになるだろう」(クレマンソー)。

パリこそがフランスの本当の主権者であった。パリが主権者であることなど憲法のどこにも書かれていなかったが、だからこそパリの重要性には注目する必要がある。パリがフランスの都市のなかの都市であったのは何故か。それは「サロン salon」と称された有名人の集りのお陰であった。

スタンダール Stendhal (本名アンリ・ベール Henri Beyle) が『アンリ・ブリュラルの生涯 Vie de Henri Brulard』で、パリのサロンについてこう書いている。「親愛なる従弟へ。もし有名になりたければ、少なくとも20人の味方を確保すべきである。これはと思うサロンを選んで、会合があるときは必ず出席するように。そこで誰に対しても愛想よく振る舞うように努めれば(少なくとも礼儀正しくするようにすれば)、それなりの人物と認めもらえるはずである。2,3のサロンで好意的に受け入れてもらえるようになれば、女性の受けも良くなるというものである。…10年も頑張ればサロンで立身出世の機会に恵まれるはずである。大切なのは必ず参加すること」。

この忠告は、18世紀の初めにボルテールがサロンで成功を取ったときと同じであった。「過激な才女ども précieuses radicales」と呼ばれていたドレヒュスの支持者たちもサロンに通っていたし、フランスの文学界で最後の巨匠と見なされていたプルースト Marcel Proust も熱心にサロンに通っていた。プルーストの伝記を書いたピエール＝カン Leon Pierre-Quint によれば、プルーストが通ったのはポリニャック公爵夫人 Princesse Edmond de Polignac の音楽サロン、画家マドレーヌ・ルメール Madeleine Lemaire のサロン、オーベルノン夫人 Madame Aubernon (さらに姪のドフィアビル夫人 Madame de Vierville) のサロン、ドルーアン夫人 Madame de Lyones のサロン、オンビル伯爵 Count d'Haussonville のサロン、マチルド皇妃 Princesse Mathilde Napoléon のサロン、ストロース＝ビゼー夫人 Madame Strauss-Bizet のサロ

ンの7つであった。とくに「プルーストに大きな影響を与えたのは où il se forma véritablement」,最後のストロース＝ビゼー夫人のサロンであった。これらのサロンは、フランスの芸術家や政治家を輩出する上で大切な役割を果たしていた。「サロンには、たえず新しい人間がやって来た。コネさえあれば、だれでもサロンに参加することができた。サロンに参加する回数が増えれば増えるだけ、その人物の評価は高くなったし、サロンに参加できない者は無価値であった。どこかのサロンに参加できて初めて、その存在が認められたのである。どのサロンにも好きなときに参加できる者こそ理想的とされた」(プルースト)。

フランスでは、だれもが平等な投票権を認められていた。しかし候補者がいなければ平等な投票権も無意味である。アメリカの候補者は「地域の有力者 boss」が選んだり、「地域集会 convention」で選ばれたりしていたが、フランスで候補者を選んでいったのはサロンであった。かつて貴族が持っていた候補者選びの機能を、サロンが引き継いでいたのである。

革命後のフランスの政界では、「貴族」という言葉はタブーであった。「貴族」に代わって登場してきたのが「エリート Elite de coeur et de génie」とか「才覚の持ち主 les privilégiés de l'esprit」であった。それを選ぶ権利は女性のものであった。フランスは永く女性に投票権を認めてこなかったが、彼女たちはサロンで候補者を選んでいたのである。この女性の権利は憲法にないものであったが、それが政府の交代を可能にしていた。信じられないほど頻繁に内閣が入れ替わることになったのも、その結果である。1人のリーダーを選ぶのではなく、「エリート」ないしは「才覚の持ち主」がリーダーをたえず交代させるというのがフランス流のやり方であった。パリのサロンがベルサイユの王宮に取って代わることができたのも、サロンを支配していた御婦人たちが「エリート」や「才覚の持ち主」を選んでいたのである。つまりフランスの政治は憲法だけでは説明できないのである。

フランスには、アメリカのように議会被支配する「地域の有力者」はいなかった。特定の候補者を選挙区に押し付けるような「地域の有力者」も

いなかった。議会には小さな政党が数多く存在し、候補者はたえず所属政党を変えていた。政党が候補者に規律を強制することは不可能であった。イギリスと違って、フランスでは政治的な「裏切り行為 trahison」に悪い意味はなかった。政治的な駆け引きの道具として当然視されていたのである。タレーラン Charles Maurice de Talleyrand-Périgord やフーシェ Joseph Fouché のような変節漢の経歴が明らかにしているように、全員が「平等 égalité」とされた革命後のフランスでは、政治的な都合で忠誠の対象が次々と変わっていった。昨日の敵は今日の友という訳である。フランスほど多くの指導者が短期間のうちに交代した国は他にない。1人の「才覚の持ち主」が数週間あるいは数ヶ月のあいだ政権を握り、そのあとでもっと影響力のある者がこれに取って代わるのである。政治制度はつねに「変化の可能性 opportunity for change」を秘めていた。フランスでは、主役はサロンを主宰する女性であった。議会に匹敵するほど大きな影響力をサロンが持った国がフランス以外にあったであろうか。『パ＝ド＝カレー速報 Le Télégramme du Pas-de-Calais』という地方紙で、つぎのような文章を見たことがある。「政治交渉の場は議会の廊下であるとは限らない」。

「フランスの議会 Chambre des Députés」と「イギリスの議会 Parliament」は別物である。イギリスで「フランスの議会」に相当するものを探すとすれば、投票日の選挙区ということになろうか。イギリス人が情熱を傾けるのは選挙であって議会ではない。ところがフランス人が情熱を傾けるのは議会なのである。とくに「議場 galerie」は、議会制度ができた当初から議員が国民に自己アピールする大切な場になっていた。革命後の「国民議会 Assemblée nationale」で傍聴人を排除する動議が提出されたとき、ある議員はつぎのように言って反対した。「国民を議場から排除しようなどとよくも言えたものだ。彼らこそ主人公なのだ」(John Simpson Penman, The Irresistible Movement of Democracy, New York, 1923, p. 291)。

フランスでは、議会を解散することなど考えられない。イギリスでは国民の支持を得るために議会を解散するのは当たり前だと考えられている

が、フランスで議会が国民の支持を得ていないなどと言えば、それは議会を侮辱することを意味した。フランスの議会は、議員が国民に自分をアピールするための「市場 foire sur la place」(ロマン・ロラン『ジャン・クリストフ』第10巻)なのである。したがって解散によって傷ついた議会の名誉は癒されることがない。その違いはディケンズ Charles Dickens とユゴー Victor Hugo の違いに例えることができる。同じように社会問題の解決を訴えていても、ディケンズが悲惨な現実をただ事実として描写しているのに対して、ユゴーは主人公の置かれた悲惨な現実(大陪審は起訴するか否か)に期待している。イギリスの議員は選挙民の要求をゲーム感覚で受け止めているのに対して、フランスの議員は選挙民の要求を深刻に受け止めている。またイギリスの議会は、いわば大陪審である(大陪審は起訴するか否かだけを判断する。小陪審のように有罪か否かは判断しない)。議員は議案として採用するか否かを冷静に討議するだけである。ところがフランスの議員は討議するより、いかに国民に議案をアピールするかを考える。

1835年にロシアの皇女がフランス議会の議員ベリエ Pierre Antoine Berryer に、政府が提案してきた議案についてどう思うか尋ねたことがあった。彼は答えたものである。「原則として賛成だが、立場上反対せざるを得ないので、採決のときは欠席することにした」。また七月王政は長続きすると思うかと尋ねられると、長続きするとは思わないとも答えている。では共和制になるのかと尋ねられると、それも「ない」と答えていて、アンリ5世(1830年の七月革命で王座を追われたシャルル10世の孫。七月革命後はイギリスに亡命していた)の復位も、あり得ないと答えていた。では、いったい何があり得ることなのかと問い返されると、「何も。フランスでは何事も長続きしないからだ」と答えていた。変化して止まないフランス議会の姿がここにある。

1914年の8月から9月にかけて前線でフランス軍の敗北と後退が続き、フランスが勝利しそうなことが判ったとき、フランスでは「国 l'Etat」に代わって戦線を支えるのは「我々 Société」でしかないという声が上が

た。1911年にフランスの将来を絶望視していたドレシ Francis Delaisi は、1914年に上がった声について『今次の大戦：戦うか、それとも国王を復位させるか La Guerre qui Vient : Faites la guerre ou faites un roi』という著書のなかで触れている。戦争に勝つためには国王を復位させるしかないというのが彼の意見であった。もしフランスが敗北するようなことがあれば、それは10万家族で構成されているフランスのブルジョア階級の責任だと言うのである。革命の後登場してきた統治制度は、戦争の試練に直面することになった。

フランスが民主制を維持するためには、パリのサロンが「才覚 esrit」に恵まれた人物を見つけ出してくる必要があった。パリが王家の伝統を引き継いでいたのである。この伝統についてルイ14世が『回想録』で、つぎのようなことを言っている。「場合によっては偶然に賭けることも必要である。知性自身が知性を無視して、本能的な閃きに賭けるべきだと命じるのである。反撃すべきか降伏すべきかを、知性だけで判断することが不可能な場合もある。判断の基準を教えてくれる本などないし、いくら経験を重ねたところで的確な判断ができない場合もある。危機に直面したとき、しばしば才覚が何をすべきか教えてくれる」。

この考え方を引き継いだのがパリであった。パリは「才覚」に溢れたエリート（新しい王家とでも言うべきもの）を選別して、国家の運営を任せることにした。選別は組織的に行われることもあれば偶然に任せることもあったし、本能的な選択に任せることもあった。このような非合理的な驚きの閃きがあったからこそ、デカルトやボルテールの主張したような完璧な秩序も維持が可能だったのである。

フランス人は統治に必要な「環境 milieu」を準備するのが得意であった。統治そのものは得意でなかったかもしれないが、統治に必要な「環境」を準備するのは得意であった。いまでは、それがフランス人だけでは無くなっている。どの国でも支配層は統治に必要な「環境」を整える必要に迫られている。革命を準備するには、まず準備する場所を用意し、国民に革命の

必要性を説き、革命を実行する組織を作らなければならない。ボルシェビキ政権が冷酷な政権になったのは、支配層が亡命地で革命の準備をせざるを得なかったためである。スイス・ドイツ・フランスなどの外国、あるいは牢獄やシベリアの流刑地で革命の準備をせざるを得なかったからである。ロシア革命は外から持ち込まれた革命であった。

ところがフランス革命は、外から持ち込まれた革命ではなかった。パリから全国に広まっていった革命であった。パリのサロンが準備し、パリのサロンが先導した革命であった。パリの「国民」がフランスの貴族を征服したのである。ロワール川やセーヌ川沿いにあった貴族の館は、パリの「国民」の別荘に変えられた。「祖国 patrie」が「地方(邦) pays」を征服し、貴族の伝統がフランス人の間に広まったのである。

革命まで「地方分権 régionalisme」を象徴していたのは司教であった。革命後、彼らはパリの政府管理下に置かれることになったが、そのとき使われた方法を見れば、パリがフランスをどう統制していたかを知ることができる。

ナポレオン1世はローマ教皇庁と「政教協約 concordate」を締結し、ローマ教皇がフランスの教会に対して伝達する命令は全て、フランス政府が検閲して許可するか否かを決められることになった(1802年の政教協約、第1～3条)。教皇はフランス政府が許可しなければフランスの信者に命令を下さなくなったのである。公会議もフランス政府の許可がなければ、決定をフランスで施行することができなくなった。

ドレヒュス事件でフランスが揺れていたとき、フランス政府は反教会政策を採用していた。修道院は解散させられ、教区教会も廃止された。カトリック教会の復権が実現するのは第一次世界大戦のときで、聖職者たちが戦争に協力したからであった。またフリーメーソンの会員でもあった政治家のブリアン Aristide Briand は、ふたたび影響力を持ち始めた「新しいカトリック教会 neo-Catholicism」を無視できないと考えるようになっていた。教会を攻撃して殉教者を出すと、かえって教会の影響力を強めるからであ

る。教会は廃止するのではなく、政府の管理下に置く方が賢明であった。そこで教皇大使 nuncio にフランスの教会を代表させることにした（信者は反対であった）。教皇大使がフランス政府に代わって聖職者の任命権を行使することになった。政府が推薦する者が司教に任命されることになったのである。フランスの司教は重要な問題に関して、決定権を失ったのである。こうしてフランスの司教区（言い換えれば「地方（邦） pays」）は、教会の国有化によって完全に独立性を失うことになった。「アクション・フランセーズ Action Francaise」が反カトリック的な団体であると教皇に宣告させるため、フランス政府は司教たちにそのことを請願させている。教皇大使が司教たちに強制して署名させたが、自分の署名を大使が偽造したと申し立てる司教が1人いた。それでも「アクション・フランセーズ」は反カトリック的な団体とされることになった（Mercure de France, May 1932）。

こうしたやり方でフリーメーソンがカトリック教会を統制できたのは、フランスだけであった。フランスの統治制度を外国が真似るのは簡単でない。

## 第25節 アダムとイブ：死を招く男女の愛

ベルサイユのトリアノン宮殿で王妃マリー＝アントワネットがロジェス（『セビリアの理髪師』で理髪師のフィガロに助けられて貴族と結婚する金持ちの娘）の役を演じていたとき（同じ日の夕刻、パリでバスチユ牢獄が攻撃された）、これを見ていたポーマルシェは、すでにベルサイユに代わってパリがフランスの中心になっており、「国民」が貴族を凌駕していることを見て取っていた。しかし他のヨーロッパ諸国にとって、フランスの出来事はショックであった。イギリスにはバイロン George Byron やシェリー Mary Shelly が登場していて、イギリスでも波風が立ち始めていた。バイロンやシェリーは婚姻関係のない男女の性愛や自殺の自由などを提唱して、キリスト教の教えに反旗を翻し始めていた。保守的なイギリスにも墮落天使ル

シファー（ミルトン John Milton の『失樂園』では悪魔として登場し、エデンの園で蛇を体内から操ってイブを騙し、知恵の木の実を食べさせて楽園追放の原因を作る）が足を踏み入れたのである。

フランスでは、「才覚任せ esprit libre」の奇行や「異能の持ち主・天才 génie」の勝手気ままな振る舞いも、それが文学者なら許された。また「平等 égalité」の実現にフランス人は「情熱 passion」を燃やす。正妻と愛人の間に、いかなる差別もあってはならないのである。もしフランス人から「情熱」を取り去ったら、フランス人はフランス人でなくなってしまう。フランス文学界のナポレオンとも言うべきバルザック Honoré de Balzac が書いた『人間喜劇 La comédie humaine』は、人間の愛・欲望・野望・嫉妬が招いた悲劇を描いていた。バルザックは人間の隠された姿を読み解き、社会を覆い隠していたベールを引き剥がすのである。社会を動かしているのは、人間の偉大さと惨めさなのである（第一次世界大戦のときの首相で、ベルサイユ講和会議でフランス代表だったクレマンソーが政界引退後に書いた回想録のタイトルも、『大戦の勝利が齎した偉大さと惨めさ Grandeurs et Misères d'une Victoire』であった）。バルザックが描いたのは、自由と進歩のために何千人ものフランス人が払った犠牲であった。作家自身もそんな犠牲者の1人であった。そのころ批評家として活躍していたサント＝ブーブ Charles-Augustin Sainte-Beuve は、作家たちが置かれていた状況について、つぎのように書いている。「かつて作家たちは、自身の知的な部分だけを犠牲にしていれば済んだ。ところが今では、作家たちは自分の全てを犠牲にしなければならない」。バルザックも、「自分が生きている時代のことを全て描き切るつもりだ」と書いている。

そのために作家は時勢に逆らい、死の危険すら覚悟する必要があった。しかも時代は、作家の個人的な情熱と公的な責務を区別しなくなっていた。個人的な情熱と公的な責務が一緒になったおかげで、作家は破滅を覚悟しなければならなくなったのである。このフランス特有の「一元主義 monism」は、19世紀が実現したヨーロッパの大きな成果である。ピエー

ル＝ロチ Pierre Loti の伝記を書いたコ克蘭 L. Coquelin によれば、「ピエール＝ロチは老いを止める方法として文学を選んだ」のである。「人が働くのは死を克服するためである」というのがピエール＝ロチの持論であった。「彼が小説を書いたのも、短い人生を長く引き伸ばすためであった。あとからもう一度、過去を経験し直すことで生きる時間を延長するためであった」。知的な作業によって不死を実現することを自らの義務と考えていた作家は、不死を実現する努力のなかで精神の閃きを獲得していたのである。

バルザック・ゾラ・ブルーストらは、人間社会の生々しい現実を拡大して見せてくれる拡大鏡であった。彼らが「永遠の命 immortality」を得たのは、彼らが社会を拡大して映し出すレンズだったからである。彼らは理想を信じなくなり、情熱に対する関心(バルザック)や悪徳に対する強い関心(ゾラ)、犯罪に対する強い関心(ブルースト)を強めていった。それに1789年から1918年までの間、個人が情熱を燃やす対象を亡くしていた現実には作家たちもどうすることができなかった。たしかにフランス革命は、情熱なしで成就できるものではなかった。人間が流す涙や人間の悲惨な状況、それでも失われることのない人間の信仰は、フランスに限らずどこにでも存在するものである。そのことをカトリック作家らしく作品にしてみせたエロウ Ernest Hello は、それでも自分の作品をつぎのような言葉で締め括っている。同じ言葉をイギリス人作家やロシア人作家が書くことはあっても、そんな言葉で宗教的な内容の本を締め括ることはしないであろう。神とは何かという問いに対する答えとして、彼はこう書いている。「神とは燃え上がる炎である。アーメン、アーメン。Dieu qui est feu brûlant, Amen, Amen」。

情熱はやがて消えうせる。「異能の持ち主・天才 génie」も人間である。ユゴーやゾラの他に、化学者であったベルトロ Marcellin Berthelot がパンテオン宮殿(「万神殿」を意味し、「異能の持ち主・天才」たちが葬られている)に葬られているが、葬られているのは彼らだけではない。ベルトロ夫人も夫の脇に葬られているが、それは相思相愛のあまり彼女の死後すぐに夫も死んだからであった(自殺したと考えられている)。

情熱的な愛はフランスで高く評価される。犯罪すら愛ゆえに許される。第一次世界大戦のとき対独協調を主張したカイヨー Joseph Caillaux を批判する論陣を『フィガロ』紙の編集長カルメット Gaston Calmette が張ったとき(財務の専門家であったカイヨーは、当時タブーであった所得税の導入を主張して資本家たちの反感を買っていた)、カイヨー夫人がカルメットを射殺したことがあった。その裁判で陪審員は彼女に無罪を言い渡している。

第1世代のバルザックが活躍したのはナポレオン1世が退位した後のことだが、第2世代のゾラが活躍したのはナポレオン3世が退位した後であった。バルザックの『人間喜劇』に対抗してゾラが書いた『ルーゴン家とマッカール家 Les Rougon-Marquart』20巻は、性衝動と強欲に駆られた人間の悲惨な生き様を描いている。

バルザックやゾラの後(あ)に登場してるブルーストは、いわば第3世代とも言うべき存在であった。彼は『失われた時を求めて』第15巻で男同士の性愛や女同士の性愛を描いており、そこに自然な人間の再生産の姿はない。ブルーストによれば、「男女間の性愛は苦痛でしかない J'appelle ici amour une torture réciproque」のである。

バルザックやゾラと同じように、ブルーストも悪趣味だとされている。しかし、敢えて悪趣味を銜う勇気がフランスの文学界では評価されるのである。ブルーストも、ソドムとゴモラの世界(『創世記』に登場して来る悪徳の街)を取り上げた理由を友人のルイ＝ド＝ロベール Louis de Robert に、つぎのように説明している。「私が重視しているのは事実であって、それが気に入るか否かは問題でない。サディストの好意を獲得したからといって、それで私が経験した事実が無くなるわけではない。それに個人的な好みで選んでいるわけでもない」。

## 第26節 「理性 reason」の落とし穴

読み書き能力は「理性」とか「才覚 esprit」には不可欠の能力である。

読み書き能力がないと映像化されたものしか認識できず、迷信に囚われ勝ちになる。自立した個人であるためには読み書き能力が不可欠であり、読み書き能力がないと目隠しをされたのも同然でになる。自分で判断して、その判断に責任を負える個人ではなくなってしまう。読み書き能力がない人間も「聖体の祝日 Corpus Christi」に聖体行列に加わったり、金の婚姻指輪を詰めたり、知り合いの女性に出会えば帽子を取って挨拶するかもしれないが、それは古い習慣に従っているだけである。なぜなら、もともと人間は伝統的な形式やシンボルを妄信するからである。「理性」があれば、そんなシンボルの背後に隠されているものを見破ることができる。迷信を受け入れなくなり、文盲の人間によく見られる激情とも無縁になれるし、嘘や御伽噺に騙されることも無くなる。

これが近代精神の神髄であり、1918年までの考え方であった。それは旧い制度を壊すことしか考えていなかったフランス革命の意図しない産物であった。革命家たちは馬鹿正直に、迷信や御伽噺は「旧体制」のものだと信じ切っていたのである。

特権や偏見を排除していく過程で、革命家たちは自分たちが一点の曇りもない真実を手に入れたと信じていた。自分たちが発見した自然法則は実験で確かめることができるし、伝統的な慣習などとは無縁だと信じていた。そこで伝統的な慣習に代わって「流行 fashion」が影響力を振るうことになった。「理性」が、この「流行」に惑わされることになったのである。「理性」と雖も感情とは無縁ではない。奇跡や魔術に騙されることはないにしても、人間のすることである。勘違いで判断を誤ることもあり得る。迷信家なら占い師のところに行くし、どこか痛いところがあれば医者のところに行く。我々には生来の好奇心があって、そのお陰で哲学者も他者に影響を与えることができる。「理性」が抱えている弱点は、この好奇心が常に新しいものを要求するところから来る。新しもの好きということでは、新聞がそのよい例である。ニュースということにすれば、だれもが飛び付いてくる。新しい事実や新しいアイデアに出会すと、我々は想像力を掻き立てられる。

優れたアイデアや思想は、そのお陰で形にすることができる。いくら影響を与えようと努力しても、感覚が反応しなければ努力も無駄に終わる。無関心とは無反応の状態をいう。寒くもなく暑くもないと体も反応しない。「喜び plaisir」や誇りを感じないと、我々は感動しない。感動こそが我々を突き動かすのである。我々は外部からの影響を感覚で受け止め、感動することで行動を起こすのである。

外部からの影響が必要だということでは、「理性」も同じである。外部から刺激を与えなければ「理性」も働かない。「理性」もそれが新しいことか、それとも慣れ親しんだことかを見極め、新しいことや初めて耳にすることであれば積極的に反応する。19世紀になって、旧い伝統的な真理より最新のセンセーショナルなニュースが重視されるようになった。

旧い伝統的な真理も、最新のニュースということで新聞に掲載されると「理性」も歓迎する。「理性の時代 Age of Reason」になって、真理もニュースとして受け入れられるようになった。「宗教の時代 Age of Revelation」に代わって「理性の時代」が始まり、「啓蒙思想 Enlightenment」の時代が始まったのである。「理性」にとって、宗教が問題にする「永遠 eternity」など理解不能である。伝統・旧体制・慣習や、十進法に従わない旧い度量衡など軽蔑の対象でしかない。「理性」は明晰さと正確さを好む。しかし、ニュースにならないものは価値を認めない。注目の的にならないものは「理性」も無視する。19世紀になると、いかなる真実も最新のニュースということで注目されない限り、「理性」は無視するようになった。

注目の的であり続けるためには、「理性」も「ビーナス Venuses」(性愛)の協力が必要であった。「ビーナス」(性愛)の協力なしには「理性」も不妊を宿命づけられることになる。我々の世界が存続できるのは、性愛のおかげである。「理性の時代」にエロチシズムが流行した理由もこれであった。エロチシズムのお陰で、偉大な芸術が19世紀に花咲くことになった。19世紀の芸術が他の時代の芸術(たとえばルネサンスの芸術)と違うことを忘れてはいけない。19世紀はフランスの世紀であった。そこでは「理

性」が全てであった。感覚の世界にも「理性」が入り込んできたのである。「才覚の持ち主」が経験した感覚による発見も、「理性」の論理が支配していた。「理性」崇拝に取りつかれていた芸術家たちには、同じ血が流れていた。彼らを感じた興奮や「喜び」、好奇心などは芸術家個人のものではなく、個人を超えた大きな時代の流れであった（シェニエ André-Marie de Chénier に始まりアナトール＝フランスに至るフランス詩の流れ、ベートーベンに始まりヨハン＝シュトラウスに至るドイツ音楽の流れ、バイロンに始まりワイルドに至るイギリス詩の流れ、レオバルディ Giacomo Leopardi からダヌンツィオ Gabriele d'Annunzio に至るイタリア詩の流れなど）。たとえ死を齎すような流れであっても、それは芸術のために不可欠なものであった。

19世紀に芸術の世界で試みられた実験の背後には、人間の感覚も法則に支配されているはずだという確信があった。つまり「喜び」を感じるからこそ、我々は情熱を發揮できるのである。ところが当時は「喜び」を感じることは「善くない mean」ことだとされていた。ただし芸術家の場合は別で、芸術家の場合は「高貴なこと ennobled」とされていた。4～5世代ものあいだ作家・画家・作曲家たちは、「喜び」を感じたり興奮したりして「知的色情狂 érotomanie cérébrale」と化していたのである。それは「生命力 deity of life」の現れとされ、神聖視されていた。「生命力」こそがすべてであり、芸術家は「喜び」を感じるためなら道徳など無視して善いとされていた。フランスで最もカトリック的な作家であったバルベール＝ドールビー Jules Barbey d'Aureville は、1877年に挫折感で途方に暮れていた過激なカトリック作家ブロア Léon Bloy に宛てて、つぎのような内容の手紙を送っていた。「道徳は我々にやりたくないことを無理にやらせるが、芸術や文学の世界では逆である。喜びさえ感じるなら何をしても許される」。その「喜び」は個人のものではないので、「善くない mean」とは考えられなかった。個人が感じる「喜び」も、人類共通の経験ということになれば人類全体の「喜び」となる。19世紀の「人間中心主義 humanism」は、けっして自由奔放や「コスモポリタン déracinés」を容認することは意味しなかつ

たし、ただ恰好を付けるために古代ギリシャを賞賛することは意味しなかった。芸術家たちは、あらゆる機会を利用して自分自身、つまり人間を知ろうとしていたのである。

19世紀の芸術家たちは、もはや感覚によって知り得た事実の絶対性を信じなくなっていた。芸術が持つ価値も信じなくなっていた。そのくせ「喜び」を追い求めるためには、死ぬことも病に罹ることも、感覚が麻痺したり自身の破滅を招くことも恐れなかった。「ペストが流行したとき、すべての動物が死に絶えたわけではなかったが、死ななかった動物も何らかの影響を受けていた Ils ne mouraient pas tous, mais tous étaient frappés」。またボードレール Charles Baudelaire も『悪の華』で「喜びと恐怖で感情を高ぶらせた J'ai cultivé ma hystérie vec jouissance et terreur」と書いている。ユゴー Victor Hugo は『悪の華』を発表したボードレールに宛てた手紙で、「あなたは新しい戦慄を呼び覚ました Vous créez un frisson nouveau」と書いていた。詩人たちは詩作によって我々すべてを包含する「生命力」に参画していたのである。「生命力」こそが19世紀の「個人 individualism」を包括するものであった。それこそが無数の「戦慄 frisson」が共有する「聖なるもの deity」であった。もしそれが無ければ、物事の解体に情熱を傾ける「理性」が「個人同士を結び付けるという考え方 conception of unity」すら破壊していた筈である。

「理性」の勝利の陰には、「栄光と悲惨 granders et misères」が共存していた。抽象的で、目のまえの現実と無縁な「理性」は、「注目的 sensation」となっている現実しか支配できなかつた。

「理性」は、ある意味で手前勝手である。現実の世界も事実も、そうそう頻繁に変化する訳ではない。そこで新しさを追い求めるに際して、我々は大きな困難に直面することになる。「理性」は、つねに新しく「注目的」になるような現実を要求する。この「理性」の手前勝手のお陰で、我々の考え方から多様性が失われてしまうことになった。選択肢が1つしかないとしたら、我々はそれを受け入れるしかない。19世紀に登場してきた近代的な世界では、ニュースや「注目的」の形で提供されるもの以外は無

視されたのである。かつて文明・文化は長い歴史を持ち、多様で目に見える具体的なものであった。ところが「理性」のお陰で、歴史や多様性が無視されることになった。文明・文化は単細胞的なものになってしまった。いまや文明・文化は目に見える具体的なものでなくなり、その長い歴史は失われてしまった。「理性」のおかげで我々は短期的な視野でしか現実を見なくなった。せいぜい200年もの長期的視野があればよい方である。たえず「新しさ novelty」が要求されるため、世代(30年)単位でしか物事が考えられなくなってしまった。我々は様々な感覚器官によって現実を認識するが、違った感覚器官が違った側面を捉えてくるからこそ現実の多様性を認識することが可能になる。ところが「新しさだけを評価する考え方 curiosity」しか無い場合、新しいか否かで全てが決まってしまう。評価されるのは評判の映画俳優とか短期間で完成する高層ビルであって、長い時間を掛けて獲得される知恵の類とか、長い時間を掛けて成長する森林などは評価されなくなる。ニュースだけに依存して形成された世界観は視野が狭い。飢餓・畏敬の念・忍耐・信仰などを視野に収めないと、現実の多様性を認識することはできない。

ここ150年間、新しい情報しか価値を認められて来なかった。しかも、それは「計画的に行われていた organized」。19世紀に実現した発明や発見は、前例を見ない19世紀特有の方法で行われていた。それを実現したのがフランス革命であった。もはや以前のように、偶然に任せて発明や発見は行われなくなっていたのである。

新しい発明や発見は広く宣伝・賞賛された。しかし「秘跡 sacrament」には「迷信 superstition」が付き物である。実験室で実現された「奇跡 miracles」は過大に評価され、「新しさだけを評価する考え方」によって、伝統的な家族や信仰のあり方が破壊されてしまった。新聞・ラジオ・報道写真・映画などの影響で、人々が伝統的に持っていた正常な現実感覚が失われていったのである。これこそが19世紀が齎した成果であった。多くの家庭から平穏な生活が奪われ、大衆は真実よりも新しさを求めるように

なった。しかし、新しいものが必ずしも正しいとは限らない。なにが正しいかは、人類が地球上に登場する以前から決まっていたはずである(なにが正しいかを決めるのは絶対神であり、その絶対神がこの世界を創造し人間を創造した)。独創的な思想家なら、そんなことは百も承知のはずである。

私は、かつてアメリカで牧師の叙階式(任命式)に立ち会ったことがあった。そのとき気づいたのだが、誰も「キリスト(つまり絶対神)が世界の創造以前から存在していた事実 Pre-existence of Christ」を気にしていないということであった。彼らは全員がよき信者であり、フランス革命の申し子であり、自由の信奉者であった。また、何が正しいかは世界創造以前に決まっていることも知っていた。しかし19世紀という「進歩の世紀 the century of progress」は、世界の創造以前にキリスト(絶対神)が存在していたことを忘れさせていた。何が正しいかを知るためには、「注目すべきニュース sensational news」が「夜明けの露 morning dew」のように無くなる必要があった。たしかに「夜明けの露」は清々しい。また「夜明けの露」は「明けの明星 morning star」でもある。「明けの明星」を古代の人々は「ルシファー」(傲慢さゆえに天から追放された墮落天使であり悪魔でもある)と呼んでいたが、その「ルシファー」が齎してくれるという幸運には限界があった。なぜなら、人間の生涯には限界があったからである。しかし個人の生涯に限界があっても、人類の存続は可能である。「ルシファー」は、その傲慢さゆえに天界から追放されたが、19世紀の人間も傲慢なことに、個人の生涯を超えて人類が存続できる事実を無視していたのである。「注目すべきニュース」を知らせる電報・電話・ラジオ以外の情報を無視し、人類が再生産される事実を無視した結果、19世紀に登場してきた近代は終焉を運命づけられることになった。

ロシア革命は、そんな自由と「理性」の時代を終わらせることを目指していた。「理性」の陰に隠されていたドアには、「最新のニュース Latest News」とか「注目すべき報告 Sensational Report」とかいった表札が懸けられていた。その部屋には、本当は大切な資料や食料が保管されていた筈な

のに、可笑<sup>おか</sup>しな表札のおかげで部屋の中身が誤解されることになった。その部屋には、「最新のニュース」や「注目すべき報告」しかないと誤解されることになった。「最新のニュース」や「注目すべき報告」では、本物と偽物の区別ができない。一時的に注目されているだけのものと、注目されないが長期的に重要な意味を持つものの違いが判らない。

フランス革命のおかげで、「変わる事 change」だけが重視されるようになった。その結果、世界大戦や革命の前兆に対する感覚が鈍らされてしまい、第一次世界大戦の勃発にヨーロッパ中が驚かされることになった。「理性の時代」のおかげで戦争の仕方が判らなくなり、戦争を終わらせる方法も判らなくなった。「理性一辺倒 Reason first」であったフランス革命のおかげで、「最新のニュース」だけが重視されるようになった。「人間らしい戦争の仕方 honest war」や「理に適った平和の実現 reasonable peace」のために、伝統や宗教を残すことをしなかったからである。「理性」は「激情 passions」を抑えることができなくなり、「飢えと人間愛 Hunger and Love」・「旧き良き伝統 Old Age and Tradition」の重要性が理解できなくなった。

これまで「理性の時代」が抱えていた問題は、経済的なものだと考えられていた。マルクスは「自由主義体制 liberalism」が抱えている問題が「資本制経済 capitalism」であることを証明しようとした。ところが「自由主義者 liberals」が重視していたのは「理想 ideas」であって、物質的な利益ではなかった。「マルクス主義者 red intellectuals」ほど物質的な利益を軽視した連中はいない。しかし彼らは、自分たちが「知識人 intellectuals」として失格であったことに気づいていなかった。そんな「マルクス主義者」の欠点を指摘してみせたのが『聖職者の裏切り』(Julien Benda, La Trahison des Clercs, 1927)であった。ここで言う「聖職者」とは「知識人」を意味する。「理性」ばかりを重視した彼らは、フランス革命が抱えていた問題に気づいていなかったのである(ボルシェビキたちも例外ではない)。

## 第27節 パリの農民たち

かつて「光り輝いていた街 ville de la lumière」パリは、いまや暗黒に覆われてしまった。1931年にアラゴン Louis Aragon は『パリの農民たち Le Paysan de Paris(1926)』で、パリを「フランスの田舎 pays de France」と呼んでいた。この小説で彼は、エッフェル塔も街灯もないパリを描いていた。独立した個人は、やがて地球上から消えて無くなると彼は考えていた。彼に言わせれば、「個人が存在していた時代は終わった Les personnes ont fini leur temps sur la terre」のである。第一次世界大戦後のフランスでは、工場労働者や農業労働者が数を増やし、芸術家や外国人が数を減らすことになった。エッフェル塔の照明にしても「天才の閃き lightning flashes of genius」にしても、人間が作り出すものである。もしパリの発電所がストライキで発電を止めれば、フランスは散り散りばらばらになってしまうであろう。第一次世界大戦後(クレマンソーやポアンカレの時代)にフランスの出生率は急減し、しかも大戦で優れた人間は死に絶えてしまった(それはイギリスでもドイツでも同じ)。そこで、ふたたび「地方 pays」が見直されることになった。スペイン領バスクにおける分離運動に刺激されて、フランス領バスクも分離の動きを始めたし、ブルターニュ地方は独自性の主張を以前から続けていた。さらにアルザス＝ロレーヌ地方はスイス(ドイツ語圏)やドイツからの影響が強く、フランスへの帰属を好ましく思っていなかった。

ただ、こうした地方主義が大きな意味を持つようになるのは、もっと後のことである。フランス革命から約1世紀が経っていたが、革命後に始まったパリへの一極集中はまだ完了していなかった。植民地であったチュニジアやモロッコのおかげで、かえって革命前の地方主義が復活してきたようであった。しかし、フランスが担うべき普遍的な役割が忘れられることはなかった(とくにロシア革命後にロシアが主張し始めたボルシェビズムという普遍主義に対抗することが重要になる)。

## 第28節 フランスの個人主義 vs. イギリスの伝統主義

19世紀にフランスの個人主義に抵抗し、フランス人のやり方を受け入れようとしなかったのがイギリス人であった。バイロンがその作品に登場させた自由奔放な人物像がイギリスで物議を醸したことについては既に触れた通りだが、さらにシェリー Percy B. Shelly の裸の銅像がオックスフォード大学のユニバーシティーカレッジに建設されるに及んで、フランスの影響がイギリスにも及んできたかのようであった（「首相 Prime Minister」とか「リベラル Liberal」といったフランス語が英語に取り入れられたのも19世紀のことである）。

しかし、フランスからの影響がイギリスのあり方を変えてしまうことはなかった。フランスのように首都に一極集中することはなかったし、イギリスの緑一杯の古い領事館に三色旗が掲げられることもなかった。イギリス憲法が成文化されることもなく、相変わらず「非理性的な unreasonable」旧いままの形を維持していた。先祖以来の伝統に固執し、特権にしがみつき、先例に拘り、貴族であることを誇りとしていた（全てフランスでは革命によって放棄されたやり方であった）。いまでもイギリス人と同じアングロサクソン系のアメリカ人・オーストラリア人・ニュージーランド人も大切にしていることである。

「天才の閃き revelation of genius」や「情熱の迸り inundation of passion」がイギリスで評価されることはない。イギリスでは、フランスで「理性の時代」に採用されたやり方は不評で、先例や伝統的な権利・経験が重視されている。

次章でイギリス革命を論じることになるが、ここでアメリカがフランスのやり方とイギリスのやり方の中間を採用していることを指摘して置きたい。先例主義だけ、あるいは革新主義だけを採用することなく、また成文化されない慣習だけ、あるいは成文主義だけに拘ることもなく、経験だけ、あるいは「理性」だけに拘ることもないのがアメリカ人である。国によっ

て革命が作り出した特徴は違っており、それこそが人間の多様性の証拠でもある。

## 第6章 イギリス：ヨーロッパ世界の構成国

### 第1節 イギリス革命の特徴

果たして外国人がイギリス革命を論じることに意味があるのだろうか。我々がイギリスについて論じたところで、イギリス人に無視されるだけである。フランス人はフランスの問題をつねにヨーロッパ的な視野で考えるが、イギリス人はイギリスの問題をイギリス人だけのもの、それも育ちのよいイギリス人だけのものだと考えている。ビクトリア時代に新しく登場してきた中産階級にイギリス革命を解説したマコーレー Thomas B. Macaulay (名誉革命を賞賛し、そのときの国王ウイリアム3世とホイッグ党を高く評価) やガーディナー Samuel R. Gardiner (クロムエルと内乱時代の史料を集めてみせた) にしても、また王政復古後の宮廷の猥雑さを描いてみせた他の歴史家にしても、その念頭にあったのはイギリスだけであった。

そんなイギリス革命を外国の歴史家が説明する必要性が生じてきたのである。それはイギリス人のためでなく、ヨーロッパ的な枠組みに自らを適応して行かざるを得ない外国人のためである。外国人にとって、イギリス革命をヨーロッパ的な枠組みで説明することが必要になってきた。イギリスの歴史家や法制史家は、イギリス革命をイギリス独自のものと主張し、我々のヨーロッパに関する歴史学・政治学・経済学・法律学の教科書づくりを妨害してきた。その結果ドイツの歴史の教科書では、17世紀のヨーロッパ史に関する記述はイギリスについて2行だけで済ませているし、オックスフォード大学が編集した『ヨーロッパ史 Oxford European History』では、イギリスに関する叙述はゼロである。イギリスの歴史家にとって、まるでイギリスの教会・議会・帝国はこの世界に存在していなかった様である。イギリス人もヨーロッパ人と同様カトリック教会の普遍主義を経験しており、ヨーロッパ世界を経験しているはずである。それなのに彼らはそう考えない。彼らはヨーロッパ人のイギリス史観の方が間違っていると

主張する。彼らだけ特別なのである。その結果ヨーロッパ史を学ぶ学童たちは、イギリスの存在を忘れて間違ったヨーロッパ史観を持つことになる。この間違ったイギリス史観は改められる必要がある。イギリス人もキリスト教徒であり、ヨーロッパ人であり、いくら独自性を主張しようとも、イギリスがヨーロッパの一部であることに変わりはないのである。

イギリス人は、イギリス革命を3つの側面(理想的・物質的・現実的な側面)に分けて考えようとする。まず名誉革命を誇るべき理想的なものとする。スチュアート王朝の排除によって、それまで見えていなかった歴史の本質が明らかにされたと考えている。つぎに内戦時代の史料を、機械的に収集・公表する作業を熱心に行っている(いまも続けている作業である)。とくにヨーロッパ大陸の歴史家がイギリス人によくある「自己欺瞞 hypocrisy and perfidy」と考えているのは、イギリス人が1640～1691年を区分することなく、1つの時代と考えていることである。

最近のイギリスの歴史家は特に極端で、伝統的に2つに分けて考えられていた内乱の時代(1640～1660)と名誉革命の時代(1688～1691)まで1つに繋げてしまっ、それぞれの時代の特徴を判らなくしている。ホップスが「史上、最高の時代 highest time in history」と呼んでいた1640～1691年の50年間が持った意味が判らなくなっている。

イギリス革命を3つの違った名前と呼ぶことで、実際には一続きの演劇に過ぎないものが別個の独立した出来事であったかのような扱いを受けている。いまだに公式には1640～1660年の出来事を「反乱 Great Rebellion」と呼んでおり、1660～1668年の出来事を「王政復古 Restoration」、1688～1689年の出来事を「名誉革命 Glorious Revolution」と呼んでいる。最後の「名誉革命」に至っては、まるで人間の歴史を超越した「神の意志 Providence」の現れのような扱いを受けている。その結果、イギリス革命が達成した重要な成果が判らなくなっている。

アングロサクソン系の国々では憲法は成文化されておらず、公法関係の問題を解決しようとする、まるで犯罪の謎解きをする探偵の気分になる。

隠蔽された犯人の意図を探り出し、3つの名前では呼ばれている出来事や時代の本当の名前(あるいは姿)を探り出してこなければならない。これでは、まるでイギリス人が大好きな探偵小説を書くようなものである。

しかし、我々はイギリス人ではない。ブラックストーン卿 Sir William Blackstone やコナン＝ドイルと張り合うわけにはいかない。彼らと同じことをしたところで、我々に勝ち目はない。我々がやるべきことは物語(つまり革命)が始まる以前に注目して、イギリス革命が本当に目指していた意図を探り出してくることである。イギリス革命の特徴は、「議会と協力して統治する国王 King in Parliament」の存在であった。フランス革命のように、同じ場所で革命が展開された訳でもなく、フランス革命のような劇的な展開が見られた訳でもないが、イギリス革命も1つのドラマであった。まず「道徳劇 morality play」として始まり、それが「華やかな見世物 pageant」となって、最後は「奇跡物語 miracle play」で終わっている。つまり、まず「清教徒革命 Puritan Restoration」として始まり(1640～1659)、ついで「王政復古 King's Restoration」が実現して(1660～1685)、最後は「イギリス国教会の確立 Anglican Restoration」で終わっているのである(1685～1691)。

イギリス革命をフランス革命と比較して驚くことは、「革命」の意味が正反対だということである(我々がいま使っている「革命」という言葉はフランス革命に由来するので、現在我々が使っている「革命」の意味とは正反対だということになる)。我々にとって「革命」とは、革命家が計画を立て、その計画に従って意図的に起こすものであり、暴力行為によって開始されるものである。ところがイギリス人が「名誉革命」という場合の「革命」は、意味することが逆である。「革命」を終わらせたのが「名誉革命」であった。「革命」を終わらせることをイギリス人は「革命」と呼んだのである。

国王が議会の統制下に置かれたとき、イギリス革命はフランス革命と同じ様相を呈することになった。フランスでは、1848～1875年の屈辱の時代に(1871年の普仏戦争でプロイセンに敗北)1789年の理念が有効であったことが証明されたが、イギリスでも1774～1815年の屈辱の時代に(1783

年にアメリカが独立)、「国王を統制下に置いた議会」制度の有効性が証明された。また、それ以前のイギリスの状況もフランスとよく似ていた。つまりイギリスでもフランスでも、まず革命の予兆があり、ついで革命が成功して高揚感を味わい、そのあと屈辱を味わって、最後に現実的な妥協で革命の目的が達成されて革命は終息している。

イギリスでも、革命はフランスと同じ過程を辿ったということを忘れてはいけない。イギリス革命がロシア革命やフランス革命と違っていると考えるのは間違っている。どの革命でも、暴力事件が起きる以前に革命を予兆させる事件が起きている。ロシア革命の場合、それはツァーリ体制が生み出したロシアに特有の「インテリゲンツィア」(知識人)がツァーリ体制に見切りをつける1825年のデカブリストの乱であり(対ナポレオン戦に勝利した後フランスに駐留したロシア軍の将校が農奴制とツァーリ専制の廃止を求めて蜂起)、フランスの場合は1685年のナントの勅令廃止であった(プロテスタントの存在を公的に認めたアンリ4世の勅令が廃止されて、再びフランスはプロテスタントを排斥することになった)。イギリスでは1535年、大法官であったトマス＝モア Thomas More が処刑されたことが革命の予兆となった(トマス＝モアはヘンリー8世のカトリック信仰放棄に反対して反逆罪で処刑される)。つまりイギリス革命は、1535年:革命の予兆、1640～91年:革命期、1745～74年:革命後の高揚期、1774～1815年:屈辱を味わった時期、と4つに区分できるのである。

イギリス人はイギリス史がヨーロッパ史とは別物であることを強調したが、実はイギリス史もヨーロッパ史の一部として展開していた。1815年以降は、ヨーロッパのどの国も(イギリスも含めて)、フランス革命の遺産と向き合う必要があった。どの国も外部からの影響を排除することができなかったからである。国のあり方を根底から変える程ではないにしても、少なからず影響を受けていた。19世紀を通じてイギリスは、現在のアメリカやフランスと同じように民主制の国であるかのように振る舞ってきたが、イギリスは決して国民に平等な権利が認められたアメリカやフランス

のような国ではなかった。

アメリカ人は英語（イギリス語）を使っているが、彼らの考え方はイギリス人と同じでない。同じ英語を使っていることからイギリスの「コモンロー」を自分たちの伝統的な法制度として受け入れ、イギリス人と同じように「コモンロー」に特別扱いを要求する。ローマ法・教会法・ゲルマン法を研究してきた私の研究成果に対して、「コモンロー」しか知らないくせに難癖を付けてくる。しかし私としては、この扱いは心外極まりない。なぜなら、私はバーク Edmond Burke に負けず劣らず「コモンロー」の優れた点は認めているからである。ただし、「コモンロー」がアングロサクソン系の国でしか通用しないことは忘れるべきでない。イギリス人やアメリカ人がヨーロッパ人の干渉を嫌うのは勝手である。しかしアメリカ人は自分たちが守ろうとしているのがイギリスの伝統などではなくて、イギリス人に対する自分たちの「謙虚な気持ち decency」に過ぎないことは自覚すべきである。以下の論述で私の発言に異議があっても、つぎのことだけは忘れないでほしい。つまり、私は「コモンロー」がアメリカの法制度を作り上げるうえで大きな役割を果たしたことは高く評価しているということである。

## 第2節 イギリス王国

ヨーロッパ大陸の国が議会制の運用に失敗したのは、イギリスのことをよく知らなかったからだと言われる。そもそもイギリス的な制度が登場してきたのは、ノルマン王朝の時代であった。そこでノルマン王朝の成立からイギリスの歴史を辿り直してみることにする。

カトリック教会の支持を得てイギリスを征服したノルマン王朝は、フランス出身の王朝であった。そこでイギリスでは、いまでもフランス語起源の法廷用語が使われている。たとえば守衛が開廷を宣言するとき「オーエズ、オーエズ Oyez,oyez」と言うが、それは「静かに」を意味する古いフラ

ンス語なのである。あるいは首相が新しく司教を任命する際、候補者の名前を書いた手紙を提出するよう聖堂参事会に要請するが、その手紙には「選定権 droit d'élire」を行使するようにと書かれている（いまでは形式に過ぎない）。また下院で国王に対して「要望 grievances and bills」が提出されると、国王は「使節 militia」を下院に派遣して、つぎのような口上を古いフランス語で述べさせていた。「王は諸氏の忠誠心に感謝し、（諸氏の要望の代価として）提供された貢納金を喜んで受け取るものである Le roi remercie ses bons sujets, accepte leur benevolence et ainsi le veut」。

ところが1628年に国王チャールズ2世が英語で感謝の気持ちを伝えてきたため、下院はそれを正式な国王の返答と認めなかった。伝統的な形式が守られなければ、正式なもの認められ無いのである。下院で指導的な立場にあったクック卿 Sir Edward Coke が「権利請願 Petition of Rights」を国王に提出した時も、国王はそれを法律として認める旨、英語の演説で答えようとした。これに下院は納得せず、国王に古いフランス語で答えさせている。「下院の望みどおり法律として認める Soit droit comme il est désiré」。「下院の代議士たちは、イギリスのパンよりもノルマンの石を好んだのである These lawyers preferred Norman stones to English bread」。石造りの丈夫な建物の方が国王より信頼できるという訳である。

1066年の「ノルマンの征服 Norman Conquest」以来イギリスでは、チューダー朝だけがイギリスの出身者で占められていた（そのチューダー朝ですら、祖先はウエールズ司教の執事であったウエールズ人オーエン Owen op Mergent とフランス人キャサリン Katherine de Valois であった）。つまり「生粋のイギリス人 purely English blood」が王位に就くのは、1936年になってからのことなのである（第一次世界大戦中、ドイツ的なハノーバー Hanover という王朝名をウインザー Windsor に変更し、またドイツから得ていた称号をすべて放棄したジョージ5世が前年に死去し、国王は「生粋のイギリス人」となる）。また、たとえ国王が外国の出身者であっても、国王を支える教会の高位聖職者と有力貴族はノルマンの出身者であった。「聖職の貴族院議員 Lords Spiritual」（大司教）で

あったランフランク Lanfranc・アンセルム Anselm・ベケット Thomas Becket は、3人ともフランス出身の聖職者であったし、「聖職でない貴族院議員 Lords Temporal」もノルマンの出身者であった（たとえば「イギリス人の保護者 Protector gentis Angliae」と呼ばれていたレスター伯シモン＝ド＝モンフォール Simon de Monfort, Earl of Leicester はフランスの出身であったが、イギリス貴族の特権を守るために国王と戦った）。

国制もフランス由来であった。「国王評議会 King's Council」や「王の法廷 King's court」などはフランスから導入されたものだったし、「議会 Parliament」もフランス由来であった（council, court, parliament は、もともとフランス語）。ノルマンの出身者であった「大貴族 lord」・「司教 bishop」・「大修道院長 abbot」は「個人の資格で by proper name」議会で召集され、「騎士 knight of shire」・「准貴族 gentry」・「都市民 burghess」は「団体 by generic name」として議会で代表を送っていた。つまり国王・司教・貴族・准貴族はノルマンの出身者であり、「准貴族」・「独立自営農民 yeomanry」・農奴が「生粋のイギリス人」であった（「准貴族」は、ノルマンの出身者と生粋のイギリス人の両方がいた）。

「生粋のイギリス人」は、「有力者 dignitaries」と見なされていなかった。そこで「独立自営農民」は、「地方の名士 (e)squire」を自分たちの指導者と見なすことにしたのである。貴族も国王もイギリス人ではなかったからであった。「聖職でない大貴族 War Lords, Kriegsherr」も「聖職の大貴族 Church Lords」もイギリス人ではなかった。イギリス人は「皇帝 Emperor」（つまり戦時の最高司令官。イギリスではドイツの「皇帝 Kaiser」を Emperor と呼んでいた）という言葉に嫌っていたが、大陸諸国は違っていた。なぜなら大陸諸国では、Emperor の元になっていたラテン語 (imperator) が戦時に全権を認められていても、平時に全権を認められていないことが知られていたからである。ところがイギリスでは、まるで外国人にイギリス支配の全権を委ねるような意味に誤解されていた。イギリスには「生粋のドイツ人 Angestammten」のような者は存在しなかった。そこで「生粋のイギリス人」

が政治的に重要な意味を持つことになったのである。「生粋のイギリス人」准貴族は、「生粋のイギリス人」であるというだけでイギリス人の利益を代表していると考えられた。「独立自営農民」が「准貴族」を自分たちの利益代表と考えた理由がこれである。

中世に「イギリス各地 county, shire」を支配していたのは、ノルマン出身の国王や貴族であった。ノルマン出身の国王や貴族に言わせれば、「准貴族」は「平民 Commons」に過ぎなかった。ところが「准貴族」は「平民」であること（少なくとも、その利益を代表していること）に誇りを感じており、自分たちを高貴な存在だと考えていた。国王から見れば「平民」に過ぎなくても、彼らは「イギリス各地」の指導者であり「首長 Chief」であった。「大貴族」や「大法官」は誰も代表していなかったが（だからこそ議会で召集される時は個人として召集された）、「准貴族」は「平民」を代表していたのである。「団体」を代表する者は「大貴族」や「大法官」のように個人として議会で召集されることはなく、あくまでも「団体」の代表として召集されていた。それが「准貴族」であった。

中世にノルマン出身の国王が議会で召集したのは、大法官が必要と考えた税金の支払いを臣下に約束させるためであった（ヨーロッパではどこの国でもやっていたことで、とくにイギリスに限られたことではない）。当時、議会に出席するのは大きな負担であった。そこで国王の方も、できるかぎり臣下の負担を軽減するよう努力していた。そもそも課税に同意させるのは大変なことで、国王は議会で課税を認めるよう様々な方法で圧力を掛ける必要があった。当時の交通手段を考えれば、国王がいる場所と臣下がいる場所の間にあった距離は大変なものであった。ロシアの諺に「ロシアは広大で、皇帝は遠い存在に過ぎない Russia is big, and the Czar is far away」というのがあるが、それは中世のヨーロッパでも同じであった。国王が遠くにいれば、国王の権威も低下しようというものである。

いまでは航空機・車・列車・船・電話・ラジオなどがあるので、中央政府による統治は容易である。情報の伝達手段も交通手段も政府が独占して

おり、個人が政府に対抗することなど不可能である。フランス革命は「地方(邦) pays」の特権や個人の特権を排して全国を一律に統治する体制を作り上げ、個人が政府に対抗することを不可能にしてしまった。フランス革命のおかげで、微力な政府でも個人の力を凌駕することが可能になった。ただし政府の方も法人・会社・信託会社などから影響を受けるようになっており(情報を握っている法人・会社・信託会社は、票田の操作やロビー活動で政府に影響を与えることができる)、国家を自由にコントロールすることは出来なくなっている。中世にイギリスが置かれていた状況を理解したければ、「現在の会社社長 princes of modern business」が国家で果たしている役割を想像してみればよい。

中世の国王は地方に関する情報を簡単に入手できず、情報を入手できても操作して影響力を振るうのは容易でなかった。地方で実権を握っていたのは領主層であって、国王は領主層を支配していたに過ぎなかったからである。しかし、そんな領主層の強大な実権に僅かであれ制約を課していたのが、領主層に対して国王が要求できた封建的な義務であった。地方では領主層が主人公であったが、議会では国王が主人公であった。教会の支持を得て即位した国王は、キリスト教徒としての義務感からも領主層の尊大さや不正を抑制するよう努力していた。領主たちに臣下としての義務を想起させ、教会や国王に忠実であるよう求めたのである。ジェームズ1世の次のような言葉は、国王として有るまじき言葉と非難されているが、農民の耳には正義を実現できる頼みの綱に聞こえたはずである。「国王は臣下を褒め称えることも罵倒することもできる prince could cry his subjects up and down」。交通・通信手段が未発達であった中世期に、地方で権力を振るう領主層の横暴を抑制するには、国王と農民が協力するしか他に方法が無かったのである。

議会が無ければ、領主たちの抵抗を打破して協力させることなど不可能だったであろう。領主たちにしてみれば、逆に議会への出席はできるだけ避けたいことであった。議会に出席するための旅行は危険で一杯だったし、

経費も掛かった。そのうえ課税の承認が待っていたからである。そこで議会の招集に消極的な国王が人気を博することになった。領主たちにとって責めてもの救いとなったのは、課税を承認する代わりに地方判事や司教の交代を要請したり、不平・不満をアピールしたりできたことであった。課税によって収入増が期待できた国王は、喜んで領主たちの言い分に耳を傾けたからである。国王に対する要請を形にするには、とても時間が掛かった。下院の議長はやっと形になった要請を携えて上院に赴き、上院入口で跪いて下院の要請を認めるよう頼んでいた。いまでもイギリス議会では、すべての法案は予算案と一緒に採択されている。議会にとって最も大切な仕事は政府が提出する予算案の承認であり、法案の承認と予算案の承認は不可分の関係にあった。このやり方はイギリスに限られず、すべてのヨーロッパ諸国で採用されていた。要請の内容はイギリスと同じで、不正を働く役人を辞めさせて欲しいとか、議会が信頼する人物を宰相に任命して欲しいといったことであった。

ノルマン人が築き上げたイギリス王国では、まず大法官(現在の首相に相当する役職)はイギリス人貴族であってはならず、しかもイギリスの法律制度に詳しい者が望ましとされた。それが中世のイギリスで実現していたことは、すでに述べた通りである。地方の有力者に過ぎない領主には、国王が目指した正義の実現は不可能であった。その人物がたとえ司教であっても(普遍主義を原則とするカトリック教会の司教は、イギリス人であるとは限らない)、イギリスの言葉・習慣・伝統に詳しいことが要求された。イギリス国王はイギリス以外の国、たとえばフランスとかアイルランドにも利害関係を有していたため、国王が任命した大法官が国王に代わってイギリスの利害を代表しなければならなかった。イギリスの問題では、大法官が「国王の良心 Keeper of the King's Conscience」であった。また大司教でもあった大法官は国王の懺悔を聞くことになっていたため、文字通りの「国王の良心」であった。大法官が「国璽 Great Seal」を国王から預かっていたため、大法官の同意なしには王命も公布できなかった。国王の意志は、大法官が

保管していた「国璽」があって初めて正式なものとなったからである。

ピューリタン革命が始まったばかりのころ、まだ大法官は「国王の口・目・耳・心」であるとされていた。また「宮廷 Court」（国王が主宰する法廷でもある）は、「国王が良心のみに従って（いかなる慣習にも縛られることなく）裁きを下す最高法廷 King's High Court of Conscience, bound by no custom」と呼ばれていた。1628年の「権利請願」運動の中心人物であったクック卿も、「国璽」のことを「王国の扉を開く鍵 Key of the Kingdom」と呼んでおり、また1924年11月4日に大法官ハルデン Lord Chancellor Haldane は、つぎのように言っていた。「国璽はイギリスにとって重要な意味を持つもので、それを持っている者が伝統的に大法官とされ、国璽を持っていることが大法官の権限を行使する根拠とされた。大法官の決定を覆すためには（大法官が悪意で決定を下した場合など）、特別な立法が必要とされた」（The Report of the County Library Conference of 1924）。

1688年の名誉革命のときも、当然のことながら「国璽」は重要な意味を持っていた。ジェームズ2世は「国璽」をテムズ川に投げ捨てたが、それでオラニエ侯ウイレム（オレンジ侯ウイリアム）の即位を妨害できると考えていたからである。同時に議会からも法的な権限を奪うことができると考えていた。しかしジェームズ2世の期待とは裏腹に、「国璽」を捨てたジェームズ2世は国王としての権限を放棄したと見なされることになった。さらに1689年には、「国璽」が不要とされることになった。オレンジ侯ウイリアムのサインだけで国庫の歳出が認められることになったのである。国王のサインが「国璽」に取って代わったのである。

しかし、その後も「国璽」が忘れ去られることはなかった。1784年に「国璽」が盗まれて大騒ぎになったことがあった（「国璽」は絹の袋に包んで革の鞆に入れていた）。そのとき誰もが思ったのは、これで政府は機能停止に陥るということであった。さらに1788年に国王が正気を失ったときには、「国璽」の存在が政務の継続性を保障すると考えられていた。つまり大法官は、トマス＝モアの時代と同じ権限を持つと考えられていたの

である。デイズレーリ Benjamin Disraeli に言わせると大法官は役立たずの貴族院議員に過ぎず、19世紀後半に流行した貴族を笑いものにするオペレッタ『アイオランシ、あるいは貴族と妖精のお話 Iolanthe, or The Peer and the Peri』（ギルバート William Gilbert が作曲を担当し、サリバン Arthur Sullivan がセリフを担当した）に登場してくる「役立たずの大法官 susceptible Chancellor」であった。貴族院が下院に権限を奪われていくと、大法官も権限を失っていった。

ピューリタン革命のときには、すでに大法官は中世期にあったような権限を持ち合わせていなかったが、それでも「国王の良心」であることに変わりはなかった。もちろん大法官が革命の支持者であったことはなかったし、ピューリタンであったこともなかった。大法官は人間ですらなかった。それは「亡霊 ghost of Chancellor」であった。間違っただ断頭台で処刑されてしまった国王の「良心の亡霊」であった。国王は「亡霊」としてピューリタン革命のあいだも存在し続けたのである。ちょうどフランス革命のとき、ユグノーの「亡霊 shadow」が存在し続けていたように。

### 第3節 「コモンロー Common Law」（王国法）の登場

イギリスでは、なぜ大法官がこれほど重要な役割を担うことになったのか。イギリスを征服したノルマン人と征服されたイギリス人が、ともにカトリック教会から大きな影響を受けることになったのは大法官のお陰であった。イギリスが戦争に強いだけの野蛮国にならずに済んだのは（つまりカトリック教会圏に属することになったのは）、大法官のお陰であった。カトリック教会からの影響のお陰で、ヨーロッパに共通する「正義という考え方 ideas of righteousness」がイギリス人の間にも普及していった。大法官のお陰でイギリス人やアメリカ人（つまりアングロサクソン人）が誇りとする法制度、つまり「コモンロー」がイギリスに登場してくることになったのである。

いま「コモンロー」はアングロサクソン人に特有の法制度ということになっているが、それが誤解であることを説明しておく必要がある。それに「コモンロー」が何であるかを理解していないと、イギリスやアメリカの法制度の何たるかも理解できないことになる。

ヘンリー8世が国王になるまで（つまり1535年まで）、「コモンロー」は現在のような法令集を意味していなかった。「法手続き process」の技術的な問題だけを意味していたのである。それは教会法・ローマ法・ノルマン法・イギリス法の4つが1つになったものであった。

まだ「コモンロー」と呼べるようなものは存在せず、大法官が仲介することで4つの法が「共通法 common law」として存在していたに過ぎなかった。いま「コモンロー」と言えば、それは教会法やローマ法と違ったもの、イギリス人やアメリカ人が誇りとするアングロサクソン人に特有の法制度ということになっているが、じつは「コモンロー」は、普遍的な教会法とイギリスに特有の法制度が一緒になったものであった。それを可能にしていたのが大法官の存在であった。

ところがヘンリー8世が国王になると、何が正しくて何が間違っているかは国王が決めることになった。それまでのように国王と大法官が「対等な立場で交渉するやり方 give and take」が放棄され、国王が強制する「安定した秩序 stable order」が登場してくることになった。

宗教改革の結果、イギリスでもヨーロッパ大陸でもカトリック教会は権威を失っていた。そこで問題になってきたのが、「イギリス全体に適用できる法 placita communia」とは何かということであった。つまり、それまで技術的なことと考えられていた「コモンロー」の意味を、あらためて定義し直す必要に迫られることになったのである。

17世紀の法律家たちは、19世紀の法律家たちのように間違った考え方をしていなかった。「コモンロー」がキリスト教的な法であることを当然視していたのである。たとえば1653年に公表された『規制委員会が提出した法案に対する意見書 Reply to a Draft of an Act or System proposed, as it is

reported, by the Committee on Regulations concerning the State』を見れば、そのことがよく判る。この『意見書』はイギリス国内で配布するために印刷されたものだが、つぎのような文章が付されていた。「この法案は、これまでのように法律の専門家に託されるべきものではなく、そもそも新旧の聖書に端を発した古法を守るためのものなのである。ローマ教皇エレウテリウス Papa Eleutherius が（イギリスにキリスト教を齎したとされている伝説上の）高貴なるイギリス国王ルシウス King Lucius のもとに送った指示によれば（イギリスを支配するにあたり従うべきローマ法を教えてほしいという国王からの書簡に対する返答として書かれたもの）、国王が2世紀のキリスト受難の後ローマでキリスト教徒として育てられたこと、またそのとき新旧の聖書を与えられたことを想起し、聖書の精神に従って作成された法律によって統治すべきこと、またよき統治を行う国王が国王の名に相応しい国王であり、悪しき統治を行う国王は国王の資格がないことを示唆している」。

この『意見書』で言及されているイギリス国王ルシウス1世とは、ローマ教皇ルキウス2世 Pope Lucius II のことであった。また150年ごろの出来事とは、じつは1150年ごろの出来事のことである。1150年ごろには、ボローニャでグラチアヌス Gratianus が『お互いに矛盾する内容の教皇令を矛盾しないように解釈する試み Concordia Discordantium Canonum, A Concordance of Discordant Canons』を公表したときであり、またトマス＝ベケットがヘンリー2世に対して教会法の優位性を主張していたときであった。この『意見書』から判ることは、クロムエル Oliver Cromwell の時代になっても、国王が「コモンロー」を無視するようなことがあってはならないと考えられていたことである。当ても「コモンロー」はイギリス独自の法ではなく、キリスト教に基づく普遍的な法だと考えられていたのである。つまり「コモンロー」はユダヤ法・ローマ法・教会法を継承しており、ヨーロッパ各国の法と同じものだと考えられていたのである。バーク Edmund Burke も次のように書いている。「ヨーロッパとは1つの大きな国のようなものであり、共通のヨーロッパ法がまずあって、その地方版として違った慣習や

制度を考慮に入れた法が各国ごとに存在しているのである。ヨーロッパ各国の法制度や経済制度は、その根を同じくするものなのである」(Edmund Burke 'On the Overtures of Peace' in Letters on a Regicid Peace, London, 1796)。

フランスでは、新教徒ユグノーに対する迫害から104年後の1789年に、フランス革命の形で迫害に対する報復が実現しているが、イギリスではトマス＝モアが国王と議会によって処刑されてから105年後(1640年)に、それに対する報復が実現していた。ヘンリー8世がローマ教皇の権威を拒否し、ヘンリー8世自ら「信仰の守護者 Defendor of the Faith」(ヘンリー8世がルターを批判したことを受けて、ローマ教皇がヘンリー8世に与えた称号)となり、イギリス国教会 Anglican Church の首長となったのである。そのときヘンリー8世はイギリス国教会こそが伝統ある正統な教会であって、ローマ教皇は異端であると断罪していた。彼は6人の妻と結婚して、4人は処刑するか離婚して、1人は病死させている。修道院を解散させてその土地を没収し、国王が教会法を制定できることになったが、このとき国王と教会の関係が逆転したのである。それまでは「公平・公正 equity」の実現、キリスト教的な理想の実現、理想の実現に向けた改革の実施は「国王の良心」たる大法官(大司教でもあった)の仕事であった。それが国王の仕事になったのである。厳し過ぎる法の施行を緩和してよき秩序を実現したり、領主の専制を排して神の正義を実現したり、人民の自由を守ったりする仕事、それ以降は国王の仕事となった。キリスト教世界で共有されていた普遍的な原則は、もはやイギリスには適用されないことになったのである。イギリスの貨幣には国王の肩書がヘブライ語・ギリシャ語・ラテン語で刻印されているが、そのことからイギリスには、ユダヤ的・ギリシャ的・ローマ的な伝統が継承されていることが判る。そんなイギリスで、国王が普遍的な法の法源とされることになった。

ルターをはじめヨーロッパ大陸の神学者たちが支配者に認めていた宗教改革の権限は、あくまでも例外的な場合に限られていた。ところがヘンリー8世は、それを国王が持つ当然の権限だと考えたのである。そこでヘンリー

8世は宗教的な問題(離婚)を処理するとき、聖職者に頼ることを止めてしまった。聖職者に国王から独立した普遍的・宗教的な権限があることを認めようとしなかったのである。しかし彼はカトリック教会の存在を気にしていた。そこでアン＝ブーリン Anne Boleyn (エリザベス1世の母)との離婚をプロテスタントに認めてもらうべく、ルターがいたウittenベルク Wittenberg に使節を派遣している。しかしルターもメランヒトン Philipp Melachton も、ヘンリー8世の離婚を認めようとしなかった。カトリック教会もプロテスタントも彼の離婚を認めてくれなかったため、ヘンリー8世はイギリス国教会だけを相手にすることにしたのである。

こうしてイギリスでは、「国王の良心」は国王個人のものになってしまった。1603年にスコットランド王ジェームズ6世がイギリス国王になったとき(ジェームズ1世を名乗る)、彼は自分の権限をヨーロッパ大陸的で使われていた「絶対君主 absolute monarchy」の理論で説明していた。しかしヨーロッパ大陸の「絶対君主」には、「さまざまな宗派に分裂したキリスト教世界 Party of Religion」の一員であるという自覚があった。そのことをジェームズ1世は見過ごしていた。またヨーロッパ大陸のプロテスタント国は全て小国で、「相談役 Berater」は外国から雇い入れており、「国王が従うべき規範 sovereign learning」は無意識のうちに習得していた。ところがジェームズ1世が統治していたのはイギリス王国・スコットランド王国・アイルランドの3国で、しかもそれぞれ違った宗派に属するキリスト教国であった(イギリス王国はイギリス国教会、スコットランド王国はカルバン派、アイルランドはカトリック教会)。当時、違った宗派の教会を3つも支配下に置いていたのはジェームズ1世だけであった。イギリスでは、国王の「気まぐれ whim」が宰相たちを翻弄することになったのである。「首長 Head of the Church」たる国王の権限が、伝統的なイギリス人の「権利 liberties」を損なうことになった。国王個人の情欲より教会の教え(カトリック教会が認めた婚姻は解消できない)が優位であることを示すことで、トマス＝モアはイギリス人の「権利」を守っていたのである。ところがイギリス議会はヘン

リー8世に協力することに熱心で、イギリス人の「権利」を守ろうとしなかった。ヘンリー8世が議会をどの国王よりも高く買っていたのは当然であった。貴族院も下院も、国王が国教会の「首長」であることに異議を唱えようとしなかったのである。この本を書いている1938年にも、相変わらず国王は国教会の「首長」のままである。ただ国教会に対する国王の権限の大きさが問題になってきたことから、下院は国教会にもカトリック教会のような枢機脚団を用意して「首長」の権限を抑えることにしたのである。いま国教会を支配しているのは歴代の総理大臣である。

フランスでは新教徒ユグノーが敗北し、イギリスでは大法官が敗北することになった。ヘンリー8世時代のイギリスの議員たちは強欲で、修道院の土地を奪ったヘンリー8世から土地を提供されて喜んでいて、1688年のホイッグ党員は、ヘンリー8世のおかげで大金持ちになっていた。「イギリス連邦 British Commonwealth」は「下院議員の富 wealth of Commons」によって成り立っていたと言える。それに大きく貢献したのが、「修道士を懲らしめる金槌 hammer of monks」であったトマス＝クロムエル Thomas Cromwellであった(トマス＝モアの後ヘンリー8世によって大法官に任命される)。イギリスの「准貴族 gentry」は「慈善の心 charity・気前の良さ generosity・歓待の精神 hospitality」に富むと言われているが、それは彼らが田舎で手に入れた広大な家・屋敷のお陰であった。「准貴族」であった歴史家のハラム Henry Hallamによれば、「大貴族」や「准貴族」の多くはチューダー朝時代に手に入れた修道院の土地のおかげで金持ちになれたのである。また彼は、こんなことも書き残している。「彼らは修道院の土地を提供され、そこで慈善事業に熱心になった(とくに1540年以降)」。

彼らは、中世の教会が担っていた役割を担うことになった。しかし彼らはヘンリー8世の共犯者であった。彼らが『三十九カ条の信仰告白』や『国王至上法』を受け入れたのも、手に入れた土地を守るためであった。1535年以降、議会は教会が国王に対してもっていたチェック機能をつぎつぎと排除していった。

それでも、断頭台の露と消えたトマス＝モアの影が消え去ることはなかった。「公平・公正」の原則を掲げて国王の恣意的な権力をチェックしていた大法官の影が消え去ることはなかった。ヘンリー8世のあとに即位した国王たちも、その影に悩まされ続けることになる。トマス＝モアは、自分の犠牲が意味することをよく知っていたのである。大法官のなかでも特に人気の高いトマス＝モアは、民衆歌にまでなっている。

トマス＝モアの機知に富んだ文章は有名であった。シェイクスピアも真似たほどである。1535年7月6日に最後のカトリック教徒にして大法官のトマス＝モアが処刑されたあと、娘婿のローパー William Roper が彼の伝記を書いているが、そこで描かれているトマス＝モアは機知あふれる会話と勇敢な行為の主であった。トマス＝モアは、表情を少しも変えることなく皮肉を口にできる人物であった。彼の死後、大法官は役職として重要でなくなっていくが、トマス＝モアの生き様はイギリスの法律家たちが目指すべき模範となったのである。しかし、彼に匹敵するような法律家が再びイギリスに現れることはなかった。

ところがイギリスの法曹界は、この断絶の事実を隠蔽するのに熱心であった。「コモンロー」についてアメリカの有力な法律家と話し合ったことがあったが、断絶の事実隠蔽がどれほどのものか、そのときに教えられた。彼は14世紀の判例として、イギリスでは教会の「首長」が許可しなければ国王は教区司祭に代わって教区のお金を使うことができないという事案を挙げているが、14世紀当時の教会の「首長」はローマ教皇だったことから、大司教でもあった大法官が国王に許可の事実を伝えていたことになる。彼に言わせれば、それが現在もイギリスの法廷では判例として有効で、そのことからイギリスでは司法が行政よりも優位であることが判ると言うのである。そこで私は1535年に修道院が解散させられて修道院の土地が没収され、国王が教会の「首長」となったとき、なぜ法廷はそれに反対しなかったのかと彼に聞いてみた。すると彼はつぎのように答えたものである。「誰も法廷に訴え出なかったから」。このことから、イギリ

スの法曹界や議会による断絶の事実隠蔽がどんなものであったかが判らうというものである。国王が教会の「首長」になったとき、なぜ法廷がそのことを問題にしなかったのか誰も考えなかったのである。しかしトマス＝モアは、そのことを考えていた。国王が教会の「首長」になったとき、法廷はそれまで持っていた機能を失ったのである。みずからの信念のために死んだトマス＝モアこそ聖人の名にふさわしい。「コモンロー」の伝統は、「国王の良心」たる大法官が国王と対立してでもその信念を貫き通すことによって守られたのである。彼は国王によって「コモンロー」の伝統が壊されるのを拒否したのである。1535年以降「コモンロー」はその性格を変えてしまうが、そのことをイギリスの法曹界は認めようとしな。名誉革命の立役者であったウイリアム3世の伝記を書いたトレイル Henry Duff Traill は、つぎのように書いている。「イギリスでは、伝統が原理・原則を生み出すことはあっても、原理・原則から伝統が生み出されることはない。我々は政治理論を政治の現実から導き出してくる。まず理論在りきではない。まず現実在りきなのである」(H.D.Traill, William III, London, 1888, p.57)。

1535年以降イギリスの国王は、「国王の良心」を失ってしまった。ヨーロッパ大陸では、大勢いたプロテスタントの国王が相互に牽制しあっており、国王は「良心」を忘れることができなかつたが、イギリス国王の周辺にいたのは臣下だけであった。臣下が頼れるのは国王の個人的な好意だけである。ところがヨーロッパ大陸のプロテスタント国では、「相談役」はヨーロッパ中のプロテスタント神学部やプロテスタント神学者の言っていることを国王に突き付けることができた。つまり宰相は国王の臣下などではなかつたのである。たしかに国王は宰相を罷免することはできたが、ルターが宣告した「キリスト教徒の良心 Christian Conscience」を無視することはできなかつたのである。

#### 第4節 「コモンロー」の復活

トマス＝モアの敵を討ってくれたのが「准貴族」たちであった。もっとも、フランスの啓蒙思想家たちが新教徒ユグノーを殺した王政の復活を認めたように、「准貴族」出身の法律家たちもトマス＝モアを殺した国王の至上権は認めていた。国王を超える権限を持った教会を復旧させるのではなく、「イギリス人の世俗的な権利の復旧 secular restoration of the liberties of England」を実現させたのである。そうすることでイギリスの宗教改革が抱えていた問題を修正したのであった。

「准貴族」によって構成されていた下院は、「復旧 restoration」という言葉に拘っていた。「大反乱 Great Rebellion」でも「内乱 Civil War」でも「革命 Revolution」でもなく、「復旧」であった。「イギリス人の権利の名誉ある復旧 glorious Restoration of the liberties of England」である。実際には教会のあり方が大きく変わり、最終的には下院がイギリス国教会のあり方を決める権利を獲得することになったが、それにも拘わらず変革を実現した「ピューリタン」という名称を残すことは認められなかつた。イギリス国教会を認めず、『祈祷書 Book of Common Prayer』を認めようとしなかつた過激派の「ピューリタン」は排除され、世俗的な利害を重視した下院が革命の命名権を獲得したのである。彼らが問題にしたのは、国王による課税であった。当時は、国王の予算不足と「准貴族」の要望実現が喫緊の課題であった。国王は軍隊の維持に税収を必要としていた。そこで下院は国王と話し合うことで要望実現の方法を探り、その成果をイギリス人の権利「復旧」と呼ぶことにしたのである。

なぜ名称の問題に私が拘るのか訝しく思う読者もいるかと思うので、そのことについて少し説明をして置きたい。私としては、イギリスの伝統が「ピューリタンによって復旧されたこと Puritan restoration」を改めて強調して置きたい。何世紀ものあいだイギリスの歴史家は、「イギリスの伝統を復旧した」ピューリタンの言い分を認めてこなかつたのである。「マグナ

カルタ Magna Carta」以来、イギリスの政治的な伝統が途切れることは無かったと言いだめたのは、ピューリタンたちであった。1641年のピューリタン革命の時、彼らが言いだめたのである。それ以来イギリス人は、「伝統主義者 traditionalist」を自称するようになった。古い政治的な伝統を見つけ出してきて、それを「マグナカルタ」と呼ぶことにしたのである。その上、誰も思い付かなかった意味を「マグナカルタ」に付与していた。「マグナカルタ」という名前で、「コモンロー」が復旧してきたことにされたのである。900年ものあいだ、かつてイギリスの政治的な伝統は途切れることがなかったとされているが、それは事実と反する。それはピューリタン革命のときに生み出された神話であった。

「イギリス人の判例主義 English passion for old precedents」をイギリス人に特有のもの、アルフレッド大王やウイリアム征服王の時代から存在するイギリス人の「国民的特質 national character」とされているが、これも間違っている。それは17世紀のピューリタン革命で生まれたものなのである。「国民的特質」を不変のもの、生まれながら国民が持っているものなどと考えるのも間違っている。それは歴史が生み出すものなのである。

ピューリタン革命が始まったばかりのころ、クロムエル Oliver Cromwell はアメリカに行くことを考えていたが、それは「准貴族」たち（クロムエルもその1人）が身の危険を感じていたからであった。国王の課税に反対すれば、逮捕される可能性があった。そこで下院の同意なしに国王が課税しようとしたとき、下院は「マグナカルタ」を復旧させることにしたのである。そのとき「准貴族」たちが正当化の根拠としたのが「大昔からあった from time immemorial」慣習とか、「慣行によって認められた権利 prescriptive rights」とかいったことであった。

その時イギリスの国法を復旧させるか、教会法を復旧させるかが問題になったが、下院は国法である「コモンロー」を復旧させることにした。「コモンロー」を復旧させればローマ教皇との断絶を宣言できるし、大法官とも縁を切ることができたからである。こうしてイギリスの法廷は、判事・

弁護士・陪審員だけのものとなった。「コモンロー」の何たるかを決めるのも、イギリスの判事と陪審員であるとされた。

「コモンロー」の復旧はピューリタン革命で実現したが、そのことは1648年の「国璽」にあった文言から判る。「神のおかげで自由が実現した最初の年に、(コモンローは)復旧した」。さらに復旧した「コモンロー」が、判事やオックスフォード大学・ケンブリッジ大学の欽定講座担当教授によって覆されるのを防ぐ工夫がされた。国王が任命する判事や大学教授は国王の意を汲むのに熱心で、国王は好きなように統治できると考えていたからである。たとえば、1637年に課税を巡る問題について、判事たちはつぎのような判決を下していた。「王国の安全を守るためなら、国王は令状 writ によって如何なることも臣下に命令ずることができるし、何が安全を脅かしているか、またそれを防ぐ方法は何かも国王は自由に決めることができる」。

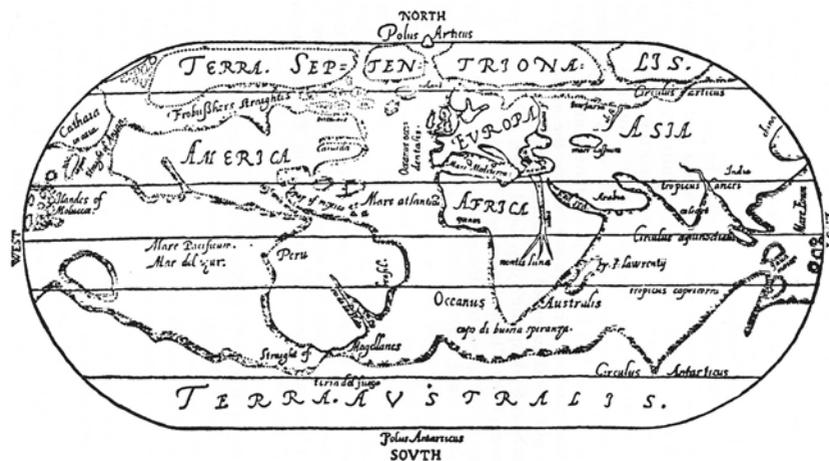
国王の立法行為から「コモンロー」を守るため、イギリス人は憲法を成文化しないことにした。国王の立法行為や憲法の成文化を認めれば、国王が何を為出かすか判らなかつたからである。「コモンロー」は判例主義を採用していた。国王も判例は覆すことができない。判例主義を採用すれば、

国王による専制を防ぐことができたのである。国王や大法官なら煩雑な判例を整理・体系化できたかもしれないが、ピューリタンたちは「判例の煩雑さこそ我々を守ってくれる Let us intrench ourselves behind this chaos of precedents」と考えて



いた。判事や弁護士の出身階級は「准貴族」であった。判事や弁護士の養成機関であった「法曹学院 Inns of Court」は、彼らの団結心を維持するための機関であった。イギリスでは制度的に司法と行政は分離していない。しかし議会在最高法廷とされているおかげで、結果的に司法の独立が実現している。国王は議会に介入できず、<sup>したが</sup>従って司法に介入できないからである。

国王の司法介入を防止する制度が確立したのはウイリアム3世とアンの時代であったが(名誉革命の時)、契約法が変更されて「准貴族」の財産が保護されることになったのは17世紀中頃の<sup>ころ</sup>ことであった。もはや国王は簡単に「准貴族」の財産を没収できなくなった。たとえ大逆罪が成立しても、<sup>すで</sup>既に財産は相続人に渡っているからである。大逆罪を犯した「准貴族」は無一文になっていて、没収すべき財産は残っていなかった。「生前相続の制度 freedom of donation during lifetime」と「遺言による財産処分<sup>の</sup>の制度 freedom of testation」が確立していたからであった。しかし債務者の支払義務は、「公平・公正 equity」の原則に反して残されることになった。ヨーロッパ大陸の法律家に言わせれば、これは<sup>おかしな</sup>可笑しいことであった。イギリス人は政府の干渉から個人の権利を守るのには熱心でも、債務者の権利はまるで無視していたからである。1835年にフランスの女性文筆家ベイル＝ムイヤー Bayle-Mouillard は、つぎのように書いていた。「個人の自由を最大限に尊重するというイギリスでも、債務に関する限り個人の自由は無視されたままであった。そのくせ個人の権利を国王の干渉から守るのには熱心であった」。チューダー朝時代に債務者の権利がある程度、守られるようになったことは認めているが、「それでもイギリスの法律家にとって債務者を保護する法律は好ましくないようで、債務者は証拠なしに逮捕できるとしている」(Jean-Baptiste Bayle-Mouillard, De l'emprisonnement pour dettes, Paris, 1835, p.51)。「人身保護法 Habeas Corpus」は国王から個人を守ってくれたが、債務者を金持ちからは守ってくれなかった様である。「コモンロー」の復旧を実現した革命は、債務者を金持ち<sup>しゅちゅう</sup>の手中に残したままであった。



旧世界(ヨーロッパ)と新世界(アメリカ)に挟まれたイギリス(1578年)

## 第5節 数字好きの国の財務大臣

かつて大法官の裁判所がキリスト教的な考え方を「公平・公正」の原則によって実現していたように、「准貴族」は財政問題の処理にキリスト教的な考え方を適用していた。数字をまるで詩のように大切に扱い、経済情勢を論じるのを<sup>この</sup>好み、国民が成し遂げた成果を金額で表現することを<sup>この</sup>好んだイギリス人は、ヨーロッパ大陸の人間にとって不思議な存在であった。かつて『イギリスの敵 The Enemies of England』と題された本が出版されたことがあったが(1903)、そこで著者ピール George Peel は「ヨーロッパ大陸の敵に対抗するために、イギリスは3200万ポンドを支出しているが、もしこれを運用に回していれば128万ポンドの利益が得られたはずである」と書いている。1688年以降の<sup>いこう</sup>対外戦争について、その開始日と終結日まで<sup>こくめい</sup>克明に議会に報告している国はイギリスだけだし、これほど金銭に<sup>しゅうちやく</sup>執着する国民はイギリスだけである。1665年に下院議長は国王に対して、「下院は金貨・銀貨を政府に預ける者に対して<sup>あずか</sup>預り証を交付することに<sup>しょう</sup>した」と報告している。「そうすれば河川が海に流れ込むように、イギリス

人の金貨や銀貨が国庫に流れ込んでくるはずである」。

1816年に所得税の廃止が議会で決定されたときは誰もが大歓迎だったが、そればかりか所得税が存在していたことを示す書籍とか記録類も焼却処分にすることが決定された。イギリスでは、税金の問題は公平（公正）・宗教・進歩・道義・繁栄の問題、つまり何物にも勝る最重要課題であった。1641年に議会が「大抗議文 Grand Remonstrance」を国王に突き付けたときも、不当な課税の金額や国王による無駄使いの金額を詳細に並べ立てている。それで国民に蜂起を呼びかけようと言うのである。そんなやり方はイギリス以外では考えられない。アダム・スミスが『国富論 The Wealth of Nations』を書いたのも道徳を論じるためであったが、彼も自分の道徳論が正しいことを論証するのに数字を使っている。

イギリス人の数字好きは、生活のあらゆる側面で確認することができる。相続される遺産は最後の1ペニーまで正確に記録されるし、貴族の資産額は予算項目の1つになっている。貴族が使うお金は、国王が使う国費と同じ扱いなのである。この貴族の資産こそが様々な施設が民間によって自主運営されるのを可能にしている。病院・博物館・公立学校を設立・維持しているのは、裕福な貴族であった。彼らは全員が『イギリス貴族録 Golden Book of Commonwealth』に登録されていて、イギリス独自の「民間資金供給源 stationes fisci」となっている。公立学校・病院・警察・道路などの建設と運営に中央政府が責任を負っている国では、稼ぎが悪い役人でも羨望の的となっている。役人が多い国では役人の数が問題になるが、イギリスでは役人の数が問題になることはなかった。数字好きのイギリス人は、予算の少なさが意味することをよく理解していたのである。

ドイツでは哲学、フランスでは自然科学が重視されるが、イギリスで重視されるのは経済学である。経済学はイギリス人の大好きな学問であった。戦争が無くなることはない信じていた人についてディズレーリ Benjamin Disraeli は、つぎのように言って拍手喝采を浴びたそうである。「彼らは、まるで5%の年利が当たり前だと考えている人みたいだ」。ヨーロッパ大

陸の国なら、対外戦争の是非を年利と関連づけて議論することなど考えられないことであつたし、それで拍手喝采を受けることなど考えられないことであつた。数字が全てのイギリスならではのエピソードである。

数字崇拜の時代になると、もはや大法官はイギリスを代表する存在でなくなってしまう。過去の政治制度を復旧させることが主張されていたにも関わらず、大法官が復旧してくることは無かつた。また、過去の「コモンロー」がそのまま復旧してくることも無かつた。「国王の良心」であつた大法官を復旧させる代わりに、ピューリタンたちは「星室裁判所 Star Chamber」をはじめ、教会裁判所に由来する「国王裁判所 royal courts」をすべて廃止してしまつた。「ピューリタンによる過去の復旧 Puritan Restoration」で、大法官に代わる者として「イギリス人の権利の保護者 keepers of the liberties of England」が短期間、任命されたことはあつたが、基本的に革命のあいだ宗教的・道義的に問題になる行為が罰せられることはなかつた。罰してくれるはずの教会裁判所が存在しなかつたからである。

17世紀末には国王の権力を牽制するはずの大法官の権限は、議会に移行していた。大法官は、もはや国王と臣下を仲介する存在ではなくなつていたのである。トマス＝モアのあと大法官に任命されたトマス＝クロムエルは（「修道士を懲らしめる金槌 Hammer of the Monks」と呼ばれて修道院の土地を取り上げるのには熱心であつたが、大法官が伝統的に持っていた義務には無関心であつた）、ヘンリー8世に「取り立てられ、気に入られていた人物 a man made and cried up」であつた（彼の曾孫のオリバー＝クロムエルは、トマス＝クロムエルが壊したイギリスの伝統的な政治制度を復旧させることで、偉大なカトリック教徒にして「国王の最後の良心 last true keeper of the King's conscience」であつたトマス＝モアの敵を討つことになる）。彼はトマス＝モアのあとヘンリー8世のお気に入りとなり、イギリスの富を独占していた修道院を解散させた。「資金調達と数字の代弁者 prophet of finance and figures」が「公平・公正の代弁者 prophet of equity」に取って代わつたのである。相変わらず大法官は「国璽」を管理していたが（現在でも変わっていない）、実権は「大



THE GREAT SEAL, 1651

1651年の国章（国璽）：アイリッシュ海を挟んでアイルランドとイギリスが描かれている。



THE KING'S SOVEREIGNTY ON THE SEAS, 1662

1662年の国章（国璽）：チャールズ2世が海馬に引かれた一輪車に乗っている

蔵卿 First Lord of the Treasury<sup>にぎ</sup>が握ることになり（「大蔵卿」は、公式には「経  
理担当官 Comptroller」の権限を受け継いでいるに過ぎない）、大法官は「貴族  
院 House of Lords」の議長となることで「大貴族 Lords」の仲間入りを果た  
したに過ぎなかった。20世紀になって「大蔵卿」は「首相 Prime Minister」  
と呼ばれるようになったが、公式の地位は「大蔵卿」のままである（「首  
相」に代わって「大蔵卿」の役割を担うことになったのが「財務大臣 Chancellor of  
the Exchequer」である）。「首相」がポストとして公式に認められるのは1905  
年のことだが、実質的には「名誉革命」後に登場してきたウォルポール  
Robert Walpoleが「首相」の役割を果たしており、そのときから「財務大臣」  
が「大蔵卿」に代わってその役割を担うようになっていた。「首相」が名  
称として使われるようになったのは、19世紀後半に登場してきた Диз  
レーリ内閣のときである。ちなみに内閣や首相の助言する委員会が議会  
に設けられているが、その名前も「財務委員会 Parliamentary Counsel of the  
Treasury」である。そのことから、イギリスでは「財務」がどれほど重  
要であったかが判ろうというものである。「王政復古 Restoration」のとき国  
王と下院のあいだで問題になったのは、財務と教会のあり方を誰が決める

かということであったが、最終的には下院が全権を握ることになった。

「財務大臣」はポケットに入れた予算案の紙切れのために毎年、苦勞す  
ることになった（最初の記録は1733年のもの）。彼がポケットから予算案を  
取り出して議会で提案する日は「予算の日 budget-day」ということで、そ  
の重要性から「祝日 popular holiday」とされている。「予算の日」を「祝日」  
にするような国はイギリスだけである。この予算案を書いた紙切れの内容  
を公表すべく「財務大臣」は議会に向かうわけだが、そのときは公邸（ダ  
ウニング街11番地）で群衆に迎ええられることになる。政治家としての力量  
は、この「財務大臣」時代の予算案づくりで試されることになっていた。  
ピット親子（2人とも William Pitt を名乗ったので、父親を父ピット the Elder、次  
男を子ピット the Younger と呼んで区別している）・アスキス Herbert Asquith・ロ  
イド＝ジョージ David Lloyd George・スノードン Philip Snowden らは、いず  
れも「財務大臣」時代の功績が評価されて有力な政治家となっている。た  
とえば子ピットは、赤字でどうにもならなくなっていたイギリスの国庫を  
税制改革によって黒字化するのに成功している。なおイギリス人が「財務  
好き liking for the budget」なのは、なにも彼らが欲張りだからではない。子  
ピットは一方でケチケチ政策を進めながら、他方で革命期のフランスに対  
抗するために6億5000万ポンドを惜しげもなく支出している。

## 第6節 「個別事例 particulars」<sup>こべつじれい</sup>と先例<sup>せんれい</sup>を重視する思想

「コモンロー」は、先例が何度も「再確認 reaffirmation」されることによ  
って復旧してきた。1628年3月26日にクック卿 Sir Edward Coke も、つぎの  
ように言っていた。「マグナカルタに反する王令は、すべて無効である」。  
「マグナカルタ」は全部で30回その有効性が「再確認」されており、その  
たびに国王も有効性を追認していた。

つぎのようなバーク Edmund Burke の言葉を読めば、イギリス人がどん  
な考え方を前提にしているかが判る。「国民とは空間的・時間的・数的に

限定されたものではなく、無限に広がっていく可能性を秘めているものである。特定の間人集団が偶然に任せて一時的に作り出すものではなく、何世代も掛けた熟慮の末に生み出されるものである。特別な環境の元、特別な性格の間人集団が長い時間を掛けて生み出すものであり、まるで衣服が自動的に体に合わせて作られるようなものである。…個人や集団にはできないようなことも、国民なら時間さえ掛ければできるようになる」(Burke, Works VI, London, 1856, p. 146, On a Motion made in the House of Commons, the 7th of May 1782, for a Committee to inquire into the state of the Representation of the Commons in Parliament)。

この考え方に対抗しようと思ったら、同じように先例主義で対抗していくしかない。ヨーロッパ大陸のカトリック教徒とプロテスタントは、どちらも「真の信仰 truth」なのかを巡って争っていた。ところがイギリスでは、両者の争いは「どちらがより古いかということ matter of precedent」を巡る争いになっていた。「国教会 Anglican Church」という言葉が何時、歴史に登場してきたかが問題とされたのである。この言葉が15世紀の文書に登場してきたことが重要なのであって、どちらが「真の信仰」なのかは問題でなかった。そこでイギリスのカトリック教徒も、ウエストミンスター大聖堂に刻まれている司教たちの名前を挙げて、すでに西暦600年に彼らがローマと交流を持っていたことを指摘して見せたのである。

19世紀になってイギリスに「原則主義の波 liberal indoctrination」が押し寄せてきたとき、デイズレーリはこう言って「原則主義 principles of logic」より「先例主義 English precedent」の方が優れていると主張していた。「先例主義こそが原則主義に勝る A precedent embalms a principle」。原則主義が支配的であった19世紀に、この考え方がイギリス人の先例主義を守っていた。

もともと、フランスがローマ時代のガリア地方と同じだとするのもフィクションに過ぎなかったが、先例主義もフィクションの一種であることに変わりはない。革命によってイギリス人が本当に実現したかったのは

中世の復旧などではなく、教会に対する支配権を国王から議会に取り戻すことであった(教会に対する支配権は、もともと議会が国王に与えたものであった)。

ロンドン市は国王から得た特権の代償として、毎年62+2/3ポンドを国王に支払っていた。1862年にこの支払いを止めるよう提案した者がいたが、その提案は認められなかった。慣習であるというのが、その理由であった。変えることはリスクを伴うからである。この場合は、ロンドン市が特権を失う可能性があった。「何故は禁句 Never ask why」がイギリス人の信念であった。原則主義はヨーロッパ大陸に住むプロテスタント君主の信条であって、イギリスの貴族は「個別事例 particulars」重視が信条なのである。厳密なことを言えば、「個別事例」という英語をドイツ語やフランス語に翻訳するのは不可能である(「公共心 public spirit」も同じく翻訳不可能である)。イギリスで弁護士に相談を持ち掛けると、かならず彼らは「個別の事情を説明してほしい Let me know the particulars」と言ってくる。1933年に70カ国の裁判所に対して訴訟手続きに関するアンケート調査が行われたことがあった。そのときイギリスの弁護士は、つぎのように答えていた。「回答することは不可能である。なぜなら、訴訟ごとに事情は違っており、売買契約は契約内容によって訴訟手続きが違ってくるからである」。

フランス語やドイツ語で「個別事例 particularité, Besonderheit」というと、それは悪い意味でしかない(一貫性がない・決まった形がない・全体構成的でない・独善的だ)。ところが英語では「個別事例」も先例も、ギリシャ神話に登場してくる巨人アンタイオスのように(アンタイオスは母なる大地に触れるたびに力を増して強くなった)、「コモンロー」との関係が証明されるたびに威力を増してくる。そこは国王ですら触れることができない領域であった。「特許状 particular charter」や「特権 particular privilege」は、国王の恣意的な権力から個人を守ってくれるのである。

ピューリタン革命のおかげで、イギリス人は「体系づくりとか整理整頓の精神 all feeling for system and economy of thought」を失ってしまった。「個別

事例」の海が国王の役人から自分たちを守ってくれると考えるようになったのである。ロンドン塔の案内人も、イギリス文学やイギリス史の専門家も、はたまた国家予算の改革を考える者も予算編成の責任者も、ことごとく過去に存在していた「個別事例」に拘る。しかし「個別事例」は、人間の頭のなかにしか存在しない。誰もが「特許状」や「特権」に拘る国では、「古い・古い old」という言葉ほど大切な言葉は存在しないのである。フランス語で「古い体制 Ancien Régime」というと、それは悪い意味である。ところが英語で「古いイギリス」というと褒め言葉になる Old England is a eulogy」(普仏戦争とパリコミューンの敗北後、フランス人が英独米の政治制度に無知なことに衝撃を受けて政治学院 Ecole libre des sciences politiques を創設し、そこで比較憲法を教えていたブツミー Emile Boutmy の言葉)。フランスの「旧体制」下で貴族は憎まれていたが、イギリスでは「准貴族 gentry」が「古いことは善いことだ Old」を合言葉に革命を成し遂げたのである。都市民も農民も「准貴族」の革命を支持していた。貴族のような古い家系とは縁がなかった小商人や借家人も、古い家系を誇りにしていた「准貴族」が国王の専制から自分たちを守ってくれると確信していたのである。古い家系を誇った「准貴族」のおかげで、全てのイギリス人が「貴族のように ennobled」感じ、「古い ancient」と感じていたのである。「古さ」は「新しもの innovation」好きの国王の専制から、イギリス人を守ってくれたのである。ところがフランスでは、「新しさ novelty」や「新鮮な驚き sensation」が大切にされた。「新聞 NEWSpaper」が民主主義体制を守ってくれるのである。ところがイギリスでは、「古い記録 records」が貴族を守ってくれていた。1794年にイギリスのある議員が、つぎのようなことを言っていたとの報告がある。「彼は下院が父祖たちによって採用され、いまに伝わっているやり方を放棄しないよう望んでいた。そしてまた、そのやり方を我々が子孫に残し伝えるよう望んでいた」。同じことをクック卿も 1628年5月8日に言っていた。

「賢い過去の世界 wise old world」ということで経験や慣習を一般化して

いる国は、イギリス以外には考えられない。英語で「素晴らしい過去 high old time」という言い方がされるが、フランス語で「古いやり方 vieux jeu」と言うのが最悪の意味になる。イギリスでは、古臭いものほど立派なのである。「ピューリタンによる過去の復旧 Puritan Restoration」以来、イギリスでは伝統的な形式や慣習が「伝統的だ」と言うだけで大切にされるようになった。判事が頭に被る鬘がそのよい例である。判事の鬘は、イギリスの法曹界がどれほど「新しさ novelty」を嫌っているかをよく象徴している。

ただし、その始まりは 17 世紀であって、それ以前でないことに注意する必要がある。欧米の急進派は「旧体制」や伝統的な偏見・迷信・特権・専制を嫌うあまり、イギリス人の「古物趣味 English passion for the old」を誤解している。イギリスでは、貴族が国王と対決するために「古い ancient」ことを大切にしているだけであって、それが歴史的な事実か否かは別問題なのである。1789年のフランス革命以降、フランスの急進派は教皇・国王・聖職者・貴族などの「古い」制度を拒否してきたが、この態度は気に入らない物全てを「資本主義的 capitalistic」と言って受け入れようとならない共産主義者と似ている。共産主義者にとって、過去は全て資本制社会と階級闘争で彩られているのである。私に「資本制社会は全部、嫌いだ」と言っていた子供がいたが、彼にとって資本制社会に存在していたものに違いなど無いに等しいのである。それと同じで、急進派にとって「古い」制度はどれも同じに見える。しかも、それが必ずしも「古い」とは限らない。「古い」振りをしているだけであって、本当はつい最近まで存在していた制度なのである。フランス革命でジャコバン派は「封建制度 feudalism」を敵視していたが、それは中世に存在していた「封建制度」とは別物であった。1789年のフランスには、「封建制度」など存在していなかったのである(フランス以外の国でも同じであった)。それは「新興貴族 young gentry」に苦しめられていた人たちが、革命遂行のために利用した言葉であった。イギリス革命を遂行したホイッグ党は、16世紀に登場してきた「新興貴族」であった。彼らは封建時代には存在していなかったし、封建制社会とも無

縁な存在であった。封建時代の言葉を使ったのは、そうすると「箔 patina」が付いたからであった。イギリスで「古い」という言葉は、法理論の「正統性 legitimacy」を主張するために使われたが、それはイギリスの貴族がある意図のもとでヨーロッパ大陸に持ち込んできた考え方に過ぎなかった。1815年にヨーロッパ大陸で「旧体制」を復活させるために「正統主義 legitimism」なるものが主張されたが、イギリスほど「正統主義」がよく当て嵌まる国は他にない。

## 第7節 オリバー＝クロムエルの家系

イギリスには約5000の「准貴族」が存在していたが、国王の専制からイギリス人を守っていたのは彼らであった。彼らは政治理論など知的なものとは無縁であった。大学は国王や教会のものであった。そこで彼らが頼りにしたのは「先例 precedent」であり「家系 pedigree」であった。

たとえばクロムエルは、自分の家柄がスチュアート王家に負けないほど素晴らしいことを誇りにしていた。「イギリス王国の名誉革命 glorious revolution of our monarchy」を実現した「オリバー＝クロムエル殿下 His Highness Oliver Cromwell」は、イギリス人が奴隷状態に陥ったり、専制君主の犠牲となったりすることを防いでくれたが、その彼が自慢にしていたのが家柄のよさであった。当時のイギリス人は、クロムエル家が連合王国すべて（イングランド・スコットランド・ウエールズ）の血筋を引いていると信じていた。スコットランドの血筋は、よる宗教改革のときヘンリー8世に取り立てられたことになっている祖先に始まるとされていた。つまり、スチュアート家と繋がっている可能性があったのである。しかも、スチュアート王家は祖先がウエールズ人執事オーエン Owen op Mergent であったのに対して、クロムエル家はウエールズの領主であったことになっていた。つまりピューリタン革命の英雄クロムエルは出自不明の人物などではなく、連合王国すべての血を引く良家の出身だと信じられていたのである。

イギリスの歴史を語るうえで、ラッセル家 Russells・ソールズベリ家 Salisburys・チャーチル家 Churchills の話は欠かせないが、イギリス史にとってもっと大切なのは「古い」という神話であった。これがプロテスタント国王のやりたがる「新規の政策 innovations」を防いでくれたのである。ピューリタンにとって、「先例」と「家系」は同じ意味であった。

クロムエル自身は、自分が貴族の出であることをそれほど問題にしていなかった。1654年9月9日に議会で、つぎのように発言している。「私は貴族 gentleman の出ではあるが、さほど有名でもなかった。しかし、まるで無名だったわけでもなかった」。彼が直面していた問題は、家系のよさだけで解決できるようなものではなかった。クロムエルの家系がスチュアート家ほどに良家であった否かはともかく、クロムエルが先例として参考にできるようなものが無かったことは確かである。彼が先例の復古だと言っていたことは、じつは彼が初めて歴史に登場させた新規の試みであった。これはイギリスでは衝撃的な出来事であった。彼の試みが受け入れられるようになったのは、それが新味を失ってからのことであった。彼は新規の思い付きで仲間を驚かせていたが、そのおかげで彼は本当の意味で支持者を集めることができなかった。

クロムエルが創設した「新型軍 New Model Army」(民兵 militia が動員された地域から移動するのを嫌ったことから、プロの兵士として採用した者を核に構成された部隊)はイギリスでは珍しく「新型」と名付けられていたが、革命の遂行に大いに貢献することになった。この構想は海軍にも導入され、商船隊の協力を前提に編成されていた古い海軍に代えて、商船隊の協力なしに戦える海軍が新しく創設された。「さらにクロムエルは、新しい軍隊の利用方法まで伝授していた。名誉革命後に復活してくる国王はクロムエルから地中海進出政策を引き継いでおり、さらに我々が現在『帝国主義政策 imperial policies』と呼んでいる海外進出政策もクロムエルから引き継いでいた」(Sir Julian Corbett, England in the Mediterranean II, New York, 1917, p. 298)。もちろんクロムエルの時代に「帝国主義政策」という呼び方が不適切である

ことは、この引用文の著者も知っていた。しかしクロムエルの言葉の使い方から、彼の意図していたことは明白である。

多くの研究者は、クロムエルの新しい発想や行動が「本能的だった by instinct」とか「無意識であった unconsciously」としているが、クロムエルが掲げていた目標は「王政復古 Restoration」とか「名誉革命」のような簡単なものではなかった。彼が新しい言葉を使うことはなかったが、それは古い言葉に新しい意味づけをしていたからである。古い言葉に新しい意味づけをしていたことに、当時のイギリスが置かれていた状況の新しさがあった。

イギリスが置かれていた状況が変わってしまったことについては、当時のイギリス人もよく知っていた。しかしミルトン John Milton ですら、「シオンのラッパ trumpet from Zion」（革命の合図）をどう表現してよいのか判らなかつたようであった。そこで彼は「改革の改革 reforming of the Reformation」としか言わなかつたのである。しかし彼のこの言葉は当時の状況をよく言い表している。イギリスは教会のあり方を改める必要に迫られていた。しかし、教会のあり方を変えるなどといったスローガンで大衆を動員することはできなかつた。「平等派 Levelers」（ピューリタン革命の過激派）の指導者ウインスタンリー Gerrard Winstanley が掲げたスローガンは、当時の雰囲気をよく伝えている。「肝心なのはこの世界を変えることである The spirit of the whole creation was about the reformation of the world」（彼がクロムエルに提示した『自由を実現するための法案 The Law of Freedom in a Platform』より）。彼は改革すべき対象を「教会」と言わずに「この世界 world」と言っていた。改めるべきなのは自分たちが住む「この世界」であって、祈るための「教会」ではなかつたのである。イギリスの国教会が問題なのではなく、「この世界」が問題なのである。クロムエルも「小英国主義者 Little Englander」に反論するとき、つぎのように言っていた。「神が我々に命じ給うたのは、イギリスだけでなく世界で何をすべきか考えることであつた」。

イギリス人がイギリスでやり遂げたことを「この世界」でもやり遂げよ

うと言う場合、その「世界」とは彼らが征服した地域をイギリスに併合することを意味していた。そこで登場して来たのが「共和国 Commonwealth」という言葉であつた（1649年5月19日にクロムエルは「残余議会 Rump Parliament」で、イギリスの政体を「共和国」にすると宣言していた）。

「共通祈祷文 Common Prayer」（イギリス国教会で信者が一斉に唱える祈祷文）・「庶民院 House of Commons」（下院）・「常識 common sense」などで使われている common という言葉が、この「共和国」でも使われていることに注目していただきたい。「共和国」は、ピューリタン革命まで「大法官 Chancellor」を介して繋がっていた教会と国家をともに包含していた。神学者バクスター Richard Baxter の次の言葉が、そのことをよく言い表している。「イギリス国教会もしくは共和国の一員たる者は、国教会もしくは共和国のために働かねばならない」。彼にとって「共和国」とは、教会と同じように宗教的な意味を持っていたのである。

## 第8節 新たな新しい世界像の誕生

新興国が世界に影響を与えるようになるには、まず自らの環境を変える必要があつた。ロシアが「世界的に影響のある global」国になるためには、まずヨーロッパ世界の東端に位置する国であることを止める必要があつた。そのために第一次世界大戦のとき、ヨーロッパ世界から自らを切り離れたのである。第一次世界大戦まで領有していたフィンランドやポーランドなどのプロテスタント国・カトリック国を放棄させられると、自らの信仰（ロシア正教）を革命の言葉で語り直すことが可能になり、ロシア本来のあり方を取り戻すことができた。フランスはナポレオン1世の統治下でヨーロッパ（ポルトガルからメーメル Memel 川まで）に残っていた封建制をことごとく廃止して見せたが、そうしないとフランス革命の理念が失われてしまう可能性があつたからであつた。

イギリスの場合も同じであつた。イギリスは統治制度が複雑だつたこと

から原則的なことが問題になることはなく、個々の事例ごとに議論がなされていた。それでも「共和国」の時代には敵意の壁を突き破る必要に迫られて、原則を大切にするという新しい試みがなされていた。「西の世界 Western World」(イギリスを中心とした新しい世界)を作ろうとしたのである。それは人為的に作られた世界であった。リバプールからボストン(イギリス東部の港町)に行くときとカナリア諸島(西サハラの前合にあるスペイン領の島)に行くときの心理的な距離に違いがなくなり、ニューカッスル・アポン・タイン New Castle upon Tyne(通称ニューカッスル)からオスロに行くときとザンクト＝ペテルブルクに行くときの心理的な距離に違いがなくなったのである。プリマスからスペインのマラガに行くのも、プリマスからエジプトのアレクサンドリアに行くのも、イギリス人にとっては同じことになった。もちろん実際の距離は違っていたが、もはや距離の違いは意味を失っていた。それまで5つの大陸を隔てていた海が1つの世界になっていたからである。『領海論 Mare Clausum』(文字通りの意味は「閉じられた海」)を書いたセルデン John Selden は、つぎのようなことを言っていた。「すべての海は、特定の国家の統治下に置かれるべきである」。かつて「古代のイギリス Britania」は「大洋に浮かぶ島国 Island of the Ocean」と呼ばれていたが、いまや「大洋を領有する島国 Ocean of the Island」となったのである。「イギリスの対岸にある国の海岸や港はイギリス帝国の領海に属すると考えるべきであり、イギリスの北や西に広がっている大洋は、その全域がイギリス領海の延長線上にあると考えるべきである」(John Selden, Mare Clausum of the Dominion or the Ownership of the Sea, London, 1662, p. 416)。

ナポレオン1世は1806年に2000年の歴史を持つローマ帝国(神聖ローマ帝国)があったところを「ヨーロッパ l'Europe」と名づけたが、クロムエルもナポレオンに負けない大胆さでヨーロッパの地図を描き変えていた。シェイクスピアが「ヨーロッパ世界の最西端部 that utmost corner of the West」と呼んだイギリスは、中世期の世界地図ではその片隅に位置していたに過ぎなかった。それが今や世界地図の中心に描かれるようになったの

である。「世界中で脚光を浴びるイギリスに全ヨーロッパが注目し驚嘆していた In the Light of the Sun, in the World's Amphitheatre, all Europe looking on and wondering」(Samuel Purchas, Purchas His Pilgrims or Relations of the World and the Religions observed in All Ages and Places discovered from the Creation into this Present, London, 1625, p.73)。地球上のすべての海が初めて1つに繋がったのである。「世界が大きな海に浮かぶ1つの島に思えた」(Purchas, p.58)のである。1つに繋がった海を、イギリスの国旗を掲げた船が物や人を運ぶようになった。歴史上初めて大陸より海が優先されることになったのである。まず海の問題が議論され、そのあとで大陸の問題が議論されるようになった。この転換をよく象徴しているのが、クロムエルが制定した「航海法 Navigation Act」であった(後世に編集された条文しか知らない現在の法学者たちは、この法律の重要性に気づいていない)。そのときクロムエルはジブラルタルをイベリア半島から切り離して、島にすることまで考えていた。

かつてイギリス人が海に出て行くことはなかった。イギリスはヨーロッパ大陸の国から侵略される受け身の立場を維持し続けていた。イギリス海峡を挟んでフランス側に領地を持っていたことから判るように、イギリス国王の出自はヨーロッパ大陸にあった。つまりイギリスの関心は南に向いており、南にあるヨーロッパ大陸との関係が欠かせない国であった。かつてフランス国王がイタリアにしか関心を持っていなかったように(1551～1559年のイタリア戦争でフランスはハプスブルク帝国に敗北してイタリアを失い、その後ハプスブルク帝国の影響下に置かれたイタリアに無関心になる)、イギリス国王はフランスとベルギー、つまりカトリック教会と神聖ローマ帝国にしか関心を持っていなかった(独立を果たしたオランダと違って、当時のベルギーはハプスブルク帝国領)。教皇や皇帝が大きな影響力を持つことを警戒していたからであった。教皇や皇帝が影響力を失うと、ヨーロッパ各国はそれに代わる新しい制度づくりに注力することになったが、ヘンリー8世が「朕は弱い方に味方する Cui adhaereo, praest」と言っていたことから判るように、イギリスはヨーロッパ大陸で「勢力均衡 balance of power」を

目指すようになった。

こうしてイギリスの「勢力均衡」政策が始まることになったのだが、チューダー朝時代のイギリスは、まだ「勢力均衡」政策を採用する意図を明確に意識していなかった。それがピューリタン革命で明確に意識するようになったのである。スペイン・フランス・ドイツ・ロシアのいずれかが強国になる可能性があれば、その国に対して対抗策を採ることがイギリスの大陸政策となった。さらにイギリスは、対立と戦争を繰り返す旧大陸のそとに「西の世界」（イギリスを中心とした新しい世界）を構築することにしたのである。

イギリス人が「世界 world」という場合、それはイギリス国王の支配下にあるキリスト教世界を意味していた。ところがドイツのプロテスタントは、イギリス人のように現世のために祈ったりはしない。彼らは、あくまでも天上の世界のために祈るのである。イギリス人の『祈祷書』にある「終わりなき世界 world without end」という言葉には、カトリック教会が伝統的に使ってきた「永遠に存続する et in secula seculorum」という意味はない。それはイギリス人に特有の「公共心 public spirit」が世界中に行き渡り、イギリスが中心となった世界を実現することを意味していた。

すでにシェイクスピアの時代にエセックス伯 Robert Devereux, 2nd Earl of Essex は、この変化を予測させる「旧世界と新世界の狭間で Seated between the old world and the new」と題した「14行詩 sonnet」をエリザベス1世に捧げていた。そこには国王も統治機構も伝統もない、広大な世界をまえに恐れ慄くイギリスの様子が詠われていた。かつて1098年に教皇につぐ地位を占めるとされていたカンタベリー大司教、あるいは「地上最強の支配者 alterius orbis imperator」とされていたザクセン国王などと違ってエセックス伯の「14行詩」に登場してくるイギリス国王は、新旧の大陸（ヨーロッパ大陸とアメリカ大陸）に対して責務を負うことが強調されていた。「ヨーロッパ大陸の西の果てで蒼穹を支えるアトラス神にとって、2つの大陸は荷が重すぎた Atlas himself did not bear such a burden」が、イギリスは「アトラス神

を越えて Trans-Atlantic」（大西洋を越えて）新大陸に乗り出して行くことになるのである。

16世紀にヨーロッパで「世界地図 Atlas」と言えば、それは地中海世界にモロッコを加えた地域を意味するだけであった。我々が現在「大西洋 Atlantic Ocean」と呼んでいる所は、16～17世紀のヨーロッパでは「西の大洋 Occidental Ocean」と呼ばれていた。この呼び方を応用して登場してきたのが「西の世界 Western World」（イギリスを中心とした新しい世界）という言葉である。これがカトリック教会と神聖ローマ帝国が支配していた世界に代わる新しい世界として登場してきたのである。しかし、だからと言って宗教的な意味が失われた訳ではなかった。「西の世界」とは、イギリスが制覇を目指した新しいキリスト教世界であった（ナポレオン統治下のフランスが「ヨーロッパ l'Europe」の制覇を目指したのと同じである）。とくに「西 Western」という言葉は重要である。そこには、世界制覇を目指すイギリス人の自負が込められていた。フランス語で「文明 civilisation」と言うと、それは「ヨーロッパ」にしか無いものを意味していたが、このフランス語が後にイギリス人が使うようになった「西の世界」という言葉に影響を与えて、1688年（名誉革命）や1658年（クロムエルの死）に「西の世界」が持っていた固有の意味（イギリスのキリスト教徒が抱く「公共心 public spirit」が支配する世界という意味）が判り難くなっている。つまり17世紀にイギリスで使われていた「世界 mundus」というラテン語は、予測のつかない「時間 seculum」が生み出すものから、法則によって支配される予測可能な世界に意味を変えていたのである。この新しい世界観を確立するためにデカルトが大きく貢献したことについては、すでに述べた通りである。ところがイギリス人が言う「世界 world」は、フランスの哲学者が言う「自然 Nature」だけに限定されることはなく、また頭のなかだけで考察するものでもなかった。

イギリス革命の代表的な詩人ミルトンは『失樂園』の最後で、こんなことを書いていた。「安住の地として選ぶべき世界が、今や彼らの目前に広

がっていた。そして神が彼らの導き手であった」。イギリス人の目の前には、「世界」が広がっていたのである。大洋の彼方に横たわっている大陸を見て、彼らは戦慄を覚えたはずである。そのとき彼らは、危険な航海に挑む者を詠ったホラチウス Quintus Horatius Flaccus の次のような詩を思い浮かべたに違いない。「初めて地中海に漕ぎ出すには、オーク材で造られて三重に銅板が巻かれた心臓が必要であった Illi robur et aes triplex circa pectus erat」(勇気ある者だけが地中海の荒海に乗り出せた)。イギリスを離れて世界を舞台に「イギリス連邦 British Commonwealth」を築き上げるには、尋常でない勇気が必要だったはずである。また神の導きを信じていなければ、達成不可能な事業であった。

チューダー朝までのイギリスでは、外国の問題に関心を持っていたのは国王だけであり、国王の外交政策は機密事項であった。ところがピューリタン革命以後は外国に行くイギリス人が増えて、誰もが外交政策に関心を払うようになった。「イギリス連邦」は、もはや国王や国王の役人だけのものではなくなったのである。外国にいるイギリス人、とくに外国に出かけて行ったイギリス船の乗組員は、全員がイギリスを代表する外交官であった。イギリス領の島々や石炭を補給するための港、5大陸に散在するイギリス領などは、もはや国王が外交政策の結果として手に入れたものではなかった。それはイギリスの興隆を願う民間人の努力の賜物であった。1881年にイギリス政府はスエズ運河会社の株を大量に入手するが、これも政府による外交政策の成果というより、民間人の活躍によるところが大きい。

イギリスの外交政策が柔軟で、難しい局面でも何とかやって行けたのは、世界中にいるイギリス人が目となり耳となって政府に情報を提供していたからであった。ときにはそれが雑音となって政府を悩ますことがあったにしても、在外イギリス人の協力が途絶えれば、とたんにイギリスの外交は機能不全に陥ることになった。サイモン卿 Sir John Simon やホール卿 Sir Samuel Hoare の時代、こうした民間人の活躍ぶりは頂点に達したが(2人と

も1930年代に活躍したイギリスの外交官)、それが可能であったのはイギリス人が外国に移住しても「イギリス人であることを忘れなかった yet remained English」からであった。キリスト教徒であることを忘れず、民主的なやり方を大切に、政府の権威を認め、司法独立の原則を忘れず、世論を尊重するのがイギリス人であった。

こうしたイギリス人の特徴が「西の世界」にも持ち込まれてきた。「世界が目の前に広がっていた」(ミルトン『失樂園』の最後の文章)からであった。海外に出て行くイギリス人は、神が約束してくれた世界が手に入っていると信じていた。このイギリス人の「天命 predestination」は、ふつう考えられているような抽象的なものでなく、具体的な内容を伴ったものであった。イギリス人は世界が自分を必要としておりと感じており、またイギリス人自身も小さな島国に留まっているつもりなどなかった。「川のほとりで鹿が(水を求めて)あえぐように hart panteth after the water-brooks」(『詩編』42:2)、世界はイギリス人の「公共心 public spirit」を求めて「あえぐ」のである。そんな世界に出かけて行って、イギリス人は世界を自分のものにしたのである。世界がイギリス人を歓迎したのは、イギリス人が携えてくるメッセージが広い世界によく対応していたからであった。

イギリス人が「海上で唱えるため be used at sea」の特別な祈りの言葉が1647年に考案されたことについては、のちに説明することにして(第11節を参照)、ここでは現在の『祈祷書 Book of Common Prayer』のピューリタン革命の痕跡は、この祈りの言葉だけだということを指摘して置きたい。他にもイギリス人のために用意された新しい世界(繰り返すが「ヨーロッパ」のことではない。「西の世界」のことである)を象徴する2つのシンボルも、それが作られたのはピューリタン革命のときであった。

新しい世界がエッセクス伯の「14行詩」に登場してきた時は、まだイギリスには教会の庇護が必要であった。エリザベス1世の統治下では、まだイギリス人は教会と国家が味方してくれることを期待していた。イギリスを象徴していたのは「国教会 Anglican Church」であった。スペインの無

敵艦隊を撃破したときに発行された記念メダルには、イギリスを象徴する教会が海のなかに聳え立つ岩の上に建てられていた。キリストがペテロ（ギリシャ語で「岩」の意味）の上に教会を建てたように（ペテロを後継者に選んだように）、イギリスも海のなかに聳え立つ岩の上に建てられたのである（スペインの後継者はイギリスであった）。また他のメダルでは、イギリスは月桂樹の王冠として描かれており、その外側に描かれた無力な無敵艦隊は、イギリスを侵略できないでいた。しかし、この2つのメダルに描かれている海は、まだイギリスにとって敵意ある存在であった。

ところがピューリタン革命で、海はイギリス人にとって違ったものに変わっていた。のちに大洋を支配することになるイギリス人の国境観が、すでに登場してきている。つまりイギリスの国境はイギリスの海岸線に沿って決められるのではなく、陸地と海の違いは無視されるようになったのである。

1640年までの「国璽 Great Seal of the Realm」に描かれた国王は「聖衣 sacred vestments」を身に付け、手には「王杖 scepter」を持って王座に附くか馬に乗っていた。ところが1642年、下院の影響力を示す新しい「国璽」を作成することが決定されて、国王の他に議会も「国璽」に描かれることになった。そして1651年、ついにピューリタン革命が目指すものを視覚化した「国璽」が登場してくることになったのである。裏にはテーブルを前に席に着いた下院議長と「職杖 Mace」が描かれ、表にはイギリス（イングランド+アイルランド）の地図が大洋に浮かぶ船と共に描かれるようになった。

この新しい「国璽」を1640年までの古い「国璽」と比較すると、ピューリタン革命の意味がよく判る。古い「国璽」には聖油を受けて王位に就いた国王が宗教的な権威を背景に統治している様子が描かれているが、新しい「国璽」にはイギリス海峡（イギリスとフランスの間にある海峡）とアイリッシュ海（イギリスとアイルランドの間にある大西洋の一部）を支配下に収めたイギリスが描かれている。艦隊が描かれていることから、新しく登場して

きた「共和国 Commonwealth」の前例のない偉業、つまり下院が統治する「イギリス王国 Realm」が海を支配下に置くのに成功したことが判る。いまや海を支配下に置いた下院は王権を凌駕し、大洋と大陸を支配する「天命 predestination」を信じるまでになっていたのである。

1651年の「国璽」に、すでに名誉革命の成果が予兆されていた。このとき（1651年は「クロムエル航海法 Navigation Act」が制定された年）、イギリス人の世界を見る目が変わってしまったのである。かつて彼らも「秘跡 sacraments」を信じ、カトリック教会の教えを信じていた。いまや「世界」が信仰の対象とされるようになった。「永遠に存続する天上界 from eternity to eternity」が「終わりのない世界 world without end」に取って代わられたのである。

この解釈が間違っていないことは、「クロムエル航海法」を見れば判る。「神のご加護の元イギリスの船が運ぶ船荷を増やして海運業を盛んにすることは、イギリスの繁栄と平和にとって欠かせないことである。そこで次のように法律で定めることにした。…アジア・アフリカ・アメリカをはじめ、およそ地図に描かれている全ての場所やイギリス出身の移民が作る産物は、それがイギリスとアイルランドに輸入される場合、例外なくイギリスの船によって運ばなければならない。またイギリスの漁師が捕った塩魚は、この法律の制定以降は、イギリス以外の船で運ばれることがあってはならない」（For the increase of shipping and the encouragement of the Navigation of this Nation, 9th Oct. 1651）。

この法律で使われている「イギリス人 people of this nation」という言葉も翻訳不可能な言葉である。いまや世界中の航路が、この「イギリス人 people of this Commonwealth」のものなのである。彼らにとって、もはや「海はイギリス人の敵ではなくなった sea is not a foe, not an enemy of men」と言うのである。かつて「イギリス人が邸宅を構えていた田舎 county」では、農地・牧草地・放牧場・森林・湿地が「領主館 manor」を取り囲んでいたが、それこそが「イギリス人」の生涯を賭けて手に入れるべき目標であった。そ

れが無くなった今、世界を手に入れることが「イギリス人」の生涯を賭けて手に入れるべき目標となったのである。

いまやイギリス全体が「領主館」に代わり、耕すべき農地は海を越えたところに存在することになった。「領主館」のテーブルは下院議長のテーブルに変わり、下院議長のテーブルで「領地経営のやり方 husbandry」が決められることになった。のちのイギリスの発展は、このとき基礎が固まったのである。インド帝国を創設したディズレーリや、自治領とイギリス本国の関係を平等にすることを決めたオッタワ（カナダ）の帝国会議 Imperial Conference at Ottawa（1932年）は、1651年の「クロムエル航海法」が生み出した結果なのである。

私に言わせれば、1651年の「国璽」ほど当時のイギリスが置かれていた状況を雄弁に物語っているものはない。イギリスを取り巻く世界は大きく変化したのである。革命が起り、旧い考え方や価値観が新しい考え方や価値観に取って代わられたのである。これこそ本当の意味での「全体革命 total revolution」であった。すでに書いたようにロシア革命とフランス革命も、言葉・考え方・国民性を根底から変えてしまった「全体革命」であった。

## 第9節 盗まれた「革命」

1641～60年の時期、つまり内戦が始まったときからチャールズ2世の帰国までの時期は「革命」期とすべきである。なぜなら、この時期に「自由の復権 Restoration of Freedom」が実現し、イギリスは新しい時代を迎えることになったからである。それなのにイギリスでは、この「革命」が「反乱」と呼ばれている。「議会と協力して統治する国王 King in Parliament」の制度を守るために、生身の国王チャールズ1世と戦った連中を「反乱者」と呼ぶのである。それは彼らに対する侮辱を意味する。チャールズ2世の帰国後に召集された「騎士議会 Cavalier parliament」の立場からすれば、たしかに彼らは「反乱者」かもしれないが、クロムエルやピム John Pym を「反乱者」

と呼ぶのはスチュアート朝の復位を画策した「王党派 Jacobites」だけであり、ホイッグ党員が彼らを「反乱者」と呼ぶことは無いし、1641～60年の出来事を「内乱 Civil War」とか「大反乱 Great Rebellion」と呼ぶこともない。ホイッグ党を代表するホーレス＝ウォルポール Horace Walpole（イギリス最初の首相と言われているロバート＝ウォルポール Robert Walpoleの息子）がそう呼ぶことは、絶対にあり得ない。海にも「イギリスの法律が適用される made appropriate to all the Laws of State」ことになったのは、チャールズ2世にとって貴重な「革命」の遺産であった。1662年に作られた「国璽」のチャールズ2世は、手に三叉の槍を手に持ち、馬車に乗って海上を走る姿で描かれていた。その銘文に「海を支配するのはイギリスである Britannia rules the waves」とは書かれておらず、「世界のどこに居ても、イギリス人は支配者である et penitus toto regnantes orbe Britannos」と書かれていた。1654年にクロムエルの指示でマンク将軍 General George Monk はポルトガルとの同盟を実現し、おかげでイギリスは大西洋に面したポルトガルの海岸線と、その対岸にあるタンジェ港を支配下に置くことができた。1661～84年には、タンジェ港が後のジブラルタル港と同じ役割を担っていたのである。スチュアート朝の国王たちはクロムエルが残した遺産を大切にしていたが、議会はそうではなかった。チャールズ2世が王位をカトリック教徒の弟ヨーク公（のちのジェームズ2世）に継がせようとしたことを理由に、タンジェ港の経費支払いを拒否している。これがチャールズ2世統治下で議会が行った最後の決議であった。クロムエル時代の遺産に関するかぎり、それを大切にしたのは国王であって議会ではなかった。

では、なぜスチュアート朝はこうも短命に終わったのか。ウォルポールは、1649年に発行されたチャールズ1世を処刑するよう命じた死刑執行令状（議会が任命した特別法廷が発行。そこに署名した者は、のちに処刑されるか亡命を余儀なくされる）を寝室の壁に飾り、それを1215年に公布された「マグナカルタ Magna Carta」（偉大な文書 Great Charter）に匹敵する重要な文書だとして「カルタマヨール Carta Major」（もっと偉大な文書 Greater Charter）

と呼んでいた。もっともウォルポールは例外で、ほとんどのイギリス人はウォルポールの悪趣味を非難したはずである。また彼らは、ウイリアム3世をイギリスに招いたことで臆病者とか裏切り者とか言われた者の方を賞賛したはずである。ただし彼らは、長いあいだ内戦時代の「急進派 Roundheads」を支持することはなかった。歴史家たちも、クロムエルをはじめ「急進派」が「准貴族 gentry」であったことを認めようとしなかった。この潮流を変えたのがフランスの歴史学者ブツミーであった (Emile Boutmy, Essai d'une psychologie politique du peuple anglais au XIXe siècle, 1901)。内戦時代のイギリスで「地方 county」を支配していたのは、「准貴族」であったことを彼は証明して見せたのである。革命政府は、この「地方」を支配していた有力な「准貴族」を使ってイギリスを支配していた。クロムエルは、そんな「准貴族」の典型であった。初めて下院に選出されたとき、自分は身分が「高過ぎず、低過ぎず neither too high nor too low」と言っていたが、この彼の言葉は「控え目に過ぎる too modest」。彼の同志たちは、クロムエル家とスチュアート家の家柄に大きな違いがあるとは思っていなかったのである。

つまりホイッグ党をはじめイギリス議会の味方を自認する者は、1688年のホイッグ党よりも1641年の革命派に感謝すべきなのである。「准貴族」がこうも低姿勢だったのは、ピューリタン革命を実現した祖先の行動を恥じていたからでなく、ビクトリア朝時代に特有の「外聞を大切にする風潮 Freudian repression」が原因になっていたからであった。ピューリタン革命は「行為や行動 acts and deeds」が過激だったというより、「言葉や言葉遣い words and speech」が過激だったに過ぎなかった。1640年の「革命派 radicals」に相応しい呼び方が、1660～88年に「盗まれてしまった had been stolen」のである。「誇るべき成果 honest title」が「恥しいこと shame」にされてしまった。平和な時代に「内戦や反乱 civil war and rebellion」を善しとするのは憚られることであった。そこでイギリス人は「革命派」の先祖と縁を切ることにしたのである。

クラレンドン伯 Edward Hyde, 1st Earl of Clarendon に率いられた王党派は、見事に革命の成果を盗み取った。チャールズ2世は連合王国の国王として復位したが、もともと3つの王国を連合王国として1つに束ねたのはクロムエルであった。このやり方は、のちに保守派が自分たちの「反革命」を「名誉革命」と呼んだのと同じやり方であった。スチュアート朝による「王政復古 Restoration」は、「世界革命 world revolution」を唱えていたボルシェビキ党に反対する勢力が「革命」の意味を変え、「一国社会主義」を登場させたソ連の事情とよく似ている。いま「革命」と言えば国内に限定された「国単位の革命 national revolution」しか意味せず、もともと「革命」という言葉が持っていた「世界革命」の意味が無くなっている。このように「革命」が元々持っていた意味が失われて意味が曖昧になり、保守派までが「革命」派を自称できるようになった。おかげで革命後の不安定な情勢を安定化するために必要な変化を起こすことが可能になり、不要な混乱を避けることができるようになった。

イギリスでも同じようなことが起きていた。復古を目指した革命派以上に復古的な王党派が「王政復古」を実現することになった。本当なら「ピューリタン革命」と呼ばれるべきものが19世紀の歴史家によって「王政復古」と呼ばれることになったが、その理由は1815年にフランスでブルボン王朝が復活してきたからであった。フランスでは、「王政復古」によって革命の終焉が宣言されたのである。

ただイギリスで1660年にスチュアート朝が復帰したとき、終焉を宣言すべき革命はイギリスに存在していなかった。「名誉革命」は「王政復古」のあとから起きているからである。つまり1660年のスチュアート朝による「王政復古」は、1815年のブルボン王朝の「王政復古」とは意味が違っていたのである。1815年のフランスでは、革命の時代を終わらせるために「王政復古」が登場してきたが、1660年のイギリスでは、革命を継承するために「王政復古」が登場してきたのである。ピューリタン革命が目指したものと、復帰したスチュアート朝の国王が目指したものは同じで

あった。「王政復古」は和解を意味していた。復帰した国王は革命の遺産を引き継ぐことを強調していたが、それはイギリス人を安心させるためであった。「王政復古」とは言っても、国王が任命した大臣たちはピューリタン革命と同じ目標の実現を目指していた。国王もピューリタン革命と同じことを実現しようとしていたのである。チャールズ2世もピューリタンたちと同じように、イギリスの「伝統的な体制 Constitution of King and Country」を復旧させるつもりでいた。

クラレンドン伯は1660年のチャールズ2世の即位に際して『ブレダ宣言 Declaration of Breda』を公布させたが、その目的は「誰も罰せられる心配をせずに済むよう、また将来も罪に問われることがないよう、さらに王政復古によってイギリスの静謐と幸福が失われないよう、また国王と議会の持つ正当で伝統的な基本的権利を実現するため」であった。

『ブレダ宣言』から判ることは、国王が可能なかぎり「准貴族 gentry」の要望に沿うよう努力していることである。『ブレダ宣言』は議会の優位性も認めていた。チャールズ2世が望んだ常備軍を議会が認めないと決めたとき、クラレンドン伯は国王に「イギリス人が伝統的に有していた冷静さと纏まりの良さを取り戻す restoring the whole nation to its primitive temper and integrity」ようアピールさせていた。

こうして王党派は「復古 Restoration」という言葉を「急進派 Roundheads」から奪い、歴史書から「革命派」による「復古」という事実を消し去ってしまった。『統一祈祷書 Book of Common Prayer』も1660年の改訂で、チャールズ2世が即位した5月29日を「大反乱 Great Rebellion が終わったことを神に感謝する日 Thanksgiving Day」と定めている。1649～60年（チャールズ1世の処刑からチャールズ2世の復位まで）の期間を「大反乱」と呼ぶことにしたのである。政治の問題が宗教の世界に登場してきた最初の事例であった。それまで教会暦に政治的な事件を登場させた例は無かった。こうして教会の権威づけによって「王政復古」は確実なものになったのである。言い換えれば、1640年に「復古」を目指した「急進派 Roundheads」を「反

乱者 rebels」呼ばわりすることで、教会は政教分離の原則を放棄してしまったのである。

お陰で「革命派」は、人間扱いされなくなった。国教会の「聖なる呪い sacred curse」が築き上げた壁を乗り越えたければ、「革命派」自身も「聖なる divine」存在になるしかなかった。それがホイッグ党だったのである。「議会と協力して統治する国王 King in Parliament」が公布する命令に代えて、「聖なる存在 divine Providence」が公布する命令が登場することになった。政治の場に「神 Heaven」が登場してくることになったのは、「革命派」の責任ではなかった。「大反乱」を抑え込んだ政治事件に教会の祝福を求めた王党派こそ、その責任を負うべきであった。こうして「名誉革命」の神学が新たに登場してくることになった。

## 第10節 全能の「下院 House of Commons」

イギリスの学校でも事実の大切さが教えられているが、イギリス人がいう「事実 facts」はヨーロッパ大陸でいう「事実」とは別物のようである。イギリスでは、何を「事実」とするか決めるのは議会である。何事も「下院」のテーブルで取り上げない限り（イギリスの「下院」は向き合ったベンチ席にそれぞれ与野党の議員が座っていて、その間にテーブルが置かれている）、それは「事実」とは見なされないことになっている。「下院」のテーブルに乗らない限り、いかなる問題も無視されるのである。

「下院」中央のテーブルは単なる家具ではない。それは「下院議員たちの共用 communistic」

テーブルである。いまでもイギリスの下院議員には、個人用のテーブルもデスクもない。どこの国でも国会議員は最大限、優遇されているものだが、議会制の母国イギリスの議員は、優遇されないことを誇りにしている。「議員先生たち Right Honourables」は議員共用のテーブルを囲むことで、同じ家族の一員であることを誇示しているのである。自分たち専用のテーブル

や個室はないが、共用のテーブルに足を乗せて寛ぐことができるし、おかげで「下院」が自宅のように親しみある場所となるのである。「下院」の業務処理は内輪だけの親密な雰囲気なかで進行する。議案を巡る論戦も、まるで非公式な意見交換のようである。それには理由があって、イギリスでは法制定のまえに「政治 politics」（イギリスでは「意見の集約」を意味する）が先行するのである。議論をしているのは「法制定者 legislators」ではない。議員たちは、あくまでも非公式に意見交換を行っているに過ぎないのである。お互いに意見交換することで「議長 Speaker」に議員として意見を述べているのである。国政のあり方を決める「国务会議 Council of State」（ピューリタン革命期の共和国統治機構）に出席できる「議長」に、議員として意見を聞いて貰っているのである。「下院」内部の議論の内容を外部に披露できるのは「議長」だけであって、「下院」で議員たちが交わす議論は法的には「私的な会話 whisper and murmur」でしかない。誰が何を言ったかは問題にされないのである。発言者の名前が公表されることもない。「議長」が発言者を指名するときは、「イプスウィッチ Ipswich 州選出の議員」とか「バス Bath 州選出の議員」、あるいは「リバプール州選出の議員」としか言わず、個人名を公表することはしないのである。各議員はイギリス各地（イングランドの52「州 counties」とスコットランドの33「州」）の代表として「下院」に出席しているからである。「州選出の議員 Knights of Shires」と「都市選出の議員 Citizens of Boroughs」が「下院」の構成員であると言い換えることもできる。彼らは裁判所で「陪審員 juries」が「判決 verdict」を下すときのように、「臣民 King's subjects」の苦情を国王に伝えるべきか否か、あるいは「国王が要求する予算 King's budget」を認めるか否かを決めるのである。また「陪審員」と同じように「国民 public conscience」を代表する者として匿名の存在とされる。「陪審員」は全員が「丸」となって1人の裁判官に対応することになっており、そこで12人いる「陪審員」は個人としては12分の1しか権利を持たないことになる。「下院」議員も同じように、個人としては658分の1しか権利を持たない。そして議員全員を代表するのが「議長」

なのである。

「下院」議員が匿名でなくなるのは、議員が規則違反を犯して「下院」から除名される時である。そのとき「議長」は議員の個人名を公表する。議論の最中に議員の誰かが規則違反を犯すと、他の議員は「議長」に向かって規則違反者の名前を公表するよう要求する。もし「議長」が名前を公表すれば、その瞬間に議員は議員資格を失うことになる。ただし規則違反に対する罰は、そこまでである。組織のメンバーが規則違反を犯したことで個人名を明らかにされ、その瞬間に組織のメンバーでなくなるのである。破門に処されたということである。

それにしても、匿名でなくなった瞬間に組織の一員でなくなるというのは皮肉である。「下院」議員であるということは、「共同体 communion」の一員であることを意味した。隊長に率いられた兵士（同じパンを食する共同体の一員）や「陪審長 foreman」に率いられた陪審員なども「共同体」の一員であって、匿名の存在である。ところがフランスでは、国会議員が匿名の存在と化すことはない。フランス人を匿名の存在としないこと、これがフランス革命の目指したことであった。

すでにロシア革命で指摘したとおり、「労働力」でしかない人間は「国民」とは別物である。「労働力」ということでは番号で呼ばれる存在でしかなく（たとえば7966号）、電力の大きさをアンペアで測るようなものである。ところがフランス人は、あくまでも個性を持った人間であった。それと違ってイギリスの裁判所や下院の「名士 squire」は、集団の一員ということで匿名の存在と化すのである。

チャールズ1世が「大逆罪 High Treason」を犯したという5名の下院議員を逮捕すべく下院に役人を向かわせたとき、下院の議長は国王が派遣した役人のまえで「跪いて国王の許しを請い、自分は下院に仕える身であって下院が命じない限り5名の名前を教えるわけにはいかない」と返答していた。下院の議長ですら、下院では国王に仕える個人ではなくて下院という「共同体」の一員なのである。

下院議員は、下院という「共同体」に属する匿名の存在ゆえに特別の権利も認められていた。ところが上院議員は匿名の存在にはならない。あくまでも個人としてその名前を保持するのである。議案に異議を唱えたときは、その理由と個人名が議事録に記録される。ところが下院議員の場合は、そうはいかない。1641年に下院が国王に提出する『大抗議文 Grand Remonstrance』を採択したとき（このとき下院は抗議文を印刷してロンドンで配布し、国王に訴えるのではなく国民に訴える形を初めて採用した）、それに反対した議員がロンドン塔に幽閉されたことがあった（いったん下院で決議がなされたら、反対派は沈黙を守るのが規則であった）。このときも議員は1人ではなかった（沈黙を守らず反対の声を上げたことで規則違反に問われ、ロンドン塔に幽閉された議員は5人）。下院議員は個人では何もできず、必ず誰かの助けを必要とする。また議案を提出するときも、発言の機会は一度しか与えられないことになっていた。なぜなら、下院議員は「共同体」の一員であって個人ではないからである。

下院が政党間の対立によって機能停止に陥ることもなかった。議員同士で討論したり院内秩序を維持したりする場合も、政党が介入することはない。少数派の権利が少数派であるということで軽視されることもない。なぜなら、少数派も「共同体」の一員であることに変わりはないからである。

下院議員には「免責特権 immunity」が認められていたが、それは個人の特権として認められているのではなく、議員が下院「共同体」の一員だからである。下院内での行動や発言については、だれも責任を問われないという原則が「免責特権」の理由である。

こうしたイギリス下院の原則が大陸諸国では誤解されたままであった。どの国もイギリスを真似て議会制を導入しているが、イギリスの議会制がどう機能しているか理解していない。たとえば「反対派 opposition」の存在がある。これは、もともと天文学で使われていた「衝 opposition」（惑星や月が地球に対して太陽と正反対の方向にくること）という言葉からきているが、大陸諸国で「反対派」との妥協など有り得ないと考えられている。「反

対派」とは敵であり、粉碎の対象でしかないのである。ところがイギリスに大陸諸国の様な「反対派」は存在しない。「分離派 division」が存在するだけである。「分離派」は1つに限らない。ロバート＝ウォルポールは、3つもの「分離派」をコントロールして政権を維持していた。

「反対派」の語源は天文学の「衝」であったが、それは一時的な現象に過ぎない。「衝」はやがて「合 conjunction」（惑星や月が地球に対して太陽と同じ方向にくること）に変わることから判るように、「衝」と「合」は星の動きが示す一時的な現象に過ぎない。政治の世界も同じであった。「衝」であったものが「合」になり、「合」であったものが「衝」になる天体の動きは、政治世界のモデルであった。つまり「反対派」の存在は政治にとって欠くことができないものなのである。匿名の議員によって構成される下院や、匿名の陪審員によって構成される裁判所は、経験の産物というより天体の運行に例えられるような「至高の sovereign」存在なのである。

下院が全てであった。「下院が世界の全てであった To be out of Parliament is to be out of the world」とは、ロドニー提督 Admiral George Rodney の言葉である。ここで彼がいう「世界」とは、フランス人の言う理屈だけの世界、十進法のような人為的・抽象的な計測の世界ではなくて、経験の世界＝地球と海・星と太陽・日の出と日没・潮の干満の世界であった。

## 第11節 議会の管理下に置かれた教会

17世紀の歴史家に言わせると、教会はイギリスの体制全体を支える「要 key」なのだそうだが、私に言わせれば教会とは中に入るために特別な「鍵 key」が必要な建物であり、工夫をすれば何とか「鍵」を手に入れることができる建物であった。ホイッグ党は伝統を重んずるが故に、ホイッグ党よりも古い「教会 Anglican Church」を支配下に置く必要があった。そして、その目的は達成されたと言ってよい。「王政復古」と「革命」は本来、逆のことを意味するはずだが、ホイッグ党はそれを同じ意味で使い、その

お陰<sup>かげ</sup>で教会を「下院」の支配下に置くことができた。ピューリタン革命も「ホイッグ革命 Whig Revolution」も、教会を支配下に置くことで成功したのである。「古き良き時代のイギリス Merrie Old England」（エリザベス1世時代のイギリス）の「准貴族 gentry」や「軍司令官 officer of militia」（軍司令官も「准貴族」であった）は、プロイセン・ポーランド・ハンガリーの「貴族 Junker」に負けないくらい特権的な地位を占めており、しかも大陸諸国のどの「准貴族 gentry」や「下院」よりも宗教を政治的に利用できる立場にあった。ただし、王権に対抗するためにプロテスタンティズムを利用したハンガリーの「准貴族 gentry（ハンガリー語でも英語を使用）」は、むしろイギリスと似ている。

イギリスの「准貴族」は「マグナカルタ」の復旧を政治的な目標に掲げていたが、マグナカルタが成立した1215年は、400人以上の司教たちが出席した第4回ラテラノ公会議が開かれた年でもあった（この公会議でカトリック教会の重要な決定<sup>かぞおおくだ</sup>が数多く下された）。このときイギリスの教会はローマ教皇の統制下にあり、カンタベリー大司教であったランフランク Lanfranc やアンセルム Anselm も、「第2の世界 orbis secundus」（1090年当時、教会はこう呼ばれていた）に関してはローマ教皇の権威を認めていた。またベケット Thomas Becket が国王の意<sup>い</sup>に逆<sup>さか</sup>らって教会の自由を守ろうとして殺害された時も、ベケットは殉教者として列聖<sup>れつせい</sup>されていた。1172年（ベケットの殉教）から1535年（ヘンリー8世の『国王至上法 Act of Supremacy』の制定）まで、12月30日は聖ベケットの日であった。聖ベケットの日は、国王が聖職者を任命することも裁くこともできないことを象徴していた。ベケットの墓は、国王や貴族の支配に抗した教会の象徴として巡礼地になっていた。1535年にヘンリー8世が『国王至上法』を制定するが（この法律により、ローマ教皇に代わって国王が教会の長となる）、それに対する民衆の出した答えが翌年に起きた「恩寵の巡礼 Pilgrimage of Grace」（十字架上でキリストが両手足<sup>わきばら</sup>と脇腹<sup>お</sup>に負った聖痕<sup>せいこん</sup>を旗印<sup>はたじろし</sup>に、ヨーク州 Yorkshire の民衆が起こした反乱）であった。反乱が起きたのはヘンリー8世が教会から「特権 liberties」

を奪<sup>うば</sup>ったからではなくて、ヘンリー8世が議会に教会の「特権」を奪<sup>うば</sup>わせたからであった。「マグナカルタによって教会に認められていた特権を議会が奪<sup>うば</sup>ったのである」（Albert F. Pollard, *The Evolution of Parliament*, 2nd ed. New York, 1926 p. 215）。

中世の法制度である「コモンロー」を復旧させようとした下院が、教会を支配下に置くという可笑<sup>おか</sup>しい結果を招いてしまった（教会の自由も中世の法制度の一部であった）。下院は一方で中世の法制度を復旧させようとしながら、他方で世俗の権力から自由であったはずの教会から自由を奪<sup>うば</sup>ってしまったのである。この「復旧 restoration」と「破壊 destruction」のために下院は法的なフィクションを利用したが、この2つは意味が正反対であった。教会の「普遍的な catholic」側面を「破壊」するために国王は下院の味方でなければならず、また国王は聖職者の給与や地位を決める権利を下院に認めてくれる存在でもなければならなかった。さらに聖職者も地方に在住する「下院の味方 Christian gentlemen」でなければならなかった。かつてのように、大学の神学者が教会の教義に影響を与えることは無くなったのである。彼らは国王の利害を代弁するか、あるいは国王に抵抗するローマ教皇の代弁者でしか無くなったからである。

下院には頼<sup>たよ</sup>りになる先例<sup>せんれい</sup>があった。国王は教会に対する支配権を確立するにあたり、『共通祈祷書 Book of Common Prayer』を国民に与えたが（この美しく装丁された『祈祷書』は、400年経った今でも使われている）、『共通祈祷書』のお陰<sup>かげ</sup>で「共通 common」という言葉に宗教的な意味が付け加わることになった。『祈祷書』の「共通」という言葉と「下院 House of Commons」の「平民 common」という言葉から、「イギリス連邦 British Commonwealth of Nations」（グレートブリテン島にあるイングランド・スコットランド・アイルランドの3国民が形成する目的・利益を共通にした連合体）という考え方が生まれてくる。

最初の『共通祈祷書』は1549年に作られたが、その内容は「平民 common man」の意向<sup>そ</sup>に沿ったものであった。たとえば、それまで使われ

ていた「聖なる礼拝 divine service」（聖職者が主宰する）という言葉に代えて「一緒に唱える祈り common prayer」という言葉を使うことで、聖職者と信者の違いを無くそうとしていた。『共通祈祷書』の序文に、「どれほど人間が工夫を凝らして作ったものであっても、時間の経過とともに腐敗・墮落しないものはない」ということで、「聖なる礼拝」と呼ばれていたものを、「一緒に唱える祈り」と呼ぶことにしたのである。こうして共同体を明るく照らしていた聖なる中心（カトリック教会）は、新しく構想された「共同体」に取って代わられることになった。伝統あるローマ教皇に代えて、平等な資格のメンバーが構成する「共同体」が登場してきたのである。

さらに『共通祈祷書』では、「信者の集まり praying community」が礼拝の主人公とされていたが、ルター派の教会では東方正教会やカトリック教会と同様、信者は個人として罪の告白を行っていた（「罪びとである私は… Ich, armer Sünder…」）。信者個人に「私」と言わせるようにしたことがルターの誇りであった。ところが『共通祈祷書』に「私」という呼称はなく、「我々 we」が登場してくるだけである（1880年代にアメリカのルター派教会は、アングロサクソンの「信者共同体 congregation」に譲歩して「私」の代わりに「我々」を使うことを認めている）。「私」に代えて「我々」が採用されたのは、1549年に最初の『共通祈祷書』が作られたときであった。ミサ（キリストの体を象徴するウエハースを信者が司祭から頂き、それを口にすることで死後の復活と永遠の命が約束される儀式）でも、それまでのように「不特定の列席者 all here standing around, circumstantium」のために祈るのではなく、「キリストの名のもとに集まった信者共同体 this thy congregation which is here assembled in thy name」のために祈るようになった（1549年以降に、これが「イギリス国教会 Anglican Church」の基本的な考え方となり、やがてイギリス人に固有の「公共心 public spirit」を生み出すことになる）。「信者共同体」が儀式の主役となったことは、讚美歌の唄い方からも確認できる。聖歌隊ではなく信者たちが独唱者の問いかけに応える形で唄うのである（ルター派の教会では信者は唄わず、聖歌隊が唄う）。「イギリス国教会」は信者をミサに参加させ、信者を

主役にしたのである。それは「下院議員 Commons」が王国の主役になったことに対応していた。教会の主役は「信者共同体 Congregation」であった。かつてイギリスにも存在した「聖職者と信者 clericus et populus」の区別が無くなったのである。『共通祈祷書』には「信者共同体 populus Christianus」という概念しか存在しない。「信者共同体 grex」（grex は、もともと「人間集団」を意味するラテン語）が教会の主役になったのである。

そのことは、「聖職者 parson」が「召使 minister」（「神の召使」ということで「牧師」という意味に使われるし、「王の召使」ということで「大臣」の意味に使われる）と呼ばれるようになったことから確認できる。ルターは「博士 magister」が身に付けるガウンを着てウイッテンベルク大学で講義したが、この「博士」という言葉がイギリスで「博士」の意味に使われることはなかった。「聖職者」は minister（ラテン語の「小さい minus」が語源）であって magister（ラテン語の「大きい magis」が語源）ではなかったのである。ホブズ Thomas Hobbs もルター派教会と「イギリス国教会」の違いについて、「イギリス人は説教台を、博士のもの magisterial とは考えず召使のもの ministerial と考える」と言っているし、ベーコン Francis Bacon も「上目線から教えるやり方 magisterial method」には反対しており、彼が推奨しているのは「示唆することで興味を喚起するやり方 initiative method」である（ベーコン『学問の進歩』岩波文庫 64 ページ）。

イギリス人が「高位 High or Upper」とされるものを嫌い「低位 Lower and Common」を好む特徴がこの場合もよく現れており、なぜ彼らが「聖職者」を「博士の聖職者 magisterial clergy」と呼ばずに「召使の聖職者 ministerial clergy」と呼んだかがよく判る。

このように『共通祈祷書』は、イギリスの政治的な事情を考慮に入れて作成されたものであった。しかし「イギリス国教会」にも譲れない一線があった。まず教会暦の維持である。ピューリタンが認めようとしなかったクリスマス（キリスト生誕祭）・イースター（キリスト復活祭）・ペンテコステ（聖霊降臨祭）を維持することで、イギリス以外のキリスト教徒に「イ

ギリス国教会」の存在を認めさせた。また儀式のやり方もカトリック教会時代のものを存続させている。カトリック教会時代の「主の祈り」や「ニカイア信条」, 「神の子羊 Agnus Dei」は存続させていたし, カトリック教会時代の7つの「秘跡 sacraments」(洗礼・堅信・聖餐・告解・終油・叙階・婚姻)も存続させていた。「秘跡」を無くせばキリスト教は哲学になってしまい, 宗教でなくなってしまうからであった。

しかし「イギリス国教会」に属さない非国教徒たちは, そこにカトリック教会の遺物を見ていた。非国教徒はカトリック教会の「代父 Godfather」や「代母 Godmother」の制度を認めず, 新しく信者になった者は教会に集まる「信者たち全員 congregation」が見守ることになっていた。聖職者を支えたのも, 教会に集う信者たちであった。「信者たちの1つになった心 Holy Spirit of their congregations and synods」が聖職者たちを支えていたのである。

イギリス革命で何が起きていたのか, あらためて振り返ってみよう。議会の権利のために戦った者は政治制度の何たるかをよく理解していたが, 教会制度については何も理解していなかった。国王を現世の統治者として受け入れる用意があったピューリタンの「准貴族 gentry」も, 国王を教会の首長として受け入れる用意はできていなかった。ピューリタン革命期の下院議員たちはスコットランドの「長老派 Presbyterians」(カルバン派)から影響を受けていて, 「国王による教会支配 King in Church」を認めるつもりはなかったのである。16世紀にノックス John Knox は, 教会の長(イギリスでは国王)が「神の教え divine law」を無視して信仰が危機に直面したとき, 信仰を守る義務は「信者たち Lower Estates」にあると言っていた。「長老派」は各地の教会が「長老たち elders」によって支配される体制を「善し」としており, イギリスの教会は分裂する可能性があった。そうなればイギリス各地の教会は「地方の名士 squire」の支配下に置かれることになり, 教会を1つに纏めるのは, 実権のない「全国教会会議 synod」だということになり兼ねなかった。

実際にイギリスの「長老派」は, 「教会を1つに統べる制度 hierarchy」を廃止しようとしていた。そうすることで教会の統治を「地方の名士」に任せようとしたのである。しかし, これは政治的な原則(議会による全国統治)に反するやり方であった。イギリスを統治していたのは下院であって, 「地方の名士」ではなかったからである。この原則を無視すればイギリスは分裂してしまい, ポーランドのようになってしまう可能性があった。当時のポーランドは個々の議員が下院で拒否権を行使することができたため, いつでも議事の進行を妨害することができた。イギリスの下院がポーランドの下院のようにならずに済んだのは, 下院議員が個人として意思表示することを認められておらず, したがって拒否権を行使して議事の進行を妨害できなかったからであった。イギリスで貴族の無法な「私闘 feud」が起きなかったのは, この原則が守られていたからであった。このイギリス特有の「下院 House of Commons」の考え方が, 国内の平和を保障していたのである。それを象徴していたのが「議会と協力して統治する国王 King in Parliament」であった。

したがって, 下院が教会に自由を認めるわけにはいかなかった。もし「長老派」が各地の教会を統治することになれば, キリスト教的な全ての全国制度(教会・学校・病院・大学・祈祷書・教会暦など)が危機に直面することになった。実際に「長期議会 Long Parliament」(ピューリタン革命の舞台となった議会)では, 大学や「私立小学校 cathedral school」(public school に入るための予備校 preparatory school)を廃止することが議論されていた。「長老派」は司教制度を廃止したばかりか, オックスフォード大学やケンブリッジ大学も廃止するつもりでいたのである。彼らに言わせれば, 2つの大学はともに「腐敗の象徴 whore of Babylon」であった。1646年に「長期議会」は『共通祈祷書』を破棄しようとしたが, その翌年に突如としてイギリスが置かれている特殊な事情に気づくことになった。国王を処刑して内戦を招くことになったが, 同じように教会を分裂させてしまうと, 大きな問題に直面することになったのである。イギリスは陸地だけに存在していたのではなかった。

海にもイギリスは存在していたのである。常時、何百隻ものイギリス船が航海しており、全ての船に聖職者が乗っていた訳ではなかった。しかし船員はキリスト教徒であり、彼らは祈りを省略する訳にはいかなかった。「長老派」は、『共通祈祷書』を廃止して各地の教会に自治を認めてしまうと、どんな問題が発生するか気づいていなかったのである。責任感ある有能な指導者を育成することは簡単ではない。民主制（これが「長老派」の信じる善き制度であった）は指導者の育成が簡単であることを前提にしているが、それは間違っている。「イギリス国教会 Anglican Church」のような統一的な権威なしには、船員たちに祈りの場を用意することは不可能であった。難破によって死も覚悟しなければならぬ船員たちにとって、国王が認める『共通祈祷書』は必要不可欠であった。

そこで「長期議会」は、1648年に『共通祈祷書』の代わりに『礼拝規則書 Directory for Public Worship of God』を使用するように命じた（『礼拝規則書』は1645年に制定済み）。「連合王国 United Kingdom」は、イギリス王国・スコットランド王国・アイルランド王国の3王国が共通の国王によって1つに纏まっているだけであって、この3国を宗教的に1つに纏める方法は存在しなかった。そこで「長期議会」は、3つの国の教会に共通の祈り方を提供することにしたのである。「議会と協力して統治する国王 King in Parliament」（チャールズ1世）が「悪い取り巻き evil counsellors」の影響を受けないようにも祈ることにしたのである。

「何千という船が祈りを主宰する聖職者がいないまま航海しており、さらに『共通祈祷書』が廃止されて船員たちは祈ることができず、まるで異教徒になったかのようにであった。こうした事態を避けるために、たとえば次のような祈りの言葉が用意されることになった」。

「すべての改革派教会（カルバン派教会）、とくにイングランド・スコットランド・アイルランドの教会と王国（王国より教会が先になっていることに注目されたい）が神に祝福されるよう祈ろう。いまやこの3つの教会と王国は盟約を結び、緊密な同盟関係にある。統治の担当者、とくに国王陛下が

個人的にも、また統治担当者としても神に祝福されるよう、さらに教会の長として権威を確立し、悪い取り巻きの助言に惑わされることのないよう祈ろう。信仰を護り広めていくのも国王の大切な役割だからである」(David Neal, The History of the Puritans or Protestant Non-Conformists: From the Reformation in 1517, To the Revolution in 1688, New York, 1843)。

この段階では、まだスコットランドの「長老派教会」（ノックスの指導のもとスコットランドに登場したカルバン派）は「イギリス国教會的 Anglican」、言い換えると「主教制的 Episcopalian」（主教が教会を監督する階層制の教会）ではなかった。ところが『礼拝規則書』を公布することで、「長老派教会」の守るべき原則、つまり各地の教会に自治権を認めることを止めたのである。『礼拝規則書』はピューリタン革命に対する「裏切り sin against the Holy Ghost」を意味した。ところが「大反乱 Great Rebellion」（ピューリタン革命）を研究した19世紀の歴史家ガーディナー Samuel Gardiner は、この重要な史料について言及していない。19世紀の自由主義者にピューリタン革命がイギリス史において果たした役割を理解することは無理だったのかもしれないが、もしイギリス各地の教会に自治権を認めるようなことになっていれば、のちのイギリス連邦の帝国主義的発展は実現していなかったであろう。イギリス議会は『共通祈祷書』の使用を禁止することで議会が果たすべき宗教的な役割を放棄し、大学などの教育機関や教会層に対する影響力を失っていたことであろう。「議会制の母 Mother of Parliament」たるイギリス議会在自殺せず済んだのは、『共通祈祷書』に代わる『礼拝規則書』を導入したからであった。

『礼拝規則書』の導入を決めてから1年後の1649年までに、チャールズ1世は議会の世俗的な要求は全て認めていた（ただし国王がイギリス国教会の首長であることには固執した）。ところが議会は、『礼拝規則書』の使用を決めたことが何を意味するか判っていなかったのである。『共通祈祷書』を廃止したままではイギリス各地の教区に纏まりがなくなり、イギリスに混乱を齎すだけであることに気づいていなかったのである。チャールズ1

世が処刑されたのは、国王の世俗的な権限に固執したからではなかった。チャールズ1世は、財政政策や対外戦争に関する議会の要求を全て認めていた。父王ジェームズ1世の言葉「主教なくして国王なし No bishop, no Kings」(統一された教会なしに統治は不可能である)が意味することを、彼はよく理解していた。いま「省庁 civil departments of government」と呼ばれているものが政府という形で纏まらなければ、イギリスを統治することなど不可能であることを、彼はよく理解していたのである(現在の「省庁」は、教会・コモンロー・修道会・神学・大学に由来する伝統に起源している)。

チャールズ1世が死刑に処せられたのは、彼の宗教的な信念が原因ではなかった。彼は、イギリスの国王が「イギリス国教会 Anglican Church」では果たすべき役割がよく判っていた。彼が処刑されたとき、それは議会に対する彼の敗北を意味しなかった。たしかに彼が持っていた世俗的な権限は議会で奪われたが、「イギリス国教会」が「長老派」の「信者共同体」至上主義に陥らずに済んだのは、チャールズ1世のお蔭であった。もしチャールズ1世が国王の宗教的な権限まで放棄していたら、「イギリス国教会」は「長老派」の支配下に置かれることになっていたはずである。そうなれば、下院が教会に対する支配権を手に入れることもできなかったはずである。1642年に下院が採用を決めた「国璽 Great Seal」には、「信仰・議会・国王のために Pro Religione, grege et Rege」と銘打たれていたが(まず信仰、つぎに議会、国王は最後にきていることに注意)、「長老派」は grex (grege は grex の活用形)を「議会」とは考えておらず、「長老派」の考える「信者共同体」と考えていた(grex は、もともと「人間集団」を意味するラテン語)。革命時に採用された「国璽」の銘に「信仰」が先頭にきていることは、イギリス全体を包括する「信仰」が最も重視されていたことを意味する。つまり grex は「長老派」が考えるような「信者共同体」は意味せず、「イギリスのキリスト教徒全員 Christian people of all England」を意味していたのである。お互いに孤立した「聖職者 minister」や「信者共同体」ではなくて、1つに纏まったイギリス全土の「聖職者」や「信者共同体」と、その代表である

議会こそが grex でなければならなかったのである。

チャールズ1世は、この1つに纏まったイギリス全土の「聖職者」や「信者共同体」、およびその代表である議会のために殉教したのである。「議会と協力して統治する国王」チャールズ1世は、何も判っていなかった議会に代わって死刑台で処刑されたのであり、殉教することで議会の名誉と権限を守ったのである。彼は自分が支配する教会を守るために「長老派」が主張した民主的な教会に反対したのではなかった。ダービーシャー Derbyshire 州・ノーフォーク Norfolk 州・ケント Kent 州・ウォーリックシャー Warwickshire 州などの聖職者が個別に支配する教会ではなくて、議会が支配する「イギリス国教会」を守るために殉教したのである。チャールズ1世は「長期議会」に対抗することで「議会の真の守り手 true trustee of Parliament」となったのであり、自分のやるべきことが判っていなかった議会に代って、やるべきことがよく判っていた新しい議会の担い手に教会を委ねることに貢献したのである。

「イギリス国教会」が認めた聖人は1人だけであり、チャールズ1世が教会暦に記念日を設けられた唯一の聖人である。チャールズ1世にはその資格が十分にあった。たしかに国王として議会と対立していたが、彼は王国の教会のために大きく貢献していたのである。

## 第12節 「公共心 public spirit」について

チャールズ1世には、イギリス全体のことを考える「公共心」が備わっていた。フランスなら国民的な天才とされる「異能・靈感 esprit」の持ち主も、イギリスではハイドパークにあるスピーカーズコーナー(誰もが自由に自分の意見を表明できる場所とされている)で危険な思想を広める安直な人物にされてしまう。こうしてイギリスでは、教会に代わって「下院」が「公共心」を担うことになった。英語に特有のこの「公共心」という言葉は、たとえばフランス語に正確に訳すことは難しい。フランス語には「世論 l'opinion

publique」という言葉があるが、これは英語の「公共心」とは意味が違っている。イギリスには「公共心」は存在しても「世論」は存在しないし、「異能・靈感」の持ち主も存在しない。

「公共心」とは、硬直化して動きが取れなくなった国家と教会に対して「キリスト教徒たるイギリス人 *populus christianus*」が示した解決策であった。1641年に下院が国王に対抗して「大抗議文 *Grand Remonstrance*」を可決したときに訴えたのが、「キリスト教徒たるイギリス人」の「公共心」であった。翌年、反国王派の下院議員5人の逮捕にチャールズ1世が失敗したとき、「キリスト教徒たるイギリス人」は「イスラエルよ、自分の天幕に帰れ *To thy tents, Israel*」（『サムエル記』下20:1, 『歴代誌』下10:16）という聖書の言葉を国王に対して発したのである。聖書の言葉を使って国王を批判したことから、「公共心」にキリスト教的な裏づけがあったことが判る。

こうして1641年以降のイギリスでは、「公共心」を無視して「キリスト教徒たるイギリス人」を統治することは不可能となった。浅薄で気まぐれな「世論 *public opinion*」では、政府の無慈悲で過酷な政策を止めることはできない。それができるのは「公共心」だけである。目先の利益などには目も呉れず、「心 *soul*」に訴えるのが「公共心」である。イギリス人が全身全霊を捧げて行動を起こすのは、「公共心」が喚起されたときだけであった。議会はイギリス人の「公共心」を喚起することができた。「公共心」が議会の支柱であった。

イギリスで改革が実行される場合、政党の意向より「公共心」が常に優先されてきた。たとえばウイルバフォース *William Wilberforce* が25年かけて奴隷制廃止に成功したのは、「公共心」のお陰であった。彼は保守的なトーリー党員であって、奴隷制廃止に献身することなど考えられなかったが、それでも廃止に成功したのである。奴隷制廃止を決めた法案が下院を通過したとき、議員たちは全員が起立して奴隷制廃止に貢献したウイルバフォースを讃えたものである。

「公共心」は、クロムエル時代にハリントン *James Harrington* が書いた『オ

シアナ共和国 *The Commonwealth of Oceana*』にも登場してくる。イギリス人の間で平和と相互理解を実現して呉れるのは、「公共心」であった。『オシアナ共和国』は、宗教的な理想を世俗世界で実現しようとした最初の試みであった。かつて「長老派」の宗教会議やカトリック教会の公会議、教皇の教令や大学で作成される論文の課題であったものが、「白銀の海に象嵌されたこの貴重な宝石 *precious stone set in the silver sea*」（シェイクスピア劇のこのセリフは、さらに「この祝福された地、この大地、この領地、このイングランド」と続く。小田島雄志訳『シェイクスピア全集』白水Uブックス11「リチャード2世」, 56ページ）に登場してきたのである。あまりの熱意ゆえに、それが「長老派」の意図を越えてしまったのも当然であった。「神の王国 *Kingdom of God*」が「この世の王国 *kingdom of this world*」に侵入してきたのである。

ピューリタン革命のとき、この考え方が「スコットランドの教会 *Scottish Kirk*」からイギリスの教会にやってきた。スコットランドではノックス *John Knox* が、国王も「神の王国」では普通の人間と変わらないことを忘れるなど説いていた。この「スコットランドの教会」の考え方がイギリスのピューリタンのところに押し寄せてきたのである。イギリスのピューリタンたちは、まるで洪水に襲われたようであった。その洪水が引いた後に残ったのが「公共心」であった。

それは単なる言葉だけの問題ではなかった。神聖ローマ帝国にあった「神と共に、国王と祖国のために *Mit Gott für König und Vaterland*」というモットーが、イギリスの「国璽」にあるモットーでは「信仰と共同体と国王のために *Pro religione et grege et rege*」に変わっていた（「国王」が「共同体」の後になっていることに注意）。ここでいう「共同体 *grex*」（*grege* は変化形）とは、イギリス人を1つに纏める「共同体 *congregation*」、つまり「下院 *House of Commons*」を意味した。「公共心」を大切にするイギリス人は、あらゆる問題が「下院」で解決できると信じていたのである。

もともと教会で使われていた「信者共同体 *congregation*」という言葉が、「国 *country*」とか「共和国 *commonwealth*」の意味で使われるようになった。イ

ギリスのキリスト教徒は、この世俗的な言葉に新しい意味を込めるようになったのである。それを可能にしたのがピューリタン革命であった。

「公共心」のおかげで、「教会会議 convocation」・「国 country」・「州 shire」の間にあった違いが消えてしまった。もともと「国」の意味は決まっていなかった。ふつうは「州 county」の意味で使われていたが、ときにはイギリス全体を意味することもあった。それが「公共心」の影響で、はっきりと区別されるようになったのである。この言葉を古い「州」の意味で使っていた人物が、「准貴族 gentry」が代表していた「州」の集合体「国」の意味でも使っていたことが当時の史料から確認できる。やがて「国 country」は、フランス語の「祖国 patrie」やドイツ語の「祖国 Vaterland」の意味で使われるようになったのである。イギリスの「国」は、もはや中世の貴族のように王権に翻弄される受け身の存在でなく、1561年（ピューリタン革命の最中）に上演された悲劇『ゴードラック Gorboduc』（伝説上の国王ゴードラックの2人の息子が王位を争って、まず弟が兄を殺し、ついで弟より兄を愛していた母親が弟を殺す話）の母親のように、ただ悲嘆にくれるだけの存在では無くなっていった。力強い男たちの生気に満ちた「祖国 motherland」、戦うキリスト教徒の「祖国」、敬虔な「准貴族 squire」の「祖国」に変わっていたのである。「長老派」の地方都市の「信者共同体」の自主性を何よりも重視する偏狭な考え方に代えて、イギリス全体を包括する「公共心」が登場してきたお陰で、「祖国」を代表する議会がイギリス全体を1つに纏めることになった。「善くても悪くても祖国は祖国 My country, right or wrong」という有名な言葉が表しているように、地方を代表する議員が構成する「下院」が「共和国」に満ち満ちた「公共心」によって「祖国」を代表することになったのである。

### 第13節 「教会会議」の終焉

それでも「公共心」によって統合された「国」には、まだ欠けていたも

のがあった。クロムエル Oliver Cromwell は、この欠けていたものを埋め合わせるべく「護国卿 Lord Protector」に就任したのである。こうしてクロムエルが「王国 Realm」、つまり国王と「貴族院 Lords」を代表することになり（クロムエルは「貴族 gentleman」であった）、下院の「貴族」が「共和国」を代表することになった。これで政治制度の問題は解決したが、教会制度は機能を停止したままであった。教会制度なしで「伝統的なノルマン人の王国 Norman Realm」を存続させることは不可能であった。教会制度なしではクロムエルの「王国」は「鉄騎隊 Ironsides」と呼ばれた軍隊に過ぎず、国王配下の封建軍と変わらない存在に過ぎなかった。そこでクロムエルは宗教的なギャップを埋めるべく、教会制度に代わるものを作り上げたのである。それが一種の宗教的な狂信を生み出すことになったが、それでも「伝統的なノルマン人の王国」に代わるものを作り上げることはできなかった。クロムエルの「鉄騎隊」が抱えていた悲劇の原因がこれであった。宗教的な狂信は、「イギリス国教会 Anglican Church」の代わりになれなかったのである。クロムエルは「共和国」の「特権 liberties」を守ることはできたが、「イギリス国民が必要としていた教会制度 need for a Church of England」に代わるものは提供することができなかった。

クロムエルにできなかったことを実現して見せたのが、チャールズ2世であった。チャールズ2世は「イギリス国教会」を「議会の支配下に置くこと parliamentarization」で、それを実現して見せたのである。「王政復古派 restorers」と革命派の対立のなかで、チャールズ2世は教会を「議会と協力して統治する国王 King in Parliament」に従わせることに成功した。それも非公然の方法で成功していた。たとえばヨーク York州やカンタベリー Canterbury州の「教会会議」は、議会と対立していた国王に聖職者から集めた資金を提供することもできた。しかし、すでに1662年に詩人のワラー Edmund Waller は（下院議員でもあった）、つぎのように書いていた。「もはや教会会議が招集されることは無くなった。なぜなら誰もそれを必要としなくなったからである」。

教会会議の招集を不要にしたのは革命派ではなかった。他ならぬチャールズ2世の側近クラレンドン伯 Edward Hyde, 1st Earl of Clarendon であった。地方の下級聖職者は下院の「貴族」が利害を代表しているということで、教会会議が有していた聖職者に対する課税権は下院にあるとしたのである。これほど果敢で革命的な変革は考えられなかった。クラレンドン伯が過激な「長老派」でなく、国王の側近であったからこそ出来たことであった。

これこそ革命の名に相応しい偉業であった。「地方の准貴族 gentry of the shires」がイギリスの教会を支配下に置いたのである。イギリスの議会は、教会の首長であった国王から「議会と協力して統治する国王」に教会の支配権を移譲させたのである。それを実現させたのが、1660～85年に国王の座にあったチャールズ2世であった。言い換えれば、スチュアート朝による「王政復古」がそれを可能にしたのである。イギリスの議会在教会関係の法律（イギリス国民が守るべき道義的なルールの監視や宗教上の問題に関する決定）を制定するようになったのは、チャールズ2世の統治下であった。この議会による教会支配に異議申し立てをした最後の事例は、1689年の「臣従宣誓拒否者 Non-Jurors」事件であった。この時「イギリス国教会 Anglican Church」の「王党派 Royalists」は、議会の命令に反して名誉革命でイギリス国王となったオレンジ侯ウィリアムとメアリーに忠誠を誓うのを拒否し、スコットランドに亡命して行ったのである。議会は1927年になっても、1662年に制定された『共通祈祷書』の改訂案を認めようとしなかったが、この改訂案は大司教座があったヨークとカンタベリーの教会会議が一緒になって提案していたものであった。

#### 第14節 「貴族 gentleman」が使っていた言葉

下院の影響力の大きさは、予算金額の大きさから知ることができる。国王・王族・判事たちに給与を支払っていたのは下院であり、給与の額が増えれば、それだけ彼らに対する影響力も増大した。ところが国家や国民に

対する下院の義務ということになると、その中身を知る手掛かりはなかった。パーク Edmund Burke に言わせると、ヨーロッパは「1つの国家のようなもの virtually one State」であったが、そこでイギリスが果たすべき役割については、パークですら適切に表現することができなかった。古い英語は、もはや下院の「田舎貴族 country squire」（彼らは狩猟・痛飲・賭け事・乗馬が大好きであった）に相応しいものでは無くなっていたのである。シェイクスピアの喜劇に登場してくるフォルスタッフ Falstaff の言う「古き善きイギリス old Merry England」は既に無くなっており、古い英語は傲慢で誇り高い「准貴族 gentry」に相応しい言葉で無くなっていた。「准貴族」に相応しい新しい言葉が必要とされることになったのである。ただし、その言葉は神学とも哲学とも無縁でなければならなかった。また、イギリス人が住むことに決めた「古い世界 old world」に相応しい「古い言葉 old words」でなければならなかった。「古い」とは言っても、信仰とは無縁な言葉でなければならなかった。世俗化されたイギリスでは、カトリック教会時代の規則に代わって、日常生活が規則化されていた。帰宅すると、まずバスタブで体を清め、そして夕食である（昼食が正餐のヨーロッパ大陸と違って、イギリスでは夕食が正餐であった）。まるで修道士のように規則正しい生活が繰り返された。イギリスの厳格な日曜礼拝は有名だが、日常生活でも厳格な規則正しさが求められた。中世の修道院では聖務日課に従って決められた時間に決められた祈りが捧げられたが、同じように決められた時間に朝食・昼食・アフタヌーンティー・夕食が摂られるようになった。

アメリカ人画家のホイッスラー James Whistler が、ポア戦争の時イギリスの客船で目撃したイギリス人について書き残している。「乗客はイギリス人ばかりだったが、久しぶりに目にするイギリス人には驚かされた。夕食を摂るためにレストランに現れたのは、襟が大きく開いたドレス姿の御婦人たちと、ディナージャケット姿の貴族たち gentlemen であった。船旅には慣れていない様子で、船が大きく揺れると今にも逃げ出しそうであったが、それでも男どもがディナージャケット姿でテーブルに着いていて、

その後ろに同じディナージャケット姿の給仕が控えていること、つまりイギリスに居るときと同じ作法を守っていた。彼らは南アフリカでも同じことをしていたはずである。イギリス人にとって大切だったのは、伝統的な作法を守ることであった。つまりディナーにはディナージャケットを着て現れること、これこそが大切なことであって、ボーア戦争のこと等どうでも良いことだったのである。イギリス万歳！」(Joseph and Elizabeth Pennell, Life of James McNeill Whistler II, Philadelphia, 1908, p.267)。

船の中はイギリスそのものであったが、それを実現したのはピューリタン革命であった。船がイギリスを象徴することになったのは、なにもイギリス人が生まれつき「銅板で三重に巻かれた心臓」(ホラチウス Quintus Horatius が『歌章 Carmina』第1巻・第3章・第10節で、地中海に漕ぎ出す勇敢な船乗りに必要な勇気を讃えた言葉)を持っていたからではなかった。ピューリタン革命を実現した「貴族」たちは、その「誇り高さ moral conquest」ゆえに海に乗り出して行ったのである。猥雑さと私欲に満ち満ちていた名誉革命期の詩人ウィッチャリー William Wycherley は、喜劇『貴族の舞踏教師 The Gentleman Dancing Master』で出演者に、「貴族たる者、全員が海に乗り出して行くべきである All gentlemen must pack to sea」と言わせていた(彼自身も海に乗り出して行った)。シェイクスピアの時代には考えられなかったセリフであった。

キリスト教徒でもあった「貴族」に相応しいのは『旧約聖書』の言葉であった。つい最近まで、教養あるイギリス人なら『旧約聖書』の『詩編』を暗記していたものである。文章を書くときも『詩編』の言葉を使っていた。「アメリカ建国の父祖 Founding Fathers」の1人であり「貴族」でもあったモリス Gouverneur Morris は、「貴族」の心得を『詩編』第15章の言葉を使って説いている。ジェファソン Thomas Jefferson は、それが気に入って書き写していた。「考えも行ないも徳に従ったもので、良心に反することは口にしない。人の悪口は言わず、隣人を貶めることもないし、悪意に満ちた噂に耳を傾けることもない。悪徳者による脅迫は、それがどれほど恐ろ

しいものであっても無視するし、信仰に篤い者に対しては、たとえ惨めな姿をしていても敬意を払うのに吝かでない。誓った言葉を裏切ることではなく、たとえ損になるような場合でも約束はかならず守る。法外な利息を取って私財を増やすことも、罪なき者を貶めることもしない。

注目すべきは、これがイギリスと戦っていたときに書かれたということである。理想的な「貴族」であるためには、自主独立の立場が不可欠であった。モリスの祖父はニューヨーク州の知事であり、彼には自主独立の立場が備わっていた。ピール Robert Peel に言わせると「貴族の誕生には3世代が必要」ということだが、誰かに頼っているようでは絶対に「貴族」には成れない。「貴族」は、その気になれば罪なき者を滅ぼすこともできるし法外な利息を取ることもできるが、それを敢えてしないのである。また「貴族」は金持ちでなければならなかった。「損になるような約束でも守る」ためである。

「貴族」は知識を光らかすこともしない。「貴族」は、フランス人にとって大切であった「自省 self-introspection」とも無縁であった。フランス人のように理屈だけで結論を下すのではなく、いわば「本能的に by visceral sensation, by instinct」結論を下すのである。ポールドウィン Stanley Baldwin は、アスキス卿 Lord Asquith が下院の雰囲気をも「本能的に感じ取って sense instinctively」やるべきことを決めていたと言っていた。

イギリス人は現在を大切にす現実主義者である。ドイツ人は過去にあった思想について大袈裟に議論するし、ロシア人は実現するか否か判らない未来について大袈裟に議論するが、イギリス人は過去や未来が現在に干渉してくることを嫌う。それにイギリス人の議論の仕方は控えめであった。「控えめな表現 meiosis」を善しとし、そこに皮肉が味付けされていれば、もっと善かった。self-control, self-mastery, self-suppression, self-effacement, self-command, self-conquest など、「自制」と訳せる言葉が英語には豊富にある。マレー卿 Sir Gilbert Murray が若い友人について、こんなことを言っていた。「どのイギリス人もやっているように、彼も他人より優れていると思える

趣味や能力を隠す癖があった」。

フランス人なら運命の急変に備えて準備を怠らないかもしれないが、イギリス人はリスクに賭けて失敗しても、その現実を受け入れる。だからこそ「イギリス人の約束 gentleman's agreement」は信用されるのである。「イギリス人 English Commons」には、資産・金銭・所有権（これは誰も奪えない）が備わっていることになっていた。選挙権も「家屋所有者 householder」に限り認められていた。少なくとも建前の上では、選挙権を認められていたイギリス人は「家屋所有者」だということになっていた。「イギリス法 Common Law」は、資産を持つ家族の存在を前提にしていたのである。アメリカでも18世紀の一時、ハーバード大学の卒業生名簿が出身家族の資産に従って作成されていた。たとえば、のちに大統領に選ばれるアダムス John Adams は、20人中14番目に名前が記載されていた。またイギリス人が暖炉の存続に拘ったのは、それが選挙権の有無を決める基準だったからだ。暖炉がある屋敷がイギリスを象徴するとも考えられていたからであった（イギリス人がセントラルヒーティングの導入に消極的であったのは、そのためである）。イギリス人にとって暖炉は、世界のどこに居ても欠かせないものであった。それは名誉革命が最終的に認めたイギリス人の権利を象徴するものであった。

「田舎貴族 simple country gentleman」を自認していたウォルポール Robert Walpole の長年の功績に込めるといって、下院は彼が田舎でキツネ狩りや鹿狩りができるよう週末の休暇を認めることにした。フランスでは「農民 paysan」も「貴族 noble」も「国民 citoyen」（「都市民」の意味もある）に変えられたが、イギリスでは「都市 city, borough」を「田舎化する countrify」ことが理想とされた。イギリスでも今ではこんな言葉を使う者はいないが、それでもイギリスでは「田舎化」が実行されている。「貴族」が「王政復古 Restoration」を行ったのも、まさにイギリス全土を「田舎化する countrification」ためであった。イギリス人が過去300年間やってきたことがこれであった。

イギリス人が愛して止まない低層の建物・古風なレンガ壁・暖炉、それはトマス＝グレイ Thomas Gray の「墓畔の哀歌 Elegy Written in a Country Churchyard」が理想とした情景でもあった。壮大さや傲慢さ、「誇りある家紋や物々しい権力」の対極にあった質素さこそがトマス＝グレイの詩の特徴であった。

「村人のハムプデン（チャールズ1世の船舶税に反対したジョン＝ハムプデン John Hampden というバッキンガム Buckingham 州の貴族が1643年に捕えられて処刑されたが、同じように悪税に反対した無名のハムプデンが村にもいたはずだという意味）は剛毅な胸で、わが里の小暴君に抗って立ったであろう。物言わず名も無いミルトン（『失樂園』を書いたミルトンに比すべき無名の詩人）もここに横たわり、国人の血を流さぬクロムエル（グレイの時代にクロムエルは内乱の流血に責任ある悪人とされていた）もいたであろう。…冷たい、奥まった人生の谷に沿うて、静かな自らの道を歩くにあったのだ」（福原麟太郎訳『墓畔の哀歌』岩波文庫、100～101ページ）。

「静かであること noiseless」、これが「貴族」たる者の心得るべきことであったが、「無言 wordless」なら、もっと善かった。『トム・ブラウンの学校生活』のつぎの一節は、「貴族」のあり方を知るうえで欠かせないものである。「かれ（トム・ブラウンの父親）はロンドンに来る途中ずっと、別れ際の助言として、トムにどういうことをいったものか、いつでも即座に役に立つように、息子が頭の中に仕舞って置けるような言葉はないものかと、思案をしつづけて来たのである。…」

郷土 gentry の黙想を要約すれば、大体つぎの通りであった。わしはトムに、聖書を読んで、神を愛し、神に仕えよとはいまい。かれが母親のため、母親の教へのためでさえそれをしないのなら、私がいったところするわけはあるまい。わしは、かれがどんな誘惑に出逢うか、話したものでしょうか。いや、それはとてもわしにはできぬ。子供を相手にして、年輩の男がそんなことを話したって駄目だ。とても向こうにはわかるまい。十中の九までは、為になるどころか害になる。勉強に精を出せ、お前は良い成

績を取るために学校にやられているのだといおうか。いや、しかしかれはそのために学校にやられるんじゃない。少なくとも、それが主な目的じゃない。ギリシャ語の不変語や二重ガンマがどうであろうと、そんなことちつとも構わない。母親だってそんなこと問題にしていない。一体何のために彼を学校にやるのか。一つには、かれが行きたがったからだ。息子が勇敢で、役に立つ、嘘をいわぬ英国人になり、キリスト教徒になってくれれば外に何もいうところはないと郷士 gentry は考えた。そして、この問題についてのこういう見解に基づいて、トムに対する最後の助言を考え出したのであるが、それはかれの目的にはあつらえ向きであった」（トマス＝ヒューズ『トム・ブラウンの学校生活・上』岩波文庫、88～89ページ）。

「<sup>さつ</sup>祭りの良さ love of understanding facts」, これがイギリス人のユーモアの<sup>かくしん</sup>核心にあった。<sup>たいへん</sup>大変な出来事も簡潔な言葉で伝えること、これがイギリス人の理想とすることであった。逆にアメリカ人は、ちょっとしたことでも<sup>おおげさ</sup>大袈裟に表現する<sup>くせ</sup>癖がある。イギリス人が作った制度には「<sup>ひか</sup>控えめ understatement」の精神が<sup>かんてつ</sup>貫徹していた。たとえば世界で最初に作られた海上保険の制度はロイド Edward Lloyd が経営する喫茶店から始まったが（そこが関係者の<sup>たま</sup>溜り場になり、ロイドは海上保険に必要な情報を顧客にサービスとして提供していた）、顧客サービス係（実質的な経営者）は1世紀ものあいだ「給仕 waiter」と呼ばれていた。「給仕」が「秘書 secretary」に格上げになったのは、イギリス外務省が「給仕」に情報を提供しなくなってからのことであった。それがアメリカでは最初から「社長 president」、ドイツでは最初から「会長 director general」と呼ばれていた。

こうしたイギリス人のやり方が誤解されていた良い例が、1914年に外務大臣であったグレイ卿 Sir Edward Gray であった。ヨーロッパ各国では彼のことは、第一次世界大戦を引き起こした<sup>ずるがしこ</sup>狡猾い<sup>いんぼうず</sup>陰謀好きのマキャベリアンだと考えられていたが、彼の上司であったグラッドストーン William Gladstone に言わせれば、「グレイほど礼儀正しい人物はいなかった」。グレイの演説は、まるで私的な会話のようであった。あまりにも簡潔すぎて、

よく誤解されるほどであった。ところがイギリス議会对<sup>せんせんふこく</sup>独宣戦布告を決議させるために、そんな彼が1時間もの演説をしたのである。そのあと彼は<sup>せいこんつ</sup>精根<sup>は</sup>尽き果て、田舎に引き籠<sup>こも</sup>ってしまった。有名なテニス選手でもあり釣りの名手でもあったグレイは、国際問題を処理するに当たって「議会で<sup>parliamentary manner</sup>のやり方」(私的な会話のように簡潔に済ませるやり方)を越えてしまっていたのである。宣戦布告を決議した下院では、もはや「議会らしい簡潔な議論 parliamentary conversation or debate」は不可能になっていた。グレイは自分が<sup>お</sup>負った責任の重さに<sup>のど</sup>食事も<sup>とお</sup>喉を通らなくなり、視力まで<sup>うしな</sup>失ってしまったほどであった。のちに死を意識したグレイが木の下に座っていると、<sup>りす</sup>栗鼠が木の実を<sup>ため</sup>せがむ<sup>た</sup>為に集まってきたし、鳥たち(グレイは鳥の言葉が理解できた)が彼の近くに場所を確保しようと争ったほどであった。これが1914年8月3日に<sup>せんせんふこく</sup>対独宣戦布告をしたグレイの本当の姿であった。

しかしイギリスの「田舎化」も、「約束の地カナン Canaan」(神がユダヤ人に約束した理想の国)に関する熱弁なしには無意味であった。たしかにイギリス人はインテリぶるのを嫌ったが、ピューリタン革命の<sup>とき</sup>時「<sup>まるが</sup>丸刈り党 Roundheads」(急進派)と呼ばれていた<sup>よ</sup>准貴族の「素朴さ」だけで、<sup>うた</sup>宮廷や「王党派 Cavaliers」に対抗するのは無理であった。教会の儀式(ミサ)で<sup>うた</sup>詠われる『詩編』、日曜学校で解説される『詩編』の意味など、日曜日ごとに「<sup>おこな</sup>屋敷持ち」(准貴族)が行う宗教的な行事、さらに平日の夕刻に暖炉ぎわの会話で引用される『詩編』の言葉などがなければ、シェイクスピアが演じられ、ベーコン Francis Bacon が読まれていた宮廷に対抗することは不可能であった。そして最終的に下院が対抗策に成功するのは、「<sup>まるが</sup>丸刈り党」が「<sup>ほいぐ</sup>ホイッグ党」と呼ばれるようになってからであった。「<sup>ほいぐ</sup>ホイッグ党」とは、もともとスコットランドの「長老派」に付けられていた<sup>あだな</sup>渾名であり(その由来は不明)、「<sup>まるが</sup>丸刈り党」とは<sup>あだな</sup>准貴族が大貴族のように長髪でなかったことに由来する渾名である。「<sup>まるが</sup>丸刈り党」が「<sup>ほいぐ</sup>ホイッグ党」に変わったとき、「『詩編』によって田舎化されたイギリス England countrified by the Psalms」が

実現したのである。イギリスは「約束の地 Promised Land」と化し、イギリス人は「神に選ばれし民 chosen people」となったのである。

ブレイク William Blake の詩にも、そのことが詠われている。「かつて古代にカナンの地を歩んだ者たちが、イギリスの緑の山を歩んでいる。そしてここイギリスにもエルサレムが築かれた。悪魔の巣窟がごとき工場のなかにも」(Jerusalem :Preface to Milton and Poem, 1810)。クロムエルもピューリタン革命を遂行するとき『旧約聖書』を参照して、アビガイル(『サムエル記(上)』25:144)やゼデキア(『列王記(下)』24, 25『エレミア書』52:1-11)を念頭に行動していた。過激派たちはイギリスをイスラエルと同じだと考えていたのである。1794年にワシントンにアメリカの首都とすることを定めたとき、そのことを賛美する演説を行なったあるイギリス人は、失われたユダヤの10部族がアメリカ＝インディアンであると言ったが、1934年にはイギリス人こそが本物の10部族であるとした全面広告がイギリスの有力紙に出たことがあった。

フランス革命でユダヤ人は他の人間と同じアダムの子孫だとされたが(ユダヤ人解放が実現)、イギリス革命でユダヤ人はキリストの登場を準備したとされ、イギリスはヨシュア(『ヨシュア記』)やギデオンの(『士師記』)の時代に神が支配していた「約束の地」だとされた。『士師記』に登場してくる人物は、イギリスの政治家が目指すべき目標と考えられたのである。議会と名誉革命の進歩的役割を強調する「ホイッグ史観」を定着させたマコーレー Thomas Macaulay は、自分のことを「執政官 proconsul」(ローマ帝国の役職)と称していたし、カーゾン卿 Lord Curzon は「インド 副王 Viceroy」を気取っていたが、彼らは自分のことを特別な人間だと考えていた訳ではなかった。彼らは「帝国主義者 imperialist」などではなかった。「帝国主義 imperialism」はイギリスの敵であった。なぜなら、「帝国主義者」が考えるのは高率関税・移民制限・国内企業の保護であって、およそキリスト教的な理想とは無縁だったからである。

キリスト教的な理想の実現には信仰の裏付けが必要であった。イギリ

スでは、信仰の裏付けが理想の実現を可能にしていた。信仰は「合理的な計算 reason」を超えたものであった。「イギリスは世界の海を支配する Britannia Rules the Waves」という愛国的な歌より、イギリス国教会の讚美歌にそのことがよく現れている。「神はその御業の実現に努めていらっしゃる。そして世界が神の光で満たされる時は確実に近づいている。それは海が海水で満たされているように確実なことである。…素晴らしい善き知らせが世界中に広がり、悲しみと罪から人々を解放するために我々は戦う。そして世界が神の光で満たされる時は確実に近づいている。それは海が海水で満たされているように確実なことである」。

何という信念に満ちた態度であろうか。世界の海を制しようとする者は、誰であれこのイギリス人の信念の強さを必要としている。カトリック教国のアイルランドと仏教国のインド(インドはヒンズー教の国。著者の誤解と思われる)、さらには世界各地の植民地を統治することになったイギリスの議会は、「無限の信仰心 infinite」の代わりに「果てしない海 infinite sea」の可能性を信じたのである。「無限の信仰心」抜きで「有限の世界 finite」を統治することは不可能であった。

その世俗主義ゆえに信仰心を失っていたイギリスの支配階級は、まだ王が居なかった『士師記』の時代に王に代わって自分たちを統治していた神を信じたユダヤ人のように、「神の意志 Providence」を信じて「神の法 law of God」を信じていたイギリス人の強い信念を壊しかねなかった。

## 第15節 11月5日の事件

1660年に「王政復古 Restoration」という言葉を革命派から剽窃することで復位を果たした国王チャールズ2世は、革命派の「共和国 British Commonwealth」という理念は無視した。さらに「王政復古」が王党派のアイデアだと非難されることを避けるため、それを革命派の後継者である下院議員たちの言葉を使って説明することにした。おかげで下院議員

たちは、国王に対抗するに際して従来の「世俗的で大陸重視の言葉 secular and terrestrial vocabulary」が使えなくなってしまった。こうして「海洋重視 marinerama」の言葉が新しく登場してくるようになった。

しかし、そのためには29年という長い年月が必要であった(1660年の「王政復古」から1689年の「名誉革命」まで)。それはイギリス人が精神的に苦しんだ時期であった。そのことは、バニヤン John Bunyan が獄中で書いた『天路歷程 The Pilgrim's Progress』によく現れている。問題になったのは「王政復古」ではなかった。事態の曖昧さと言葉の混乱、誉めるべきことと非難されるべきことが明確に区別できず、美德と悪徳が明確に区別でき無くなっていたことが問題であった。復位したチャールズ2世はイギリス人の権利を尊重することには吝かでなかったが、イギリス人の過去にあったとされた権利の復興に貢献した革命派は、王殺しの罪を着せられ排斥されたままであった。「議会と協力して統治する国王」であったチャールズ2世は革命の成果を受け入れていたが、「護国卿 Protector of Commonwealth」であったクロムエルらの革命派は、あくまでも「反乱者 rebels」に過ぎなかった。

イギリスで毎年、議会で話題に挙がる日が11月5日の「ガイ＝フォークスの日 Guy Fawkes' Day」である。この日はイギリスで「祝日 holiday」とされているが(カトリック教徒のガイ＝フォークスが議事堂の地下室に国王暗殺のために仕掛けた爆薬が発見され、国王が無事だったことを教会で神に感謝する日)、その同じ教会で5月29日には(チャールズ2世の誕生日であり、彼が復位を果たした日でもある)革命派を非難する説教が行われていた。「ガイ＝フォークスの日」には広場で篝火が焚かれ、子供たちは「11月5日を忘れるな」と歌いながらガイ＝フォークスの人形を燃やし、議事堂の地下室では守衛が爆薬を探す振りをすることはよく知られているが、教会で唱えるべき感謝の祈りが『共通祈祷書』から削除されたのは、1859年になってからのことだということはいまだあまり知られていない(5月29日を「王政復古」の記念日として「祝日」にしていたのも中止)。チャールズ2世の復位を支持した下院は、この感謝の祈りを教会で唱えることに少なからず満足感を覚

えていたに違いない。ガイ＝フォークスに象徴されるカトリック教会の陰謀そのものは失敗して、重要な意味を持たなくなっていたが、下院はわざわざ法律を制定して11月5日をカトリック教会の陰謀から「古い old」政治体制を守ったことを記念する「祝日」にしたのである。もちろん、カトリック教会の陰謀から「古い」政治体制を守ることも大切だが、国王とその取り巻きから「古い」政治体制を守ることも大切であることは下院もよく承知しており、チャールズ2世がロンドンに到着して革命派による「大反乱 Great Rebellion」を終わらせたあとも、そのことは忘れなかった。チャールズ2世は王権に制約を設けることは明確に約束しておらず、いつまた国王が専制を始めるか判らないというリスクは存続し続けていたのである。

チャールズ2世の死後にカトリック教徒の弟ヨーク侯が国王として即位するのを阻止するため、議会は宗教上の問題も処理せざるを得なくなった。1678～80年に3回、立法によって即位を妨害しようとしたが成功せず、1685年にヨーク侯はジェームズ2世として即位した。しかもカトリック教徒の彼の後妻が皇太子を生み(すでに2人の娘メアリーとアンが前妻とのあいだにいたが、彼女らはプロテスタントとして育てられていた)、事態を放置すればカトリック教徒の国王が再び即位する可能性があった。そこで名誉革命が開始されることになる。もしこれがヨーロッパ大陸なら、とくに問題にならなかったはずである。たとえばプロテスタントであったザクセン選帝侯は、1697年にカトリック教徒に改宗してポーランド国王になっているが、ザクセン侯国の統治はプロテスタントの大臣たちに任せていた。ところがイギリスでは、議会在「宗教会議 Convocation」に代わって宗教上の問題を処理することになっていたのである。修道院の領地を手に入れた「准貴族」出身のホイッグ党員たちが、財政的な危機に直面する可能性があったため(カトリック教会の復権が実現すれば、手に入れた領地は修道院に返還しなければならなくなる)、有力なホイッグ党員がメアリーの夫オレンジ侯ウイリアム(イギリス国王としてはウイリアム3世を名乗る)に援助を要請することにした。さらに皇太子の継承権を否定するため、2人の娘に後妻の王

妃は妊娠していなかったと証言させていた。1688年12月19日にウィリアム3世がロンドンに到着し、ジェームズ2世はフランスに亡命して行った。国王の令状なしで議会が招集され、議会は「国璽 Great Seal」をテムズ川に投げ捨てた国王の王位を剥奪することを決定して、ウィリアム3世が国王に選出された。1689年にウィリアム3世と下院のあいだで協定が成立し、同年にアイルランドで起きた蜂起もジェームズ2世からの援軍にも拘わらず失敗して、ここに名誉革命は成就したのである。下院はウィリアム3世に王位は認めたものの、王位の継承権は認めなかった。また『権利章典 Bill of Rights』を制定して（ウィリアム3世に王位を認める際に『権利宣言 Declaration of Rights』として承認させたものを法律として制定）、財政問題と宗教問題は議会の専権事項であることを国王に認めさせた。

名誉革命は、まぎれもなく「革命」であった。「国王に対する反逆 high treason」で始まり、内戦が戦われ、革命に対する外国の支持が確保され、既存の法と秩序は破壊されていた。ピューリタンとホイッグ党員はよく似ていたし、クロムエルとウィリアム3世もよく似ていた。もちろん、一方はオリジナルで他方はコピーに過ぎない（1789年のフランス革命がオリジナルで、1830年の七月革命がそのコピーであったのと同じである）。1640年に始まったピューリタン革命は宗教色がよく、1689年の名誉革命はビジネスライクであった。ピューリタン革命の生真面目さと過度の興奮が冷めやっただと、肝心の「中身 essentials」を目に見える形にして見せたのが名誉革命であった。それなのにオリジナルの方が忘れ去られて、コピーの方だけが重視されることになったのである。イギリス人は、争いも異端も存在しないことにしたかったのである。そこでピューリタン革命と名誉革命の違いばかりが強調されることになり、似ていたことが無視されることになった。

そんな状態が2世紀以上も続くことになった。とくにマコーレー Thomas Macaulay の『イギリス史』（事実上の名誉革命史）が果たした役割が大きい。このホイッグ史観の信奉者は、イギリス帝国の繁栄がピューリタンたちのお蔭であることを認めたくなかったのである。1688～91年の内戦と1642

年の内戦は別物であるとする彼の史観のお蔭で、イギリス史を学ぶ生徒たちは、1688年の名誉革命でイギリス人の血が流されたことや、1642年の「大反乱」では平和裏に物事が処理されたことなど想像できなくなっている。ウィリアム3世が温和な性格であったことが強調され、クロムエルの政策が必要に迫られて採用されたことが無視された。ウィリアム3世がイギリスにやって来たのはヨーロッパのためであった。ヨーロッパがイギリス軍の助けを必要としていたのである。ウィリアム3世はアイルランドで王党派を無慈悲に制圧し、その後200年も続くイギリスのアイルランド支配を確固たるものにした。またアイルランド人から土地を奪ってイギリス人に与え、アイルランド人には7分の1しか残さなかった。それはともかく、名誉革命が流血・戦争・暴力と無縁であったというのは嘘である。クロムエルはウィリアム3世のように、自分から王冠を望んだことは一度もなかった。彼に王冠を与えようとしたのは議会の方であった。3つの王国を初めて1つにしたのもクロムエルであった。それでもホイッグ党員にとってクロムエルは反逆者であり、ウィリアム3世は正統な国王なのである。

18世紀の有名な法学者ブラックストーン卿 Sir William Blackstone に言わせれば、ウィリアム3世は「由緒正しい国王 hereditary monarch」であり、クロムエルは「権力の篡奪者 usurper」に過ぎないのである。もっともウィリアム3世については、こんな言い訳をしている。「由緒正しい国王」ではあるが「以前の国王に比べると、その由緒正しさは劣る though not quite so absolutely hereditary as formerly」。こうして1688年の革命で内戦はなかったことにされた。ブラックストーンに言わせれば、内戦には「混乱と狂気 confusion, instability, madness」が付き物だが、名誉革命にそんなものは存在しなかったのである。しかし、あった筈のものがなかったとする議会の偽善的態度に騙されてはいけぬ。新しい「護国卿 Lord Protector」（クロムエルが議会の提案する王位を受けず、その代わりに就任した地位）ウィリアム3世をはじめ、「イギリスを代表する紳士である歴代国王 First Gentlemen of England who are called Kings」は、「流血を好む独裁的な紳士 blood-shedding,

tyrannical gentleman」に過ぎないクロムエルと一緒にされてはならないのである。

こうしてイギリス人はウィリアム3世とクロムエルを正確に比較することはせず、まるで探偵物語のような話にしてしまった。細部の事実こたわに拘こって事件の全貌は明らかにされず、全貌が明らかになるのは最後の最後なのである。クロムエルからウィリアム3世までの49年間の歴史を、探偵物語かに変えてしまったのである。似ている点や連続している点などは無かったことにして、お互いに関係のない処刑・戴冠あげつらの事実を論ろんい、革命が持った普遍的な性格を無視して、最後の場面にだけ光を当てたのである。アメリカ革命（独立戦争）やフランス革命で光が当てられたのは、革命開始の時点であった。なぜなら、そこから新しい時代が始まったからである。英雄的な行為が登場してドラマチックな場面が展開されるのは、革命が始まった時なのである。革命が終わるときは失望の時であった。この点でフランス人とイギリス人は決定的に違ちがっていた。フランス人がフランス革命の遺物いぶつとでも言うべき七月革命（1830年）だけを祝いわって、バルミー Valmy の勝利（フランス革命後の対外戦争でフランスが得た最初の勝利）やナポレオンのことを忘れるなど有り得ないことである。

最後の場面に光が当てられるのは、そこに至る過程が望ましくないとされているからである。議会軍と国王軍の戦闘の時期、クロムエルが「護国卿」として支配した「共和制」の時期、スチュアート朝による「王政復古」の時期は、すべてイギリス人にとって歴史が負った「傷 scar」であった。その「傷」が真実を覆おほい隠かくすことになったのである。新しく神話や伝説が生まれたが、それは傷口から再び出血するのを防ぐためであった。

ホイッグ党と「丸刈り党」の違い、ウィリアム3世とクロムエルの違い、名誉革命と「大反乱」の違い、権力の篡奪さんだつ者と正統な国王の違い、合法的な変革と狂気による変革の違いなど、違いの全てが過度に強調されることになった。イギリスの歴史家はピューリタン革命の最初の9年間と名誉革命の最初の3～5年間を比較することをせず、ピューリタン革命の20年

間（1640-1660年）と名誉革命の1日だけ（ウィリアム3世がイギリスに上陸した11月5日）を比較するのである。名誉革命の1日はジェームズ2世に対する反乱などではなかった。ジェームズ2世の陸軍と海軍に配布されたパンフレットには「(16) 88年を忘れるな」と書いてあったが、この文言からウィリアム3世を支持する一派いっぱが100年前の無敵艦隊に対する勝利を想起させようとしていたことが判る。ウィリアム3世のトーベイ Torbay 上陸が、カトリック教国スペインの敗北と結び付けて考えられていたのである。ジェームズ2世が1660年にロンドンにやって来たとき「王政復古」が実現したが、ウィリアム3世が1688年にトーベイに上陸したとき名誉革命が成就したのである。その後じょうじゆに起きたことは無視されることになった。国王の令状なしに非合法に招集された議会（下院）での果てしない論争や、ウィリアム3世による「王位篡奪 usurpation」が無かったことにされ、ガイ＝フォークス事件のときと同じ日（1605年11月5日）に奇跡が起きたことにされたのである。

いまイギリスでは、「ガイ＝フォークスの日」は1605年の出来事とは関係が無くなっている。イギリスの革命家たちは伝統好きで、新しい出来事の記念日を過去の出来事の記念日とすり替えてしまうのである。この日に唱えられる教会の祈りの言葉から、このことは明らかである。ガイ＝フォークスの陰謀が暴かれたことに感謝したあと、祈りの言葉はこう続く。「この同じ日に国王ウィリアム3世が教会と国民を解放するために無事イギリスに到着したこと、また国王が安全な航海と勝利を神より賜ったことに感謝しよう」。この祈りの言葉に、名誉革命の何たるかがよく現れている。議会に言わせれば、ウィリアム3世の即位はジェームズ2世の犯した「重罪 felony」、つまりイギリスから逃亡するという罪ゆえに合法だということになるが（ジェームズ2世は1688年12月にフランスに亡命）、教会はガイ＝フォークスの日（1688年11月5日）に、すでにウィリアム3世を合法的な国王として讃えている。このように議会と教会では、ウィリアム3世に対する態度が違っていたのである。議会は、ジェームズ2世がイギリスを

去るという「重罪」を犯した時（1688年12月）にウイリアム3世が王位に就いたと考えたが、教会は彼がイギリスに上陸したとき（1688年11月5日）、すでに王位に就いていたと考えるのである。

議会はトーベイに上陸したときのウイリアム3世が王位にあったとは考えなかったが（そのときジェームズ2世は、まだ正式なイギリス国王としてイギリスにいた）、教会は11月5日を神の意志で実現した名誉革命の日と考えるのである。ウイリアム3世も同じように考えていた。スペインの無敵艦隊がイギリス上陸に失敗してから100年後にイギリス上陸に成功したウイリアム3世は、「イギリス国教会」の司教バーネット Gilbert Burnetの手を取ってカルバン派の信者らしく、つぎのように言ったそうである。「これで君も天命 predestination を信じるだろう」。名誉革命を実現して見せたのは「人間の意志 man's volition」などではなくて、「神の意志 decrees of Providence」だったのである。コネチカット植民地もウイリアム3世とメアリー2世に、同じような趣旨の祝辞を送っていた。「この記念すべき日に神は…ヨルダン川が敵と味方を隔てたように、あなた方の敵を味方から分け、あなた方をヨシュアと同じように祝福し（ただし、ヨシュアは国王に成らなかった）、イギリスがローマ教皇の奴隷となるのを防いでくれた」（旧約聖書『詩編』29:10）。ピューリタン革命の最後を飾った革命は、少なくとも3ヶ月は続いたはずだが、これがイギリスでは無かったことにされた。名誉革命は神による最後の御業だったのである。

「イギリス国教会」の態度だけでは証拠として不十分だと言うなら、18世紀のイギリスで「革命家 revolutionist」を自称していた者が何をしていたかを確認して見るとよい。彼らは1789年にフランス革命が起きるまでは、「11月5日」後の最初の日曜日ごとに、ウイリアム3世のトーベイ上陸を祝って教会で神に感謝するミサを行っていた。当時のイギリスで「革命家」とは、1688年に起きた奇跡（名誉革命）を讃美する者という意味であった。プロテスタントの国王を支持し、プロテスタントでない者を王位継承者と認めないことにした議会を支持する者のことを意味した。「革命」の意味

が現在とまるで違っていたのである。1688年のウイリアム3世によるトーベイ上陸は、イギリス人が実現したことでなかった。それは「神の御業 superhuman interference」が実現したことであった。「神の御業」であったとすることで、イギリス人は良心の呵責を免れることができたのである。おかげで議会（下院）もプレッシャーを感じずに済むことになった。名誉革命は「神の御業」であって、名誉革命は独裁者・王位篡奪者・「護国卿」・王位詐称者などとは無縁な革命であった。「神の御業」を人間の行為と誤解するようなことがあってはならないのである（因みにイギリス人は個人の功績を誇示することを極端に嫌い、英語にはドイツ語の「自惚れ Ueberhebung」に相当する言葉すらない）。

1688年以降に公表された政治冊子類では、「神の御業」と人間の行為が明確に区別されている。1692年に政治冊子類が纏めて出版されているが、そこで名誉革命は「幸せな革命 happy revolution」と呼ばれている。「名誉ある glorious」という言葉は『詩編』で使われている宗教的な言葉なので、その代わりに「幸せな」という言葉を使ったのである。1688年末に「王命なしに招集された仮議会 Convention」に提出された政策案でも、同じような「革命観 idea of a revolution」を確認することができる。「今般の革命では神の手が働いていることが明確に見て取れる。…あれほど幸せな形で happily, 素晴らしく wonderfully 短期のうちに、流血なしに制度を変えることができたのは神のお陰であった」。クラレンドン伯エドワード・ハイド Edward Hyde, 1st Earl of Clarendon が書いた『反乱史 History of the Rebellion』（1640～60）の初版でも、編集者は「制度のあり方を変えるためには革命が必要であった」ことを認めている。

ピューリタン革命は名誉革命と違って、まるで大地震が起きたようだったとか天空が崩落したようだったとか言われるが、名誉革命について発言していたのは下層民でなかったことに注意する必要がある。名誉革命に関わった者は、全員が「復古主義者 restorer」を自称していたが、名誉革命で目指されていたのは「復古」だけではなかった。ウイリアム3世は『ハー

グ宣言 Declaration of the Hague』でイギリスの古い法制度を取り戻すことを約束していたが、彼を王位に就けることを考えていた法学者たちも古い法制度を根拠に彼を王位に就けるつもりでいた。メイナード卿 Sir John Maynard は（名誉革命当時、彼は 87 歳であった）、カトリック教徒であった皇太子が王位に就けない理由として 13～14 世紀の法令を挙げているが、アイルランドでカトリック教徒を弾圧することは、中世期の国王と同様にウイリアム 3 世の義務であるとしていた。当時の法学者の例に漏れず、彼も「マグナカルタ」や「コモンロー」の復興、下院の特権の復興を考えていたのである。

それなのに、なぜ「革命」と呼ばれずに「復古」と呼ばれることになったのか。それは変革を齎した者に対して敬意を払うためであった。下院は自分たちが権利を守るために戦っていたとき、神が自分たちを助けてくれていると確信していた。イギリス人の戦いは、イギリスを越えた普遍的な意味を持つ戦いだと彼らは考えたのである。

ポルトガル・オランダ・ベルギー・デンマークなど、ヨーロッパ大陸の小国が存続できたのもイギリス革命（ピューリタン革命と名誉革命）のおかげであったし、トランシルバニア地方やアメリカのペンシルバニア植民地（1681 年にチャールズ 2 世がペン William Penn に債務の代償として与えた植民地）で政治運動が盛んになったのも、イギリスにおける革命のおかげであった。またヨーロッパ大陸でプロテスタントが存続できたのも、イギリス風の議会が登場してくるようになったのも、17 世紀のイギリス革命のおかげであった。世界革命の必要性についてボルシェビキたちは声高に説いていたし、国名からも敢えて「ロシア」を外していたが（正式名は「ソビエト社会主義共和国連邦」）、実際に彼らが「やっていたことは、極めてロシア的 going Russian」であった。ところがイギリス人は逆であった。自分たちの革命をイギリスに限定し、敢えて「普遍的 universal」たることを回避しようとしたのである。スペインの無敵艦隊が攻めてきたときのエリザベス 1 世は、聖書を参考に問題を処理していた。つまり視野がイギリス国教会と

連合王国の枠を超えることはなかったのである。ところが革命のあと自然科学の急速な発展もあって、イギリス人の視野は一挙に広がることになった。5 つの大洋を支配下に収め、ローマ人も知らなかった大陸（アメリカ）を目指すことになったのである。

ピューリタン革命と名誉革命は、クロムエルとウイリアム 3 世が一緒になって鑄造した貨幣の表裏のようなものであった。つまりイギリスのピューリタンの側面とホイッグ党的な側面が表と裏に分かれて存在しているが、注意していないとそれが見えてこない。とくにウイリアム 3 世が象徴しているホイッグ党的な側面はイギリス政治を判り難くしているが、ヨーロッパ各国が「偽善 hypocrisy」と呼ぶ結果を招いている。それが「偽善」に思えてくるのは、イギリスの議会で使われる言葉が教会で唄われる聖歌のようなものだからである。つまり元来持っていたはずの意味が失われて、「形骸化 pious lying」しているのである。19 世紀の政治家にして文芸評論家であったクローカー John Wilson Croker は、イギリスの下院が直面していた危機的な状況について、つぎのようなことを書いていた。

「果敢で断固とした行動を嫌うような雰囲気の下院にはあった。まるで下院は会員制の倶楽部のようなものになっていた。これこそ最大の問題であった。物事の処理が目に見えないところで行われており、議場でそれが明かされることはなかった。敢えて内実を暴露する者がいても、追放の憂き目に会うだけであった」（Quarterly Review, vol. 42, January 1830, pp. 271-272. 1809 年に創刊され、1967 年に廃刊）。

## 第 16 節 名誉革命のヨーロッパの意味

17 世紀は変革の時代であったが、その変革はイギリスから始まっていた。「名誉革命」の「名誉」については、すでに説明した通りである。ここでは「革命」について、もう少し詳しく見てみよう。まず「革命」が「法的に公認 lawful」されたということがある。とは言っても、政治的には

相変わらず「非合法 illegal」なままであった。しかし「非合法」云々を超えた考え方のおかげで、「革命」はヨーロッパで「法的に公認」されることになった。

1688年の名誉革命まで政権の交代を意味した「革命」は、星の運行に例えられていた。中世以来ヨーロッパでは、政治のあり方は「運命の輪の回転 revolving wheel of fortune」しだいで決まると考えられていたからである。ところが17世紀にコペルニクス・ケプラー・ガリレオたちが提唱した新しい天文学のおかげで、地球上の出来事は「天体の運行 astronomical revolution」に例えて説明されるようになった。さらに数学・物理学の発展で、数学・物理学の言葉も使われるようになった。たとえばホブスは、物理学の言葉を使って政治現象を説明している。「もし時間にも空間のように高低があるとすれば、1640年から1660年の期間ほど時間が高みに達した時期はなかったと言える」。また別の個所では、つぎのようなことも書いている。「今般の革命で統治権 sovereign は篡奪者親子と国王親子のあいだを行き来した。まずチャールズ1世から長期議会に移り、さらに残部議会に移ったあとクロムエル父に移り、クロムエル子がそれを引き継いだあと残部議会と長期議会を経てチャールズ2世に戻ってきている。願わくばチャールズ2世の統治が永く続かんことを」(Thomas Hobbs, Behemoth or the Long Parliament, in Sir William Molesworth, The English Works of Thomas Hobbs of Malmesbury, vol. VI, London, 1840, pp. 165, 418)。クラレンドンも大臣を辞めたあと、1660年の王政復古を「革命」と呼んでいた。

こうして自然現象を説明する言葉が、政治現象を説明する言葉として使われるようになったのである。「低気圧(不況) depression」・「衝(反対派) opposition」・「影響力 influence」・「合(協力関係) conjunction」などがそれである。「景気変動 business cycle」も同様であった。どの言葉も興味深い。たとえば「影響力」はもともと占星術の言葉で、星が発する神秘的な力を意味していた。ところが革命の結果、それが「神の意志 God's glorious will」に取って代わることになった。神と地上の人間のあいだに目に見えない連携が生

まれることになったのである。既存の法律を超えた「影響力」に対する信念が革命を可能にしたのである。政治の世界では、法律とは無縁なところで為政者の心を揺さぶるような「目に見えない何か intangibles」が登場してくることがある。革命までのイギリスでは、国王の専制を防ぐために国王の「影響力」を禁止する法律を使っていた。しかし法律だけで国王の「影響力」を防ぐことは不可能であった。水のように形のない「影響力」を固形物の法律で防ぐことは不可能であった。「影響力」を防ぐには、べつの「影響力」に頼るしかなかったのである。こうして新しい制度がイギリスに登場してくることになった。つまりイギリス革命で本当に対峙していたのは、「正統な legitimate」影響力と「正統でない illegitimate」影響力であった。1642年の「大抗議文 Grand Remonstrance」が国王に要求していたのは、国政を下院が信任する人物に委ねることであった。

「協力関係 conjunction」も、もともとは天文学の言葉であった(天文学では「合」と訳している)。1660年にチャールズ2世がイギリスに帰国してきた時、彼はこう言ったものである。「幸運な合によって不吉な星が取り除かれた a happy conjunction had removed a malignant star」。逆のことを意味する「反対派 opposition」も天文学の言葉で(天文学では「衝」と訳している)、それが政治用語として「反対派」の意味で使われるようになった。天体の運行の結果必ず起きる現象であることから、それを人間の世界でも起きることと認めることにしたのである。世界で最初に「反対派」に歳費を支払うことを認めたカナダ憲法の登場は、すでに天文学者が天体の運行研究で「衝」を発見していたからであり、そのおかげで人間界にも「反対派」が存在することを認めるだけの大胆さを政治家は発揮できたのである。

ただし政治家が個人として天文学の影響を受けていた訳ではない。17世紀に国王や軍人は盛んに占星術などを使っていたが、こんなことでイギリスの政治が左右されることはなかった。天文学の用語が使われたのは政治家についてではなくて、政治制度のあり方についてであった。イギリス人の権利や国王の権限を説明するために天文学の用語が使われことはな

かった。天文学の用語は、政治制度のあり方を説明するために使われたのである。天文学の用語を使うと、個人を匿名の存在にすることができた。下院議長は「見ざる・聞かざる no eyes, no ears of his own」存在と化したし、下院議員は個人的なデスクを持たない存在と化した。下院が国王と交渉できたのは、「幸運な合（結束） happy conjunction」のお陰であった。

名誉革命の意味は、そこに関わっていたのが誰であったかを確かめることでよく理解できる。革命に関わっていたのは、はたして普通のイギリス人だったのだろうか。それとも支配層を形成していた影響力のある貴族だったのだろうか。いずれも的外れの質問と言わざるを得ない。1688年のホイッグ党（名誉革命の当事者）は、「革命」という言葉を字句どおりに理解していた。彼らに言わせると個人は地上の存在に過ぎないが、政治制度はコペルニクスが『天球の回転について De revolutionibus corporum caelestium』で論じている「天球」と同じく、人間世界を超えた存在なのである。それは人間にどうすることもできないものであった。イギリスには、月や星の光を遮る教皇の権威は存在しなかった。イギリス人の頭上にあったのは、人間界を超えた「天上の輝き majesty of the galaxy」だけであった。それに比べれば、地上の世界は「無 nothing」に等しかった。

### 第17節 3つの「復古」

現代人の感覚からすると、イギリス人が人間界を超えた「天上の王国 upper Realm」に頼ろうとしたことは不思議に思えてくる。しかし、彼らは教会と国家に救済の手段を見出したのである。それがイギリス革命の真髄であった。「天上の王国」に頼ることで「慎み深い准貴族 humble gentleman」は教会と国家の誇り高き支配者となったのである。「大貴族 Lord」は「貴族」であり続け、「国王 Sovereign」は「国王」であり続けたが、最優先されることになったのは「下院 Commons」の意見であり、「下院」の不満であり、「下院」の希望であった。クロムエルは、そんな「下院」を代表する典型的な「准

貴族」であった（“I was by birth a gentleman, living neither in considerable height, nor yet in obscurity.” Speech to the First Protectorate Parliament, 4 September 1654. Ivan Roots, Speeches of Oliver Cromwell, Everyman Classics, 1989）。

もし「古い統治体制 Realm」・「イギリス国教会 Anglican Church」・「貴族院 House of Lords」が無くなっていたら、「下院」が登場することも無かったであろう。「聖俗大貴族の貴族院 House of Lords, Spiritual and Temporal」を廃止するという発想は、ヨーロッパ大陸に登場してきた民主主義の産物であった。ヨーロッパ大陸では民衆による自治が理想とされていたが、イギリス人の考え方は違っていた。彼らは「合意 consent」による統治を理想としていた。「古い統治体制」を残したのも「合意」のためであり、国王・女王・大貴族・大司教・大法官は、「喜んでイギリス人のために働く召し使い willing servants of the English people」となった。そのためには「古い統治制度」を残して置く必要があったのである。

フランス的な伝統は、革命が始まったときから花開いていた。1789年7月14日は、その後26年間続くことになる輝ける革命の始まりであった。40年間も待ち続けていた革命は、最初から普遍的な意味を主張していた。フランス人は革命で何をしようとしているのか、よく自覚していた。革命によって現実の世界をどう変えようとしているのか、よく判っていた。

それにフランス革命を成功させたのは人間であったが、イギリス人は神の意志が「名誉革命」を実現したと考えていた。人間が介在することなく、神が新しい統治制度を実現して呉れたと考えたのである。「名誉革命」が48年間も続いた内戦状態に終止符を打つことになった。「名誉革命」の結果、内戦も反乱も如何なる非合法活動も起こり得ないことになった。事実その後のイギリスでは、内戦も反乱も起きていない。11月5日に教会で行われるミサの文言（『共通祈禱書 Book of Common Prayer』を参照）にこうある。「神はウイリアム3世を使ってイギリス人の権利を復活させた」。「名誉革命」は「復古 restoration」のための革命であった。

イギリスでは3回、「復古」が起きていた。1641～60年のピューリタ

ンによる「復古」、1660～85年の国王による「復古」、1685～89年の「イギリス国教会」による「復古」である。イギリス革命の特徴は、最初の「本物の革命 real revolution」の成果が隠されていることである。国王による「復古」を意味した「名誉革命」は、フランスにおける七月革命（1830年）のような「駄目押し epilogue」の革命に過ぎなかった。すでに指摘したように、このフランスの「駄目押し」の革命が1815年に終わった本物のフランス革命を終わらせたのであり、ロシアの「前哨戦 prologue」の革命（1905年）は、1917年に始まった本物のロシア革命によって終わりを迎えたのである。その前に起きた革命は、いずれも2回目の革命によって終わりを迎えている。フランス革命を革命としてフランス人が意識するようになるためには、1830年の七月革命が必要であった。

イギリスの革命も同じであった。1688年の名誉革命がなければ、1651年の変革（共和制 Commonwealth への移行）をイギリス人が意識することは無かったであろう。変革が合法化され、正式に受け入れられるためには名誉革命が必要であった。ただイギリスの革命はフランス革命やロシア革命に先行していたため、1688年の名誉革命が1649年の国王処刑の結果であることに気づいていなかっただけである。フランス革命の場合、1830年にラファイエットが国民軍司令官としてパリの街頭を行進したのは、1789年にすでに国民軍司令官としてパリの街頭を行進していたからであった。1689年にイギリスで召集された「仮議会 Convention」の議員たちは、その多くが内戦の経験者であったが、87歳のメイナード John Maynard が1688年の名誉革命で大活躍できたのは偶然ではなかった。1689年のイギリス人は、1830年のフランス人と逆のことをしていたからである。目の前の出来事と過去に起きた出来事の類似点を探り出そうとしなかったばかりか、およそ比較することすら許そうとしなかったのである。

## 第18節 最初の「イギリス連邦 Commonwealth」の崩壊

「准貴族 gentry」たちはクロムエル時代を無視することにしたが、ヨーロッパに対する義務（フランスのルイ14世に対抗して結成されたオランダを初めとする反仏諸国との同盟関係）は、ウイリアム3世を介して忠実に実行していた（その結果、イギリスは南北アメリカと地中海で覇権を確立することになる）。そんな誇り高き「准貴族」もウォルポールの死後、腐敗に満ちた時代を迎えることになった。フランスの七月革命（1830年）から二月革命（1848年）までの時代と同じである。その象徴的な人物がニューカスル侯 1st Duke of Newcastle, Thomas Pelham-Holles であった。彼が任命した役人は全員を解雇すべきだと反対派が議会で要求したとき、誰かが叫んだものである。「国王だけは解雇するな Save the King」。中央政府が十分に機能しなくなったのを良いことに、公道では追剥が我が物顔に振る舞っていた（1728年に初演された『乞食オペラ』に描かれている通りであった）。ニューカスル侯もそのことを公然と認めており、1749年に次のように公言していた。「我々は敵国と戦える状態にはない」。

貴族たちの厚顔無恥ぶりは信じられないようなものであった。ホランド伯 1st Baron Holland, Henry Fox に至っては、自分の次男 Charles James Fox を敢えて無責任な男に育てるよう努力していた。「次男にとって規則など無いに等しかった（国王の命令だけは別である）。賭け事・泥酔・男色を教えられ、その借金は余りにも多額であったため、父親が肩代わりするしかなかった（それでも半分しか返済していない）。とても私に真似ができることではなかった。これでは教育の放棄である reductio ad absurdum of education」(P.W. Wilson, New York Times Book Review, August 16, 1936)。次男の教育係であったパーク Edmund Burke も1780年に、つぎのように言っていた。「権勢を誇りすぎたが故に、我々は一歩益しと思われた者まで最悪の人間にしてしまった」。ウォルポール首相の末子ホーラス Horace Walpole も、1763年に大陸旅行からイギリスに帰ってきて、「これが同じイギリスとはとても思

えなかった。倓しく生活していた小さな島国が世界の首都になっていたのである。…得意満面のロンドンの市議会議員は、国王すら娘の結婚相手として相応しくないと考えていた」。

1763年のイギリスは、北米植民地・フランス・アイルランド・西インド諸島などを足跡にしていた。まるで1302年に教書『唯一の聖なるUnam Sanctam』(王権に対する教皇権の優位を説いた)を公表したボニファチウス8世 Bonifatius VIIIを思わせる傲慢さであった。1302年がボニファチウス8世の絶頂期だったように(ボニファチウス8世は、そのあとすぐフランス国王に捕えられる)、1763年がイギリスの絶頂期であった。その後イギリスに対する憎悪の感情が世界中で沸き起り、イギリスの凋落が始まることになった。当時のフランス外相ベルジェンヌ伯 Charles Gravier, comte de Vergennesに言わせると、「イギリスはブエノサイレス・ニューオリンズ・ダンケルク・アンティル諸島(西インド諸島)と世界中で敵に直面している。ポルトガルだけがイギリスの味方だが、そのポルトガルの防衛もイギリスにとって重荷であった」。

ピューリタン革命で登場してきた最初の「イギリス連邦」は、アメリカ革命(独立戦争)とナポレオン戦争で崩壊の危機に直面していた。その危機の現実が無視されてきたが、1774～1815年にイギリスの議会は、その傲慢な態度ゆえに国内でも国外でも孤立することになった。

まずアメリカの植民地が「イギリス連邦」を離脱した。たとえばマサチューセッツ州は、「英国国歌 God save the King」に代えて「マサチューセッツ万歳 God save the Commonwealth of Massachusetts」を州歌とすることにした。1774年に第2代アメリカ合衆国大統領のアダムス John Adamsは、こんなことを書いていた。「イギリス人の憲章(ボストン市憲章)違反に抗議するアメリカ人の運動が反逆だと言うなら、イギリスの上院や下院、いやイギリス人全員が反逆者ということになる」。

当時のイギリスが置かれていた状況は、メソディズム Methodism(聖書に登場してくる生き方 method に従って生きるのを善とした厳格なプロテスタン

ト)の創始者ウエスリー John Wesley が書き残したのから知ることができる。彼はイギリスを毎年、4000マイルから5000マイルも宣教で旅しており、1774～75年のイギリスが1640年のイギリスに似ていると書いている。上院議員のノース卿 Lord Frederick North とダートマス卿 William Legge, 2nd Earl of Dartmouth に宛てた手紙で、つぎのように書いていた。「敢えて断言するが、いまやイギリスは全土で不景気の風が吹きまくっており(私はこの2年間にイギリスの東部のみならず、西部にも北部にも南部にも行って来た)、何千という人たちは仕事が無くて困っている。大反乱 Great Rebellion のときより事態は深刻だと断言できる。事態は危機的と言ってよい。私が行ったどの大都市・地方都市・農村でも、多くの人たちは怒りの矛先を国王に向けている(以前は大臣に向けていた)。国王が怒りと蔑みと敵意の的になっている。国王を心から嫌悪しており、憎んでいる。ふたたび王殺しが起きるかもしれない。それほど王に対する敵愾心で満ち溢れている。私が思うに、彼らは機会さえあれば反乱を起こすであろう」(John Wesley, Journal, Standard Ed. VIII, pp. 334 ff., London, 1916)。

現在のイギリス人が国王に対して抱いている親愛の情からは、とても想像できないことをウエスリーは報告していた。また彼は、つぎのようなことも書いていた。「大都市に限らず、地方都市・農村でも、イギリスには何千もの不満分子が満ち溢れている。…イギリス人も、スコットランド人も、アイルランド人も、怒りで気が狂わんばかりになっている。1640年頃の状況とそっくりである。熱狂的な内容の新聞が国中に出回り、国民の多くが国王に対する親愛の情と尊敬の念を失ってしまっている。国王を軽蔑し、憎み、いつ反乱が起きても可笑しくない状況である。卿たちに申し上げるが、彼らはリーダーさえ居れば、間違いなく反乱を起こすであろう」。

当時の状況が1640年の時と似ていると考えていたのは、ウエスリーだけではなかった。当時の「議会と協力して統治する国王 King in Parliament」は、「准貴族」たちに非難・攻撃されていたスチュアート朝の国王と同じように、「非国教徒 Nonconformist」の非難・攻撃に晒されていた。また同

じようにアイルランドで反乱が起きていたし、報道の自由が無くなっていたのも同じであった。長い間議事録が公開されることもなかった。「人身保護令 Habeas corpus」も停止されていた。バーク Edmund Burke が 1758 年に刊行を始めた『年鑑 Annual Register』によれば、1810～12 年のイギリスは絶望的な状況に置かれていた。「素晴らしいはずの制度が生み出していたのは煤と埃だけであった。我々の法制度には切株しか残されていなかった」そうである。この屈辱的な状況が発生したのには理由があった。1776 年にアメリカが独立してから 1815 年にウイーン会議が終わるまで、イギリスは常に受け身の姿勢に終始していた。イギリス人は認めたがらないが、この時期「イギリス連邦」は、その真価を試されていたのである。

同じ頃のフランスと比較してみると、そのことがよく理解できる。1778 年にフランスは、「不当にもイギリスが世界の海を支配するために築き上げた専制的な帝国 tyrannical empire」を排除するためイギリスに宣戦布告したが（アメリカの独立戦争を支援）、外国から見れば「イギリス連邦」は「専制的な帝国」に過ぎなかったのである。フランスは『フィガロの結婚』の原作者として言及すみのフランスの詩人・銀行家のボーマルシェ Caron Beaumarchais に架空の会社を設けさせ、こっそりアメリカ軍に弾薬を供給していた。イギリスに宣戦布告してからは海軍を使ってアメリカのみならず、イギリスと敵対していたヨーロッパ中の国々を支援するようになった。アメリカの植民地 13 州がイギリスに勝利できたのは、1781 年にフランス海軍がバージニア州のヘンリー岬 Cape Henry 沖でイギリス海軍に勝利したお蔭である。フランスの反英運動はヨーロッパ中で支持されていた。フランクリン Benjamin Franklin によれば、「ヨーロッパ中の国がイギリスの敗北を喜んだ」そうである。1780 年には、フランス・スペイン・オランダがイギリスと戦闘状態にあった。インドも戦場になり、アイルランドでは反乱が勃発していた。それだけではなかった。ロシア・スエーデン・デンマークのみならず、かつてイギリスの同盟国であったプロイセン・オーストリア・ポルトガルまでが、アメリカへの軍事物資の供給を断つ目的で実施さ

れていたイギリス海軍の検問に抗して、第 1 回武装中立同盟に参加していた。

つまりアメリカの独立戦争は、ヨーロッパの戦争でもあったのである。ヨーロッパ列強は「アメリカの放棄 breach with America」というイギリス史上、最大の痛手をイギリスに強いたが、それこそが「4 大陸を囲む全ての海で 8 年間続いた戦争の意味」（ハンガリー生まれのユダヤ人歴史家エミール＝ライヒ Emil Reich の言葉）であった。

イギリス革命は、つぎの 3 つの段階に区別することができる。1640～89 年：革命期、1730～76 (1774) 年：満心期、1776～1815 年：屈辱期。このイギリスの歴史にフランスの歴史はうまく対応している。イギリスで変革の切っ掛けになったのは、1535 年のヘンリー 8 世による宗教改革だったが、フランスの場合は 1685 年のルイ 14 世によるナントの王令廃止であった。またイギリスの革命期は 1640～91 年だが、フランスの革命期は 1789～1815 年、イギリスの屈辱期は 1776～1815 年だが、フランスの屈辱期は 1848～74 年である（二月革命で成立した共和政府はナポレオン 3 世の帝政に取って代わられるが、1871 年の普仏戦争でフランスは敗北してナポレオン 3 世は退位し、1874 年までフランスはドイツ軍の占領下にあった）。さらにアメリカの歴史もイギリスの歴史に対応している。イギリスで議会が国王と戦ったのは 1642～49 年だが、1776～83 年にはアメリカの植民地がイギリス議会と戦っており、1688～91 年の 2 回目の革命（名誉革命）でイギリスに自由が定着したが、アメリカでも 2 回目のイギリスとの戦争（1812～15 年）でイギリスからの独立（つまりアメリカの自由）が確実なものになっている。

## 第 19 節 ブルジョアジーとの妥協：

### スポーツマン精神と自由主義の登場

アメリカとイギリスの関係については、アメリカ革命（独立戦争）を扱

う第15章で詳しく説明することにして、ここでは外国で革命が起こった時、イギリス人がそれにどう対応していたかを見ることにする。イギリス人は1789年のフランス革命に対して、のちのフランス人やアメリカ人と同じように対応していたが、同じことがイギリス革命に対するイタリア人やドイツ人の対応の仕方にも言える。

イギリス人は1830年になるまで、フランス革命の結果を受け入れようとしなかった。外国のやり方は、簡単には受け入れられないものである。1830年にトーリー党の名称として「保守党 Conservative Party」を使い始めたクローカー J.W. Croker に対して、「保守党」の創設者とされているピール卿 Sir Robert Peel は、名称が「イギリス的でない un-English」と言っ、この呼び方に反対していた（この言葉は元々フランス語で、シャトブリアン François=René Chateaubriand が1818年に創刊した雑誌“Le Conservateur”に由来する）。1832年の第1次選挙法改正（「准貴族」が独占していた下院の選挙権を新しく台頭してきたブルジョアジーや農業資本家にも認める）や1867年の第2次選挙法改正（熟練労働者にも下院の選挙権を認める）で、初めて「自由主義 Liberalism」がイギリスに根づくことになった。「腐敗選挙区 rotten boroughs」が廃止され、「准貴族」が握っていた地方自治権が制限されて、「准貴族」以外の有権者が増やされたのである。たとえばルドガーズホール Ludgershall に選挙区を持っていた「准貴族」は、つぎのように言っていた。「私はルドガーズホールの地主であり、ルドガーズホール選出の下院議員であり、ルドガーズホールの有権者だったが、この3つの資格においてルドガーズホールにおける自分の選挙権・被選挙権の剥奪に同意する」。

もっとも、教会・国家・植民地を支配下に置いていた下院が商店主と労働者の国で権威を回復するためには、選挙権の拡大だけでは不十分であった。さらに道義的な権威を確立しなければならなかった。アダム＝スミスの説く「道徳哲学 moral philosophy」がその役割を担っていた。アダム＝スミスは、「領土を拡張しなくても」産業の育成によって「国富 The Wealth of Nations」（代表的な著書『国富論』の原意）を増やすことが可能なこ

とを証明して見せたのである。下院はその慢心ゆえにアメリカの植民地を失ったが、その埋め合わせをするためには産業革命を実現すればよかった。イギリス人に「国富 national wealth」という考え方を教えることで、アダム＝スミスはイギリス人に進むべき道を示して見せたのである。「産業革命 industrial revolution」（文字通りの意味は「工業革命」）という言葉を提唱することで、フランス革命が生み出した「自国民中心主義 nationalism」に対抗して見せたのである。チャールズ2世が「ピューリタンによる復古運動 Puritan Restoration」に対抗して「国王による復古運動 Royal Restoration」を実現して見せたように、19世紀前半のイギリス人は、フランス革命に対抗して「産業革命」を実現して見せたのである。フランス人がフランス革命に情熱を注いだように、イギリス人は「産業革命」に情熱を注ぐことになった。

ただし「人間的な側面 nature and humanity」を受け入れることも必要であった。そこで「善きキリスト教徒の貴族 Christian Gentleman」という考え方に加えて、新しく「スポーツマン sportsman」という考え方が登場してきた。貴族のキツネ狩りやテニスは大衆とは無縁のスポーツだったが、スポーツが大衆受けするものになって来たのである。たとえば1850年にボクサーのトム＝セイヤーズ Tom Sayers は、リバプールで英雄扱いされていた。エミール＝ブツミー Emile Boutmy はイギリス人のスポーツマン崇拜に対応するものとして、イタリア人の画家崇拝を挙げている。チマブエ Giovanni Cimabue が聖母像を描き上げたとき、フィレンツェの市民は彼をボルゴ＝アレグリ Borgo Allegri まで迎えに行ったそうである（いまはフィレンツェ市内の街路名になっているが、当時は都市壁の外にあった）。1850年のイギリスでは、フィレンツェで1300年に聖母像が呼び起こした熱狂を大衆スポーツが呼び起こしていた。またイギリスではダービー競馬 Derby も大衆スポーツになっている（6月最初の水曜日に行われることになっており、この日は祝日である）。若いイギリス人男性の夢は、首相になるか金持ちの女と結婚するか、あるいはダービー競馬で優勝することであった。イギリス以外の国

でこんなことを夢見る男性は馬鹿扱いされるだろうが、ローズベリー卿 Lord Rosebery は首相になり、ロスチャイルド家の娘と結婚し、ダービー競馬で優勝している。

キツネ狩りは経費が掛かり過ぎるということで無くなるが、それに代わる新しいスポーツとしてスコットランドからゴルフ、アイルランドからクリケット、インドからポロが導入された。この3つのスポーツがイギリスで普及することになったのには、政治情勢も影響していた。ゴルフは19世紀にイギリスで普及するが、それはイギリスの政界でスコットランドの出身者が活躍するようになったからであった。イギリスにおける「長老派 Covenanters」(1638年にイギリス国教会をスコットランドに強制しようとしたチャールズ1世に反対してカルバン派 Presbyterians への支持を盟約した者 Covenanter) の影響は、ゴルフの普及や政治家の登場として現われていた。ピューリタン革命時の「丸刈り党 Roundheads」(急進派)が「ホイッグ黨員 Whigs」としてイギリスで受け入れられたのはゴルフのお蔭であり、スコットランド出身の思想家にして歴史家カーライル Thomas Carlyle や首相になったヘンリー＝キャンプベル Henry Campbell-Bannerman とラムゼー＝マクドナルド Ramsay MacDonald のお蔭であった。

イギリス人のスポーツマン精神も、イギリス下院と「スコットランドの長老派教会 Scotch Kirk」の共同作業が生み出したものであった。「スコットランドの長老派教会」はピューリタンのように革命の必要性を説いたりしなかったが、それでもピューリタンたちが革命時に国王の悪政を批判した「大抗議文 Great Remonstrance」を支持していた。「王国の法と自由を守ろうとしたピューリタン、また王国を善きキリスト教国としたピューリタン」の伝統を善しとしていたのである。19世紀の指導者たちも同じであった。また1648年にイギリスの船乗りたちに『礼拝規定書』を与えることになった長老派の奇妙な立場は、1933年にインドの教会をイギリス国教会に統合することに賛成したときにも繰り返された。イギリス国内の政治的な自由と信仰の自由が、国外では統合に協力する結果となっていた

のである。こうして第2のイギリス国教会による統合運動が始まることになった。

1867年にランベス主教会議 Lambeth Conference がカンタベリー大主教によって招集されたが(その後十年ごとに開催されることになる)、そこにはアメリカの主教も参加していて、アングロサクソン人を統合する会議となっていた。その政治的な結果が、第一次世界大戦の時にイギリス首相ロイド＝ジョージがアメリカ独立戦争の戦勝記念碑(バンカーヒルの戦い)を訪れたことに現れている。その時ロイド＝ジョージは、アメリカ人がイギリスの過誤に気づかせてくれたお蔭で「真の結び付き true commonwealth of peers」を確立できたと言っていた。

こうして「屈辱期 period of humiliation」を脱することができたイギリスは、政治体制の再生のみならず支配階級の再生にも成功したのである。名誉革命から約百年後の1780年、パブリック＝スクール(イギリスの指導者を輩出する学校として有名)出身者が戯画に登場するようになった。自制心の持ち主であることが自慢だった紳士(准貴族)が感情を爆発させるようになり、女性に対する態度も穏やかなものではなくなっていた。紳士ども(准貴族たち)は社交クラブ・大学生活・政治討論に夢中になり、妻たちを無視するようになった。『イギリスにおける鞭打ち苦行 Flagellatism in England』と題された当時ヨーロッパ大陸で医者が書いた有名な本があるが、これは夫による妻の無視がイギリス社会に齎した傷の深さを描いたものである。動物の雄が雌に対して行う求愛行為は生物学者には馴染みものだが、当時のイギリスではそれが見られなくなっていた。

イギリスの社交クラブはフランスではサロンということになるが、フランスのサロンと違ってイギリスの社交クラブは女人禁制であった。つまりイギリスの女性は政治の世界から排除されていたのである。フランスで女人禁制であったのは、王位だけであった。イギリスでは、エリザベス1世やビクトリア女王もこの事態をどうすることもできなかった。イギリスに「女性参政権運動 suffragettism」なるものが登場してきた由縁である。フ

ランスでは考えられないことであった。パンクハート Emmeline Pankhurst はピューリタン革命が奪った女性の権利を取り戻すため、過激な行動に訴えて男性たちにショックを与えることになった。

海外に居るイギリス人男性にとって、イギリスという国は愛情を注いでくれる「古き良きイギリス old England」であったが、個々のイギリス人女性は愛情を注いでくれる相手というより、政治的な「同志 comrade」に過ぎなかった。船乗りは、自国が帰国時にも変わっていないことを願うものである。「イギリスの政治体制 English Constitution」はその「先例主義 precedent」のお蔭で、20年・30年後にシンガポールやシドニーから帰国したイギリス人男性にも、政治制度が変わらないことを保障していた。全てが大きく変化していても、政治制度だけは「旧き善きイギリス」時代のままであった。新奇なこと、人を驚かすようなことがイギリス人女性には許されていなかった。輝ける「海の泡から生まれたばかりのビーナス Venus Anadyomene」は、表舞台に立つことが許されなかったのである。イギリス人女性は若くて・美しくて・可愛くて・優しくて・「すてき nice」ではあっても、新しいビジョンを持ったベアトリーチェ（ダンテの『神曲』などに登場して来る理想的な女性）、「異能・靈感 esprit」溢れる女神であってはならないのである。イギリスにジャンヌダルクが登場してくる余地は無かった。

スイフト Jonathan Swift が大学時代の友人の妹ジェーン＝ウエアリング Jane Waring に宛てた手紙が残っている（スイフトのプロポーズを一旦断っているが、後になって気が変わったと言ってきたウエアリング嬢に対する返事）。「結婚してもよいが、条件がある。まず私の相手として、できるだけ教養を身に付けること。つぎに気に入ろうが入るまいが私の気まぐれを我慢すること。さらに住む場所は私に決めさせること。この3つの条件が呑めるなら、あなたと結婚してもよい。あなたの容姿や収入は特に問題にしない。ただし身綺麗であること、また生活できるだけの収入は用意してほしい」。この失礼な返事は、ウエアリング嬢からプロポーズしたことを考慮に入れば許されないこともないが、むしろ彼はウエアリング嬢を殴るか

蹴飛ばさずすべきであった。それほどスイフトがウエアリング嬢に対して行った残酷な仕打ちは際立っていた。彼ほど残酷なフランス人を挙げる とすれば、ミュッセ Alfred de Musset やショパン Frédéric Chopin を苦しめた ジョルジュ＝サンド George Sand くらいであろう。フランス革命の影響下で再生を果たすことになるイギリスの「准貴族」は、社会的な孤立に苦しんでいた。何者にも依存しない自分を自慢にしていたが、その内実は社会的な無関心と心理的な残酷さであった。「自己満足 self-adulation」のお陰で、イギリスの「准貴族」は「俗物 snob and prig」と化していたのである。1780年頃から、そんな「俗物」が「ホイッグ Whig」と呼ばれるようになっていた（スコットランドでは「ダンディ Dandy」と呼ばれていた）。当時のイギリスの「貴族像 look of a gentleman」を描いたあるエッセーには、ほとんど「自己陶醉 self-idolatry」に近いイギリスの「准貴族」の様子が描かれている。

そんな「准貴族」の善き伝統を苦勞の末に甦らせたのが、中産階級であった。テニソン Alfred Tennyson の詩にこうある。「こうして中産階級は偉大な貴族の伝統を引き継ぐことになった And thus he bore without abuse, the grand old name of gentleman」。しかも中産階級の数は「准貴族」の数をはるかに超えていた。1850年にイギリスには、およそ1万人の「資産家 independent fortune」が居たが、その9割は中産階級であった。当時すでに彼らは、「生まれながらの貴族 borne gentleman」と同じ社会的地位を認められていた。『果たしてイギリス人は人間か?』と題された興味深い本で、レニア G.J.Renier は19世紀のイギリスで起きたこの変化について説明している（The English: Are They Human? Leipzig, 1932）。この変化によってイギリス人は、その活力と素朴さを失ってしまったというのが彼の意見であった。しかし彼は、それが「准貴族」らしさの喪失と「俗物化 gignanity」を意味していたことを見落としている。食べ物や飲み物に対する嗜好のあり方、性愛のあり方や余暇の過ごし方などが不自然で、人間らしくないものになっていたのである。

ただし、総体的には「准貴族」と中産階級の融合は成功したと言える。

問題はこの変化に取り残された労働者階級であった。1900年以降に労働者階級が台頭してきたとき、労働党・ロイド＝ジョージ Lloyd George・フェビアン協会が「紳士 gentleman」（「准貴族」と中産階級の融合で登場してきた新しい支配層）を攻撃し始めたが、それはカーゾン卿 Lord Curzon・ハルデアイン卿 Lord Haldane・モーリー卿 Lord Morley ら新しい支配層のやり方が「准貴族らしさ gentility」の終焉を思わせたからであった。しかし労働党やフェビアン協会の攻撃は成功しなかった。

労働者階級は、イギリス社会のあり方を変えることができなかった。それほどピューリタン革命によって生み出された伝統は根強かったのである。イギリス人にとって「世界が活躍の場であり、人類はその餌食 The world their field, and humankind their prey」であった（当時の支配階級に批判的であった詩人ヤング Edward Young による詩。ミルトンの『失樂園』で樂園を出て新天地に向かったアダムとイブの期待に反するような支配階級のあり方に対する当てこすり）。

日々再発見され作り変えられる「自然 nature」がフランス人の崇拜の的だったとすれば、時間の経過が止まった（もはや変化を必要としない）「地球 Earth」を作り上げることがロシア人（ポリシェビキ党）の夢であった。そしてイギリス人は未知の世界を探検することが神より与えられた使命であった。「果てしない世界 world without end」を目指すことがイギリス人の使命であった。

イギリス人は他人の真似をすることもないし、新しく何かを始めることもしない。彼らは困難と戦い、何とか切り抜ける。なぜなら、それが神から与えられたイギリス人の使命だからである。不当な扱いを受けているクロムエル（彼の彫像がイギリス議会まえに設置されたのは、1906年のことであった。しかもその台座は途轍もなく低い）ががつぎのようなことを言っているが、彼ですら神の約束を全面的に信頼していなかったことが判る。「自分の進むべき道が判らない時は、大した高みには登れないものである」。

## 第7章 ドイツ：森と讃美歌の国

### 第1節 イギリスの兵役廃止はイギリス国内のみ

イギリスは革命で世界の海を手に入れ、船乗り・宣教師・植民地軍将校の国となった。またヨーロッパ大陸と違って、イギリス人は国王が課す兵役からも解放されることになった。常備軍を使って国王が支配することが無くなったことをよく象徴しているのが、国王の施政方針演説に対する返事を下院で議論するとき、下院議員の一人が「民兵 militia」の制服を着ることになっていることである。「民兵」の制服を着た議員は、毎年「反乱法 Mutiny Act」を下院が制定できるよう努力することが義務づけられた（「反乱法」はウイリアム3世を国王として認めず、ジェームズ2世に忠誠を誓っていた兵隊を反乱兵として罰するため1689年にまず制定されるが、そのとき半年間に効力が限定され、ウイリアム3世にも半年間だけ軍隊を持つことが認められていた。1701年に更新された後は、毎年の制定が義務づけられた）。

兵役の不在と常備軍不信はイギリスの伝統となったが、イギリスの小説家キプリング Rudyard Kipling に或るフランス人が言った次のような言葉がある。「兵役の義務ほどヨーロッパ大陸の人間にイギリス人との違いを実感させることはない。兵役の義務が無いイギリス人には、兵役に就くときの我々の気持ちなど理解できまい。それは、まるで子供に死の意味を説明するようなものである」。

もっとも、いまではイギリスも変わりつつある。「変化のスピードは非常に速く、リップ＝バン＝ウインクル Rip Van Winkle ほどの年月を経なくても（彼は20年間も眠っていて、アメリカが独立したことを知らなかった）、彼以上のことを経験できるほどである」（R. W. Chambers, The Place of Saint Thomas More in English Literature and History, London, 1937, p. 3）。またロルフ＝ガーディナー Rolf Gardiner も『北海とバルト海 North Sea and Baltic』誌に次のような文章を寄せていた。「保守派による革命で、ヨーロッパ大陸から

問題はこの変化に取り残された労働者階級であった。1900年以降に労働者階級が台頭してきたとき、労働党・ロイド＝ジョージ Lloyd George・フェビアン協会が「紳士 gentleman」（「准貴族」と中産階級の融合で登場してきた新しい支配層）を攻撃し始めたが、それはカーゾン卿 Lord Curzon・ハルデアイン卿 Lord Haldane・モーリー卿 Lord Morley ら新しい支配層のやり方が「准貴族らしさ gentility」の終焉を思わせたからであった。しかし労働党やフェビアン協会の攻撃は成功しなかった。

労働者階級は、イギリス社会のあり方を変えることができなかった。それほどピューリタン革命によって生み出された伝統は根強かったのである。イギリス人にとって「世界が活躍の場であり、人類はその餌食 The world their field, and humankind their prey」であった（当時の支配階級に批判的であった詩人ヤング Edward Young による詩。ミルトンの『失樂園』で樂園を出て新天地に向かったアダムとイブの期待に反するような支配階級のあり方に対する当てこすり）。

日々再発見され作り変えられる「自然 nature」がフランス人の崇拜の的だったとすれば、時間の経過が止まった（もはや変化を必要としない）「地球 Earth」を作り上げることがロシア人（ポリシェビキ党）の夢であった。そしてイギリス人は未知の世界を探検することが神より与えられた使命であった。「果てしない世界 world without end」を目指すことがイギリス人の使命であった。

イギリス人は他人の真似をすることもないし、新しく何かを始めることもしない。彼らは困難と戦い、何とか切り抜ける。なぜなら、それが神から与えられたイギリス人の使命だからである。不当な扱いを受けているクロムエル（彼の彫像がイギリス議会まえに設置されたのは、1906年のことであった。しかもその台座は途轍もなく低い）が「つぎのようなことを言っているが、彼ですら神の約束を全面的に信頼していなかったことが判る。「自分の進むべき道が判らない時は、大した高みには登れないものである」。

## 第7章 ドイツ：森と讚美歌の国

### 第1節 イギリスの兵役廃止はイギリス国内のみ

イギリスは革命で世界の海を手に入れ、船乗り・宣教師・植民地軍将校の国となった。またヨーロッパ大陸と違って、イギリス人は国王が課す兵役からも解放されることになった。常備軍を使って国王が支配することが無くなったことをよく象徴しているのが、国王の施政方針演説に対する返事を下院で議論するとき、下院議員の一人が「民兵 militia」の制服を着ることになっていることである。「民兵」の制服を着た議員は、毎年「反乱法 Mutiny Act」を下院が制定できるよう努力することが義務づけられた（「反乱法」はウイリアム3世を国王として認めず、ジェームズ2世に忠誠を誓っていた兵隊を反乱兵として罰するため1689年にまず制定されるが、そのとき半年間に効力が限定され、ウイリアム3世にも半年間だけ軍隊を持つことが認められていた。1701年に更新された後は、毎年の制定が義務づけられた）。

兵役の不在と常備軍不信はイギリスの伝統となったが、イギリスの小説家キプリング Rudyard Kipling に或るフランス人が言った次のような言葉がある。「兵役の義務ほどヨーロッパ大陸の人間にイギリス人との違いを実感させることはない。兵役の義務が無いイギリス人には、兵役に就くときの我々の気持ちなど理解できまい。それは、まるで子供に死の意味を説明するようなものである」。

もっとも、いまではイギリスも変わりつつある。「変化のスピードは非常に速く、リップ＝バン＝ウインクル Rip Van Winkle ほどの年月を経なくても（彼は20年間も眠っていて、アメリカが独立したことを知らなかった）、彼以上のことを経験できるほどである」（R. W. Chambers, The Place of Saint Thomas More in English Literature and History, London, 1937, p. 3）。またロルフ＝ガーディナー Rolf Gardiner も『北海とバルト海 North Sea and Baltic』誌に次のような文章を寄せていた。「保守派による革命で、ヨーロッパ大陸から

孤立していた島国はヨーロッパ大陸の一部に変わろうとしている」。かつてあった「古き良き時代」は終わり、いまでは次のような電文にロンドンっ子も笑わなくなった。「イギリス海峡で嵐が吹き荒れているお蔭で、ヨーロッパ大陸は孤立している」。

第一次世界大戦における航空機と婦人用・子供用のガスマスクが登場したお蔭で、イギリス本土も大陸の戦争と無縁でいられなくなった。そこで兵役の問題が議論されるようになったが、それはイギリス国内だけの問題で、海外の植民地で兵役は不可欠となっていた。強力で規律ある軍隊は国内では嫌われていたが、たとえばインドで戦っていた軍隊は尊敬されていた。キプリング Rudyard Kipling は『ジャングルブック The Jungle Book』で、イギリス軍がヨーロッパ人の能力の高さを象徴するものだと書いている。またアフガニスタンでインド駐留のイギリス軍がパレードを行った時、現地人に与えた強い印象はイギリス人の成果というより、ヨーロッパ人の成果であり西洋文明の成果であるとも書いている。「それから私が耳にしたのは、どうしてこんなことが出来るのかというイギリス人将校に対する年老いたアフガン人首長の質問であった。それに対して将校は、彼らが命令に従ったからですと答えていた。驢馬・象・去勢牛は御者の命令に従い、御者は曹長、曹長は中尉、中尉は大尉、大尉は少佐、少佐は大佐、大佐は准将、准将は大将、大将は総督、総督は皇帝の命令に従ったからです。だからあんなことができたのですと将校が言うと、アフガニスタンでも同じことができればとアフガン人首長は答えていた。アフガン人は誰の命令も聞こうとしないと首長が嘆くと、だからこそ皆さんは総督の命令に従わねばならないのですと将校は答えていた」(R. Kipling, The Jungle Book, Puffin Classics, 1987, pp.182~183)。

海外の植民地経営ということでは、イギリスも国王に仕える中央集権的な組織を維持しており、その点でヨーロッパ大陸各国と違いはなかった。下院は自らを支配下に置こうとした中央集権的な国家の存在は認めなかったが、植民地経営のためにヨーロッパ大陸で開発されたやり方は認めてい

たのである。それは軍隊だけではなかった。インドで威力を発揮したのは、軍隊より官僚組織であった。そしてイギリス国内でも、50年を掛けて効率よい官僚組織を整備したのである(1855年以降イギリスで進められた「公務員制度 Her Majesty's Civil Service」改革)。

## 第2節 ドイツ革命(宗教改革)の位置づけ

いまでは、アメリカ人ですら官僚・専門家集団による支配を受け入れざるを得なくなっている。しかし官僚・専門家集団による支配は不毛な樹木のようなもので、それが実を結ぶことはない。官僚・専門家集団による支配は学者が話題として好む問題であっても、そこから枝葉が伸びてくることはない。その幹は乾いており、樹液が流れることはないからである。魂を揺さぶられるような感情の高揚なしには、いかなる民族も自らの権利を中央政府に譲り渡すことはしない。魂を揺さぶられるような感情の高揚を齎すのは強い信念である。強い信念が人の心に変革の必要性を確信させたとき、社会は大きく変わることになる。官僚制度は自動機械のように機能するわけではない。何が役人に規律を齎すかを理解するためには、ドイツの革命(宗教改革)を見ればよい。ドイツでは宗教が役人に規律を齎したのである。役人の仕事は、もともと単調で無味乾燥なものである。それが革命によって突如として変わってしまった。どこの国でも、役人には汚職・賄賂・情実人事が付き物であり、それを無くすためには革命が必要である。ドイツでは、革命によって役人は誇りに満ちた存在となり、国民の指導者となった。

それがドイツ革命(宗教改革)の意味であった。同じ宗教改革と言っても、ヘンリー8世が実現したイギリスの宗教改革は紛い物に過ぎない。だからこそミルトン John Milton は『アレオパギティカ Arcopagitica』(1644年刊)を書いて、「改革の改革 reforming of the Reformation」を提唱したのである。イギリス人はドイツ人ほど「改革」を徹底させることはなかった。

ミルトンは新時代の到来を確信していたが、そのことを「改革」という言葉で表現するしかなかった。「なぜイギリスが改革のトランペットを吹き鳴らす最初の国に選ばれたのか」(Complete Prose of John Milton, ed. Don M. Wolfe et al., 8 vols. Yale UP 1953~82, 2:552)。ドイツで三十年戦争(1618~48年)が戦われている時ミルトンはこう書いていたが、すでにルターは1517年、ウイッテンベルク Wittenberg の礼拝堂の扉に『九十五カ条の提題 Die 95 Thesen』を貼りだして「改革」を開始していた。

ドイツの宗教改革はドイツだけのものではなかった。中世を暗黒の時代、近代を光明の時代とする時代区分法はドイツのプロテスタントが使い始めたものだが、ルターたちは自分たちが近代という新しい時代を切り開いたと考えていた。イギリスではクロムエルが「国璽 Great Seal」に「自由が回復してから3年目 In the III year of freedom restored」と刻ませていたし、フランスでは革命後に1週間で10日間に改めた新しいカレンダーを使い始めていた。しかしクロムエルの「国璽」もフランス革命の新しいカレンダーも直ぐに使われなくなったが、ドイツの宗教改革は今になっても歴史の教科書に重要な出来事として登場してくる。

のちにフランスの歴史家が近代の始まりをフランス革命とするようになるが、それでもドイツ革命(宗教改革)の時代区分法は影響力を失っていない。ルターたちに言わせれば、西暦600年から1500年までは「暗黒 denissimoe tenebrae」が地上を覆っていた時代であった。それは「反キリスト Anti-Christ」の教皇が教会を支配していた時代であり、キリストの説いた福音(善き知らせ)が歪め伝えられていた時代であった。ルターとメラニトン Philipp Melancthon が「新しい教え neue Lehre」を説いて、パウロが説いたという真の信仰を取り戻させたのである。ルターは自分のことを、パウロの「生まれかわり redivivus」だと考えていた。こうして以後400年間、パウロはペトロに始まるカトリック教会との戦いのシンボルとなったのである。ルターたちはラテン語に代えて母国語で教えを説き、教会・国家、修道院・病院・大学・各種学校を1つに統合した新しい文化圏を形成

していったのである。

1人の神学教授が書いた本が900年も続いた古いやり方を放棄させたのには、よほど強い動機づけがあったはずである。歴史に対する影響の大きさということでは、ドイツの「宗教改革 Reformation」はロシアの「世界革命 World Revolution」以上であった。それは神学者の争い以上のもの、聖職者の論争以上のもの、いまで言う「革命」を意味していた。既存の秩序の全面的な変更、全く新しい秩序の登場、誰も経験したことがない変革を意味していたのである。

聖俗分離を前提にするカトリック教会圏では、世界の半分は教会の支配下にあった(信仰の問題は教会の管轄下にある)。そこで「目に見える教会 visible church」(俗世界に施設として存在する教会)を壊すということは、世界全体を造り替えることを意味した。

ドイツの宗教改革も革命の一種であり、他の革命と同じようにまず「高揚期 period of upheaval」があり、ついで「行き過ぎ carelessness and arrogance」があつて、最後に「屈辱 humiliation and abasement」の時期があつた。しかし、ドイツの宗教改革には他の革命にはない特徴があつた。それは主役が2人、つまり宗教的な主役(ルター)と政治的な主役(領邦君主)がいたことである。まずルターが1517年に『九十五カ条の提題』を公表することで主役として登場し、1525年に修道女と結婚して大騒ぎになるまで主役を演じていた(修道士・修道女になるとき、ルターも相手の修道女も独身の誓いを立てていた。2人は、その誓いを破ったのである)。ルターが結婚して大騒ぎになった同じ年、大規模な農民反乱(ドイツ農民戦争)を鎮圧した領邦君主が改革の推進者として登場してくる。1555年にアウグスブルクで宗教和議が成立するまで、彼らが改革運動の主役を演じることになるのである。

1517~25年の8年間ルターは「新しい教え」の普及に努め、帝国議会はそれを妨害しようとしたが成功しなかった。さらに1525年以降になると「新しい教え」は帝国議会だけの問題でなくなり、宗教改革の担い手が領邦君主に移っていくことになる。

三十年戦争でも、まず宗教的な問題が解決され、ついで政治的な問題が解決された。宗教改革でまず宗教的な主役が登場し、ついで政治的な主役が登場してきたことに対応している。つまり1648年のウエストファリア条約でルター派もカルバン派もカトリック教会に並ぶ正式な宗派と認められることになり、その6年後の「最後の帝国議会決議 Recessus imperii novissimus」で、宗教戦争が引き起こした政治的な問題が解決された。帝国議会の形骸化で、神聖ローマ帝国はその存在理由を失ったのである。

ドイツの宗教改革で用いられたスローガンは、他の革命ですでに馴染みのものであった。ロシア革命ではプロレタリアートが資本家にとって代わったし、フランス革命では能力あるフランス人が貴族にとって代わった。またイギリス革命では「紳士」（「准貴族」とのちの中産階級）が国王にとって代わったし、ドイツ革命では信者が聖職者にとって代わった。ただし、どの革命でも国内の統一が維持されていることが前提になっていた。ロシア革命では共産党支配下の経済体制の統一維持が前提になっていたし、フランス革命ではフランス政府による国の統一が前提になっていた。イギリスの場合も、1つに統合された連合王国の存在が前提になっていた。いずれの革命でも改革のために流血が避けられなかったが、それはこの前提条件が存在していたからであった。どの革命でも、国土の分割は認められていない。イギリスの下院が長老派（信者の集まりである会衆 congregation の自立性を重んじて、上位組織の存在を認めないカルバン派）を弾圧したのは、長老派がイギリス国教会の統一を妨げたからであった。またフランス革命でジロンド派が粛清の対象となったのは、ジロンド派が連邦制を主張してフランスの統一を妨げたからであった。ロシア革命で社会革命党が粛清されたのは、農民を大切に考え過ぎた彼らに、農民を犠牲にした経済統合ができなかったからであった。ドイツ革命（宗教改革）の場合も同じであった。「すべての信者が聖職者になる」ためには（プロテスタントはカトリック教徒の様に聖職者を特別視しない）、領邦国家の構成員全員がプロテスタントになる必要があった。再洗礼派（カトリック教会の幼児洗礼を認めず、成人に改め

て洗礼を受けさせたのでこの名がある）などを徹底的に弾圧したが、それは村ごとに違った会派が登場してくることを防ぐためであった。

### 第3節 マルチン＝ルター

「すべての信者を聖職者に」と主張するからには、まず自らが聖職者になる必要があった。また、その主張の実現は個人・村・町単位でなく、領邦国家単位で行われる必要があった。それが当時のドイツに存在していた最大の政治単位だったからである（ただし領邦国家の大きさは、せいぜいアメリカのロードアイランド州 Rhode Island and Providence Plantations・ドイツのザクセン州・イタリアのトスカナ州ほどしかなかった）。「ランター Ranter」のような過激な宗派は認めず（イギリスのピューリタン革命では過激な宗派が数多く登場してきたが、この宗派もその1つで一切の宗教的・政治的な権威を認めなかった）、しかも領邦国家だけに宗派の選択権を認めたのである。

アウグスチノ会（フランチェスコ会・ドミニコ会などと同じ托鉢修道会）の修士でウイッテンベルク大学の神学教授に過ぎなかったルターが修道女と結婚して平信徒になるだけでは、宗教改革は実現できなかった。単なる気まぐれな修士と誤解されただけであった。誤解を避けるためには、いずれかの領邦国家に所属する必要があった。いずれかの領邦君主の忠実な臣民となる必要があった。

その結果、ルターは宗教改革の主役になることができたのである。イギリスの宗教改革は革命を遂行するための「口実 ideology」に過ぎなかったが、ドイツの宗教改革では社会や政治のあり方を変える「宗教改革」の真の姿は、1枚のカーテンによって隠されていた。何人もの神学教授によって織り上げられたカーテンで、「ルターの生き様 Life of Martin Luther」と呼ばれていた。領邦君主がローマ教皇に対して起こした反乱が、ルターの名のもとに実行されることになったのである。領邦君主は、反乱の正当性を自ら主張することをしなかった。聖職者であることを止めた一人の修士

に、それを任せたのである。イギリスでは「国王大権 Prerogative」、フランスでは「国家主権 Sovereignty」とか呼ばれるようになった新しい政治の枠組みが、ドイツでは「ルターの生き様」として語られることになったのである。こうして政治的な変革がルター個人の宗教的な回心物語の背後に隠され、政治的な争いの現実が見えなくなってしまった。ルターが新しく登場してきた世俗君主の臣民であったことが見過ごされ、「強烈な個性の持ち主」・「英雄」・「偉大なるドイツ人」と称賛される特別な人間にされてしまった。個人的な貢献ばかりが強調されるようになった結果、彼は果たした社会的な役割が軽視されことになったのである。彼の遺言はドイツ革命の意味を理解する上で欠かせない史料のはずだが、それに歴史家が注目することはなかった（Martin Luther's Last Will and Testament: A Facsimile of the Original Document, With an Account of its Origins, Composition and Subsequent History by Tibor Fabinyi）。農民反乱に対する彼の批判的な態度がルターの「個人的な理由 personal issues, allegiances and sentimentalities」で説明されて、それがドイツ政治にとって持った意味が理解されることは無かったのである。

しかも、この「個人の生き様 subjectism」がドイツの強みの源、ドイツ人の独創性の現われと称賛されることになったのである。教皇庁に対する「ドイツの独立宣言 German Declaration of Independence」はルター個人が実現したことになり、教会の再生も解放もルター個人の貢献で説明されて、それが制度の問題であったことが軽視されることになった。ルター個人がやったこと（A）と、領邦君主がやったこと（B）を分けて年表にして見ると次のようになる。

#### (A) 宗教改革におけるルターの役割

- 1517年 ローマ教皇が信者に約束した救済策を批判する『九十五カ条の提題』を公表。
- 1520年 教皇から送り付けられてきた破門状を焼き捨てる。
- 1521年 ウォルムス Worms の帝国議会で皇帝がルターの追放（帝国内での安全保障拒否）を宣言してルターが書いた本を禁書とするが、

領邦君主のなかには皇帝の命令を実行しない者がいた。たとえば帝国宰相のマインツ大司教は、ルターの人気に恐れをなして皇帝の命令を実行していない。

- 1524年 大学や諸侯の代表は宗教改革について帝国議会で議論することを提案するが、皇帝は帝国議会で宗教問題を議論することを認めない。
  - 1525年 修道士であったルターは修道女と結婚したので、ルター自身の法的な立場も家族の立場も従来の枠組みでは処理できなくなる。
  - 1541年 ルターが帝国や教会を無視した形で遺言を残したので、その執行はルターの君主であったウイッテンベルク侯が保証することになる。
  - 1546年 ルター死去。まもなく新・旧教派間の武力衝突が始まる。
- #### (B) 宗教改革における領邦君主の役割
- 1525年 ドイツ農民戦争の終結。領邦君主が農民反乱の鎮圧に成功。
  - 1526年 ルター派を認めない皇帝にルター派の領邦君主が「抗議する protest」（「プロテスタント Protestant」という呼称の起源）。
  - 1530年 皇帝に対抗するため、ルター派の領邦君主がシュマルカルデン同盟を結成。
  - 1546～47年 シュマルカルデン戦争が皇帝軍の勝利で終結。
  - 1552年 フランスの援助でルター派が皇帝軍に勝利。
  - 1555年 アウグスブルクの宗教和議でルター派が皇帝に承認される。

## 第4節 ドイツの役人

宗教改革でルターが果たした役割と領邦君主が果たした役割が一緒になって、独特な役人がドイツに登場してくることになった。ドイツの役人はまずルターの教説に触れ、ついで宗教改革を遂行すべく領邦君主の



領邦君主の支配地内に点在していた教会領

(斑点で表示)：ザクセン選帝侯が領有していたウイッテンベルク侯国の例  
(2つの地図は同じ領域を表示している)

役人になったのである。このような役人の世界に、高等教育を受けた知識人が介入する余地はなかった。第7代アメリカ合衆国大統領ジャクソン Andrew Jackson のような役人蔑視は、ドイツには存在しない。いまアメリカでは効率よい役人制度の必要性が説かれているし、イギリスでも公務員制度改革の必要性が説かれているが、アメリカ人やイギリス人が「家父長

主義 paternalism」と呼んで馬鹿にしているドイツの役人制度は、とても参考になるはずである。

役人になろうと考えるドイツ人は、2つの独立した組織の支配を受けることになった。つまり教会の支配と領邦君主の支配である。教会と領邦君主はお互いに相手の独立性を尊重しており、そのお陰で役人は自主的な判断が保障されることになった。また、自分に対する信頼にこたえようとする態度を持つことも出来るようになった。

当時のドイツには、何百という数の領邦君主が存在していた。その種類もさまざま、7人の選帝侯（プファルツ・ザクセン・ブランデンブルク・チェコ・トリニア・マインツ・ケルン）、50人の大司教と司教、70人の修道院長と女子修道院長、31人の世俗君主 Fürst、128人の伯爵 Graf、81の帝国都市である。1750年になっても（シラー・ゲーテ・フリードリヒ大王・マリア＝テレジアの時代）、ドイツは約350もの領邦国家に分かれていた。それが神聖ローマ帝国のなかでヒエラルヒー状の序列を形成していたのである。頂点に皇帝、その下に聖俗の選帝侯（ローマ教皇のもとに枢機脚がいたのと似ている）、さらにその下に聖俗の領邦君主・修道院長・女子修道院長・伯爵・帝国都市が続いていた。

宗教改革の結果この序列が無意味になり、全員が同じ信者ということになった。広大な領地の君主・小国の伯爵・ライン川下流のケルン大司教・ライン川上流の小国領主に過ぎないゼッキンゲン修道院長も、領民の宗教的な救済に責任を負うということでは違いが無くなったのである。宗教改革という激震のなかで（カトリック教会系の歴史家に言わせれば「本物の革命 real revolution」）、全員が「ドイツ国民 German Nation」を構成する同じ「領邦君主 Landesherr」となったのである。

もちろん同じ「領邦君主」であっても、軍事力や富力には大きな違いがあった。たとえば皇帝は、ドイツの外にも広大な領地を持っていた。ドイツ皇帝は、オランダ伯 Count of Holland・ナミュール伯 Marquis of Namur・ヘンネガウ＝ブラバント侯 Duke of the Hennegau and Brabant・アルザス方伯

Landgraf of Alsace・ブライスガウ伯 Count of Breisgau・ハプスブルク = キブルク = ツルゴウ (現在ツルゴウはスイスの1州) 伯 Count of Hapsburg and Kiburg, and the Thurgow in Switzerland・ブレゲンツ = チロール伯 Count in Bregenz and of Tyrol・ブリクセン = トレント侯 Prince of Brixen and Trent・ステイリア伯 Marquis of Styria・上 = 下オーストリア大侯 Archduke of Upper and Lower Austria・チェコ王 King of Bohemia・ハンガリー王 Apostolic Majesty of Hungary・モラヴィア伯 Marquis of Moravia・シロンスク侯 Duke of Silesia・トランシルバニア大侯 Grand Duke of Transylvania・トリエステ市とカッタロ市の領主 Lord of Trieste and Cattaro・ダルマチア王 King of Dalmatia なども兼ねていた。ドイツは、そんな皇帝によって守られていたのである。とくに警戒されていたのが、1529年と1683年にウイーンを攻略したトルコであった。

ホーエンローエ王 Prince von Hohenlohe やシュタイン帝国騎士 Imperial Baron von Stein の領邦は規模が小さく、皇帝とは比喩物にならなかったが、それでも「領邦君主」ということでは皇帝と対等であった。領邦内の宗教問題に関して、「領邦君主」はローマ教皇のような立場を占めていた。宗教改革を受け入れるか否かは、自分の良心に従って決めることができたのである。いかなる上位の権威も介入することができなかつた。皇帝にも帝国議会にも相談する必要はなかつた。その結果生まれて来たのが、「ドイツ的自由 Teutsche Libertaet」であった。宗教問題に関して、「領邦君主」はローマ教皇・司教・皇帝に従う必要が無くなったのである。

領邦の規模に関係なく、「領邦君主」は領邦内ではローマ教皇と同じ権限を有していた。しかも大部分の領邦は規模が小さかつたために宗教問題を政治的に解決することが可能で、軍事問題化することが無かつた。とくにドイツ中央部の「領邦君主」は領邦の防衛を皇帝に任せることができたため、宗教改革を領邦の統治強化に利用することができた。教会の統治制度を、そのまま官僚機構として利用できたのである。その結果、登場してきたのが効率のよい役人制度であった。役人が聖職者にとって代わり、「聖職者 Klerus」という言葉はドイツ語で使われなくなつてしまつた (ただし、それ

はプロテスタント地区の北部ドイツのみ。カトリック教團に留まつた南部ドイツでは従来どおり使われている。またドイツ語と違って、フランス語の cleric や英語の clergy は従来通り使われている)。ドイツでは「教会法 Canon Law」に代わつて「世俗法 Civil Law」が登場してきた。フランス語の「文明 civilisation」の語源になつたラテン語 civis は、ドイツでは「世俗秩序の形成 Zivilisierung」という言葉の語源になっている。いま我々は「民間人 civilian」であることが普通で、軍人になるのは例外的な場合 (たとえば戦時) に限られている。また「教会法」ではなくて「世俗法」のもとで生活することが当然と考えられている。しかし宗教改革以前には、このような考え方は存在しなかつた。中世人は「俗人 layman」でなければ「聖職者」であり、また封建法と教会法のもとで生活していた。結婚するときは教会法に従い、相続は地域特有の伝統に従い、取引や契約は国王の裁判所に管理されていた。中世に「世俗法」や「コモンロー」は存在しなかつたのである。「コモンロー」はイギリスに特有の法体系であるが、これが登場してきたのは17世紀で、ヨーロッパ大陸の「世俗法」に対応するものである。宗教改革の結果、男はまず「戦士 warrior」であるという考え方が無くなり、平和に暮らす「民間人 citizen」であると考えられるようになった。「領邦君主」の臣民として、生まれてから死ぬまで「領邦君主」が定める「世俗法」に守られて暮らすのである。ローマ教皇・教皇特使・司教の支配に脅かされることは無くなり、また封建法の過酷な支配に脅かされることも無かつた。ローマ教皇が課す過大な税金 (免罪符) に脅かされることも無かつたのである。

自分たちが制定した「世俗法」を「領邦君主」たちは誇りにしていた。ヨーロッパで初めて「民間人」なる考え方を確立させたからである。男たちは戦士である前に「民間人」であること、例外的にだけ「戦士」になることが要求されるようになった。領邦の防衛は「領邦君主」に任せ、領民は自分の仕事に専念していればよいことになつた。

## 第5節 軍政分離

そこで「戦士」に代わる言葉が必要になり、「戦士」に代わってラテン語由来の「軍人 militia, military」という言葉が使われるようになった。「軍隊 military forces」とは「世俗秩序の形成」が実現した国の「軍事力 forces」を意味するのであり、個人が「戦士」として参加するものではない。「領邦君主」の臣民は騎士であれ従者であれ、その身分の違いに関係なく同じように君主によって保護されることになった。こうして近代的な国家が登場してきたのである。

「世俗法」を制定して「役人制度」を確立したとき、「領邦君主」は軍人を役人から分離して、軍人が「政治家 governor」になることを禁止した。この「軍民分離 division of labor」は、当時としては驚くべきことであった。初代のアメリカ合衆国大統領ワシントン George Washington は、独立戦争のときアメリカ軍の総司令官であった。また対ナポレオン戦争で活躍したイギリスのウェリントン伯 Duke of Wellington も「軍人」であり政治家であった。第7代アメリカ合衆国大統領のジャクソン Andrew Jackson も、第12代アメリカ合衆国大統領テイラー Zachary Taylor も「軍人」にして政治家であった。また第18代アメリカ合衆国大統領グラント Ulysses Grant も「軍人」にして政治家であった。フランスではマクマオン Marie Edmé Patrice Maurice, Count de MacMahon が「軍人」としても政治家としても有名だし、ドイツではヒンデンブルク Paul von Beneckendorff und von Hindenburg が「軍人」にして政治家であった（ただしヒンデンブルクの大統領就任は例外措置）。このように有能な「軍人」に政治のリーダーシップを任せるのは、普通に行われていたことであった。

ところがドイツでは宗教改革の結果、「軍人」と政治家は分離されることになった。ルターの時代から1890年まで（この年にビスマルクは宰相の地位を辞して、「軍人」のカプリヴィ Leo Caprivi が宰相の地位に就いた）、ドイツで「軍人」が政治家になることは一度もなかったのである。ヒンデンブルクを例

外として、基本的にドイツの「軍人」が政治家になることはなかった。このドイツのやり方が、のちに他の民主主義国家にも採用されることになったのである。

ドイツで対抗＝宗教改革の嵐が吹き荒れていたとき（三十年戦争）、皇帝軍総司令官のワレンシュタイン Albrecht von Wallenstein は軍事的な貢献ゆえに、ドイツで皇帝から領地を与えられていたが、彼は軍隊を保持していた「領邦君主」というより、クロムエルのように軍司令官であったおかげで領地を獲得できたに過ぎなかった。皇帝に無断で新教徒軍と和平交渉を試みて暗殺され（1634年）、彼に与えられていた領地は再び「領邦君主」によって統治されることになった。ドイツの宗教改革が最大の危機に直面していた時ですら「軍人」は政治家にはなれなかったのである。ワレンシュタインの失敗は1875年のフランス共和制復活にも例えることができる。1634年のドイツの出来事は1875年のフランスの出来事に似て、一旦成功した革命の成果は失われることが無いのである。

## 第6節 世俗法による一体的な統治体制の確立

ルターを例に「領邦君主」の「世俗法」が築き上げた新しい統治体制を説明してみよう。ルターはマンスフェルト Mansfeld 鉱山都市で鉱夫の息子として暮らしていたときは（生まれたのはアイスレーベン Eisleben）、ザクセン部族法の管轄下にあった。1509年に修道士になると彼は名前を変え（Luder → Luther）、「俗界と縁を切り died to the world」、ザクセン部族法の管轄から外れることになった。修道士は財産を持たず、家族とは縁を切り、「修道院外の世俗世界 mudus」とは無縁になる。彼は修道院規則を守ることを誓って、修道院規則の管轄下で生活することになったのである。そんな修道院がザクセン選帝侯・チューリンゲン方伯 Elector of Saxony and Landgrave of Thuringia の領地には100近くあった。領地の広さはイギリスの九分の一ほどであったが、それは16世紀のドイツでは標準的な広さであっ

た。そこに6つの司教領が存在していて、100<sup>ちか</sup>近い数の修道院はローマ教皇の統治下にあり（60ほどがザクセン、40ほどがチューリンゲン）、6つの司教区を統べる大司教も残る5つの司教も、ローマ教皇の統治下にあってザクセン選帝侯の支配下にはなかった。自領内の宗教的な問題を解決するためには、マインツやマグデブルクの司教、あるいはローマ教皇やチューリンギア方伯領のバンベルク司教に頼むしか方法がなかったのである。

修道院領は領地全体の3分の1を占めており、そこからの税収は諦めざるを得なかった。それぞれの修道院は集団生活を行うための「規則 religion」を持っており（それぞれ違ったものであったが、いずれもローマ教皇の認可を得ていた）、自分たちの「規則」こそが「救済 holiness」に至る最善の道としてお互いに競い合って混乱を引き起こしていた。

そこでルターの君主であったフリードリヒ賢侯 Friedrich der Weise は（彼自身とても熱心な信者であった）、問題を解決するために大学を設置することにした。領邦内の聖職者や役人に大学での勉学を強制できれば、お互いに協力することが可能になるからである。

こうして人口382人（1512年の統計）の瘦せた土地しかない片田舎のウイッテンベルクに、大学が創設されることになった（1502年）。ルターはこの大学の神学教授であった。大学が皇帝と教皇の庇護下に置かれていたので、ルターは教会法とローマ法の管轄下で生活していたことになる（ただしルターに給与を支払っていたのはフリードリヒ賢侯であった）。フリードリヒ賢侯は大学のことを大切に考えていたが、それは大学が役人を養成するうえで欠かせなかったからである。

フリードリヒ賢侯はルターと個人的な関係を持っていなかった。ルターが有名だったにも拘らず、また領邦としてザクセン・チューリンゲンは決して広大とは言えなかったにも拘らず、2人が言葉を交わしたことはなかったようである。2人の関係はあくまでも「領邦君主」と「領邦君主」が創設した大学の教授の関係に留まっていた様である。

そんな時にルターは、教皇の権限を認めないと宣言して教皇と対立する

ことになった。ルターは教会から追放され（破門）、彼が学生たちとウイッテンベルク城の外で教皇から届いた「破門状 papal bull」を焼き払ったとき、彼らはそれまでなかった新しい世界を生み出したのである。彼らは、ローマ教皇とその支持者たちに呪われることを厭わない勇敢な人たちであった。

その1年後（1521年）、ルターはウオルムスの帝国議会に召喚されることになった。すでに教会は権威を失っており、若い皇帝カール5世は熱心なカトリック教徒であったにも拘らず、もはやローマ教皇の命令を忠実に実行することは無かった。それまでの皇帝はカトリック教会の守護者であり、カトリック教会を攻撃する者を容赦しなかった。フス Jan Huss がカトリック教会を非難し、コンスタンツ Konstanz に召集された教会会議が1415年にフスの教説を異端と決めたとき、兼務していたチェコ王の地位を失う可能性があったにも拘らず、皇帝ジギスムントは教会会議の決議に従ってフスを処刑している。その後50年も続くフス派戦争（1419-71年）の原因を作ってしまったのである。フスを火炙りの刑に処すべく足元に薪を積み上げる老婆を見たフスは、「何という無知蒙昧ぶり O Sancta Smplicitas」と叫んだそうだが、フスの焚刑を切っ掛けにフス派戦争が開始された。

皇帝はフスの安全を保障していたが、教会会議がフスを異端と認めたことで安全が保障できなくなった。異端者は法的な保護の対象とはならないからである。ところがルターが帝国議会に召喚されたとき、フスの処刑がフス派戦争の切っ掛けになったことがまだ人々の記憶に新しくあった。「必ずや100年後に代償を払うことになる When one hundred years have revolved you shall answer God and me」というフスの預言なるものが信じられていたのである（1515年にザクセン選帝侯の隣国で銀鉱山を所有していた1人の伯が、このフスの預言を刻印したメダルを作っていた）。

おかげでルターはフスと同じ運命を辿らずに済んだ。カール5世はジギスムントではなかった。フス派戦争を経験した皇帝と帝国議会は、ローマ

教皇の命令にしたが従うことを拒否したのである。ルターは帝国議会で自説を説明するよう求められたが、かつて教皇グレゴリウス7世が皇帝ハインリヒ4世を破門したり、教皇インノケンチウス4世が皇帝フリードリヒ2世を廃位したりしたときと違って、もはやローマ教皇が問題の処理を皇帝や帝国議会（さらには「領邦君主」）に引き受けさせることは出来なくなっていた。

ドイツにおける宗教改革の意味はこれであった。果たして「領邦君主」はローマ教皇の命令を拒否できるのか。果たして「領邦君主」はローマ教皇の命令の正当性を疑問視することができるのか。イギリスでは、コモンローのおかげで判事が法律を無効にすることができた。しかし、ドイツにコモンローは存在しなかったのである。果たして領邦君主は「破門状」の無効を宣言できるのか。あるいは宗教的な伝統を無視したり、教会法を無視したりすることができるのか。

ウオルムスの帝国議会は、この問題に対して明確な態度を示さなかった。教会法と部族法の保護は期待できなくても、帝国法の保護を期待できると考えたルターは意気軒昂であった。彼は帝国議会が彼の立場を支持するように要求したが、議会に出席していた騎士や領主たち（さらには皇帝）に、神学者の役割を期待することは無理であった。百貫デブの修道院長や文盲の領主たちには、修道士のルターが問題にしている煉獄・地獄・救済の有無など信仰の問題に判断を下すことなど出来るはずがなかった。「破門状」を焼き捨てたルターは帝国議会に保護を期待したが、それは無理な注文であった。帝国議会はルターを審問に付したが、そのとき皇帝が問題にしたのは異端とされた文書がルターの書いたものであったか否かということだけであった。

このときカール5世に突き付けられていた課題は、いまも解決されていない。映画や演劇の検閲の是非、出版や報道の禁止の是非などは、いまも議論の対象となっている。かつて教皇が果たしていた役割を、いまは国粋主義者や狂信的なイデオロギーの持ち主が担っており、担い手の数は増えたが齎される結論はロシアでもアメリカでも同じである。1521年のとき

と何も変わっていない。

人間の内面を支配する宗教は、つねに支配者と対立する危険に晒されている。ウオルムスの帝国議会が宗教問題に対して明確な態度を示さなかったのは幸いであった。人間の内面の問題や信仰の問題に白黒を付けたのが専制君主である。権力者が権力の行使に躊躇っているときほど良心にとって都合が良いときはない。

「たしかに私は教皇を批判するようなことを書いた。ここに私が居るのは、そのためであり、それ以外の理由からではない」。ルターがこう言ったとき、帝国議会に出席していた諸侯やその家臣たちは、どうすればよいのか判らなかつた。彼らに異端者を裁く権利はなかつたし、フスの時のように自分たちの臣下を焚刑に処したり、切り殺したりすることもできなかった。

皇帝が教皇令の実行を諸侯に強制しようとしたとき、まず帝国宰相にして国璽尚書であったマインツ大司教がそれを拒否した。皇帝の命令書に国璽の押印と署名を拒否したのである。皇帝に宛てた手紙で、近隣諸侯が足並みを揃えない限り命令を実行する訳には行かないと言っていた。彼は大司教であったが、同時に「領邦君主」でもあった。「領邦君主」としては、領内に戦火を呼び込むわけには行かなかつたのである。マインツ大司教は、ルターの君主が支配する領邦の高位聖職者でもあった。聖職者でありながら同時に「領邦君主」であったことが、マインツ大司教の弱みになっていた。聖職者として果たすべき任務は、世俗君主としては好ましくないことだったのである。マインツ大司教に比べれば、ザクセン選帝侯の立場はそれほど複雑でなかつた。大司教のように、ローマ教皇に対して忠誠を誓っていなかったからである。自領内に戦火を呼び込みたくないというだけでなく、ザクセン選帝侯には他にも大切な理由があった。

彼は、改革派を教授陣に擁する大学を領内に持っていたのである。宗教改革を推進すれば、自領内の富と土地の3分の1を支配する教会からそれを奪うことができた。ローマ教皇が大学を異端と決め付けて介入してくれ

ば、大学は閉鎖を免れなかつた。そうすれば、彼はローマ教皇と対決する手段を失うことになる（106カ所の教会・修道院などのカトリック教会施設が自領内にあった）。ザクセン選帝侯にとってウイッテンベルク大学は、外国からの影響を排除するために無くてはならない手段であった。その存在理由をローマ教皇が問題視することなど認める訳にかなかったのである。

皇帝カール5世には、そのことがよく判っていた。そこでウオームス勅令を公布するに際して、異端か否かを判断する権限を大学の神学部に与えることにした。それまで司教に認められてきた異端審問の権限が、大学の神学部に与えられることになったのである。ルターの過去の言動を非難するローマ教皇令より、この決定の方が重要な意味を持つことになった。ルターは神学部の教授であり、ルター自身に教説の異端か否かを判断する権限が与えられることになった。ザクセン選帝侯がルターを保護したのは、彼がルターの友人だったからではなかった。自領内に設置した大学を「領邦君主」として守るためであった。

「領邦君主」に大学設置の権限を認めるということでは、カトリック派もプロテスタント派も異論はなかった。1524年にカール5世の弟にしてドイツ国王であった（皇帝代理でもあった）フェルディナンドは、帝国議会と大学の自治権を帝国法で認めることに同意していた。大学も「領邦君主」と同じように、帝国議会に出席することが可能になったのである。もしそれが実現していれば、大学教授が領主と対等の資格で帝国議会に出席できていたはずである。すでに1460年に同じ考え方が提案されていたが実現せず、1524年にも実現しなかった。カール5世は混乱を恐れて、大学教授が帝国議会に出席することを認めなかったのである。それ以降は自領内の大学を保護するか否か、また大学での宗教問題をどう処理するか、授業の内容をどうするかということは、「領邦君主」が決めるかローマ教皇や司教に決めさせるしか方法が無くなったのである。

「領邦君主」にとって、この問題の処理は難しいことではなかった。いくつかの司教区や修道院が自領内にある「領邦君主」は、当然のことなが

ら自分の支配権を守ることを考えた。自分が設立した大学の神学教授を改革の主導者と認めるか、それとも異端として糾弾するかも「領邦君主」の自由であった。自領内に大聖堂を持つ都市が存在する場合（大聖堂は司教座の所在地）、「領邦君主」はローマ教皇なり司教と妥協を試みる傾向が強かったが、ザクセン選帝侯やヘッセン選帝侯にはそれが出来なかった。ウイッテンベルク・マールブルク・イエナ・ヘルムシュテット Helmstedt の各都市にプロテスタント派の大学が設立されたのは、ザクセン侯国の大部分・チューリンゲン侯国・ヘッセン侯国・ブラウンシュワイク Braunschweig 侯国では司教が外国人だったからであった。

ルターに帝国法が適用されることはなかった。なぜなら、彼は修道士だったからである。またルターは破門されたため、教会法も彼には適用されなかった。彼に法的な地位を与えることができたのは、ルターの大学を設立した「領邦君主」だけであった。またルターは1525年に修道女のカテリーナ＝フォン＝ボラ Katherina von Bora と結婚したが、2人とも適用される法律はなく、この結婚も非合法であった。彼らと同じように俗人に戻った修道士や修道女に何らかの法的な地位を与えることができたのは、「領邦君主」だけであった。ルターの子供たちも同じであった。このように何千、何万という領民が法的な地位を失い、彼らに領民としての地位を与えることができるのが自分だけだという状況は、「領邦君主」にとって大問題であった。

## 第7節 「領邦君主 Landesherr」の良心

「領邦君主」は、教会法のどの部分を領内の世俗法として残すかを決めることができた。また領内に新設した大学を保護するため、教会法や帝国法を部分的に廃止することもできた。さらに必要があれば、自分の良心に従って法律を新しく制定することもできた。緊急時には誰にも相談することなく即決することもできたし、それが統治を担当する者の責務でもあった。

どこの国の政府も、戦争・反乱・飢饉・地震の発生時のような緊急時には「議会に諮ることなく決定を下す権限 prerogative」を持っているものである。ところがイギリスでは、緊急時に国王に不可欠なこの権限が国王には無かった。「熱心な民主主義者 fervent democrats」からなる議会が、その必要性を認めなかったからである。ところがドイツでは、この権限は「領邦君主」の義務だとされた。キリスト教国では教会が腐敗すると君主がそれを正すことになっているが、それを君主の権利だとするより義務とした方が政治的には賢明なやり方である。こうしてドイツでは、「領邦君主」が宗教的な危機を解決する義務を負うことになった。「領邦君主」として、それは荷の重い義務であった。「公共善のため general welfare clause」に必要な統治者の義務であった。

緊急事態、たとえば戦争とかで国民の生命が危険に晒されない限り、とくに政府が行動を要求されることはない。しかし緊急事態に直面しているのに「政府が何も解決策を

講じない government by talk」場合、その政府は政府の名に値しないことになる。政府は決めることが出来るからこそ政府なのである。政府はやるべきことを決めなければならない。また緊急事態に直面したときに決断を下すのは1人(ないしは少数者)でなければならず、他の者はその決断に従うことになる。「民主的な統治 government by the people」は政府をコントロールするためには望ましいことかもしれない



領主と教会の関係が正常なルター派の領邦：ザクセン選帝侯フリードリヒ賢侯と賢侯が創設したウITTENベルク大学。

領主と教会の関係が異常なイギリス：ヘンリ8世は自分がイギリス教会の首長であることをヘブライ語・ギリシャ語・ラテン語で宣告

が、緊急事態が発生すれば統治者は1人で事態に対処しなければならなくなる。暴力的で残酷な悪魔の統治になるかもしれないが、それ以外に選択の余地はない。それが嫌なら、無秩序の発生を覚悟しなければならない。銀行は閉鎖に追い込まれ、債権者が債務者を裁判に訴えることも出来なくなり、牢獄に収監されている者に教育を施すことで改心させることも出来なくなる。銀行から通貨は消え去り、債権者の手元から現金が無くなり、収監者の教育よりも多くの失業者をどうするかという深刻な問題に直面することになる。

戦時のような緊急事態になると普通の生活は出来なくなり、優れた能力の持ち主や活力に満ちた者が危機に晒されることになる。一枚の枯葉に注意が払われるのは平和な時だけである。平和な時には政府が前面に出てくる必要はなく、貧困者・病人・障害者など弱者の面倒は個人が見ればよい。平時には「決定を下す権限」は各個人が持つことになる。個人が枯れかけた葉の面倒を見ればよい。

ところが第一次世界大戦や大恐慌のように、誰も平時の心理状態を維持できなくなった時は、そうはいかない。「はたして人生は生きるに値するか」とか、「失業者は社会にとって無用の存在なのか」といった疑問が国民のあいだで広まっていくことになる。仕事がなければ職業訓練は無意味になるし、家庭で子弟に宗教教育を施すことも無意味になる。

それは人間の「内面 soul」が試される時でもある。身体的な苦痛を感じたり攻撃されたりする危険があるわけではないが、我々の信仰を蝕み、他人に対する慈しみの気持ちや生きる自信を失わせる時である。そんなとき必要となってくるのが政府による決断である。政府が実権を握らなければ、あらゆる事が疑わしくなり、果てしない議論が始まって無秩序に陥ることになる。緊急事態の発生によって国民相互の信頼が失われ、政府による統制が必要になってくる。たとえ野蛮で厳しいものであっても、政府による統制が必要になってくる。

緊急時に効果的に事態に対応するため、政府が法的な手続きを無視する

ことも有り得る。また暴力の行使が必要になってくることも有り得る。ただし、緊急事態の対応に成功したからといって、暴力の行使が公認されることはない。専制はあくまでも専制であり、悪政はあくまでも悪政である。奴隷が統治担当者を「皇帝陛下」とか「大統領閣下」と呼ぶからといって、統治が上手くいっていることにはならない。暴力の行使は、あくまでも緊急事態に対処する場合に許されることなのである。緊急事態が発生してくると新しい政府（あるいは古い政府の改訂版）が登場してきて、対処能力が試されることになる。新しい政府が緊急事態への対処に成功するためには、「古い常識の破壊 dilution of faith and standards」や飢餓を引き起こすような政策もやむを得ないことなのである。

大抵のことは経済的な動機づけで説明できるものだが、ドイツで近代国家（領邦国家）の登場を促した緊急事態は経済に起因していなかった。アメリカの初代大統領ワシントンは、西部で土地投機をしてアメリカ人の金持ちになりたがっていたし（それを禁じていたイギリス政府と対立）、「連邦派 Federalists」はアメリカ西部の土地を投機買いしていた（そこで各州の権限を抑える連邦主義を支持）。またイギリスのホイッグ党員は教会領を自分のものにしていたし（そのためにヘンリー8世の宗教改革を支持した）、フランスの中産階級は農民を搾取するつもりでいた。こうした経済的な動機づけは確かにあったが、しかし経済的な動機づけは数多くある動機の1つに過ぎない。パンとバターは毎日の問題であって歴史とは無関係だが、この問題に注目が集まるようになったら事情は違ってくる。「違った時に違った問題に人間の関心を向けさせる putting of different questions at different times」作業の繰り返し、これが歴史である。

経済の問題は常に重要な問題だが、だからと言って常に経済の問題に人間が関心を持つとは限らない。もし同じ問題が常に戦争や革命の原因になるとしたら、それは歴史ではなくて同じ動作を繰り返す機械と変わらないことになる。人間は多様であり、したがって怒りの対象や情熱の対象も多様だし、実現を目指す目的や手段も多様なら、強力な政府の登場が必要とな

る緊急事態の種類も多様である。

ドイツの宗教改革で「領邦君主」が登場してきたのは、宗教的な危機と政治的な危機に対処するためであった。修道士や修道女たちは自分たちを全うな国民として認めてくれる者を必要としていたが、それが出来たのは「領邦君主」だけであった。「領邦君主」が正義の実現者・正当な支配者・繁栄と幸福を実現してくれる支配者と讃えられたのも当然であった。正しい信仰のあり方に問題が生じた世界、聖職者と平信徒の違いや修道士になることの意味が問題になった世界、さらには免罪符の意味が問題になった世界で「領邦君主」は、不可欠な存在になったのである。

改革派の教会は、その存続を「領邦君主」に掛けたのである。なぜなら、「領邦君主」だけが大海を照らす唯一の灯台たり得たからであった。ルターが『九十五カ条の提題』を公表する1年前までは、何が禁じられ何が許されているか明白であった。しかし、それを決めていたカトリック教会の権威が否定されたとき、混沌が支配することになった。中世界は複雑であったが精緻に組み立てられており、教会法を参照すればどんなことでも答えを見つけ出してくることができた。個人にとって全てが明白であり確実であった。何が善であり何が悪であるか明白であった。

その全てが宗教改革でひっくり返ってしまったのである。聖職者と平信徒の違いが無くなり、教皇が保障した安全も世俗君主が保障した安全も確実なものでも無くなってしまった。ルターは、聖職者が持っていた信者の地獄行き・天国行きを決める権限を拒否した。以下でルターの『九十五カ条の提題』を一部だけ紹介することにする。

提題8：「悔悛 penitence」（再び罪を犯すまいと決意すること）は生きている人間に課せられるべきであって、死んだ人間に課せられるべきではない。

提題16：地獄・煉獄・天国は、それぞれ絶望・半ば絶望・安心を意味するが、そのどれが与えられるかは、（免罪符の購入のような）

目に見える行為によって決まるのではない。

提題 27：免罪符の代金入れで銭が音を立てた瞬間に魂は天国入りをする。たとえたとえと説くのは人間の勝手だが、それで罪が許される訳ではない。

提題 32：免罪符を買えば魂を救うことができると説く者は誰であれ、地獄に落ちることになる。

提題 79：十字軍兵士の鎧に付いている十字架をキリストの十字架と考えるのは、神に対する冒瀆である。

『九十五カ条の提題』をルターは、つぎのような言葉で締め括っている。「キリスト教徒たる者は刑罰・苦行・地獄の業火を覚悟のうえで、主イエス＝キリストのあとに続く努力をすべきである。そして平和と安全ではなく、厳しい試練を受けることで天国への道を確認すべきである」。このキリスト教徒に対するルターの勧告は、まるでボルシェビキ党の「ブルジョア的な安全 bourgeois security」に対する宣戦布告のようであった。安全を謳歌するなかで学校の試験や資格試験に合格し、結婚して子供を育て、本を買い集め、友達に囲まれ、家を手に入れたり車を手に入れたりしてきたことを、たった1枚の宣告書が駄目にしてしまったのである。

中世期の人間は自分用の本や車のようなものを欲しがることはず、「公共心が豊かであった public-spirited」。つまり病院や学校を建てることに喜びを感じていたし、ローマやエルサレムに巡礼に出かけることに喜びを感じていた。そうすることで創造神に対する借りを返していた（死後の救済の可能性を確保していた）のである。ところが近代の人間は創造神に対して借りを返すとき、まるでラジオや車の代金を分割払いするときのように考えていた。

ルターはこんな近代人の救済観を壊してしまったのである。死後の救済はラジオや車のように、代金を分割払いで少しずつ払えば自分のものになる訳でなく、「手に入るかもしれないし、手に入らないかもしれない All or

nothing」と主張した。それを決めるのは創造神だけであって、人間には何も出来ないのである。救済を得るために人間がしなければならないことは、一方的に創造神が決めるのである。人間の善行に創造神は無関心であり、善行を積み重ねれば死後の救済が約束される訳ではなかった。

## 第8節 預言者と国王：教会と国家

1521年4月のウオルムス勅令によって帝国内で一切の権利を奪われ、さらにザクセンのゲオルク髭侯 Georg der Bärtige（ルターを支持したザクセン選帝侯フリードリヒ賢侯とは別系列のザクセン侯）に反対されて、ルターはザクセン選帝侯のワルトブルク城に匿われていたが（そこで新約聖書をギリシャ語からドイツ語に訳していた）、1522年3月に突如として城を去ることにした。これに驚いたザクセン選帝侯宛てにルターが書いた手紙を以下で詳しく紹介するが、それを読めば「目に見えない教会 invisible Church」と「目に見える国家 visible State」の関係がよく判る。

ルターは手紙のなかで自分のことを「私 Ich」、選帝侯のことを「陛下 deine Gnade」と書いているが、この手紙はルターと選帝侯の個人的な問題を扱っていると考えべきではない。選帝侯宛てのルターの手紙は、教会と国家の関係、魂の救済と権力の関係、個人と「巨大組織 big business」の関係を論じていると考えべきである。したがって「私」とは「教会の代表 sovereign claims of any church」、 「陛下」とは「国家権力の担い手 sovereign of any government」と読み替えるべきである。そうすればルターが言わんとしていたことも理解できるようになる。

「親愛なる陛下に神と主イエス＝キリストの祝福がありますように。陛下からの手紙は金曜日の夜に受け取りましたが、私は翌日の朝、ウイッテンベルクに向けてワルトブルクから馬で出かけようとしているところでした。陛下の善意は私の方でも判っております。それに何よりも私には、神という強い味方がいます。ただこれで終わりということではありません。

まだ私にはやるべきことが残されております。

「陛下からのお手紙から、私の以前の手紙が陛下にとってショックだったことが窺えますので少々、説明をと思いましたが、賢明なことで有名な陛下は（選帝侯は「賢侯」と渾名されていた）私がしようとしていることを良くご存じのはずで、それは思い止まりました。私の陛下に対する親愛の情は、どの諸侯に対するよりも強いものであるとだけ申し上げておきます。

「以前の手紙で私が陛下に申し上げたことは（ワルトブルク城を出てウイッテンブルク大学に戻ると伝えたこと）、陛下のためであって私のためではありません。私がウイッテンブルク大学に戻るのは、福音書を蔑ろにする者どもを説き伏せるためです。彼らが陛下を困らせるのではないかと危惧してのことです。

「あまりに悲観的になった私は、もし福音書を通して神が味方してくれているという確信がなければ問題解決は諦めていたことでしょう。もちろん私個人が味わった苦痛など取るに足らないことです。問題解決のためなら、私は喜んで命を投げ出す心算でいます。私にそんなことを考えさせるほど酷いやり方が採用されていました。私にはそれを正す義務があります。陛下宛ての私の手紙は、私ごとを解決するためのものではありません。ただ陛下にお願いしたいのは、この件に関して悪魔どもの言い分を支持されないようにということです。たとえこのような忠告が陛下には不要であっても、私には忠告をしなければならない理由があります。

「私なりの理由とは次のようなことです。陛下は御存知かどうか分かりませんが、福音書は神から主イエス＝キリストを通して我々に与えられたものです。それゆえに私は自分のことを、主イエス＝キリストの僕にして伝道者と呼ぶことにしています。私がウオルムスの帝国議会で審問に応じたのも、また審判を受けることにしたのも自分に確信がなかったからではなく、謙虚であることで皆さんを説得できると考えたからです。しかし、それは間違っていたようです。私の謙虚さゆえに福音書の権威を貶めてしまい、悪魔が跳梁するのを許してしまったのです。それに気づいた私は、

良心の命ずるところに従ってやり方を変えることにしました。今年、陛下のご要望に従って審問に応じることにしたのは、そのためです。悪魔も私が恐れたからでないことは十分に承知しているはずですが。私がウオルムスに赴いたとき、私は自分がどんな気持ちでいたかよく覚えております屋根瓦の数ほどいた多くの悪魔どもの視線を痛いほど感じていましたが、私は喜んで彼らに立ち向かいました。

「さて、ゲオルク髭侯は悪魔の名にすら値しないケチな存在かもしれません。無限の憐みを持つ我らが父（神）は、我々が悪魔や死に打ち勝つ力を与えて下さいました。だからこそ我々は父（神）を信頼し、父（神）を心から愛することにしたのです。陛下はよくご存じでしょうが、父（神）を信頼せず、ゲオルク髭侯の怒りを恐れるようなことがあれば、それは我々にとって大いなる恥です。もしゲオルク髭侯の統治下にあるライプチヒでもウイッテンベルクと同じように問題があるなら、たとえ髭侯の怒りが1週間続こうとも、私は喜んでライプチヒにも乗り込んで行ったでしょう。たとえ髭侯の怒りが今より9倍も大きなものであったとしてもです。

「このことはぜひ陛下に申し上げておきたいのですが、ウイッテンベルクに赴くときに私が受ける庇護は、選帝侯たる陛下の庇護以上のものです。私は陛下に庇護を求めるつもりはありません。否、陛下が私を庇護して下さいる以上に、むしろ私が陛下を庇護して差し上げましょう。もし陛下に庇護をお願いするくらいなら、私は出発を諦めていたことでしょう。今回の場合、必要なのは剣による庇護ではありません。私を庇護できるのは神のみです。神を除いて私を庇護できる者はいません。

「つまり信仰心の強さだけが私を庇護できるのです。陛下の信仰心はまだ十分とは言えません。陛下に私を庇護することは不可能です」。

イスラエルの王に対峙した旧約の預言者の言葉、またローマの総督に対峙したパウロの言葉は、フリードリヒ賢侯に対峙したルターの言葉となってドイツに「公的な制度 public institution」を生み出したのである。ト

マス＝ペインがアメリカ合衆国初代大統領ワシントン<sup>しよだい</sup>を庇護<sup>ひご</sup>するなど考えられないことである。また1870年に普仏戦争でフランスが敗北したとき、小説家ビクトル・ユゴー<sup>つぎ</sup>は次のように言ってプロイセン国王に決闘を申し入れたが無視された。「プロイセン国王は偉大な君主だが、私も偉大な詩人で国王と対等な立場にあり、決闘を申し入れる資格がある」。ところが信仰心が十分でないフリードリヒ賢侯<sup>けんこう</sup>を叱り飛ばしたルター<sup>しか</sup>の言葉は、その信仰心の強さゆえにドイツの「公的な制度」となり、また世界に「公的な制度」を提供することになった。アメリカの大学教授やオックスフォード大学の教授が、大学教授であるということだけでアメリカやイギリスの指導者として受け入れられることはない。ところがドイツでは、大学教授が司教<sup>あとう</sup>の後<sup>つ</sup>を継ぐことになったのである（教授のポスト・教壇 cathedra, Katheder）は、もともと「司教座」を意味していた）。フランス人のドイツ史専門家ラヴィス Ernest Lavisse は、ドイツの国政のあり方は大学で決まると言っていたが、至言<sup>しげん</sup>というべきである。

1542年にルターは遺言状を書いているが、このときも彼はその篤い<sup>あつ</sup>信仰心ゆえに万能であった。教会法やザクセン法が要求していた形式<sup>すべ</sup>を全て無視して、つぎのように書いていた。「最後に次のことを言い残して置きたい。私は求められている形式や言葉<sup>つぎ</sup>を無視して遺言状を書くが、それは私が天上でも地上でも、はたまた地獄でも公的な存在 public person と認められており、公証人以上の権威を持つからである。慈悲深い神は、惨めな罪人<sup>す</sup>に過ぎない私ごときに過分<sup>かぶん</sup>な信頼をお寄せ下さり、その子イエス＝キリストの福音<sup>せんきょう</sup>宣教<sup>まか</sup>をお任せ下さった。私の篤い<sup>あつ</sup>信仰心ゆえに私の福音<sup>せんきょう</sup>宣教<sup>あつ</sup>を多くの人々が受け入れ、教皇による破門や皇帝・国王・諸侯・聖職者といった悪魔どもの怒りにも拘わらず、私を真理の教え手として受け入れて下さった。そこで今回のような些細<sup>ささい</sup>なこと smaller matters で一層<sup>いっそう</sup>、私に信頼を寄せて下さるのは当然と言うべきである。この遺言状が神の公証人にして証人 God's notary and witness たる神学博士マルチン＝ルター<sup>みづか</sup>が自らの手で書いたことをお認め願いたい。1542年の顕現日<sup>けんげん</sup>（東方の3博士がキリストの

生誕を確認したことを想起して、キリストが原罪<sup>あがな</sup>を購<sup>う</sup>うために生まれて来たことを祝う1月6日）」。

この遺言状から、ルター派の領邦で統治機構がどうなっていたかが窺<sup>うかが</sup>える。つまり、地上の「些細<sup>ささい</sup>なこと」についてはルターも選帝侯の好意に頼らざるを得ないが、「神の王国 God's Kingdom」に関わる信仰の問題ではルターこそが「公的な存在」であって、選帝侯は信仰も権力・権威も地上の問題を解決するために行使<sup>す</sup>できるに過ぎないのである。

## 第9節 「陛下 Eure Hoheit」の意味

恐怖を経験した者は安全の問題<sup>かびん</sup>に過敏になる。安全のためなら高い代価を払うことを厭<sup>いと</sup>わなくなるし、安全を保障してくれる者（黒魔術師・占星術師・精神分析医・聖職者・医師など、その呼び方は様々<sup>さまさま</sup>である）の言うことに耳を傾けるようになる。ルターが攻撃の対象としたのは聖職者であった。高位の聖職者が持っていた権威を破壊することで身近な聖職者の権威だけでなく、すべての者の権威を破壊してしまったのである。

宗教改革<sup>とく</sup>で特に重視されたのが魔女退治であった。魔女に頼んで簡単に救済を保障<sup>もら</sup>して貰<sup>もら</sup>ったり、信仰告白することなく救済を保障<sup>もら</sup>して貰<sup>もら</sup>ったりするのは悪魔がすることであった。人間の罪深さを説くことなく、ただ幸福と豊かさを約束するファラオの魔術師のような存在をルターは敵視した。人間は神の命<sup>した</sup>じること（それは聖書に書かれている）に従<sup>したが</sup>うしかなく、人間にできることは神の命令を実行することだけであった。しかも神の命令を実行したからといって、救済が約束<sup>わけ</sup>される訳ではなかった。

『九十五カ条の提題』の第84条にはこうある。「いかに多くの苦難<sup>た</sup>に耐えたからと言って、それで救済が約束<sup>わけ</sup>される訳ではない」。かつて聖母マリア・聖家族・十二使徒・聖人・教皇・司教が保証してくれていた救済の可能性を、ルターはすべて否定してしまったのである。それまで信者の闇<sup>やみ</sup>を照らしていた心地よい光が、突如<sup>とつじよ</sup>として消えてしまったのである。

ルターが生み出した暗闇は恐ろしいものであった。彼は何が善で何が悪か、人間には判らないと言うのである。しかも人間は唯一人で神と対決しなければならない。「神と個人 Gott und die Seele」の対決、これが宗教改革の目指したものであった。墮落して罪塗れになった個人は、「神と世界 Gott und die Welt」を相手に戦わねばならないのである（「世界 die Welt」の中には、地上の施設に過ぎないカトリック教会も含まれる）。しかもルターにとって、「世界」は重要な意味を持たなかった（ルターが関心を持ったのは神による救済のみ）。

神と対決する個人は、神が自分に対して何をするつもりなのか知ることはできず、ただ神の慈悲を信じるしかない。しかし神の慈悲を信じるだけでは、この「世界」で何をすべきかわからない。そこでやるべきことを決めてくれたのが「領邦君主 Landesherr」であった。法律を定め、婚姻を取り仕切り、財産を保護し、商取引を可能にしてくれる「領邦君主」であった。領民が安心して暮らせたのは、そんな「領邦君主」がいたからであった。「領主様の評判が良くなりますように。領主様が我々の守るべきことをハッキリと示してくださいますように。領主様が皇帝や教皇から我々の財産や家族を守ってくださいますように」。これがルター派の信者たちが唱えていた祈りの言葉であった。

すでにイギリスを扱った前章で指摘したように、イギリス人は「控えめの Low」表現を好む。「国王 Highness of the Realm」に対する革命の結果、実権を握ることになったのは「下院 Lower House」であり、「イギリス国教会の改革派 Low Church」であった。ところがルター派の領邦国家では、「領邦君主」は「陛下 Eure Hoheit, Your Highness」と呼ばれていた。世俗の君主が地位を高めれば、その分だけ臣下も地位を高めることができるのである。臣下が君主に頭を下げるのは、教皇や聖職者と戦うためであった。また信者が聖職者の前で跪くカトリック教会のやり方を止めさせたのも、ルターであった。ルター派の信者の特徴として課せられた義務や規則に従順・忠実であることが指摘されるが、それは聖職者の信者支配と戦うために必要

だったからである。ただし、「世俗の君主 secular Supreme Judge」が信仰の問題に介入することは許されなかった。「世俗の君主」にできたのは、世俗の問題で領民に指示を出すことだけであった。領民の代表を集めて世俗の問題を議論し、解決策を決めることはできたが、聖遺物・聖像・聖職者・秘跡など信仰に関わることは関与できなかった。ドイツ人の「国家崇拜 exaltation of the State」は、地上の施設に過ぎない教会に対する反感の裏返しなのである。それから400年、いまヒトラーは教皇や聖職者が要求しなかったような「宗教的な献身 religious devotion」をドイツ人に要求している（ただし、それは国家に対する献身である）。ドイツでは教会が天上にしか存在しないことになってしまっ、教会と支配者の間にあった均衡が失われてしまった。その結果、ドイツのプロテスタンティズムは底の浅いものになってしまった。簡単にヒトラーの支配体制に取り込まれてしまい、ヒトラーの支配に抵抗した教会は「告白教会 Bekennende Kirche」など、ほんの一部に限られている。目に見える地上の教会・聖職者・魔術師・聖人・魔法使いなどが約束する救済を信じてはいけなくなっていたが、この地上の教会に対する反感が国家に対する忠誠心となって現れたのである。ルター派の領民の忠誠心の強さは、地上の教会に対する宗教的な反感が支えになっていた。領主・君主に対する熱狂的な忠誠心は、領主・君主が教皇・聖人・魔法使いになり得ないことから来ている。ゲーテが宗教改革300周年を祝う会場で（1817年10月31日）、自分の専門分野である芸術と科学について領主に抗議することを止めることはないと言っていたが、法定者たる領主に仕える抗議好きの臣下ということでは、ゲーテもルターと同じであった。このルター派が持っていた特徴（ヒトラーは、これを目の敵にしていた）が19世紀に少しずつ弱まって行った。しかし、それでもルター派のバランス感覚はヨーロッパに広がって行ったのである。

我々が直面している恐怖や不安の大きさを考えれば、世俗君主が偶像化・救世主化されて専制君主に成りがちなのは、当然である。それを400年間防いで来たのが、ルター派のバランス感覚であった。ルター派は「領

邦君主」の臣下になることでバランスを保って来たのである。孤高の宗教家にして忠実な臣下というのがドイツ人の特徴であった。第一次世界大戦の時に、「良心の問題では妥協のないプロテスタント protesting subjectism」でありながら、同時に「任務の遂行では素晴らしく忠実な splendid objective efficiency」ドイツ人は世界を驚かせたものである。それは盲目的な従順さとは別物であった。ドイツ人の忠実さは、ルター派に特徴的な教義に由来している。つまり日曜日には教会に行き自ら牧師となるが、平日には善き臣下となるのである。

この状態が長く続くことができたのは、「領邦君主」が領邦内で教皇のような存在になる可能性が無かったからであった。「領邦君主」が教皇のような存在になるには、領邦の規模が小さ過ぎた。規模の小さな「領邦君主」が教皇や皇帝に対抗するためには、1つに纏まる必要があった。彼らが1530年にアウグスブルクの帝国議会で皇帝に示した「アウグスブルク信仰告白 confessio augustana」はメランヒトン Philipp Melanchthon が起草したもののだが、ザクセン選帝侯とヘッセン方伯に率いられた11人の「領邦君主」がそれを承認している。彼らは「信者共同体 community」を形成しており、1人でそれを決めるわけには行かなかった。ルター派の教会がレンガと石からできているからと言って「信者共同体」であることは止めないし、ザクセンやヘッセンの法律や教会に古くからの伝統が存在するからと言って、「信者共同体」が無くなるわけではなかった。ルター派の教会は「領邦教会 Landeskirche」と呼ばれていたが、教会の影響力が特定の領邦内に限定されていた訳ではなかった。

「イギリス国教会 Anglican Church」と違って、影響力の範囲は領邦の境界線を越えてドイツ全体に及んでいた。イギリスでは国王が教会の首長であり、オックスフォード大学とケンブリッジ大学の神学部は「イギリス国教会」の神学部であって、聖職者も「イギリス国教会」の聖職者であった。ところがザクセン選帝侯領では、ウイッテンベルク大学の神学部が宗教上の問題を解決するのであって、宗教上の問題に関して選帝侯は何の発言権

も認められていなかった。選帝侯にできたことは、ウイッテンベルク大学の決定を擁護することだけであった。ルター派の信仰のあり方はウイッテンベルク大学の神学部が決めていたのである。その教授たちは選帝侯の臣下でありながら、宗教上の問題に関しては全権を持つ大臣であった。

ドイツの大学は、ドイツにおいて信仰のあり方を決める権限ゆえに、大きな権威を誇っていた。大学が信仰のあり方を決める基準にしていたのは、ルター派の「アウグスブルク信仰告白」であった。「新しい教え neue Lehre」と呼ばれていたルター派の教義は、その内容を大学しか決めることができなかった。「領邦君主」は、大学で教えるべき教義について口を挟むことは許されていなかった。信仰の問題に関しては「領邦君主」も一人の信者に過ぎず、大学の指示に従うしか無かったのである。イギリスで嫌悪された「カトリック的な伝統を重んじるイギリス国教会の一派 High Church」や、ピューリタン革命で非難された大学の神学部教授のような立場を、ドイツではルター派の教会や大学の神学部教授が占めることになった。信仰の問題では大学教授が決定権を持ち、立法の問題では「領邦君主」が決定権を持つことになった。「領邦君主」としても信仰の問題に関しては、大学教授の指示に従わなければキリスト教徒として失格であった。逆に善きキリスト教徒は、世俗の世界で自らの義務を果たさねばならないとされた。「領邦君主」は法制定の義務を果たさねばならず、靴職人は靴修理の義務を果たさねばならないのである。自分の職務を誠実に果たすのが善きキリスト教徒なのである。各人は、その職務に於ては親方であり国王なのである。その意味では国王と農夫のあいだに違いはなかった。「各人はその性格・受けた教育・神より与えられた才能に応じて、最善を尽くして神に仕えねばならない」のである。「領邦君主」も農夫も、信仰の問題に関しては大学教授の指示に従わねばならないということでは同じであった。ドイツ人の信仰のあり方は大学教授が決めるのであり、「領邦君主」も信仰の問題に関しては無力な存在に過ぎないのである。ルターもこう言っていた。「領邦君主は神に代わって死刑を執行し、神に代わって罪人を収監

するに過ぎない」。

## 第10節 ルター派の「領邦君主」とカトリック派の「領邦君主」

宗教改革の結果、信仰に関して全ての「領邦君主」は同じ権限を持つことになった。カトリック派を選ぶかルター派を選ぶかは、「領邦君主」が決めてよいことになった。1530年のドイツでは、信仰に関して皇帝・大諸侯・小諸侯が法廷の「訴訟当事者 Partei」と同じような立場を認められていた。いまでは「訴訟当事者」という言葉がこの意味で使われることは少なくなっているが、『アウグスブルク信仰告白』では皇帝も「領邦君主」も、信仰に関して平等の権限を持つことを意味するこの言葉が使われていた。ルター派に言わせれば、教皇も皇帝も帝国議会もルター派の存在を公認しなければならず、ルター派の「領邦君主」は皇帝やカトリック派の「領邦君主」と対等なのである。ルター派に命令できる者は存在せず、両者は対等の立場で妥協点を見出すしか無いのである。

そこでルター派の「領邦君主」もカトリック派の「領邦君主」も宗教上の問題を解決するために、ローマ教皇の「枢機卿会議 consistorium」に相当する「宗教会議 consistory」を設置することにした。その点で両者の間には何の違いもない。バイエルン侯国ではカトリック派の「領邦教会」を設置することが長年の夢であり、バイエルン侯国からルター派の信者を追放すると同時に「宗教会議」が設置されている。1563年にバイエルン侯は、聖餐の儀式で信者もワインを飲むことを認めていた（カトリック教会のミサでワインを飲めるのは聖職者だけであって、信者はワインを飲めない）。また1620年にビーラーホーラの戦いで勝利した皇帝は、チェコの再カトリック化を強行しており、また教皇の許可を得ることなく12月8日を「無原罪の御宿り」の日（マリアが性交渉なく妊娠した日）として祝日にしていた。この祝日は、チェコ教会では世俗君主が制定した祝日なのである。小さな都市を支配していた「領邦君主」は（3000人ほどの住民が周辺の幾つかの村

で広大な森に囲まれて暮らしており、森から燃料となる薪を手に入れたり、豚と羊の放牧地として利用したりしていた）、自領の「宗教会議」のために大学から「顧問 magister」を招聘していた。自分だけで宗教上の問題を解決できないことを良く知っていたからである。また500人しか住民がいなかったフォルスト Forst 村（現在はラウジッツ地方の小さな都市）を支配していた「領邦君主」ですら、自前の「宗教会議」を持っていた。隣のゾーラウ Sorau 村（現在はポーランドのジャーリ Zary 市）も1597年に「宗教会議」を設置している。そして両村とも大学から「礼拝規則書 directory」を取り寄せていた。このドイツにおける大学の独特なあり方については、1571年に出版された本のタイトルからも窺い知ることができる。『ライプチヒ大学とウイッテンベルク大学の神学教授およびザクセン選帝侯領の教会会議のメンバーによる報告と宣言。これはアウグスブルク信仰告白が公表されて以来、2つの大学が擁護してきた教義に関するものである』。あるいはウイッテンベルク大学でギリシャ語を教えていたメランヒトンが、1543年に教皇に抗議して口にした言葉が当時のことをよく物語っている。「私はウイッテンベルクの教会およびその関係者の教義を擁護するものである。それは疑いもなくキリストの正しい教えを受け継ぐものである」。

## 第11節 大学教授の独特な役割

信仰の問題で選帝侯に解決策を提供したルターは、トマス＝ペイン Thomas Paine のような人物と違って公的な存在であった（トマス＝ペインはアメリカの独立を支持し、またフランス革命を支持して活躍するが、それはあくまでも私人としてであった）。彼は「神の国 City of God」の代弁者であり、聖書の擁護者であり、また信頼が置ける聖書の解釈者でもあった。また「禁じたり許したりする権限 power of binding and loosing」（信者ひとり一人に天国入りを許すか禁ずるかを定める権限）を持っていたペテロやカトリック教会の聖職者と違って、ルターが持っていた権限は国民的な利益に関わる議論を

開始したり中止したりすることであった。ドイツの大学教授はその国民的な役割を示すため、大学教授という肩書の前に「正規の公的な ordentlicher öffentlicher」という形容詞を付記することになっていた（o.ö.Professor 第二次世界大戦でこのやり方は無くなる）。イギリス人やフランス人は「論争」を重視するが（それを表現する言葉として英語には debate フランス語には discussion がある）、ドイツ人はイギリス人やフランス人が言う「論争」に関心を示さない。ドイツ人が関心を示すのは、「大学の教壇 Katheder」で大学教授によって提示される問題である。それこそルターが提示した『九十五カ条の提題』と同じものと思えるからである。

ドイツ人にとって大学教授は、「単なる私人 mere private person」ではなかった。大学教授とは、自分たちの「救済 salvation」のことを考えてくれる「公的な人物 public and official spokesman」なのである。大学教授（信仰の問題を解決）と「領邦君主」（世俗世界を立法によって統制してくれる）の分業体制を、ドイツ人は当然のこととして受け入れていた。大学教授は「良心の守り手 keepers of the nation's conscience」であり、大学教授が何か問題を提示したということは、何か大切なことが問題になっている証拠なのである。ドイツ語の「論争 Erörterung」が可能になるのは、「問題 topic」が状況全体のなかに「適切に位置づけられて erörtert, settled」からである（「場所」を意味するギリシャ語 topos をドイツ語 Ort と訳して、そこから Erörterung が造語された。英語の topic も topos 由来の言葉）。その「位置づけをする erörtern, settle」のが大学教授の役割であった。

神学部の教授たちは、信仰に関わる「問題」をいろいろと取り上げてきた。たとえば 1517 年には免罪符の問題、1522 年には神学校の問題（閉鎖が続いたカトリック教会の神学校をルター派の聖職者養成用に残すことをルターは主張）といった具合である。解決策を得るため教授たちは、「問題」を宗教改革のなかで適切に位置づけて行った。自分たちの「新しい教え」が意味を持つためには、「地上の教会 visible church」が持つ伝統の 1 つひとつを細部に渡るまで体系的に調べ上げ、それに対して徹底的に反論していく必

要があった。

こうしてドイツ人の間に体系的な思考を求める情熱が登場してきた。「普遍的・一般的であること generalities」を追い求める体系的な思考訓練の技術が、ドイツに登場して来ることになったのである。すでに見てきたように、イギリス人は政治的な理由から細部に拘る。ところがドイツ人は、体系的であることや「普遍的・一般的であること」に拘る。なぜなら、戦うべき相手が体系的な中世の遺物であるカトリック教会だったからである。1 人の若いドイツの神学教授が投げた小さな石は、現在の我々からすれば小さな石としか思えないが（とくに細部に拘るイギリス人にとって、博士論文で提起される問題など小石に過ぎない）、ドイツではその小さな石が巨人ゴリアテを倒したダビデの石となったのである（『サムエル記』17:49）。ドイツでは、博士論文 1 本で信仰の体系を突き崩すことも可能である。ルターの『九十五カ条の提題』が 1517 年に遣って退けたことがそれであった。このドイツの大学教授が持つ「宗教的な性格 salvation-character」は他の国では見られないものだが、それを生み出したのがドイツの宗教改革であった。

「問題は徹底的に論じられた The topic is „erörtert“」とは、暗黒の勢力に対して新しく戦いが開始されたことを意味する。『聖書』に対する冒険が新たに発見されたのである。この瞬間に戦いが開始される。この瞬間から、問題に関する議論は「公的なもの public question, public affair」となる。イギリス人にとって、書物上で展開される議論など退屈の上ない議論ということになる。そんなものは出版社に任せておけば良いのである。イギリス人には、学者の本に代わる別のやり方があった。

ドイツ人の「公的な論争 public war」は科学的なものであって、学者が行うものである。そこで彼らの「世界観 Weltanschauung」が重要な意味を持つて来ることになる。何を話題に選ぶかは、ドイツ中の大学から集まった教授たちの熱い議論によって決められるからである。もちろんドイツの大学教授も、イギリスの「田舎紳士 country squire」のように滑稽に思えて来ることがある。チャップマン John Jay Chapman に言わせると、ドイツの大学

教授は「怪物 monster」であり、その最後にして最悪の代表的な人物がニーチェ Friedrich Nietzsche であった。そしてイギリス人の現実重視の経験主義に弱点があったように、ドイツ人の学者による「理論探究 eternal search for Gründe」にも弱点があった。少し古いが、民俗学者のリアル Wilhelm Heinrich Riehl の言葉を引用しよう。「忘れてならないのは、ルターからゲーテに至るまでドイツの知識人には、ドイツで最高の権威を誇る大学教授と共通点が多いということである」。まず大学教授が「不正 Misstände」に対して抗議の声を上げ、つぎにその問題を「領邦君主」が閣議で取り上げることで問題は「国民的なもの Staatliches Interesse」となる。なぜなら、真の信仰はどうあるべきかを定める大学教授の声が「領邦君主」の良心を動かすからである。こうして「学識 Wissen」と「良心 Gewissen」が並び立つことになる。「自らの学識と良心に従って nach bestem Wissen und Gewissen」というのが、ドイツ人の誓約する時の決まり文句である。「学識」も「良心」もない者は、人間とは見なされない。ドイツ人には「個人崇拜 cult of personality」の傾向が強いが、それはこの考え方による。イギリス人なら役人など信用しないだろうが（ピューリタン革命の時の下院は、ロード大主教 Archbishop Laud やストラフォード伯 Earl of Straford を悪魔の申し子のように見なしていた）、ドイツで役人は救世主のように讃えられる。なぜなら、彼らだけが大学教授の言い分を「領邦君主」の日常的な政策に具体化できるからである。彼らは勤勉でないかもしれない。あるいは悪意の持ち主で、大学教授たちの説く真理に耳を貸そうとしないかもしれない。しかし、それでも彼らは役人であることを止めないのである。「領邦君主」の宮廷で陰謀に加担していても、大学で真理を教えてくれた教授の存在を彼らが忘れることはない。ゲーテが書いた『エグモント』や、シラーが書いた『ドン・カルロス』や『マリア・スチュアート』でも、そのことを確認することができる。

こうしてドイツ人は「領邦君主」の「顧問官 Rat」になることを（あるいは、その称号を獲得することを）夢見るようになった。称号が余りにも

普及し過ぎて、ほとんど無意味になる程であった。歯医者は「衛生顧問官 Sanitätsrat」、法律家は「法律顧問官 Justizrat」、郵便局長は「郵便顧問官 Postrat」、徴税官は「財務顧問官 Finanzrat」になりたがった（ヒトラー政権で蔵相を務めたフーゲンベルク Alfred Hugenberg がその好例）という次第である。チューリンゲン地方の小侯国であったロイス＝シュライツ＝グライツ＝ロベンシュタイン Reuss-Schleiz-Greiz-Lobenstein でも、パン屋や床屋は「御用達 Purveyors」の資格を欲しがったものである。

イギリス人なら『タイムズ』紙に手紙を書くことを重要な自分の義務と考えているが、ドイツでは重要な地位にある者が「領邦君主」に直接訴えることが重要な自分の義務と考えられている。支配者の体力や時間には限りがあり、民主的に選ばれたワシントンの大統領であれモスクワの独裁者であれ、国民の訴えを仲介してくれる役人の存在は大切なはずである。つまりドイツの役人が「領邦君主」の「顧問官」になることを誇りとすることには、理由がある。大学教授が「領邦君主」の「枢密顧問官 consiliarius secretis」となるのも、ごく当たり前のことであった。「星室裁判所 Starchamber」や「船舶税 ship money」を経験したイギリス人にとって、「国家機密 arcana imperii」などは不愉快この上ないことであろうが、ドイツで責任ある地位にある思想家・労働者・役人にとって、それは欠くことのできないものであった。国家を動かしている人物に提言できることは、この上なく名誉なことなのである。

ザクセン選帝侯の宮廷には、こんな慣習があった。ライプチヒ大学の学長は選帝侯一家に続いて将軍や大臣が控えている部屋に入って来て、新しく制定されるべき法律や改革案、廃止されるべき悪習などについて提案を行っていた。なぜなら、彼は大学の教授団を代表していたからである。選帝侯が世俗の世界で最高位を占めていたように、彼は信仰の世界で最高位を占めていた。「領邦君主」と大学教授の関係は、カトリック教会のパウロとペテロの関係に似ていた。「領邦君主」は、ペテロの後継者たるローマ教皇が持っていたような権限を持っていた（ローマ教皇は枢機卿会議を招

集し、聖職者・修道僧・大学などを統制するために法律を制定していた)。パウロはペテロに司教たちを支配する権限を与えたが、預言者としての役割は与えていない。ペテロによって教会が設立されるまで(ペテロは初代のローマ教皇)、パウロは宣教の仕事に従事していたし、パウロは教会に「靈感 inspiration」を与える者、教会の不正を正す者、教会のやるべきことをやり遂げる者であった。

ドイツでは、宗教改革の後パウロが果たしていた役割を大学教授が担うことになったのである。国内の統治に関する決定や立法は「領邦君主」の専権事項とされたが、「領邦君主」に「靈感 inspiration」を与えていたのは大学教授であった。彼らが「精神的な戦い mental fight」から手を引くことはなく、改革案を提案する彼らの権利は誰も奪うことができなかった。

「原理原則 principle」に関わる裁判は、すべて大学教授に諮る必要があった。1870年までドイツでは、法律上「原則」が問題になっている事件は、その「裁判記録 Akten」を大学の法学部に送り、裁定を仰がねばならなかった。原告や被告が賄賂などの不正行為によって「裁判記録」に変更を加えることができないよう注意が払われていたし、どこの大学が裁定を求められているかは、原告も被告も知ることが禁止されていた。「裁判記録」は原告・被告の立ち合いの元で封印されたが、それは弁護士や判事が勝手に意見を「裁判記録」に付記することを禁止するためであった。

裁定を依頼された大学は「裁判記録」に記された事実に基づいて、唯それだけを手掛かりに裁定を下さねばならなかった。「記録されていないものは存在しないと見なされる Quod no in actis non erat in mundo」のである。このモットーから、いかに大学が「国民の意思 national will」を外部の干渉から守るのに熱心だったかが判る。ドイツでは、「裁判記録」を大学に送ることで「国民による支配者統制 national control」が可能になっていた。それに対してイギリスでは、下院に議案を提出することでそれが可能になっていた。ドイツでは「裁判記録」が「国民に信頼され popular」、イギリスでは「議事録 Parliamentary Papers」が「国民に信頼され」ていた。

「裁判記録」を意味するドイツ語の Akten の単数形 Akt には、英語の action のように「意識的・意図的な行為」の意味がある。つまり「見識を持つ者 learned man」は「裁判記録」に隠されている「原理原則」を見つけ出して来るのが仕事なのである。宗教改革が始まった1517年から第一次世界大戦が始まる1914年まで、ドイツの大学は「ドイツ人の導き手 van of national thoughts, hopes and fears」であった。ドイツの優秀な学生は神学部か哲学部、あるいは法学部で学ぶことを希望していた。アメリカ人はビジネスを立派な仕事と考えるが、ドイツ人は大学教授を立派な仕事と考える。フランス人なら新聞に論説を書くこと、イギリス人なら自分が所属する政治クラブでスピーチをすることを目指すはずだが、ドイツでは大学教授のポストこそが公共のため、国民のために働く場だったのである。ドイツの知識人なら、だれもが「私講師 Privatdozent」(大学で教える資格は認められても無給で、教わる学生から授業料を受け取っていた)として神聖な職場である大学で教授職を得ることを目指すのである。第一次世界大戦後に特にその風潮が高まり、1918～33年に元大臣や元将軍たちがドイツの大学に多数、押し寄せて大学教授のレベル低下させてしまった。レベル低下の傾向はすでに戦前からあったが、事態を急激に悪化させたのが戦後の教授数の急増であった。1933年にナチ党が政権を取ったとき、ルターとメラニヒトンの後継者たる大学教授の数が増えすぎて誰も敬意を払わなくなり、ナチ党は宗教改革の成果を簡単に排除することができた。ロシアのエカテリーナ女帝が恐れ慄いたというドイツの大学教授による批判は、こうして公的な役割を果たさなくなってしまったのである。

1918～33年の教授数の急増による教授レベルの低下は、すでに始まっていたレベル低下を総仕上げしたに過ぎない。主権を持つ「領邦君主」が複数、存在していたからこそ、ドイツの大学は独自の公的な役割を果たすことができた。1932年までのドイツでは、大学教授の資質はどれだけ他大学から招聘の声が掛かっているかで判断された。ドイツでは博士号を取った大学と、准教授・教授に任命された大学は違っているのが普通であ

る。「学会 republic of scholars」が各大学の学部を管理しており、教授のポストをなるべく多くの専門家が競う体制を保障している。大学が募集する教授職は、ドイツ全土から候補者を募るのである。1871年のドイツ帝国成立のあとでも、ドイツ（プロテスタント国）とオーストリア（カトリック国）は教授候補者を求めて競い合っていた。またドイツ帝国の成立後に26あった各州の文部省も、最良の教授候補者を求めて競いあっていた。同じことが役人についても言えた。

ドイツにおける「効率の良さ efficiency」の原因はいろいろ考えられるが、その最大のものには有能な役人を巡る競争の激しさにあった（時代によって競争のやり方は変わっている）。大企業が有能な従業員を巡って競争を始めるずっと以前に、すでに「領邦君主」たちが有能な役人を巡って競争していた。たとえば普墺戦争と普仏戦争でプロイセンを勝利に導いたプロイセン陸軍の参謀総長モルトケ Helmuth Karl Bernhard Graf von Moltke はプロイセン王国の出身ではなかったし、ゲーテ Johann Wolfgang von Goethe は自由都市フランクフルト＝アム＝マインの出身だったが、彼が活躍の場を選んだのはワイマール Weimar 侯国だった。オランダ出身のユダヤ人スピノザ Baruch Spinoza はハイデルベルク大学に招聘されたことがあるし（ただし就任を断っている）、ヘーゲル Georg Wilhelm Friedrich Hegel はウユルテンベルク Württemberg 侯国の出身だったが、主たる活躍の場はベルリン大学（プロイセン王国）であった。シュレーゲル Friedrich Schlegel はベルリンからウイーンに行っているし、ウユルテンベルク侯国出身のシェリング Friedrich Wilhelm Joseph Schelling はイエナ Jena 大学で「私講師」、ウユルツブルク Würzburg 大学で教授に就任した後ミュンヘンに来ている。イエナ大学にシラー Johann Christoph Friedrich Schiller とゲーテがいたとき、フィヒテ Johann Gottlieb Fichte・シェリング、ヘーゲルが一時期、そこにいたこともあった。大学が有能な人物を行き来させていたからである。プロイセン王国の高級官僚も外からやって来た者が多かった。プロイセン王国で社会保障制度を作ったシュモラー Gustav von Schmoller は南ドイツの出身だったがし、

ローマ史の専門家（ベルリン大学教授）でプロイセン王国の銀行頭取を務めていたニーブール Barthold Georg Niebuhr はコペンハーゲンの出身であった。1807年にナポレオンに敗北したあとプロイセン改革に着手したシュタイン Karl Reichsfreiherr vom und zum Stein もプロイセン出身ではなかったし、ハプスブルク家やホーエンツォレルン家と同格の家柄を誇ったホーエンローエ Chlodwig zu Hohenlohe-Schillingsfürst は、1867年にバイエルン王国の首相、1894年にプロイセン王国の宰相になっている。またボイスト Friedrich Ferdinand von Beust は、ザクセン侯国の首相を務めたあとオーストリア帝国の宰相になっている。またハートリンク Georg von Hertling は、バイエルン王国の首相を務めたあと1917年にプロイセン王国最後の宰相になっている。

このように「領邦君主」同士が有能な役人を求めて競い合っていたお蔭で、役人は特定の「領邦君主」に縛られることがなかった。自分の政策が採用されなければ、他の国（領邦）に行けば良かったからである。「どうしようもない国家 Racker Staat」に代わって、役人がドイツのために貢献するのである。ホッブス Thomas Hobbes の『リバイアサン Leviathan』に登場して来る「怪物のような国家 voracious State」は、知見と見識を持ち合わせた役人がいて初めて正常に機能するのである。知見・見識ある者は、たとえ専制君主の元にあっても自由でいられた。イギリスでは、「大貴族でない Common」という言葉に「連帯 brotherhood, comradeship」の意味が込められているが、ドイツでは「知見・見識・教養ある gebildet」という言葉に「連帯」の意味が込められていた。「知見・見識・教養ある者 gebildeter Mensch」（その代表が大学教授）が改革思想を掲げて、ドイツ人を知的な冒険に誘うのである。また芸術の世界では、ルター派の教会で唄われる讚美歌がその代表例であった。こうして「知見・見識・教養ある者」は、目に見えない「天上の教会」で居心地よく過ごすことができた。「知見・見識・教養ある」状態が深まれば、それだけ外部の世界から影響されることが少なくなるからである。

カルバン派は「予定説 predestination」を採用していて、救済が得られるか否かは生まれた時に決まっていたと考えた。人間が善行を積んでも、それで救済が保障される訳ではなかった。ところがルター派は、そうは考えない。「教育 Bildung」というドイツ語には「意識的に育成する」という意味がある。ドイツ人は幼少期に教会（目に見えない「天上の教会」）で「ドイツ的な精神 Deutscher Geist」を教えられ、それを足掛かりにして政治的な改革を実現していった。教会が個人を精神的に「育成し bildet」。「領邦君主」の政府が現実世界を変えていった。つまり「教育」と「国家（支配者）Staat」は不可分の関係にあったことになる。ドイツ人は一生のあいだに2つの組織から影響を受けることになった。まず教会から影響を受けるが、それは現実の世界とは無縁な「教育」や情報の提供である（「政治的な自由がなくても、聖書を読むのは自由であった Word is free」）。つぎに「国家（支配者）」はドイツ人を役人に任命し、またその言い分を聞いてくれるが、その代わりに命令に従うことを要求するのである。

「目に見えない天上の教会 audible Church」で聖書の言葉を読むこと（自分で聖書を読み神と対峙する）と、「キリスト教徒の支配者 Christian State」に忠実であることは共に必要であった。どちらかを欠くと、「人間らしさや自由 tolerance」は実現できないのである。両方が揃って初めて人間らしさが保障され、自由でいられたのである。

役人は「教育・教養」のおかげで権威を手にすることができた。正義に反する支配者の元にも、支配者の言いなりになることは無かった。また支配者の方は支配者の方で、「教育・教養」ある役人のお陰でマキャベッリ Niccolo Machiavelli 的な倫理・道徳を欠く支配者にならずに済んだ。領邦君主・大臣・相談役・教師が臣下を統治する権利を手にするためには、「教育を受ける gebildet」が必要があった。その「教育・教養」のおかげでプロイセンのフリードリヒ大王は、「国家第一の奉公人 first Servant of his State」となることができたのである。ドイツの宗教改革の結果、登場して来た「領邦君主」たちは、こうしてイタリアのルネサンスが生み出した「専制君主

principe」にならずに済んだのである。

## 第12節 マキャベッリも

ボダン Jean Bodin もいなかったドイツ

ルターは、ファシストに支配され兼ねなかった世界を救ったのである。1500年頃のカトリック教会は腐敗の極みにあり、イタリアには抜き身の権力が登場していた。マキャベッリは当時のイタリアの様子を『君主論 Principe』に描いているが、その内容はキリスト教的なモラルと無縁である。『君主論』に描かれていたのは、赤裸々な権力のメカニズムだけであった。1515年に公表された『君主論』を読めば「目に見える地上の教会 visible church」（カトリック教会）のもとでは、支配者がどれほど無慈悲・残酷になれるかが判る。古代ギリシャのアテナイでは女神アテネが統治者に威信を提供していたし、イスラム世界の統治者カリフは宗教的な指導者も兼ねており、民衆は救済を保障して貰うために彼に従順であった。こんな異教徒やイスラム教徒以下だったのがイタリアの「君主たち principi」であった。

ローマ教皇が信者たちに与えた教えによれば、国王や領主たちも臣下と同じく死すべき者に過ぎず、罪ある者に過ぎない。世俗の支配者は、信仰や救済とは全く無縁の存在であった。彼らは、殺人と戦争を防ぐだけの装置に過ぎないのである。この地上の世界で、正義を実現するだけの存在であった。こうした支配者の墮落した様子を見事に描いて見せたのがマキャベッリであった。宗教的な縛りから解放された政治家は、善き政治家の振りをする事すらしなくなった。なお抜き身の権力は、それ自身で正当化されるというマキャベッリの主張は、格別に新しいものではない。

死・強欲・不当な権力行使が西欧世界に登場して来ることで、人類史は新しい局面を迎えることになった。『君主論』が公表された1515年は、教会を信じなくなった新しい世界が登場した年でもあった。人間の誠意を信用せず、征服者・独裁者・暴君の存在をシニカルに肯定する世界の登場で

ある。それは現在（戦間期）の世界とよく似ている。

そんな危機的状況のなかで、ルターの説教は最後の審判で鳴り響くラッパのようであった。何故あなたは暴君の野望に加担するのか。何故あなたは「地上の目に見える教会」（カトリック教会）が提供する嘘の救済を信じるのか。そんな教会のお蔭で、あなたの道德心は駄目にされている。教会と国家が完全に分離されて、お互いに無縁な存在になってしまった。そのため国政にキリスト教的なモラルが活かされることは無くなり、キリスト教が説く愛の精神は無視されることになった。日曜日と祭日には教会と呼ばれる石造りの建物に行き、そこを絵画や彫刻で飾るために寄進をするが、平日には宮殿や市場に行って強欲を満たそうとする。一方を「教会」と呼び、他方を「国家」と呼んで丸で別物のように考えているが、別物のように区別した結果、両方とも墮落してしまった。教会は見事な装飾を施された劇場のようになり、国家は教会から影響を受けたり活力を注がれたりすることが無くなったのである。

1641年にイギリスで攻撃の対象とされ、1789年にフランスで攻撃の対象とされた専制君主を、ルターは1517年にドイツで攻撃していた。ドイツの宗教改革・イギリスの名誉革命・フランスの「大革命 Grande Révolution」は、それぞれ120年の間隔を置いて信仰のシニシズムを攻撃していた。チューダー朝のイギリス、とくにエリザベス1世の登場はルターなしには考えられないし、フランスで一番人気のユグノー派の国王アンリ4世の登場も、ルターなしには考えられない。

エリザベス1世にしてもアンリ4世にしても、マキャベッリ的な要素が皆無ではなかったが、それでも従来のマキャベッリ的な「君主たち」とは違っていた。なぜなら、彼らは教義問答を体系的に学ぶことでルター派の考え方を身に付けていたからである。さらに彼らには、その「良心 conscience」を支えてくれる事情通の「相談役 Berater」が居た。その違いを象徴しているのが、君主が自主的に権力の座を去っている事実である。カトリック圏ではカール5世、ルター派ではスエーデン女王のクリスチーナ

がその代表例であった。カール5世はドイツで宗教改革が始まった頃(1556年)、クリスチーナは宗教改革が終わった頃(1654年)に退位している。カール5世に退位を勧めたのはエラスムス Desiderius Erasmus であったが、エラスムス自身も宗教改革の先駆者であった。退位することによって2人は、個人的な権力欲と無縁であったことを証明して見せたのである。

ルターが理想としたキリスト教国家の考え方は、イギリスの議会主義やフランスの民主主義と並んでヨーロッパに無くてはならないものである。そのことを明確に示すために、フランスの政治理論家ボダンを紹介することにする。彼はルターと違って、神学・宗教・教会に関する知識を不要と考えていた。

人間は余計なことをしたがるなことを良く示している例がボダンである。ボダンを読んだ法律家は、面倒なことを言う聖職者や論争好きの神学者と無縁なボダンの議論に大満足であろう。ボダンの『国家論 Les six livres de la république』は、ルター的な国家・教会の両輪論と無縁である。しかしボダンが説く君主の姿は、ルターが支持した「領邦君主」と似ていた。ボダンが君主のものだとする「主権 Sovereignty, Superanitas」は、ルター派の「領邦君主」が持っていた「統治権 Hoheit」そのものであった。教会改革を実現するために「領邦君主」は「統治権」を必要としていた。ただしルター派の「領邦君主」が持っていた「統治権」と違って、ボダンの「主権」はキリスト教の精神と無縁であった。ボダンは教会の腐敗と戦う「教育・教養」あるキリスト教徒であることと、善きキリスト教国家のために戦うことの間バランスが必要であることを認めようとしなかった。両者を完全に分けてしまったのである。彼は教会改革に無関心な哲学者に過ぎなかった。彼が関心を持ったのは、教会法にも帝国法にも縛られない「主権者 sovereign prince」だけであった。その結果フランスはキリスト教世界から切り離されてしまったが、それは許されることではなかった。フランス国王は、さらに200年もの間カトリック教徒たらざるを得なくなったからである。1789年にフランスがカトリック教国であることを止めた

時（革命で完全な政教分離が実現）、フランスは大きな犠牲を払うことになった。新しく登場してきたヨーロッパの共同体から締め出されることになったのである。国土に対する「主権」と宗教的な制約を認めない「主権」のみを重視するボダンの考え方がフランス以外のキリスト教世界にも持ち込まれ、キリスト教世界を無茶苦茶にしてしまった。ボダンの考え方がフランス以外の国でも受け入れられた結果、第一次世界大戦の惨禍を招くことになったのである。「主権」と称して、キリスト教国家に宗教的な規範を無視することを許してしまったのである。宗教的な規範が国家を縛っているものであって、その逆では無いはずである。いかなる国家も、国民が信じるべき宗教を決めることはできない。国家を構成するのは国民であり（これは特にキリスト教国家に限られたことではない）、宗教的な規範を国家が無視することは許されないはずである。逆に国家は、国民が受け入れている宗教的規範に縛られることになる。少なくともキリスト教国家ではそれが当然視されており、キリスト教国家は同じ宗教的な規範に縛られていた。ドイツの場合、「キリスト教的・ゲルマン的な国家群 Christlich-Germanische Staatenwelt」という考え方が「領邦君主」同士の対立・抗争を防ぎ、国家同士の「団結 solidarity of government」を可能にしていた。オーストリア宰相メッテルニヒ Klemens Wenzel Nepomuk Lothar Fürst von Metternich は、つぎのようなことを言っていた。ルターも言いそうなことで、いまもフランスやイギリスの政治家が好んで引用する言葉である。「たしかに国益の実現を図るのが政治家の使命である。しかし、一国だけが孤立して存在していくことが不可能であるにも関わらず、いまだに一国を前提に政治の問題を考えている哲学者がいる。複数の国家が共存しているのが現実の世界であり、それぞれの国家は自国の利益だけでなく、他国と共通する利害関係にも配慮すべきである。全ての国家に共通する利害関係に精通していることが政治家の使命であり、国家が存続できるか否かは、この全ての国家に共通する利害関係に政治家が配慮するか否かに掛かっている。自国の利益は2次的なものでしかないと思えるべきである。現在の世界を特徴づけてい

るのは、キリスト教が育み育てた人間社会と同じ基盤に寄って立つ国際関係である」（Clemens Metternich, Memoirs I, p.36, New York, 1880）。

ボダンには、このような考え方と無縁であった。哲学者に過ぎなかったボダンにとって、「自由 liberté」とはフランス国内における「自由」しか意味しなかった。しかもフランス国王の「主権」は、ボダン自身を縛るものであってはならないとボダンは考えていた。なぜなら、ボダンは「自由 ad libitum」でなければならないからである。

ボダンが関心を持ったのは「思想 thought」だけであった。この「思想家 thinker」にとって、「心 mind」は2次的なものに過ぎなかった。この哲学者が念頭に置いていたのは、「主権国家 sovereign state」だけであった。

ところがルターにとって、教え・学ぶことは個人だけの問題ではなかった。「他者に対する愛 love」から彼の言葉は生まれ、神から「靈感 inspiration」を受けた彼は、罪と絶望で何も見えなくなった「涙の谷 valley of tears」に新しい教えを送り込んだのである。彼の教えが定まり、「他者に対する愛」と「靈感」が抑圧された人々を鎖から解き放ち、罪と絶望で盲目と化していた人々の目を開くことになったのである。失われていた「救い主 Redeemer」の声が再び響き渡ることになり、「創造された万物 Creation」は過去にあった栄光とその意味を取り戻すことになったのである。「そして真理を知るようになり、その真理があなた方を自由にするであろう」（『ヨハネによる福音書』8:32）。これが宗教改革の勝利宣言であった。「新しい教え Die neue Lehre」は初めの内は受け入れられなかったが、やがて慈悲深い神のお蔭で誤解が解けて、ついに「福音 Evangelium」（善き知らせ）が受け入れられることになった。「本物の福音 Das laute Evangelium」・「本物の教え Die reine Lehre」がボダンやモンテーニュの「単なる議論 mere philosophical, after-dinner reflection」に取って代わったのである。

「中世 Middle Ages」という言葉を造語したのはルターたちであった。「中世」とは、「福音」の意味を歪めていた時代を意味した。アリストテレスによってパウロの教えが歪められ、余計なものが付加されて、「福音」の

本当の意味が判らなくなっていた時代であった。「福音」から余計なものを取り去って単純化・純化して見せたのがウイッテンベルクの「ナイチンゲール Nachtrigall」ルターであった。複雑化・煩雑化していた教会組織と教会規則を排除して、白い布で覆われた聖餐台1つと説教台の1冊の聖書だけで「新しい教え」を説き始めたのである。その「新しい教え」が我々の心に届き、我々を野蛮な動物から人間に変えてくれたのである。

「中世」開始の時期がイギリスやフランスではドイツほど明確でなく、ドイツと少し意味が違っているが、それでも「中世」という概念は受け入れられている。「中世」の意味を地理的に限定したり、宗教改革と無関係な分野で使ったりすることは許されるべきでない。時代区分を可能にしたのはルターによる宗教改革であって、マキャベッリの『君主論』やボダンの「主権論」ではなかったのである。

### 第13節 独特な大学のリーダーシップ

ルターが中世に別れを告げることができたのは、時間が意味することをよく理解していたからであった。つまり政治が生み出す現実、福音（善き知らせ＝キリストによって示された救済の可能性）の結果であることを理解していたからであった。大学の教壇から20歳の青年に向かって福音を説けば、青年が50歳になったとき政治の現実を変えてくれることをルターはよく知っていた。言い換えれば、隣にあった「目に見える教会」（ルターにとって単なる建物に過ぎない）を目に見えない預言者に変えたのである。ルターは教会を、宮殿や市庁舎から歩いて辿りつける建物から、宮殿や市庁舎で行われる取引より何百時間・何百日・何百ヶ月も前に取引のやり方を決めてしまうものに変えた見せたのである。

その証拠にルター派の教会は平日には閉じられており、日曜日にだけ開かれている。なぜなら、「雷のごとき神の声 *Donnerwort der Ewigkeit*」（バッハ *Johann Sebastian Bach* が作曲したカンタータ *Oh Ewigkeit, du Donnerwort* を

振った表現）は日曜日にだけ世俗世界で鳴り響くからである。説教台は預言の場であり真の福音を宣べることで未来を拓く場だが、大学の「教壇 *Kathedr*」も説教台と同じく「聖礼典 *sacrament*」（プロテスタントはカトリック教会の7つの「秘跡」から洗礼と聖餐のみを引き継いでこう呼ぶ）の後光に照らされているのである。

ルターが作り上げた国家の400年の歴史を見てみると、国家は何度も大学の「教壇」から「靈感を得ていた *inspired*」ことが判る。のちに様々な学部が活躍することになるが、最初の1世紀間に活躍していたのは神学部であった。ところが三十年戦争の惨禍で牧師たちが影響力を失うと、法学部で教えている法学者が主導権を握ることになった。トマジウス *Christian Thomasius*・プーフェンドルフ *Samuel von Pufendorf*・シュレーツァー *August Ludwig von Schlözer*・モーザー *Johan Jakob Moser* たちは、ドイツの公務員制度を作り変えている。シュレーツァーは、ゲッティンゲンで「ヨーロッパの良心 *European Conscience*」と呼ばれていた。さらに哲学者のウォルフ *Christian Wolff* も付け加えるべきであろう。彼も聖書には依拠せず、「道理 *reason*」だけに依拠して法典を編纂していた。このように18世紀は法制史のなかでも特に実り多い世紀であったが、その代表的なものが『ナポレオン法典』であった。

フランスとアメリカでは人権が憲法で保障されているが、ドイツでは膨大な数の法令を体系的に制定して国民の権利を保障することにした。たとえばプロイセンでは、1747年から各地の事情に合わせた法令の制定を始めており（コックツェイ *Samuel von Cocceji* による『フリードリヒ法典 *Corpus Iuri Fridericianum*』の編纂開始）、1786～88年に完成させている（コックツェイの仕事はカルマー *Johann Heinrich Casimir Carmer* に継承され、スバレット *Carl Gottlieb Svarez* が完成）。バイエルンやオーストリアでも同じようなことが行われていた。その時、中世期に施行されていたローマ法や教会法の影響は念入りに排除されている。ローマ法も教会法も個別の事例ごとに解決法が示されているだけで、体系的に構成されていなかったからである。ところ

がドイツの『民法典 Bürgerliches Gesetzbuch』は、誕生による個人の法的権利の発生の条文から始まり、家族・組織…と体系的に構成されていて、しかも「キリスト教徒にとって自由とは何か」というルター派に伝統的な問いかけが常になされている。これがドイツ帝国全体に適用される民法典として制定されたのは1900年のことである。統一されたドイツのこの民法典は、複数の「領邦君主」が競い合っていた時代のものほどに力強さはなく、内容も退屈で読んでいて面白くない。それでも、かつて大学で法学部教授が活躍していた時代の痕跡は残っている。

19世紀になると、法学部が握っていた主導権は哲学部に移り、カント・シェリング・ヘーゲルが登場してくることになった。こうして神学部が握っていた主導権は哲学部に移り、その過程でドイツの学問は世界中に影響を与えることになった。注意しなければならないのは、いずれの場合もルター派の考え方が背後に控えていたことである。16世紀にはそのことがよく理解されていた。古典古代研究で先駆者的な役割を果たしていたエラスムス Desiderius Erasmus は、古典古代の異教時代があって初めてキリスト教の登場が可能になったことを証明して見せた。そのおかげでルター派は古典古代を評価するようになった。暗黒の世界を耐え忍ぶつもりルター派の改革者たちに居心地よい邸宅を建てるとはなく、入り口に1つ余分な部屋を用意したからと言って、その考え方に何の影響もないことをよく知っていた。哲学は、彼らの教義を説明するための新しい方法であった。ドイツ哲学の難解さは、そこに原因がある。彼らの言う「世界観 Weltanschauung」とは、ルター派の神学を俗人の言葉で説明し直したものである。「すべての信者は聖職者である Every Christian a priest」というルター派の考え方は、「すべての人間は真理の探究者である Every man a bearer of the torch」という哲学者の言葉となった。レッシング・ヘルダー・フィヒテ・シェリング・ヘーゲル・フォイエルバッハ・ニーチェたちは牧師の子供か、自身が牧師であった（ヘーゲルは牧師にならなかったが、牧師になることを考えていた）。彼らはイギリスの哲学者のように現実世界の経験を重

んじることはなく、また情報の海に漕ぎ出して行って冒険を楽しむことも無かった。彼らが大切にしていたのは「一貫した体系 system of values」であった。「宇宙全体を念頭に置くこと stand for the universe」・「まずは物事を全体として理解すること pure learning of the totality of things」であった。ドイツでは、論文の序論を書き始めるまえに論文の全体像を示す必要があった。19世紀のドイツ哲学は、フランスやイギリスの哲学とは丸で違っている。それはイギリスの経験主義哲学やフランスのデカルト哲学に対抗する「ドイツ文化 Kultur」の自衛の試みであった。イギリスやフランスの影響から宗教改革の伝統を守るためである。ドイツ哲学の理想主義は、フランス革命に対抗して試みられたロマンチックな「対抗革命 counter-revolution」であった。たとえばナポレオンが敗北する（ライプツヒの戦い）までナポレオンによる「理想郷 Utopia」の実現を夢見ていたフィヒテは、その倫理学でキリスト教的な終末論（この世界が終るときキリストが再臨して正義と平和が実現する）を説いていたし、歴史家のヘーゲルは1817～30年のベルリン大学滞在中に「プロイセン枢密院 Geheimräte」が「世界精神 Weltgeist」（人類の始祖アダムからキリストを経て彼の時代まで歴史を貫く精神）の担い手となることを期待するようになった。また神秘家のシェリングは人間の心理と母なる地球を一体化して考え、人間を自然が生み出した壮大な神秘の1つと考えた。いずれの場合にも共通しているのは、19世紀（啓蒙主義運動の成果が現実のものとなった世紀）に相応しい方法でルター神学の言葉を新しく言い換え、宗教改革の精神を守ろうとしていたことである。その結果ルターの説く「福音 gospel of the living spirit」は、「ドイツ精神 deutscher Geist」として生き残ることになった。この「ドイツ精神」という言葉は、よく愛国主義を表現する言葉と誤解されるが、そんな意味はまったく無い。それは「聖霊 Holy Ghost」を哲学用語で表現し直したものであり、フランス革命後の非宗教化で腐りきった世界に必要とされる言葉、とくに宗教的な傾向が強いシュライヤーマヒャー Friedrich Schleiermacher に言わせると（Über die Religion. Reden an die Gebildeten unter ihren Verächtern, Göttingen, 1967）無宗教を

標榜するようになった「知識人 Gebildete」に対する強い警告の言葉なのである。

もともとルターの考え方を出発点に持つドイツ哲学は、外部の者が論破することは不可能であった。19世紀のドイツ哲学は、つねにルター神学(批判を恐れず、変化を恐れない神学)に依存していたからである。19世紀の大学教授も「あるべき精神 rechte Geist」(「世界精神 Weltgeist」の現れ)の擁護者である統治担当者の「説教師 preacher」であり、「聴罪師 confessor」であった。また統治担当者も、自らやるべきことを良く心得ていた。たとえば、1880年代にギーゼン Giessen 大学(すぐ北にあるマールブルク大学がルター派からカルバン派に宗旨替えしたのに対抗してルター派の神学を擁護すべく、マールブルク大学を追われたルター派の教授が中心になって1607年に設立された)の若い教授アドルフ＝ハルナック Adolf Harnack (1915年以降、von Harnack)が、1～3世紀の初期キリスト教のあり方に関する考え方を根底から覆す革命的な書物を出版した時のことである(Lehrbuch der Dogmengeschichte)。キリスト教の教義を巡る長い論争の実情を解明し、いまでも教会で使われている『使徒信条 Apostles Creed』の権威を揺るがす内容の本であった(『使徒信条』はギリシヤ化されており、キリストが語った言葉に基づいていないと主張)。ベルリン大学は、この若い教授をベルリン大学の神学部に招聘したいとプロイセン教育大臣に申請したものである。

プロイセン皇妃は、この生意気な若造の考え方に反対する「宗教会議 Consistory」の抗議に同情的であったが、教育大臣がこの件を閣議に掛けると、皇妃と原理主義者たちの言い分はビスマルクが主宰する閣議で退けられ、この若い教授はベルリン大学に招かれることになった。このことで明らかになったのは、相変わらず大学が信仰の問題に関してカトリック教会の司教のような権限を持っていたこと、また統治担当者が「宗教会議」に勝る権限を持っていたことであった。ハルナックは、のちに欧米を席卷することになる「自由神学 liberal theology」の指導者となり、1900年にはベルリンのダーレム Dahlem 地区に創設された「カイザー＝ウィルヘルム学

術振興協会の会長 president of all the Institutes of Reseach」に就任している。ドイツで神学者が統治担当者・大学・世論・革新運動など、すべての問題の中心的存在となったのはハルナックが最後であった。

## 第14節 ドイツの音楽

ドイツの大学はカトリック教会圏の教会(目に見える地上の施設)と似ている。また、それなしでは統治が不可能だということではイギリスの議会(とくに下院)やフランスの「サロン society of Paris」とも似ている。ドイツでは大学がカトリック教会の大司教・公会議・聖人などに代わる役割を担うことになり、絶えざる革新・改革の担い手となった。ドイツの大学は、いわば「永久・宗教改革 Reformation in Permanence」の担い手であった。

そんな教会には新しい「儀式 liturgy」(典礼)が必要であった。「純化された教会 purified Church」(目に見えない天上の教会)は絵画に代えて音楽を取り入れ、巡礼に代えて聖歌の合唱を取り入れることにしたのである。「ルターは多くのカトリック聖歌を謳った」と言われるが、事実「ドイツの讚美歌 Choral」は美しいし、数も多い。教会から悉く内装を奪われたドイツ人は(ルター派の教会には壁・窓・十字架・説教台以外、何も無い)、音楽にその代償を求めたのである。ドイツ語で「影響力がある人物」を表現するときは、「ファッションのあり方を決める set the fashion」人物と言わずに「声調を決める人物 der den Ton geben」という言い方をする。ドイツの音楽は、「統治のための道具 politicum」となったのである。大学で宗教改革の最初の世紀に神学部、次の世紀に法学部、さらに次の世紀に哲学部が主役を演じたことに対応して、音楽も3つの時期の区分することができる。つまりルターからバッハの第1期、バッハからモーツァルトの第2期、ベートーベンからワグナー・シュトラウスの第3期である。ルターに言わせれば、ルター派の領邦国家における音楽と「領邦君主」の関係は、カトリック教国における教会と国家の関係に似ている。「教会が国家と共存できたように、聖

歌も領邦君主と共存できる Potestas ecclesiastica non impedit politicam potestatem sicut ars canendi non impedit politicam administrationem」のである。

聖歌は、ルター派のいう教会が「目に見えない天上の教会」であることを象徴していた。ドイツの音楽史は、このルター派の「作業仮説 working hypothesis」が正しいことを400年かけて検証してきた。領邦国家に分かれて生活していたドイツ人にとって、「目に見えない共通の家 invisible home」が音楽であった。ライプツヒにある聖トマス教会は、そんな伝統をよく象徴している。バッハの時代以来、毎週金曜日の夜と土曜日の正午に教会の合唱隊がコンサートを開催するが、そこで謳うトマス教会学校の生徒たちは、伝統的な聖歌の他にバッハが作曲した聖歌も謳うことになっている。コンサートには大学とライプツヒ市の関係者が出席することになっており、どちらも欠席は歓迎されなかった。いまだ宗教改革の伝統を維持しているドイツ音楽にとって、バッハは大切なパトロンなのである。このバッハの生涯こそ（その殆どが中部ドイツのあちこちの都市で過ごされている）、ドイツの音楽が「統治のための道具」であったよい証拠である。才能に恵まれた作曲家は他の国にも数多くいるが、音楽が政治的な役割を担うことになったのはドイツだけであった。つまりドイツの作曲家の登場は、偶然ではないのである。たとえばバッハは、ある普遍的な現象を象徴する人物であった。彼は3～4世代を掛けてドイツ音楽が生み出した成果であった。バッハの家族はドイツの音楽史に置いて独特な位置を占めているが、そのことから判る通り、始まったものは必ず完結することになっているのがドイツなのである。いつかバッハ家に全てのメンバーを一身に体現していて、かつバッハ家が成し遂げるべき任務を完成させる様な人物が現れるに違いない。バッハ家の人たちは、お互いに仲が良かった。一族全員が一カ所に集まって住む訳に行かなかったので、少なくとも年に1回、チューリッゲン地方の都市（アイゼナッハ・エルフルトなど）に集まることにしていた。彼らの集まりも独特で、誰もが音楽に関係する仕事をしていたことから（オルガン奏者兼指揮者・オルガン奏者・街の音楽師など）、まずドイツの「讃美歌」

を1曲、全員で演奏することで集まりを開始した。冗談を言い交わすのはその後であった。民衆音楽を演奏するときも、各自がそれぞれのパートを即興で演奏して見事なハーモニーを実現していた。

バッハはドイツの歴史が生み出した作曲家であった。12～18世紀に作曲された数多くある「ドイツの讃美歌」のなかでも、彼が作曲したカンタータ（器楽伴奏を伴った声楽曲）や受難曲（イエス＝キリストの受難物語を4つの福音書によって音楽化したもの）は秀逸である。バッハの作品は、すべて「ドイツの讃美歌」が基になっていた。彼の伝記は、そのままドイツの音楽史になっている。彼を1人の天才と理解すべきでない。彼はドイツ人という「集団の魂 collective soul」なのである。「集団の魂」は「音楽 tonal language」（音という言葉）で表現するしかない。バッハの作品にある音の響きの中に、それまで聞いたことが無いこと、口にすることが出来なかったことが表現されている。音符の1つひとつに「深い感動 infinite intensity」が込められている。「音楽は母国語のように使い勝手がよい。何か表現したいと思った時に文法の問題などで悩むことはない」とはワグナー Richard Wagner の言葉である。またアメリカの詩人ロングフェロー Henry Wadsworth Longfellow に言わせると、「音楽は人類共通の言葉である」。音楽を「統治のための道具」としているドイツの「政治制度 political system」は、人類共通の財産と言うべきであろう。

「ドイツの讃美歌」も人類共通の財産とすることができる。あるイギリスの作家が言っていることだが、「讃美歌の数の多さにおいて、ドイツのような国は他にない」。讃美歌づくりがドイツで始まったのは宗教改革の時だが、それ以降とくに熱心だったのがルター派の福音教会であった。作られた讃美歌の数は十万を下らないであろう。その内の少なくとも1000は、古典として永遠に残ることであろう。このようなことは他の国では考えられないことである。何百という数のドイツ人、それもあらゆる地位と生活条件の男女（神学者・牧師・領邦君主・将軍・政治家・医師・法律家・商人・旅人・労働者など）が讃美歌の登場に貢献している。つまりドイツの讃美歌

はルター派による信仰告白の記録、その意義深い経験の記録なのである。

ルターに次いで偉大な讃美歌の作曲家ゲルハルト Paulus Gerhardt は、自分で作曲した 16 の讃美歌を一人称「私 ich」で始めている。それは決して彼が 1 人で神の前に立っていることを意味せず、あくまでも同じ教会の信者と共有する考えや気持ちを代表して表現していると理解すべきである。

このゲルハルト評は、イギリス人のジョン＝ジュリアン John Julian (『讃美歌辞典 The Dictionary of Hymnology』の著者) のものである。敢えてイギリス人のゲルハルト評を引き合いに出したのは、ドイツ人だとその伝統に圧倒されて、公平な評価が不可能と思われるからである。それに注意しなければならないのは、正式の礼拝で自分たちが作詞・作曲した讃美歌を謳うのはルター派だけだということである。イギリスのピューリタン (カルバン派) は、『詩編』から選んだ詩に曲を付けただけで満足していた。シュワイツァー Albert Schweitzer がバッハの伝記で書いているように、「なぜカルバンが『詩編』を讃美歌の本として選び、そこから選んだ詩に曲を付けるだけで満足していたのか、その理由がよく判らない」。ドイツ人であったシュワイツァーにとって、教会音楽と言えば「ドイツの讃美歌」しか考えられなかった。イギリスで『詩編』が特別視されることになった事情については前章で指摘した通りだが (第 6 章：第 14 節を参照)、ドイツで宗教改革のときに素晴らしいラテン語の祈りで「儀式 liturgy」(典礼) を開始する司祭のやり方に対抗できたのは、讃美歌を謳うことだけであった。司祭と対等な立場を確保するため、ルターに率いられた信者たちは説教の言葉に対してではなく、ミサ曲の声調に対抗することにしたのである。ドイツ人は謳うことで特権を廃し、神の前の平等を実現しようとしたのである。「信者たちが謳う讃美歌ほど素晴らしい音楽はない Secular music was sovereign music still」のである。

ベートーベンからシュトラウスまでの音楽は哲学的であったが、その中であってシューベルト・シューマン・ブラームスは哲学的ではなかった。そのあとに登場してきたメンデルスゾーン Felix Mendelssohn はキリスト教

に改宗したユダヤ人で (父親は有名なユダヤ人哲学者)、バッハの再発掘に大きく貢献している。また彼自身も歌曲「パウルス Paulus」とか「エリアス Elias」を作曲している。このようにドイツの音楽にも様々な傾向が存在したが、基本的にベートーベンの英雄崇拜的な方向、プロメテウス (人類に火を齎すが、その罰として肝臓を鷲に啄まれ続ける苦痛を背負い込むことになる) 的な方向を目指していたと考えるべきである。個人主義の時代になると、ベートーベン は自由で自立した人間にとって不可欠の天才となった。アメリカ人やフランス人は国家の枠組みに嫌気が差したとき、ベートーベンの弦楽四重奏を聞けば心が癒されるはずである。そこでは宗派に関係なく、同じキリスト教徒の魂が 19 世紀の生み出した天才の音楽の中に見出されるはずである。階級の違いも、イデオロギーの違いも、また経済体制や国家の違いも超えた何かが見出されるはずである。

ロマン＝ロラン Romain Rolland のベートーベンに対する崇拜ぶりは、その小説『ジャン＝クリストフ Jean Christophe』によく現れているが (この小説でベートーベンは、フランス人にうまく紹介されている)、この両者の関係ほどドイツとフランスの関係を象徴しているものはない。19 世紀は、「自由 liberal」で「民主的な democratic」フランスの世紀であった。ドイツは、この新しく登場してきた状況に適応するしかなかったが、その時にドイツが「民主主義体制 democracy」を採用したとか、「資本主義体制 capitalism」を採用したなどといったことは重要でない。重要なのはドイツ独自のやり方で、ドイツなりの貢献をしていたという事実である。

ベートーベンは音楽の分野で、ルター派と 19 世紀を結び付ける重要な役割を果たしていた。つまり外国の民主主義国家に対して、ドイツ史の背後にある宗教改革の伝統を判らせる存在だったのである。その点でワグナーは違っていた。ベートーベンはドイツ的な要素を強調したが、ワグナーは 19 世紀のあらゆる種類の味付けを音楽に持ち込んできた。ベートーベンは選別・純化したのが、ワグナーは様々なものを集めてきて混ぜ合わせた。ショーペンハウアーの哲学・パリの香水・プロレタリアートの反

資本主義思想・反ユダヤ主義などである。19世紀のあらゆる情熱・偏見・異端説をドイツ音楽のなかに詰め込み、同時代の風を一杯受けて走る帆船に仕立て上げたのである。ワグナーは19世紀の「超・個性的な super-individual」天才であった。彼には、18世紀の紳士でいる時間などなかった。噓せ返るような香水の匂い・壮かさ・華やかさで一杯の彼の音楽は、ルター派の純粹で素朴な信仰と置き換わってしまったのである。

ベートーベンは、いわば世俗化されたバッハであった。彼は男らしく勇敢であった。ワグナーの音楽に男らしさなどは無く、ワグナーの音楽は神秘的で曖昧であった。しかし彼の音楽は教会に行くことを止め、宗教心を失った「知識人 Gebildete」の孤独・不安で弱々しくなった魂にピッタリの音楽であった。バイロイトでは、その独特な雰囲気は孤独で無能な「知識人」の神経をトルコ風呂で受けるマッサージのように癒していた。ニーチェに言わせれば、バイロイトでルター派の「一人で神の前に立つ勇氣 courage to stand alone」は無用であった。そこはキリスト教化以前のローマであった。「ラテン語抜きでローマの歌が、ローマの香りと共にそこにあった」(Jenseits von Gut und Böse, S.256)。350年の間ドイツの音楽は、目に見える教会(カトリック教会)から逃げ出してきたドイツ人の魂の拠り所であった。ところがドイツ人が孤独に耐えきれなくなった時、再び香水を振り撒いたローマ風呂が帰ってきたのである。

ワグナーはプロテスタントではなかった。彼にプロテスタントの資質を要求するのは酷であろう。ワグナーが望んでいたのは、カトリック教会とプロテスタント教会の融和であった。彼がハンガリーのカトリック教徒であったリスト Franz von Liszt の援助を受けていた事実は、偶然でない。1840～69年にワグナーが亡命を余儀なくされたとき、リストはワグナーを支援し保護している。リストの娘コジマも、ワグナーに対して献身的であった。前夫のビュロー Hans von Bülow を裏切ってワグナーの元に走り、ワグナーが57歳の時に結婚している。コジマはワグナーの死後バイロイトの伝統を守ることに腐心し、コジマの死後は息子のジークフリートが1932

年の死まで指揮者としてバイロイトの伝統を守っていた。こうしてオーストリア・ハンガリー二重帝国の3世代に渡るカトリック教徒の家族のお陰で、ワグナーの「絶対音楽 absolute music」は完成したのである。ドイツの音楽が「普遍的な絶対音楽 Gesamtkunstwerk」になるためには、ドイツ全体を代表する音楽になる必要があった。

これまでは、ドイツがルター派によって代表されているような書き方をしてきたが、宗教改革で登場してきた改革派は、プロテスタントだけではなかった。数の多さでは、むしろカトリック系の改革派がプロテスタント系の改革派に優っていた。ワグナーが代表していたのはルター派だけではなかった。彼はドイツ全体の代表であった。彼の音楽は、プロテスタント派とかカトリック派の違いを超えていた。

とくにオーストリアだけを取り上げて論じていれば、プロテスタント派・カトリック派の違いはもっと鮮明になったはずである。オーストリアはドイツほどプロテスタント派が優位を占めていなかったからである。ところがドイツの音楽は、まずプロテスタント系が新しく歴史を切り開き、教師・牧師・聖歌隊長・作曲家を養成していたのである。

### 閑話休題：「ドイツ文化 Kultur」という言葉について

フランス革命で「ヨーロッパ各国で通用するフランス文明 European civilization」の登場が宣言されたが、ドイツ人はそう考えず、フランス革命の掲げる「粗野な啓蒙運動 crude enlightenment」から宗教改革の成果をどう守るかということを考えていた。「陸軍 armée」・「兵士 soldat」・「組織者 organisateur」・「知事 intendant」など、フランス式の極端に単純化された物事の捉え方に対抗して、ドイツ人は何百という領邦国家で培われてきた「伝統あるプロテスタントのやり方 old protestant civilisation」を守ろうとしていたのである。宗教改革以来、長い時間を掛けてドイツ人が培ってきたその伝統を、彼らは「ドイツ文化 Kultur」と呼んだ。突然、「フランス文明

civilisation」が侵入してきたとき、自分たちの中核を構成しているものには手を触れてもらいたくないと考えていたのである。

「ドイツ精神 deutscher Geist」の場合と同じく、この「ドイツ文化」も1789年のフランス革命に対するドイツ人の反応の産物であったことが判っていないと、それが意味することが理解できなくなる。それは自衛行為の結果、生まれてきた言葉であった。だからこそ1914年、「ドイツ文化」が「フランス文明」に宣戦を布告することになったのである。激高すると自分の感情の高まりが判らなくなり、お互いの悪感情が「ドイツ文化」と「フランス文明」に向けられることになった。第一次世界大戦のとき、ボーージュ Vosges 山地の両側(フランスとドイツの国境沿いの山地で、フランス領になったりドイツ領になったりしていた)で起きていたことがそれであった。

もっと話を広げることも可能だが、それより「ドイツ文化」という言葉が「フランス文明」の侵入に対抗するために生まれてきたという事実から学ぶべき教訓の方が大切である。ある人間集団で何か創造的な爆発現象が起きると、隣り合う人間集団がどのように反応するかという教訓である。ルターによる宗教改革が、違った環境で違った形に再生されたのが「ドイツ文化」であった。そのおかげでドイツでは、ロベスピエールやマラーの亜流による単純な熱狂が猛威を振るわずに済んだ。外国思想の模倣ほど危険なことはないが、「ドイツ文化」は、それを防ぐのに成功したよい例と言える。

## 第15節 ドイツの森

ヨーロッパ大陸では、イギリスが5つの海洋に乗り出していった時のように海が荒れることを心配する必要はなかった。ヨーロッパ大陸の支配者が心配しなければならなかったのは、森が置かれている状態であった。1000年ものあいだドイツの森は伐採の対象とされてきたが、それでも国土の27%は森で覆われていた。いまでも国土の25%は森のままである。

ドイツの支配者が気に掛けていたのは、森のことであった。「ドイツ文化 Kultur」という言葉は、「治山治水 Landeskultur」から派生してきた言葉である。またドイツ人が「ドイツ文化」と言う言葉を耳にするときに連想するのは、「植林 Aufforstung」である。樹木を育てるには時間が掛かる。長い時間を掛けて樹木を育てることができるのは、「領邦君主」だけであった。ドイツの森を守ってきたのは、「家父長的 patriarchalisch」だとされてきた「領邦君主」の長期的な視野であった。「家父長的」であると言うことは、目先の利害を無視できるということである。スポーツ・映画・ラジオ・新聞などは目先のことしか問題にしないが、ドイツの「領邦君主」は目先のことなど問題にせず、国民も流言飛語に惑わされることはなかった。国民が流言飛語に惑わされずに済んだのは、遠い先のことを視野に入れた「家父長的」な君主がいたおかげであった。「家父長的」な君主は、森という大切な国土の産物を保護すべく努力していた。痩せた砂地の土地しかなく、多雨で湿気が多いドイツでは、遠い未来のために少しでも無駄を減らす努力が必要であった。国が豊かなら少々の無駄も問題にならないだろうが、貧しい国で問題を先送りすると、破滅が待っているだけである。

ドイツ人にとって森はもっとも馴染みのあるもので、森の歌が数多く謳われてきた。ドイツ人が森を散策するときも歌は欠かせない。有名なドイツ系アメリカ人の政治家カール＝シュルツ Carl Schurz も、その『回想録 Reminiscences』でドイツの森について次のように書いている。「森の中を1人で歩いていると、ノロ鹿・狐・兎、そして時には猪が自分を追い越していく。私が森の散策を楽しむようになったのは、そんな時であった。孤独・静寂・風の囁きが私を魅了した。鳥に罟を仕掛けて捉まえることより、森の中で夢想に耽ることを好むようになった。この森に対する親愛の情は、のちに広大な景色や海を目にしてからも失われることはなかった」。

樹木に対するドイツ人の敬意は、失われることがない。ワンダーフォゲルで青少年が唄う歌に、こんなものがある。「お前をこれほど立派に育てたのは誰だ。その人物に敬意を表したい」。彼らは密林<sup>みつりん</sup>の神秘や人類未踏

の処女林の神秘に囚われている訳でない。ましてや育ち過ぎて、人の手に負えなくなった森を讃えている訳でもない。謳われているのは人間と森の調和ある関係であり、森を秩序ある形で育て上げた人間に対する敬意の表明である。

プラハ・インスブルック・ハイデルベルクなどを謳ったドイツの学生歌は、森と丘陵地の歌、森や畑の中を散策する内容の歌になっている。ドイツの作曲家は「目に見えない天上の教会」を音楽の形で表現したが、ドイツの詩人たちはドイツの自然、つまりドイツの森を讃える詩を書いていた。ゲーテは、チューリンゲン地方の森の美しさを讃えた政治詩『イルメナウ Ilmenau』（ザクセン＝ワイマール侯カール＝アウグスト Herzog Karl August von Sachsen-Weimar の26歳の誕生日に捧げた詩）でルターの思想を世俗詩の形にして見せたのである。

ドイツの宰相らしく、ゲーテも自分より若い「領邦君主」の要請に応じてチューリンゲン地方の小さな都市ワイマール Weimar にやって来た。ゲーテの父親は、帝国の顧問官（ただし職掌のない肩書だけの顧問官）で共和主義者であった。チューリンゲン地方の「領邦君主」は領邦を分割して息子たちに相続させていたが（ゴータ Gotha・ワイマール・マイニンゲン Meiningen・ヒルトブルクハウゼン Hildburghausen・アルテンブルク Altenburg の5侯国）、息子たちは大学を一緒になって維持していた。それがイエナ大学であった。この大学のお蔭でチューリンゲン地方は、ルターの生まれ故郷として纏まりを維持し続けることができた。

しかしゲーテがワイマールにやって来たとき（1775年）、すでに状況は大きく変わっていた。イギリス貴族の宮廷作法や、フランス語・フランスの哲学・フランスの詩が宮廷で流行しており、貴族でなかったゲーテはワイマール侯のテーブルで食事ができず、「家政長官 Lord Steward」のテーブルで食事をしてきた。彼がザクセン＝ワイマール侯と同じテーブルで食事が摂れるようになるのは、皇帝が「特許状 letters patent」で彼に貴族の地位を認めた時（1782年）以降のことであった（科学者や哲学者を高く評価する

ルター以来の伝統が、それを可能にしたと言うべきかもしれない）。

ゲーテは若い君主との交友に熱心であった。2人で山や森を踏破して、まるで2人は「自然賛歌の伝道師 prophets of nature」の様であった。口先だけのルソー Jean Jacques Rousseau と違って、2人は行動派であった。貧しい住民が必要としている物を調査したり、夜通し火事の見回りをしたりもした。そして5年後に友情の記念碑を建てることになった時ゲーテがザクセン＝ワイマール侯のために書いたのが、森の美しさを讃えた政治詩「イルメナウ」であった。ゲーテの詩で英訳されたのは6つか7つしかないが、そんな珍しく英訳された詩の1つが「イルメナウ」である。この詩を読めば、ドイツでは森が政治的な意味を持つことがよく判る。

「清々しい谷よ、常に緑なす森よ、私は心の中で再び君たちに挨拶の言葉をかける。重くたれ下がる枝を私の上に広げておくれ、君たちの作る影の中に私を迎えておくれ！愛と喜びのこの日に君たちが上から吹き送る爽やかな風と薫りで私の胸を膨らませておくれ！気高い山よ！様々に変わる運命を担って、私は何度おまえの足元に帰り来たったことだろう。

さあ、今日はおまえの抱く静かな高みに若々しく新しいエデンの園を見せておくれ！私とても君たちのためにそれだけのことはしたのだよ、君たちの緑深まる様をそっと見守ってきたのだから」(潮出版社『ゲーテ全集』第1巻、243ページ)。

この詩は自然との対話というより、たえざる配慮の対象とされている耕地、しかも人間の支配を免れた耕地との対話と言うべきである。森は「永遠に続く配慮の対象 eternal task」であり、いつでも放置できる庭園や放置されたままの砂漠とは違っている。果実を生むが、それは人間のためではない。森を育てるには忍耐と勤勉が要求され、貪欲と焦りと不注意を避けることが要求される。この詩の最後でゲーテは、森を統治のあり方を示すものとしている。「さあ君主よ、あなたの国のこの一角を、あなたの治世の模範の土地にしなさい」(同上、247ページ)。

森を治世の模範に例えるような詩が書かれることなど、ドイツ以外の国

では考えられないことである。森と人間は「相互依存の関係を結んでいる give and receive」のである。人間は森を保護するが、余計な干渉はしない。小さな領邦国家は周囲を他の領邦国家に囲まれており、それが領邦国家のあり方を決めることになる。有名なオーストリアの将軍であったリーニュ侯 7th Prince de Ligne, Charles-Joseph は、イギリスが置かれている状況を冗談めかしてこう表現していた。「イギリスが置かれている状況の中で一番大切なことは、イギリスが海洋によって取り囲まれていることである」。つまりドイツの小さな領邦国家にとって大切なことは、他国によって周辺を取り囲まれていることなのである。戦間期のチェコスロバキア共和国のように、どの領邦国家も周辺を他国との国境線によって取り囲まれていた。統治担当者は、どう足掻いても既存の国境線を変更することは不可能であった。そこで国内問題の解決に専念せざるを得なかったのである。限度ある国内資源の有効利用に専念せざるを得なかったのである。西方に向かって帝国を拡大するのではなくて、森に囲まれた小さな領邦で、父親のような領主が儉約を心掛けるしかなかったのである。「家父長的」であるということは、無駄を許さないことを意味した。

全ての「領邦君主」と全ての役人（末端の警察官に至るまで）が「家父長的」であることに熱心であった。ゲーテが議会制度を小さなザクセン＝ワイマール侯国に導入した時、次のような詩で「相談役 Berater」を歓迎した。「選ばれし相談役たちは、よき所帯主。彼ら全員が家庭のよき父親であれば、領主は領邦のよき父親」（Toast zum Landtage, 1820）。ゲーテがこの詩を書いたのは、1817年のことであった。

フランス議会の「議員 député」に相当する者は、ドイツの議会では「相談役」であった（小国が外国から招いた役人に馴染みの役職である）。ゲーテは、すべての領邦国家で「家父長的」な領主が儉約に努めることを希望していた。そうすれば議会の方も、領主が厳しい判事でなく慈悲深い父親になれるよう協力するという訳である。どこかに少しでも齟齬が生じれば制度は機能不全に陥る可能性があったが、「家父長的」な要素が全ての役職で機

能すれば心配は無用であった。

勇気ある人間に自然は応えて呉れる。ドイツで人間と自然の関係をよく象徴しているのがクリスマス＝ツリーであった。ドイツでクリスマス＝ツリーは、子供の遊び道具ではない。ルターの出身地（森に囲まれた鉱山都市アイスレーベン Eisleben）では、クリスマスは一年中で最も大切な行事であった。一年の始まりは正月でなくて、クリスマスなのである。ドイツの農民や職人の「居間 Stube」に飾られるクリスマス＝ツリーは、森を象徴していた。一年中で最も暗いクリスマスの夜を照らすツリーの蠟燭は、農民や職人の手で世界が変わり得ることを示しているのである。

## 第16節 「幹」と「枝葉」の関係

森に対して人間が与える影響力には限界がある。そこでイギリスにとって海洋が占めていたような位置を、ドイツでは森が占めることになった。森がドイツの国家や政府のあり方に制約を課すことになったのである。国家は決して万能ではない。また「領邦君主」もゲーテの詩「イルメナウ」では、「古い勇士の家柄のたくましい姿を見せる者 Die markige Gestalt aus altem Heldenstamme」と呼ばれていた（同上、244ページ）。領邦国家の規模が「領邦君主」の権限に制約を課すことになったのである。「領邦君主」が支配していたのは、あくまでもドイツの一部に過ぎなかった。ドイツでは当たり前のように使われていた「先祖伝来の支配者 angestammten Fürsten」という呼び方は、イギリスの支配者には使えない。かつてイギリスでは、一度も「先祖伝来の支配者」が国王になったことが無かったからである。「先祖伝来の angestammt」というドイツ語に対応する英語はいろいろあるが（native, inborn, ancestral）、どの言葉もドイツ語が持っている独特なニュアンスは表現できていない。ふつう言葉は「単なる道具 mechanical」と考えられていて、人間が自由に作ることができると考えられているが、実はそうではない。人間は言葉をボタン・貨幣・切手を作るように作ることができ

ると考えると、長い人間の歴史が生み出した言葉の意味が理解できなくなる。

英語の言葉、たとえば「革命 Revolution」・「改革 Reformation」・「連邦 Commonwealth」・「警察 police」を正確にドイツ語に訳したり、逆に「先祖伝来の angestammt」というドイツ語を正確に英語に訳したりすることが不可能である。なぜなら、言葉は人間にとって生死のように深刻な意味を持っているからである。言葉は、決してその場限りの思い付きで作られたものではない。ここで以上のようなことを書いているのは、ゲーテが「イルメナウ」で「古い勇士の家柄のたくましい姿を見せる者」と書いていたことの意味を説明したかったからである。「古い家柄 stemmed」の勇士は、国民のあいだに深く根を下ろしており、それは「枝葉」に対する「幹」のようなものだと言うことを示したかったからである。

行政サービスをうまく機能させるためには、何人もの専門家をうまく協力させることが必要である。イギリスでは、ドイツと違って行政機関の長が部下たちの失敗に責任を負うことがない。逆に部下が長の失敗の責任を押し付けられることになっている。しかし官僚制度を効率よく機能させるには、上司が部下の「罪 sin」に対して責任を負う必要がある。ドイツでそれが可能なのは、上司と部下の関係が「親密で moral contact」、法律上の形式を超えた「個人的関係 personal relations」が存在するからである。つまりドイツにおける上司と部下の関係は、樹木の「幹」と「枝葉」の関係に似ている。

ルター派の領邦国家で、領主が役人の要請に全て対応しては、そもそも官僚制度を作り上げることは不可能であった。効率よい行政サービスが可能になるには、制度そのものが自立している必要があった。役人は貧しい者も公平に扱うべきであって、コネのある者を優先するようなことがあってはならない。相手が違ってても対応の仕方が変わらないような公平無私の役人は、上司の駆け引きで採用されるようなやり方では確保が難しいと言わざるを得ない。

ルター派の領主は改革に熱心であった。支配権を失う可能性がある領主に改革を期待するのは無理である。「地元に根差した stemmed」領主にして初めて改革は可能であった。ドイツ人が教皇との戦いで頼りにしたのは、領邦国家にしっかりと根を下ろした領主の権力であった。なかには無能な領主もいたが、彼らに対する改革派の態度は戦間期の大不況や、ロシア人・中国人の飢餓に対する態度と似ていた（例外的な現象と考えられていた）。不況は困ったものだが、それを理由に暴動を起こしたり革命を起こしたりする訳にはいかない。失政も困ったものだが、革命による混乱よりはマシなのである。シャミッソー Adelbert von Chamisso は有名な詩で、4代に渡って過大な税を要求した領主に対して老婦がどう上手く抵抗し、上手く領主の要求を退けたかを謳っている。まず老婦は最初の領主に課せられた新税の支払いを拒否し、領主は退位する羽目に陥っていた。2代目はさらに酷い領主で、3代目も酷い領主だった。そして最後の領主のとき、彼女は次のように領主のために祈っている。「酷い領主とは言え彼が天国に行けるよう祈っています」。領主制は必ずしも悪政を意味せず、悪政と領主制は別物なのである。

ドイツ人は、改革を志す役人が集結できる核を作り上げていた。アメリカのように4年ごとの選挙で大統領を選ぶ制度の下では、効率よい官僚制度は望めない。官僚制度の長たる大統領が頻繁に代わるため、役人は規則や指示を盾に保身を図らざるを得ず、役人は常に外部からの圧力に晒されることになるからである。個人的な利益のために権限を行使するような役人が現れることにもなる。もちろんアメリカの役人も、その大部分は真面目に仕事をしていることは認めるが、それでも自ら好んでリスクを冒すようなことはしない。いつ首になるか判らないと怯えており、その結果が「お役所仕事 red tape」である。これこそ役人が外部からの圧力に晒されている何よりの証拠であり、彼らは「規則の細部に拘る杓子定規 pedant」たらざるを得ないのである。

ドイツで「規則の細部に拘る杓子定規」なのは学者であって、役人では

なかった。数が多い小さな「領邦君主」同士はお互いに競争しており、役人は「領邦君主」の間を行ったり来たりしていた。有能な役人の供給源も豊富で、役人は誰の好意にも依存する必要がなかった。ドイツの役人は有能で、責任感にも富んでいた。もちろん役人を拘束する規則にも通じていたが、だからと言って「規則の細部に拘る杓子定規」になる訳でもない。金持ちであれ貧乏人であれ、住民の評判を気にする必要は無いからである。領主も領邦国家を行き来する学者に助けられて、貧乏人の味方である「乞食王 prince des gueux」になっていた。1900年にシュモラー Gustav von Schmoller はプロイセン国王を「乞食王 Roi des Gueux」と呼んでいたが、彼は真面目であった。地域に根差した、伝統ある家系の領主に対する領民の感謝の気持ちは、シュモラーよりも300年も前にイギリスで制定された法律の条文によく現れている。「いまイギリス人ほど幸運に恵まれた国民はいない。かつてないほど学識があり宗教心に溢れた慈愛溢れる国王陛下、王家の血筋を引き、希望に満ちた子孫に恵まれた国王陛下のもとで真の信仰に恵まれ、この幸運と真の信仰を子孫に残すことを約束する」。このルター派のものとも見紛う文章は、じつは1605年11月5日のガイ＝フォークス＝デイ Guy Fawkes Day を制定した法律の一部なのである。

ところが1918年に、このドイツ人と「領邦君主」の間にあった信頼関係が失われてしまった。すべての「領邦君主」が退位させられてしまったからである。その結果が混乱と無秩序であった。それまで秩序維持の要であった「領邦君主」がいなくなったからであった。樹木は根刮ぎにされ、枝葉は消えてしまった。「領邦君主」が維持してきた伝統が失われ、国民は途方に暮れることになった。ヒトラーが登場してきたのは、失われた「領邦君主」に代わるリーダーが求められていたからであった。その原因を作ったのがアメリカ合衆国大統領のウイルソン Woodrow Wilson であった。彼は戦争の原因をドイツの「悪い支配者 bad governors」に求め、彼らを排除さえすれば問題は無くなると思ったのである。ところが排除された「悪い支配者」に代わって登場してきたのが、「群衆王 King Demos, King Mob」であっ

た。ワグナーの楽劇に登場してくるゲルマンの神話を、戦間期のドイツに再現させようとした「大衆 mass」の登場である。気違い沙汰のように思えるが、リーダーを無くした者が必要としていたのは新しいリーダーであった。

ヒトラーの「アーリア人優越論 racism」は、失われた「領邦君主」のリーダーシップに代わるものであった。複数の「領邦君主」の存在を法と秩序の根幹と考えるのに慣れてきた者にとって、それに代<sup>か</sup>り代<sup>か</sup>わり得るものは「民衆 people」でしかなかった。その「民衆」が支持したのが「人種論 myth of race」であった。

## 第17節 ゲーテの『ファウスト』

ドイツの職人が材料となる資材に対して示す態度は、森に対する森林保護官の態度や子供に対する父親の態度と似ていた。いずれの場合も保護される側は、やがて保護する側を凌駕していくことになる。ワイマールにやって来たばかりのゲーテがザクセン＝ワイマール侯カール Carl August の教育問題で手を焼いていた頃、次のようなことを祈りの言葉として唱えていた。「我が手の営む日々の仕事、これを完成する高い幸福を与えてくれ！わたしは中道で倦むことがないように！いや、これはむなしい夢ではないのだ。今は枝も葉もなく棒さながらのこの樹も、いつかは実をつけ影を落とすのだから」（潮出版社『ゲーテ全集』第1巻、59ページ「希望」）。自分は成果を見届けるほど長生きできなくても、将来に必ずや繰り返し育つ木が生まれてくるとゲーテは信じていた。彼はロマン主義の英雄のように、永久に生きることを望んだりしなかった。彼が育てる木にゲーテという名が付されることは決してないが、成長する木のなかにゲーテは生き続けるのである。彼はこうも書いている。「子も産まず、木も育てられない者は人間ではない」。

それ自身の法則に従って自律的に機能している世界に身を置き、その世

界のために働くことが役人の義務なのである。世俗世界に身を置きながら、みずからの「専門知識 Fach」を生かして問題を解決して行くのである。この「専門知識」という言葉は「機械体 mechanism」だけを意味しない。そこには、農民・樹木・動物・職人・芸術・科学なども含まれている。これは「有機体 organism」のように成長を続けるのである。また、それは人間が勝手に作り上げるものでもない。人間にできることは、ただ目的の実現を手助けすることだけである。人間の靈感・知識・訓練が生み出す成果は個人のもではなく、個人の名誉でもない。ただ生まれた者が生んだ者を乗り越えるのを手助けするだけである。

これは都市民の考えることではなかった。都市民は目に見える労働によって糧を得ており、自分の労働の結果を自分の目で確かめることができる。また労働の結果が優れていれば毎日、称賛の声を聞くこともできる。しかし木が生い茂った山奥で働く役人は、「自分のやるべきことを確かめる方法がない belong to an invisible order」。「使命感なくして without this moral power」、賄賂や「情実人事」と無縁な形で義務を果たすことは不可能である。

「ドイツ文化 Kultur」の担い手たる役人は、「辺境 frontier」に強い関心を示す。「辺境」こそ「ドイツ文化」が機能すべき場所だからである。大学教育を受けた役人を訓練して、「遠くから par distance」指示通りに働くようにするのである。しっかり訓練すれば、とくに直接の指示は必要とされない。ドイツでは、宮廷から遠く離れたところでも機能する新しい官僚制度が「いつのまにか sans éclat」登場していた。

ドイツの官僚制度が持つ「反都市的な anti-town」性格は、「大都市文明 big-city civilization」の評判があまり良くない現在、とくに重要な意味を持つ。ただし、ドイツの「辺境」は限定的なものに過ぎなかった。ゲーテの『ファウスト』にも、限定的な性格の「辺境」が繰り返し登場してくる。ファウストは世界中を駆け巡ったことになっているが、ファウストはアフリカやアメリカとは無縁であった。ファウストが活躍した世界は牧場と山々に囲まれたドイツの小さな都市に過ぎず、それが古典古代のギリシャ世界で起

きたこととされ、また未来に起きることとされていた。ファウストは「世の中を駆け通してきた rushes through the world」とか、「欲望の赴くところ（時間の）前髪をつかんだ seizes every moment by the forelock」ことになっているが（池内紀訳『ファウスト』第2部、集英社、337ページ）、実際にファウストが活躍した世界は小さな世界に過ぎなかった。

ファウストにとって、教会はルター派の「目に見えない教会」（信者共同体）を意味した。ゲーテが『ファウスト』で設定した舞台は16世紀のドイツであり、宗教改革が進行していたドイツであった。そこでファウストが直面したのも、ルター派の信者と同じ課題であった。「目に見えない教会」の意味を自分は取り違えていないか。この世俗世界で偶像崇拝の罪を犯していないか。ファウストの答えは、こうであった。「私は生き急いだに過ぎぬ I only rushed through life」。彼にとって人生とは巡礼のようなものであった。ただし、それはバニヤン John Bunyan のように、一途に「天上の都市」を求めて出かけていく巡礼ではなかった。

ファウストは、ふつうの人間のように世事に心を奪われるようなことはなかった。どれほど魅力一杯のことにも、我を忘れるようなことはなかった。彼は前に進み続けるのである。生涯の最後の大事業でさえも、その成果に与ろうとはしなかった。「山裾に沼地がひろがっていて、すでに干し上げた土地と違って厄介ものだった。あれをきれいに干拓するのが最後にして最高の大事業だ。多くの人々のための土地ができる。各人、ゆたかとはいかなくても、働けば自由に住めるはずの小天地だ。畑が緑にかわり、実りを迎え、新しい土地に人と家畜が穏やかに暮らしている。大胆に干し上げ、堤がこれを守っている。そのなかは一つの楽園だ。どんなに波が立ち騒ぎ、無理やり入り込もうとしても、しっかり防いで入れさせない。協同の意思こそ人知の至りつくところであって、日ごとに努める者は自由に生きる資格がある」（同上、342ページ）。

こうして人間の助けを得ることで、大地は本来の使命を果たすことになる。人間には、大地が本来の使命を果たせるようにしてやる義務が神から

課せられている。ゲーテは、その死までルター派の詩人であった。ファウストは「憂い」と名乗る「灰色の女」に息を吹きかけられて目が見えなくなっており（同上、338ページ）、手に入れた土地とそこ住民を見ることはできなかったが、彼らが働く様子は耳に聞こえてくる音で知ることができた。住民が鍬で土地を掘り返す音は、ファウストには信者たちが謳う讚美歌のように思えたに違いない。ファウストは、それが贖罪を果たした人間と神との和解を意味したことを知っていた。「鍬の音だ！せせせと大勢が働いている。波に境界をつけ、海を丈夫な帯でせきとめて、そこに土をなじませるのだ」（同上、341ページ）。

詩人はどれほど宗教心が篤くても、世俗の言葉を使って詩を書くしかない。ゲーテの『ファウスト』も世俗的な詩であった。ゲーテは、ルターという言葉が世俗の言葉に置き換えてみせたと言ってよい。ゲーテの作品は見事なドイツ語で溢れており、彼自身もそのことをよく知っていた。『詩と真実』にも書いているが、彼は根っからの話し上手・語り上手であった。もしドイツに生まれてなければ、彼は演説が上手い政治家になっていたであろう。ドイツで話し上手・語り上手は、作家・詩人・思想家になる。ゲーテはルターの説教から多くの表現を借用しているが、いわばゲーテの文学は、宗教改革で修道士を辞めて（ルターは元々アウグスチノ会の修道士であった）法学博士になったルターを代弁しているのである。

このゲーテによるルターという言葉の置き替えは、「高貴 Hoch」という言葉の意味の置き替えに良く現れている。ドイツ人は「高貴」という言葉を好むが、それはローマの「目に見える教会」（教皇庁）に対抗してルターが宗教改革を始めたとき、「領邦君主」と大学が持っていた高い権威に由来する。ゲーテ研究家のルオフ Wilhelm Ruoffによれば、ゲーテは宗教的な問題には無関心だったが、この「高貴」という言葉を自分の「考え方の出発点 metaphysics」としていたそうである。『高貴』という言葉は、ゲーテにとってこの上なく重要な言葉であった。それはゲーテにとって、『永遠 Ewigkeit』という言葉に匹敵するほど重要な言葉であった。いや、それ以

上に重要な言葉であった。なぜなら、もっと意味が広くて深遠だからである。ゲーテが『高貴』という言葉を使うとき、それは言葉以上のことを意味した。ゲーテにとって、それは『考え方の出発点』となる言葉であった。この言葉をゲーテは比較級 Höher（名詞は das Höhere）で使うことを好んだが、それは比較級がより高いところを目指す「上昇運動 upward movement」を示唆していたからである。この比較級の言葉は奇妙な宙吊り状態にあった。原形の『高貴』なら意味が判るが、宙吊り状態にある比較級の Höher は何処まで上昇していくのか誰にも判らず、厳密な意味を確認することは不可能である。つまりゲーテにとって重要であったのは、この言葉で全てを表現し、同時にそれを神秘に留めることであった」（Wilhelm Ruoff, Goethe und die Ausdruckskraft des Wortes: eine Untersuchung des typischen Sprachgebrauchs im West-östlichen Divan, Leipzig, 1933）。

ゲーテが活躍したのはドイツの黄金期（1763～1806年）で、宗教改革の成果が実を結び始めた時であった。三十年戦争の惨禍がやっと癒えた後で、ナポレオン戦争の開始はまだ先のことであった。350人もの「領邦君主」が音楽・美術・科学の新しい才能の発掘を競い合い、また農業の発展に尽力していた時期であった。さらに詩人のクロップシュトック E.G. Klopstock・言語学者のヘルダー J.G. Herder・劇作家のシラー J.C.F. Schiller・小説家のウィーラント C.M. Wieland たちが活躍していた時期でもあった。ドイツのパルナッソス山（ギリシャ神話で詩・音楽・学問の発祥の地とされている）は最盛期を迎えていたのである。世俗化されたルターとも言うべきレッシング G.E. Lessing は、啓蒙思想に反対する視野の狭い牧師に対して次のような反論している。それはフス Jan Hus・フッテン U.von Hutten・ルターを思い起こさせるセリフであった。「何という無知蒙昧ぶり！親愛なる牧師殿、小生いまだこの言葉を発した高貴なる人物フスの域に達していませんが、この言葉は貴殿にこそ相応しい。我々が論争を彼に聞かせて、誰が間違っているか彼に判断して貰うべきだと考えます。彼しかその任に相応しい者はいません。いや出来ることならルター、この誤解された偉大

なる人物に判断して貰いたいものです。とくに誤解の最たるものは、貴殿の同類たる視野の狭い石頭どもによるもの。彼らは貴殿の言い分を借用して声高に非難の言葉を口にしていますが、実のところは無関心。…そこで小生、敢えて反論を試みることにしました。貴殿も貴殿の同類ども、自分の考えを公表するがよいでしょう。小生も負けずに反論しましょう。貴殿と貴殿の同類どもの誤謬を小生が少しでも正しいと認めることがあれば、小生もう二度と筆を取ることはしないつもりです」(Das Absagungsschreiben, in Theologische Schriften, Frankfurt am Main, 1989)。

レッシングは『賢者ナータン Natahn der Weise』のなかで、テンプル騎士に「宗教もやはり一種の党派です Religion ist auch Partei」と言わせているが(岩波文庫『賢者ナータン』第4幕、第1場、124ページ)、こうしてレッシングは『ファウスト』登場を準備していたのである。ユダヤ教・キリスト教・イスラム教は信じる神が同じであり、お互いの違いは党派の違いに過ぎない。お互いに寛容になるべきだと考えていたレッシングのお陰で、ゲーテはルター派を外の世界に向かって開放することが出来たのである。ゲーテが登場して来るまでルター派は外の世界に対して閉鎖的で、カトリック教徒が宗教改革の経験がルター派と共有することなど不可能であった。ドイツ人が大きな犠牲を払って実現したことを外部の世界が知ることができるようになったのは、レッシングとゲーテのお陰であった。

ルター派の信仰は『ファウスト』の形で世俗化され、「目に見えない教会」(ルター派は教会を単なる建物に過ぎないとして特別な意味を認めず、信者共同体こそが目に見えないが本物の教会と考える)とか「信仰のみ sola fide」(信仰だけが救済を可能にすると考え)という考え方が他の宗派の人たちにも理解可能になった。ドイツの宗教改革が外国で理解されるようになったのは、ゲーテのお蔭であった。またドイツのカトリック教徒がルター派に改宗することが出来たのも、ゲーテのお蔭であった。宗教改革は第2段階において文学作品の形を採ることになり、それまで宗教改革と無縁であった人たちも宗教改革の神髄に触れることが出来るようになった。それこそが

文学作品の政治的な役割であった。偉大な芸術作品は政治的な役割を果たすものである。アメリカの画家テイヤー Abbott Thayer も次のようなことを言っている。「偉大な芸術作品は、人間に宿命づけられている空間的・時間的な限界を超えさせてくれる。どう工夫しても、あなたのカメラは空間的・時間的な限界を超えて同時に様々な角度から撮影したり、過去や未来に行って撮影したりすることは出来ない。静止画に課せられたこの限界は、人間にとってどうすることも出来ないものである。しかし人間は、神のように同時に様々な角度から撮影したり、好きな時を選んで撮影したりすることを願うものである。偉大な芸術作品は、神と同じように見る喜びを人間に与えてくれる。芸術家は預言者のように未来を見通せるし、政治的な役割を果たすことも出来るのである」(Kristin Schwaib, Signs of Grace: Religion and American Art in the Gilded Age, Cornell UP, 2008, p.125)。

ゲーテの登場は、政治的な意味と宗教的な意味をあわせ持っていた。ドストエフスキー・トルストイ・バルザック・ゾラの登場についても同じことが言えるが、さらにミルトンの『失樂園 Paradise Lost』と『樂園回復 Paradise Regained』は、ルターの「楽天的な救済観 preformation」(善行は救済を約束するとルターは考えた)からカルバンの「悲観的な予定説 predestination」(カルバンは神が救済する者とならない者をあらかじめ決めていて、人間の善行は必ずしも救済を保障しないと考えた)に信者の目を向ける役割を果たしていた。ダンテの場合も、詩が政治的な役割を果たす現実を我々に突き付けている。現在も詩人が政治と無関係でいれないことは、過去の詩人が果たしてきた政治的役割を見れば容易に見て取れる。

## 第18節 口先の批判だけになったルター派の末裔

ルター派を選択するという事は、教皇庁との完全な別離を意味した。また、それはカトリック教会の複雑な聖職者序列を破壊することも意味した。カトリック教会では、修道会ごとに違った規則が存在していた。修道

会ごとに違っていた100もの「司教帽や飾り lappets and fringes」は、「平信徒 Christian layman」のみによって構成される「教会 religio christiana」として統一されることになったのである。それまでザクセン侯国の平和を妨げ、フリードリヒ賢侯 Friedrich der Weise を悩ませていた司教座は（ザクセン侯国に11あった司教区のうち、6つの司教区で聖務禁止令が出されていた）、すべて廃止された。

やがて訪れてくる嵐を予見していたかのように、「最後の騎士」と呼ばれていた神聖ローマ皇帝マクシミリアンは、1512年に自ら教皇位を獲得しようとした。イギリス国王のヘンリー8世が教皇に代わる地位をイギリスで獲得したことを考えれば、この試みはさして奇抜なことではない。しかし神聖ローマ皇帝が教皇の地位をドイツで手に入れることは不可能であった。ローマで皇帝に就任していたマクシミリアンは教皇位もローマで手に入れるしかなかったが、もしマクシミリアンが教皇位を手に入れていれば、彼は聖俗の統治権を手に入れていたイギリス国王ジェームズ1世のようになれたはずである。対トルコ戦の戦費を聖金曜日（復活祭前の金曜日で、キリストの受難を記念するミサが行われる）に教区教会で集めていたことを考えれば、すでに教会と国家の一体化はほぼ実現していたのである。では、なぜマクシミリアンは教皇位の獲得に失敗したのか。

ドイツの「領邦君主」たちはマクシミリアンの教皇位の獲得を許さず、自分たちが領邦内の教会を支配下に置くことにしたのである。領邦ごとに1つの「教会」が登場してくるようになった。16世紀のドイツで『キリスト教』と題された書物がいろいろ書かれていたが、どの書物にも「自由・平等・博愛」(フランス革命の理念)への志向がすでに見て取れた。同じ様に『キリスト教』と題されていても、それは1000年前に聖アウグスチヌスが書いた敬虔な内容の書物と違って、教会改革の必要性を説く書物であった。複雑に入り組んでいたカトリック教会の組織を、1つに纏めるべきだと主張していた。地方ごとの慣習の違いを認める程度に収め、キリスト教徒は同じでなければならないと主張していた。ルターが言ったように、聖霊は

驟雨のように全ての者に降り注ぐのである。イギリスの「貴族院に席を持つ聖職者 Lord Spiritual」であれ普通の司祭であれ、如何<sup>いか</sup>0如何<sup>いか</sup>なる者も「特別扱い more inspired」は許されないのである。この統合を実現し、信仰のあり方を監視することになったのが「領邦君主」であった。「領邦君主」にとって、それは信仰の問題というより「生き方の問題 matters of ethics」、趣味・便宜・教育の問題であった。つまり秘跡の問題というより政策の問題であった。のちにドイツ人は、「善き統治形態 gute Polizei」を「ドイツ文化 Kultur」と呼ぶことになるが、この「統治形態 Polizei」という言葉はギリシャ語の「都市国家 polis」から来ている（ちなみに「文明 civilization」はラテン語の「civitas 都市国家」が語源である）。つまり宗教改革とは、特定の教皇や皇帝を変えるか否かという問題ではなく、どう法制度を変更すれば「善き統治形態」が実現するかという問題であった。ドイツ人は「統治形態」という言葉を新しく造語することで、教皇や皇帝に対抗することにしたのである。なぜなら、「統治形態」は教皇や皇帝のものではなくて、適切な教育を受けた善意の「領邦君主」のものだったからである。

ルター派の民主主義的な性格は、杭打ち用のハンマーであった。ハンマーを動かすのが「統治形態」であり、ルター派の教説は階層化されたカトリック教会の組織を突き崩していった。それは、まるでジェリコの壁を崩壊させたトランペットの響きのようであった（『ヨシエ記』6:5）。つまり「ルター派 Lutheran party of religion」はカトリック教会のなかでは「民主化を目指す政党 democratic party」のような存在であり、統治形態ということでは「王党派 monarchical party」のような存在であった。イギリスの場合とは逆であった。イギリスの下院は統治形態については「国王を議会と協力させながら King in Parliament」（つまり「王党派」である）、「宗教改革の擁護者 Defender of the Faith」ということでは、国王を教会の首長と認めていた（つまり教会の民主化は目指していなかった）のである。

またルター派は、複雑に階層化されたカトリック教会の組織を何とかする必要に迫られていた。カトリック教会の「さまざまな宗教会議 councils

and synods]・パリ大学（教義の問題を担当）・ボローニャ大学（教会法の問題を担当）・枢機卿・司教に代わる者を用意する必要に<sup>せま</sup>迫られていたのである。それはルター派にとっても欠かせない制度であった。

そこで「領邦君主」たちは、学校・病院・大学などを創ることにした。ヘンリー8世のもとで活躍したウルジー枢機卿 Thomas Wolsey のように、ドイツの「領邦君主」たちは役人の養成学校を設立していった。たとえばウュルテンベルク侯 Herzog Ludwig von Württemberg は1559年、貴族の子弟を役人にするため「宮廷学校 Collegium Illustre」を創設している。場所は、もともと修道院だったところであった。また「善き統治形態」を維持するため、領民の父親たる「領邦君主」は自ら設立した大学の提言に耳を傾け、ルター派の教説に従うことに熱心であった。そうすることで、15世紀に登場してきた民主的な教会制度を護ることが出来たからである。ピサ・コンスタンツ・バーゼルの3つの公会議を経て強化された反教皇の伝統を引き継いでいたのは（公会議の決議が教皇の意志より優先されるとする公会議主義 Conciliarism が登場してくるのは、この時である）、宗教改革後に登場してきたルター派の「領邦君主」たちであった。3つの公会議で「領邦君主」たちは、教会の「頭と手足 head and members」を改革するために、一貫して反教皇の態度を取り続けていた。

公会議で反教皇の態度は取ったものの、「領邦君主」たちはカトリック教会の一員であることは否定しなかった。彼らは反教皇派ではあったが、飽く迄もカトリック教会の一員であった。ただし「ローマ」という限定語は使っていなかったし、イギリス国教会のように国名を冠することもなかった。飽く迄も、彼らは「限定語なしのキリスト教徒 christians pure and simple」であった。ある枢機卿がビスマルク O.E.L.F. von Bismarck に皮肉な調子で尋ねたことがあった。「閣下によれば、カトリック教徒は全員が天国行きを諦めるべきだと言うことになるのでしょうか」。ビスマルクも皮肉な調子でこう答えたそうである。「平信徒はともかく、聖職者は間違いなくそうなるでしょうね」。ルターの時代から350年経っていたが、ル

ター派は平等主義の伝統に忠実であった。

カトリック教会の腐敗があまりにも深刻だった為、改革を実行できたのは世俗の「領邦君主」だけであった。改革派の「領邦君主」が公会議で相手にしなければならなかったのは、腐敗しきった聖職者たちであった。ルターは改革派の「領邦君主」たちに反教皇の立場を取るよう求めていたが、ルターや「領邦君主」たちが公会議に出席することを拒否することはなかった。出席するために幾つか条件を付けていたが、教皇は反教皇派であったドイツ南部の都市トリエントで公会議を開催することは認めていた。しかし、それでルター派が警戒心を解いた訳ではなかった。理論上は、いまでもルター派は公会議の開催に反対していなかったことになっている。その意味では、相変わらずカトリック教会との繋がりには認めていたのである。「領邦君主」が教会を管理しているのは、飽く迄も臨時的の処置としてであった。「領邦君主」は司教でもないし、教会の長でもないからである。

「領邦君主」たちは公会議のあとも協力関係を維持しており、その意味では改めて公会議を開催することに拘ることはなかった。自分たちが必要としていることは、自分たちで手に入れることが出来たからである。信仰を巡る問題はルターたちが解決してくれた。ルターが協力を呼びかけたペテロ（イエスが教会の礎とした人物。教皇はその後継者とされている）の新しい代理人たる「領邦君主」は、信仰の問題に関する限りパウロ（布教活動のリーダー）の代理人（ルター）の指示に喜んで従うつもりでいた。

強烈なドイツ人の批判精神、あらゆる角度から問題に光を当てる習慣、警察官の厳しい態度などは、こうした教会の腐敗に対する反対運動の遺産であった。彼らは常に「反対の anti-」姿勢を変えようとしなかった。彼らが存在するためには、彼らが腐敗と見なす物が不可欠であった。ただし批判精神には長けていても、批判している当の統治機構に取って代わるつもりはなかった。ドイツの議会政治が失敗を繰り返してきたのは、彼らが批判することを止めず、現実と妥協しようとしなかったからである。議会政治を成功させるために大切なことは、政権交代の可能性が存在することで

ある。ドイツの議会は批判するだけで、自ら政権を担当するつもりはなかった。批判していれば十分だと考えていたのである。3つの事例を挙げてみよう。1つはナポレオン戦争後に登場してきた「メッテルニヒ時代 Era of Metternich」のもの、もう1つは多くの優れたドイツ人がアメリカに移民していく切っ掛けになった1848年の出来事、最後の1つは第一次世界大戦後のワイマール共和国の事例である。

「メッテルニヒ時代」の事例は、1819年にドイツ人の良心(つまり大学教授)が警察力に頼る「領邦君主」たちのやり方に異議を申し立てた時に登場してきた。学生たちを説得してナポレオンとの戦いに参加させるのに成功し、その影響力の大きさを認められていた1人の大学教授が、学生たちの政治的要求を認めるようプロイセン政府に伝える為にベルリンにやって来た。1524年の夢(大学と「領邦君主」の代表が帝国議会で宗教問題を議論するよう求めるが、皇帝はこれを拒否した)、いや1460年の夢(1524年に提案された帝国議会で宗教問題を議論するというアイデアは、既にこの年に提案され拒否されていた)に忠実に、ドイツの世論を代表する大学教授たちの集まりを開催するよう時の宰相に要請するためであった。ドイツ人の英知を代表する教授たちなら、「領邦君主」たちを1つに纏めることが出来ると考えたのである。しかし、すでに大学教授がドイツの世論を代表する時代は過ぎ去っていた。宰相の答えは、こうであった。「世論の代表を集めるだって?いまさら世論の代表を集めなくても、すでに警察が世論を代表している」。

逆に1848年には、教授たちは武力なしでも軍隊に勝てると誤解していた。彼らはフランクフルト＝アム＝マインに集まったが、それは「ルター風 à la Luther」の集まりであった。集会所も聖パウロ教会で、パウロの伝統に忠実な彼らに相応しい場所であった(教授たちはパウロが布教活動のリーダーであったように、ルター派の布教活動のリーダーであった)。1524年や1460年に教授たちが実現できなかったことを彼らは実現しようとしたのである。この「教授たちの議会 Professorenparlament」は、ウイッテンベルク大学などで研究・教授が始まった「新しい教え neue Lehre」(ルター派の

教義)の世俗版であった。1848年の春から1849年まで続いた「議会」には、グリム兄 Jacob Grimm をはじめ当時のドイツの優れた学者たち(法制史家のベーゼラー Gustav Beseler・歴史家のダールマン Friedrich Dahmann・ジーベル Heinrich von Sybel・民族学者のワイツ Theodor Waitz・文学史家のゲルビヌス Georg Gervinus・詩人のウーラント Ludwig Uhland たち)が議員として出席していた。

彼らは、キリスト教徒らしく行動の前にまず予言をしていた。しかし彼らの予言たるや、イギリスの議会と違って「事実から導き出されたもの deduced from facts established by themselves」ではなかった。ルター派の教授たちはイギリス議会の反対派のように妥協することもあったが、フランクフルトでは一貫して抗議することに徹していた。つまり自ら統治担当の責任を負うことを拒否しながら、同時に他者に支配されることも拒否していたのである。アメリカの植民地はイギリスから3000マイルも離れていたお陰で独立することができたが、フランクフルトの教授たちに距離の大きさが可能にしてくれる時間的な余裕はなかった。「領邦君主」たちは警察をフランクフルトに派遣して、教授たちの「議会」を解散させてしまった。

ジェリコの壁を崩すためには、ラッパを吹けるだけの時間が必要であった。1848年に必要であったのは説教することではなく、自分たちのために戦ってくれる民主的な警察と軍隊を組織することであった。ところが教授たちがしていたことは、説教することだけであった。宗教改革が作り上げた国家は、「革命耐性 Revolution-proof」を備えていたのである。

警察が大学の外で言論の自由を奪う事案が、もう一度ドイツに登場してくるようになった。それは第一次世界大戦後のことである。社会民主党は批判一辺倒の姿勢のお蔭で、自らの権威失墜に苦しめられることになった。社会民主党員であった役人は、憲法記念日にワイマール共和国の旗の代わりに赤旗を自宅に掲げていた。そのとき彼が勤務する役所では、3色の共和国旗が掲げられていた。公の場で彼は共和国旗に敬意を払うべきだと発言していたが、本人は共和国旗を嫌っていたのである。自らが代表する秩序を政敵に押し付けながら、自分はそれに反対するという矛盾したことを

彼はやっていた。これはルター派を馬鹿にした行為であった。ルター派の失墜が始まっていたのである。

## 第19節 ヒトラーの登場が意味すること

ドイツでは、いまや（この本はヒトラー政権の登場後に書かれている）ルター派の権威は無いに等しくなっている。ヒトラーはドイツ人でもないし（オーストリア人であった）、受けた教育も性格も宗教改革とは無縁な人物であった。過去400年のドイツの歴史とまったく無縁な存在であった。彼はプロテスタントでもなかったし（カトリック教徒であった）、学者でも役人でもなく、軍の将校でもなかった。彼は本能的に学位とか軍の勲章を嫌っていた。無名の兵隊に過ぎず、そこで宗教改革とは無縁なところから全てをやり直すことができた。宗教改革を成し遂げたドイツと無縁であった彼には、ペテロ（初代教皇）よりもパウロ（布教活動のリーダー）を重視するルター派など、どうでもよい存在であった。彼は教皇・司教・修道士・公会議など全てを一身に体現していたからである。彼は政治家でありながら靈感を備えた宗教家でもあった。ルター派に存在していた2つの権限の分離、つまり宗教的な権限と政治的な権限の分離が無くなってしまったのである。宗教改革で「目に見える教会 visible hierarchy」は無くなった筈だったが、「目に見える精神的な権威 visible spiritual authority」をドイツ人は手に入れたのである。

ドイツ人はヒトラーを死後の救済を左右する教皇、良心の担い手である聖人、天国への鍵を手にするペテロと同じ存在にしてしまった。あるとき一人のルター派の牧師が、政治的な対立に起因する暗殺事件について意見を尋ねられたことがあった。彼は返事の代わりに、壁に飾ってあったヒトラーの肖像画を指さしたものである。

ルター派に対する否定的な態度（つまりヒトラーに好意的な態度）は、とくに北ドイツで強かった。ハプスブルク帝国（ないしはオーストリア）では

ヒトラーは特別な人間ではなく、それほど大きな影響力を持つことはなかった。北ドイツでも特にルター派の伝統が強かったホーエンツォレルン家支配下の領域では、カトリック教徒やユダヤ教徒が救世主を求めることはなかったが、ルター派は違っていた。ルター派のドイツ人は、目に見える権威を崇拜したいという欲求に抗しえなかったのである。

かつてベルリンにあった私の部屋で、新しく任命された「帝国司教 Reichsbischof」（ヒトラーは政権獲得後にドイツのプロテスタント教会を1つに纏めて、1人の司教の統率下に置こうとした）の側近は私に言ったものである。「ヒトラーは救世主イエスそのものだ」。あるいはフランク博士なる人物は、ヒトラーを神に例えていた。さらにハインシュタイン Hainstein（ルターが聖書をギリシャ語からドイツ語訳した場所として有名なワルトブルク城の麓にある町）で神学のサマースクールが開催されたとき、牧師の卵たちはナチ党の突撃隊員を救世主イエスと同じだと教えられていた。教皇・教会・異端・聖人・殉教などといった言葉は使われなかったが、すべてが宗教改革以前の状態に戻されていた。ヒトラーやゲッベルスが果たした役割を理解するには、中世の教会史を振り返ってみる必要がある。

宗教改革から400年、宗教改革の成果は失われてしまった。宗派の違いに関係なく全てのキリスト教徒が統制下に置かれ、かつての反教皇の姿勢は無意味になってしまった。責任感で一杯の牧師と自由で批判精神に溢れた信者の間にあった緊張感<sup>あいだ</sup>が失われ、それに代わるものとして人種論が登場してきた。信仰の自由を保障していた「領邦君主」がいなくなったからである。20人いた「領邦君主」たちの退場で、恐怖とヒステリーの発作が襲ってくることになった。20の領邦国家の存在こそが、ドイツ的知性の批判精神を生かし続けてきたからである。

ドイツ人が「目に見える教会」（宗教改革でカトリック教会の「目に見える教会」は単なる建物でしかないとされた）なしでやって行くためには、全ての信者の批判精神が全ての「領邦君主」によって保障される必要があった。その時だけ際限ない批判も改革に繋がるのである。第一次世界大戦で「領

邦君主」がいなくなって、信者たちの際限ない批判は「無用の長物 sulky grumbling of mud rakers」と化してしまった。ドイツ人が安心していられるためには、強力な国家、恐怖心を起こさせる支配者、常勝の軍隊と領土拡大の可能性がなければならなかった。外国からの脅威に対処し、国内の問題に対処するために聖なる一体感が必要とされていたのである。こうしてドイツにおける宗教改革の成果は失われてしまうことになった。

宗教改革から生まれてきた3つの成果、つまり善き統治・大学・音楽が無くなってしまった。保護者であった「領邦君主」たちがいなくなり、恐怖に怯えた若い世代がこの3つの成果を捨ててしまった。迷信深くなった彼らは、判りやすい信仰対象にヒトラーを選んだのである。1932年にポテンバ Potemba（現在はポーランド領 Potęba）で、突撃隊員が母親の目の前で共産党員を殺害したことがあった。ゲッベルスは突撃隊員の行為を賞賛し、ヒトラーはその行為を不問に付したが、これではとても善き統治とは言えないし、ゲッベルスの賞賛は賢明な側近の助言とも思えなかった。『わが闘争』や『20世紀の神話』の学習会が催されていた「党学校 Parteischulen」や「エリート養成施設 Ordensburgen」は、聖書の「神の言葉 Word」が批判精神を呼び起こしていたイエナ大学やハイデルベルク大学と不思議なコントラストを醸し出していた（「党学校」や「エリート養成施設」では空疎な決まり文句の暗記が求められただけ）。もちろんナチ党の党歌『党旗を高く掲げよ Die Fahne hoch』（作詞家の名前を冠して「ホルスト・ウエッセルの歌 Horst Wessel Lied」と呼ばれることが多い）は、とても音楽の名に値するようなものではない。

宗教改革の遺産を保持していたのは軍隊だけであった。ドイツの現状を理解するためには、ヨーロッパの過去の歴史にあった似た現象を確認してみる必要がある。そうすればヒトラーの鉄槌が意味したことが理解できるはずである。

フランス革命が始まると、フランスではカトリック教会の影響力が急速に失われていった。そこでローマ教皇はカトリック教会を守るため、評判

の悪かったイエズス会を1772年に解散させた。イエズス会が再び復活してくるのは、1815年のことである。イエズス会が復活してくると、イエズス会を支えてきた「世界の花園イタリア garden of the world, Italy」が生気を奪われることになった。後にイタリア建国の中心になるピエモンテ州では、1815年から1830年の間に貴族1家族あたり1人の犠牲者を出している。またイエズス会の復活は、ヨーロッパ全域に大きな影響を与えることになった。イエズス会の影響力は1870年に頂点に達するが、その結果が教皇無謬説である。カトリック教会の今日あるは、イエズス会のお蔭であると言っても過言でない。死にかけていたカトリック教会が息を吹き返したのである。

この例からどんなことが判るのだろうか。1815年にローマ教皇庁・イタリア・イエズス会が中世に持っていた機能を何とか復活させたとき（イタリア中世の最盛期「14世紀 Trecento」と「15世紀 Quattrocento」）、すでに3つの革命が終わっていた（ドイツの宗教改革・イギリスの名誉革命・フランス革命）。その結果、彼らが中世に持っていた機能は、ほとんど失われてしまっていた。16世紀に創設されたイエズス会はまだ生気を保持していたことから、カトリック教会はイエズス会に依存するようになり、外部の人間はカトリック教会をイエズス会と同一視するようになった。戦間期にドイツ軍が果たした役割と、19世紀にイエズス会が果たした役割はよく似ている。宗教改革から戦間期のドイツ軍再興までに、やはり3つの革命が起きていた（イギリスの名誉革命・フランス革命・ロシア革命）。ドイツ歴代の王朝を守ってきたプロイセン軍の伝統を継ぐドイツ軍は、1918～33年に衰退期にあった（ベルサイユ講和会議で大幅な軍縮を義務づけられていた）。これでドイツ軍が再び復活することは無いと考えられていた。ところが1933年にヒトラーが政権の座に着くと、ドイツは再軍備に着手することになった。このとき戦勝国がドイツに認めていた大学・音楽・善き統治は、すでにドイツから消えて去っていた。復活してきたのは、軍縮を強制されていたドイツ軍だけであった。ローマ教皇は外部からの批判が原因でイエズス会を解散させた

が、結局は復活を認めざるを得なくなった。良心的なドイツ人はルーデンドルフ Erich Ludendorff のような軍人を信用していなかったし（ルーデンドルフはワイマール体制に反対してナチ党を支持）、ナチ党は軍部とは別物であった。そのナチ党を良心的なドイツ人が支持することになったのも、軍縮が強制されていた現実を考えればやむを得ない選択であったと言える。

再興を果たしたイエズス会が19世紀の「反革命派 Anti-Jacobins」となったように、再軍備を果たしたドイツ軍は「反ソ・反共 Counter-Bolshevik」の軍隊となった。両者に共通しているのは、どちらも守るべきものが消滅してから再興を果たしていることである。バッハやゲーテを生み出したドイツは、さらにフリードリヒ大王 Friedrich der Große の時代に「外交革命 Diplomatic Revolution」（オーストリアのマリア＝テレジアが敵対していたフランスを同盟相手として受け入れ、フリードリヒ大王がイギリスと同盟を結んで戦ったことをこう呼ぶ）を実現して七年戦争で勝利し、ドイツにおけるプロイセン王国の優位性を決定的なものにしていた。イエズス会も復興を遂げてカトリック教会の復興を実現していたが、復興を遂げたドイツ軍もイエズス会も本当の意味で教会とドイツを復興させたと言えるであろうか。

このように、革命によって生まれた新しい政治秩序は、一旦は破壊されても必ず復興してくる。ヒトラーの登場は、その意味でよい教訓となる。強制的に排除された政治秩序は、破壊されるどころか逆に強化されて蘇ってくる。イタリアの例（イエズス会）とドイツの例（プロイセン軍の伝統）から、読者は結論を導き出してほしい。

## 第20節 「領邦君主」に対するルターの無抵抗主義

「現実を変えることを不可能と考える者が無抵抗主義を立派な考え方などと主張しているが、イギリスで起きた革命を見れば、それが如何に馬鹿げた主張であるか判るはず」。1689年の名誉革命を支持したニューイングランド（ピューリタンの伝統が強いアメリカ北東部の6州）住まいのアメ

リカ人は1750年に、こう言って名誉革命を正当化したが、1690年にイギリスで馬鹿げた考え方だとされた無抵抗主義が、実はルターの革命では重要な役割を果たしていたのである。1525年にドイツで農民たちが武器を手に立ち上がったとき、ルターは「領邦君主」たちに鎮圧を呼びかけた。たしかに無慈悲であったが、意味ある呼びかけであった。ルターは反乱を起こした農民たちを殺すよう「領邦君主」たちに呼<sup>よ</sup>びかけたが、それは領邦内で君主以外の者が武器を手にする様なことがあれば、無秩序が発生したからである。

ドイツ農民戦争は、そういう意味で画期的な出来事であった。それ以後、「領邦君主」以外は武器を手にすることが禁止されることになった。それで直ちに仇討や私闘が無くなった訳ではないが、ニューイングランド住まいのアメリカ人が1690年に冗談半分でいった言葉は、ルターの「領邦君主」に対する呼びかけで秩序回復が成功したことを確信していたからこそ口にできたことであった。そのアメリカ人はドイツでルター以前の状態が戻り、仇討や私闘が復活してくることを望んでいた訳ではない。

この無抵抗主義のお陰で、イギリスにおけるルターの評判はすこぶる悪い。一見すると名誉革命とルター革命は考え方が正反対のように思えるが、その違いは大きくない。イギリスで抵抗権が認められるのは、1人ひとりの領主や貴族でなくて「集団の common」抵抗権だけである。この「集団の」抵抗権が成立するためには、まずイギリスが1人の君主の下で統一されている必要があった。

そもそも「領邦君主」たちに教皇への抵抗を呼びかけていたルターは、「領邦君主」に対して抵抗するよう農民に呼びかけることなど出来る筈が無かった。それに宗教改革が成功するか否か、あるいは彼自身が安全でいられるか否かは「領邦君主」しだいであった。もし「領邦君主」が教皇の教書を見捨てなければ、ルターは無力であった。イギリスのように君主が好き放題できる場合は無抵抗主義も許されなかっただろうが、ドイツの「領邦君主」はイギリスの君主と違<sup>ちが</sup>っていた。カトリック教会が「領

邦君主」を監視していたからである。ルターは、このカトリック教会による監視を廃止するよう「領邦君主」たちに呼びかけたのである。そんな時にルターは、「領邦君主」を監視するよう農民たちに呼びかけることなどできたであろうか。それに統治制度の廃止を要求するのは、馬鹿か「狂信者 Schwärmer」だけであった。そこで「水平派 Levellers」にクロムエルが反対したように、ルターは「狂信者」に反対したのである。宗教改革の結果ドイツでは、武器の保持が禁止されることになった。この伝統が破られたのがヒトラー政権の時である。ドイツの若者の間で農民戦争の経験が思い出されることになったが、無秩序状態の登場と流血事件の発生は当然の結果であった。そこで登場してきたのがヒトラーの独裁体制であった。

ルターの無抵抗主義は決して臆病から生じたものではない。良心に反するようなことを強制されたらどう振る舞うべきか信者が尋ねたとき、ルターは次のように答えるよう指示していた。「たとえ殺され財産を奪われるにしても、私があなたの命令に従うことは無いでしょう。あなたが神の厳しい審判を受けることになるだけです」(Luther's letter, An die Evangelischen zu Leipzig, 1533年4月11日)。トマス＝モアがイギリスで殉教したのも、同じ原則に従ったからであった。

## 第21節 俗人の聖化

ルターによる宗教改革の結果、信者一人ひとりが教会の束縛から解放されることになった。またルターによる宗教改革の結果、「領邦君主」が支配者として登場することになったが、農民や職人も自由になったのである。ルターの『小教理問答 Kleine Katechismus』は、家畜の世話係・女中・下男・洗濯をする主婦・畑仕事に精を出す農夫のために書かれたものである。それが働く者すべてのために書かれたことは、ルター自身の次の言葉からも判る。「目に見えない神の宝物があることを知るべきである。熱心に仕事をしている女中や、忠実に義務を果たしている召使い、あるいは子供の世

話をしている母親は、熱心に祈っている修道士と同じように重要な存在である」。1534年にクラ＝ツェリン Klara Zellin が書いたルター派初期の讚美歌集にも、こんなことが書かれていた。「職人は仕事をしながら歌っているし、女中は食器を洗ながら歌っている。農夫は畑で働き乍ら、母親は揺り籠で子供をあやし乍ら歌っている」。

「俗人の聖化 Laity sanctified」がルターを目指したことであった。ルター派教会の教会暦は、カトリック教会の祝祭日に1日だけ祝祭日を付け加えただけであった。それはルターの誕生日であった。聖人たちは亡くなった日(つまり天国に生まれた日)が聖人の日とされている。つまり彼らが地上で最後を迎えた日が記念日なのである。イエス＝キリストも十字架で死んだ日が「聖金曜日」として祝われているし、殉教者も死んだ日が記念日とされている。ルター派教会で誕生日が祝日とされているのは、イエス＝キリストと洗礼者ヨハネの他にはルターの誕生日だけである(11月10日)。ルターはフランス革命のように既存の秩序を引っくり返した訳でもないし、イギリス革命のように貴族が持つ特権を復活させた訳でもない。またルソー Jean-Jacques Rousseau のように人間の「自然状態 état de nature」を理想化した訳でもないし、人間が生まれながら持っているとされている権利を主張した訳でもない。彼が主張したのは「俗人 laity」の大切さであり、「俗人」が聖職者の仲介無しに神と直結するという考え方であった。彼は既存の教会を「世俗世界の教会 lay-church」、単なる地上の建物にしてしまった。信仰を「教会の外 pro-fane」(そこから「神に対する冒瀆 profanation」という言葉が造られた)に持ち出してしまったのである。彼は既存の教会を破壊して、教会を「目に見えない教会 invisible Church」にしてしまった。

イギリスで国王の誕生日が祝祭日になっているのは、ルターの宗教改革による。ドイツでは「領邦君主」の誕生日が領民の祝祭日であった。「領邦君主」の誕生日はアメリカの「レイバーデー Labor Day」と同じで、全ての職業が聖なるものとされる日なのである。ちなみに7月4日(独立記念日)はアメリカ合衆国の誕生日であり、ルターの誕生日をアメリカ風に

読み替えたものである。独立後にアメリカは、ドイツの王朝に代わるものとして憲法を制定した。死ぬことがない憲法が王朝の代わりになったのである。

こうしてルターの誕生日を聖なるものとしたドイツの宗教改革で新しく登場してくることになった統治体制は、他の国の革命と次のような点で共通している。つまりドイツ革命の「俗人と王朝 laity and dynasties」、イギリス革命の「下院と慣習 Commons and custom」、フランス革命の「天才 natural genius」、ロシア革命の「アダム登場以前の原初的な勢力 pre-Adamite forces」には、「人間に対する信頼感 the truth confided to the universal priest: man」が共通に見られるのである。

休題閑話 Transition

## 第8章 ポリュビオス Polybius の政体循環論

### 第1節 キリスト教とポリュビオスの政体循環論

ヨーロッパでは1517～1918年に、ポリュビオスが論じている4つの政体（王制・貴族制・民主制・独裁制）全てが登場しているが、いずれも俗人ないしは世俗権力による革命で登場してきたものである。また、それぞれの政体は世俗の支配者に主権を委ねてきた。世俗の支配者に善悪を判断する権利を認めたのである。そのおかげで機械の1部品に過ぎなかった俗人・庶民・個人、言い換えれば全員が政体の何たるかを理解するようになった。また国家の抱えている秘密がしだいに公開されるようになった。4つの政体に共通していたのは、カトリック教会（目に見える地上の施設）からの解放を目指していたことである。他にも共通点<sup>かずお</sup>が数多く存在しており、それを比較することで政治の何たるかを理解することが可能になる。

第一に、この4つの政体はアリストテレスが詳しく論じており、すでに周知のものになっていた。王制（領主制）はドイツ、貴族制はイギリス、民主制はフランスが革命によって実現しており、独裁制はロシアが革命によって実現している。

また4つの政体はアリストテレスが論じた順番に従って登場しているが、それぞれ登場してきた国は違っている。それに4つの政体が共存していたことも、その特徴として指摘することができる。ドイツでは「領邦君主」、イギリスとフランスでは議会が主権者として登場しており、またロシア革命以後は資本家が統治する国と労働者が統治する国が共存している。

さらに4つの国がヨーロッパという纏まりのなかに存在していたことも特徴として指摘できる。国ごとに別々に革命を起こしているが、それでも他の国と共通する何かを革命によって実現しており、お互いに影響を与え合っていた。ヨーロッパとしての纏まりはすでに存在しており、改めて実

視を目指す夢などではない。単に各国の大臣や大統領が協力すると言った以上の深い意味がそこには存在していた。

4つ目の特徴として、この4つの政体の循環が古代に知られていたということがある。ポリュビオスによれば、それぞれの政体は機能不全を起こして次の政体にとって代わられるのだが、その原因は政策の誤りなどではなくて、統治者が適任でなかったことに由来する。この種の議論で古典とされているのがポリュビオスとアリストテレスだが、キリスト教が登場してからは政体循環論が議論の対象にされることは無くなった。なぜなら、キリスト教徒は異教徒のポリュビオスやアリストテレスの政体循環論が間違っているのは当然だと考えており、そもそも議論の対象とすることを嫌っていたからである。キリスト教徒に言わせれば、政体循環論が宿命などと考えるのは馬鹿げたことなのである。

しかし今、キリスト教徒はそれほど傲慢ではない。異教徒のものだからと言って、その考え方を頭から否定するようなことはしない。「異教時代とキリスト教の登場以降に何か違いはあるのか」と問われると、多くのキリスト教徒は即座に「違いはない」と答えるはずである。キリスト教徒が最終的に奴隷制を廃止したのは1865年のことであった。奴隷制が存在していたと言うことでは、古代の異教時代と同じであった。キリスト教徒が日曜日ごとに行うミサは素晴らしい儀式だが、異教時代と区別されるべきキリスト教時代など存在しないのである。

しかし本当にそうなのであろうか。キリスト教の登場によって何か大切なことが実現したのではないだろうか。何か世界中で受け入れられるようなこと、何か素晴らしいことが実現したのではないだろうか。アリストテレスやポリュビオスの時代には政体の規則的な循環があったかもしれないが、政体は不滅でもないし規則的に循環するとは限らない。キリスト教が異教と違うのは、あらゆるものが不滅でないことを知っているということである。キリスト教徒は政体が<sup>かなら</sup>必ずしも王制から貴族制、貴族制から民主制、民主制から独裁制へと変わるとは考えておらず、共存することも有り

得ると考えている。しかも共存は単なる共存に留まらず、お互いに影響を与え合うのである。ある政体が何かをすれば、それに対して必ず他の政体から何らかの反応があった。イギリスにルター派は存在せず、そこで「領邦君主」ならぬイギリス国王は、議会で主権を譲ってイギリス初の「紳士 gentleman」となるしかなかったし（議会と協力して統治する国王の登場）、フランスにはイギリスのような世界の海を制覇した「共和国 Commonwealth」は登場して来なかったので、革命で歴史の舞台から退場した貴族は「上流階級 elite」を形成することになった。またフランスのように強力な資本家がいなかったロシアでは、資本家は「その他大勢の社会勢力 one social force among many」に過ぎなくなった。

このような相互依存のおかげでヨーロッパでは、どこかの国が他の国を支配下に置くということがなかった。また、ある国の政体が他の国に受け入れられるのは、その国が最悪の事態に追い込まれた時だけであった。フランス式の国家統一がイタリアやドイツで実現するのはナポレオン3世の時だが、ナポレオン3世の時代はフランス最悪の時代であった（プロイセンとの戦争に敗れてパリコミュンが起きている）。フランスがナポレオン1世の時のような優越した地位を失ったときに、イタリア人とドイツ人は（イギリス人も含めてよい）1789年の「良き知らせ Gospel」（理念）に酔いしれていたのである。

イギリスの議会制がヨーロッパ大陸に普及して行ったのも、イギリスがアメリカの植民地を失って世界帝国でなくなった時のことであった。この時イギリス下院のやり方がアメリカの植民地やヨーロッパ大陸に知れ渡り、議会制度として受け入れられて行ったのである。イギリスの下院が議会制度のモデルとされたのは、まさにイギリスで「人身保護法 habeas corpus」が停止され、言論の自由が失われた時であった。またドイツの効率よい官僚制がフランスで採用されたのは、リシュリューとマザラン Jules Mazarin の時代であったが、そのときドイツは三十年戦争のおかげで疲弊・荒廃していた。

vv新しい統治制度が登場してきたのは、どの国の場合も過激な革命の結果であった。ドイツの宗教改革、イギリスの「コモンロー」、フランスの「立憲主義 Constitutionalism」、ロシアのソビエト体制は、いずれも革命の結果である。フランスの宗教改革に始まるユグノー戦争（1562～98年に戦われたカルバン派とカトリック派の内戦。1598年のナントの王令で妥協が成立するが、1685年に王令が廃止されてカルバン派のユグノーは大量亡命し、フランスはカトリック教国に留まる）、フロンドの乱（1648～53年のフランスの内戦。その結果リシュリューが意図した効率よい官僚制が実現）、ナポレオンの登場（フランス革命が実現を目指した「自国民中心主義 nationalism」がナポレオンのもとで完成）、スペインで特異な地位を占めるカタルニャ人の存在（その切っ掛けはフランス革命とナポレオンの侵略）、ボルシェビキ党の登場（ソ連邦を登場させた彼らは、フランス革命をモデルにしていた）などは、宗教改革やフランス革命に由来する騒乱の結果であった。いずれの騒乱も「世界革命 World Revolution」の発端<sup>はつたん</sup>になるはずであった。しかし開始から間もなく騒乱にブレーキが掛かって、当初に意図された「世界革命」は実現されることがなく、変革は一国のなかに収まり、その国だけが「世界革命」の影響を受けることになった。この一国単位の革命がなければ、ドイツ・イギリス・フランス・ロシアは近代化できなかつたはずである。イギリスはアイルランドやスコットランドと一緒にすることはなかつただろうし、フランスがアルザス地方やプロバンス地方を併合することもなかつたはずである。また正教会の国ロシアにカトリック教徒やプロテスタントも住んでいたはずだし、ドイツには後にスイスやオランダとなる領域が含まれていたはずである。ヨーロッパでは革命で一体感を体験した地域でなければ、いかなる大国と雖もその領域を併合することは不可能であった。オーストリアがドイツに併合されたのも、かつてドイツとオーストリアは一体だったからである（1517～1866年、1914～18年）。

アルザス地方は独特で、宗教改革はドイツ人として経験しているが、フランス革命はフランス人として経験している。1517～55年（ルターの宗

教改革）と1618～54年（三十年戦争）に宗教改革を経験したアルザス人はドイツ人ということになっていたが、スイスは宗教改革が始まる前に神聖ローマ帝国から離脱しており（1499年のシュワーベン戦争の結果、皇帝がスイスから追放される）、アルザス地方のようにドイツ人として宗教改革を経験することはなかつた。三十年戦争を終結させた1648年のウエストファリア条約でアルザス地方はフランス領とされるが、1685年にナントの王令が廃止されてユグノーがフランスから追放された時も、アルザス地方のユグノーは追放されなかつた。この点でアルザス地方はフランスのなかでも特別な地域だったことになるが、他方で国歌マルセイエーズを作詞・作曲したのはアルザス人のルージュ＝ド＝リール Rouget de Lisle であり、ナポレオン軍で前衛を務めたのもアルザス人であった。さらに有名なナポレオン配下の将軍ネイ Marshal Ney は、アルザス地方の都市ザールイ Saarlouis の出身であった。

2つの「世界革命」（ドイツの宗教改革とフランス革命）を経験したアルザス地方は、ドイツの支配下にあったときは（1870～71年の普仏戦争の結果ドイツ領となる）フランス革命で生まれたフランス人意識を持ち続け、フランスの支配下にあったときは（第一次世界大戦でフランス領となる）宗教改革で生まれたドイツ人の「旧い特権 old liberties」を思い出していた。アルザス地方に伝わる有名な「小さな穴のハンス Hans im Schnokeloch」

という童謡の主人公ハンスは、まさにアルザス人そのものであった。「小さな穴のハンスは欲しいものを全部、持っている。持っているものは欲しくないもので、欲しいものは持っていない。小さい穴のハンスは欲しいものを全部、持っている」。

「世界革命」の開始時は全人類・地球全体のためにといった目標が掲げられ、自分たちが神の意志に従っているとの確信も存在していた。旧秩序との妥協を受け入れるにしても、それは止むを得ない理由があるときに限られていた。しかし、やがて自分たちに地理的な制約が存在することを認めざるを得なくなってくる。結局は現実を直視し、それを受け入れるしか

ぬいことに気づかされるのである。渋々現実を受け入れざるを得ないこと、国内事情を考慮に入れざるを得ないことを最後に認めることになるのである。

ロシア革命がその良い例であった。国際的な視野で始まった革命が、のちにその視野を国内に限定して行くことになる。フランス革命も、1815年に1792年の国境線を受け入れることを認めているし（ウィーン会議）、イギリスが「光栄ある孤立 splendid isolation」政策を放棄してヨーロッパ大陸の政治に関わらざるを得なくなったことは、ウィリアム3世の即位で明らかであった（ウィリアム3世はオランダの総督で、チャールズ1世の孫にしてジェームズ2世の娘アン<sup>1</sup>の夫であったが、ジェームズ2世と対立する議会の招聘を受けてイギリス国王となる）。世界の海を支配下に置く代わりにオランダを守るため、フランスとの戦いを引き受けざるを得なくなっていた（プロテスタント王としてイギリス国王になり、またオランダを支援していたにも拘らず、カトリック教徒の神聖ローマ皇帝レオポルト1世と同盟を結んでいた）。のちにイギリス議会はハノーファー家から国王を受け入れたが（ジェームズ1世の孫娘のソフィアがウィリアム3世とその妃アン<sup>2</sup>の死後イギリス王位を継いだため、ソフィアの死後はハノーファー選帝侯とソフィアの間生まれたジョージ1世がイギリス王位に就く）、ドイツでハノーファー選帝侯は絶対君主であった。つまり1688年の名誉革命でイギリスの「准貴族 gentry」（議会を支配した階層）は、ヨーロッパ大陸に関わらざるを得なくなったのである。これがウィリアム3世の即位に「絶対に必要な条件 *conditio sine qua non*」であった。こうしてイギリス革命も終わりを迎えることになったのである。ドイツでも1555年の「アウクスブルクの宗教和議 Augsburger Religionsfriede」でドイツ全体の教会を一気に改革する試みは放棄され、教会改革を実行するか否かは「領邦君主」の判断に任されることになった。

革命当初の騒ぎと混乱を伴った熱狂のあと、屈辱の時期が訪れてくることになる。隣国が革命を導入する気になるのは、この屈辱の時期である。なぜなら、その時こそ隣国が自らの過去と決別できる時だからである。

どんな革命も自らの過去と決別するために多大の努力を払うことになるが、隣国にはその用意が無いことに気づいていない。人類が世界中で一斉に革命を起こすことなど不可能である。このことにも革命家は気づいていない。さらに革命は、特定の階級が起こすことにも気づいていない。

たしかに同じ階級は世界的規模で利害関係を共有している。主権者（ドイツでは「領邦君主」）や貴族（イギリスでは「准貴族」）、また資本家や労働者は、どの国にも存在する階級である。マルクスが間違っていたのは、資本家と労働者にしか注目しなかったことであった。他にも地主階級や主権者（支配者）が居て、彼らは資本家や労働者と対立していた。ファシズムがマルクス主義に対抗できたのは、資本家でも労働者でもない者が存在していることに気づいたからであった。主権者・裁判官・政治家・軍士官・水夫・農民などは、労働者や資本家が登場してくる以前に既に教皇や国王と戦っていた。

## 第2節 政治の世界で「汝の敵を愛せよ」

（キリストの教え）が意味すること

第1節で指摘したように、キリスト教の登場によってポリュビオスの政体循環論は通用しなくなった。違った政体が共存するようになったからである。マルクスもこのことに気づくべきであった。現在の政体間の対立にも、キリスト教的な要素が原因している。政治の世界で「汝の敵を愛せよ」とは、違う政体の国を容認せよということである。いかなる政体も国民の支持があるからこそ存続できる。特定の政体を最善と考える原理主義者は違った政体を容認することに反対するだろうし、逆に経験だけを重視する政治学者はその国特有の事情（歴史・気候・環境など）だけに注目して、政体の違いなどは問題にしない。

私に言わせれば、いずれも極論に過ぎる。どちらの考え方も人間を無力な個人にして仕舞うからである。特定の政体を最善と考える原理主義者は、

様々な政体が辿ってきた歴史を無視して継続性の大切さに注意を払おうとしない。また逆にイギリスやアンドラ（フランスとスペインの国境に挟まれたピレネー山中の侯国。アンドラ侯国の独特な政体については、第11章：第5節を参照）の特殊性を強調する経験主義者は、人類の世界的な結びつきを切断してしまうことになる。人間は過去との繋がりを絶たれるべきではないし、理想の実現は一国とか一地域に限定されるべきではない。我々は継続性を破壊する試みにも、また世界的な繋がりを拒否する考え方にも反対である。どの革命も起きた時代は違っているし、使用した手段も違っているが、目指した目的は同じであった。まず個人が無力化される危機的な事態を何とかしようとしていた。また人間を奴隷にするような秩序を何とかしようとしていた。人間を「神のように大切に考えていた thought of man as the image of God」からである。ボルシェビキ党が無神論の熱心な提唱者になったのは、自分たちを神と勘違いしていたからであった。革命の闘士たちはニーチェの次の言葉に賛成したはずである。「もし神々がいるのなら、どうしてわたしは、自分が神とならないことに、耐えられようか」（ニーチェ『ツァラストラはこう言った』上、岩波文庫、142ページ）。

どの革命も、人間の「神の如き高貴な側面 divine nature」と「動物の如き下賤な側面 bestial nature」の対立に悩まされていた。そこで特定の階層にその解決策を任せることにしたのである。つまりドイツ革命は「領邦君主 Landesherr」、イギリス革命は「准貴族」、フランス革命は「中産階級 bourgeois」、ロシア革命はプロレタリアートである。どの階層にも過去に対する絶望と未来に対する希望があって、それが切っ掛けで革命が開始されていた。使命を負った階層が国民の支持を頼りに、目の前の軽蔑すべき「けだもの cattle」を排除するのである。ザクセン侯国の修道院、イギリスの聖ジェームズ宮殿（王室の政務場所）、ルイ16世のベルサイユ宮殿、ザンクト＝ペテルブルクの宮殿（冬宮）は、そんな軽蔑すべき「けだもの」の住家であった。

そんな「けだもの」をマルクスは「資本家」と呼び、ロベスピエールは

「貴族」、ジョン＝ピムは「専制君主」、ルターは「反キリスト」とか「バビロンの娼婦」と呼んだ。またナチ党はプロレタリアートを「下等人間 Untermensch」と呼んでいた。革命の闘士たちは新しい人種を生み出す必要があったが、その名前は情熱を呼び起こすものでなければならなかった。フランスの新しい「主人公 sovereign」は自立した「国民 citizen」となり、イギリスの新しい「主人公」は下院を支配する「貴族 gentleman」となった。また1515年にマキャベリが『君主論 The Prince』で魔物のように描いていた「君主」は、1517年にルターのおかげで立派な「領邦君主」になることができた。現在では「単なる労働者 worker」も、階級なき社会の先駆者プロレタリアートとなっている。

プロパガンダ用の名称	通称	反対勢力が使った蔑称
?	ローマ教皇	反キリスト
主権者	領邦君主	独裁者
ジェントルマン	貴族	大貴族・トーリー党
国民	中産階級	資本家
プロレタリアート	労働者	下等人間?

この一覧表はまだ完成していない。まずローマ教皇の「プロパガンダ用の名称」が空欄のままである。またプロレタリアートに対して「反対勢力が使った蔑称」も確定していない。なぜなら、それを使っているのは社会主義革命を実現した勢力ではなくて、社会主義革命以前の秩序を守ろうとしている勢力、つまり反革命勢力だからである。一覧表の最初（ローマ教皇のプロパガンダ用の名称）と最後（下等人間）は、第1部の「レーニンからルターへ：世俗世界の革命」（第4章：ロシア革命～第7章：ドイツ革命）では不明のままということになる。反共を掲げるムッソリーニの黒シャツ隊やヒトラーの突撃隊（褐色のシャツを着用）、アイルランドの青シャツ隊（反共とカトリック的原則を唱える）やアメリカのナチ党（銀色のシャツを着用）がなぜ登場してきたのか、またカトリック教会がなぜ未だにヨーロッパとアメリカに存在しているのかが説明できていない。彼らは大衆の支持を得

であり、また大衆に対する影響力を行使して、大衆を敵と味方に分断して対立を煽っている。

アル＝スミス Al Smith がアメリカの大統領になれなかったのは（1932年の大統領選で民主党候補の指名をローズベルト F.D.Roosevelt と争うが敗れる）、彼がカトリック教徒だったからであった。またイタリアでムッソリーニが影響力を発揮できるようになったのは、彼がローマ教皇と協力関係を築いたからであった。カトリック教会との関係は、不利に働くこともあれば有利に働くこともある。ファシズムとローマ教皇はイタリアのものである。すでにイギリスとドイツについては詳しく説明してきたが、ファシズムとローマ教皇について説明するには、イタリアについて考えてみる必要がある。

そのことは、つぎの第2部「ローマ帝国からアメリカまで：教皇革命」（第9章：帝国なき皇帝～第15章：アメリカ革命）で詳しく論じるつもりだが、その考察は既に論じてきた近代の革命を理解する上でも役に立つはずである。なぜなら、どの革命も他の革命と共通点を有しており、また同時に共存することで相互に影響を与え合っているからである。それがヨーロッパ世界の特徴であった。

### 第3節 梯形（雁行）編隊で行進

すでに考察してきたことから、政体の循環はまず小さな国から始まり、ついで大きな国に移って行ったということが判る。ドイツは勿論のこと、イギリスでも宗教改革（ピューリタン革命）が起きた時のクロムエルの共和国は、小さな領域しか支配下に置いていなかった（イングランドのみ。のちにスコットランドとアイルランドを支配下に収める）。ついで革命が起きたフランスは、イギリス（イングランド+アイルランド+スコットランド）より大きな領域を支配下に置いていた。ロシアに至っては国土の広さを持って余していた程で、革命当時のフランスの国土の40倍、人口は6倍あった。

1517年 ルターの宗教改革が起きた当時のザクセン侯国は、アメリカで最も小さいロードアイランド州、あるいはイギリスのヨークシャー州（イギリス最大の州）ほどの広さしかなく、その人口は50万人に過ぎなかった。

1649年 イギリス共和国（イングランド）の人口は800万人。

1789年 ベルギーとラインラント（カエサル時代にガリア地方に属していた）を含めたフランス（戦間期のフランスより大きい）の人口は3200万人。

1917年 ロシアはフランスの40倍の国土で、1億5000万人が住んでいる。

宗教改革が始まったばかりのドイツは混乱していた。宗教改革が騎士領・農村・都市ごとに、バラに実施されていたからである。そんな状況下で1523年にフッテン Ulrich von Hutten とジッキンゲン Franz von Sickingen による騎士戦争が始まり、1525年には農民戦争が勃発した。そんな混乱状況を收拾したのがルター派の「領邦君主」たちであった。

1649年にイギリスの貴族が戦っていた敵は、目に見えない教会と効率よい官僚機構によって改革を実現したドイツの「領邦君主」たち（彼らはマキャベッリの君主像と真逆の君主たちであった）の敵より広い領域を支配下に置いていた。「長老派 Presbyterian」の貴族は、長老派が影響下に置いた領域の広さに対応できず（スコットランドの「長老派」を組織・動員するのに失敗）、「長老派」の貴族はクロムエルに敗北して追放されることになった（教会を支配下に置いた下院によってイングランドから排除される）。フランスの革命政権は革命を守るためにフランスの大国としての地位を維持せざるを得ず、そこで地方分権派を弾圧・排除して中央集権化を進めることにした。ロシアでも社会革命党は広大なロシアの1つに纏めることに失敗して（自分たちがロシア人であることに拘りすぎた）、簡単にボルシェビキ党に敗北することになった。

このように革命は小さな領域から始まって、しだいに大きな領域に広

述べていった。これが政体循環の現実である。ポリュビオスが言うように論理的・機械的に循環する訳ではない。4つの政体が繰り返し現れることもない。どの革命も以前に起こった革命を乗り越えて、さらに先に進むようにするからである。

ポリュビオスの政体循環論によれば、異教時代の政体循環は同じ国のなかで行われていた。ところがキリスト教時代になると、違った政体が共存することでお互いに影響を与え合うことになる。前の革命が後の革命に影響を与えるのである。こ400年間に起きた革命（ドイツの宗教改革・イギリスのピューリタン革命と名誉革命・フランス革命・ロシア革命）について言えば、前の革命が後の革命の混沌化を防ぎ、後の革命が前の革命を乗り越えるよう促してきた。

政体循環は機械的に起きる訳でもないし、それが無意味に繰り返される訳でもない。後の革命は、前の革命を常に念頭に置くことになるからである。ヨーロッパで起きた4つの革命は、軍隊で言うところの「梯形（雁行）編隊 echelon formation」で行進していたのである（それぞれが斜め後方に並ぶので、後方から前方の全員がよく見える）。

マルクスによれば革命は1つの国で起きるのであり、従って「梯形（雁行）編隊」は無いことになる。まずフランスの貴族がフランスの王政を倒し、つぎに同じフランスの資本家が貴族の支配体制を崩壊させ、さらに同じフランスの労働者が資本家の支配を排除するのである。ドイツについて言えば、まず「領邦君主」がユンカー（貴族）によって排除され、ついでユンカーはドイツの中産階級によって排除され、さらに中産階級は社会主義者によって排除されることになるのである。しかし、そんなことが有り得るだろうか。ドイツの「領邦君主」は、ドイツ人に代わってイタリアの教皇を排除しようとしたのだし、イギリス人が革命を起こしたのは、専制君主を擁立しようとするヨーロッパ大陸からの試みを排除するためであった。またフランス人が革命を起こしたのは、イギリスの名誉革命（国王に対するイギリス貴族の勝利）に影響されて「フランス貴族 gentilhomme」が傲

慢になっていたからであった（イギリスの貴族と同じように世界帝国の建設を試みるが、七年戦争に敗れて世界帝国はイギリス貴族のものになる）。さらにロシア革命は、ヨーロッパの資本家をロシアから排除するためであった。

このように、どの国の革命も視野は一国に限定されていない。マルクスが言うような正・反・合の単純な反応（これを彼は弁証法と呼んだ）では説明できないのである。ポリュビオスや社会主義者が主張する政体循環論は、政体の共存という事実を見逃している。イギリスの「准貴族」はドイツの「領邦君主」を真似て主権者になろうとした国王を追放したが、それでもカトリック教会を受け入れることは無かった。またロシア人は民主政を放棄したが、それでもフランス革命のことを忘れることは無かった。最後にロシア人も一国社会主義を受け入れることになったし、イギリス人も宗教改革の成果は放棄しなかった。またフランス人も議会制を止めることは無かった。イギリスの「長老派」貴族やフランスのナポレオン、またロシアのスターリンが伝統から一時的に逸脱することはあったが、結局は伝統に戻っている。

進歩が可能になるのは梯子の段が全て揃っていて、自分の位置が簡単に判る時だけである。森の中で出発点が判らなくなれば、同じ所をグルグル廻るしか無くなる。そして最後に辿りつくのは沼地である。これが異教徒の運命であった。彼らの文明は同じことの繰り返しに過ぎなかった。シュペングラー Oswald Spenglerによれば、どの文明にも春夏秋冬の四季があり、それが繰り返されるとのことである。敵対グループに対する対処法として敵対グループを殺して食べることしか知らなかった原始人は、それ故に敵対グループとの共存は有り得ず、同じことを繰り返すしか無かった。南米の革命が無意味だったのは、同じことを繰り返していたからである（彼らに同情的であったジョセフ＝コンラッド Joseph Conradでさえ、その作品『ノストロモ Nostromo』で南米の革命を無意味なものとしている）。この種の革命が無意味にしか思えないのは、そこに進歩の可能性が無いからである。我々が考察の対象に選んだ偉大な革命は、同じことの繰り返しに過ぎない革命と

は区別されるべきである。偉大な革命は、人類共通の経験や希望に貢献するような革命である。全人類的な展望を持つ革命である。それぞれが別の枝葉ではあっても、人類という共通の幹から生えてきた枝葉なのである。

時間的には前後していても、偉大な革命が同じ世界に属しているのは、同じ幹から枝分かれしているからである。どの国も革命を起こすと世界から孤立したように思えるが、他の国は革命の種を蒔くことで革命の準備をするか、その後に続く革命の準備をすることで、その国と繋がりを持つことになる。

「革命 revolution」という言葉は、もともと「回転する revolve」という言葉からきている。しかし偉大な革命は、同じ場所をグルグル廻っている訳ではない。偉大な革命は新しい道を切り開き、新しい生活様式を生み出す。我々が「革命」と呼んでいるのは、そんな革命のことである。ディアス Porfilio Diaz に代表されるメキシコ革命は、繰り返し起こっているが何も生み出して<sup>だ</sup>いない。しかしドイツの宗教改革やイギリスの名誉革命は、勃発から 200 年後に立派な成果を生み出している。イギリスの大ピット William Pitt, the Elder・グラッドストーン William Gladstone・アメリカのリンカン・ドイツのバッハやゲーテの出現は、革命が生み出した新しい精神の産物である。

偉大な革命が持つ本当の意味を理解するためには、偉大な革命に相応しい基準で評価する必要がある。偉大な革命は、新聞記者や警察官が関心を示す類の出来事ではないし、センセーショナリズムで世間を驚かせる類の出来事でもない。偉大な革命は世界のあり方を変えてしまうものである。「進化 evolution」は「革命 revolution」があつて初めて可能になる。ふつう「進化」と「革命」は別物だとされているが、それは間違っている。私は革命の礼賛者ではない。革命を研究しているのは、単に革命が重要だと考えているからである。革命が何か新しいことを創造するから重要だと考えているだけである。神がこの世を創造したように、革命は何かを創造している。悪魔による騒々しい破壊のあとに、神による再建の静かな音が続くのであ

る。破壊も創造も無かったと考えるのは妄想に過ぎない。

19 世紀に一世を風靡した進化論のおかげで、我々は「進化」と「革命」が別物だと考えるようになった。しかし、ダーウィンは決して進化を目に見えない連続的な変化だとは考えていなかった (Edwin Tenney Brewster, *Creation: A History of Non-evolutionary Theories*, Indianapolis, 1927)。ダーウィンは「進化」も一種の創造だと考えていた。私も「進化」は創造の一種だと考えている。

「進化」という名の創造は絶え間なく行われており、また「進化」によって創造された種の再生も絶え間なく行われているが、人間の持つ能力を解き放つ創造的な行為は革命だけである。革命によって人類という幹から生じた枝葉は再生されるが(もっと正確に言えば枝葉は接木されるのであり、接木されることで再生と同時に変化する)、それを可能にするのは国民と呼ばれる培養器である。

革命で変化するのは人類全体ではなく、革命の培養器たる国民である。なぜなら、革命のあり方は国民ごとに違っているからである。いかなる国民も、革命なしに登場してきた例はない。しかもホブズが言っていることだが、「あるコモンウェルス(国)のはじまりが、良心において正当化されることは、めったにない」(ホブズ『リヴァイヤサン』岩波文庫, 164 ページ)。また教皇ピウス 2 世も、王国の登場が合法的な手段や正当な根拠に基づいて実現したことはなく、常に征服によって実現していたと言っていた(オスマントルコのメフメト 2 世がコンスタンチノーブルを征服したとき、キリスト教に改宗するなら暴力で征服したことも正当と認めようという趣旨の手紙をメフメト 2 世に送っている)。同じような内容の発言は幾らでも挙げることが可能で、思想家たちは革命が暴力的なものであり、非合法であったと考えていた。

革命によって新しいタイプの人間が登場してきた。ドイツの宗教改革では新しいタイプの父親が登場してきたし、イギリスの名誉革命では新しいタイプの貴族(ジェントルマン)、フランス革命では新しいタイプの考え方(エ

（ブリ）をもつフランス人が登場してきた。またロシア革命では、機械の部品と化した人間が登場してきた。すべての革命は特定の集団に対してではなく、全人類に対してメッセージを発していたが、そのとき君主制・貴族制・民主制・独裁制の違いは関係なかった。全人類に対して同じように情熱的なメッセージを発していたのである。1917年に全人類に対してロシア革命が発したメッセージは、すべてのキリスト教徒に向けて発せられたルター派のメッセージにも負けず劣らず普遍的な内容であった。

#### 第4節 公的秩序すら超えたもの vs. 公的なもの

革命は戦争・火事・地震と同じように「公的秩序すら超えた open」出来事である。「公的秩序すら超えた」革命は、「公的 public」とか「私的 private」といった違いを超えた出来事なのである。法律家が私法と公法を混同することは許されないし、政治家や新聞記者が私的な問題と公的な問題を混同することも許されない。私的な生活と公的な生活は、それぞれ別の世界の出来事である。ところが「公的秩序すら超えた」革命は、公・私の問題を超えた出来事なのである。

革命が「公的秩序すら超えた」出来事であったからこそ、革命は起こり得たのである。「果てしない空 God's open sky」（人間が抱く無限の理想）と「我らが母なる大地 our mother earth」（人間を縛る現実の世界）の間に発生する革命ほど「人間にとって大切なもの reality」はない。私的な生活を破壊し、公的な法制度を無視する革命の無法さに我々は戦慄するが、この偉大な出来事を否定的な言葉で片付けてしまうべきでない。この「公的秩序すら超えた」出来事を適切に表現する言葉を、我々は見つけ出さねばならない。この出来事を適切に表現する言葉を持てば、我々の世界はもっと広がることになる（物事は名前を付けることで初めて現実として認識可能になる）。何が起こったかを説明するだけでは何も変わらない。

革命は「公的秩序 public law, public order」を変え、「公共精神 public mind」

のあり方を変え、また「世論 public mind」を変える。個人の習慣を変え、マナーのあり方を変え、考え方を変える。つまり革命は「公的秩序」や個人の信念を超えたものなのである。誰もが「地獄の業火 hellfire」のように嫌っているのが革命であり、たしかに革命は「地獄の業火」のような出来事である。しかし同時に革命は、「天国 heaven」のような出来事でもある。革命を表現する言葉として適切なのは、この「地獄 hell」と「天国」であろう。「地獄」も「天国」も情熱を秘めた我々の心の中に存在する。19世紀は個人主義の時代であった。心も個人だけのものであって、「地獄」と「天国」が我々の「心 heart」の中に存在するという事実も、まるで他人に見せることのないアルバムのように秘すべきものだと考えられていた。

しかし「人間の心 man's heart」こそ「宇宙の中心 center of universe」であり、「世界の心 world-heart」でもある。「人の子 son of man」キリストは「宇宙の中心」であった。「宇宙の中心」である「キリストの心がキリスト自身になすべきことを指示した時、彼は世界を支配することになった when his heart governs him, he governs the world」。あるいは、こんな譬で説明することもできる。相思相愛の男女は、教会で結婚式を挙げるか事実婚にするかで大騒ぎを起こすが、実際には両者の間に何の違いもない。夫と妻は公的な場、つまり教会と国家が絡む儀式を執り行うことで結婚することもできれば、私的な形で結婚することもできる。そしてどのような形で結婚するにしても、関わってくるのは「肉体と心 body and soul」である。「肉体」は子供を生むという新しい使命を負うことになり、「心」は婚姻という新しい生き方を受け入れなければならなくなる。その結果、何か新しいことが始まるのである。「肉体と心」は一旦、解体されて新しく作り直される。婚姻によって結ばれた男女こそが、新しい人類や国民の基礎となる。如何なる形を取るにせよ、婚姻は人類の核となる。国民を5000万とか1億といった数字で判断すべきではない。数字は単なる数字に過ぎない。婚姻によって、国民の在り方は絶えず変化している。事実婚であるとか公的な場で結婚式を挙げるといったことは、単なる形式の問題に過ぎない。大切なのは若い男

女が「その意味を理解して under celestial ordination」結婚しているのか、それとも「形式に囚われて by arbitrary power」結婚しているのかといった違いだけである。多くの婚姻は偶然とか気まぐれで行われており、新しく何かを生み出すようなものになっていない。

政治の在り方も婚姻と同じである。ある者は支配し、ある者は投票するが、やはり「形式に囚われて on arbitrary impulse」いる者が大部分である。「ルール standards of society」の再生は「形式に囚われて」いない者に任されている。革命とは、「本当の意味を理解している勢力の介入 inbreak of celestial powers」によって「ルール」を再生することである。いずれにせよ、「地獄」も「天国」も覚悟しなければならない。大きく物事を変えようとする、当然のことながら大きなリスクを覚悟しなければならなくなる。革命は社会の枠組みを無視して、外から社会に介入してくる。変革の可能性が大きければ大き



世俗化したキリスト像：第一次世界大戦の後、十字架を斧で切り倒したキリスト  
中世のキリスト像：慈悲・知恵・謙虚を象徴する天使がキリストの手首と足首に釘を打ち付けている

いほど革命は起こし易くなる。法制度に守られているくせに我々は、ことさら法制度を無視するよう努力する。まるで息子のために嫁探しをする母親のようなものである（どちらも無駄な努力）。そこで突然、法制度が目の前に現れると（法の執行が現実問題になると）びっくり仰天することになる。しかし法制度が「統治権 power, sovereignty」を生み出す訳ではない。「統治権」が法制度を生み出すのである。ルターが『九十五カ条の提題』を公表し、ピューリタン革命の「急進派 Roundheads」が議会軍を創設したのも、またフランス革命でまずバスチーユ牢獄が襲撃されたのも、その全ては新しい「統治権」を目に見える形で登場させ、古い「統治権」と交渉させるためであった。

革命とは、このように新しい「統治権」が旧秩序を創った古い「統治権」の担当者に対して、目に見える形で登場してくることなのである。古い「統治権」の担当者が新しい「統治権」の登場を認めて交渉を開始したときに初めて平和の実現が可能になり、内戦が終息することになる。ただし、新しい「統治権」が広く認められるには、30～40年という長い時間が必要になってくる。

1815年にルイ18世がフランスに帰国したからといって、何かが変わった訳ではなかった。フランス人が1人増えただけだと彼が言ったとき（フランス革命の成果である個人の「平等」を彼は認めた）、革命は終わったのである。また神聖ローマ皇帝カール5世が宗教改革の問題解決を「領邦君主」たちに任せるとき、あるいはイギリス国王が教会に対する支配権を議会に譲ったとき、革命は終わったのである。革命当初、反逆罪だとされたことが、古い「統治権」によって合法と認められたのである。

革命が始まったとき、まず「大恐怖 Grande Peur」と呼ばれる時期を迎える。1789年の夏にフランス人を襲った不安な状況をフランス人はこう呼んだが、ドイツでも似たような現象が1930年に起きていた。ヒトラーが政権を取る3年前、すでに危機の到来が感じられていた。それを感じていたのは、危機に晒されていた「知識人たち educated class」であった。また

宗教改革のとき、ドイツ人は気象現象に異変の兆候を見ていた。農民戦争が始まる2年前に、ルターは次のようなことを書いていた。「革命と戦争の勃発が自然現象から見て取れた。ドイツでは、恐ろしい戦争か最後の審判が始まると私は信じている」。

「大恐怖」は中世にも存在していた。1227年にフリードリヒ2世は、つぎのようなことを叫んでいた。「ついに我々に最後の時が訪れようとしている。愛の力が失われようとしている。人間同士がいがみ合うようになり、帝国同士が脅迫し合うようになる。疫病と飢餓が生きている者を恐れさせ、世界を統治するはずの愛の力が失われようとしている」。

このフリードリヒ2世の叫びから、「大恐怖」と統治機能の消滅が強く結びついていることが判る。世界を統治していた愛の力が失われると、革命が起きる。革命が既存の秩序を破壊すると言われるが、それは間違っている。革命が起きるのは、旧い秩序が機能しなくなり、旧い秩序の受益者ですら旧い秩序を信じなくなった時なのである。ランケ Leopold von Ranke は、宗教改革について次のようなことを書いていた。「ドイツ国家を構成していた諸権威が相互に、またそれ自身のあいだで不和をきたすやいなや、国家を支えている根源的勢力が台頭してきた。地下から電光がひらめき、政治生活の潮流は、これまでとってきた進路からはずれてしまった。地底には長いあいだどよめきが聞えていたが、その嵐は上層部にむかって突進し、すべてを完全に転覆するかのように思われた」(渡辺茂訳『宗教改革時代のドイツ史』II, 191ページ, 中公クラシックス W85, 2015)。

長年の闘いの成果である法制度も、それを生かしていた「精神 spirit」が失われると機能しなくなる。ゲーテの「かくし娘」に描かれている通りである。「急激な革命が今にもこの国に起こりそうになっているわ。大同団結して偉大な生活を営んだ人々が、相互に愛の力で、日々新たなる統一を達成しようと抱き合うこともなくなったのです。皆逃げてしまって、一人は冷やかに自分の殻にひっこもっています。敵意もって闘っているものたちを、一つの目的のために統一した祖先の強力な精神はどこへ行ってし

まったのやら。この偉大な民族の指導者、陛下、そして父として姿を見せたその精神は。ああ、それはもうかくれたのだわ。残っているのは、空しい努力で、失ったものを手中におさめていると妄想している亡霊でしかないのだわ」(潮出版『ゲーテ全集』第5巻「かくし娘」, 243ページ)。

「天と地 heaven and earth」(世界)を支配していた愛の力は、いつ失われても可笑しくないのである。その流れはときに涸れ果てるが、「進化」のような中途半端な方法でそれを防ぐことは不可能である。自然界における旱魃に我々は無力だが、政治の世界でも愛の流れの枯渇に我々は無力である。それを解決できるのは、「無限の愛 illimitable heart」だけである。「無限の愛」が生み出す革命だけが「天と地 heaven and earth」(世界)を支配する力を取り戻すことができる。ダンテは『神曲』の最後で、「太陽やもろの星をうごかす愛に」(平川祐弘訳『神曲』天国編・第33歌・144行, 河出書房新社, 373ページ)について書いているが、近代の「天と地」を支配する共通の法則(それは人間の愛の力を生み出し、天空の運動を司る神の愛の産物でもある)という考え方を、すでにダンテは『神曲』で先取りしていたのである。

キリストのお陰で我々は愛の力を得ることができたが、その結果、フリードリヒ2世とダンテは「天と地」(天体と人体)が共通の法則によって支配されていることを発見した。さらに現代の物理学は、素粒子と天体が同じ法則に従って動いている事実を発見している(ボーア Niels Bohrの原子・分子の構造模型は、太陽系の構造と同じ)。

革命とは、人間がその愛の力によって社会の秩序を正すことを意味するが、それが実現するためには、革命が「公的秩序さえ超えた」ものとして「果てしない空 open sky」(無限の可能性)を目指して展開される必要がある。「神の王国 Kingdom of God」(理想郷)を地上に実現すべく、「神の視点 infinite」に立って「この世界 finite」を正すのである。

戦争や革命を経て登場してきた「政治秩序 constitution」や「公的秩序 public law」は、「私的な楽しみ private pleasure」を超えて登場してきたものでなければ機能しない。「政治秩序 political order」は、「最大多数の最大幸

福 greatest happiness of the greatest number」のために存在しているのではないからである。「最大多数の最大幸福」という考え方は、天使の善行や悪魔の悪行を超えたところで「未来を切り開く者 pioneer」が存在することを知らない「小役人ども public-minded privateers」の戯言に過ぎない。

革命とは完全な秩序崩壊の恐怖を乗り越えて、大きな勇気と大きな愛で新しい秩序形成を目指す努力のことなのである。

### 第5節 「国民性」とは何か

政治と宗教はよく混同されるが、政治は「公的なもの public」であり、宗教は「公的秩序すら超えたもの open」である。人間が生きていく上で宗教も「公的秩序 public law」も必要不可欠であり、何度も両者を統合することが試みられ、失敗してきた。「公的秩序」は「従うこと obedience」を国民に要求し、宗教は「崇拜すること worship」を国民に要求する。国民は合法的に選ばれた支配者の言うことに従うが、崇拜するのは「混乱から抜け出す方法 new path out of chaos」を示してくれる指導者だけである。

イギリスの「准貴族 gentry」、ドイツの「領邦君主 Landesherr」や大学教授、フランスの「作家 écrivains」、ロシアのボルシェビキ党員たちは、いわば「神の如き存在 demigods」であった。「神の如き存在」として、各国で丸で「宗教の如く peculiar religion」崇拜されていた。

こうした「神の如き存在 supermen」が「普通の人間 natural man」に「独特な性格 definite character」（国民性）を付与してきたのである。しかし「国民性 nation's character」に関する議論は、その多くが残念ながら間違っている。と言うのも、「国民性」がまるで石のように変わることがないと考えているからである。その好例がスペインの外交官であったマダリアガ Salvador de Madariaga の『イギリス人・フランス人・スペイン人 Englishmen, Frenchmen, Spaniards :An Essay in Comparative Psychology』（Oxford UP, 1929. スペイン語の原典は1926年刊）である。そんな考え方に対して見事に反論してい

るのが、同じスペイン人であったオルテガ = イ = ガセット Ortega y Gasset の『大衆の反逆』（筑摩学芸文庫 1996, 中公クラシックス 2002）であった。「国民性」が不変のものだと決めつけている者は、生きた人間がその枠に収まり切らないことを知った時、大いに落胆するはずである。フランス人は民主的でドイツ人はお上に従順、またイギリス人は貴族が大好きなどと決めつけて立派な心理学者のつもりでいる者が多いようだが、それは間違っている。ある国に偶々生まれたことで、その人間に特定の「国民性」が宿命づけられるなどといったことがある訳がない。

人間は無限の可能性を秘めており、我々は如何様にも変わり得る。我々が特定の「国民性」を自分のものとして選択するのは、「その国民と感じること this feeling」に「感謝の気持ちを抱き feeling gratitude」、それに応えたいと思うからである。「感謝の気持ちで考えてみようと思う Thinking and thanking belong together」のである。感謝の気持ちを持つことが理に合っているとせば、我々は年長者の説得にも応じる。旧いやり方が通用しないと判った時、不安に怯えながらも我々は新しいやり方を提案する者を信じて、それに懸ける。それが正しい選択だと判った時、新しいやり方を提案する者は革命の指導者となるのである。「彼らは全部のドアをノックしてみるが、どのドアも開かない。しかし何世紀ものあいだ探し続けると、1つのドアが突然、開くことになる」（プルースト『失われた時を求めて』岩波文庫<sup>13</sup>「見出された時」I, 430ページ）のである。こうして不安に怯える国民に代わって、創造主との新しい契約を締結する革命家が新しい信仰と新しい秩序を創造することになる。しかし新しく創造される秩序は、まだ機能するか否かが証明されていない。不安に怯える国民にそれが日常的に受け入れられるには、長い時間が必要となる。国民の将来に対する不安が取り除かれて新しい秩序が機能するようになると、革命家は国民のあり方を変えてしまう。革命家とその仲間が新しい統治階級となり、統治の理念を国民に説明する役割を果たすことになる。

領邦君主・貴族・大学教授・大臣たちは、ドイツ人やイギリス人に新し

い理念を受け入れるよう説得することになるが、その言葉は各国に特有の意味を持つ言葉となり、その国の言葉でしか新しい理念は表現できない。

1649年のドイツ語は、宗教改革・讚美歌・ルターが訳した聖書などに由来する言葉で一杯であり、1688年のイギリスにおける名誉革命に対しては冷淡で、クロムエルやウイリアム3世に対してイギリス人のように反応することはない。現在に至るまでイギリスの政治用語はドイツ人の採用する所とはなっておらず、「騎士 cavalier」とか「封建制 feudal」などといったフランス語起源の言葉と違ってドイツの伝統とは無縁である。イギリスの名誉革命はドイツで「宗教改革」の熱狂がまだ冷めやらない時に起きており、ドイツ人がイギリスの名誉革命に反応することはなかった。イギリスのピューリタン革命に影響されていたのは、フランスのフロンドの乱であった。

その同じフランス人がロシア革命に対して冷淡であった。ポアンカレ Raymond Poincaré とスターリンが同時代人であることを知っている人はまず居ないし、クレマンソーとレーニンが同時代人であることを知っている人もまず居ない。彼らは丸で異星人のように違った星に住んでいたと考えられている。ここに「宗教の如き政治信条 political religion, religious politics」の秘密が隠されていると考えるべきである。

ヨーロッパ人なら、誰もが自国の革命が生み出した「教会の如き政治制度 church-like institutions」の世話になっているはずである。「固い信念 faith」・「将来への希望 hope」・「人間愛 love」をそこで教わっているはずである。ヨーロッパ人が使う言葉はキリスト教に基づいたものであり、革命を遂行した政治勢力が生み出したものである。

新しい支配階級が生み出す新しい政治用語の誕生、それが革命の意味である。その政治用語がある地域で存続し、そこで新しく生まれ変わる人々が「国民 nation」を形成するのである。つまり「国民」とは、革命の産物なのである。

それぞれの「国民」には「国民」を率いる階級が存在し、その階級は革

命の齎す恐怖と戦うなかで「国民」を鼓舞し、勝利を収めることで支配階級となって、「国民」のモデルとなるのである。ロシアのボルシェビキ党・ドイツのルター派・イギリスの「議会党 parliamentary party」・フランスの「国民党 civic party」は、「国民の代表者 raison d'être of the whole」なのである。

## 第6節 政治用語の対照表

したがって各国民の政治用語は、他の国の言葉に翻訳することは不可能である。つい最近、ヨーロッパとアメリカの政治学者が政治用語辞典を編纂したことがあった。国家・政府・国民・議会などといった言葉をイタリア語・フランス語・ドイツ語・英語で並べたものだが、これは学者が使う言葉の集大成に過ぎず、国民が日常的に使っている言葉とは別物である。たとえば英語の「国民 nation」とフランス語の「国民 nation」は、綴りとは同じでも意味は同じでない。各国民の政治用語は手形交換所で交換される手形などではなく、各国民が歴史のなかで鑄造してきた独自の金貨であり、そのままでは交換できない。その例を幾つか挙げてみよう。

ドイツ語	英語	フランス語	ロシア語（英語のママ）
kultiviert	countrified	civilisé	electrified（電化政策）
Staat	Commonwealth	nation	Soviets
jeglicher Christ	every man	chaque individu	every body（物的な肉体）
Magisters	commons	intellectuelles	Communists
Kathedr（教壇）	pulpit（説教台）	tribune（演壇）	—
Fürst	gentleman	citoyen	proletariat
hoch（高位）	old（古さ）	nouveau（新しさ）	funcioning（機能性）
hochgesinnt（高潔）	public-spirited（公共心）	grand（高貴さ）	—
allgemeines	Prinzip	public spirit	esprit

Hochwohlgeboren (高貴の生まれ)	Elite	intellectuelle	quality (質の良さ)
Der gemeine Man (卑劣漢)	the poor (貧者)	les illettrés (無学)	quantity (大量生産)
Protestant	Whig	liberal	—
Magister, Dr.	minister, member	écrivain	—
Billigkeit (公正)	common sense	bon sens	—
Pflicht (義務)	right (権利)	idée	function
Sehr geehrter Herr	Dear Sir	Cher ami	comrade
gewissenhaft	righteous	bon	efficient (効率)
Beamte(Rat)	Justice of Peace	Légion d'Honneur	—
Geist	World	nature	society

ドイツ語で「大学 Hochschule」が悪い意味で使われることはないが、英語で「教養人 high-brow」というと悪い意味になる。ドイツで子供は「高度の技術を持つ hochqualifiziert」よう勧められるが、イギリスでは「常識 common sense」を持つことが評価される。ところが個人主義の国フランスでは、「常識」ではなくて「良識 bon sens」が高く評価される。1789年にパリで出版された『理性とは何か Petit Code de la raison humaine, ou Exposition succincte de ce que la raison dicte à tous les hommes éclairer les conduits et assurer leur bonheur』(Barbeau du Bourg)には、「人間が幸せになるには、少なくとも健康・良識・良心の3つが必要である le bonheur requiert bonne santé, bon sens et bonne conscience」と書いてあるが、ここで言う「良識」は「常識 common sense」とは別物である。またルターなら、罪深い自分のことを「善き good」信者などと呼ぶことは決してないであろう。それでもルターの良心は「清純 pure」なのである。イギリスの紳士なら、何をしても「公共善 good weal」に基づかねばならないはずである。

言葉によっては、国民的な伝統とは関係なく外国から受け入れられて使われるものもある。たとえば英語の「共和国 Republic」・「革命的 revolutionary」・「国民的 national」はフランス語起源だし、「至上権

supremacy」・「主権 sovereignty」はドイツ語 (Supremat) に由来する。また「議会 parliament」・「田舎・国土 country」・「地方自治 local government」は英語に固有の言葉である。ちなみに「議会」はフランス語の「高等法院 Parlement」を英語化した言葉だが、もともとは古いドイツ語の「会話・会談 sprakka, colloquium」に由来する言葉である。ドイツ人は「議会」を馬鹿にしていたのに対して、イギリス人は「議会」に信頼を置いていた。そこで「議会」が英語として生き残ることになった。

難しいのが「国民 nation」という言葉である。どの国の政治家もこの言葉が大好きだが、国によってその意味は微妙に違っている。外交官なら、この言葉を使う時はフランス語として使っているのかロシア語として使っているのか、あるいは英語なのかドイツ語なのかを明確に示すべきであろう。

## 第7節 ヨーロッパ人とは何か

以上で考察してきたヨーロッパの革命は、人類史のなかに位置づけるべきである。つまり革命は「創造 creation」の一環と考えられるべきなのである。言い換えると、政治が展開されるのは自然環境の中であり、人間は人間を取り巻く自然環境と不可分の関係にあるということである。ただし人間は自然環境のように十万年前に創造されたまま変化しないで居るわけではない。いまでも目の前で変化し続けているのが人間である。

人間は再生され、革命によって大きく変えられる。ヨーロッパの各国民は紀元1000年に登場してきたのではない。彼らが登場してきたのは紀元1500年のことであった。ある国民は衰退し、ある国民は再編され、どの国民も変化の過程にある。彼らがまだ国民でなかったとき、彼らは何者だったのだろうか。たとえ革命がヨーロッパの各国民を創造したのではないとしても、革命は各国民に特徴的な資質の周りに縁石を築き、そこから特徴的な資質が溢れ続けているのである。

いずれにせよ、ヨーロッパの各国民が世界に貢献できるのは「国民」が革命の結果として登場してきたからであった。民政制・議会制・民主制・計画経済などを何れかの国が革命の成果として誇らしげに提示すると、他の国はそれを汲々と取り入れるのである。たとえばロシアをフランスやアメリカと較べてその酷い状態を嘆く両親は、自分の子供をロシアで育てることにならなくて良かったと神に感謝する。ローズベルト大統領がアメリカに導入したニューディール政策はロシアの五ヵ年計画と似ているが、ロシアの五ヵ年計画のように国民に大きな犠牲を強いた訳ではない。またフランス革命の成果はイギリスやドイツにも導入されたが、フランスが経験したような殺戮や戦争は経験せずに済んでいる。しかしフランス革命が無ければ、イギリスが1832年の選挙法改正を実現することは無かつたであろうし、ドイツで1848年に革命が起きることも無かつたであろう。ニューディール政策もロシア革命なしには考えられない。本書で取り上げてきた革命は、そのいずれもが常軌を逸した暴力的で残酷なものだが、それ無しに世界の再建は不可能だったのである。革命を起こした国が得をしたのか、その成果を真似た国が得をしたのかは兎も角として、1つだけ確かなことは、ときに古い文明に新しさを付加しないと、その文明は停滞するということである。

古い文明のあり方が不要になるということではない。ファシズムを称賛する者は民主制の衰退を予言するが、1830年にイギリスのリベラル派が10年以内に貴族院が消滅すると予言していたときと同じである。イギリスの貴族院は今でも健在だし、国王も健在である。フランスの民主制は1940年に健在であったし、1950年にも健在である。古い民主制のあり方に新しいあり方が付加され、古い民主制はその負荷を軽減されて再生を果たしているのである。ドイツの王制はナポレオン戦争を経験することで再生されており、イギリスの王制が1815年以降に再生を果たしていることは、よく知られた事実である。

以上で論じてきた革命は、ここ400年の間に起きているが、それをもつ

と長い時間の中で考察する必要がある。ルターからレーニンまで、つまり王制から独裁制までの政体の考察は、ほんの限られたものでしかない。さらに、それに先立つ500年間のカトリック信仰の時代を考察の対象とする必要がある。ポリビュオスの政体循環論によれば、前の政体が次の政体を生み出すことになるが、もし先行する500年間を考察の対象にすれば、考察から得られる結論はもっと確かなものになるはずである。

現在までのところ、一番の長寿組織はカトリック教会である。そしてカトリック教徒でないヨーロッパ人(=ロシア人)が最初に革命を実現した(ロシア人は東方正教徒)。現在、世界的な規模で組織と影響力を発揮しているのは、ボルシェビズムとカトリシズムだけである。ボルシェビズムが生き残れる可能性を評価するためには、カトリシズムの歴史を振り返ってみる必要がある。以上で見てきたヨーロッパ世界は「近代 Modern」に限られていた。さらに中世のヨーロッパ世界、とくにイタリアとオーストリアを考察の対象に取り上げる必要がある。さらにスペインとプロイセンも考察の対象とする必要がある。そうすれば新世界アメリカも考察の対象とすることが可能になってくる。

第1部の最後の章(第15章)でアメリカ革命を考察することになるが、アメリカ革命を考察することで、我々は現在の共産主義体制と独裁制の世界に戻ってくることになる。第1部でヨーロッパの歴史を辿った後で現在の世界に戻ってくれば、最大の課題である未来への展望を手に入れる可能性も見えて来ようというものである。

## 第9章 帝国なき皇帝

### 第1節 個別の国民か、それともヨーロッパ人か

国境があり、税関があって通貨も異なり、軍隊を持っている国家の存在は我々にとって当然のことになっているが、これまで考察の対象にしてきた革命が起きていた頃には、このことが問題視されていた。第一次世界大戦で革命的な転換を経験した現在、ヨーロッパ人を国民に分けて考えることは、もはや不可能である。オーストリアが世界地図から姿を消した今(1938年にドイツに併合される)、大国ですら永遠に存続することは不可能であることが確認された。紀元1000年頃には、現在のヨーロッパの大国は存在していなかった。最初の近代国家であるイタリアが登場してくるのは、さらに300年後のことである。イギリス・ドイツ・フランス・ロシア・スペイン・ポーランドなどが国家として登場してくるのは、やっと1500年頃になってからのことであった。

ヨーロッパに「国民 nation」が登場してきたのは、「聖職者による革命 clerical revolution」が始まってから500年も経ってからのことであった。当時のヨーロッパ人の信条は、政治の言葉ではなく宗教の言葉で語られていた。1500年以前に「ヨーロッパ人」という概念は存在せず、「野蛮状態 barbarism」が存在していただけであった。それでも当時の人間にとって大切だったことは、近代以降のヨーロッパ人が大切と考えたことと変わりはない。つまり「紛争 conflict」・「絶望 despair」・「信仰・信念 faith」・「誇り pride」・「屈辱 humiliation」・「達成感 fulfillment」の6つのキーワードが中世でも大切だったのである。我々は1000年前に登場してきた「国民」がヨーロッパ人にとって不可欠なものだったと考え勝ちだが、プロテスタントが中世に対して抱いていた反感は、必ずしも「国民」形成と結び付いていた訳ではない。それに中世は暗黒時代ではなかった。音楽の世界で対位法が発明され、近代絵画の技法が登場してきたのは中世である。また古代には

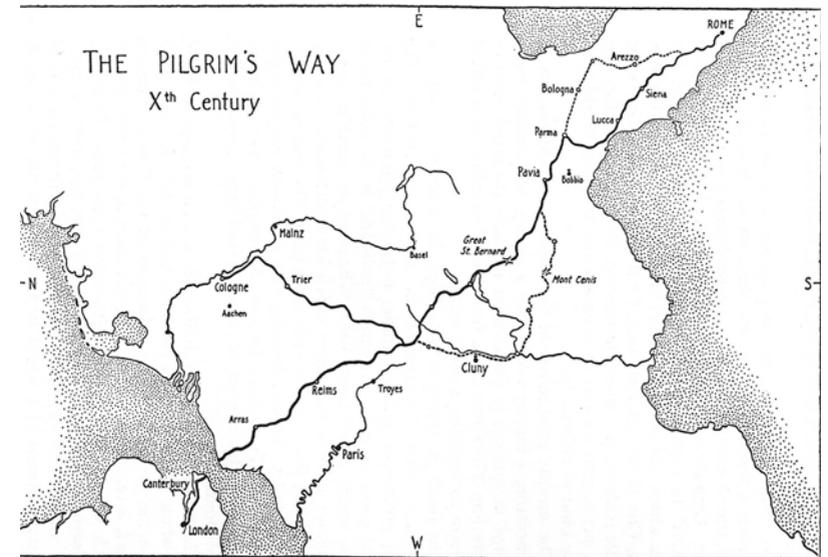
無かった新しい輸送手段が登場して来て(第10章:第3節「経済革命」を参照), 石造りの城や聖堂が登場してきたのも中世であった。灌漑施設がヨーロッパで整えられたのも中世であり, その発展のエネルギーは我々ですら羨むほどであった。

また紀元1000年ごろにスコットランドはまだ存在せず(スコットランド王国が登場するのは1034年), そこはまだカレドニア Caledonia と呼ばれていたし, ブリタニア Britannia とはワイト島 Isle of Wight とマン島 Isle of Man を結んだ線の西側だけを意味していた(ローマ帝国の属州であった。正確には Britannia Prima)。ナポリを中心にした南イタリアは, まだ「イタリア」には属していなかったし, 「フランス」とはガリア地方を意味するだけであった。スペインの4分の3はイスラム教徒が支配する地域であったし, ドイツはローマ帝国時代の複雑な国境線で分断されていた。また, かつてヨーロッパ全域を支配していたローマ帝国は分裂状態に置かれていた。平和と秩序を回復するためには「新しい考え方 new spirit」が必要であった。こうして登場してきたのが新しい帝国であった。その後近代の「国民」が登場してきたのである。

## 第2節 皇帝の宮廷と各地の皇帝領

紀元1000年ごろのヨーロッパを説明するのに便利なのは, 2つの「いなかった negatives」である。まず西ヨーロッパはカエサル時代と違って, 1つに統合されて「いなかった」。名目だけの皇帝はいたが, 帝国を1つに纏めるために必要な都市が存在して「いなかった」。また近代になって登場してくる国民もまだ存在して「いなかった」。ヨーロッパは, 様々な部族から構成されたモザイク模様状態に置かれていたのである。

帝国を1つに纏める都市は存在せず, また国民も存在しない中で皇帝だけが存在していたのが1000年前のヨーロッパであった。そこでヨーロッパでは, まず都市を再生させることに熱意が払われることになった。都市



10世紀の巡礼路: ロンドン → ラン → サン=ベルナル峠 → バビア → パルマ → ルッカ → シエナ → ローマ

を再生するため, 都市を意味したラテン語「キビタス civitas」から様々な言葉が造られることになった。フランス語の「国民 <sup>シトワイヤン</sup>citoyen」, イタリア語の「都市 <sup>チッター</sup>città」(バチカン市国 Città del Vaticano)などは, かつて存在した都市に対する郷愁を表わす言葉の一例である。

それは, かつて存在していた過去の世界を再登場させようというヨーロッパ独特の試みであった。それも量でなく, 質を変えようという試みであった。目の前の世界を「再び都市化 recivilize」しようという革命であった。

その結果, 「国民 modern nation」が登場してくることになったのである。「古代都市ポリス polis」に代わって「国民」が登場してきたのである。「ポリス」の派生語である「政治 politics」とか「政策 policy」は, いまでは政府との関連語であるが, もともと「ポリス」は「都市 urbs」を意味していた。「都市国家 city-state」が「国民」に取って代わられたのである。ローマ帝国が誇った「文明 Civilization」の正当な後継者は, 「国民」に取って代わ

られたのである。

「再都市化 re-civilization」の試みは、まずヨーロッパ全域をキリストがいた都市エルサレムに変える試みから始まった。ローマ帝国を再興しようとしたオットー1世は、10世紀の祭具に「天上にある平和を地上にも Jerusalem visio pacis」と彫らせている（当時の讚美歌の文言）。この言葉から判ることは、1000年前の皇帝が世俗権力の持ち主ではなかったということである。皇帝は「見えない世界 world beyond」の証人であった。ヨーロッパは多くの部族に分断され、しかも周辺の家からはバイキング・海賊・イスラム教徒がいつ侵攻してきても可笑しくない情勢であった。かつてローマ帝国の海岸を取り囲んでいた静かな地中海とは丸で異なった海が、ヨーロッパを取り囲んでいたのである。そこでローマ帝国を再興することがヨーロッパの夢となった。皇帝としてオットー1世に期待されていたのは、経済的な役割でも社会的な役割でもなかった。皇帝はこの世の者とは見なされていなかったのである。だからこそ皇帝は革命を起こすことができた。皇帝は創造主である神と同じ力を持つと考えられていたのである。過去と未来に由来する不思議な力ゆえに、目の前のヨーロッパを都市エルサレムに変えることができると考えられていた。前の段落で「国民」が「ポリス」に取って代わったと書いたが、もっと正確にはヨーロッパが「ポリス」に取って代わったと言うべきであった。「国民」は都市エルサレムの一部に過ぎないからである。

多くの部族に分裂していたヨーロッパを1つに纏めることができたのは、皇帝だけであった。紀元1000年のヨーロッパでは、統一と皇帝は同じことを意味した。ローマ帝国の伝統はヨーロッパに引き継がれていたが、統一を維持していたのは皇帝の存在であった。

皇帝は目の前の現実を超えた存在であった。空に輝く惑星と恒星が皇帝の着る外套を飾っていた。天空こそが皇帝に相応しい衣装であった。不和と対立で先が見えなくなっていたヨーロッパは、生きた皇帝の姿に纏まりの可能性を見ていたのである。ローマ帝国の再興と言っても、いま我々が

考えるような帝国は現実には存在しなかった。課税制度・役人・移動手段・貨幣制度・中央政府は、その全てが存在しなかった。当時の皇帝が行っていた統治は、独特なものであった。

当時のカトリック教会は、「唯一無二の存在 Una sancta」（1302年に教皇ボニファチウス8世が「教書 Papal Bull」で使った有名な言葉）ではなかった。ローマの教会は数多くあった教会の中で「首位の座 prima sedes」を占めているに過ぎず、教会が統一されるためには教会の主たるキリストが地上に現れるのを待つしかなかった。教会は無数に存在する殉教の場に建設されていたが、その主は地上ではなく天上にいた。地上で統一を実現していたのは皇帝であった。カトリック教会は、1000年の間「普遍的 universal」であることを拒否していたのである。

首都が存在しなかったため、皇帝は絶えず軍隊を率いて各地を移動し、その姿を見せる必要があった。紀元1000年のオットー1世の「ローマ帝国」には、首都がなかった。神聖ローマ帝国も1806年に消滅するまで、一度も首都を持ったことは無かった。聖職者たちも皇帝と一緒に各地を移動していた。皇帝が持つ統治手段は、自分と一緒に各地を移動する軍隊と聖職者だけであった。聖職者・若い騎士・兵隊は家族も家も持たず、そこで皇帝に従って自由に移動す



THE PALACE OF A MEDIEVAL EMPEROR:  
Ingelheim (reconstruction).



THE EMPEROR AS PROTECTOR OF THE HOLY GHOST, IN  
THE FORM OF A DOVE. ABOUT 980

中世の皇帝の宮廷：カール大帝が建てたインゲルハイム城（復元模型）。鳩の形で現された聖霊を守るオットー1世もしくはオットー2世。「天上にある平和を地上にも Jerusalem visio pacis」の文言が記されている。980年

ることができた。皇帝はキリスト教世界を束ねる普遍者として自らを位置づけながら、実際には各地の土着勢力に頼らざるを得なかった。生活は各地に点在する「宮廷 palatia」周辺の「領地 manor」が支えていた。たとえば毎日、豚50頭・牛25頭・小麦粉10袋などを届けさせるのである。さらに暖かいフランケン地方ならワインを、またそれほど暖かくないザクセン地方ならビールを提供していた。

天と地を支配する皇帝の毎日の生活は、各地に点在する「領地」に支えられていたが、これが当時の皇帝の弱みになっていた。皇帝の生活が「領地」の支配者しだいだったからである。皇帝と雖も、「領地」の慣習や規則に従わざるを得なかった。「宮廷」は領主の館に設置された。個人と個人から構成される共同体しか存在しない細分化された世界の現在に比べると、当時は幸福な時代であった。皇帝の公的な生活は部族の組織と軍隊によって担われており、私的な生活は「領地」の「家計管理 husbandry」によって支えられていた。この「家計管理」を行うために使われた領主の食堂テーブルが遺物として残っているのが、イギリスの下院で首相が予算案を置くテーブルである。500年前の皇帝は、帝国の予算を領主の「家計管理」と同じやり方で管理していた。帝国の役人たちは皇帝の私的な使用者であって、司教は皇帝に仕える礼拝堂司祭・教師・図書館司書などを兼ねていた。皇帝の家族も統治に参加しており、大臣・皇太子・皇女・将軍・侍従長・大法官たちは一体となって皇帝の統治を担っていた。このような統治制度がヨーロッパ中で機能していたのである。生活に必要な資材の生産は、分業体制で行われていた。第一次世界大戦までのハンガリーには、この古き良き時代の教会・城砦・領地経営の場が一体で存在していた。またトランシルバニア地方には（中世以来ハンガリー領だったトランシルバニア地方は、ドイツ農民が数多く入植・してヨーロッパの農業技術や社会制度をトランシルバニア地方に持ち込んでいた。第一次世界大戦後のトリアノン条約でルーマニア領となる）、教会と城砦が一緒になった場所が各地に見られたが、これも中世ヨーロッパの領地経営の様子をよく表している。我々は「家屋 house」

と言えば人が住むところを連想し勝ちで、とくに「部屋 room」は労働とは無関係だと考え勝ちだが、これは美術史や建築史の影響によるもので注意する必要がある。中世ヨーロッパの「領地」には広い「中庭 yard」があり、また皇帝の「宮廷」にも大きな「中庭 courtyard」があって、いずれも教会・家畜小屋・納屋・作業小屋・兵舎がそれを取り囲んでいた。「中庭」の周りに住んでいた領民や宮廷人は、ホメロスの作品に登場してくる様な「メガロン Megaron」（古代ギリシャの住宅形式で広大なホールが特徴的）に似たホールで集まりを開いていた。その中央にあった食卓に着く席順は、社会的な上下関係で決まっていた。「最後の晩餐 Last Supper」でキリストとその弟子たちが座っていた席順は社会的な上下関係を無視しており、当時の大都市における社会秩序の崩壊をよく表している。

紀元1000年ごろの「最後の晩餐」は、それなりに当時の社会秩序を反映していた。「宮廷」の食卓は、労働の種類や「宮廷」内の上下関係・社会秩序や、統治機構内の上下関係をよく反映していた。皇帝が座る椅子は年に3、4回しか利用されない椅子などではなく（後に戴冠式でしか利用されなくなる）、食卓で必ず皇帝が座る椅子であった。お妃や皇太子たちは、その両隣に設けられた低い椅子に座っていた。

皇帝による統治も、臣下たる貴族の「領地」で行われていた統治と変わるところが無かったが、それが皇帝にとって弱みとなった。皇帝も、数多くいた領主の1人に過ぎなかったからである。それぞれの「領地」は独立した「経営主体 household」であって、皇帝は他の領主の「経営主体」に干渉できなかった。「経営主体」の父親や母親は、「経営主体」の他の構成員に対して皇帝のように振る舞っていた。父親や母親は「経営主体」の「役職 economic offices」であって、息子や娘も決められた役割を果たすことが期待されていた。「経営主体」が公爵（貴族の最高位）であれ一介の農民であれ、皇帝は口を挟むことができなかった。

皇帝と雖も、臣下の「経営主体」では特別な存在ではなかった。「経営主体」の父親が判事・行政官・経営者であった。この「家長主義 patriarchalism」

は皇帝にとって当然のことで、皇帝は特別なことをしない限り、何千もの家長たちを1つに纏めることは不可能であった。

皇帝の「経営主体」には、臣下の「経営主体」にはない特徴があった。まず皇帝が食事をするとき、国王や公爵は食卓で皇帝に給仕として仕え、皇帝が食事をしている間は立っていなければならなかった。国王に給仕をやらせることで、皇帝は権威を高めていたのである。また皇帝だけが大司教や教皇と食事を共にすることができた。食卓で食事をしながら彼らと会話ができしたのは、皇帝だけであった。食事を共にすることで、大司教や教皇は皇帝を特別な存在に変えたのである。皇帝は聖職者の1人として、神秘の装いを身に纏うことができた。聖堂参事会の一員と見なされていたのである。たとえばケルンの大聖堂で教皇と皇帝は、内陣（祭壇の手前）の両側に席を占めていた。

皇帝の第一の関心事は教会であり、教会改革であった。帝国内の教会で唱えられる祈りの言葉や讃美歌の内容は、皇帝が決めることになっていた。紀元800～1056年に、ミサなど教会の儀式・聖務日課・教義・祈りの言葉を決めていたのは皇帝であった。教皇がいるローマの教会が腐敗に塗れていた時、これを正したのはドイツの皇帝であった。如何に腐敗に塗れていても、ローマの教会はヨーロッパを1つに纏めるために必要であった。そこでドイツ人であったにも拘らず、皇帝はローマ人を自称しなければならなかった。

紀元1000年になって教会改革を行おうとしたとき、まず実現しなければならなかったのは死語となっていたラテン語の復活であった。それこそが分裂したヨーロッパを1つに纏める唯一の方法であった。ラテン語だけが小さな地域に分断されていたヨーロッパを1つに纏めることができたのである。ラテン語は、かつてアルプス地方や北ドイツが1つに纏まっていた偉大な過去を思い出させる言葉であった。かつて通商路があった海はイスラム教徒・ノルマン人・ビザンツ人・デーン人のものとなっており、陸地もフン族やハンガリー人に侵略されて、ラテン語だけが嘗ての栄光を思

い出させる手掛かりであった。

1000年前のヨーロッパでは、ローマが統一の中心であった。ローマ帝国最後の皇帝は、476年に皇帝の座を追われたロムルス＝アウグストゥス Romulus Augustus ではなかった。この時から中世が始まるとされているが（「中世」という言葉はルター派の造語である）、1000年前までのヨーロッパに「中世」は存在せず、相変わらずローマ帝国が存続し続けていたのである。その最後の皇帝はカール大帝 Karl der Grosse（シャルルマーニュ Charlemagne）であった。彼の軍隊はローマ帝国の西半分を支配下に収めており、彼の軍隊こそがローマ的秩序の支柱だと考えられていた。

「ローマ」は、ヨーロッパを1つに纏める魔法の言葉であった。ヨーロッパ各国は、「永遠のローマ Roma aeterna」という同じ母親から生まれた子供なのである。「公法 public law」・「公共心 public spirit」・「世論 public opinion」などの言葉がどのヨーロッパ語でも使われているのは、この言葉がラテン語由来だからである。ヨーロッパで様々な国民の「文明 civilization」が開いたのは、この「ローマ」のお蔭であった。そのとき「ローマ」という言葉が有していた意味が、英語・フランス語・イタリア語などに訳されたのである。ヨーロッパの各国民は、それぞれのやり方で「ローマ」の伝統を引き継いで行くことになった。しかし「ローマ」の記憶を留め置くためには、特別な「装置 institution」が必要であった。それがカトリック教会であった。カトリック教会が古代世界の伝統を引き継ぐことになったのである。

これまで見てきた革命は、すべて古代世界の伝統を引き継いできたカトリック教会が生み出したものであった。革命と信仰の因果関係は既に見てきた通りだが、改めてカトリック教会とローマ帝国の対話、さらにその対話が生み出したヨーロッパ各国とカトリック教会の対話に耳を傾けることにする。こ何世紀かは対話が聞こえて来なかったが、いまやヨーロッパの原点に耳を傾ける時がきたのである。第一次世界大戦までのヨーロッパは自由貿易が原則であったが、戦後それが関税障壁・パスポート規制・移民規制に取って代わられようとしている。かつてヨーロッパ全域を支配下に



ペテロとパウロに導かれてキリストの元に至り、王冠を授かる皇帝と皇妃。1008～09年頃

置いていたローマ帝国が、その支配権を失い始めた時期に似ている。かつて存在した「一体性 unum」と「共通性 universum」を再現しようと、政治の世界で争っていた人々のモデルが「ローマ」であった。

世界の歴史を動かしてきたのは、この「一体性」と「共通性」という動機づけであった。いかなる国民と雖も、対立と相互排除を無くすためには「一体性」が必要であり、領土や大陸の違いを乗り越えるためには「共通性」が欠かせない。この「一体性」と「共通性」抜きに平和と繁栄を実現することは不可能である。かつて私の友人の一人が、子供たちが大人になった時、「一体性」が全欧規模で実現するか否か問題にしたことがあった。もし「一体性」が実現するとしたら、それは経済的なものに限られるというのが彼の結論であった。その根拠として彼が指摘していたのが、現在のキリスト教徒が「1つの聖なる Una sancta」という言い方しかせず、かつてのように「1つの聖なる教会 Una sancta ecclesia」という言い方をしなくなったということであった。将来には、全欧が『ヨハネ黙示録』第21・22章

に登場して来るような「神殿 temple」抜きの「一つの普遍的な都市 Una sancta」になると言うのである。宗教・宗派・人種・教育・自己表現法の違いを乗り越えて、将来に我々を1つに結び付けるものがあるとすれば、それは自由な経済活動である。全欧規模の経済的な結びつきに比べれば、宗教・信条の違いなど微々たるものに過ぎない。

紀元1000年ごろのヨーロッパでは、経済体制とカトリック教会は対極に位置していた。経済主体は狭い小さな地域に限定された個の集まりに過ぎなかったが、カトリック教会は「一体性」と「共通性」を主張していた。一つの信仰体系と無数の経済主体の集まり、これが紀元1000年ごろのヨーロッパであった。

生産活動・労働・資本が土地に縛られていた当時、信仰の「一体性」は「共通性」を実現するための唯一の手段であった。共通の目的を実現すべく一緒に努力することが求められたとき、ヨーロッパ人が想起していたのはローマ帝国の存在であった。かつてローマ帝国には「一体性」と「共通性」が存在していたからである。こうしてカトリック教会と経済体制がその立場を交代することになった。

	共通：カトリック教会	経済体制：共通	
1000年			1938年
	個別：経済体制	カトリック教会：個別	

これまで見てきた革命によって、ヨーロッパの各国民は「共通 general」と「個別 particular」という2つの目標実現のために努力せざるを得なくなった。もともと共通であったはずのカトリック教会はしだいに個別的になり、逆に経済体制はしだいに世界的な規模で「共通」化されるようになった。いまでも我々は「1つの聖なる教会」の為に祈っていることになっているが、果たして何時までこれが続くか心もとない限りである。1000年のあいだヨーロッパの諸国民は、一方で狭い地域の権利と私有財産のために戦ってきたし、同時に世界平和のためにも戦ってきた。しかし今では私

有財産も「1つの聖なる教会」と同じ理由で攻撃の対象とされている。ボルシェビキ党は信仰を個人の問題にしてしまい、逆に私有財産を共同体にかか<sup>か</sup>関わる公的なものにしてしまった。しかし、これはボルシェビキ党だけの問題ではない。いまや全ての国の政府が私企業に補助金を与え、私的な教育機関に課税している。特定の政治思想を宣伝し、廃村に定住民を呼び込むために土地を無償供与したりしている。

狭い地域の利益と世界平和を同時にどう実現するかということは、我々の問題でもある。

かつて我々の先祖たちも同じ課題に直面していた。ヨーロッパの各国民も、この2つの課題を解決すべく努力してきたのである。そして常に新しい解決策を契約の形で策定してきた。その都度、契約は神聖なものであって変更不可能であると宣言されていたが、一部のキリスト教徒が契約に不満を唱え、新しい契約を締結し直して、新しい社会秩序・新しいタイプの人間・新しい生活様式を生み出してきたのである。

人間が人間である為には、2つの課題を同時に解決する努力が欠かせない。自由と個性、さらに統一と普遍性がある初めて、人間は人間たり得るのである。たとえば小ピット William Pitt は、一方でイギリス政府の財政健全化を目指しながら（所得税の新設）、他方でナポレオン戦争を戦うために膨大な借金をしていた。これなど相反する課題を同時に解決するために努力せざる得ない人間の宿命をよく現している。

アメリカの南北戦争は犠牲者が多かった割には成果が少なかったが、奴隷解放は避けて通れない課題であった。「平等 equality of men」は、誰にも適用されるべき普遍の原則だからである。他方で産業革命も避けて通れない課題であった（アメリカの産業革命は南北戦争の前後に始まる）。このように、我々は2つの課題を同時に解決しなければならないのである。もし人間が金銭的な利益とか私的な利益しか考えなければ、いずれ人間としては生きていけなくなる。銀行は破産するし、子供たちは働かなくなってしまう。金銭的な利益を人生最大の目的にすれば、だれがそれ以外のことを考えた

りするであろうか。また全体の利益のために自分の利益を無視するような人間も、やがて生きていけなくなる。この世界で生きていくためには、2つの課題を同時に解決して行くしかない。

また多くの人は自分の権利は重視するが、自分の義務は軽視するものである。たとえば投票する権利は大切にしても、納税の義務は免れたがる。普段は自分の生きたいように生きていても、問題は起きない。しかし破産・戦争・暴動・地震の発生などで公的な支援が必要になってくると、権利と義務が改めて再評価の対象となる。

宗教はますます個人の問題として個別化して行き、経済体制は共通化して行くことになるであろう。我々は本気で1つの教会の為に祈っているのだろうか。それとも我々は単一の経済体制を確立させようとしているのであろうか。

ルターがザクセン地方に何百とあった修道院を廃止して、領邦国家ごとに教会と学校を支援する基金を設けたとき、彼は経済体制をかつて無かったほど共通化した。その代り、教会は領邦国家ごとに個別化されてしまった。せいぜい6つの王国と100の侯国、さらに無数の領邦国家を包括する「ドイツ人の教会 national church」でしかなかったのである。しかし、それが齎した成果は大きかった。

イギリスでは、イギリス国教会が「王国 Commonwealth」を超えた領域に影響下に置こうと努力していた。しかし、ここでも教会は「王国」を超えることは出来なかった。「王国」が世界的な規模に拡大したからである。19世紀にヨーロッパに登場してきた「国民 Nation」概念は、個別的でヨーロッパを分断するものであったが、経済体制はどの国も共通の資本制であった。ヨーロッパ以外の地域はヨーロッパ諸国が利益を求めて進出して行くところであり、植民地にする対象でしかなかった。経済的な自由主義を掲げたヨーロッパ諸国は勝者であり、植民地にされた地域は敗者であった。ただしソ連は、植民地にされた敗者を使って新しい秩序を築き上げようとしていた。

ヨーロッパの各国語は、この個別化を促す国民主義と共通化を促す経済体制のバランスによってあり方を変えてきた。そのバランスのあり方をどう決めたかは、各国語によく現れている。国民の権利（個別化を促す自国民中心主義）と義務（共通化された経済体制）のあるべきバランスを表現しているのが国語なのである。また国語は国民の「魂 human soul」の現れであり、自国民中心主義をヨーロッパ各地で根付かせ、また各地に特有の制度を登場させてきた（第3章の末尾に掲載された一覧表を参照）。ヨーロッパの各国民は違った国語を使っているが、その課題は共通しており（個別化を促す自国民中心主義と共通化された経済体制の間でどうバランスを取るかという課題）、国語の違いは枝葉の問題に過ぎない。個別化と共通化という二重の課題を抱えているからこそ、人は人たり得るのである。家族のもとで平安を感じるのも、この二重の課題を抱えているからである。『神の国 De civitate Dei』（アウグスチヌス Aurelius Augustinus の著書名）とダーラム市 City of Durham（イギリス北東部の都市で巡礼地として有名であった）に同時に帰属していること、つまり人間が人間であるためには共通・普遍の世界と、個別の狭い生活の場を同時に持つ必要があるということである。いまロシア革命は熱狂的な時期を過ぎて反省期にあり、ソ連は国際連盟に加入を果たしている。共通・普遍を目指したマルクス主義から、ロシア的な独自性を大切にす時期に移行しつつあると言える。

現在を生きる人間にとって、この課題の二重性は生命力の源泉でもある。共通・普遍が生まれた世界を訪れることで人間は新たな活力を手に入れ、二重の課題を同時に解決すべく再び頑張ることが可能になるのである。

### 第3節 ダンテの『神曲』と「最後の審判」

ヨーロッパの歴史は共通化と個別化、地方の権利と中央政府による統制の闘ぎあいのなかで展開されてきた。その最古の例が唯一の裁き手としてヨーロッパ中を巡回していた神聖ローマ皇帝と、下僕・牧師・子供たちに

絶対の服従（ときには血の復讐）を要求していた地方の領主との闘ぎあいであった。

「最後の審判」という考え方が神聖ローマ帝国の時代に広く普及したのも当然であった。皇帝による審判は世俗世界の政治的な判断に過ぎなかったが、それが地方領主の恣意的な支配から配下の者を保護する機能を果たしていたからである。皇帝が姿を見せることが稀であればあるほど正義に対する渴望は高まり、皇帝による審判は最終的なものとして尊重されるようになった。皇帝の審判に対する高い期待は、1つの思想体系まで生み出すことになった。こうして「最後の審判」という考え方がヨーロッパの人々を神聖ローマ皇帝の支持者に変えていったのである。

「一体、誰が世の侮りの鞭に、権力者の不正に、驕れる者の蔑みに、叶わぬ恋の苦しみに、法の裁きの埒もない遅延に、役人どもの横柄さに、立派な人間が取るに足りぬ連中から受ける忍びがたき侮辱に耐える者がいようか。…もし死後に何かを恐れていないなら」（シェイクスピア『ハムレット』岩波文庫 142 - 143 ページ）

この古い制度は、いまでも偉大な文学作品のなかで体験することができる。北ヨーロッパからやって来た神聖ローマ皇帝の最後の支持者であり、また最後の皇帝派であったダンテの『神曲 La Divina Commedia』がそれである（12～14世紀のイタリアでは、皇帝派と教皇派の間で都市の支配権を巡る争いが展開されていた。ダンテがいたフィレンツェは教皇派で、皇帝派のダンテとその一家はフィレンツェを追われることになる）。

『神曲』の中でダンテは、まず8層からなる地獄を訪ね、ついで煉獄の山を訪ねて、最後に天国を訪ねる。「革命 Revolution」のアイデアを思い付いたのは、ダンテが最初であった。『神曲』の終わりの方で、彼は人間も天体も神が動かしていると断じている（ダンテ『神曲』天国編・第27歌、106 - 114行、河出書房新社 348 ページ）。ダンテは初めて、人間の経験と天体の動きを関連づけて見せた。彼は「革命」が現実世界のあり方を変えるという考え方も準備していた。天体の動きは人間が住む現実世界に対応してお

り、天体の動きは人間の情念を反映しているとダンテは考えていた。彼が生きた14世紀に、イタリアの年代記作家たちが天体の動きで都市国家の出来事を説明するようになったのも当然であった。しかし、もっと大切なことは『神曲』が古い時代の証人であるという事実である。神聖ローマ皇帝がヨーロッパ中を旅行することで「最後の審判」という考え方を普及させたのは、ダンテより古い時代のことであった。

『神曲』から神聖ローマ皇帝が体現していた2重の役割、つまり共通・普遍的役割と個別の問題処理の役割を、皇帝が同時に果たしていたことが読み取れる。『神曲』そのものは1300年頃から書き始められているが、そこに登場してくるのは、もっと古い時代の様子であった。つまり10～11世紀の神聖ローマ皇帝に課せられていた2重の役割である。ハインリヒ2世(1002～24)からハインリヒ6世(1307～13)に至る歴代の神聖ローマ皇帝は、全員がダンテにとって英雄であったし、ダンテが受けた教育は13世紀のスコラ学であった。彼はジョット Giotto di Bondone やアルベルツス・マグヌス Albertus Magnus と同時代人であった。イギリスの「田舎紳士 country squire」がスターリンと同時代人であったことを考えれば不思議でも何でもないが、しかし本当の意味で彼らは同時代人だったのだろうか。そうではなかったと言わざるを得ないのがダンテの場合である。変わってしまった世界に直面しながら、それでも皇帝がヨーロッパ世界の「最後の審判」者であった時代を描いて見せたのがダンテであった。そうすることでダンテは、皇帝たちを永遠の存在にして見せたのである。彼が描いた「最後の審判」は、バラに分裂した個人を1つに結び付ける永遠の存在を前提にしたものであった。地上の目に見える世界を超えた共通・普遍のもの、つまりキリスト教に対する信仰だけが10世紀に、各地に散在する農村を1つに纏めることが出来たのである。

当時のヨーロッパは、荘園が各地に散在する経済体制であった。ところがダンテが生きていたのは、荘園制を超えた大きな経済圏を謳歌し始めたばかりの自由な都市国家フィレンツェであった。彼が亡命を余儀なくされ

たのは、ちょうど古い伝統的な支配者がフィレンツェから追放された時でもあった。古い伝統的な支配者によって追放された最後の犠牲者がダンテであった。フィレンツェで起きた「イタリア革命 Italian Revolution」によって、彼は亡命生活を余儀なくされたのである。彼が皇帝派に属することになったのは、いわば運命の悪戯であった。1790年のアメリカ(前年にジョージ・ワシントンが初代大統領に就任してアメリカの独立は既定の事実になっていた)で、独立に反対していた「王党派 Loyalist」が置かれていた状況と似ていた。つまり当時のフィレンツェで、ダンテは時代の変化を代表する異分子だったのである。彼が不死の存在になれたのは、地方に割拠していた領主や地方に散在していた修道院・荘園と、「最後の審判」を担当した共通・普遍的教会による支配の狭間に生きたからであった。我々がよく知っている教会や経済体制のあり方と丸で違っていながら、同時に我々がよく知っている教会や経済体制のあり方と似ていた時代であった。

ダンテによれば、神聖ローマ皇帝はこの地上で「最後の審判」を下すことができるキリストの代理人であった。イタリア・ポーランド・フランス・ブルゴーニュ侯国・ハンガリーなどで、地方の支配者たちの専制から寡婦・孤児・貧乏人・弱い立場の者を守るのが神聖ローマ皇帝の役割であった。地方の領主たちは皇帝の前で恐れ戦いたが、それは貧しい農奴たちが日ごろの不平不満を皇帝に訴えることが出来たからであった。皇帝は星・太陽・月が描かれた外套を身に付けていたが、それは彼が宇宙全体の支配者であると考えられていたからであった。宇宙を象徴する外套を身に付けた皇帝の剣こそが、各地に分離・分裂していたヨーロッパを1つに纏める唯一の手段であった。

古代のローマ人たちは、境界線がはっきりしないヨーロッパ大陸を嫌っていた。彼らが纏めようとしたのは、境界線がはっきりした地中海沿岸であった。地中海沿岸の港を結ぶ航路が古代ローマの交通路であった。彼らは船の進路を変える舵をまだ知らなかったが(従って大量の物資を遠くへ運ぶ大型の船は利用できない)、陸上で大量の物資を運ぶ手段も持っていなかつ

た。牛や馬を使って大量の物資を長距離、運ぶ方法をまだ知らなかったからである。

そこでヨーロッパ中を絶えず移動し続ける皇帝と皇帝の軍隊だけが、ヨーロッパを1つに纏めることができた。ダンテは「最後の審判」の恐ろしさを『神曲』で描いて見せたが、それは敵対者による「復讐 feud, Fehde, vendetta」に怯えてヨーロッパ各地を逃げ惑う個人や部族の、孤独と恐怖を際立たせるためであった。皇帝が現れさえすれば「復讐」は抑制され、平和が実現し、安全が保障されるのである。皇帝の出現は、闇夜に光る稲妻のようなものであった。

ローマの教皇庁に皇帝を支持する者はいなかった。ローマの司教たちは墮落していた。司教たちが聖ペテロの後継者であることに疑義を唱える者はいなかったが、それで問題が解決できる訳ではなかった。教皇庁は腐敗しており、またそのことを誰もが知っていた。歴史家たちは当時の教皇庁を「娼婦による支配体制 pornocracy」と呼んでいたが、聖ペテロの後継者たちは聖職者だけでなく、信者たちにも軽蔑されていた。軍隊を率いてローマにやってきた皇帝が教会の改革者として受け入れられたのも、当然であった。

当時を生きた人たちが何を考えていたかは、10世紀に作られた黄金製の容器（洗礼で使う聖油入れかミサで使うワイン入れ？）の裏底の刻印から読み取ることができる（その重要性がこれまで指摘されて来なかったのは、それが発見されたのが最近のことだからである）。「天上にある平和を地上にも Jerusalem visio pacis」と書かれた中心部に、聖油の瓶と聖霊を象徴する鳩を手にしたオットー3世が描かれているが、オットー3世が聖具に描かれているのは、彼だけが「永遠の平和 Jerusalem of Eternal Peace」を実現できたからであった。だからこそ彼に「聖霊の鳩 Dove of Inspiration」が託されたのである。我々にとって「公共精神 Public Spirit」とは「民主主義の原動力 general force of democratic inspiration」を意味するが、当時それは皇帝を意味した。聖霊の象徴を皇帝に託すなどキリスト教の教義を無視した行為と

いうことになるが、それは止むを得ないことであった。今なら神に対する冒瀆行為とされそうだが、聖職者が腐敗・墮落していた当時、皇帝の軍隊だけが平和を実現できたのである。ヨーロッパを1つに纏めるには、そうするしかなかったのである。そして、それは必要なことであった。「オットー3世が裁定の席に着くと天は吠え、地は唸る Als Otto III zu Gericht saß, da stöhnte der Himmel, da dröhnte der Erde」と詩人も謳っている。

オットー3世が念頭に置いていたのは、ローマ帝国ではなくてローマの教会であった。異教徒の皇帝たちに彼は興味がなかった。彼は皇帝の後継者ではなくて、聖パウロの後継者になりたかったのである。「現世的で mundus」無知な聖職者に福音書を学ばせて「キリスト教徒にする conversus, religiosus」ためには、修道士になるしかないと決めたのも彼であった。

オットー3世はエヒテルナッハ Echternach の修道院で聖パウロの石像を彫らせたが、その石像が手にしている巻物には「私が今あるのは神のお蔭 Dei gratia sum id quod sum」と書いてある。この「神のお蔭 Dei gratia」という言葉こそ、オットー3世が統治権の根拠としていたことであった。さらに彼は自らを、パウロの言葉を借りて「キリストの僕 servus Jesu Christi」とも呼んでいた。

オットー3世は教皇座にドイツ出身の教皇を据えて教会改革に成功したが（まず従弟をグレゴリウス Gregorius 5世に任命し、さらに自分の教育係をシルベスター Sylvester 2世として後任に任命している）、改革によってローマ教皇の権威が高まったおかげで、彼自身が「キリストの僕」を自称できなくなってしまった。そこで彼は「12使徒の僕 servus apostolorum」を自称することにした。当時の世界地図は地球が12の区域に仕切られているが、それぞれの区域が12使徒に割り当てられている。また皇帝と皇妃はペテロとパウロに導かれてキリストの前に跪き、キリストから帝冠を授かっていた。

オットー3世は教会改革に真剣に取り組んでいた。シルベスター2世という教皇名は、キリスト教を公認したローマ皇帝コンスタンチヌス Constantinus 大帝に洗礼を施した教皇の名前に肖ったものだが、700年前

に異教徒の皇帝をキリスト教徒にした教皇と同じ名前を名乗った教皇は、オットー3世のお陰で教皇位に就くことができたのである。そこで皇帝オットー3世は教皇シルベスター2世より優位な立場にあった。オットー3世は夢に現れた聖パウロに励まされ、シルベスター2世の意志に反してでも教会改革を推進する積りであった。聖パウロは小アジア・スペイン・ローマ・イリア地方と各地を飛び廻って宣教に努めていたが、オットー3世もポズナン Poznan（ポーゼン Posen）からアーヘン Aachen, さらにアーヘンから南イタリアと忙しく行き来していた。聖霊を象徴する鳩は、オットー3世に守られて暗黒の地上を飛び交っていたのである。丁度ノアの箱舟を飛び立った鳩が、人類の罪を洗い去った洪水の後、地上を飛び交ったように。ある詩人はオットー3世のことを、ローマの教会を腐敗から救う「第2の聖パウロ」と呼んでいた。

聖パウロの権威を利用した方が、コンスタンチノーブルの皇帝や貴族たちにアピールできたのである。なぜなら、彼らは聖ペテロより聖パウロを重視していたからであった。その例を1つ挙げると、第2ニカエア Nicaea 公会議が紀元787年に開かれたとき、ローマ教皇は聖ペテロの後継者ゆえに権威を持つという内容の手紙を公会議宛に出したことがあった。ところがローマ教皇の使節は、ニカエアでペテロに対する関心が如何に小さいか思い知らされることになった。そこで手紙をギリシャ語に訳すとき、ペテロに言及している箇所パウロの名前を追加することにしたのである。ところがギリシャ人が手紙に対する返答でペテロに言及することはなく、ローマの教会を尊重する根拠としてパウロがローマ人を讃えていたことを挙げていた（『ローマ人への手紙』を参照）。ペテロはローマの教会でのみ権威を認められていたのに対して、パウロは世界中でその権威が認められていたのである。「聖パウロはローマ人であり、またローマ人でもなかった Sanctus Paulus Romanus et non Romanus est」とは、教皇ビクトル Victor 3世（教皇革命の立役者グレゴリウス7世の後継者）の言葉である。こうしてオットー3世の教会改革は、聖パウロの権威を借りて実行されることになった。

年代記作家たちはオットー3世を「神の代理人 Vicar of God」と呼んでいたが、後世にそう呼ばれる資格を持っていたのはハンガリーの「国王 király」だけであった。ハンガリー語の「国王」はシャルルマーニュ（カール大帝）のラテン語名 Karolus に由来し、ハンガリーの初代国王である聖イシュトバーン István (Stephen) は、紀元1000年に王座に就いた時に教会に対する支配権も認められていた。国王は、王国内の司教と大修道院長の任命権を持っていたのである。第一次世界大戦で王制を廃止したハンガリーでは、国王が再び登場してくる可能性は無くなったが（最後の海軍提督ホルティ Horthy が摂政として統治するが、ハプスブルク家による王位継承は認めなかった）、ハンガリー王位の象徴であった「聖イシュトバーンの王冠 Crown of St. Stephen」は、国王が「神の代理人」であった時代の遺産であった。その後1000年の間、ローマ教皇はこのグレゴリウス改革以前の制度を残してきたハンガリーに悩まされることになる。

#### 第4節 「死者の日 All Souls' Day」:「最後の審判」の民主主義

各地の専制的な支配者を超える普遍・共通の権威は、武力による征服だけでは実現できなかった。ダンテの『神曲』には皇帝による公正な裁判が、弱者の涙と恐怖を排除していた様子が描かれている。

皇帝の教会改革は、クリュニー修道院に結集した修道士たちによって実行されることになった。修道院規則で初めて各地の支配者を超える権威の存在を認め、さらに教会暦に新しく祝祭日を導入することでカトリック教徒の心にその考え方を植え付けたのである。

彼らは、皇帝の普遍・共通の立場からする統合を真似ていた。皇帝は帝国でやるべき仕事を支配下の修道院に割り振ったが、クリュニー修道院の修道院長は同じことを、宗教的な目的で行っていた。クリュニー修道院の修道院長は、改革に同意した全ての修道院を統合する「スーパー修道院 super-abbey」の院長であった。

こうして「法人 legal personality of a corporation」となったクリュニー修道院が、ヨーロッパという空間の広さを征服したのである。またクリュニー修道院は、ヨーロッパ全域をカバーした最初の「信託団体 trust」でもあった。それが理由で、司教たちから悪意の中傷も受けている。司教たちに言わせるとクリュニー修道院は、「クリュニー王国 Kingdom of Cluny」だと言うのである。しかし10世紀のヨーロッパの纏まりの悪さを考えれば、クリュニー修道院の登場は大きな前進であった。

教皇に選ばれながら着任を拒否したクリュニー修道士がいたが、クリュニー修道院はローマ教皇庁の腐敗とは無縁であった。またクリュニー修道院は「神の平和 *treuga dei*」運動を推進し、世俗世界で平和を実現するのに大きく貢献していた。復活祭までの1週間は「枝の主日 Palm Sunday」（受難の為キリストがエルサレムに入城した時、住民たちが棕櫚の枝を振って歓迎したことを祝う）から「復活祭の日曜日 Easter Sunday」までだが、そのあいだに「聖木曜日 Maundy Thursday」（最後の晩餐でキリストが弟子たちの足を洗ったことを記念して貧者の足を洗う）と「聖金曜日 Good Friday」（キリストの死を記念する日）があって、「聖木曜日」から「復活祭の日曜日」までクリュニー修道院は暴力の行使を禁止していた。戦ってよいのは、月曜日から水曜日までであった。この「聖週間 Holy Week」の設定は、当時としては画期的な出来事であった。戦争状態と平和状態を明確に区別し、さらに騎士を「神の平和」の守り手として聖化したのである。国王の戴冠式は宗教的な意味を持つが、これを真似て騎士を「神の兵士 *soldier of God*」とした。しかしクリュニー修道院の最大の貢献は11月1日の「全聖人の日 All Saints' Day」の翌日に、「死者の日」を制定したことである（ただしカトリック教会のみ）。

「全聖人の日」は東方正教会でもカトリック教会でも祝われているが、その起源は9世紀に始まる（H. Quentin, *Les Martyrologes historiques du Moyen Age*, pp.366 ff, Paris, 1908）。最初の殉教者である聖ステファノス Stephanos (Stephen) が、天国の神秘を初めて我々の前に開示してくれたのである。全ての聖人は、天国で栄光に光輝いていた。

「死者の日」は煉獄にいる死者のための祝日である。紀元1000年のカトリック教会は聖人だけの教会ではなかった。それは罪人のための教会でもあった。血縁ゆえに、復讐の血で手を汚さざるを得なかった罪人のための教会でもあった。殺人とは無縁なはずの司教が皇帝の軍隊で武器を取り、罪と無縁なはずの民が復讐に手を染めていたのである。「死者の日」は全ての死者のための祝日であった。クリュニー修道院の第5代院長オディロ Odilo の伝記作家によれば、オディロが煉獄にいる死者のために祈るというアイデアを思い付いたのである（信者は煉獄で罪を償い天国に行く準備をする）。現在カトリック教会で行われている葬式ミサは、オディロが998年（遅くとも1031年まで）に創り上げたやり方に従っていることを忘れるべきでない。

神聖ローマ帝国とは、宗教的権威を認められた皇帝を頂点に頂くキリスト教民主国家であった。オーストリアでは19世紀になっても、皇帝の遺体は歴代の皇帝が葬られているウィーンのカプチン修道院まで運ばれ、葬列を率いる執事がまず修道院のドアをノックする。すると修道士が大声で「誰か」と尋ね、執事が「皇帝である」と答えると、修道士は「そんな者は知らない」と返事する。それに対して執事は再度ドアをノックする。1回目と同じ修道士の質問に対して執事が「皇帝フランツ＝ヨーゼフである」と答えると、やはり修道士は「そんな者は知らない」と答える。3回目のノックの後、修道士の質問に対して執事が「修道士の兄フランツ＝ヨーゼフ Bruder Franz-Joseph」と答えるとドアが開けられ、皇帝は罪人の1人として死者の一群に迎え入れられるのである。

この世界に最初に登場してきた民主制は、「最後の審判」を待つ罪人たちの民主制であった。この民主制の構成員は、全員が「死という制服 uniform of death」を纏っているのである。死は孤独な個人にだけ訪れるのではなく、全ての人間に平等に訪れるのであり、全ての人間は死を介して連帯するのである。

シュペングラー Oswald Spengler によれば、全ての文明は新しく死を経験

し直すことで再出発することが出来るそうである。そこでヨーロッパ文明も「全聖人の日」(11月1日)の翌日に「死者の日」(11月2日)を付け加えることで、死を経験し直して再出発ができたことになった。死は全ての人間に平等に訪れるものであり、また全ての人間は「最後の審判」を受けなければならない。そのおかげで人間は孤立・孤独を免れることが出来るのである。

「最後の審判」という考え方は、決して宗教的な意味に限定されるものではない。それは、まずもって政治的な意味を持つ考え方であった。そのおかげでカトリック教会は、巨万の富を手に入れることができた。

また「最後の審判」は民主的な考え方でもある。ダンテの『神曲』では、教皇ですら地獄に落され、皇帝ですら煉獄で苦しんでいる。ダンテは当時の複雑な階層社会を、死後の一点に集約させていた。神の目から見れば、全ての人間は平等であるという指摘に、当時は誰もが驚かされたはずである。これは芸術家ダンテに許された特権であった。彼は死にゆく人間の視点ではなく、神の視点で世界を見ていたのである。ダンテの『神曲 Divina Commedia』(直訳すれば「聖なるお話」)が「聖なる divina」と題されているのは、創造主である神の目から見れば、全ての人間は同じだからである。

詩・小説・芸術一般の全ては、宗教あつての詩・小説・芸術であった。例えばゲーテの『ファウスト』はルターの体験を文学作品にしたものであり、19世紀の非宗教化の時代を生きたヨーロッパ人に、ルターの「謳う信者共同体 singing congregation」を再体験させるものであった。またダンテの『神曲』は神聖ローマ帝国の終焉期である11世紀に亡命を余儀なくされ、孤独な生活を送っていた詩人が紀元998年の「死者の日」の導入で、当時のヨーロッパ人がどんな衝撃を受けたかを我々に伝えているのである。

誰も避けることが出来ない死という経験を通して「死者の日」に、全てのカトリック教徒は歴史が終末を迎える時に行われる「最後の審判」を思うのである。全ての人間は塵と化して、「この世界 World」と一緒に消えて行くのである。紀元1000年には、既に世界は「永遠の存在 without end」

とは考えられていなかった。「この世界」は先行きが見えず、虚栄に満ち、安全は保障されず、危険で一杯であった。それでもクリュニーのオディロは、「この世界」が神の支配下にあることを見抜いていたのである。そこで彼は「全ての信者のために omnes omnimodo fideles」祈るよう命じた。それまで修道士たちは、自分が所属する修道院の為、あるいは自分の血族・友人・縁者の為にだけ祈っていた。しかしオディロは、天国と地獄の中間に存在する「煉獄」にいる者、聖人と罪人の中間に位置する者の為に祈ることを命じたのである。つまり「この世界」の始まりから終わりまで生きた全ての信者の為に祈ることを命じたのである (Migne, Patrologia, vol. 142, 1038)。

「死者の日」に教会のミサで唱えられる祈りの言葉では、人間が取るに足らない存在であることが強調される。道端の雑草・影のような存在に過ぎないことが強調される。しかし、神はそんな人間を無視せずに目を掛け、審判の対象にして下さるのである。つまり「神による審判 Judgement」は、人間だけに認められた特権であった。「最後の審判」とは単なる恐怖以上のこと、人間に対する尊厳の現れであり、人間は雑草のように燃やされるだけの存在ではなく、審判に値するだけの価値を認められた存在であることの証であった。これは、人間が公正な裁判を要求した最初の例であった。この「憂き世 vale of tears」にあつて、これ以上に望み得るものはあるだろうか。しかし、審判されるという思いに人間が戦慄き恐れられたのも事実であった。

「私を放って置かれよ、わが生涯は息のようなものだから」(『ヨブ記』7:16)。それでもキリスト教徒たちは、同志にして裁き手たるキリストへの信頼ゆえに怯むことはない。「死者の日」のミサで誇らしくこう叫ぶのである。「私は知っている、私を贖う者は生きたもう、彼は後の日に塵の上に立つのだと」(『ヨブ記』19:25)。

カトリック教会圏では、「死者の日」に<sup>すべて</sup>全ての死者は罪からの解放が約束される。これは革命であった。しかし東方正教会は違っていた。東方正

教会は罪からの解放を求めて戦うことはしない。しかしカトリック教徒は、「全ての信者を地獄の苦しみ、絶望の深淵、猛獣の歯牙から救いたまえ。アブラハムとその子孫に約束したように、彼らを光満ちた天国に導くよう大天使ミカエルに命じたまえ」と祈るのである。「天上にある平和を地上にも Visio pacis Jerusalem」というのがオットー3世の掲げたモットーであった。人類の祖アブラハムに約束された平和が、いまや全ての死者に約束されることになったのである。

「死者の日」に唄われる讃美歌は、「怒りの日 Dies irae, dies illa」である。この讃美歌は150回以上も原語のラテン語から英語に訳されているが、その回数多さから訳すのが如何に難しかったかが判る。セラノのトマス Thomas de Celano（聖フランチェスコの伝記を書いたことで有名なフランチェスコ会修道士）が書いたとされるこの讃美歌は、ラテン語で唄ってこそ意味がある。当時のヨーロッパでは、ラテン語が讃美歌や祈りの言葉であった。当時のラテン語は、現在の英語やフランス語以上に普通に使われていた言葉であった。「死者の日」に聖職者たちは、「真の魂の言葉 real first and last language of our soul」, 「讃美歌や説教の言葉が各国語に分かれる以前 before the division of song and speech」の言葉であるラテン語を使っていた。ラテン語の讃美歌は「言葉が生きており、命を生かす言葉 living and life-giving speech」である。日常会話で使われる様々な言葉は、「生きた言葉の根幹 living tree of speech」であるラテン語に比べたら「死んだ枝葉 dead branches」に過ぎない。「魂 souls」が言葉の「真髄 true element」に到達すると、その言葉は「心の琴線に触れる言葉 sincere speech」となるが、それは様々な言葉の違い、バビロンの塔で起きた言葉の混乱（ノアの洪水の後人間は天に届く塔を建て始めたので、神はそれまで1つであった言葉を複数の違った言葉にすることでお互いに意志が通じないようにして不遜な試みを妨害した。『創世記』11:7)を超えた存在なのである。「人間の心 mind and heart」が本当に表現される所では、言葉の違いは問題にならなくなる。イギリス人の『詩編 Psalms』重視、フランス人の哲学（エスプリと論理）重視、ドイツ人の「讃

美歌 Chorale』重視、ロシア人の統計と計画表（計画経済に欠かせない）重視は、すべて言葉の違いを超えて人類共通の目標を実現しようとする試みであった。どの革命も、この「人類共通の目標を実現しようとする試み unifying power」からこそ大きな影響力を持ち得たのである。「死者の日」と「最後の審判」という考え方（いずれも人間が同じ死ぬべき運命にあり、死後に審判を受ける存在である事実を前提にした考え方）が実現しようとしていたのも、同じ事であった。「死者の日」に教会で唄われる讃美歌は、人間が「一体感 unity」を求めて止まないことをよく表わしている。人間は「一体感」を失ってはいけないのである。人間が「一体感」を失うべきでないことを訴えていたのは、詩人のブレイク William Blake だけではなく。「一体感」を失った人間を待っているのは破滅だけである。「死者の日」に「怒りの日」を唄うことで、人間は「一体感」を取り戻すのである。「怒りの日」が書かれたのは、「死者の日」が制定されてから200年も後のことだが、そこにはオディロが考えていたことが忠実に再現されている。ある考え方が時間の経過と共に、より完成度が高いものになって行くのである。そのためには何世代も経る必要があった。歴史家は史実ばかりを大切にすが、文明が開くには何世紀もの時間が必要なのである。ダンテは、フィレンツェへの帰還を前に詫言を入れるよう彼に要求した市民たちより時代を先取りしていた。新しい「生と死 life and death」の意味づけは、まず革命家が種を蒔くことで芽生えるのである。つまり「怒りの日」は、すでに紀元1000年に事実上、唄われていたことになる。

怒りの日、この日こそ

この世は灰と化す、

ダビデとシビラの預言のごとく。

人々の恐れ戦きは如何にやあらん

審判者のやがて来たり給いて、

すべてを厳しく正されん時。

妙なるラッパの響き  
全土の墳墓に鳴り渡り、  
すべての者を玉座の前に集めん。  
死者と世界は驚く  
造られしものが蘇るとき、  
審判者に答えんが<sup>ため</sup>に。  
書物が差し出されん、  
すべてを記した書物が、  
すべての者を裁くために。  
審判者が座するとき  
隠れたる業ことごとく現れ、  
何一つ報われざるものなし。  
涙の日なり、この日は。  
灰より蘇るこの日、  
裁きを受けるため。

人間は、この必ず訪れる死と「最後の審判」を思うことで、悪からの「自由 liberty」を手に入れるのである。悪からの「自由」は、死を生の中に取り入れることで初めて可能になった。死が待っているからこそ、悪からの「自由」が可能になるのである。「他者への思いやり love」・「死後の救いを願う祈り prayer」・「他者との一体感 solidarity」・「自己犠牲の精神 sacrifices」が、悪からの「自由」を可能にしたのである。「いわゆる世界史 so-called world history」が可能になったのも、死者が過去に犯した罪を振り返る「死者の日」のお蔭であった。

戦時に我々は時間をコントロールする余裕などない。我々は自然の歯車に擦り潰されるがままである。我々に行動の自由が戻ってくるのは、平和が訪れたときである。しかし平和が戻ってきても、我々に未来への見通し、何を目指して生きるのかという方向性がない限り、せっかくの「自由」も

無意味である。死の確実性を思い知ることでヨーロッパ人は民主主義を習得し、ヨーロッパが1つであることを学び、また共通性・普遍性が大切であることを学んできた。ヨーロッパの近代文明は「死者の日」に始まると言っても過言でない。

「死者の日」が設けられたとき、カトリック教会は古い教会と決別したのである。この細やかな変化によって、クリュニー修道院は大変革を実現することになった。復活祭にはキリストの復活を祝うことで誰もが幸せを感じるが、実は悪人も復活を果たすのである。神は善人のみならず悪人も利用できるからである。古い教会は、この「悪人の復活を可能にした神の過失は何て素敵なことだろう O happy fault that produced this redeemer」と唄っていた。クリュニー修道院は、アダムが犯した原罪を軽く見る古い教会を嫌っていた。そこでクリュニー修道院では、「素敵な罪よ O felix culpa」と唄うことが禁じられた (Cardinale Schuster, O.S.B., Liber Sacramentorum, vol. IV, 1930, p.49 and p.18, Note, 1)。人生には悪いことと善いことがバランスよく起きるように思われていたが、「最後の審判」を意識せざるを得なくなって、そうは行かなくなったのである。

「死者の日」を祝う習慣は、教皇の反対にも関わらずクリュニー修道院から民衆の間に普及していった。今でもカトリック教会の中には「死者の日」を特別に祝うことを禁じているところがあり、また「全聖人の日」である11月1日に「死者の日」も一緒に祝うことにしているところがある。「死者の日」がカトリック教会全体で祝われることになる（これは第一次世界大戦中に実現する）はるか以前から、クリュニー修道院はヨーロッパ中に「死者の日」を普及させていった。クリュニー修道院の修道士たちは、ドイツ皇帝と協力してヨーロッパ人に、「死者の日」の悔悛と祈りを教え続けたのである。司教や教皇の協力なしにである。皇帝を支持したダンテのような人物はカトリック教会では少数派であったが、その始まりは現在のカトリック教会のあり様より古いと言える。ダンテはプロテスタントに通じる所があった。少なくとも両者は対立関係に無かった。ルターによる宗

教改革の時代に、ドイツ皇帝がカトリック教会に介入したからこそ、カトリック教会の伝統が全面的に絶たれることが無かったのである。カトリック教会には、ルターが反対した負の面以外に正の面も存在していた。それが皇帝と修道院であった。

その後も、例えばイギリスの教会のように（カトリック教会の教義や儀式のやり方は受け入れるがローマ教皇の権威には服さない）、「死者の日」の行事を守り、「最後の審判」の民主主義を受け入れる宗派は登場してくる。しかし、その伝統は絶えず消滅の危機に晒されていた。決定的な危機は第一次世界大戦のあとに訪れている。オーストリアの首相ドルフス Engelbert Dollfuss が暗殺されたとき、彼は「終油 last anointment」(死を目前にしたカトリック教徒が受ける秘跡。それで罪が許されるとされている)を受けられなかったし、1934年に突撃隊がヒトラーによって肅清されたとき（ドイツ国防軍の協力を得るためヒトラーは、軍隊化した突撃隊を肅清させるが、そのとき多くの幹部が殺害された）、その犠牲者は罪の告白も司祭による慰めの機会も奪われていた。第一次世界大戦が1つの文明を終わらせていたのである。「死者の日」が持っていた意味も、1934年に失われてしまった。誰にも訪れる死によって保障されていた民主制を、誰も信じなくなっていたのである。いま人は生まれの平等は信じるが、死ぬときは一人で孤独に死ぬのであって、死の平等を契機に連帯感が生まれるなどとは信じていない。

死を考慮に入れない文明は崩壊を免れない。苦しみを共有するからこそ創造的な活動が可能になるのである。共に涙できるからこそ復活が可能になるのである。クリュニー修道院では、「霊的な復活 spiritual regeneration」を「涙の賜物 dona lacrimarum」と呼んで<sup>よ</sup>いた。涙は血で汚れた土地を洗い流して、そこを清浄<sup>せいじょう</sup>にしてくれる。そのときヨーロッパには、古代ローマすら経験したことがない真の平和が<sup>おとず</sup>訪れることになるのである。

## 第10章 教皇革命

### 第1節 皇帝 vs. 教皇

皇帝はつねに軍隊と一緒にヨーロッパ中を移動して廻っていた。軍隊が無ければ、せつかくの裁定も効力を持たなかったからである。常設の統治制度が存在しないこと、これが当時のヨーロッパ最大の問題であった。ヨーロッパ中で皇帝に平和と秩序の実現が求められるようになると、もはや移動する宮廷では対応できなくなってきた。

フランスやイギリスの国王はドイツ皇帝の命令に従おうとせず、彼らも皇帝と同じ聖なる存在で、教会に対して支配権を持つとされる様になった。「王国 regna」も帝国の一部であり、国王たちも皇帝の考え方を採用する様になったのである。軍隊を率いる者なら誰であれ、聖職者を任命する権利があると考えたのである。この統治制度の弱点が表面化したのは、皇帝に忠誠を誓っていたスペインとシチリアがローマ教皇に忠誠を誓った11世紀のことであった。皇帝に教会を改革する力が無いことが明らかになったからである。スペインでは「勇者 Campeador」と呼ばれたエル＝シッド El Cid がトレドをイスラム教徒から解放し、南イタリアではロベール＝ギスカール Robert Guiscard がシチリア島を占拠した時のことであった。海軍を持たず、地中海沿岸に常設の統治拠点を持たなかった皇帝には、スペインやシチリアに平和を齎したり、そこで教会改革を実行したりすることは不可能であった。シチリアとスペインが教会に復帰することで、新しい時代のドアが開かれたのである。教会のあり方を決めるのは、皇帝でも国王でもなく教会自身であり、教会は皇帝や国王から独立した「国家 State」の1つとして登場してくるようになった。1060年に、シチリア島のノルマン人はローマ教皇に忠誠を誓ったが、そうすることで彼らは新しく「国家」を創設したのである。教皇庁は、皇帝の宮廷から独立した「教皇の宮廷 papal court」を生み出した。独自の「行政機構 Curia」を持つというのが教

教改革の時代に、ドイツ皇帝がカトリック教会に介入したからこそ、カトリック教会の伝統が全面的に絶たれることが無かったのである。カトリック教会には、ルターが反対した負の面以外に正の面も存在していた。それが皇帝と修道院であった。

その後も、例えばイギリスの教会のように（カトリック教会の教義や儀式のやり方は受け入れるがローマ教皇の権威には服さない）、「死者の日」の行事を守り、「最後の審判」の民主主義を受け入れる宗派は登場してくる。しかし、その伝統は絶えず消滅の危機に晒されていた。決定的な危機は第一次世界大戦のあとに訪れている。オーストリアの首相ドルフス Engelbert Dollfuss が暗殺されたとき、彼は「終油 last anointment」(死を目前にしたカトリック教徒が受ける秘跡。それで罪が許されるとされている)を受けられなかったし、1934年に突撃隊がヒトラーによって肅清されたとき（ドイツ国防軍の協力を得るためヒトラーは、軍隊化した突撃隊を肅清させるが、そのとき多くの幹部が殺害された）、その犠牲者は罪の告白も司祭による慰めの機会も奪われていた。第一次世界大戦が1つの文明を終わらせていたのである。「死者の日」が持っていた意味も、1934年に失われてしまった。誰にも訪れる死によって保障されていた民主制を、誰も信じなくなっていたのである。いま人は生まれの平等は信じるが、死ぬときは一人で孤独に死ぬのであって、死の平等を契機に連帯感が生まれるなどとは信じていない。

死を考慮に入れない文明は崩壊を免れない。苦しみを共有するからこそ創造的な活動が可能になるのである。共に涙できるからこそ復活が可能になるのである。クリュニー修道院では、「霊的な復活 spiritual regeneration」を「涙の賜物 dona lacrimarum」と呼んで<sup>よ</sup>いた。涙は血で汚れた土地を洗い流して、そこを清浄<sup>せいじょう</sup>にしてくれる。そのときヨーロッパには、古代ローマすら経験したことがない真の平和が<sup>おとず</sup>訪れることになるのである。

## 第10章 教皇革命

### 第1節 皇帝 vs. 教皇

皇帝はつねに軍隊と一緒にヨーロッパ中を移動して廻っていた。軍隊が無ければ、せつかくの裁定も効力を持たなかったからである。常設の統治制度が存在しないこと、これが当時のヨーロッパ最大の問題であった。ヨーロッパ中で皇帝に平和と秩序の実現が求められるようになると、もはや移動する宮廷では対応できなくなってきた。

フランスやイギリスの国王はドイツ皇帝の命令に従おうとせず、彼らも皇帝と同じ聖なる存在で、教会に対して支配権を持つとされる様になった。「王国 regna」も帝国の一部であり、国王たちも皇帝の考え方を採用する様になったのである。軍隊を率いる者なら誰であれ、聖職者を任命する権利があると考えたのである。この統治制度の弱点が表面化したのは、皇帝に忠誠を誓っていたスペインとシチリアがローマ教皇に忠誠を誓った11世紀のことであった。皇帝に教会を改革する力が無いことが明らかになったからである。スペインでは「勇者 Campeador」と呼ばれたエル＝シッド El Cid がトレドをイスラム教徒から解放し、南イタリアではロベール＝ギスカール Robert Guiscard がシチリア島を占拠した時のことであった。海軍を持たず、地中海沿岸に常設の統治拠点を持たなかった皇帝には、スペインやシチリアに平和を齎したり、そこで教会改革を実行したりすることは不可能であった。シチリアとスペインが教会に復帰することで、新しい時代のドアが開かれたのである。教会のあり方を決めるのは、皇帝でも国王でもなく教会自身であり、教会は皇帝や国王から独立した「国家 State」の1つとして登場してくるようになった。1060年に、シチリア島のノルマン人はローマ教皇に忠誠を誓ったが、そうすることで彼らは新しく「国家」を創設したのである。教皇庁は、皇帝の宮廷から独立した「教皇の宮廷 papal court」を生み出した。独自の「行政機構 Curia」を持つというのが教

皇の夢であった。

こうして皇帝の宮廷から教皇庁が抜け出し、ついで諸侯会議が抜け出し、さらに大臣会議（内閣）が抜け出して行くことになる。つまりヨーロッパの革命は、皇帝の宮廷が解体していく過程そのものであった。ヨーロッパの憲政史とは、宮廷の解体から内閣の登場、そして軍隊に支持された独裁者の登場の歴史ということになる。ただし、最後は何も生み出さない軍隊の登場であった。ムッソリーニとヒトラーは国の衣装倉庫からシャツだけを選び出してきたが（ムッソリーニは黒シャツ、ヒトラーは褐色シャツ）、皇帝の宮廷や教皇庁の衣装に比べれば、彼らのシャツ姿など惨めなものであった。11世紀の人間なら、彼らを「裸体主義者 nudists」と勘違いしたことであろう。

教皇庁は、皇帝の宮廷にあった「要塞教会 fortress church」（外敵の襲撃に備えて要塞のように作られた教会）の一角に作られたようなものであった。シチリア島・アプリア地方・カラブリア地方はフランク帝国に属したことは一度もなく（ビザンツ帝国領であった）、ノルマン人がローマ教皇のために征服した地域であった。かつて一度も神聖ローマ皇帝の支配下に置かれたことは無かったのである。ノルマン人の支配者ロベール＝ギスカールは、征服した旧ビザンツ帝国領をローマ教皇に捧げた。その20年後にはトスカナ地方もローマ教皇領とされたが、皇帝はこの寄贈を認めていない。しかしこれが転機となって、何世紀ものあいだ皇帝領であった土地が皇帝の了解なしにローマ教皇に寄贈されるようになった。こうして教皇庁は、もはや皇帝の宮廷内に収まらなくなっていた。晴れて主権を認められた「宮廷 court」となったのである。教会法も「天の法 Ius Poli」と呼ばれるようになった。教皇が月と星が描かれた皇帝の外套に怯えることが無くなったのである。昇りくる太陽のように、教皇は教皇庁を中心にした新しい文明の夜明けを告げる存在となった。

信者ひとり一人が教皇庁に不満を訴え出る権利を認められたとき、教皇庁は教会に対する統制を確立することができた。司教たちは、司教区の信

者がいつ教皇庁に訴えを起こしても対応できるよう備えておく必要があった。いまでも信者は、誰かの婚姻に異議がある場合は教皇庁に訴え出ることができる。司教たちは5年ごとに教皇庁に集められることになり（「使徒訪問 ad limina apostolorum」と呼ばれる）、教皇庁は皇帝を頂点とする帝国の封建的な忠誠の体系に代えて、ローマ教皇が個々の司教・修道院長・信者を統制する体制を作り上げたのである。

もともと皇帝はローマ教皇のことを「全教会の母 Mother of All Churches」と呼んでいたが、教皇革命によってローマ教皇は、個々の信者を統制下に置く「全ての信者の母 mother of every Catholic individual」となった。1100年以前にこんな考え方は無かった。これこそが教皇革命の成果であった。

## 第2節 遠い過去に投影された新しい未来

教皇座に就いた1人の禁欲的な修道士（グレゴリウス7世）が、「最後の審判」を見据えて「向こう側の世界から still from the beyond」語り始めた。修道士は「回心 conversion」によって「象徴的に死ぬ be buried in symbolical forms」。自らの生命・財産・家族を修道院長に預け、あらゆる意味で「新に生まれ変わる lived and anticipated a spiritual world」のである。

「社会的な死 civil death」、つまり修道院に入ることで死んだとされること、これが修道士になることの意味であった。この「修道士が社会的な死で手にする精神的に有利な地位 monk's spiritual world of after-death」、これがグレゴリウス7世の教会改革の出発点であった。子供の死亡率が高く、老年を迎える人間が少なく、若者がリーダーシップを発揮していた時代、我々の先祖が考え出したやり方がこれであった。人間が60～90歳まで生きることが珍しくなった現在では、統治制度で年齢はさほど問題にならない。しかし当時は老人の数が少なく、若いうちに死を迎える者が多かったことを考えれば、修道士の存在は欠かせなかった。グレゴリウス7世が始めた統治制度は「人為的に作られた老人支配 senescence by establishment」とでも呼

べそうだが、残念ながら英語の senescence にはラテン語 senectus にあるような老人崇拜のニュアンスはない。「耄碌した senile」と同じような意味しか残っておらず、「男らしさ（とくに生殖能力の高さ）virility」を崇拜する英語世界で、老人は政治的に重要視されない。しかしドイツ語世界では、若者が軽視されて老人が崇拜されている。ドイツ語で「老人 Greis」（senex）と言えば善い意味であり、「若造 Jüngling」となると滑稽なニュアンスさえある。ドイツで「青年運動 Youth Movement」が盛んなのは、この若者軽視の風潮に対する反発が強いからである。11世紀の修道士たちは、この老人を取り巻く特殊な事情（若者の数に比べて老人が少な過ぎる）に対処していたのである。このドイツに於ける「父親支配 paternalism」とよく似ているのが、イタリアの「母親支配 motherhood by establishment」だが、この問題はこれ以上ここで論じることは止めて、グレゴリウス7世による教会改革に話を戻すことにする。グレゴリウス7世によって制度化された「老人崇拜 cult of grandfather」は、「精神的な情熱の強さ passions of the soul」と「身体能力の衰え changes of the body」の間を上手く取り持つためであった。「本物の聖職者 Spiritualis」がキーワードであった。すべての信者の信仰上の父であるローマ教皇は、新しく登場してきた「本物の聖職者」のシンボルであった。皇帝の支配下にあった教会に対抗するため、聖職者の独身制が提唱された。

教皇革命を開始するにあたり、まずローマ教皇が命じたのが妻帯した聖職者の追放であった。妻帯した聖職者は、世俗の信者たちと感情・利害を共有していた。東方正教会では、聖職者は聖職に就く以前から結婚しており、俗人の世界を経験してから聖職に就くので、妻帯に特別な意味はなかった。ところがカトリック教会では、聖職者が俗人の世界を経験する期間は可能なかぎり短く設定され、逆に禁欲の期間は可能なかぎり長くなるように設定されている。そのため、聖職に就くことが特別な意味を持つことになった。平均寿命が短かった当時、これが「老人支配」を可能にしたのである。その象徴が聖職者の独身制であった。妻帯した聖職者は俗人との利害関係に支配されやすく、皇帝の支持者になる可能性が大であった。

最初のうちは聖職者の独身制を支持する者も少なかったが、50年もすると独身制を支持する聖職者は大きな勢力に成長していた。グレゴリウス7世は、この新しく登場してきた聖職者を「本物の聖職者」と呼んだのである。彼らこそが教会改革の担い手であった。もともと「聖職者 Clergy」という言葉はギリシャ語起源で、それは「選良 chosen people」を意味していた。それに対して「本物の聖職者」とは、「本物でない聖職者 mudus」（「世俗的な聖職者」という意味だが、この言葉自体が語義矛盾である）と区別された聖職者であった。「本物でない聖職者」とは腐敗した聖職者であり、追放し排除されるべき存在であった。洗礼を受けて聖職者に叙任されていても、本当の意味で「回心」したとは見なされていなかった。彼らは「聖なる holy」存在ではなかったのである。「本物の聖職者」がやるべきことは、ローマ教皇に協力して世俗の支配者や皇帝と闘うことであった。皇帝派や国王派の司教たちは聖職者が戦争を支持することに反対であったが、「本物の聖職者」は十字軍運動の支持者であった。

この「聖職者」から「本物の聖職者」への転換をよく象徴しているのが、ローマ教皇に対する忠誠の誓いであった。その結果、ローマ教皇はヨーロッパ全域の聖職者に対して支配権を確立することができた。聖職者は皇帝の支持者であることを止め、ローマ教皇による教会改革の支持者となった。ミサのたびにローマ教皇の名前が唱えられることになり、ローマ教皇は全ての信者にとって身近な存在となった。

ローマ教皇の名前も教会改革の手段となった。ローマ公会議で聖職売買の禁止が決議され、教会改革が始まった時のローマ教皇は（1046～1145年）、2世を名乗った者が圧倒的に多い（18人中13人）。とくに十字軍が盛んであったウルバヌス Urbanus 2世（1095年に十字軍を公式に宣言）からルキウス Lucius 2世までは、8人全員が2世を名乗っていた。

教会改革を開始したグレゴリウス7世が2世を名乗らなかったのは、まず自らが仕えたグレゴリウス6世が1046年に意に反して辞任させられたことに抗議するためであり、また6世紀末～7世紀初めに教会改革を実

現した教皇として有名だったグレゴリウス1世（大グレゴリウスと称される）に肖るためでもあった。

2世を名乗った教皇たち

1046～47 クレメンズ Clemens 2世

1048 ダマスクス Damascus 2世

1055～57 ビクトール Victor 2世

1059～61 ニコラウス Nicolaus 2世

1061～73 アレクサンデル Alexander 2世

1088～99 ウルバヌス Urbanus 2世

1099～1118 パスハリス Paschalis 2世

1118～19 ゲラシウス Gelasius 2世

1119～24 カリクスツス Calixtus 2世

1124～30 ホノリウス Honorius 2世

1130～43 インノケンチウス Innocentius 2世

1143～44 ケレスチヌス Caelestinus 2世

1144～45 ルキウス Lucius 2世

ルキウス2世のあと313年間のあいだは、誰一人として2世を名乗った教皇はいなかったが、ルネッサンス教養人の教皇ピッコロミニ Piccolomini がウエルギリウス Vergilius の書いた『ローマ建国神話』の英雄であった「敬虔な pious」アエネアス（つまりピウス1世）に因んで、ピウス2世と名乗ったことで2世が復活する。ただしローマ帝国の英雄アエネアスは異教徒であって、キリスト教徒として「敬虔な」訳ではなかった。

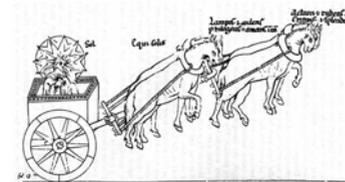
1458～64 ピウス Pius 2世

1464～71 パウルス Paulus 2世

1503～13 ユリウス Julius 2世

1555 マルケルス Marcellus 2世

10世紀末までの教皇は、自分の洗礼名をそのまま教皇名として名乗ることが普通であった。つまり教皇名として2世を名乗ることが出来なかつ



2頭の馬を並べて繋ぐ新しい繋駕法で、それまでの6倍の12人を一度に運べるようになった。

4頭の馬で戦車を引いている最古の図

世と称される）が残した文書から読み取ることができる。500年前から続いていた十二使徒以来の伝統的な権限を、皇帝から奪ってみせたのである。500年間も続いていた事実が持つ意味は大きかった。そのことに対してアンセルムは次のように反論している。

「この皇帝による司教の叙任は遙か昔から行われており、何の問題もなかったと言う者がいる。しかし、それは根拠のない主張である。永く続いていた慣行だからといって、皇帝による教会支配という間違ったやり方は許されるべきではない。ならば自らの刑死によって人類を救うまで、5000年ものあいだ人類を悪魔が支配するに任せていたキリストの責任はどうか」（Migne, Patrologia Latina, 149, 466）。5000年という年月の長さで悪魔の支配が正当化されることは無いというこの考え方は、当時としては革命的な考え方であった。「伝統」が無意味になったのである。この古代以来の古い考え方に代って、新しい考え方が登場してきた。

たのである。2世を最初に名乗ったのはオットー3世の家庭教師であったオリヤックのジェルベール Gerbert d'Aurillac で、教皇名としてコンスタンチヌス大帝に洗礼を施した教皇シルウエステル Sylvester の名前に因んでシルウエステル2世と名乗ることにしたが、それで彼は500年前の大グレゴリウスの時代を再現できたと考えていた。

このことがどれほど革命的なことであったかは、ルッカのアンセルム Anselm of Lucca（アレクサンデル2世として教皇に就任した叔父のアンセルムと区別するため、アンセルム2

5000年という歳月の長さによって悪魔の支配が正当化されないように、500年という歳月の長さによって皇帝の教会支配は許されるべきではないのである。つまり過去が未来を支配することがあってはならないのである。人間とはかく惰性的に慣習や伝統を守りたがるもので、安定した社会秩序のなかでは未来が軽視され、過去の伝統が重視され勝ちである。未来が信用を勝ち取ることは稀で、既存の支配体制が機能していないことが判っていても、反乱や蜂起が成功しない理由はここにある。反乱や蜂起はどうか判らない未来に過ぎない。具体的にイメージできる支配体制や目に見える秩序なしでは、大衆が恐怖する。イメージできない未来のために大衆は生きたりはしない。多くの問題と疑問に直面した時、人は具体的な秩序のイメージ・経験済みの伝統・眩暈がしたときに攫める手摺りを必要とする。

革命は、過去を掘り起こしてくることで変革を実現してきた。原初の時代の亡霊が後の悪を退治して来たのである。ルソーが憧れた原始状態、ヒトラーが復活させようとしたゲルマン人の伝統、コーク卿 Sir Edward Coke にとってのマグナカルタ、ルターの「原始キリスト教」、こうしたものに負けず劣らず未来を見据えていたのが、5000年ものあいだ悪魔の支配をキリストが許していたというローマ教皇の主張であった。神の聖なる権利と雖も、時間の経過によって正当化されることは無いのである。ヨーロッパの革命は、その全てが過去と未来を総動員して腐敗した現在を糾弾する革命であった。革命が反乱や蜂起に優るのは、それが人類の過去に対して責任を負うからである。それ故に革命が要求する流血の惨事も許されるのである。馬鹿げた権力欲や単なる伝統の拒否とは訳が違っているのである。目の前の腐敗した体制は、未来と過去に責任を負う革命が解体する。人間の怠惰と盲目が引き起こした、単なる偶然の産物として処理されるのである。真に意味ある過去とは、新しい未来を指し示す過去のことである。革命は、この遠い過去に目指すべき目標を投影していた。

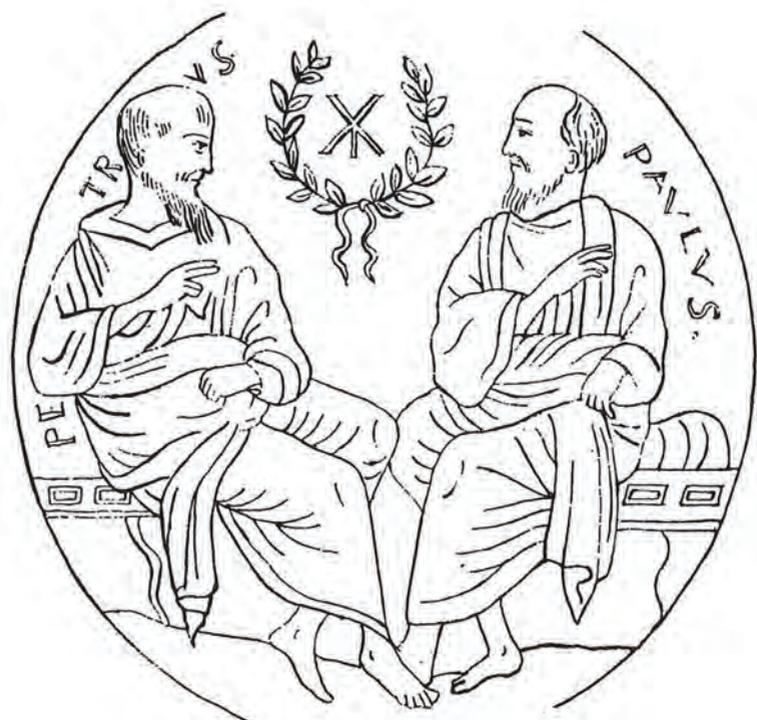
物事を表面的にしか見ない者は、この過去への目標投影が持つ意味を見

逃し勝ちである。ナポレオンが自らをアレキサンダー大王やカエサルに例えたこと、あるいはクロムエルがイギリス人を神の選民と考えたことは、果たして無意味だったのだろうか。答えは否である。革命が過去に目標を投影することは決して無意味ではない。この過去が持つ独特な役割を認めない者は、過去が未来に対して持つ意味を無視することになる。革命を実現するためには、人間は歴史を意識する必要がある。

たしかに革命には「混乱 chaos」が付き物である。革命は古い秩序が崩壊した時に起きる。つまり古い秩序が「活力 spirit」を失った時、革命は勃発するのである。革命が起きたばかりの頃は、人を奮い立たせるような新しい言葉は存在しない。既存の言葉や考え方は古い秩序と密接に結び付いており、古い秩序と一緒に崩壊するからである。伝統的な言葉と結び付いた古い価値体系を崩壊させるのが革命であり、このような特徴によって革命は単なる「蜂起 Putsch」やクーデターと区別される。

革命によって発生した「混乱」を終息させるために革命の先頭に立つ者は、少数に限られる。しかし、彼らこそ未来を切り開く者なのである。彼らは少数派に過ぎないが、革命を起こした彼らの国も、広い世界の一部に過ぎない。しかし革命が掲げる「理想 inspiration」は、強力な革命の「推進力 driving force」となって外の世界に広がって行く。そのとき必要とされるのが新しい「世界語 universal way of expression」である。一方で死につつある過去の雄弁な言葉があり、他方でまだ自らを表現する言葉を持たない新しい「理想」が存在するが、このジレンマを解決してくれるのが「全人類共通の歴史 universal history」である。そのおかげで革命は、誰にでも理解可能な言葉を持つことになる。空虚だった未来が具体的な物語として織り出されるのである。

ただし、そのためには1つ条件があった。そこに織り出される物語は「全人類共通の歴史」、つまり全人類を包含するような物語、さらに地球規模の重要性を持つものでなければならない。革命とは無縁な反乱者や独裁者なら、全国民の自宅の壁に自分の肖像画を飾らせるだけで満足するだろう



最古のペテロ像とパウロ像（3世紀）

が、革命家は世界中の人間に理解可能な新しい言葉を見つけ出してくる必要がある。ヨーロッパ世界が1つに纏まっていたのは、ギリシャ語やラテン語の本や絵画が全ての家庭に存在するからである。ギリシャ語とラテン語は、イタリア人・スウェーデン人・ポーランド人・スペイン人にとって共通の言葉であった。同じように革命も「全人類共通の歴史」を意識することで、特定の国や地域を超えて「世界的な規模で universal」影響力を発揮できるようになるのである。

革命は好き勝手に過去を選んで、そこに目標を投影する訳ではない。本当の意味での歴史は、世界の歴史・全人類の歴史・「全人類共通の歴史」でなければならない。過去に対する責任感が存在して初めて、歴史の歪曲

や神話への逸脱を防ぐことが可能になる。「全人類共通の歴史」が存在して初めて、革命は現実からの逃避や「混乱」から免れることができる。「全人類共通の歴史」を意識することで初めて、弱い個人も強固な既存の秩序や神話に対抗することが可能になる。ロシア革命で革命派であるか反革命派であるかを決めたのは、この「全人類共通の歴史」の有無であった。それを持たなかったのが反革命派であった。未来に対する真の責任感を持っていたのは、「全人類共通の歴史」という視点を持っていた革命派であった。

### 第3節 経済革命

ヨーロッパの古い荘園制度を崩壊させたのは、新しい技術革命であった。19世紀に石炭と電力が登場して革命が実現したように、ヨーロッパ中世に革命を齎したのは輸送能力の急激な発展であった。紀元1000年までのヨーロッパでは、一度に運べる物資の量は精々400ポンドから500ポンド（約180キログラムから225キログラム）に過ぎなかった。それが5000ポンド（約2.4トン）も運べるようになったのである。新しく発明された馬具のお蔭で、馬が持つ牽引力をフルに発揮できるようになった。さらに4輪の荷車に、4頭・6頭・8頭の馬を繋いで引かせることも可能になった。大勢の人間を一度に運ぶことが可能になったばかりか、それまでは河川を使って運ぶしかなかった穀物・木材・石が、道路を使って運べるようになったのである。

この技術革命が齎したものは大きかった。ヨーロッパの有名な石造りの橋が建設されたのが1100年頃だったのも、そのお蔭である。それまで木造だった教会が石造りに変わり、当時の人々を驚かせたのもこの技術革命のお蔭であった。風車や水車も当時の発明品だが、そこで粉にするために遠くから大量の穀物を運んで来れたのも、この技術革命のお蔭であった。荘園領主は街道沿いに石造りの城を建設したが（1050～1150年に何千という数の石造りの城が登場している）、それも技術革命のお蔭であった。



パウロ像の変化：左側のパウロが持った巻物には「私が今あるのは神のお陰 Dei gratia sum id quod sum」とある。オットー3世は自らの統治権の根拠を「神のお陰 Dei gratia」に求めた。右側の剣を持ったパウロ像は、「エフェソス人への手紙」(6:17)にある「霊の剣」と「ヘブライ人への手紙」(4:12)にある「神の言葉は…あらゆる諸刃の剣にまさって切れ味があり」による。小さなトークンには、それぞれ天国の鍵を持ったペテロとパウロ、鍵と剣を持ったペテロとパウロが描かれている

その結果、人力に依存することで成立していた荘園制度が崩壊することになった。領主の武力は荘園で働いていた「下僕 knave」が担っていたが、その「下僕」が領主の邸宅から遠く離れた石造りの城に派遣されるようになったのである。広大だった荘園は、より規模が小さい「城代区 castellany」に細分化されることになった。その結果、この細分化された「城代区」を1つに結び付ける新しい封建法が必要になってきた。新しい輸送技術に対応した新しい社会制度が登場してくることになったのである。

この変化の先頭に立ったのがカトリック教会であった。新しく登場して

きた軍事力が古い荘園領主のものか、それとも新しく登場してきた社会階級のものなのかを決めたのはカトリック教会であった。カトリック教会が封建法の最終審を担当することになったからである。教皇庁を意味する言葉「クーリア Curia」は、11世紀以前には無かった言葉である。もはや領主の邸宅には住まず、遠く離れた城に住むことになった領主の軍隊を1つに纏める封建法の最終審、それが当時の「クーリア」であった。

アメリカ人は封建法と聞くと中世の暗黒時代を連想するようだが、この封建法のお蔭で「下僕」は領主の直接的な支配を逃れることが出来たのである。のちの騎士階級の登場である。この社会変化に精神的な裏づけを与えたのがカトリック教会であった。一見すると神学論争にしか見えなかったものが、実は新しく登場してきた社会情勢を正当化するための争いだったのである。

#### 第4節 パウロに助けられたペテロ：

##### 「教皇革命 Papal Revolution」

聖職者が皇帝の支配を拒否するようになった。叙任権闘争である。それまで皇帝が司教や修道院長を任命していたが、ローマ教皇が任命権を主張するようになった。皇帝に代わってローマ教皇がカトリック教会を代表すべきだと主張するようになった。この教皇による「教皇革命」は、現在の「大衆の反乱 revolt of the masses」に匹敵する運動であった。ローマ教皇は、大司教から教区司祭に至る全ての聖職者を皇帝の支配から解放しようとしていた。ローマ教皇は領主の司祭支配や皇帝の司教支配を排除し、ローマ教皇こそが全ての信者の守り手であると主張するようになった。ペテロの代理人たるローマ教皇は、皇帝に代わって全ての教区教会や司教座教会を統治すべきだと主張するようになった。

このグレゴリウス7世による「教皇革命」について従来の定説は、11世紀のローマ教皇と皇帝が置かれていた状況がよく判っていなかった。

ローマ教皇は何ら新しいことを始めた訳ではなかったとか、ただ従来通りのやり方を繰り返していただいただけであったと主張する者もいれば、ローマ教皇は独裁者に過ぎず、職権の乱用者に過ぎなかったと主張する者もいた。前者は革命の何たるかが判っておらず、後者は革命が不可欠であったことを理解していない。また両者とも「教皇革命」がヨーロッパにとって意味したことが判っておらず、ペテロの権威を受け継ぐ教皇座に起きたことが、ヨーロッパの全てを変えてしまう革命的な出来事であったことが判っていない。

その理由として考えられるのは、この革命が1人の教皇によって起こされたものであったという事実である。我々が知っている革命は大衆によるもので、革命が1人の教皇によって起こされたことなど信じられないが、革命に決まった遣り方などは存在しない。では革命が成功するための「必要かつ十分な条件 *conditio sine qua non*」とは何なのか。

「教皇革命」はグレゴリウス7世が1人で起こした革命であった。ロシア革命はプロレタリアートが起こした革命だとされているが、実際にはレーニンと僅かな数の取り巻きが起こした革命であった。既に見てきたように、革命は皇帝の宮廷から大衆集会へ、また宮廷貴族の豪華な衣装から制服のシャツ姿へと、特別な理由が無くとも支持者の数が増えていくように思えるが、それは目指す目標が「全人類共通の *universal*」ものだからである。特定の指導者の役割が全てのように見えても、それは事実と反する。1人の指導者が果たす役割には限界がある。革命には、常に指導者とその指示に従う多くの者が存在する。「教皇革命」は、かつてヨーロッパが経験したことのない大きな社会変動であった。それまで誰も疑うことがなかった権威の象徴、つまり宮廷と荘園の権威を根底から突き崩す革命だったのである。その結果、農民・聖職者・騎士・「下僕」たちが荘園の束縛から解放された。教皇は「教皇革命」によって、個々の荘園を「宗教的な普遍主義 *spiritual universalism*」に結び付けたのである。

「教皇革命」の開始は、1046年にストリ Sutri で開催された公会議に於い

てであった。教会改革の熱意に燃えた皇帝ハインリヒ3世は、鼎立していた3人の教皇を廃して別の教皇を任命した。クリュニー修道院の修士たちはハインリヒ3世のこの行為を、神による奇蹟と呼んで褒め称えたが、若い聖職者たちは不満であった。皇帝がローマ教皇を任命する遣り方を批判する声が、南ベルギー（ワルーン地方）やフランスで挙がることになった。

「ローマ教皇は司教が全員で集まって選ぶべきであって、皇帝に任命された皇帝の奴隷であってはならない」。「教皇革命」を呼びかける最初の文書が登場してきた。カトリック教会は、現在に至るまでこの原則に忠実である。では誰が教皇を選ぶのか。教皇を選ぶ集団が教会の在り方を決める訳だが、それは教皇が自分を選ぶ集団を通じてしか教会を支配できないからである。そして教皇を選ぶ新しい遣り方、つまり世俗の支配者に聖職者を選ばせない遣り方が世界中の教会で採用されることになった。

現在、教皇を選ぶのは枢機卿たち、つまりローマ市及びその近郊の司教たち、および特別に選ばれたその他の聖職者・助祭ということになっているが、実際にはローマ市に限定されることはなく、半分はイタリア人、半分は外国人になっている。現在（1938年当時）の教皇も、イタリア人ではあってもローマ市の出身者ではない。しかし11世紀の叙任権闘争のときは、事情が違っていた。

教会改革の推進者がまず遣ったことは、ローマ市の貴族を教皇選挙から排除することであった。ローマ教皇を選べるのは聖職者だけとしたのである。ローマ市の「キリスト教徒 *populus Christianus*」（もちろん俗人であって聖職者ではない）は教皇選挙に参加できないことになった。1059年の教皇令により、ローマ教皇は枢機卿が選ぶことになった。ただし皇帝には「拒否権 *jus exclusive*」が認められており、最後に拒否権が行使されたのは1903年のことであった。ランポーラ Mariano Rampolla 枢機卿が教皇位に就くことをオーストリア皇帝フランツ＝ヨーゼフ1世が拒否したのである。オットー大帝時代に皇帝が持っていた権限がこれであった。

1046年以降、皇帝とローマ教皇の対立は決定的となった。ローマ教皇

が皇帝の支配から独立した結果だが、イタリア・スペイン・バルカン半島で新たに登場してきた問題を処理するためには、ローマ教皇は皇帝にとって必要な存在であった。ハインリヒ3世は自らの支配地を拡大するためにローマ教皇を利用しようとしたが、そのためにローマ教皇も支配できるような独裁的な権限を手に入れたのである。ところがその結果、皇帝の支配が及ばない地域では、ローマ教皇は自らの判断で何も出来なくなった。11世紀には、まだイスラム教徒の脅威は現実のものであった。それに対抗するためには、どうしてもローマ教皇に自由を認めるしか方法がなかったのである。

ローマ教皇は「世界 orbis」を念頭に置かざるを得なくなった。それまでローマ教皇は「世界」を念頭に置くようなことはなく、教皇のローマ教会は「最高位の教会 prima sedes, caput mundi」に過ぎず、無数の教会が集う銀河の中で最も明るく輝く星に過ぎなかった。1074年に「教皇革命」の支持者の1人がグレゴリウス7世に、こんなことを書き送っていた。グレゴリウス7世は「周辺の星から光を集める世界の中心」である。「都市 urbs」ローマは「世界」の中心だというのである。「教皇革命」が成功裡に終わった後ラテラノ公会議（1123年に召集された最初の世界教会会議）で、「世界」と「都市」は一体化されることになった。ローマ教皇は祝福の言葉と命令を、「都市と世界 urbi et orbi」に対して与えることになった。それは丸で、「ローマ教皇が司教たちを下働きの小作人にする」ようなものであった。1139年の世界教会会議では、カトリック教会の高位は教皇が臣下に与える封土のようなものだと宣言されている。

ローマ教皇は、キリスト教徒にエルサレム解放を目指す十字軍に参加するよう呼びかけることで、かつて存在した海洋帝国ローマを再興させることになった。十字軍はフランスからシチリア島やパレスチナに向かう航路を切り開くことで、北海（ドイツ）からローマに向かう旧い通商路の重要性を低減させてしまった。ペテロの代理人たるローマ教皇の腐敗で失われていたペテロの権威は、パウロのおかげで皇帝の影響下から抜け出したの

である。もともと熱心なユダヤ教徒（最初からキリスト教徒であったペテロから見れば異教徒）であったパウロは、「世界」を代表する使徒に相応しい人物であった。こうしてローマ教皇は「ペテロとパウロの代理人 vicar of Peter and Paul」となったのである。

皇帝には、使徒の伝統を継ぐ宗教的な権威が認められないことになった。グレゴリウス7世は、皇帝が数多く存在する支配者の1人に過ぎないとしている。「普遍的な」権威を認められた唯一の支配者は、皇帝でなくてローマ教皇なのである。ローマ教皇こそが「本物の皇帝 true emperor」であった。

十字軍を呼びかけるローマ教皇は、世俗の支配者たちの権威を超えた存在であった。ハインリヒ3世は、自分が教皇位に就けてやった恩知らずのローマ教皇に廃位を宣告した。また神聖ローマ帝国の支配者たちも「退位せよ、ヒルデブランド（教皇に就任する前のグレゴリウス7世の名前）Descende, descende, Hildebrand」と声を揃えて叫び始めた。しかし、その時グレゴリウス7世は天上を見ていたのである。彼は地上の人間を相手にするつもりはなかった。皇帝や国王は、彼に言わせれば「身の程知らず slanderers」であった。彼は「身の程知らず」を相手にする積りはなかった。

ヨーロッパ初の革命は修道士用の小さな部屋で、1人の修道士が始めた革命であった。50年も続くことになる流血・無秩序・絶望の切っ掛けとなったヨーロッパ初の革命は、グレゴリウス7世が「皇帝のような修道士 monk-emperor」になる決心をしたときに始まったのである。つまり全欧に散在する分院を統制下に置いたクリュニー修道院のごとく全欧の教会を統制下に置き、かつ天国の鍵を手にしたペテロの権能をも手にしたのである。

グレゴリウス7世は修道士時代に様々な役職を経験し、かつヨーロッパ各地を旅行して廻っていたと非難されていたが、これはベネディクトス会則に違反していた。ベネディクトス会則によると、修道士は決められた修道院に留まって居なければならないのである。しかし彼はクリュニー修道院の改革精神（全欧に分院を持っていたこの修道院の改革運動は全欧規模のものであった）の体現者であって、特定の修道院に留まっているような人物

ではなかった。またローマ教皇（つまり聖ペテロ教会の司教 bishop of St. Peter）に就任する以前、彼はローマの聖パウロ San Paolo 修道院の院長であった。彼を「聖なる悪魔 Holy Satan」と呼んだダミアニ Petrus Damiani は自ら書いた讚美歌のなかで、特定の場所に縛られずに各地を宣教して廻ったパウロを讃えていた。グレゴリウス7世は、ペテロよりパウロに優位を認めていたこの讚美歌を聞いたはずである。「パウロはキリストに似ている。キリストはエルサレムで刑死したが、エルサレムを世界の中心とはしなかった。キリストは世界中の全ての教会に臨在する。同じように、パウロも特定の教会を最頂にするとはなかった。特定の大聖堂を持たなかったパウロは神の右腕であり、その右腕を世界中に広げて全ての教会を支配する」のである。「キリストと同じく世界の中心 heart of the world であり、キリストに負けないだけの受難を経験している」ということで、パウロの墓は巡礼の対象になっていた。しかし神の右腕と讃えられるようになってからは、パウロは墓から出て朝焼けの青空に昇っていったのである。この世界を天空から眺めるパウロは、グレゴリウス7世にとって導きの星であった。ながく墓が崇拜の対象になっていたが、いまや「天の法 Jus Poli」（1100年頃の教会法はこう呼ばれていた）を制定する存在と化したのである。

さらにパウロは2本の剣を手にしていて、まるで旧約聖書に登場してくるベニヤミンのようであった。旧約聖書の中でベニヤミンは、両手つまり「世俗的な支配権 temporal power」と「宗教的な支配権 spiritual power」を使うことが認められていたが（『士師記』3:15。なおベニヤミンは部族名で、神に遣わされたのはエフド。手にしていたのは両刃の剣であって2本の剣ではない）、パウロが2本の剣を手にしていても偶然ではない。つまり紀元1100年まで、ペテロが手にすることがなかった「世俗的な支配権」をパウロは手にしたのである。このパウロが手にした新しい支配権を、グレゴリウス7世は利用することにしたのである。

こうしてパウロが手にした「世俗的な支配権 sword of faith」をローマ教皇も手にすることになった。そのとき伝統に反して、パウロはペテロが死

んでから1年後ではなくて、ペテロと同じ日に死んだとされるようになった。また、それまで教会法で言及されることが無かったパウロに関する記述が、教会法に挿入された。ローマに巡礼として訪れた信者には、パウロがペテロと共に天国への鍵を持つ像を刻印したコインが販売されるようになった。これを始めたのがグレゴリウス7世であった。のちには、教皇の印章にもパウロがペテロと一緒に登場することになる。1122年の「ウオルムス協約 Wormer Konkordat」では「カトリック教会の普遍性 Universal Church」が謳われ、ペテロの伝統だけを継ぐローマの教会とカトリック教会は区別されることになった。こうしてローマ教皇は、すべての司教に代わって世俗の支配者と交渉する権利を手に入れたのである。それこそがペテロとパウロの教会であって、ローマの司教座はペテロの名前だけを冠することになった。

パウロは新しい栄光に包まれることになった。宣教が取り柄でしかなかったパウロが、「普遍的なカトリック教会」のシンボルとなったのである。それまで1000年もの間「普遍的な universal」とか「世界規模の ecumenical」といった言葉を使うのを避けてきた教皇が（ローマの司教に過ぎない教皇がそう名乗ると他の司教との関係で問題になった）、「パウロの代理人 Paul's vicar」ということで「世界のカトリック教会を代表する地位 universal apostolic throne of the whole world」を主張するようになった。皇帝に代わって「普遍的な」地位を主張するようになった教皇は、パウロというシンボルを手に入れることで、教会の古い秩序に対して組織的な抵抗を開始することが出来たのである。400年後にそのことを思い起こさせたのがルターであった。400年の間ペテロとパウロは同じ役割を担う者とされてきたが、さらにその先を行こうとするルターは、ヨハネにまで遡る必要があった。こうして教皇を批判して新しい時代を開く宗教改革が、ヨハネをシンボルにして始まるのである。そのときは、最早パウロが登場してくることは無かった。教皇がパウロに取って代わり、教皇がパウロの果たすべき役割を果たすようになっていたからである。

こうして紀元1000年頃に皇帝の宗教的な役割を支えてきたパウロは、教皇のものとなったのである。しかし、その実現には多くの努力が必要とされた。たしかにパウロはペテロと共にローマで殉教・埋葬されたことになっているし、ローマ教会の創設者の1人とされているが、最早ローマ教会の使徒というよりキリスト教会全体の使徒に変わっていた。グレゴリウス7世の友人ダミアニは、ペテロがローマの教会を主宰しているのに対して、パウロはキリスト教世界の全ての教会を主宰しゅざいしていると言ったが、それも当然であった。いまや教皇はパウロの後継者として、聖職者全体を代表して世俗の支配者と司教のあいだに発生してくる問題を処理することになった。

「都市ローマ urbs」と「新しいエルサレムたる世界 orbis」は、こうして新しいビジョンの登場と共に1つに融合することになった。シュペンゲラーは、古代ギリシャの文明を「ユークリッド的・特殊ギリシャ的・個別的 Euclidian, local, atomistic」と呼び、ファウスト的な「偏在 omnipresence」と「中央統制 centralization」を融合させたものではないとしたが、グレゴリウス7世はそれを融合して見せたのである。我々が「中世」と呼んでいる時代は、クリュニー派の修道院がヨーロッパ中に「偏在」するようになった時代、ヨーロッパ中に「偏在」する修道院を教皇座にあった1人の修道士が「中央統制」していた時代であった。

それは皇帝がパウロの名のもとに、「ローマ市 urbs」から腐敗を排除し始めるほんの75年後ことであった。そして「修道士にして皇帝」であったグレゴリウス7世は、ペテロとパウロの名のもとに「世界 orbis」から腐敗を排除することになるのである。ローマの司教座を世界の教皇座に変え、教会改革を始めるのである。皇帝に宛てた有名な文書で、彼は「ローマ市」と「世界」を支配するペテロとパウロに従うと書いている。



講義中のトマス＝アキナス（フラ＝アンジェリコ画）。絵に描かれているように、内心を目に見えるようにするのがスコラ学者の夢であった

## 第5節 「教皇革命」の開始

「教皇革命」は天の声を聞いたグレゴリウス7世が、それを教皇令として発令することから始まった。彼が発令した『教皇令 Dictatus Papae』を見れば、ヨーロッパ初の「世界革命 universal revolution」がどのようにして始まったかがよく判る。現代の独裁者が拡声器やラジオを利用するようになると、我々は革命を何百万単位の群衆が始めるものだと誤解するようになった。革命の本当の姿が判らなくなってしまったのである。ロシア革命を始めたのはレーニンであって、1500万人のロシア人ではなかった。たしかに「教皇革命」とロシア革命は違った革命である。「教皇革命」が1人の教皇によって始められた革命であるのに対して、レーニンが始めたロシア革命は大衆を巻き込んだものであったが、それはロシア革命がヨーロッパ最後の革命だったからである。ヨーロッパの革命は後になるほど参加する人間の数が増えているが、それは技術が進歩した結果であって革命そのものが変わったからではない。歴史において同じことが繰り返されることは無いと言ってよい。ある出来事が違った時代に同じ効果を発揮するとしても、その出来事は違った形を取るはずである。「教皇革命」からロシア革命までの900年間に、革命の形は変わってしまった。「教皇革命」でグレゴリウ

ス7世は『教皇令』を自分だけのために公布したが、ボルシェビキ党はラジオを使って「すべてのロシア人に To all and everybody」革命を呼びかけていた。また1200年の教皇インノケンチウス3世は、会議に集まった枢機卿たちに革命を呼びかけていた。以下で5つのヨーロッパの革命を比較してみる。

1075年 聖霊から受け取ったというメッセージを、教皇グレゴリウス7世は『教皇令』として書き留める。

1200年 教皇インノケンチウス3世は枢機卿会議で、『帝国の現状に関する考察 Deliberatio de statu imperii』と題する演説を行う。

1517年 ルターは『九十五カ条の提題』をウイッテンベルク城内の教会の扉に掲示して論争を開始する。

1641年 イギリス下院は国王に宛てた『大抗議文』を印刷して一般に配布する。

1789年 全国三部会は国民議会と名前を変え、議員は議会の傍聴席に向かって演説する。

1917年 ボルシェビキ党はラジオを使って「すべてのロシア人に」革命を呼びかける。

教皇グレゴリウス7世が感じていた重圧を考えれば、彼の行為は特筆に値する。『教皇令』

の形で公表した教会改革案が正当なものであることを論証し、自らそれを実行に移さねばならなかったからである。『教皇令』の中でも、特に重要と思われる項目を以下で紹介してみよう。

- 1 教会は神によって設立された。
- 2 (皇帝ではなく)教皇のみがキリスト教世界を統括することができる。
- 3 司教の任免権は教皇のみが有する。
- 7 教皇のみが必要に応じて新しく法令を制定することができる。
- 9 世俗の支配者が(恭順の意を表明するために)足に口づけするのは

教皇のみである。

10 教会で名前が唱えられるのは教皇のみである(それまでは皇帝の名前が唱えられており、教皇の名前が唱えられることはなかった)。

12 教皇は皇帝を廃位することができる。

17 いかなる聖句であれ書物であれ、それを正式のものにできるのは教皇のみである。

18 教皇の決定は誰も変更できず、また教皇は<sup>すべて</sup>全ての決定を変更できる。

19 誰も教皇を裁くことは出来ない。

23 教皇は聖ペテロの後継者であり、聖なる存在である。

25 教皇は教会会議に諮ることなく司教を裁くことができる(教皇は聖霊と共にあり、教会会議の承認を必要としない)。

この文書の内容そのものが革命であった。教皇は無謬とされていたからである。なぜなら、教皇は聖霊と共にいたからであった。たしかに『教皇令』は私的な文書に過ぎなかった。しかし、それは執行権を認められた教皇の私的な文書であった。こうして、ヨーロッパ初の革命が1人の男によって開始されたのである。孤独な心の中で、彼はやるべきことを決めていた。政治学を専門とする者なら、このヨーロッパ最初の政治綱領に注目すべきであろう。たとえば、「教皇は唯一無二の存在である *unicum nomen est papae*」とあるが(『教皇令』第11条)、それまでは皇帝だけがそ



教皇革命の結果、カトリック教会は聖ペテロによって王冠を授けられることになった

う宣言できたことを考えれば、尊大としか言いようがない宣言である。また教皇は聖霊と共にあり「教会会議の承認を必要としない」ということだが、この強い意志は何処からくるのか。ローマのイタリア人から構成される教会会議、つまりローマという1つだけの都市の教会会議では、世界全体の教会を統べる教皇には不十分だということである。教皇は、いわば「世界の教会会議 Universal Church in Council」の恒久的な秘書官なのである。彼は信仰の強さを測るローマの「地震計 spiritual seimorph」でも無ければイタリアの「地震計」でもなく、世界の「地震計」なのである。

それ以来、「教皇の胸の内 il petto del papa」が政治的に重要な意味を持つことになった。我々が政治の世界について考えるとき、当然のこのように大勢の聴衆がいることを前提にするが、「胸の内 de in petto」自分に語り掛けるという言葉は、いまでも教皇に関する新聞記事に登場してくる言葉なのである。こうして政治的な変革の切っ掛けが登場してくることになった。それは即決の変革でなければならなかった。教会会議や皇帝たちの存在、あるいはヨーロッパ世界の広さは即決に不利であった。しかし、人間は即決を善しとするものである。現在の世界のあり方を決めたのは、この孤独な「胸の内」で教皇が決心したことであった。1人の修道士が大きく成長してクリュニー修道院の壁を崩し、「天と地 heaven and earth」を感動させたのである。彼の声は、まるで「最後の審判を告げるラッパの響き Trumpet of Doom」の様であった。皇帝の様に宮廷と軍隊を率いてヨーロッパ中を移動して廻ることはなかったが、彼こそが「真の皇帝 verus imperator」であった。靈感豊かなグレゴリウス7世は、電話の登場すら予見していたかの様であった。クリュニーのオディオと川を渡っていた時、オディオの口から自分の耳に糸が繋がっていて、オディオが考えていたことが全て聞こえていたそうである (Migne, Patrologia, vol. 142, 1038)。「地 earth」もまた「真の皇帝」の声に聴いていた。荘園の「下僕」は十字軍に参加することで騎士となり、またグレゴリウス7世を支持する聖職者たちは家族を捨てて独身者となり、所属していた地域や家族と無縁な人間と

なったのである。

当時の讚美歌に次のような文言がある。「主の偉大なるトランペット奏者パウロは天から雷を放って汝の敵を打ち払い、汝の国に属する人々を呼び集める Tuba domini, Paule, maxima, De celestibus dans tonitrua, Hostes dissipans cives aggrega」。パウロの「霊の剣 spiritual sword」は神の国を支配し、教皇たちは地の国で「霊の力 spiritual power」を試すのである。

グレゴリウス7世は11年間に及ぶ戦いの後、亡命先のサレルノで死去した。司教たちは自分たちを召使い扱いする教皇を嫌っていたし、収入を1/3に減らしても何とかやり繰りできた教皇に皇帝も驚いていた。また教皇自身も死の床で、「正義を愛し不正を憎んでいたのに亡命先で死を迎えることになった」と嘆いていたが、ある司教の返答は、そのとき教皇が置かれていた状況をよく言い表していた。「猥下は亡命されているのではありません。ヨーロッパ全土が猥下のものであり、すべての国民が猥下のものですから」。新しい天空を戴くことになった地上では、多くの支持者たちが教皇のために祈っていた。グレゴリウス7世は新しい「ローマ教会都市 civitas Romanae ecclesiae」の支配者となったのである。それ以後ヨーロッパ全土は、1つの都市、1つの教会の光り輝く大理石の殿堂に服従することになった。その一体感は白昼の光の下に現れた地下礼拝場(教皇庁)で、揺るぎないものになっていた。キリストから帝冠を受けていた神聖ローマ皇帝に代わって、聖ペテロから教皇位を授かる教皇が登場してきたのである。

死の床にあったグレゴリウス7世は、司教の言葉が聞こえていたはずである。彼の死から40年後の1122年、教皇と皇帝は「協約 concordat」を結んで和解した。かつて迫害を受けていた時に信者たちが心を1つにしたように、教皇と皇帝も心を1つにすべきだと考えられていたのである。ただし、教皇と皇帝のあいだで結ばれた「協約」という言葉は、その意味を誤解されている。この「協約」は国家や個人の間で結ばれる「条約・契約 treaty」とは別物なのである。

これに似たものを挙げるとすれば「婚姻 marriage」であろう。つまり自分の魂の救済より相手の魂の救済を優先させるのが（お互いに相手のことを自分以上に大切に考えるのが）「婚姻」の特徴だからである。このことが判っていないければ、「協約」の意味を誤解することになる。「協約」を結んだ教皇と皇帝は、単なる「契約」の当事者ではなかった。キリスト教徒は国家を超えたものために死を選ぶこともあり、そんなとき国家は存続すら危うくなる。これはカトリック教会圏に限られた問題ではない。国民がそれまで信じていたもの以外のために死を選ぶようになると、国家は存続できなくなる。もしそうなれば、金銭も権力も兵士も国民を止めることはできない。国家に対する国民の忠誠心を支えていた精神の支柱が失われたら、国家は存続できなくなる。人間は命を懸けるに値するものを見つけたとき、ただ漫然と生き続けることが出来なくなるからである。

教皇と皇帝の「協約」が意味することは、国家の存続が国民の死をも厭わない無条件の信頼に懸かっているということである。この信頼感に影響を与えうる者こそ「主権者 sovereign」なのである。半世紀ものあいだ続いた教皇と皇帝の対立の後、教皇と皇帝はお互いを主権者として認め合うことにした。この主権の問題を経験した国家なら、「協約」が持つ特別な意味を理解できたはずである。ボダン Jean Bodin のように主権に対して懐疑的になることもなければ、イスラム教国のカリフのように、政治的な権限の他に宗教的な権威も求めるようなことはしなくなるはずである。さもなければ反乱が起きる。ルター・クロムエル・ナポレオン・レーニンは、主権の在り方を変えてしまったが、そうでもしなければ旧い主権は無力化するか、宗教的な権威まで要求することになっていたはずである。1122年に成立した「ウオルムス協約」は、主権者（皇帝）が聖俗の権限を独占すると何が起きるか経験済みのカトリック教会圏でこそ登場できた考え方であった。皇太子は教皇が代弁する神の声に従うことを優先して、皇帝を裏切ることもあった。世俗の支配者に従うことに慣れた我々にとって、そのような選択はあり得ないと思われるが、暴力による支配が常態であった当

時、皇太子が忠誠の対象を同時に2つ持つということは新しい発見であった。これこそが「自由 political liberty」の意味である。「自由」は忠誠の対象が同時に2つ存在するというジレンマに直面しなければ実現しない。2つの選択肢から1つだけ選ぶのではない。戦争と平和・過去と未来・安全と冒険・義理の母親と自分の夫・雇い主と労働組合・国家と政党など、2つに1つを選ぶのであれば、どちらを選んでも忠誠の対象は1つに限られる。

11世紀の教皇革命が政治の世界で実現したのは、この「二者同時選択の原則 principle of dualism」であった。キリストは神と皇帝の両者を同時に選ぶように迫ったが、神は目に見えない存在である。「二者同時選択の原則」のおかげで、目に見えない存在を求め続けることが可能になった。グレゴリウス7世以降にヨーロッパで「自由」が可能になったのは、皇帝と教皇という2人の主権者がお互いに相手の存在を認め合うようになったからであった。

哲学者たちは「自由」を賛美するが、それが可能になるのは人間が忠誠の対象を同時に2つ持つ時だけである。それが「一者選択の原則 monism」になると、「自由」は失われて「隷属 slavery」が始まる。現在の民主制度では、人気取りのために「一者選択の原則」が選ばれることが多く、「隷属」になる傾向が強い。

ペテロとパウロの権威を兼ね備えた教皇は、「教皇革命」によって聖パウロの権威を引き継いでいた皇帝から聖職者を任命する権利を奪い返したが、それは皇帝や国王と主権を共有する新しい主権の登場を意味した。クリュニー修道院とグレゴリウス7世が夢見ていたことが現実となったのである。こうしてヨーロッパ全域を統括する組織が新たに登場してきた。カトリック教会は決して「国家を超えた international」組織ではない。ファシスト党・ナチ党・フリーメーソンはカトリック教会が「国家を超えた」組織だと言って非難するが、カトリック教会が「国家を超えた」ことはなかった。カトリック教会は地域に縛られない「普遍的な universal」な組織であり、

炭鋳夫の家庭にも支配者の宮廷にも存在する。領主と雖も「下僕」が巡礼や十字軍参加を希望すれば、それを禁じることは出来なかった。しかも十字軍に参加した「下僕」は、そのおかげで領主の支配から解放されたのである。

新しい主権者の在り方は、エルサレム王国に国王がいなかったことにも表れている。十字軍は1099年にエルサレム王国を築いて、ブイヨンのジョフリー Geoffrey of Bouillon を国王に選んだが、ジョフリーは自分や他の国王たちが戦ったのは教皇の為であることを知っており、そこで「護国卿 Lord Protector」と名乗ったクロムエルと同様、国王とは名乗らずに「聖墳墓（キリストの墓）の護り手 Advocatus Sancti Sepulchri」と名乗った。

空間概念も変化した。エルサレム（天上）を目指す動きが始まったのである。教会堂が東方を意識して建てられていたことはよく知られていた。しかし十字軍の時代になると、東方への志向だけでは不十分であった。それまで教会堂は他の建物の間に隠れているか、郊外の丘の上にあった。また信者の遺体は、地下の納骨堂に収められていた。それが十字軍がアルプスの彼方である海を越えたところを目指したように、教会堂は重力の拘束から解放されて天上を目指すようになった。その先鞭をつけたのがクリュニー修道院の大聖堂であった。「丸天井 vault」にある「対角線の骨組み diagonal ribs」は、天に向かって持ち上がっている。これは「オジーブ ogives, augivi」と呼ばれているが、その理由は「丸天井」を支える力を「増大させている augeo」からである。この言葉は新しく造られたものだが、「丸天井」も「回転する volvo」から造られた新語であった。つまり「丸天井」という言葉は、屋根や天井と違って重力の法則に逆らう法外な言葉だったのである。

重力の法則に従っている限り、人間に飛躍は期待できない。伝統を破るには重力の法則を超える必要があった。「教皇革命」は重力の法則を超える革命であった。大聖堂（ゴシック様式）の「丸天井」は、重力の法則に逆らって作られた「船 navis」なのである。「身廊 nave」は「船」から来ているが

（大聖堂の入口から祭壇までの通路は形が船に似ている）、「重力の法則を超えられない普通の住居 local house fixed in space」と違って、石造りの大聖堂は聖地巡礼のように「時間の経過を止め suspended in time」（巡礼に出かけている間は契約の履行が猶予される）、重力の法則に逆らって高みを目指すのである。ゴシック様式の大聖堂は最初に十字軍を送り出したドイツやイギリスに登場しているが、ゴシック様式の大聖堂はイタリアと無縁であった。「教皇革命」もイタリアで始まった革命ではない。「教皇革命」はヨーロッパ全域で展開された革命であった。中心部の「聖墳墓 Sepulcher」（教皇庁）が周辺部の住民を引き付けたのである。周辺部の住民が信じていた異教の神々・祖先神・血の復讐から住民を解放したのが「教皇革命」であった。住民ひとり一人に聖地巡礼と同じ効果を齎したのである。12世紀に確立した7つの秘跡（洗礼・堅信・婚礼・聖餐・告解・叙階・終油）は、信者に聖地巡礼と同じ効果を齎すことになった。世俗の権力と宗教的な権力の併存を認めることで信者に住んでいる地域を離れ、地域の柵を越えて聖地巡礼に出かけるのと同じ効果を齎すことになった。大聖堂の「丸天井」は、そのことをよく示している。教皇たちの努力により、大聖堂の「丸天井」は重力の法則を跳ね返して、ヨーロッパで民主制が実現するのを助けたのである。

ゴシック様式の大聖堂は信仰の世界を航海する「船」であった。信者たちは「聖墳墓」（教皇庁）を目指して航海に乗り出すのである。多くの大聖堂からなる艦隊を率いたのが、「教皇革命」の実現を目指す「聖墳墓」（教皇庁）であった。

## 第6節 十字軍とスコラ学

十字軍と叙任権闘争がヨーロッパの在り方を変えてしまった。神聖ローマ帝国は影響力を失い（少なくともヨーロッパの周辺部と南部では）、すべてのカトリック教会を統べる教皇庁が影響力を持つことになった。そのとき教皇庁を助けたのが「聖墳墓教会」を目指した十字軍運動であった。十

字軍運動のおかげで従来の南北軸（アーヘン → クリュニー → アルプス山脈 → ロンカリア Roncaglia → ローマ）に代えて、北西ヨーロッパから南東ヨーロッパに向かう東西軸（カンタベリー Canterbury・ルーアン Rouen → ジェノバ Genova・マルセーユ Marseilles → シチリア島 → パレスチナ、あるいはバルセロナ → スペイン）が新しく登場して来たのである。

ローマの教会は全ての教会を統べる「母なる教会 Mother Church」となった。そして「ヨーロッパ世界 orb」は1つの「国 civitas」となったのである。アウグスチヌスには「神の国 civitas Dei」が「地上の国 city terrestrial」と結びつきを持つことなど考えられなかったが、12世紀に登場して来た「新しい国 new city」では、教皇が「真の皇帝」であった。神聖ローマ皇帝は闇夜を照らす星に過ぎないとされるようになり、「真の皇帝」たる教皇が世界を照らす太陽だとされるようになった。キリストもよく太陽に例えられたが、いまや教皇は「キリストの代理人 vicar of Christ」とされるようになった。教皇が太陽であり、皇帝は月のような存在に過ぎなくなった。教会法学者のホスティエンシス Hostiensis, Henry of Segusio によれば、「教皇の権威は皇帝の権威の7644.05倍だということになる。この太陽と月の明るさの比率については、プトレマイオス Ptolemaios, Ptolemy の『アルmagest Almagest』第5巻に書いてある」。何万人という数の聖職者の権威を一身に集めた教皇が太陽となるのは、当然であった。まるでキリストが生きていた時のようであった。キリストの言葉が教皇の口から述べられ、まるでキリストが生き返ったようであった。「私は自分が苦しみを受ける前に、この過越しの食事をあなたたちとすることを願いに願っていた」（『ルカによる福音書』22:15）。1215年に教皇インノケンチウス3世は、キリストのこの言葉で第4回ラテラノ公会議の開始を宣言した。教皇庁が発する太陽のような明かりのおかげで、信者の進むべき道がはっきりと示されることになったのである。その結果、「秘跡 sacrament」の意味が変わってしまった。十字軍が始まるまでは（教皇革命までは）、教会が行う行為は全て「神と和解を果たすための執成し atonement to God」であり、それが「秘跡」であると考

えられていた。聖人たちの善行・修道士たちの祈り・皇帝の戦争における勝利が天と地を結ぶ一筋の光明であり、「秘跡」であった。それが大聖堂の「丸天井」に象徴されるような、現実世界での飛躍となって結実することになったのである。1000年続いた古い「秘跡」の総括が始まったのである。

12世紀は古い教会の「集大成 Summa Summarum」の時期であった。教皇たちが2世を名乗ったのは、古い教会の伝統を再生するためであった。アベラル Pierre Abélard は『是と非 Sic et Non』で、教父たち（アウグスチヌスをはじめキリスト教の教義確立に貢献した古代の神学者）の矛盾する教説を理性的な対話で解決しようと試みているし、グラチアヌス Gratianus は『お互いに矛盾する教令を矛盾しないように解釈する試み Concordia discordantium canonum』を書いているが、このような古い教会の伝統を再生させる試みを集大成したのが「最後の教父 Last Father of Church」と呼ばれたクレルボアのベルナル Bernard of Clairvaux であった。こうして世界は大きく変化することになった。新しい「神学 theologia」が登場して来たのも、この時である。教父たちは、もともと異教の神々を研究することを意味した「神学」という言葉を嫌ったが、新しい「神学」者たちは理性や論理だけを重視する「神学」にその意味を変えていた（ベルナルは聖書を地下室に閉じ込めてしまうこのやり方を嫌っていた）。新しい「神学」は、新しい「秘跡」のあり方を反映したものであった。サン＝ビクトールのフーゴー（ユージュ）Hugo(Hugues) de St. Victor は、そこにゴシック様式の大聖堂の起源を見ている。つまりゴシック様式の大聖堂は、当時の石工の考えを反映していただだけでなく、神学者も含めた当時の時代精神を反映していたのである。

1100年（33世代）掛けて出来あがったキリスト教の教義が、新しい学問（スコラ学）によって再生されることになった。近代になって古典古代が復活して来たように、キリスト教の古い教義が復活して来たのである。かつて異教徒に宣教したパウロのように、新しく宣教を担当する教皇が登場して来たし、多くの神学者たちが登場して来たのである。

教授と学生が構成する「団体 corporatio」、つまり「大学 universitas」は博士たちを「宣教 mission」のために送り出していたが、彼らは騎士であった。新しい信仰の十字軍に参加する騎士であった。それは十字軍であって、「宣教」ではなかった。「宣教」は異教徒の国で行うものであり、十字軍は失われた信仰を回復するために行われるものである。スコラ学が目指したのも、表面的には正統なキリスト教のようで実は異教でしかなかったキリスト教世界を再征服することであった。1000年前のヨーロッパには、統一されたキリスト教世界は存在しなかった。それが存在していたかのようには考えられていたのは、19世紀のロマン主義（ノバリス Novalis・アダムス Henry Adams）が生み出した幻想に過ぎない。「異教化したキリスト教徒を再征服した神学者 doctor for re-paganized Christians」とも呼ぶべきサン＝ビクトールのフーゴー（ユージュ）は、地下室に閉じ込められた聖書（封印された聖書）に代えて自分で考えた「8つの秘跡 eight Orders of the Sacraments of Divinity」を提示して見せた。興味深いことに、そのうちの7つがこの本で扱っている7つの革命に対応している。

	サン＝ビクトールのフーゴー	対応する革命	この本の章
1.	創造主たる神の登場	—	—
2.	神による創造	ロシア革命（1917年）	第4章
3.	人類による自由な意志の獲得と墮落	フランス革命（1789年）	第5章
4.	自然法の登場（ノアの契約）	アメリカ革命（1776年）	第15章
5.	旧約聖書による革命（イスラエルの再現）	ピューリタン革命（1649年）	第6章
6.	新約聖書による革命	ドイツ革命（1517年）	第7章
7.	教会の改革	教皇革命（1075年）	第10章
8.	最後の審判（キリストの再臨）	クリュニー革命（998年）	第9章

さらに彼はこう付け加えている。「これが神の秘跡の全てであり、秘跡が高く積み上がってできた階層は天まで届いている」。

スコラ学は当時、異教化しつつあったキリスト教徒を、再びキリスト教化しようとしていた。スコラ学を習得した博士たちは、古代世界が知らなかった人たちであった。必要とされていたのは「人間の連帯 human solidarity」であった。皇帝による教会改革とオディロによる「死者の日」導入の結果、他者への配慮が必要なことを誰もが認めるようになった。12世紀になって教皇による教会改革が始まったとき、そのことは誰もがよく承知していた。新しく登場してきた「煉獄 world-purgatory」と「世界史 world-history」という考え方には、「人間の連帯 solidarity of mankind」という考え方が潜んでいた。それは理想のための理想などではなかった。彼らは十字軍と同じ考え方をしていたのである。つまり「一人は全員のために one for all」という考え方である。彼らが目指していたのは、「一人が全員と連帯した all and every man united」キリスト教世界を再現することであった。スコラ学がプラトンなどの古典古代の哲学と違っていたのは、この十字軍的な発想である。古典古代の哲学もスコラ学も、学園ないしは学校で思想を研究していたことでは同じであったが、スコラ学は「団体」として組織された大学が、異教化したキリスト世界を取り戻すために博士たちを輩出していた点で違っていた。

西暦1000年までのヨーロッパ人は基本的にキリスト教徒だったと言えるが、異教的な影響を「ギリシャ polis」から受けていた。「ギリシャ」を離れて世界を見る視点を持っていたギリシャ人は、「ギリシャ」に拘ることなく普遍的な哲学を作り上げていたからである。しかし、そんなギリシャ人も（そしてローマ人も）知らない思考方法がキリスト教世界にはあった。キリスト教世界が再生を果たすことができたのは、そのお陰である。教皇と皇帝が対峙し対決することで、お互いに相容れないもの、お互いに矛盾するものを同時に包含し、かつそこから新しい世界を生み出したのである。教皇と皇帝は自分の主張が正しいことを証明するために全力を尽くし、多様な思考方法が提示されることになった。ヨーロッパは、最初から「普遍的な世界 citizenship in the universe」であることを運命づけられていたのだ

る。「自由思想を説く現在のコスモポリタニズム cosmopolitanism of modern free-thinkers」などは、このヨーロッパ中世にあった考え方の焼き直しに過ぎない。それは特定の集団や個人の考え方を反映したものではなく、「聖霊が作った新しい世界 new city of the Holy Ghost」・「革命的に変化したキリスト教世界 new city of revolutionized Christendom」の思考と再生の結果を反映したものであった。

## 第7節 「目に見える visible」教会の登場と

### ラファエルの傑作

ここで秘跡の意味変化について改めて考えてみたい。古い教会には、神の慈悲深さを表す無数の秘跡があった。教会は神秘に包まれた姿をしており、もともと「目に見える」施設ではなかった。ところがスコラ学と十字軍の時代に、「目に見える」教会は無数にあった秘跡を7つに整理・整頓してしまった。ルターが攻撃したのは、この「目に見える」教会だったが、注意しなければならないのは、カトリック教会もルター派もお互いを誤解していることである。つまりルターが攻撃したのはカトリック教会が「意図的に目に見えるようにしたこと conscious tendency to “make visible”」であって、「教皇革命」以前の教会が神の神秘性や慈悲深さを強調していたことではなかった。「教皇革命」までの古い教会では、信者は神の神秘性や慈悲深さを自ら体験したり目撃したりしていた。ところが「教皇革命」以後の「理屈を重視するようになった教会 Scholastic Church」は、神の神秘性や慈悲深さまで「目に見える」ようにしてしまったのである。当時流行ったことに「鏡 specula」と題された文献があった（たとえば『ザクセン地方の鏡 Sachsenspiegel』）。「鏡」と題されたのは、見るできないものを「見える」ようにしたからであった。またグレゴリウス7世から1500年までの教会は、十字軍と博士たちを使って腐敗した聖職者と信者に宣戦布告した改革者であった。神の神秘性は暴かれ、すべてが説明されて明らかにされた。

無数にあった秘跡は、キリスト教徒の人生（揺り籠から墓場まで）に対応して7つに整理・整頓された。洗礼・堅信・婚礼・聖餐・叙階・告解・終油の7つの秘跡は、信者の魂が辿る巡礼の道であった。「最後の審判」を忘れるなという聖職者の注意喚起が行なわれる「死者の日」の他に、すべての信者はこの巡礼の行程を歩まされることになった。

秘跡のなかでも特に大切なのが「聖餐 Holy Communion」であった。新しい神学は「最後の晩餐」（聖餐）を重視したが、そのとき聖別されたウエーハー（「最後の晩餐」でキリストが弟子たちに自分の体と思って食べるようにと分け与えたパンは現在ではウエーハーに代わっている）が、本当にキリストの体が変わったか否かが真剣に議論された。もともとキリストの受難を記念する行事で、毎年、決まった日（復活祭の前の木曜日。「最後の晩餐」の前にキリストが弟子たちの足を洗ったことを記念する日）に祝われていた「聖餐」が、受難を記念する行事から切り離されて春の復活祭に執り行われるだけでなく、キリストが復活・昇天したあと聖霊が弟子たちの上に降り注いだ日（キリストの復活から50日目の聖霊降臨の祝日。その日から弟子たちの宣教が始まる）である夏にも執り行われることになった。こうしてクリスマス（キリスト生誕を祝う行事）→ 復活祭 → 聖霊降臨祭で教会の行事は完結するのである。

教会が影響力を取り戻す活動を盛んに行っていた時、トマス＝アクイナスは「聖体 Corpus Christi（キリストの体）」の祝日の式次第とミサ曲を定めていた。また画家のラファエルが最高傑作『ボルセナのミサ Messa di Bolsena』（信仰心が薄い司祭がボルセナの教会でミサを執り行っていた時、パンから血が滴り落ちたのを見て信仰を取り戻したという奇跡を絵にしたもの）をバチカン宮殿に描いた翌年の1264年、教皇ウルバヌス4世は「聖体」の祝日を教皇令で正式な祝日と定め（そのときトマス＝アクイナスに式次第を定めるよう依頼した）、さらに1310年には全てのカトリック教会でこの日を祝日として祝うことが義務づけられた（「聖霊降臨」の祝日後の最初の日曜日に「三位一体 Holy Trinity」の祝日が祝われ、同じ週の木曜日が「聖体」の祝日と

された)。この祝日は東方正教会には存在せず、またプロテスタントも認めていないが、カトリック教会に於いては教会再興の「仕事が完了したこと opus operatum」を象徴する出来事であった。すべての聖職者の力を教皇 1 人に集め、すべての聖人の思想を『神学大全 Summa Theologiae』（トマス＝アクイナスの著書）に纏め、さらに全ての教父たちが抱えていた問題を一挙に解決してしまう能力、教会は自分のそんな能力を信じて疑わなかったのである。夏の最中に祝われる「聖体」の祝日は、そんな教会の勝利を象徴するものであった。「聖体」は教会の地下室から出発して内陣を通り、<sup>さいだん</sup>祭壇を離れ、身廊を通して教会の外に出ていく。この「聖体」の行列こそ教会の勝利を祝う行列なのである。「高位聖職者 Lords Spiritual」に率いられた教会は「聖体」の祝日の日に、かつて教会が自由のために戦ったことを思い起こすのである。「教皇革命」の成果は、儀式の時の祈りの言葉によく表れている。信者たちは教会を迫害する者から守ってくれるように神に祈る訳だが、その時「汝（神）が教会を主宰するよう運命づけた Thou has destined to preside over Thy church」教皇を守ってくれるよう祈るのである（3世紀前なら、Thy church と単数形を使うことは不可能であった）。また皇帝による「聖職売買 simony」（世俗の支配者による聖職者の叙任をこう呼んだ）を防いでくれるよう、つぎのように祈っていた。「教会の活動を妨害する者と異端が排除され、自由を獲得した汝の教会を守り給え」。

「教会の自由 liberty of the Church」は4世紀もの長い間、教会が獲得しようとして戦ってきた目標であった。また宗教改革後も4世紀のあいだ叫ばれ続けてきた「人間の自由 liberties of man」も、元を<sup>ただ</sup>糺せば「教会の自由」の読み替えに過ぎなかった。「人權 Rights of Man」は「キリスト教徒の権利」の読み替えであり、「キリスト教徒の権利」は「聖職者の権利」、そして「聖職者の権利」は「キリストの敵 Anti Christ」と戦う「教皇の権利」の読み替えであった。

## 第8節 「キリストの敵 Anti Christ」の登場

こうして教皇にとって「キリストの敵」が重要な意味を持つことになったが、それは「最後の審判」に対する恐怖とは別のものであった。「最後の審判」は死後に訪れてくるものだが、「キリストの敵」は「この世 this world on earth」に登場してくる。「この世」に「キリストの敵」が出現するか否かに関心があるということは、「この世」に関心があるということの意味する。「教皇革命」によって教会改革が成功したのである。教皇による教会支配の体制が整い、世俗の権力は教会によって制約されることになった。過去の再興が実現して「この世」は再び「文明化された civilized」のである。この新しく蒔かれた種を踏み躪ることができるのは、「キリストの敵」だけであった。教皇インノケンチウス3世がアラゴン王に与えた忠誓の言葉に、当時の考え方がよく表れている。現在、我々はキリストとナザレのイエスを区別しないが、当時の人々にとって教皇が「継承 succession」していた聖ペテロの権威は、必ずしも「キリストの代理人（神の代理人）」たる教皇の地位と同じではなかった。12世紀に教皇が新しく獲得した権威はスコラ学が論証することで作り上げたものであり、聖ペテロから延々と引き継がれてきた歴史に由来するものではなかった。我々はキリスト教に支配されていた過去と、キリスト教とは無縁になった世俗世界の未来しか念頭にないが、中世のヨーロッパではキリスト教が救済を約束する未来そのものであった。当時のヨーロッパ人は、救済を約束したキリストに到達することを目指して歩んでいたのである。そこで教皇は聖ペテロに由来する権威と、未来の支配者たるに相応しい権威の間でバランスを取る必要があった。侮辱され十字架で処刑されたナザレのイエスではなく、死に勝利したキリストこそが教皇の権威の源であった。キリストの再臨まで（「この世」が終わる時にキリストは再び「この世」に現れて「最後の審判」を行なう）、キリストに代わって「この世」を監視するのが教皇である。「キリストの敵」がキリストの教会を墮落させないように、教皇は「この世」を

監視しなければならない。教皇は「キリストの代理人」であり、「王のなかの王 superior of kings」なのである。アラゴン王は次のように言って教皇に忠誠を誓っていた。「聖ペテロの後継者たる教皇が王権の根拠であり、教皇は数々の王国の支配者であり、自由に王権の担い手を決める権利を有するキリストの代理人であることを心から信じており、またそのことを声に出してここに告白する」。

この忠誠の文言から判るように、教皇は「この世」に於けるキリストの「唯一の代理人 sole representative」なのである。こうして神聖ローマ皇帝は宗教的な権威を失うことになった。神聖ローマ皇帝はパウロやペテロの同時代人であったローマ皇帝（異教徒）の権威を継承しているに過ぎず、もしキリストの権威を継承していると主張する皇帝がいたら、その皇帝は「キリストの敵」なのである。12世紀に教皇が「キリストの代理人」となってからは、「キリストの敵」が改めて現実的な脅威として認識されるようになった。

「キリストの代理人」となった教皇は、ヨーロッパ世界を「1つに纏める者 Concorde」として新しい時代を切り開くことになった。かつて使徒の権威を継ぐ者とされた（従って宗教的な権限を持つとされた）皇帝は「歴史を超越した聖人の教会 timeless, eternal Church of the Saints」が求める新しい枠組みに組み込まれ、さらに「キリストの不腐体 unaltering Body of Christ」と化した教会は、歴史を超越した存在となったのである。

古い枠組みが「教皇革命」によって壊されてしまった。皇帝は教会改革に参画できなくなり、教皇に代わって「この世」で世俗的な役割を執行する「役人 bailiff」でしかなくなったのである。教会法によれば、「皇帝はカトリック教会の役人 Imperator potest dici officialis ecclesiae Romanae」に過ぎない。皇帝が空位ときは、教皇が皇帝の代わりを務めることになった。「この世」が終わるときまで「水先案内人 pilot」を務めるのは、教皇であって皇帝ではなくなったのである。教皇は多くの王国が存在する無秩序な世俗世界の国王とは違った存在であり、そのことが教皇の「権威 authority」の根拠になっ

ていた。英語で「権限を有する be in authority」という独特な表現があるが、これはイギリスでカトリック教会時代（つまり中世）から使われていた表現である。この例からも判る通り、スコラ学によって「権威 auctoritas」が「権限 potestas」の意味に変えられてしまった。

古代ローマでアウグストゥス＝カエサル Augustus Caesar は、「権威」と「権限」の両方を持っていたおかげでジョージ＝ワシントン（アメリカ合衆国の初代大統領）のように「尊敬 dignity」を集めていた。つまり最高位の役職を占めていただけでなく、同国人の「心 heart」も掴んでいたのである。法的な「権限」のほかに、「共同体の賢者 best and wisest men in the community」に認められていた様な、道義的な「権威」を有していたのである。ところがその1000年後、「権威」は死後に復活したキリストが独占することになった。教皇は、このキリストの「権威」を引き継いだのである。この「権威」は普通の人間として生まれ、聖ペテロの地位を受け継いだに過ぎない教皇が持つ法的な「権限」を超えたものであった。それは「最後の審判」に由来する「権威」であった。もちろん教皇にとって、「権威」は「権限」以上に大切なものであった。「権威」のおかげで「この世」を超えたところから「この世」を見ることが出来たからである。教皇は「神のような目 God's eye」で「この世」の出来事を見ることが出来るのである。

「神の代理人」であることで、教皇は別の能力も手に入れることができた。信者は教皇のお陰で、死と「最後の審判」を気にせず済むようになった。突然訪れてくるかもしれない「最後の審判」を心配する必要がなくなり、紀元800～1100年に頻繁に使われていた「間近に迫った終わりの時 rapidly approaching end of time」という表現が使われなくなってしまった。

「最後の審判」に代えて、新しく「キリストの敵」が心配の種として登場してきた。カトリック教会は、「最後の審判」に代えて「キリストの敵」から人類を守ることになった。「キリストの敵」は「最後の審判」ほど怖いものではない。「キリストの敵」は「最後の審判」と無関係ではないが、「終わりの時 Last Day」ほど差し迫った問題ではなかったからである。それ

は死後の世界の問題ではなく、「この世」の問題であった。

新しい「権威」の登場と「キリストの敵」の登場によって、人類は歴史（「この世」の出来事を問題にするのが歴史である）に関心を払うようになった。「本物の信仰を見る witness of the ultimate faith」ようであったと第一回十字軍の歴史家は書いているが、当時の人々は「この世」を改めて見つけ出したと感じていたはずである。神が創造した世界が「現実のもの real being」として感じられるようになった。まだ確かなものではなかったかもしれないが、教皇の「権威」によって守られた庭園くらいには感じていたはずである。

「教皇革命」が生み出した「帝国の庭 il giardino dell'impero」（イタリアを意味する）について説明する前に、すでに取り上げたことがある「終末論 eschatology」について触れて置きたい。教皇は、終末の時期（「この世」の終わり「最後の審判」）を遅らせることに熱心であった。「キリストの敵」の出現を遅らせることで教皇の権限は強化され、終末の時期が遠ざけられることになった。1200～1500年に教皇が常に念頭に置いていたのは、「キリストの敵」であった。皇帝が「キリストの敵」であると教皇が宣告すると（例えば1245年、神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世が教皇インノケンチウス4世によってそう宣告された）、終末は間近いことになる。終末の到来を心配していたのは、シュペングラーやクレマンソーだけではなかった。終末の到来に対する恐れは、どの革命にも付き物であった。ロシア革命は所謂「永久革命 revolution in permanence」であったが、その「永久性 permanence」は国家なき社会と階級なき社会の到来で失われる可能性があった。またイギリス革命は墮落天使であるルシファー（神に反抗して悪魔になる）のような「傲慢さ pride」の登場を恐れていたし（クロムエルは本気で地上に「神の国 Kingdom of God」を実現するつもりでいた）、ルターも「神の国」の到来を約束していたが、それが実現する可能性については触れていない。

過去にあった将来への見通しに関心が失われたとき、革命が勃発する。ルター・クロムエル・ロベスピエール・レーニンの4人は、自分たちが以前と違った世界に住んでいることを知っていた。レーニンはクレマンソー

と違って既存の体制が崩壊することを恐れていなかったし、ロベスピエールも既に天使が天使でなくなったことを知っていた。彼はルシファーによる支配を容認していたのである。素朴な夢想家に過ぎなかったシェリー Percy Shelley やバイロン G.G. Byron と違って、ロベスピエールは冷徹で為すべきことを心得た人間であった。クロムエルは「神の国」を地上に実現することを夢見ていたし、ルターのように「神の国」の到来を待つだけの人間を嫌っていた。いまでもイギリス人はルター派の無為を嫌っている。イギリス人に言わせれば、ルター派は地上に「神の国」が実現できると信じていないのである。ドイツの哲学者たちが遣っていることは「神の国」を人間の手が届かないところに追いやり、実現不可能なことを承知の上で努力するよう説くだけなのである。そしてルターは教皇が「キリストの敵」であると宣告することで、カトリック教会の権威を崩壊させてしまった。「キリストの敵」とは教皇のことだったのである。こうしてルター派は、「キリストの敵」と「神の国」のあいだにある暗闇<sup>くらやみ</sup>を手探りで進むしかなくなったのである。

同じことが「教皇革命」でも起こっていた。「最後の審判」が何時になるか誰にも判らないと我々は考えているが、実は既に終わっていたのである。教皇たちは「キリストの代理人（神の代理人） vicar of Christ」として、既に審判を下していたのである。教皇たちは「最後の審判」を待ったりしていなかった。

12世紀中頃から教皇は「キリストの代理人」になっていたが、いまだはその意味が判らなくなっている。歴史家は、この問題を「終末論」の視点から考えることをしない。歴史家が教皇のことを「キリストの代理人」と呼ぶ場合、念頭に置いているのは紀元30年に十字架上で死んだキリストのことであって、12世紀のスコラ学者が念頭に置いていた「最後の審判」を行うキリストではない。「キリストの代理人」である教皇が、同時に「最後の審判」の代理人でもあることを我々は忘れていた。1140年代に教皇を「キリストの代理人」とする教義が登場してきたとき、教皇は聖俗の権

限を合わせ持つと主張されたが（「兩劍論 two swords theory」）、教皇にとって「世俗の権限 temporal sword」は重要な意味を持たなかった。なぜなら「キリストの代理人」である教皇は、「最後の審判」の視点から（つまり未来から）「世俗の権限」を評価するからである。スコラ学によれば、「キリストの代理人」たる教皇は現在から未来を見通すのではなくて、未来から現在を見通すのである。

「この世」が終わりを迎える未来の視点から「この世」を眺める教皇は、「この世の真の姿 truth about this world」を知ることができるが、ルターが問題にしたのはカトリック教会のこの教義であった。そこでルターは、それに代わるものとして「神の国」の到来を提唱した。ところがルターはただ待つだけで、「神の国」を実現するために何もしないと問題視する者が現れてきた。それがクロムエルであった。クロムエルは、「エリート Elect」が「神の国」を実現すると考えた。しかし、それでは墮落天使ルシファーと同じ「傲慢 pride」の罪を犯すことになる。こうして一旦は手にしたはずの樂園は、再び失われてしまったのである（ミルトンの『失樂園』）。

ルシファーが「傲慢」の罪で落ちて行った深淵に1789年、<sup>あ</sup>敢えて飛び込んで地上に「神の国」を実現しようとしたのがロベスピエールであった。このときのルシファー（ロベスピエール）は悪魔にならず、プロメテウスになった（プロメテウスはギリシャ神話に出てくる神で、主神ゼウスが人間から奪った火を人間のために取り戻し、その罰として再生を繰り返す肝臓を鷲に啄まれる苦痛を永遠に味わうことになる）。このプロメテウスが作り出した19世紀のヨーロッパは、ゼウスの呪い以上のものに苦しめられることになった。待っていたのは、物理的な荒廃と国家どうしの分裂・抗争だけであった。崇高な理想は失われ、真善美は原始的な暴力・活力の礼賛と統制に取って代わられたのである。欺瞞に満ちたソ連と、正義を捨てたナチス＝ドイツがフランス革命の生み出した自由の伝統を公然と放棄して見せたのである。

「永久革命」を担うロシアの大衆に、相応しい場が用意されることになった。彼らは際限ない混乱と不安のなかに置かれていたが、それは「階級な

き世界 Classless Society」が実現するまで続くはずであった。「階級なき世界」が実現するには長い時間が必要であり、それまでは共産党が独裁的な権力を持つはずであった。

「航空機時代に相応しいスピードで with the speed appropriate to our era of aeronautical time」（リンダーバーク Charles Lindbergh がベルリンで行なった講演の言葉）ボルシェビキ党に対抗して起きた反革命が、「階級なき世界」を実現しようとしている。もしそれが成功すればマルクス主義は歴史から抹殺されることになるが、それは「終末論」とは無縁な単なる反革命でしかない。

「終末論」と革命の関係

「最後の審判」→ 教皇革命（1080年）

「キリストの敵」（教皇）→ ドイツ革命（1517年）

「神の国 Kingdom of Heaven」→ ピューリタン革命（1649年）

「地上の樂園 Earthly Paradise」→ フランス革命（1789年）

ヨーロッパの退廃と分裂・対立 → ロシア革命（1917年）

自由の喪失と野蛮な「階級なき世界」→ ヒトラー政権（1933年）

「終末論」が革命を引き起こすなど、凡庸な歴史家にとっては考えられないことである。それが現実に起きていることを彼らは認めようとしなない。なぜなら、彼らにとって事実とは過去に起きたことだけだからである。しかし生きている人間にとって大切なのは、未来に起きるはずの事実である。過去に起きた事実は、生きている人間にとって重要でない。

そこでいま書かれている歴史は、長期的な変化をどう扱ってよいか判らなくなっている。例えばグレゴリウス7世について、優れた歴史家であるはずのハウク Albert Hauck ですら次のような評価しかできないでいる。「グレゴリウス7世の時代に教皇は何か意味あることを成し遂げたであろうか」（Hauck, Kirchengeschichte Deutschlands, III, 832, Leipzig 1896）。たしかに彼が指摘するように、グレゴリウス7世は死後に流血の惨事・亡命事件・屈辱的な扱い・反乱・無秩序しか残さなかった。しかしグレゴリウス7世・クロムエル・ロベスピエールに輝かしい成果を期待するのは無理である。

なぜなら、彼らの役割は結果を出すことではなく準備をすることだったからである。我々は、ここで取り上げる革命に凡庸な歴史家には理解できない意味を見出そうとしている。新しい時代を切り開く革命とは何なのか、以下で考えてみたいと思う。

神聖ローマ皇帝を単なるドイツ国王に過ぎないと決めつけた『教皇令』で、グレゴリウス7世は次のように述べていた。「我々は彼の軍隊に勝利し、宗教的な影響力のみならず世俗的な影響力や快適な生活まで皇帝から奪って見せた」。「今後、皇帝が権力を手にすることも勝利を収めることも無いであろう」。このように確信を持っていたのは、教皇が「最後の審判」を文字通り信じていたからであった。

またイギリス革命を生きた人物（クロムエル）について、クエーカー教徒の歴史家・神学者のジョーンズ Rufus M. Jones は次のように書いている。「この人物は革命が勝利するのを確信するや否や、地上に神の国を実現するよう提案した。然も無ければ、神の国を実現することなど不可能だと考えたからである。思い切って実現に努めさえすれば、神の国は自ずと地上に出現するとまで言っていた。神の国が訪れるのを待つのではなく、革命の勝利後に直ちに神の国に生きることを提案したのである」（Jones, *Spiritual Reformers in the 16th and Centuries*, London 1914）。このことから判るとおり、革命を成功させるには革命後の世界を先取りすることが大切なのである。革命勢力が何のために戦っているかが判れば、なぜ彼らが勝利できたかも判ってくる。革命勢力が目指しているのは「目先の利益 immediate result “in cash”」などではない。イギリスのピューリタン革命はイギリスによる海洋支配の出発点になったし（1651年のクロムエル航海法 First Navigation Act）、グレゴリウス7世は神聖ローマ皇帝の支配からヨーロッパを解放し、荘園で働いていた「下僕」が十字軍の騎士になることを可能にした。またロベスピエールはフランスの特権階級を攻撃することでフランスの未来を切り開いたし、ルターは「キリストの敵」（ローマ教皇）からの攻撃に耐え抜いて、新しい信仰の形を打ち立てた。いずれのケースも当初は破滅的な結果が齎

されると思われていたが、実は新しい時代を切り開く偉業だったのである。終わりと思われたことが実は始まりであった。革命の指導者が新しい時代を切り開いたのである。彼らは何を成し遂げたかを理解するには、彼らが置かれていた環境を知る必要がある。そうすることで初めて、彼らは何を破壊し何を創造したかを理解することができる。なぜ彼らは意図したことが実現できなくても革命に成功したのか。クロムエルは死の床にあった時、神からの啓示で自分は不死であると確信していると言って、医者をも驚かせたそうである。彼は死すべき人間としては間違っていたかもしれないが、彼がやり遂げた偉業が死ななかったという意味では彼は間違っていなかったと言える。

ヨーロッパ世界でも、理想的な考え方や制度が危機に晒されたことが何度かあった。自然界と違って人間が作り出す世界では、「適者生存 survival of the fittest」は通用しない。哲学者なら無視するような、囁かでも重要なことが問題になってくる。つまり死後の世界である。人間はいずれ死ぬ。しかし人間は、亀の甲羅のような半ば永遠に存続可能な「文明 civilization」の殻を作ることができる。もっとも、生命を宿さない甲羅が不滅でないことは教会の歴史が教えるとおりでである。人間は、作った殻を壊す力を持っているからである。

皇帝や教皇の努力によって、教会も古い殻を壊す方法を身に着けることができた。国王・貴族・ブルジョア・労働者のいずれもが殻の永続性を信じなくなった。「キリストの敵」を恐れた中世の教会は、腐敗の兆候に敏感になっていた。つまり「終末 final threat」の到来を恐れるからこそ、社会制度は永続できるのである。死があるからこそ、生は鮮明に意識されるのである。批判的な精神が「終末」の恐れを指摘している限り、いかなる「文明」も永続が可能である。

ヨーロッパ世界の「批判する力 critical power」はキリスト教に由来する。「終末 death」を念頭に置いた「内部からの批判 inner criticism of institutions」が、ヨーロッパ世界の存続を可能にした。さまざまな困難や問題に直面しながらも

教皇制度は生き残ったし、プロレタリア革命が起きた<sup>お</sup>後も、イギリスやフランスは生き残った。「最後の審判」を意識するからこそヨーロッパは生き残れたのである。それこそがヨーロッパの知恵であった。

## 第11章 イタリア＝ルネサンス

(「第2の教皇革命 Guelphic revolution」)

### 第1節 教皇あつてのイタリア＝ルネサンス

1200年(インノケンチウス3世が枢機卿会議で、『帝国の現状に関する考察 Deliberatio de statu imperii』と題する演説を行う)から1517年(ルターが『九十五カ条の提題』をウイッテンベルク市で公表)までは、教皇が皇帝を監視していた。そのことを19世紀の「自国民中心主義者 nationalist」は「国民主権 national sovereignty」の侵害だと言って非難する。カトリック教会によるナショナリズム抑圧だというのである。そんな彼ら(ファシストやフリーメーソンも同類)がイタリアを訪れると、イタリアの都市やトスカナ地方・ウンブリア地方の景観に魅了される。中世イタリアが生み出したフィレンツェ・シエナ・アッシジ・ペルージャ・ウルビノなどを彼らは賛美するが、実はこうした都市の登場には教皇の存在が欠かせなかったのである。第一次世界大戦前にスエーデン人がヨーロッパの民主制について本を書いているが(Gustav F. Steffen, Die Demokratie in England, Epilogue, Jena 1910), その本で彼は中世のシエナを紹介している。彼によると欧米の民主制は、中世イタリアの都市が生み出したものなのである。その通りかもしれないが、それが可能になったのはカトリック教会のお陰であった。イタリア＝ルネサンスも「教皇革命」のお陰である。またイタリア＝ルネサンスが終焉を迎えたのは、ルターがカトリック教会を攻撃した結果であった。ルターによって教皇のあり方が大きく変えられたカトリック世界で、「ローマの略奪 il sacco di Roma」はイタリア＝ルネサンスを終わらせる大火であった。皇帝軍・ドイツ人・スペイン人によるローマ制圧は、「キリストの敵」(教皇)に対するルターの勝利を象徴する出来事であった。また、それは300年間続いたイタリア＝ルネサンスの終焉を意味する出来事でもあった。

「堅固な制度 firm substructure」と「空駆ける自由 soaring liberty」の程よい

教皇制度は生き残ったし、プロレタリア革命が起きた<sup>お</sup>後も、イギリスやフランスは生き残った。「最後の審判」を意識するからこそヨーロッパは生き残れたのである。それこそがヨーロッパの知恵であった。

## 第11章 イタリア＝ルネサンス

(「第2の教皇革命 Guelphic revolution」)

### 第1節 教皇あつてのイタリア＝ルネサンス

1200年(インノケンチウス3世が枢機卿会議で、『帝国の現状に関する考察 Deliberatio de statu imperii』と題する演説を行う)から1517年(ルターが『九十五カ条の提題』をウイッテンベルク市で公表)までは、教皇が皇帝を監視していた。そのことを19世紀の「自国民中心主義者 nationalist」は「国民主権 national sovereignty」の侵害だと言って非難する。カトリック教会によるナショナリズム抑圧だというのである。そんな彼ら(ファシストやフリーメーソンも同類)がイタリアを訪れると、イタリアの都市やトスカナ地方・ウンブリア地方の景観に魅了される。中世イタリアが生み出したフィレンツェ・シエナ・アッシジ・ペルージャ・ウルビノなどを彼らは賛美するが、実はこうした都市の登場には教皇の存在が欠かせなかったのである。第一次世界大戦前にスエーデン人がヨーロッパの民主制について本を書いているが(Gustav F. Steffen, Die Demokratie in England, Epilogue, Jena 1910), その本で彼は中世のシエナを紹介している。彼によると欧米の民主制は、中世イタリアの都市が生み出したものなのである。その通りかもしれないが、それが可能になったのはカトリック教会のお陰であった。イタリア＝ルネサンスも「教皇革命」のお陰である。またイタリア＝ルネサンスが終焉を迎えたのは、ルターがカトリック教会を攻撃した結果であった。ルターによって教皇のあり方が大きく変えられたカトリック世界で、「ローマの略奪 il sacco di Roma」はイタリア＝ルネサンスを終わらせる大火であった。皇帝軍・ドイツ人・スペイン人によるローマ制圧は、「キリストの敵」(教皇)に対するルターの勝利を象徴する出来事であった。また、それは300年間続いたイタリア＝ルネサンスの終焉を意味する出来事でもあった。

「堅固な制度 firm substructure」と「空駆ける自由 soaring liberty」の程よい

バランスがあって初めて、文明は繁栄することができる。自由だけを賛美して制度の重要性を無視する人間がいるが、制度あっての自由であることを忘れてはいけない。平日あっての日曜日であり、塩あっての砂糖、取り締まりあっての平和である。特権には代償が伴うことを忘れてはいけない。平和主義者・自由主義者・プロテスタント・社会主義者たちは、文明の発展にバランスが必要であることを忘れ勝ちである。人類は、繰り返し野蛮と戦争の瀬戸際に立たされてきた。文明は崩壊寸前に陥ったこともあった。人類を育ててきた文明は難攻不落の要塞などではない。簡単に崩壊することを忘れてはいけない。文明も人間と同様、「死すべきもの mortal」なのである。死は生が向かう目標である。陶器のような生なきものに死が訪れることはない。生あるものは死を誇るべきである。生あるものには誕生から死までの歴史が存在する。生は死を経験することで初めて完結するのである。

イタリアの「文明 *civiltà*」は、ローマ教皇の普遍的な権威と「都市の有力者 *potesta*」のダイナミックなバランスのもとに置かれていた。そこで教皇が権威を失うと、イタリアの都市も伝統的な力を失うことになった。かつてイタリアの都市が持っていた伝統的な力を今も保持し続けているのは、皮肉なことに「バチカン市国 *Città del Vaticano*」を名乗る教皇の都市だけである。「バチカン市国」という呼称が初めて使われたのは、1929年に教皇庁とムッソリーニのあいだに「協定 *Concordat*」が結ばれたときであった。イタリアの自由は、教会が「自国民中心主義者 *nationalist*」と妥協することによって失われることになったのである。その後イタリア半島で世界的な権威を保持しているのは、教皇庁だけである。

1200年には、まだイタリアという国は存在しなかった。1122年に教皇と皇帝の間で「ウオルムス協約 *Wormser Konkordat*」が結ばれたとき（その結果、教会の自由が保障された）、まだイタリアは存在しなかった。このとき「ドイツ王国 *Teutonic regni*」だけは国名が挙がっていたが、イタリアは「それ以外の地域 *ex aliis vero partibus imperii*」とされていて、国名は挙がってい

なかった。学校の歴史教科書では、1122年に教皇がイタリアを皇帝から奪ったような記述がなされているが、当時はイタリアという国は存在しなかったのである。さらに重要なことは、教科書が好んで使う「中世」という言葉である。ヨーロッパ史を理解する上で、この言葉ほど有害なものはない。ヨーロッパ史を理解する上で重要なのは紀元後の最初の1000年間でローマ帝国とキリスト教が登場したこと、さらに次の1000年間で教皇革命（1075 - 1198年）が「カトリック教会を再興し *restoring Roman Church and Christendom*」、カトリック教会が「国別のキリスト教国 *Christian nations*」を生み出したことである。「中世」という言葉は、この2つの出来事の重要性を判らなくしてしまっている。我々にとって重要なのは紀元前の歴史ではない。原始人の頭蓋骨や骨などは我々にとって重要でない。「教皇革命」によってカトリック教会の再興を遂げた教皇は、イタリアという国が登場させる必要があった。「教皇革命」を成功させたローマ教皇は、「教皇派 *Guelphs*」と呼ばれた都市をイタリアに登場させることになった。イタリアに最初に登場した「国 *nation*」は、教皇という「普遍的な存在を首長 *universal head*」に戴く国家（教皇庁）であった。我々が「野蛮状態 *barbarism*」に陥らず済んでいるのは、そのおかげである。それに先鞭をつけたのが教皇インノケンチウス3世とアッシジの聖フランチェスコであった。「教皇革命」の成果は、聖フランチェスコの生涯とインノケンチウス3世（1198年に教皇に就任）以後の教皇たちの行動に見ることができる。

## 第2節 「鍵の兵士 *Schlüsselsoldaten*」

聖墳墓（キリストの墓）をイスラム教徒から取り返すはずであった十字軍は、もはや教皇のものでなくなっていた。アーヘンからローマを目指した皇帝の南北ルートに代えて、教皇が開設したイギリス → マルセイユ → パレルモ → ロードス島 → パレスチナに至る十字軍の東西ルートは、もはや教皇の関心事ではなくなっていた。皇帝がシチリア島や南イタリアを

支配下に置いていたからである。もちろん皇帝は、そこを神聖ローマ皇帝として支配していた訳ではなかった。シチリア王国は教皇に対して、神聖ローマ帝国に属することはないと約束していたからである。皇帝が「普遍的な」立場（ヨーロッパ全域を支配下に置く）を教皇に主張することはなかった。しかし皇帝はイタリア半島のほぼ全域と周辺の海を支配下に収めており、その現実は無視することができなかった。インノケンチウス3世が教皇に就任した1198年には、イタリア全域が皇帝の支配下にあった。そのとき教皇にできたことは、せいぜい十字軍の実施を皇帝に命じるくらいであったが、それが無意味なことは教皇自身がよく知っていた。皇帝が実施する十字軍は、十字軍が本来もっていた趣旨に反していたからである。もともと十字軍は、皇帝に対抗するために教皇が実施した事業であった。教皇が十字軍に関心を持たなくなったのは当然である。

皇帝と戦うために、教皇は十字軍に代わる新しい手段を必要としていた。それが13世紀に登場してきた「聖ペテロの鍵」（ペテロは天国への扉の鍵をキリストから託されていた）である。教皇インノケンチウス3世は、それを教皇旗に使うことにした（Donald Lindsay Galbreath, *A Treatise on Ecclesiastical Heraldry*, vol. I, p.6, Cambridge 1930）。また教皇は、皇帝に対抗するために「鍵の兵士」を雇うことになる。現在バチカン市国で教皇を守っているスイス兵も、「鍵の兵士」と呼ばれている。

新しい教皇旗は変化の象徴であった。教皇は教皇領の「回復 Recuperation」を目指し、そうすることで皇帝からの圧力を跳ね返そうとした。「第2の教皇革命」の始まりである。1198年（インノケンチウス3世の教皇就任）から1268年（ホーエンシュタウヘン家最後のシチリア国王コンラディン Conradin の死）までに教皇が実現を目指したのは、教皇領の「回復」であった。皇帝位とシチリア王位を継承していたホーエンシュタウフェン家は、その最大の障害物であった。この最大の障害物が排除されたのは、1250年に「鍵の兵士」がシチリア王国に進撃して、コンラディンを断頭台に送った時であった。

コンラディンがタリアコッツォ Tagliacozzo の戦いでシャルル＝ダンジュール Charles d'Anjou に捕らえられたとき、彼が罪状として追及されたのは教会に対する反逆であった。世俗の支配者（アンジュー伯）シャルル＝ダンジュールが、教会に対する反逆をコンラディンの罪状として挙げている。まるでアンジュー伯は、「教皇派」を助けるためにイタリアに呼び寄せられた教皇の下僕であった。このときのアンジュー伯と教皇の関係を象徴する出来事がある。タリアコッツォの戦いのとき、戦場から遠く離れたビテルボ Viterbo の宮殿にいた教皇クレメンス Clemens 4世は、戦場の様子を幻視体験していたそうである。教皇が世俗君主の軍隊に装備を提供し、命令を下していたのである。教皇自身が軍隊を率いることはできなかったが、教皇の手足となってくれる軍隊は存在していた。コンラディンの刑死後、イタリア半島を支配しようとする皇帝はいなくなった。こうして教皇領の「回復」は成功裡に終わったのである。

しかし70年に及んだ戦いの結果は悲惨であった。クレメンス4世は間もなく死去し、その後3年9ヶ月と21日間の空位が続くことになった。ある年代記作家によれば、「当時の人たちは、この教皇座の空位に驚かされることになった」。教皇側も皇帝側も、この70年に及ぶ戦いに大きな犠牲を払っていた。また勝利したはずの教皇が得た成果も僅かなものでしかなかった。

### 第3節 教皇の外交術

「第2の教皇革命」の説明を敢えて終焉期から始めたが、その方が革命の始まった理由が判り易くなるからである。「第2の教皇革命」が終わったときは教皇座が空位のままであったが、「第2の教皇革命」が始まったときは（1198年）皇帝が不在であった。

新しく皇帝に選ばれるはずであったフリードリヒ2世は（その前提になるドイツ国王には1196年に選ばれている）、母親（シチリア王）がシチリアか



ローマ皇帝であった聖なるフリードリヒ2世：皇帝の印章には永遠のローマとその紋章である鷲が描かれている。

世俗君主でもあったフリードリヒ2世：最古の世俗世界を描いた地図には、メッシナ海峡・城塞・果物の木・シチリア市・カラブリア市・アブリア市がフリードリヒ2世と一緒に描かれている。

ら離れることを拒否したために摂政<sup>せつしょう</sup>になれずにいた（フランケン法は摂政のドイツ滞在を義務づけていた）。そこで叔父のフィリップ Philipp von Schwaben（兄の皇帝ハインリヒ6世の信任が厚く、十字軍途中で兄が死ぬことがあれば後見人になるように頼まれていた）が彼をドイツに連れて行って王位に就けることになっていた。ところがフリードリヒは母親がシチリアに連れ去ってしまい、フィリップはフリードリヒの王座を確保するため単身ドイツに赴くことになった。しかしドイツでは、フリードリヒの皇帝就任に反対する勢力が対立候補を国王に選んでいたため、フィリップは自ら王位に就かざるを得なくなった。

（後でフリードリヒに王位を譲るため大司教から聖油を受けることは拒否する）。こうして2人のドイツ王が帝位を争うことになり、教皇に介入の機会を用意したのである（皇帝になるには教皇から聖油を受ける必要があった）。

フリードリヒの母親は死に際に（1198年）、教皇インノケンチウス3世をフリードリヒの後見人に指名していた。そのインノケンチウス3世が教皇派の候補を支持すると公表したため、フィリップは大司教から聖油を受けて国王としての地位を正式なものにせざるを得なくなった。これでフィ

リップは、その意図に反してフリードリヒに王位を譲ることが出来なくなったのである。

これでフィリップは甥っ子フリードリヒを裏切ったことになり、そのことを教皇から非難されることになった。教皇は、それを理由にフィリップを破門している。この時インノケンチウス3世が挙げた「良心に反する violated conscience, wounded conscience」という非難の根拠は、のちに重要な意味を持つことになった。フィリップほど良心的な人物はいなかったことを忘れてはいけない。ドイツ国王に選ばれたときも、フリードリヒのために敢えて聖油を受けるのを拒否したほどであった。

教皇のこのマキャベリ顔負けの言い分に対して、その300年後にルターが答えを出している。インノケンチウス3世によるフィリップ非難とルターによる「良心の復権 restoration of the personal conscience, restitution of the princely conscience」は、歴史上の出来事としては繋がっているのである。

フィリップの良心を非難したインノケンチウス3世のやり方は、1075年にグレゴリウス7世が発した『教皇令』と1517年にルターが公表した『九十五カ条の提題』の中間に行くものであった。1200年の枢機卿会議で読み上げられた『帝国の現状に関する考察』がその中身である。インノケンチウス3世はグレゴリウス7世のように「胸の内<sup>in petto</sup>」独り言を呟くことはしなかったが、ルターのように公然と議論することもしなかった。不特定多数の聴衆を相手に説教をしたり抗議を唱えたりすることもせず、枢機卿たちと議論しただけであった。つまりカトリック教会に「貴族政 aristocratic government」が登場して来たのである。教皇座の長い空位が続くなかで、教会統治が枢機卿たちに任されることになった。「第2の教皇革命」において、教会は「王政 monarchical government」から「貴族政」に移行していたのである。司教座聖堂参事会<sup>お</sup>に於いても「貴族政」が導入されることになった。

1200年の『帝国の現状に関する考察』は興味深い内容の文書である。そこで問題にされているのは「何が必要か・適切か・好都合か quid

oportet,quid decet,qui expedit」ということであった。とくに重視されたのが「何が好都合か」ということであった。この文書から、教皇の巧みな外交術を窺い知ることができる。1075年の『教皇令』のときの教皇は、神の前で独り言を呟いていただけであった。ところが1200年の『帝国の現状に関する考察』では、外交用語が使われていた。政治的な危機に対処する為である。

いまや教皇は誰を皇帝にするかを定める権限を手にしており、さらに外交用語を使う術も手に入れていた。『帝国の現状に関する考察』の内容は、タリアコッツォの戦いでクレメンス4世が「戦場の様子を感じていた intense vision」ように、「実体のない呟き bodiless whisper」であった。それは「戦場で血を流す男らしさ full-blooded virility」ではなく、「外交官の意味ありげな目配せ cultivated wink of the diplomat」であった。後にこれがヨーロッパで教皇庁のやり方として有名になり、ヨーロッパにおける外交術のモデルとなるのである。

#### 第4節 イタリア半島の勢力図

『帝国の現状に関する考察』のおかげで、教皇の立場は強固なものになった。北の神聖ローマ帝国と南のシチリア王国が1人の支配者によって支配されるのを防ぐこと、これが教皇の政策として確立されたのである。

ホーエンシュタウフェン家を断絶させるために(1250年のコンラディンの死でホーエンシュタウフェン家は断絶する)、教皇は否応なく世俗の権力闘争に巻き込まれることになった。教皇と皇帝がイタリアで「共存すること be room-mates」が不可能になったのである。この教皇と皇帝の争いから、最初の「国家 state」が登場してくることになった。1221年、フリードリヒ2世は神聖ローマ帝国の国章をシチリア王国の国章として使用しないことを教皇に約束していたので(フリードリヒ2世は父親から神聖ローマ帝国、母親からシチリア王国を相続していた)、シチリア王国の国章には神聖ローマ

皇帝のレガリア regalia (皇帝の地位を象徴する帝冠・帝剣・帝槍もしくは帝笏・宝珠 Reichsapfel)の代わりに、可笑しいイタリア南部の地図が使われていた(おそらくヨーロッパ最初の世俗地図)。地図に描かれていた樹木・橋・メッシナ海峡は、教皇の「圧力 pressure」に屈した結果、登場してきた世俗権力を象徴していた。文字通りの「圧力」である。この地図は芸術家が自由に創造力を働かせて描いたものではない。フリードリヒ2世が教皇に強要されて描かせた地図であった。それはイタリアで皇帝が聖なる存在でなくなったことを象徴していた。そしてイタリアに純粋に世俗的な都市国家が登場してきたことも象徴していた。

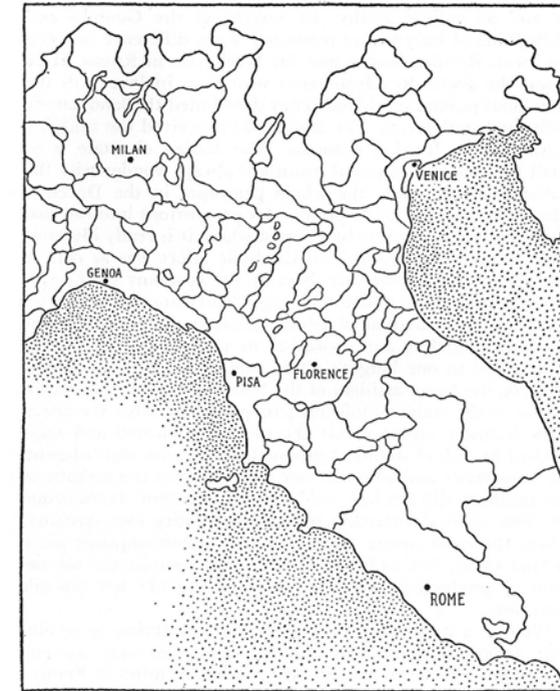
インノケンチウス3世は教会領の「回復」に熱心であった。1000年かけて教会が少しずつ集めてきた領土を、インノケンチウス3世は政治的な「教皇の国家 Papal State」として1つに纏めるつもりでいた。支配下にあった全ての都市に文書を送り、すべての都市市民を会議に招集することで「国家」を創り上げたのである。確かにこの「国家」は教皇の「宗教的な権威 universal authority」が創り上げたものであった。統合の核に民族や、民族の歴史的な伝統が不在の「司教の国家 bishop's state」であった。奇妙な地図が描かれたシチリア王国の国章が象徴する世俗君主の国家とは、対照的な「国家」であった。

インノケンチウス3世は「皇帝派 Ghibellines」に対抗するために味方が必要であった。今度は以前に頼ったイタリア南部のノルマン人ではなく、イタリア北部の都市国家が味方であった。教皇を支持する代わりに彼らは条件を付けたが、かつてのグレゴリウス7世のように空間も時間も超えた「宗教的な権威」としてインノケンチウス3世が振舞うことはなかった。彼は世俗君主の一人として都市国家と同盟を結んだのである。

すでに1180年、ベローナ Verona・ベネチア Venezia・ビチエンツァ Vicenza・ベルガモ Bergamo・トレviso Treviso・フェラーラ Ferrara・ブレシア Brescia・クレモナ Cremona・ミラノ Milano・ロディ Lodi・ピアチェンツァ Piacenza・パルマ Parma・モデナ Modena・ボローニャ Bolognaの諸都市は、

教皇に次のような文書を提出していた。「最初に皇帝の攻撃対象になるのは我々である。我々が皇帝のイタリア破壊を防ぎ、教会の自由を守る。イタリアの名誉と自由を守るため、また教会の尊厳を守るために皇帝の要求を拒否することにした」。またインノケンチウス3世も1198年4月16日付の手紙の中で、「イタリアの利害 interest of Italy」はトスカナ地方の諸都市に委ねられるべきだと書いている。1150年には、同じ教皇が急進的な教会改革を唱えるブレシアのアルノルド Arnolfo da Brescia を追放するのに、皇帝に頼らざるを得なかったことを考えると、このように諸都市と一緒に「共通の理念 common cause」のために「共通の敵 common enemy」と対峙するようになったことは驚きである。インノケンチウス3世の伝記によれば、1200年を転機に教皇は宗教的な立場から判断することを止めて、イタリア的な立場を重視するようになったとのことである。「教皇陛下は皇帝との和平条件を適切なものと判断されていたが、多くの者は教皇がイタリアのドイツ人たちに有利な条件を認めていると批判していた。彼らに言わせれば、イタリアのドイツ人はイタリア人に過酷な隷属状態を強要しているとのことであった。そこで教皇はイタリアの自由のために方向転換することにして、ドイツ人との和平条件を拒否することにしたのである」。

こうして教皇は、「イタリアの自由のために政策転換 deflection in favor of Italian liberty」を余儀なくされたのである。皇帝との争いで教皇がイタリアの利害を優先するようになったことは、1226年に北イタリアの諸都市が同盟を結んだときの言葉によく表われている。「皇帝がドイツからローマに遠征して来るときは、1200名以上の兵士を連れてきてはならない」。950年から1250年までの300年間に、皇帝は85回もイタリアに遠征していた。アルプス山脈とローマ市の間にあった地域は、繰り返されるローマ遠征の通過点になっていた。さらにドイツの諸部族が最有力のフランク族と対等の立場を獲得して族長が皇帝となっていったのに対して、北イタリアはますます災難を経験することになった。最後の皇帝はシュワーベン族の出身であった。こうしてドイツでは解放が進み、イタリアでは隷従化が



1300年頃の主要なイタリアの都市国家と小さな侯国

進行していったのである。

イタリアには、ドイツに於けるような広大な教会領は存在しなかった。それに1122年に「オウルムスの宗教和議」が成立して以降、イタリアの司教たちは教皇の完全な統制下に置かれていた。1161～62年の皇帝フリードリヒ1世バルバロッサ Friedrich I Barbarossa によるミラノの破壊でイタリアの諸都市は堪忍袋の緒が切れ、イタリアではイタリア統一を目指す革命の機運が高まって来るようになった。しかし革命運動は「地下に潜る went „underground“」ことになる（歴史の表舞台から姿を消す）。イタリアは相変わらずローマを目指すドイツ皇帝の通過点となっていたが、このとき「イタリア」という国名が意味したのは半島の北3分の2だけであった。

南イタリアでは、北イタリアのような皇帝に対抗するための都市同盟が

結成されることはなかった。シチリア島・カンパニア Campania 地方・アプリア Apulia 地方・カラブリア Calabria 地方には 153 もの司教区が存在していて、教皇による統制が行き届いていたからである。1215 年に第 4 回ラテラノ公会議がローマで開かれたとき、「世界 orb」から集まった 412 人の高位聖職者のうち、100 人以上は両シチリア王国（シチリア王国+ナポリ王国）の出身者であった。南イタリアでは、都市ごとに司教が置かれる古代からの伝統が生きていたのである（シチリア王国には、古代ギリシャ以来のポリス polis の伝統すら残っていた）。教皇はビザンツ帝国時代からの制度を引き継いでおり、そこで 35 人のドイツ出身の司教や 80 人のフランス出身の司教に対して、イタリア出身の司教は 300 人もいた。1200 年当時のイタリアは近代国家のような統合は実現できていなかったが、小さな司教区が無数にあった当時のイタリアは、教皇にとって一体的な統治が可能な国であった。多くの領国や都市に分かれていたが、教皇は「司教たちを通して君主のような立場を維持できた born leader of the whole Italian body of Lords Spiritual」のである。15 世紀の教会会議で教皇は、「イタリア国民 Natio Italica」を代表する君主のような存在になっていた。その頃のスペイン・ドイツ・イギリス・フランスには、まだ国民を代表するような君主は存在しなかった。

## 第 5 節 統治は「一時的 hourly」たるべし

教皇が「権威 auctoritas」の全てを掌握していたイタリアでは、都市が有していた「自由 liberty」が「一時的な権限 potestas」を実現させることになった。近代的な「権力 power」がこの「一時的な権限」を語源にしていることを考えれば、意味変化の大き<sup>おお</sup>さには驚かされる。イタリア語の「一時的な権限」は「永続することのない公的機能 transient public function」を意味し、近代的な「権力」の意味はない。つまり「権力」は可能な限り一時的で、執行期間が短い方が良くとされていた。聖パウロによれば、この「一時的

な権限」は神が執政官に与えたもので（『ローマ人への手紙』13:1）、それがイタリアの都市では「独裁官 podesta」の権限として「独裁官」に与えられることになった。「独裁官」の任期は 1 年限りで、しかもその都市の出身者でない者が任命され、任期が終われば「独裁官」は都市を去ることになっていた（ロンドンの市長もドイツの大学長も任期は 1 年限りである）。ヨーロッパでは、「1 年と 1 日」保有すれば所有権が認められることになっており、役人が 1 年以上その地位にいれば、地位は永久に保証されることになるからである。1 年で交代することで役人がその地位を私物化することを防いでいたのである。

「一時的な権限」は所有権と対立する概念とされ、相続が認められていた封建的な保有権とも対立するとされた。イタリアでは、「独裁官」の地位に関する文献が数多く登場している。その権限は神に由来すると考えられたことから、聖職者が神に代わって執行する秘跡とは厳密に区別された。封建制社会では権力が財産のように扱われ、権力が齎す弊害が大きかった。そこで 13 世紀のイタリアでは、「独裁官」の任期を短くすることで弊害を避けようとしたのである。都市法に登場して来る「人権 Rights of Men」・「権利憲章 Bill of Rights」・「正義の法 ordinamenta della Giustizia」といった考え方は、徹底して楽天的であった。都市法の内容は都市ごとに様々に異なっていたが、1 つだけ共通していたことがあった。それは可能な限り権力を分散させ、個人に勝手なことが出来ないよう工夫されていたのである。だれも「統治体 body politic」の代表になれないように工夫されていた。「死すべき人間 man as a temporal being」が作る組織は、飽く迄も「一時的 temporal, provisional」でなければならないのである。任期は 1 年でも長すぎるということで、半年とか 2～3 ヶ月に短縮されたりした。この短い任期に 6 人とか 4 人、場合によっては 12 人の役人が共同で統治を担当するのである。ロシア人が「集団制 kollektiv」と呼んでいたものである。役人たちは寝るのも一緒、食事と一緒にであった。任期中は自宅に帰ることも、家族と話をすることも禁じられていた。全員で 1 つの「統治体」を構成していたから

である。しかも任期が終われば、全ての権限が剥奪された。構成メンバーは抽選で選ばれることになっており、だれも自らの意志で構成員になることは出来なかった。構成員に相応しいか否かだけが問題にされた。こうしてイタリアの都市は、「統治体」と個人を分離することに成功したのである。

近代国家では権力を分散させることが当たり前になっている。ルター派の領邦国家では民事と軍事は切り離されていたし（軍人が役人になることは禁じられていた）、イギリスでは「議会と共同で統治する国王 king in parliament」（国王は議会の統制下にあるが、国王の同意がなければ議会が制定した法律も効力なし）と「枢密院の国王 king in council」が、それぞれ立法権と行政権を担当することになっていた。またアメリカやフランスでは三権分立ということで、司法・行政・立法の三権がお互いを牽制し合うことになっている。

しかしイタリアでは、すでに300年も前から権力が分散されていたのである。そのやり方は担当者を交代させるというものであった。権力の座にある者が年に3回、交代すれば、それは権力を3つに分散するのと同じであり、担当部署を3つに分けることを意味した。アメリカの大統領制はイタリアのこの制度と似ている。つまり1人の人間に強大な権力を与えるが、その任期を短く限定するのである。

「世俗の temporal」組織は、「それが所属している世界 society」が「永続しない一時的な temporary」ものと考えられていた為、組織そのも「永続しない一時的な」ものと考えられていたが、それが中世界の栄光と悲惨の原因になっていた。イタリアは、その先駆けであった。それが1200～1500年に「教皇派」が提起した革命的な考え方であった。

その残光が現代のアンドラ侯国 Principality of Andorra に残っている。アンドラ侯国では、中世的な統治の「一時的 temporal」なことが現在でも重視されている。アンドラ侯国はピレネー山中にあり、6つの「地区 valley, parish」に分かれている。この6つの「地区」が「一時的な権力 temporal power」を構成しているのである。それぞれの地区から1人ずつ代表が選

ばれるが、彼らの任期は選ばれたその日で終わる。代表たちは「1日だけの集まり diet, dies」に出かけ、「1日だけの集まり」に出席するが、そこには「1日だけの集まり」から帰宅する時間も含まれている。それが「一時的」であることから、「議会 parliament」と呼ばれずに「1日だけの集まり」と呼ばれていた。6人の代表は「鉄の部屋 Iron Cabinet」に集まったが、「鉄の部屋」には行政文書を入れた箱が保管されていて、その箱には侯国の「特許状や権利書 charters and privileges」が保管されており、それが「1日だけの集まり」の度に代表たちのテーブルに用意された。代表たちが自分たちの持つ権限を知るためである。行政文書の保管箱には鍵が掛かっており、その箱を開けるには6人の代表がそれぞれ持っている6つの鍵を同時に使う必要があった。保管箱を開けた時に統治が開始されるのである。日没時、彼らが「鉄の部屋」を去るときに統治は終わった。

ここに統治担当者の任期は、1日で終わるべきだという世俗国家の原則が示されている。どんなに長くても1年を超えてはならないのである。神聖ローマ帝国では、「受難週 Passion Week」（「聖週間 Holy Week」ともいう。キリストの処刑日から復活祭までの聖なる1週間）は教会によって戦闘が禁止されていた。教会は皇帝や国王に圧力を掛けて教会歴に従わせることに成功しており、世俗君主たちに1年を12ヶ月とする教会のカレンダーに従わせることにも成功していた。1年を超えて行使される権力は、乱用の可能性が高いからである。こうして、カレンダーに従えない世俗君主の弱さを考慮した制度が作られることになった。世俗の統治体や政治的な意志決定には様々な人間が関わっており、特定の間が生涯、権力を掌握する愚は<sup>さ</sup>避けられることになった。「教皇派」の都市は、教会のカレンダーに従うことになったのである。この「教皇派」の考え方がヨーロッパ中に広まり、国王をはじめ全ての君主たちは、国内の諸身分と統治体を「世俗世界で共有 temporal share」することにしたのである。「世俗世界で共有」と呼ぶのは、国の代表が「1日だけの集まり」に「出かけ going」・「出席し staying」・「帰宅する returning」形で権力を行使したからである。小さなアンドラ侯国で

指摘したことは、大国イギリスでも同じであった。議会を褒め称えるヘンリー 8 世の次の言葉に、世俗秩序の「一時性」という考え方を見ることが出来る。「朕の判事たちが言うことによれば、議会の開催時ほど朕の権威が高まる時は無いとのことである。そのとき朕と議員は一緒になって統治体を構成し、議会の開催時に議員に対してなされる攻撃や致傷は、全て朕および議会に対する攻撃や致傷と見做されるからである」。

ヘンリー 8 世は自ら教会の首長となることで、「一時的な存在に過ぎなかった国家 temporal state」を「近代国家 modern state」に作り変えてみせたのである。彼がイギリス国教会の首長になったとき、イギリスは教会の「超時性 timelessness」を手に入れたのである。王権は神に由来するという王権神授説は、16 世紀に初めて登場して来た考え方であった。1200 年（インノケンチウス 3 世は枢機卿会議で『帝国の現状に関する一考察』と題する演説を行う）から 1517 年（ルターは『九十五ヶ条の提題』をウイッテンベルク市で公表）まで、王権神授説は存在していなかった。何故なら、1 年を超える統治は世俗の支配者に認められていなかったからである（イギリスで『法令集 year-book』が 1 年単位で公表されていたのも、それが原因であった）。「1 年と 1 日」の原則（1 年と 1 日、保有すれば所有権が発生する）がヨーロッパで受け入れられていたのは、そのお陰で自分たちが世俗の支配者の奴隷にならずに済んだからであった。

## 第 6 節 「景観 Landschaft」の登場とその政治的意味

こうして世俗権力が支配する「領域 territory」の概念に決定的な変化が起きることになった。「1 日だけの集まり diet, dies」に権力が集中した結果、その 1 日が「領域」全体を意識するようになったのである。「1 日だけの集まり」のおかげで権力が目に見えるものとなり、もはや権力は個人が独占するものでは無くなった。「農村 country, valley」や「都市 borough」全体を「1 日だけの集まり」が代表することになったのである。

「この新しい空間意識 new vision of space」が、「教皇派」の都市に新しく登場して来た。1192 年にジェノバの農民に市民権が認められることになり、1235 年にはトスカナ地方の農民にフィレンツェの市民権が認められた。我々にとって権力中枢からの距離が政治的な権利と無関係であることは常識だが、この新しい考え方が実現するまでには、多くの困難が待ち構えていた。「皇帝派」だったフィレンツェ出身のダンテは、このように農民と都市民を一緒にすることに反対であった（Francesco Ercole, Il Pensiero politico di Dante, vol. II, Milano 1928）。ダンテは時代の趨勢に抵抗しようとしたのである。

農民を無理に都市民に仕立て上げることには、ドイツの支配者たちも反対であった。ドイツでは、イタリア人のやり方は「個人の違いを無視した集団主義 soviet system」とされた。その後 200 年の間、ドイツでは法律によって「偽都市民 Baloburger, Pfahlburgertum」を認めることが禁止されている。ドイツの都市では、農民も騎士も都市民になることが出来なかった。ところがイタリアでは、「教皇派」の都市は農民に対して寛容であった。農民は市民権を認められ、都市の商人組合や職人組合に参加することも認められたのである。フィレンツェの有名な画家は、すべて農村の出身であった。ミケランジェロはセッティニャーノ Settignano 村の出身だったし、レオナルド＝ダヴィンチはビンチ Vinci 村の出身であった。また「新しい絵画様式 stilo nuovo」（型式化されたビザンツ様式の伝統を破った写実的な絵画）の創始者ジョットは、ベスピニャーノ Vespignano 村の出身であった。そのお返しに都市は農村に対して、農民や騎士が思いもよらなかった新しい考え方を提供している。それが「景観」という考え方であった。1200 年まで「景観」は存在しなかった。「景観」という考え方を生み出すためには、農村から距離を置く必要があったが、農民は「景観」の一部を構成していて、「景観」の存在に気づくことはなかった。アルプス山中の住民が、高い山脈をどのように考えていたかを調べた登山家がいる。「農民たちが急峻な尾根や山頂、広大な溪谷の見事さに気づくことはなかった。彼らが名前を付けた

のは身近にあるどうでもよい様なものだけであった。生まれたときからそこで暮らしていた彼らは自然の一部と化しており、景観に気づくことはなかった。原始人と同様、彼らにとって景観が全体像を示すことはなかった」(登山家 Richard Finsterwalder の言葉)。この登山家と同じ意見をドイツ出身のアメリカ人政治家が回顧録に書き残している。「自然を美しいと感じる文化は教育の結果であって、人間が生まれながら持っているものではない。たとえ持っているとしても、言葉では表現しないものである。自然のさまざまな様子、山や谷・森林や砂漠・河川・海・太陽・嵐などは、恩恵を齎す・役に立つ・役に立たない・厄介なもの・恐ろしいものなのである。ホメロスはその作品のなかで景観を描いたことはなかった。あるいは自然を美しいものとして描いたことはなかった。それはギリシャ以外の国の古代文学についても言えることである」(Carl Schurz, Lebenserinnerungen, 3 Bände, Berlin 1906, 1907, 1912. The Reminiscences of Carl Schurz, vol. I, chap. 13)。

イタリアでは、教皇派の都市のおかげで「景観」を発見することができた。「景観」は個人の所有物ではなくなっていたからである。「景観」は「政治の問題 political reality」や「芸術の問題 artistic reality」になっていた。イタリアに於ける「教皇派」と「皇帝派」の対立は、ロシアにおける社会革命党とボルシェビキ党の対立に似ている。社会革命党は個々の農民や農村を問題にしていたが、ボルシェビキ党はロシア経済全体を問題にしていた。規模が小さいイタリアの都市国家が何故 13 世紀に統一されなかったのか判らないと歴史家は言うが、それは現在の考え方を過去に当て嵌めた結果、過去の実情が判らなくなっているからである。教皇派の都市がやろうとしていたことは、現在の計画経済に相当することであった。当時のイタリアの都市経済は、荘園制経済に比べて遥かに大規模であった。1 人の騎士の装備を整えるために 183 人もの職人が関わっていたことを考えれば、その複雑な分業体制には驚くべきものがある。騎士は当時の重火器であった。騎士の甲冑工場は、現在の兵器工場に相当するものであった。それほど複雑で効率のよい産業であった。ブドウ栽培農家と小麦栽培農家が都市の職

人と一緒になって、地域の枠を超えた産業を生み出していた。「領域」意識の登場である。当時のイタリアの都市国家が占めていた 3000 平方マイル (4800 平方キロメートル) の広さなど、現在なら問題にならない広さかもしれないが、そこで行われていた複雑な生産のメカニズムが生み出す社会問題は、現在に劣らず解決が難しかったはずである。

「領域」の規模は革命を経るたびに大きくなっていった。イタリアでは 3000 平方マイルだったのが、ドイツでは 2 万 5000 平方マイル、イギリスでは 14 万平方マイル、フランスでは 36 万平方マイルになっていた。ロシアの場合、さらにフランスの 40 倍である。ロシアの規模は、国というより 1 つの大陸であった。

荘園 → 都市国家 → 王国 → 連合王国 → 国民国家 → 大陸国家

上記の変化は、社会革命の結果であった。しかし革命の最中、大多数の人間はもっと重要なことが存在していることに気づいていなかった。それは新しい構想によって新しい時代を切り開く新しい支配者の大胆さである。革命の当初、彼らは少数派に過ぎなかった。しかし、彼らは古い思考方法では解決できない問題を解決する力を有していた。何故なら、彼らは新しい秩序を前提に考えることが出来たからである。

新しい考え方を要求したのは「領域」の変化であった。荘園が都市国家に変わったとき、あるいは国民国家が大陸国家に変わったとき、そこには大きな危険が潜んでいた。中世のイタリアでも現在のロシアでも、変化は暴力革命の形で突然起きている (他の国では、もっと穏やかな形で起きている)。新しい支配者による大胆な跳躍は常に人々を驚かせてきた。13 世紀にヨーロッパでは、暗黒の宮殿 (皇帝) と教会 (教皇) に代わって新しい地平が見えてきた。しかしまだ雲と丘が残っており、天と地が会おうはずの地平線はその陰に隠れたままであった。

教皇の「権威」と都市国家の支配者の「権限」が協力することで、新しい「政治の考え方 political symbolism」が生まれて来ることになった。ルネサンス期の芸術作品がその現れである。イタリアの都市国家には、聖油を

受けた国王や皇帝の権威は存在しなかった。何故なら、都市国家は飽くまでも世俗の共和国だったからである。信仰や神学の問題は全てローマの教会に任せただけで、都市国家の市民は教会を「精神面で面倒を見てくれる共通の母 spiritual common nurse and mother」として崇めることになった。ローマの教会は「全ての教会の母 Mother of All Churches」であり、そこでローマの教会は「我らの母なる教会 Our Mother Church」となった。これが「聖母マリア Virgin Mary」崇拝が登場してきた原因である。イタリアの都市国家が皇帝の支配から自由になるとき、マリア崇拝も大きく前進している。こうして13世紀に「アヴェ・マリア」(『ルカによる福音書』1:28~42の天使祝詞)と「主の祈り」(『マタイによる福音書』6:9~13, 『ルカによる福音書』11:2~4)を一緒にした「ロザリオの祈り Rosary」が登場して来るようになった。聖母マリアの地上や天上における役割を巡って、フランチェスコ修道会とドミニコ修道会の間で盛んに論争が展開された。マリアによる執成しは、当時の荘園や宮廷で家族や召使いのために主婦(母親)が行う執成しと同じだと考えられていた。皇妃・王妃・農民の妻は家政全体に責任を負っていて、自分のもとで働く全ての者のために声を上げる義務があるとされた。皇妃・王妃のこの義務については、決まって指摘がなされていた。「家 house」全体を守ることが当然視されていた当時は、聖母マリアが息子のイエスと一緒に信者のために執成すことは、母親が女王で無くなった現在と違って当り前のことだったはずである。

マリアに関する議論は、そのまま教会の在り方にも影響を与えることになった。「聖体 Holy Communion」(イエス=キリストの体を象徴するウエーハース。信者はミサでこれを司祭より頂いて食し、自らをイエスと一体化する)が救世主イエス=キリストの存在を支持しているように、教会はマリアの実在も支持していた。イエス=キリストを祀った祭壇がある石造りの大聖堂は、イエスを抱くマリアの子宮なのである。さらに「母なる教会 Mother Church」は、すべての信者に保護と指針を与えるのである。普遍的なローマの教会は世界中に存在しているが故に、マリアも世界中で出現して来

ることになった。マリアの外套は天上から雲を突き破り、雪をかき分けて野・森・海などで働く信者を守ってくれるのである。モンタペルティ Montaperti の戦い(1260年に「皇帝派」のシエナと「教皇派」のフィレンツェの間で起きた戦争)の前に「聖母の都市 Civitas Virginis」なる称号を獲得すべく、シエナの司教と市長 sindaco はシエナ大聖堂でシエナを聖母マリアに捧げ、お陰でシエナ軍は戦場で聖母の外套に守られてフィレンツェ軍に勝利することができた。こうしてヨーロッパ中の教会が聖母マリアの教会となったのである。

聖母マリアが馴染み深い存在となったことから、祭壇の奥にマリアの絵を掲げることが普通に行われる様になった。1200年になるとカトリック教会の司祭はキリストの体を象徴するウエーハースを手を持って高く掲げるようになり、そのとき信者たちに背を向けて東の方向に向くことになった。その司祭の視線の先に聖母の姿を描いた絵が掲げられる様になったのである。それから300年、その間もマリアの姿は描かれ続け、今では多くの研究書が出版されている。イタリアにおける新しい政治運動の勝利をよく象徴しているのが、「景観」のなかに描かれている聖母の姿である。

1300年以降に描かれるようになった絵画は、それまでの絵画と違って遠近法を取り入れていた。中国の絵画に遠近法は存在せず、金色に背景を塗り潰したビザンツ絵画にも遠近法は存在しない。教会で執り行われる聖務の中心である聖母も、イタリアの都市国家が置かれた新しい政治環境のおかげで遠近法の「景観」に登場して来るようになった。「新しい様式」の絵画は現在の計画経済に関する書物の様なもの、あるいはフランス革命を描いた国民文学の様なものである。それは「共通の努力 common effort」や「共通の信念 common faith」の現れであった。都市国家の市民は、「母なる教会」から発せられた明るい光が闇夜を照らしている様感じたはずである。遠近法で描かれた「景観」は、都市国家から見た農村の光景であった。ペトラルカが「花々・枝葉・千草・木陰・洞窟・さざ波・そよ風 Fior, frondi, erbe, ombre, antri, onde, aure soavi」と書いていた頃(ペトラルカ「カ

ンツォニエーレ:俗事詩片』第2部, 303ソネット, 名古屋大学出版部 457ページ), 画家たちは大聖堂と農村を一緒に描いていた。世俗の権力を合法的に手にした都市国家の市民は, 目の前に広がる「景観」に魅了されていたはずである。「新しい様式」で描かれた聖母像を見るたびに彼らを感じていた熱狂を理解するには, 教皇と協力することで皇帝の介入から自由になった都市国家と, 都市国家を抑圧することに熱心であった皇帝との対立を忘れてはいけない。例えばピサーノ Nicola Pisano は, 1260年に「ピサの洗礼堂 Pisa baptistry」の説教台を完成させたとき, ピサの市民たちから賞賛の声を浴びていた(この種の例としては最初のもの)。また1300年頃にドウッチオ Duccio di Buoninsegna (聖母が外套を広げてシエナ軍を守ったというモンタベルティの戦いを目撃していた)が描いた「聖母の祭壇画 Maestà」は, 鐘が打ち鳴らされる中, シエナの司教・司祭・役人・市民によって大聖堂に運び込まれていた。この「聖母の祭壇画」に彼が書いた詩文で, 彼は自らを都市国家シエナと同一視している。「聖母によってシエナに平和が齎されますように。聖母を描いたドウッチオを聖母が守って呉れますように Mater Sancta Dei Sis Senis causa requiei, Sis Duccio vita te quia pinxit ita」。教皇とラファエルやミケランジェロの関係は, ふつう考えられているような君主と絵師の関係とは違っていた。誇り高き市民がいたことで有名なベネチアですら(つまり教皇の存在など意に介さないはずのベネチアですら), サンマルコ大聖堂に「何かを決める時は必ずズカッティ兄弟 brothers Francesco and Valerio Zuccati の作品を念頭に置くべきである」と書いていた程である。画家は都市国家の自由を象徴する聖母像を描くことで, 都市国家の「芸術家 artista」全員を代表する名誉に浴するのである。19世紀の画家のように, 孤立した傷つき易い天才などではなく, 最高の「芸術家」であった。

## 第7節 貧しき聖フランチェスコ

イタリアの都市国家が誇っていた自主独立の精神は強烈で, 教皇が都市

国家の徹底した世俗主義に何とか対処できていたことが不思議に思えてくる。1200～1269年は「教皇革命」の後半期だが, イタリアの都市国家に登場してきた異端運動や宗教的な無関心, 反教会的な立法の数々を目にすると, そもそも「教皇派」の存在とは何だったのかと不思議に思えてくる。この時期は十字軍が失敗して教皇の権威が地に落ちていた時で, そのことを考えれば, ますます不思議に思えてくる。

教皇はイタリアの利益を考慮に入れざるを得なくなっていたが, イタリアの利益を考慮に入れば, 十字軍は無意味に思えたはずである。18世紀になっても十字軍は亡霊のようにヨーロッパを彷徨っていたが(1700年までのカトリック教会の聖人歴では, 十字軍に関わった聖人の日が祝日として祝われていた), 宗教改革の前夜とも言うべき1495年にドイツで「農民一揆 Bundschuh」を起こした農民たちは, 自分たちが抱えていた問題を一気に解決すべく, 十字軍を起こして聖墳墓(キリストの遺体が葬られているとされている)を訪れることを夢見ていた。そんな農民たちに対してルターは, 「神は聖墳墓と呼ばれている空っぽの墓のことより(キリストは昇天して墓は空のはず), スイスの牛たちのことを心配しておられる」と懸命に説得していた。因みに1460年, ウエルギリウス Publius Vergilius Maro の建国叙事詩『アエネーイス』の主人公「ピウス = アエネアス Pius Aeneas」(敬虔なアエネアス)に因んでピウス2世と名乗った教皇は(俗名はアエネアス = シルウィウス Aeneas Silvius), 対トルコ十字軍の計画を立案していた。こうした事実があったにも関わらず, 1200年以降は十字軍が教皇にとって大切な意味を持つことは無くなっていた。1204年に第4回十字軍がビザンツ帝国の首都コンスタンチノーブルを征服してラテン帝国を建国したとき, 十字軍を真面目に考えていた人たちは大きな衝撃を受けていた。1212年には子供十字軍が悲劇で終わっていたし, 1226年に南仏を制圧するまでにアルビ十字軍が行った虐殺行為は, 十字軍に対する評判を悪化させていた。十字軍が頂点に達したのが, 聖墳墓教会に於けるフリードリヒ2世の国王戴冠であった(教皇によって破門されていたにも拘らず十字軍を率いてエルサレムに

やって来たフリードリヒ2世は、1229年に自らの手で戴冠した)。このように十字軍は、教皇にとって両刃の剣であった。結局はカトリック教会に反対する人々によって実行されるか、同じキリスト教徒を虐殺して教皇の評判を落とすことになったからである。教皇には新しい真摯な事業が必要になっていた。

破門することで十字軍の実行を禁止していたにも拘らず、その禁令が無視された教皇は、イタリアと教会を結び付けることができた唯一の人物を訪れることで傷心を癒やすことにした。『詩編』147にも、こうある。「神はすべての国民にこのような人物を与えたわけではない」。1228年に教皇はアッシジを訪ね、最後の十字軍参加者にして（聖フランチェスコは第5次十字軍に同行してエジプトに行き、スルタンに改宗を勧めたとされている）最初の托鉢修道士であった聖フランチェスコの死の床の傍らに跪いたのである。

アッシジのフランチェスコは、「帝国の庭 il giardino dell'impero」（イタリア）で行われた「教皇派」による革命を支えたアーチの要石であった。彼は裕福な商人の息子だったが、十字軍に参加することを夢見て中東に出立すべくアプリア Apulia に赴いた。途中で引き返すことになったが、それは彼にとって十字軍が無意味に思えたからであった。これが彼の人生の転機になった。当時の人々にとって大切だと思われていたことが、彼には無意味に思えたのである。十字軍に代わる新しい信仰の在り方を求めている彼が、カラブリアの修道院長だったフィオーレのヨアヒム Joachim of Fiore とどの様な形で出会ったのかは判っていないが、それが「運命的な出会い providential way」であったことは確かである。「アッシジの貧者 il poverello d'Assisi」にとって、ヨアヒムはキリストの登場を予言した洗礼者ヨハネのような存在であった。ヨアヒムが新しい托鉢修道会の登場を予言し、その予言を実現して見せたのが聖フランチェスコであった。ヨアヒムは12世紀のスコラ学者たちに敵意を抱いていた。ヨアヒムの言う「第3期」（「第1期」は「父たる神の時代」で旧約の時代、「第2期」は「子たるキリストの時代」

で新約の時代、「第3期」は「聖霊の時代」で、理想が実現する時代）が始まる60年前、つまり1200年に登場して来たスコラ学者は理屈を捏ねるだけであった。そんな教会の在り方が終わることをヨアヒムは予言していたのである。聖霊がそれを実現するはずであった。聖母マリアは改めて聖霊によって息子を懐妊するが、その「息子」とは、旧約聖書の予言者ダニエルが約束した「権力」を手にした人々であった（『ダニエル書』7:27）。ヨアヒムは1201～1260年に教会の在り方が大きく変わると予言していた。オディロ Odilo of Cluny の「死者の日 All Souls' Day」も革命的だったが、さらに革命的な変革の時代が来ることを予言していたのである。ヨアヒムによれば、「教会の時代」に続くのは「聖霊の時代」であった。この場合も、「全体革命 total revolution」の時代に特徴的な変革への渴望が存在していた。ヨアヒムは、やがて訪れて来る未来を「ヨハネの時代 Johannine」と呼んだが、それは聖ペテロと聖パウロが目に見える地上の教会の守護聖人になっているのに対して、「愛の使徒ヨハネ John the Apostle of Charity」が新しい「聖霊の時代」の守護聖人となっていたからであった。

ヨアヒムが書いたものは影響力が大きく、当時は彼の名前を騙った多くの本が出版されていた。『不滅の福音書 Evangelium aeternum』もそんな本の1つで、「聖霊派 Spirituals」と呼ばれたフランチェスコ会の修道士が書いたものであった。彼らに言わせれば、教皇に信仰を説く資格はなかった。ウイクリフ John Wycliff・フス Jan Hus・ルター Martin Luther たちが現れる以前、すでに「聖霊派」がカトリック教会の聖職者から聖務を執行する資格を奪っていたのである。教皇による叙任よりも大切なのは聖霊を感じることであった。また聖霊が齎す7つの能力：知恵・認識・思慮・勇気・神を恐れること・正義・公正（『イザヤ書』11:1～4）よりも大切なのは、靈感を受けて自由に語る能力であった。フランチェスコ会のなかでも過激であった「ヨアヒム派 Joachimites」は、ルターの宗教改革を先取りした革命派であった。教皇は「聖職売買 Simonia」を止めたが、信者の金銀を自分のために利用することは止めなかった。教会は富の蓄積に成功していたのであ

る。聖俗の両剣（世俗君主としての権限と聖職者としての権限）を使いこなす「キリストの代理人 Vicar of Christ」（教皇）は、教皇権「回復」のために「鍵の兵士」を教皇庁に配備することにしたが、それは富の蓄積のためであった。教皇に対する嫌悪感が高まったとき、これを打ち消して教皇権を「回復」するために必要とされたのが「第2の教皇革命」であった。新しく説かれることになった「清貧の理想 ideal of poverty」が、教皇に対する忠誠心を「回復」して呉れるはずであった。グレゴリウス改革では聖職者の独身制が説かれたが、「清貧」を旗印にしたのは托鉢修道士たちであった。「清貧」には、原始キリスト教の「暗さ・惨めさ・飢え darkness, abjection, starvation」を再現して、後の教会が手にした「太陽のごとき輝き sun-like radiancy」を打ち消す効果が期待できた。「清貧の祈り prayer for poverty」が新しい教会の在り方を示していた。それは教皇庁における腐敗と真っ向から対立するものであった。讚美歌の「怒りの日 Dies irae」やダンテは、グレゴリウス7世による教皇革命を我々に想起させて呉れるが、「清貧の祈り」も同じである。「清貧の祈り」については何人もの詩人たちが美しく歌っているが、新しいものではリルケ Rainer Maria Rilke によるものがある。「<sup>なんじ</sup>汝の藁敷きの揺り籠には清貧があった。我らが救済のために戦う汝の偉大な戦いにおいて、聖母マリアは忠実な臣下のように自ら武装し、汝が受難の時も聖母マリアだけは汝を見捨てなかった。汝が生みの親たる聖母マリアは、十字架の足元で立ち止まったが、清貧は十字架を登り、汝が息絶えるまで汝を抱きしめていた。汝が喉の渇きの中で息絶えようとしていた時、清貧はよく気が付く妻のごとく汝のために胆汁を用意した。清貧に抱擁されて汝が息を引き取った時も、汝の死の時も清貧は汝の元を去ることは無かった。主イエスよ、清貧は汝の遺体を借り物の墓に埋めることしかしなかった。清貧のイエスよ、我にも清貧の宝を与え給わんことを。太陽の下で何物も所有せずという清貧を我らが修道会の印とすることを許し給え。托鉢（物乞い）を唯一の財産と心得ることを許し給え」。

「清貧<sup>せいひん</sup>の祈り」は、もし教皇や教会に対して否定的な態度を取っていれば

影響力を発揮することは無かったであろう。ヨアヒムの予言を実現して見せた聖フランチェスコは、新しい時代の到来を象徴していた。しかし過去を否定することも無かった。

聖フランチェスコは、敢えて「俗世 temporal」を「祝福して sanctify」見せたのである。聖フランチェスコの生涯は「小さな花 Fioretti」と呼ばれるが（イタリア語で Fioretti di San Francesco と言えば「聖フランチェスコの生涯」の意味）、それは彼の生き方が花のように慎ましく・美しく・儂かったからであった。「清貧の祈り」と托鉢（物乞い）を原則とした生き方は、莊園とは無縁な都市で都市民と生きる新しい生き方であった。それは「俗世」を捨てて修道院に入り、農業と牧畜に専念するシトー修道会士のような生き方ではなかった。フランチェスコ修道会の修道士は都市に住<sup>す</sup>んだのである。自由な都市民が創った石造りの都市と、そこに住む都市民がフランチェスコ修道会によって「祝福される sanctified」ことになった。

聖フランチェスコは教会に対して忠実であった。だからこそ彼の生き方が全てのキリスト教徒にとって意味あるものとなったのである。聖フランチェスコは晩年にキリストと同じ5つの聖痕（キリストは十字架に懸けられたときに、両手首・両足首と脇腹に傷を負った）が現れたとされているが、このことから新しい「聖霊 Spirit」到来の時代が近かったことが判る。キリストと一体化することで「アッシジの貧者 il poverello d'Assisi」（聖フランチェスコ）は、キリストが経験した苦しみを肩代わりして見せたのである。当時、托鉢修道士たちが社会に与えた印象は強烈であった。1300年にドミニコ修道会とフランチェスコ修道会に属していた托鉢修道士の数は20万人ほどであった。もはや托鉢修道会の存在を問題にする者はいなくなっていた。托鉢修道会に属するか否かが問題なのではなく、どちらの修道会を選ぶかということが問題になるだけであった。彼らはイタリア中に仲裁と平和維持のネットワークを張り巡らしていた。皇帝という上位者が不在になったイタリアでは、都市国家どうしの争いが絶えなかった。修道士たちは、都市を訪問してはマリアの名のもとに平和を呼び掛けていた。たと

例えば1233年に教皇は、ビチェンツァのジョバンニ Giovanni da Vicenza に命じてトスカナ地方の都市シエナとフィレンツェの講和を実現させている。しかしジョバンニにとって大切だったのは、トレヴィーゾ辺境伯領 Marca di Treviso で平和を実現することであった。ロンバルディア地方・ベネチア地方・ロマニャ地方のすべての都市の代表が、トレヴィーゾ辺境伯領のペローナで平和を誓いあっていた。

同じ頃、パルマの市民全員がマリアを讃える讚美歌アヴェ＝マリアを歌い、神を讃える言葉「ハレルヤ hallelujah」（主を褒め称えよ）を唱えていた。このパルマ市民の友愛熱は、ボローニャやモデナにも広がって行った。ヨアヒムが「偉大なヨハネの時代」が始まると予言していた1260年になり、聖フランチェスコが始めた運動が大きな広がりを見せるようになったのである。ある年代記作家によれば、「人々は神による審判 Visitation of God を恐れていた」。この年、イタリア全土で困窮・争い・犯罪の嵐が吹き荒れていたからである。ペルージャでは一人の隠者が警告の声を上げ、それを切っ掛けに市民たちは司教や聖職者に率いられて悔悛の行進を始めた。寒さ厳しい冬であったにも関わらず、上半身裸で血が出るまで自分の背中を鞭打っていた。十字を切りながら「平和」・「貧者への施し」・「慈悲 misericordia」と口々に唱えていた。

最初のうち彼らは馬鹿にされていたが、やがて周辺の都市でも同じ悔悛の行進が始まり、人々は上着を脱ぎ棄てて自分の背中を鞭打ち始めた。全員が自分の罪を告白し、和解を実現していった。ペルージャから始まったこの運動は、やがてローマ → トスカナ地方 → リグーリア地方 → ロンバルディア地方に広まって行き、1ヶ月から2ヶ月の間にイタリア全土で平和が実現した。亡命者は帰還が許され、牢獄の門が開かれたのである。独立した都市国家から構成されたイタリアで平和が実現したのは、都市で托鉢（物乞い）に頼って生きていた修道士たちのおかげであった。

いまヨーロッパで「鞭打ち行列 flagellantism」と言えば、この13世紀のものではなくて14世紀に復活して来たものを意味するが、教皇がローマ

から遠く離れたアビニョンに囚われていた間に盛んであった14世紀の「鞭打ち行列」は、ナポレオン3世統治下でフランスが経験したこととよく似ていた。ナポレオン3世統治下の第2帝政は、ナポレオン1世時代の帝政と見た目は似ていても、その内実は別物であった。同じように、フランチェスコ修道会の「聖霊派」が実行していた「鞭打ち行列」と外見は似ていても、教皇がアビニョンに囚われていたあいだ（1305～1377年）盛んであった「鞭打ち行列」は、似て非なるものであった。1348年の黒死病の大流行を見てボッカッチョ Giovanni Boccaccio は『デカメロン』（十日物語）を書き始めるが、それが切っ掛けになって「鞭打ち行列」はさらに勢いを増すことになった。

イタリアで13世紀（Ducento）に「鞭打ち行列」が盛んになったのは、領主による農村の支配体制が崩壊したことが原因であった。50万を超える人々が、農村における領主支配を逃れて自由な都市の空気を味わうことになったからである。伝統的な隷属から突如として解放された人々は、領主支配の厳しさを忘れないために自らを懲らしめることにしたのである。

ここでもう一度13世紀の癒しの人、アッシジのフランチェスコに立ち返ってみよう。凡庸な歴史家にとって、フランチェスコは単なる聖人でしかない。13世紀も「教皇革命」の時代であって、「近代」は14世紀を生きたペトラルカ Francesco Petrarca から始まる様に思えてくる。例えば聖フランチェスコとダンテが生きた13世紀を扱ったフォスラー Karl Vossler の本は、聖フランチェスコの「太陽讚歌 Sun Hymn, Canticle of the Sun」が旧約聖書の『詩編』148の単なる繰り返しに過ぎないと書いている（Karl Vossler, Medieval Culture: an Introduction to Dante and his Times, 1929）。しかし、果たしてそうであろうか。確かに『詩編』148は、「太陽讚歌」と同様に神が創造した自然界を賛美しているように思える。「讚美せよ、ヤハウエを、天から、かれを讚美せよ、諸々の高みで。…かれを讚美せよ、太陽と月よ、かれを讚美せよ、光の星たちのすべてよ。かれを讚美せよ、諸天のてんよ、天の上なる水よ。彼らは讚美するがよい、ヤハウエの名を。かれが命じて、

彼らは創られたのだ。…讚美せよ、ヤハウエを、地から。龍たちとすべての淵よ。火と雹よ、雪と煙よ、かれの言葉を行なう激しい風よ。山々とすべての丘よ、実をつける木とすべての杉よ」(『詩編』148:1-9)。これ以上、讚美の言葉を繰り返すこともないと思われるので、引用はこの辺で止めておく。

この神ヤハウエを讚える歌は、天上の世界や地上の世界を偶像化することを禁じている。地上の世界に住み場所を持たなかったユダヤ教徒は、地上の被造物を讚美することを知らず、また世俗の秩序を讚えることも拒否した。

『詩編』148と違って、アッシジの聖フランチェスコは世俗の秩序を讚えていた。ユダヤ教徒が拒否したことを、キリスト教徒は受け入れたのである。聖フランチェスコの「太陽讚歌」の本当の意味を理解するためには、13世紀のイタリアに世俗国家が都市国家の形で登場していたことを忘れるべきでない。クリュニー修道院ですら世俗世界は忌むべきものだと考えていた。『レクイエム Requiem』(死者の平安を祈るミサ曲)の歌詞ではないが、「最後の審判」のとき「世界は灰と化す Solvet saeculum in favilla」のである。しかし1200年から1500年の間に、世俗世界は復権を果たしていた。この章を終えるに当たって、『詩編』148と「太陽讚歌」の違いを指摘してみたいと思う。

聖フランチェスコにとって人間は花のような存在であり、世俗世界は花を植える庭園のような存在であった。彼は修道院・皇帝・荘園からなる古い世界に、新しい別の世界を見たのである。古い勢力は世俗世界を避け、自然を恐れ、昼夜の別なく悪魔や悪霊に怯えていた。聖フランチェスコに言わせれば、イエス＝キリストは全ての被造物の味方であり、「最後の審判」で彼が復活させるのは、人間だけでなく全宇宙なのである。彼のお陰で人間は、被造物に心を寄せるようになった。また自然との和解も望むようになった。聖フランチェスコにとって、被造物は家族のようなものであった。神は被造物を通して讚美されるべきなのである。聖フランチェスコは、

『詩編』の作者のように被造物を蔑み、神だけを讚えていた訳ではなかった。ユダヤ教徒の『詩編』作家と違って、聖フランチェスコの目は地上に注がれていた。

フォスラーによれば、『詩編』148と聖フランチェスコの「太陽讚歌」は同じだということになるが、「景観 Landschaft」が芸術的な意味以外に「国家 Land」を代表するという政治的な意味も持っていたことを忘れてはいけない。「アッシジの貧者 il poverello d'Assisi」(聖フランチェスコ)が残した「太陽讚歌」には、「景観」以上に政治的な意味が存在する。彼は神の被造物に「汝 thou, thee」(現在の英語にはない親しみを込めた二人称)と呼び掛け、「国家」(土地の意味もある)との親密な関係を歌い、自分が「国家」の一員であり、「国家」の血と肉であることを歌っている。

聖フランチェスコは被造物たる自然を歌にしたのである。彼の「太陽讚歌」を読めば、ラファエロを始めルネサンス期の画家たちが、聖フランチェスコから始まる13世紀の「聖霊派」の考え方を絵にしていたことが判る。トーデ Henry(Heinrich) Thodeに言わせれば、イタリアのルネサンスは聖フランチェスコに始まるということだが、私はトーデの言っていることに賛成である。十字軍と宗教改革に挟まれた1200～1500年には、一貫した歴史の流れが存在していた。それを示しているのが聖フランチェスコの「太陽讚歌」なのである。「至高にして万能の善き主よ、讚美と栄光と祝福は汝のもの。これらすべては至高の主だけのもの。我らには主を主と呼ぶ資格すらない。讚美せよ我が主を。その被造物、特に我らが兄弟たる太陽ゆえに。太陽は夜明けを齎し、我らに昼の明かりを齎す。美しく明るく輝く太陽は、至高の主の偉大さの証拠。讚美せよ我が主を。明るく輝き、高貴で美しき我らが姉妹たる月と星を創ったがゆえに。讚美せよ我が主を。我らが兄弟たる風と空気と雲と空、そしてすべての天候ゆえに。被造物が生きていけるのは、これらすべてのおかげ。讚美せよ我が主を。有用だが奢らず、貴重だが慎み深い我らが姉妹たる水ゆえに。讚美せよ我が主を。夜を明るく照らし、美しくかつ陽気で、勇敢にして強い我らが兄弟たる火ゆ

えに。讚美せよ我が主を。我らを養育し、守り、さまざまな果物や草花を  
与えてくれる我らが姉妹たる母なる大地ゆえに。我らが姉妹たる母なる大  
地は我らを養育し、我らが兄弟たる火は陽気で勇敢、我らが姉妹たる水は  
慎み深く…」

この辺で止めておこう。「我らが姉妹たる母なる大地 Sister, our Mother  
Earth」という言葉には異教の気配がある。キリスト教徒の姉妹として「母  
なる大地」を受け入れているからである。「中世」という概念は、ドイツ  
の宗教改革が生み出したマイナスの意味を持つ概念のはずであった。とこ  
ろが聖フランチェスコが登場させたイタリアでは、それがプラスの意味を  
持つ概念に変えられ、人間と自然を兄弟姉妹にしまったのである。自然  
までが神と教会によって守られる対象とされたのである。「第2の教皇  
革命」によって、信者はキリストではなくてマリアに目を向けるようにな  
り、キリストなら認めるはずがない解決策をマリアから引き出してくるこ  
とになった。

## 第12章 ポリュビオス再論

1900年のヨーロッパで「近代 modern era」と言えば、それはコラ＝ディ  
＝リエンツォ Cola di Rienzo (19世紀のイタリア統一運動の先駆者とされた人  
物)がローマ市の「護民官 tribune」に任ぜられた1347年、あるいはボッ  
カッチョが『デカメロン』の執筆を開始した1348年に始まるということ  
になっていた。例えばフリーデルの『近代史』がそうである (Egon Friedell,  
Cultural History of Modern Civilization, New York 1930～32)。これでは、フラン  
ス革命がナポレオン3世から始まるとうようなものである。中世を「暗  
黒 dark」と考えていた歴史家が、14世紀に使われるようになった近代的  
な言葉に注目した結果がこれであった。

しかし1347年とか1348年を近代の始まりだとすると、本当の意味での  
近代と、外見だけが近代的で中身は近代でも何でも無い時代との違いが判  
らなくなってしまう。つまり「第2の教皇革命」が何であったかが判ら  
なくなってしまう。13世紀 (Ducento) の「鞭打ち行列」は本物であった。  
しかしボッカッチョの時代の「鞭打ち行列」は「戯画 caricature」に過ぎな  
いのである。

ここで「第2の教皇革命」が起きた時期をはっきりさせて、再び混乱が  
起きないように置くことにする。

「教皇革命」もマルクス主義者が話題にする様々な革命から影響を受け  
ていたが、だからと言って「教皇革命」が経済的な理由で起きた訳ではな  
い。どの革命も数世紀単位で考える必要があるが、「教皇革命」の場合も「最  
後の審判」が強調され過ぎて、その反動で他の側面が注目されるようになった  
のである。

最初の「教皇革命」(グレゴリウス改革)では精神的な側面が強調され、  
「第2の教皇革命」では現実的な側面が強調されたが、いずれも改革を目  
指していたことでは同じであった。新しい考え方を教皇令として公布した  
グレゴリウス7世は大声で命令し、巧みな外交を展開して見せたインノケ

えに。讚美せよ我が主を。我らを養育し、守り、さまざまな果物や草花を  
与えてくれる我らが姉妹たる母なる大地ゆえに。我らが姉妹たる母なる大  
地は我らを養育し、我らが兄弟たる火は陽気で勇敢、我らが姉妹たる水は  
慎み深く…」

この辺で止めておこう。「我らが姉妹たる母なる大地 Sister, our Mother  
Earth」という言葉には異教の気配がある。キリスト教徒の姉妹として「母  
なる大地」を受け入れているからである。「中世」という概念は、ドイツ  
の宗教改革が生み出したマイナスの意味を持つ概念の**はず**であった。とこ  
ろが聖フランチェスコを登場させたイタリアでは、それがプラスの意味を  
持つ概念に変えられ、人間と自然を兄弟姉妹に**して**しまったのである。自  
然までが神と教会によって守られる対象とされたのである。「第2の教皇  
革命」によって、信者はキリストではなくてマリアに目を**向**けるようにな  
り、キリストなら認めるはずがない**解決策**をマリアから引き出してくるこ  
とになった。

## 第12章 ポリュビオス再論

1900年のヨーロッパで「近代 modern era」と言えば、それはコラ＝ディ  
＝リエンツォ Cola di Rienzo (19世紀のイタリア統一運動の先駆者とされた人  
物)がローマ市の「護民官 tribune」に任ぜられた1347年、あるいはボッ  
カッチョが『デカメロン』の執筆を開始した1348年に始まるということ  
になっていた。例えばフリーデルの『近代史』がそうである (Egon Friedell,  
Cultural History of Modern Civilization, New York 1930～32)。これでは、フラン  
ス革命がナポレオン3世から始まる**と言**うようなものである。中世を「暗  
黒 dark」と考えていた歴史家が、14世紀に使われるようになった近代的  
な言葉に注目した結果がこれであった。

しかし1347年とか1348年を近代の始まりだとすると、本当の意味での  
近代と、外見だけが近代的で中身は近代でも何でも**ない時代**との違いが判  
らなくなってしまう。つまり「第2の教皇革命」が何であったかが判ら  
なくなってしまう。13世紀 (Ducento) の「鞭打ち行列」は本物であった。  
しかしボッカッチョの時代の「鞭打ち行列」は「戯画 caricature」に過ぎな  
いのである。

ここで「第2の教皇革命」が起きた時期をはっきりさせて、再び混乱が  
起きないように置くことにする。

「教皇革命」もマルクス主義者が話題にする様々な革命から影響を受け  
ていたが、だからと言って「教皇革命」が**経済的な理由**で起きた訳ではな  
い。どの革命も数世紀単位で考える必要があるが、「教皇革命」の場合も「最  
後の審判」が強調され過ぎて、その反動で他の側面が注目されるようになった  
のである。

最初の「教皇革命」(グレゴリウス改革)では精神的な側面が強調され、  
「第2の教皇革命」では**現実的な側面**が強調されたが、いずれも改革を目  
指していたことでは同じであった。新しい考え方を教皇令として公布した  
グレゴリウス7世は大声で命令し、巧みな外交を展開して見せたインノケ

ンチウス3世は小声で呟くだけであったが、2人が目指していたことは同じであった。グレゴリウス改革によって教会は自由を手に入れたが、インノケンチウス3世と4世は、イタリアに自由を獲得して見せた。このようにヨーロッパでは、人々の生き方を決める上で聖職者が果たす役割は大きい。近代のフランス革命とイギリス革命がフランス人とイギリス人を変えてしまったように、十字軍の時代に実行された「教皇革命」も「我らが姉妹、母なる大地 Our Sister, our Mother Earth」（聖フランチェスコの言葉）を変えてしまったのである。革命は人間の情熱が生み出すもので、「教皇革命」もフランス革命やイギリス革命と同じように大きな変革を実現していた。

「教皇革命」のスローガンは、ルイ＝フィリップ Louis Philippe 内閣の「金持ちに成り給え Enrichissez-vous」というスローガン（このセリフは蔵相のギゾー François Guizot のもの）ですら穏やかに思える程に過激であった。まず1122～47年のグレゴリウス改革では、皇帝は教皇の家臣扱いであった。しかし教皇庁の相次ぐスキャンダルで教皇はローマから追放され、外国に亡命することに成ってしまった。1269～1302年の「第2の教皇革命」で「皇帝派」に勝利した「教皇派」は、油断していた。クレメンス4世の死後2年半もの間、枢機卿たちは後任の教皇を選ぼうとしなかったのである。教皇領の「回復」のために70年間も（1198～1268年）苦勞したクレメンス4世に対する仕打ちが、これであった。イタリア人の怒りを恐れた教皇は、聖務禁止を命じた都市を通過するとき、入城に際しては禁止令を解き、出城に際しては再度、禁止令を公布して行ったという噂が立ったほどであった。当時の教皇の尊大な態度をよく表しているのが、1302年にボニファキウス8世が公布した『唯一の聖なる Unam Sanctam』と題された教書であった。国王をはじめ世俗の君主が聖職者の尊大な態度を嫌悪していたとき、ボニファキウス8世は教皇が世俗君主を超える権威を持つことを強調して見せたのである。彼は自分の聖衣に、皇帝の紋章であった双頭の鷲を刺繍させていた。

教皇座の衰退は、このボニファキウス8世の尊大な内容の教書に始まると

言ってよい。フランスの騎士は教皇を捕らえて幽閉し、フランス国王は聖堂騎士団を異端裁判にかけて教皇の権威を失墜させた。聖墳墓と巡礼者を保護するために設立された聖堂騎士団は、教皇にとって十字軍を展開する上で欠かせない手段であった。それがフランス国王から迫害を受け、最後には解散させられてしまったのである。皇帝から宗教的な権限を奪うことを目指していた最初の「教皇革命」（グレゴリウス改革）は、聖堂騎士団が教皇を支持してくれていたからこそ可能であった。しかし強力になり過ぎた聖堂騎士団は、フランスで問題視されることになった。1314年に聖堂騎士団の総長は「火炙りの刑 autodafé」に処せられ、教皇を皇帝の支配から解放してくれた十字軍の騎士たちは失われ、やっと「回復」したイタリアの教皇領も失ってしまった教皇は、フランスのアビニョン Avignon に移されることになった。

「帝国の庭 il giardino dell'impero」であったイタリアは、都市の自由を実現してくれた教皇と70年間、無縁であった。このアビニョンでの「バビロン捕囚」（ユダヤ人がバビロニアに集団で移住させられた故事に譬えている）は1309年から1377年まで続いたが、それは教皇の権威が絶頂期にあった時期（1200～1269年）と同じ70年間であった。最初の教皇革命であったグレゴリウス改革は、絶頂期も衰退期も50年しか続いていない。

	最初の「教皇革命」(グレゴリウス改革)	「第2の教皇革命」
開始	1046年	1161年
絶頂期	1075～1122年	1200～1269年
衰退期	1147～1198年	1309～1377年

「第2の教皇革命」は衰退期で終わった訳ではなかった。15世紀中頃に再びイタリアの都市と教皇庁は黄金期を迎えているからである。いわゆる「ルネサンス Renaissance」（再生）がそれであった。

ドイツ人も三十年戦争のあとは衰退期を経験し、さらに同じように平和と繁栄を経験している（1763～1805年）。この時期はドイツの古典芸術が

栄えた時期で、ゲーテ・モーツァルト・ベートーベン・シラー・クロップシュトック Friedrich Gottlieb Klopstock・レッシング・ヘルダー・カントが活躍していた。イタリアの古典芸術でもダビンチ・ラファエロ・ロレンツォ（ド・メディチ）・ミケランジェロが活躍し、教皇庁ではバチカン図書館とシスチナ合唱隊が黄金期を迎えていた。さらに教皇は、新大陸アメリカで争っていたスペインとポルトガルの仲介役を務めていた。

イギリスの場合も、穀物法（1846年）からボーア戦争（1900年）までのビクトリア朝時代に、似たような繁栄期を経験している。またドイツの古典芸術が栄えた時代はナポレオン戦争に敗北して終わりを迎えていて（1806年）、イタリアの古典芸術の繁栄期もフランスの侵略で終わりを迎えている。

	イタリア	ドイツ	イギリス
絶頂期 1075～1122年	1200～1269年	1517～1555年	1641～1688年
衰退期 1147～1198年	1309～1377年	1618～1648(54)年	1776～1815年
黄金期	1450～1498年	1763～1805年	1846～1900年

イタリアの「ルネサンス」は、1453年の第4回十字軍によるコンスタンチノーブル攻略でイタリアが得た富とは無関係であった。「ルネサンス」は5世紀に渡る努力の結果、得られたものなのである。その時に活躍した画家・建築家・詩人たちは、グレゴリウス7世とアッシジのフランチェスコが感じたものを古典芸術の形にした。ラファエルの聖母画に描かれた背景画や、ミケランジェロの「最後の審判（シスチナ礼拝堂）」に描かれた背景画は、かつて存在した信仰心の「ルネサンス」的な表現であった。我々は「ルネサンス」時代を美化しがちだが、「ルネサンス」が日没時の太陽の「最後の輝き」であったことを忘れてはいけない。「15世紀 Quattrocento」の芸術家たちが口にしたのは「最後の言葉」であった。彼らは壊したのであって、創ったのではなかった。ちょうどゲーテがドイツの宗教改革を世俗化

した形で表現して見せたように、彼らはスコラ学の伝統を世俗化して見せたのである。「第2の教皇革命」は、「ルネサンス」芸術の形で初めてヨーロッパ人に受け入れられたのである。

イタリアが人類に大きく貢献したことは事実である。しかし、15世紀の50年間（1450～98年）がその全てであった。その後も400年の間イタリアはヨーロッパ人とアメリカ人を魅了し続けてきたが、それは旅行者の聖地でしかなかった。

しかし「教皇革命」には別の側面があった。イタリア以外のヨーロッパにとって、「ルネサンス」は決して黄金期などではなかったのである。イタリアにとって良き時代は、他のヨーロッパ諸国にとっては悪夢の時代であった。イタリア以外の国にとって、15世紀は不幸で暗くて残酷な時代であった。ボルジア Borgia 一族に代表されるようなイタリアの支配者の悪政とヨーロッパ諸国の苦難が、「ルネサンス」の芸術と文学に暗い影を落している。15世紀は腐敗・幻滅・反動の世紀でもあった。15世紀は、現在の問題を解決する上で参考になるかもしれない。15世紀は、多くの問題に直面し解決策を見出せないでいる現在の先駆者とも言える。

ここで比較のために教会の変化について考えて見ることにする。教会は世界に影響を及ぼして来たり、すべての信者を苦しめて来たからである。

「アビニョンの捕囚」が終わった直後に起きた「教会大分裂 Schism」（1378年にローマで選ばれたイタリア人の教皇をフランス人枢機卿は認めず、彼らはフランス人の教皇を選出してアビニョンに教皇座を復活させた）で教会は、その貴族政的な支配体制が批判に晒されることになった。枢機卿たちが教皇を選出することなしに何年も教会を支配し続け、聖堂参事会と修道会総会が司教と修道士を支配していたからである。托鉢修道士たちは、このような貴族政的な支配体制を嫌悪し批判していた。彼らは一致団結して貴族制的な支配体制を変えることにしたのである。フランチェスコ修道会の急進派（「聖霊派」）は神学者と協力することにしたが、そのとき2人や3人の教皇が並立・鼎立して教皇の地位を争っていた。カトリック教会の「インテリゲ

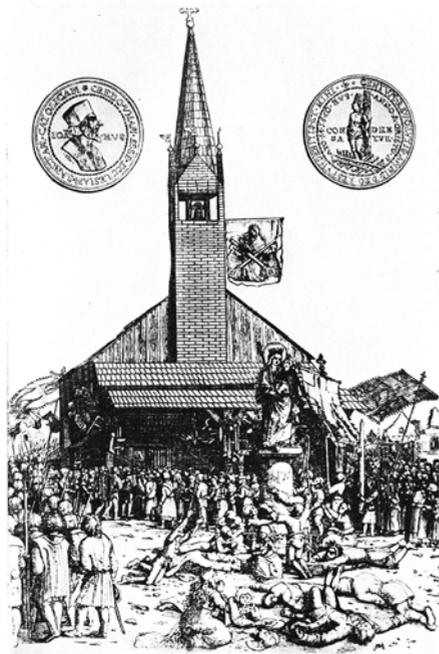
ンチャ」(ロシアの知識人)とでも呼ぶべきパリ大学の神学教授と神学博士たちは、世俗の君主から支持を得ていた。1377年から1460年(この年に教皇ピウス2世は、教皇の並立・鼎立状態を解決するために登場してきた「公会議の決定が教皇の権威に勝る」とする公会議主義を非難する教書を公布した)の間に神学者が教会の支持基盤を広げて教会を民主化する努力をしていなかったら、教会は世俗君主の愛想尽かし・嫌悪・反感に直面していたはずである。ジャン＝ジェルソン Jean Gerson やニコラウス＝クザヌス Nicolaus Cusanus にとって、教会制度の民主化は当然のことであった。それは教会の権威をヨーロッパで維持していくために欠かせないことであった。1075年のグレゴリウス改革で、聖ペテロ(つまりその権威を継いだとされる教皇)は聖パウロの権威を借りることで普遍性を獲得し、教皇による中央集権制によって皇帝から宗教的な権威を奪うことができた。1200年以降、ヨアキムのフィオーレ Joachim of Fiore から影響を受けたフランチェスコ修道会の「聖霊派」は、再び聖ペテロ(教皇)の権威を復活させることに貢献したのである。さらにその150年後、今度は世俗の君主が聖ペテロ(教皇)の権威を守るようになった。1378～1449年は、世俗の君主が聖ペテロ(教皇)の権威を守った時代であった。1409年のピサ公会議、1414～18年のコンスタンツ公会議、1431～49年のバーゼル公会議がそれである。公会議に代表を送っていたのはフランスのパリ大学、ドイツの6領邦国家、さらにスペインとイギリスであった。教会全体を代表する「議会 parliament」とも言うべき公会議は、すでに30年も前から計画されており、開催が実現したときの期待は大きかった。しかし各国を代表する誇り高き神学博士たちは、異端の疑いを掛けられることを教皇や枢機卿以上に恐れ、正統派として評価されるよう注意深く行動していた。それが失敗の原因となったのである。慎重すぎた彼らは、フス派に対する戦争を引き起こしてしまった。若かった彼らは教皇至上派に対抗すべく、1415年にコンスタンツ公会議でフス Jan Hus を裁判に懸けることに同意してしまった。また改革への熱意に凝り固まった彼らは、その経験不足ゆえにフス派の反乱を抑えるこ

とが出来なかった。民主的な勢力の例に漏れず、彼らも外交が苦手であった。彼らが闘う相手は「ローマ人の王 rex Romanorum」(プファルツ侯ルンブレヒト Ruprecht von der Pfalz)のはずだったが、実際には教皇と闘うことになってしまったのである。5年に1度、開催されることになっていた「全体公会議 universal councils」は教皇の認可が必要であったが、当時の交通事情を考えるとヨーロッパは広大に過ぎた。その広大さゆえに、民主体制が機能するのは不可能であった。公会議派の勝利と言えたのは、1432年のバーゼル公会議における公会議優位の承認だけであった。そのとき5つの「民族集団 natio」(イギリス人・フランス人・イタリア人・スペイン人・ドイツ人:ただしドイツ人には、ポーランド人・ハンガリー人・デンマーク人・スカンジナビア人も含まれていた)が登場している。宗教改革は、カトリック教会の外でウイクリフ John Wycliff やフスらによって開始される100年も前に、既に教会の内部で公会議派によって開始されていたのである。

フス派は教会の存続そのものを否定していたため、公会議派はフス派に対して何もできなかった。フス派は、いわば当時の「無政府主義者」であった。「無政府主義者」は、如何なる形態であれ政府の存続に反対していたが、フス派も如何なる形であれ教会の存続を認めていなかった。

5つの「民族集団」は統一戦線を組むことができなかった。教皇は個別に「民族集団」と妥協することで、彼らに対抗することが出来たのである。1449年にローザンヌに残っていた最後の公会議派は、教皇の公会議優位論の形式的な承認を受けて解散し、教皇はローマに戻って教皇庁の再建に乗り出すのである。

この状況に満足していたのはイタリア人だけであった。世俗君主たちは何事も解決できなかった聖職者を軽蔑するようになり、民主主義体制は、今(この本の初版は1938年)と同様に信頼を失っていた。教会法学者は低俗な政治家に過ぎず、教皇は偽書の「コンスタンチヌスの寄進状 Donatio Constantini」(初めてキリスト教を公認したコンスタンチヌス大帝が教皇に聖俗の支配権を与えたとされていた)を振りかざし、修道士や司祭たちは放蕩を重ね、



16世紀の熱狂的な巡礼熱

メダルはフスの火刑100周年を記念して発行されたもの

教会法学者や神学博士たちは収賄に耽る様になっていた。

そこで登場して来たのが、聖人でもあり政治的な指導者でもある新しい種類の人間であった。問題解決能力を持った統治体が不在であったことから、ジャンスダルク・サボナローラ・スイスの守護聖人ニコラウス＝フォン＝フリューエ Nikolaus von Flüe らが登場してきた。聖人と政治家を兼ね備えていた彼らは、かつて存在した教会組織と新しく登場して来ることになる近代的な統治体の橋渡しする役割を担っていた。しかし15世紀は、無数の難題が登場してきた世紀であった。

ヒトラーも15世紀的な意味の聖人と政治家を兼ね備えた人物であった。ヒトラーは、対トルコ十字軍を呼び掛けた反ユダヤ主義者のジョバンニ＝カピストラノ Giovanni Capistrano とよく似ている。のちに「ヨーロッパの使徒 apostolus Europae」として列聖されるカピストラノには、1445～55年に熱狂的な支持者が数多く存在していた。カピストラノはフス派と戦い、ヒトラーは共産主義者と戦った。カピストラノはIHS（イエスを意味する）という文字の背景に太陽をあしらったシンボルを使用した。ヒトラーは鍵十字をシンボルとして使用した。カピストラノは教皇による独裁体制を擁護することで、宗教改革を50年も遅らせたのである。公

会議派の民主主義に幻滅し、フス派の「ボルシェビキたち」に懲りたヨーロッパ人は、カピストラノが行うイタリア語の演説に魅せられていた。一言も意味が判らない演説を何時間も注意深く聞いていた聴衆は、通訳が現地語に訳し始めるとすぐにその場を去って行った。カピストラノは公会議派の神学博士を軽蔑し、ユダヤ人を焼き殺し、トルコ人やフス派を攻撃し、古典古代の研究者や世俗君主を脅迫していた。1450～1517年にあった不寛容な教皇体制の復活を目指していたのである。

古い教皇体制も、それなりに立派であった。問題は、その構成員も支持者も立派さを信じていなかったことである。たとえば後にピウス2世として教皇位に就くアエネアス＝シルビオ＝ピッコローミニ Aeneas Sylvio Piccolomini の名前の由来である。ウエルギリウス Vergilius は『アエネアスの歌』のなかで、トロイアの王子のことを「ピウス＝アエネアス（忠実なアエネアス）」と呼んでいたが、ピウス2世の「ピウス」も、このウエルギリウスの言葉に由来する。教皇の名前に異教的な古典古代の英雄が登場することにも、教皇庁の退廃ぶりが伺える。衰退期の制度は野蛮な形でしか再建できず、その制度が元々持っていた繊細さや上品さは失われてしまうものである。1460年のピウス2世の教皇庁は、グレゴリウス7世・インノケンチウス3世・ボニファチウス8世の時代に比べて残酷で野蛮であった。この教皇による独裁体制は嫌悪され、信用されず、反感と軽蔑の対象でしかなかった。

いわゆる「ルネサンス(再生)」の時代は遅れてやって来た暗黒時代であった。1460～1517年は、ヨーロッパが中世の遺物によって苦しめられた時代であった。当時のボルシェビキ党とも言うべきフス派は、目に見える教会を排除しながら、それに代わるものを提供できないでいた。ただ壊すことしかならないフス派に絶望したヨーロッパ人は、時代遅れの旧い教会を受け入れるしか無かったのである。その最たるものが、当時のファシストとも言うべきカピストラノ<sup>お</sup>たちが推し進めていた教皇の独裁体制であった。1460年にピウス2世は有名な教書『忌むべきこと Execrabilis』を公布

して、何事であれ、何者であれ、公会議に提訴することは「忌むべきこと」として禁じたが、そこで使われていた激しい言葉は、まるで現在の独裁者を思わせるものである。1075年のグレゴリウス7世の『教皇令 Dictatus Papae』に始まり、インノケンチウス3世が1200年に招集した枢機卿会議、さらに1377～1449年の公会議派の隆盛を経て、1460年のピウス2世の教書の公布に至る経緯は、ポリュビオスの政体循環論で説明できる。

- カトリック教会の 「王制」・・1075～1200年
- 「貴族制」・・1200～1377年
- 「民主制」・・1377～1460年
- 「独裁制」・・1460～1517年

こうした政体の循環があっても、カトリック教会の基本的な在り方が変わることは無かった。たとえば1075年のグレゴリウス改革で、教皇は修道士や司祭たちの「受託者 trustee」となり、皇帝が教会内で有していた権限を排除して、教皇だけが聖ペテロの権限の後継者でありキリストの代理人であるとされるようになったが、それは教会の在り方を変えるためではなかった。部族民を十把一絡げで改宗させるやり方を改め、個人を一人ひとり改宗させることで、教会を内部から改革して行くためであった。しかし、それには政治的な手段が必要であった。

古い教会が大切にしていた神秘的な内実を目に見えるようにするためには、教会統治の方法を世俗的で中央集権化されたものにする必要があった。それを実現したのが、1075～1517年に登場してきた教会法である（1517年はルターの宗教改革が開始された年）。それは「人間の法であり自然の法 human and natural law」であった。1000年間続いてきた「神の法 Ius Divinum」が変わることは無かったが、新たに登場して来た教会法は、政治の世界に適用可能な合理的なものであった。

神秘性を排除した「目に見える教会 visible Church」は、時間を超越した信仰や聖なる存在とは無縁であった。それは世俗世界に属し、世俗世界のルールに従う「政体 body politic」の一種であった。「政体」の一種である

からには、ポリュビオスの政体循環論で説明できて当然である。同じカトリック教会であっても、1110年のそれは王政的であり、1300年のそれは貴族制的、1430年のそれは民主制的で、1460年のそれは独裁制的であった。

興味を引くのは政体循環が起きるとき、変化した部分と変化しなかった部分の割合がどうなっているかということである。ポリュビオスの政体循環論を支持する者としては、この割合がどんなものであったかをぜひ解明したいところだが、さしあたり指摘して置きたいことは、ヨーロッパの歴史において政体循環が確認できるのが1075～1517年のカトリック教会と、1517年から現在までの国民国家の2例だけだということである。いずれの場合も変化は根本的なものであった。十字軍時代のカトリック教会も近代の国民国家も、古代からの思考様式では解決不可能な深刻な事態を切り抜けるのに成功していた。カトリック教会の場合、その基本的な部分については継続性が確認できるが、政体は大きく変化している。王制・貴族制・民主制・独裁制のいずれも永久には存続できない。いずれ他の政体にとって代わられる運命にあるし、その順番もポリュビオスが指摘している通りである。何が変わり、何が変わらなかったかを以下で確認してみよう。

	教会組織	国民国家
王制的な側面が強調された時期	1075～1200年	1517～1648年
貴族制的な側面が強調された時期	1200～1377年	1640～1789年
民主制的な側面が強調された時期	1377～1460年	1789～1917年
独裁制的な側面が強調された時期	1460～1517年	1917～

ヨーロッパには、教会と国家が本性として根付いている。そこで教会と国家が自らの存続のために戦ってきた歴史を振り返ることに、何の問題もない。たとえば1929年に教皇は教皇領を復興することを諦め、「第2の教皇革命」を思い出させる「バチカン市国 Città del Vaticano」で我慢することにしたが、これなどは新時代の始まりに過去が再登場することを示している好例である。しかしヨーロッパには、教会と国家以外にもこのことを

証明する事例が存在するはずである。

「一体化した世界経済体制 economic organization of the world」の登場には、まだ時間が掛かりそうである。教会と国家の政体循環論から、国民国家を単位とする経済体制が「一体化した世界経済体制」に移行するのが簡単でないことが判る。教会がフス派と公会議派の登場に直面していたとき、ドイツ・フランス・スペイン・イギリスなどの国民国家には、フス派や公会議派を支持する聖職者が数多く存在していた。しかし彼ら聖職者たちは、その優れた知恵にも関わらず、近代的な世俗国家を創りあげることができなかった。聖職者ゆえの限界がそれを邪魔していたのである。司教たちも神学者たちも、自らその存在を否定することが出来なかった。なぜなら、近代的な世俗国家に聖職者が関与する余地は無かったからである。

第一次世界大戦後の政治家たちも、国民国家では戦後の経済復興を実現することは不可能であることを良く知っていた。国民国家の利害が世界経済体制の構築を妨害していることを彼らは良く知っていたが、自国民を無視することが出来なかった。無私無欲で正直な愛国者であればあるほど、自分の知恵を生かすことが出来なかった。マクドナルド Ramsay MacDonald・ブリアン Aristide Briand・ウイルソン Woodrow Wilson たちは、それが自分の理想と如何に矛盾していたにしても、まずイギリス人・フランス人・アメリカ人の政治家でなければならなかった。ムッソリーニ・ヒトラー・デバレラ Eamon De Valera (アイルランドの独立運動家) たちは、自分たちが国民国家の政治家であることを当たり前だと考えていたが、それは間違っている。もはや国民国家は存在理由を失いつつある。新しい考え方が登場して来れば、それに取って代わられる運命にある。

1460年に聖職者に代わりうる世俗の役人は存在しなかったし、1938年にも政治家に代わりうる経済問題担当の役人は存在しなかった。銀行家・ボルシェビキ党・労働組合は、そのいずれもが問題解決能力を持っていなかった。「一体化した世界経済体制」を構築できるような専門家を養成するには、少なくともあと50年は必要であろう。専門家養成の大変さに政

治家は直面することになる。独裁者は、そんな政治家の試みを妨害するはずである。それに孤立主義を唱える民主主義国の政治家も、同じく妨害を試みるはずである。危機と対立を経験して懐疑的でシニシズムが蔓延するようになった戦後世界では、純真さとか真面目さなどは問題解決のために何の役にも立たない。

危機と対立の原因となるファシズム・共産主義・古典古代崇拜・反ユダヤ主義などに耐性ある者だけが解決策を見出すことができるが、過去に目を向けてみると希望が無いわけではない。

現在我々が経験しているような経済危機は、すでに15世紀に経験済みであった。1400年以降、イタリアの都市国家は成長を止めていた。当時の都市国家の経済状況は現在の国民国家の経済状況とよく似ている。当時はヨーロッパ全体が絶望とシニシズムに苦しんでいた。反ユダヤ主義が蔓延していたが、希望が無いわけではなかった。その後の400～500年間で政体は交代し、新しい道が開かれたのである。それを実現したのは、シニシズムに塗れた「ルネサンス」の古典古代研究者たちではなかった。彼らは何も信じず、いかなる形の信仰も軽蔑<sup>けいべつ</sup>していた。人間存在を肯定し、新しい信仰の道を見出した勇敢な者たちだけが解決策を見出すことができたのである。

## 第13章 オーストリア＝ハンガリー帝国の遺産

教会が大きな影響力を持っていた時期の革命では、クリュニー修道院の修道士・教皇・托鉢修道士の3者が諦めることを知っていた。彼らの存在が、教会分裂を防いでいたのである。彼らこそがヨーロッパの善き伝統であった。クリュニー修道院のオディロ・ヒルデブランド（のちのグレゴリウス7世）・アッシジの聖フランチェスコらは、全員が修道士であった。宗教改革でこの修道士に取って代わったのが、世俗国家の登場を予言したルターである。彼は修道院を去って還俗し、修道女と結婚した。彼が採用した原則は「家父長主義 paternalism」であった。国家に於いても家庭に於いても、彼はこの原則を貫いていた。このルターのやり方を引き継いだのが、クロムエル・ワシントン・ナポレオン・レーニンであった。彼らは全員が「田舎貴族 country gentleman」の出身であった。このようにヨーロッパの革命の指導者は、前半が修道士、後半が「田舎貴族」であった。人間のタイプとしては違っていたが、彼らが担っていた使命は同じであった。それに後半の世俗タイプの指導者は、修道士タイプの指導者が達成した成果を否定した訳ではない。むしろ、その成果を利用していった。またルターの宗教改革によって、修道士タイプの指導者がいなくなった訳でもなかった。「教皇革命」の後に続く4つの革命（ドイツ革命・イギリス革命・フランス革命・ロシア革命）はカトリック教会・教皇・修道院を否定・攻撃していたが、それでもこの3つの宗教的な要素がヨーロッパ世界から消え去ることは無かった。

教皇による絶対主義体制を採用した教皇庁は、ユリウス Julius 2世が第2のカエサル（『ガリア戦記』を書いた異教徒ユリウス＝カエサル）を演じる決意を固めた時、徹底して世俗的な政策を採用することにした。この「世俗化を徹底した教会 purified Church」を守っていたのが、イエズス会士たちであった。その後400年間、カトリック教会は教皇絶対主義を掲げる教皇の中央集権的な支配を受けることになった。そんな教会も、フランス革命

でイエズス会は解散を余儀なくされ、教皇もナポレオンに投獄されることになった。

しかし19世紀になると、カトリック教会は再び復権を果たすことになる。しかも復権を果たした教会は、かつてないほど教皇に忠実であった。フランスのソレム Solesmes 村にあったベネディクト修道院の「ソレム運動 movement of Solesmes」によって、すべての教区で共通の「ラテン語によるミサと儀式 Roman mass and liturgy」が導入されることになった。細部まで変わらない、決まった礼拝のやり方が採用されたのである。グレゴリウス7世の時にハンブルク・プレーメン大司教であったリーマル Licmar が嘆いたように、「司教は教皇の執事・召使いになり下がってしまった The bishops are becoming the pope's stewards and bailiffs」のである。教皇による中央集権化は徹底され、いかなる組織も自らの判断で行動することが禁じられ、自主性の発揮は全て不可能になった。世俗化の要請に晒され続けた神学は、自己防衛のために硬直化せざるを得なくなった。理性尊重と自然崇拜の時代に合わせて、教会は合理的で懐疑を容認する思想を求めようになり（イエズス会士の書いたものを見るとよい）、さらには効率よい統治に必要な権力を手に入れようとする様になった。今日のカトリック教会は、効率だけを追求する中央集権化された組織と化している。世界が理性と自然、組織と権力しか信じなくなっているからである。

カトリック教会が変化する環境に適応していく時のやり方は、時代によって違っていた。しかし、いずれもそれなりに理屈が通ったものであった。それは、特にヨーロッパ世界のことを考えたものではなかった。組織として生き残るための反応に過ぎなかったのである。そのやり方に格別驚くべき点はなかった。彼らは、人間に関する知識に何も新しいことを付け加えていなかった。しかしクリュニー修道院のオディロ・グレゴリウス7世・アッシジの聖フランチェスコの3者の場合、彼らがいなければ失われたものは大きかったはずである。その時と違って19世紀の教会は、先駆者であることを止めて「言い訳 apologetics」をするだけの存在と化していた。

聖職者も単純な道義家と化し、正統派一辺倒で規律を重んじるだけであった。つまり、かつての目標が実現され、やるべきことが無くなってしまったのである。言い換えれば、新しく何かを生み出す必要が無くなってしまったのである。かつて教皇革命の時代に先駆者として革命を先導した教会が、いまでは世界の動きに合わせるだけの存在になってしまった。

こんな例を示すことができる。「第2の教皇革命」のときマリア信仰が重んじられ、ローマの教会は「母なる教会」とされたが、その底流にあったのは「母性崇拜 maternalism」であった。ところがルターによる宗教改革が始まると、「父性崇拜 paternalism」が台頭してきた。その時マリア信仰に代わって登場して来たのが、ヨセフス（イエスの養父）信仰であった。16世紀の初めに3月19日が聖ヨセフスの日とされ、彼の名前を冠した修道会が登場してきた。またヨセフスの善き父親ぶりが、世俗の「父性崇拜」に対抗する教会にとって良い武器となった。1500年の「全贖宥の年 Jubilee」には（ユダヤ教に始まる50年ごとの贖罪しよくざいの年で、カトリック教会には1300年にボニファチウス8世が導入する）、改めてヨセフス崇拝熱が高まっている。ただそれは象徴的な出来事であって、具体的に何かが変わった訳ではない。

2000年の歴史を通して、カトリック教会は少しずつ変わってきた。マリア信仰がヨセフス信仰に取って代わられる際も、突然に変化が起きた訳ではなかった。そのことはカトリック教会の歴史が証明している通りである。ヨセフス信仰がルターの宗教改革で登場して来た「父性崇拜」と同時進行であったことから判るとおり、ヨーロッパ世界の変化も継続性を重んじる形で起きている。論理的な側面に注目すれば、「母性崇拜」と「父性崇拜」は丸で火と水のように相容れないはずである。しかし何れも、革命の結果として登場してきた原則であって必要なものであった。旧い制度が革命によって終焉を迎えるとはいえ、旧い制度も積極的に新しい制度に席を譲るものなのである。マリア信仰がヨセフス信仰に取って代わられたことが、その良い例である。

こ400年間、カトリック教会は世俗化の波に晒されてきた。しかし、それでも何億人もの信者がいることも事実である。この「世俗化されたカトリック信者 Catholic laity」の存在こそが、カトリック教会の「存在理由 raison d'être」なのである。第一次世界大戦まで、神聖ローマ皇帝・教皇・ルネサンスの時代を一身に体現した大国がヨーロッパに存在していた。ハインリヒ2世（聖人になった唯一人の皇帝）の帝国とオットー大帝時代の教皇領、そして聖イーシュトバーン王 Szent István király（聖ステファン王）時代のハンガリーが再現された国オーストリア＝ハンガリー帝国である。

オーストリア＝ハンガリー帝国は、かつてヨーロッパ世界を構成していた全ての要素の集大成であった。この「国際的な国家 Völkermonarchie, international nation」は、存続が不可能としか思えない国家であったが、現実には存続し続けていた。

19世紀のロマン主義を代表するシュレーゲル Friedrich Schlegel は、ウイーンで『調和 Concordia』と題する雑誌を創刊しているが（その名前から聖俗両世界の調和を願っていたことが判る）、そのとき彼が目指していたのは、オーストリアの「総合的な性格 collective character」を示すことであった。ハノーファー Hannover 出身でプロテスタントの彼が、カトリック教国であるオーストリアに忠誠を誓ったことから判るとおり、オーストリアには人類に貢献できる何かがあった。シュレーゲルは生涯、「人類全体 totality」のことを考えていた。物事を考える時は徹底的に考えるべきであり、かつ個人的な利害ではなく人類全体のことを考えるべきなのである。「本物の理性 true reason」は何時でも何処でも通用するはずで、党派的な意見は政治の世界では善しとされ、忠誠心や勇敢さの現われとして評価されるかもしれないが、「真理の存続 very existence of truth」のためにはならない。無意味な目的のために思想を捧げようとする勢力は、あまりにも多いのである。

こうしてシュレーゲルは党派的な勢力や「自国民中心主義的な national」勢力が跋扈する中で、「学問の中立性 universality of scholarship」を保とうと

努力していた。19世紀のヨーロッパが学問的な成果を上げることができたのは、シュレーゲルのおかげである。自然科学と社会科学の違いをはっきりさせたのも、シュレーゲルであった。人類の創造的な活動が続くことを予測したのも、シュレーゲルであった。また人類共通の財産を説明する場合と、同じ人類に属しながら「質的な違い qualitative variations」(国民性)を説明する学問の民族的な違いを指摘して見せたのも、シュレーゲルであった。つまり彼は歴史研究にとって、人間が掛替えのない貴重な存在であると考えていたのである。シュレーゲルは同じ国民でも「新しい質 new qualities」(新しい国民性)を獲得することで変わりうることを、突然変異が起きた様になりうることを示して見せた。政治家としてシュレーゲルは人間の多様性を認めざるを得ないことを知っていたが(たとえばフランス革命にも否定的な側面があることを認めていた)、思想家としては人間のあらゆる側面を考慮に入れるよう努力していた。

北ドイツのプロテスタントの家庭に生まれながら、フランス革命によるユダヤ人解放に影響されて、結婚歴のあるユダヤ人女性とベルリンで結婚していた。ナポレオンが神聖ローマ帝国を解体したとき、シュレーゲルはパリで創刊した雑誌を『ヨーロッパ Europa』と題することにした。神聖ローマ帝国に代わる新しいヨーロッパの登場を願ってのことであった。その後、居をウィーンに移してカトリック教に改宗している。ウィーンでは『調和』と題した雑誌を創刊したのだが、この雑誌が目指したのはグラチアヌス Johannes Gratianus が編纂した『お互いに矛盾する教会法を矛盾しない形で解釈すること Concordia discordantium canonicum』のように、対立する宗派・政党・国民のあいだに平和を取り戻すことであった。そして彼自身、その人生で違った文化の形や発展段階が相互に浸透しあった状態を体験済みであった。彼はヨーロッパ人として訓練を受けており(良心的かつ責任ある普遍主義者であった)、彼がウィーンに居を定めたのは、分裂・対立するヨーロッパでウィーン以外に逃げ場が無かったからであった。

そもそもオーストリアは14以上の民族が構成する国であって、近視眼

的な「自国民中心主義者 nationalist」からは「近代的なヨーロッパには相応しくない国 contresens dans l'Europe」だと考えられていた程であった(第一次世界大戦前のフランスの地理の教科書)。チェコ人に民族意識を覚醒させた人物として知られているパラツキー František Palacký は、つぎのようなことを言っていた。「もしオーストリアが存在していなかったら、それを作り出すしかなかったはずである」。彼にはオーストリアの「存在理由 raison d'être」が判っていた様である。オーストリアは、単なる14の民族の集まりではなかった(H.A.L. Fisher, A History of Europe, vol. II, p. 734)。オーストリア皇帝の称号を見れば、彼がヨーロッパ文明の全ての構成要素を象徴していたことがよく判る。まず彼は、使徒の権威を継ぐ皇帝として司教・大修道院長を任命していた。また教皇選挙の結果を拒否する権限を有する、ザクセン王朝時代の伝統も受け継いでいた。グレゴリウス7世の良き理解者でもあり、教皇の世俗的な権限や教会法に基づく権限の支持者でもあった。さらに托鉢修道会の支持者であり、皇帝でありながら自由都市トリエステの「独裁官 podesta」でもあった。伝統的にオーストリア本来の領土とされたところでは有能な役人たちを統べる「最高顧問官 Hofrat」であったが、聖王イーシュトバーンの王冠が貴族の強い権限を象徴するハンガリーでは、イギリスの「議会と協力して統治する国王 King in Parliament」に似た国王であった。19世紀には普通選挙権を臣民に認めて民主制への道を切り開いた皇帝であったが、被征服地に於いては戒厳令を公布できる独裁者でもあった。

オーストリア皇帝は、かつてフランク族の国王が兵士たちに愛され尊敬されていた様に、オーストリア軍の敬愛的であった。兵士は違った民族の出身者であっても、オーストリア軍に勤務していることを誇りに思っていた。オーストリアの偉大な詩人グリルパルツァー Franz Grillparzer は、オーストリア軍こそが全てのオーストリア人にとって故郷のようなものだと謡っているが、グリルパルツァーにとってオーストリアは専制国家ではなかった。なぜなら、彼はロシアの専制を非難しており、オーストリアが自由のためにロシアの専制を倒すと約束していたからである。

オーストリア帝国内に存在していた様々な政体から判ることは、オーストリアには1000年に渡るヨーロッパの歴史が凝縮・沈殿しており、しかもその全てが一つに纏まっていたことである。ヨーロッパ各国の歴史には、発展段階の異なる文明が一貫性のない形で入り込んでいるものだが、オーストリアは他の国と違って特殊であった。オーストリア以外の国には、強引に1つの原則に合わせようとするところがあった。1つの原則だけが重視され、他の原則は排除される傾向が強かったのである。ふつう国家や民族の境界線は、「海に対する支配権 *dominium maris*」・「自然な国境線 *natural frontiers*」・「神が国王に与えた境界線 *divine right of kings*」などといった原則に従って決められたりするが、オーストリアでは違っていた。そこにはヨーロッパ文明の伝統が全て揃っていた。東の国境がトルコ軍によって脅かされていた時、オーストリアは信仰の守護者であった神聖ローマ帝国の伝統に忠実に、トルコの進撃を阻止していた。ヨーロッパの他の国と違って、オーストリアにはヨーロッパの伝統が「完璧な形 *completeness*」で生きていた。それは「確立された完璧さ *completeness by establishment*」であった。ヨーロッパ史の全ての局面を一国の内部に保持して来たこと、これがオーストリアの特徴であった。シュレーゲルがオーストリア人であったことの意味もそこにあった。

このオーストリアの独特な在り方は、ドイツ・ハンガリー・チェコといった帝国を構成していた民族の在り方とは別物であった。帝国の構成民族に視点を限定してオーストリアの存在理由を説明するのは、不可能である。オーストリアの国境線は外部から押し付けられたもので、何か必然性に従って形成された訳ではない。オーストリアはオーストリア以上の何か、つまり「キリスト教の伝統 *heritage of Christianity*」を代表していた。構成民族が脅かしていた帝国としての一体性を守るべく、耐えに耐えて来たのがオーストリアであった。構成民族が、帝国としての一体性をなしてやっで行けると誤解して独立を目指していた時、柔軟な対応で一体性の維持に成功していた。新しい制度の導入もあったが、古い「移動テントの宮

殿 *Kaiserliche Hoflager*」も残されていた（かつて皇帝は軍隊と廷臣たちを率いて帝国内を移動しつつ統治を行っていた。「移動テントの宮殿」はその名残である）。その最後の担当大臣 *Minister am kaiserlichen Hoflager* が、ハンガリー貴族出身のモンテヌオボ侯爵 *Alfred Fürst von Montenuovo* であった。そのことから、統治にハンガリー貴族の協力が欠かせなかったことがよく判る。

帝国の構成民族は、帝国の一体性を維持するために民族の独自性を犠牲にすることを求められていた。つまり「キリスト教の砦 *bulwark of Christianity*」であったオーストリアは、お互いに矛盾する要求の上に成り立っていたのである。一方で帝国は構成民族に画一性を強制することはせず、独自性の維持を認める寛容さを示していた。しかし他方でヨーロッパ中の国々が、十字軍に対するような称賛の声をオーストリアにも降り注ぐよう求めていた。そこで犠牲を払わされたのが帝国内のスラブ民族であった。

第一次世界大戦でスラブ民族は一時期、独立を達成することに成功した。しかし、ユーゴスラビア・チェコスロバキア・リトアニア・ハンガリーの4カ国は（リトアニアとハンガリーはスラブ民族の国ではない）、長い独立の歴史を持つ他のヨーロッパ諸国の中では新参者であった。この4カ国の独立の意味を過大に評価すべきでない。オーストリアに600年間も帰属していた事実が、ほんの15年の独立の経験で消え去ることなど有り得ない。第一次世界大戦後に独立したこの4カ国は、100年前のザクセン侯国やバイエルン侯国と似ていた。つまり再びヨーロッパに統合されることが期待されていたのである（事実、再統合は実現している）。どの国も戦争を始めることなど考えていないはずである。複雑な国内事情が許すはずがないし、国内に抱え込んだ少数民族がそれを許すはずがない。また常態化した戒厳令の施行が、それを許すはずもない。もし戦争をすることになれば、国民すべてを兵士にしなければならなくなる。しかし平和なら、兵士の数は半分で済む。戦争など望むはずがない。

近代の幕開け（ルターの宗教改革）の時、中央ヨーロッパは「帝国 *Reich*」

と「民族 Nation」に分かれていた。当初帝国に属していたのは、オーストリア Ostend・アントワープ Antwerp・ブラッセル Brussels から、リエージュ Liège・シュトラスブール Strassburg・ボーデン湖 Bodensee・アールバーク峠 Arlberg Pass・チロール地方 Tyrol・シュタイアーマルク州 Steiermark（オーストリア）・ケルンテン州 Kärnten（オーストリア）・スラボニア地方 Slavonia（クロアチア）までであった。また、ベルリンから列車で2時間の距離にあるシュエボジン Swiebodzin（ポーランド）も帝国領であった。皇帝の「相続領 Erblande」に取り囲まれていた中心部には数多くの領邦国家が存在し、そこは「領邦君主 Landesherr」によって統治されていた。その様子はカーライル Thomas Carlyle の『衣装哲学 Sartor Resartus（仕立て直された仕立屋）』やゴビノー Joseph-Arthur Comte de Gabineau の『プレイヤード La Pléiade』、ロマン＝ロラン Roman Rolland の『ジャン＝クリストフ Jean-Christophe』などに描かれている通りである。「領邦君主」たちは皇帝の領地によって守られていた。

以上が400年前のヨーロッパが置かれていた状況であった。1938年にヨーロッパが置かれている状況は、ルターが生きていた頃とは真逆になっている。つまり数多くあった「領邦国家」は1つの「帝国」に纏められ、1人の「リーダー Realm leader」の命令に服する形になっている。また、かつて存在していたバイエルン侯国・ザクセン侯国・帝国都市は消滅して、その周辺に多くの「民族」が存在することになった。フィンランド・ラトビア・エストニア・リトアニア・ポーランド・チェコスロバキア・ハンガリー・ルーマニア・ユーゴスラビア・リヒテンシュタイン・スイス・フランス（ドイツとフランスが領有を争った地域で、第一次世界大戦後はドイツ領からフランス領になった地域）・ルクセンブルク・オランダ・ベルギー・デンマークである。

新しく登場して来た状況も、以前と同様に複雑である。しかも問題は何も解決されていない。しかし、新しい動きは見られる。つまりドナウ川沿いの国々とフランス・イギリス・ドイツに囲まれた西ヨーロッパの国々は、パリを中心にしたコスモポリタンな世界（民族の違いを問題にしない）

に存在している訳ではない。アンリ4世やりシュリユーの時代のフランスがヨーロッパの中心部で演じていた役割は、いまではイタリアが演じる様になっている。1938年まで親ドイツ的であったハンガリーとユーゴスラビアの動きを抑えて、オーストリアの独立を保障していたのはイタリアであった。

しかもこうした外交問題の発生ですら、オーストリアとハンガリーの伝統的な絆を壊すことはなかった。なぜなら、オーストリアという「国際的な国家」は国際結婚によって成り立っていたからである。いま国際関係というと、通商関係・条約締結・国際会議を思い浮かべることが多いが、もともと国際関係は通婚によって成立していた。婚姻関係の成立こそが新しい民族形成の出発点であった。アブラハムの知恵は正しかったし、いまも正しい（『旧約聖書』の「創世記」に出てくる話で、アブラハムは妻のサラと共に長く息子の誕生を待ち受け、やっと生まれて来た息子の結婚によってユダヤ民族が登場して来ることになった）。マキャベッリの『君主論 Principe』とは違ったタイプの君主が、オーストリアの君主たちであった。「他の国が戦争していても、オーストリアは戦争せずに婚姻関係を結ぶ Let others wage war; thou, happy Austria, shalt marry」とはオーストリアの格言である。それは皇帝だけでなく、皇帝の統治下にあった全ての臣民がそうであった。将校・地主・実業家・土木技師・職人・外交官・役人・行商人たち全員が、国際的な通婚関係にあった。オーストリア＝ハンガリー帝国内の民族は、その全てがオーストリア人であった。ザグレブ（クロアチア）・リュブリアナ（スロベニア）・ブダペスト（ハンガリー）・クラクフ（ポーランド）・プラハ（チェコ）は、その全てがオーストリアの都市であった。

オーストリアに特徴的だったのは婚姻関係の在り方で、個々の民族の視点からすれば「族外結婚 outbreeding」であっても、オーストリア＝ハンガリー帝国の視点からすれば「族内結婚 inbreeding」であった。そこで他の国では見られなかったような資質が生まれて来ることになった。誰もが2ヵ国語を話し、民族的な特性の変質・変化・変態が伝統となっていた。夫の「所

属民族 official nation」が妻から影響を受けずに済むことは無かったからである。

両親と別れた娘は、夫の家庭に「進化 evolution」を齎す。新しい生活様式・習慣と慣習・価値観・伝統を持ち込んで来るのである。「進化」という言葉は使い古され誤用されている嫌いがあるが、その意味するところは30～40年の結婚生活の中で、娘の父親の家から子供に伝えられる遺産の展開ということである。最近になって離婚が増えている理由も、これで説明できる。娘と父親の関係が希薄になっており、父親は数年すると娘に対する関心を無くしてしまう。また娘が実家で学んできたことに、夫は関心を示さなくなっている。

夫は結婚の日とか新婚旅行の時に、本当の意味で「夫」になる訳ではない。つまり夫が結婚する相手は、一人の女性以上の存在なのである。結婚によって、彼女は自分の一族の長い歴史を夫のもとに持って来るのである。もし人間に男性しか存在しなかったら、違った民族や人種が融合することは有り得ない。頑固さと闘争心で一杯の粗野な男どもにとって、自分と違った人種の男に近寄ることなど不可能である。しかし妻であれば、自分の一族の遺産を夫のもとに根付かせることができる。夫の生き方を変えるためには生涯を費やす必要があるが、それこそが女性が果たす大きな役割であり、女性自身も気づいていない秘密の力なのである。彼女の微笑みよりも大切なのがこの秘密の力であり、彼女の微笑みはこの秘密の力を隠すためのカーテンに過ぎない。近年の「女性解放運動 feminism」は表面的なことしか問題にしていない。まるで『不思議の国のアリス』に登場して来る「チェシャ猫の笑い famous grin of the Cheshire cat」や、謎かけを忘れたスフィンクスのようなものである（「無用の長物」の意）。単調な機械音の繰り返ししか聞こえるだけの近年の世界では、「娘であること daughterhood」が持つ重要な意味が忘れ去られようとしている。男性が本当の意味の父親・年長者 elder・家長 patriarch で無くなって行くのに合わせて、大切にされるのは「少女・花嫁・既婚女性・母親であること girlhood, bridehood,

womanhood, motherhood」であっても、「娘であること」ではない。

オーストリアの詩人ウルトガンス Anton Wildgans はオーストリア人について、つぎの様なことを言っていた。「我々はよくフェニキア人と似ていると言われるが、我々が似ているのはフェニキア島の女王ナウシカであろう。外国出身の異邦人オデュセウスは、逆風に流されて島浜にたどり着くが、そこに神に導かれてナウシカがやって来るのである」。ナウシカとオデュセウスは、「汝、幸運なオーストリアよ、結婚すべし tu, felix Autria, nube」という格言の象徴であった。

オーストリアの歴史をよく象徴しているのが、父帝から広大な帝国を相続した「娘の相続人 Erbtochter」マリア＝テレジア Maria Theresia である。彼女は40年に及ぶ統治の間に、神聖ローマ帝国を世俗国家オーストリア帝国に変えていた。女性であったが為に皇帝になれなかったが、ハプスブルク王朝を維持して帝国を構成する諸民族をよく1つに纏めていた。『国事詔書 Pragmatische Sanktion』で女性による相続を認めていたにも拘らず、ヨーロッパ諸国はマリア＝テレジアの帝位継承に異議を唱えて戦争を仕掛け（オーストリア継承戦争）、マリア＝テレジアはハンガリー貴族の支援を得て危機を乗り切ることができた（その代わりに聖王イーシュトバーン以来、彼らが持っていた特権を認めることになる）。その後200年の間、オーストリアはハンガリー貴族の影響下に置かれることになった。

700万人のハンガリー貴族は2000万人のハンガリー人を完全にその支配下に置くとともに、4600万人のオーストリア帝国もその影響下に置いたのである。しかも払っていた税金は、オーストリア全体の30%に過ぎなかった。1914年に「オーストリア＝ハンガリー帝国」と呼ばれていたが、むしろ「ハンガリー＝オーストリア帝国」と呼ばれるべきであった。帝国を支配していたのはハンガリー貴族だったからである。マリア＝テレジアとその後継者が神聖ローマ帝国をオーストリア帝国に作り替えるために払った代価が、これであった。ハンガリー人を他の構成民族と同じように遇することが何度か試みられたが、すべて失敗している。このハンガリー

人に有利だった変化は、一種の革命と呼ぶことができる。狡猾で油断ならない周辺国が女帝に強い体制が招いた結果であった。この革命も1805～1813年に、他の革命と同様「屈辱 humiliation」を経験している。この時期のオーストリアは、かつてのオーストリアとは違っていた。単に神聖ローマ帝国がオーストリア帝国に変わっただけではなかった。18世紀のオーストリアは、かつてオーストリアが持っていたヨーロッパの一体性を維持する柔軟な「政体 body politic」でなく、単なる世俗国家の集合体に過ぎないことが女帝の登場で明らかになった。

既に見てきたように、シュレーゲルたちがオーストリアと運命を共にすることにしたのは、ハンガリーに依存していてもオーストリアが「完璧さ completeness」と「全体性 totality」を失っていないと考えたからであった。つまり女帝マリア＝テレジアの果たすべき役割は、まだ失われていないと考えたのである。「ウイーンの華 Wiener Charme」と呼ばれたマリア＝テレジアは、オーストリアに代わって誰もが理解できる言葉で話し始めた。それが音楽であった。ハイドン・モーツァルト・ベートーベン・ブルックナー・フランツ＝フォン＝リスト・ヨハン＝シュトラウス・マーラーたちがオーストリアの庭を潤すことになった。1886年にハンスリック Eduard Hanslick は、つぎのようなことを書いていた。「音楽の世界を支配することで、ウイーンはオーストリアの首都以上のものとなった。ウイーンそのものが強力な帝国となったのである。この帝国は、主権を国境線の外にまで及ぼしていた。スラブの音・ハンガリーの音・イタリアのメロディーが力強いドイツの音楽にブレンドされていた。人種の混交に成功していたように、音楽の混交にも成功していた」。

オーストリアのカトリック信仰と「婚姻政策 daughterhood」の重視は、宗教改革が生み出したプロテスタントの「父性崇拜 paternalism」と対照的であった。受け入れ・耐え忍び・自制して我慢する姿勢は「諸民族の融合 spiritual sublimation」を可能にし、そのお陰でオーストリアは生き残ることができたのである。「適者生存 survival of the fittest」と言うが、その「適者」

とは何者なのか。この考え方をオーストリアに当て嵌めてみると、答えはこうである。つまり生き物は、その潜在能力を発揮すれば「適者」となることが出来ると言うことである。外国にとって、オーストリアは相矛盾する政治原理を抱え込んだ非論理的・絶望的・救いようのない国に思えた。しかし都市を守るのは所詮、都市壁などではなく人間である。オーストリアは新しいタイプの人間を生み出すことで、みずからの弱点を補っていたのである。

以上の説明で第一次世界大戦後に小国になってしまったオーストリアを、単なるドイツ語圏の一部と考える訳にはいかないことが理解できたと思う。国語の問題は「自国民中心主義者 nationalist」が考えているほど単純ではない。国語は数百万人も人間を包むためのセロファン紙などではない。国語とは、心の奥底から湧き上がって来る衝動の様なものである。そんな人間の要求に応えられないような国語は、無用の長物に過ぎない。「自国民中心主義 nationalism」は、人間の要求に沿える国語を駄目にするのであり、国語を政治プロパガンダの手段に貶めるものである。国語は衰退して行き、たとえ1000年間生き延びるにしても、化石でしかなくなる。同じ言葉を使いながら、お互いに理解不能になって行くことになる。他方でグローバル化の進展によって、民族・階級・職業の違いは小さくなって行くはずである。第一次世界大戦後にハプスブルク帝国を解体して得意になっていた戦勝国は、国語に関する限り大きな過ちを犯した。オーストリアは、偉大な忍耐・公平さ・変わらぬ重要力によって、多様性の中で統一を実現していた偉大な国家であった。

読者は最近のニュースに惑わされないようにして頂きたい。1938年のヒトラーによるオーストリア併合は、実は本来のオーストリアの併合は意味しない。ヒトラーは世界が戦後の破局に直面したとき、洪水の中に漂うドイツ系オーストリア人を釣り上げただけなのである。ドイツ系オーストリア人は、この章で論じたオーストリア人の六分の一を占めているに過ぎない。ヨーロッパの娘ナウシカであったオーストリアは第一次世界大戦で

失われてしまったが、かならずや再生を果たすに<sup>は</sup>違<sup>ちが</sup>いない。

## 第14章 伝統を打ち砕いた石臼

### 第1節 抑圧されていた過去の復権と大衆の登場

第一次世界大戦でヨーロッパの一体性が失われた結果、新しい革命のメカニズムが動きを開始した。「再調整 readjustment」のメカニズムである。古代のトロイやカルタゴは敗戦で消滅した。しかし近代の国民国家は、敗戦によって消滅することはない。たとえば、アイルランド・ポーランド・リトアニアが国家として消滅することは考えられない。「再調整」のメカニズムが作動するからである。しかし国制の在り方を宗教や信仰の問題と考えていた国民にとって、「再調整」は容易ではなかったはずである。「国民 nation」が食料や避難所を求める何百万もの個人の集まりに過ぎないなら、「再調整」も容易である。しかし「国民」は、単なる個人の集まりではない。国の歴史・伝統のために死ぬ用意ができてるのが「国民」である。「大義 cause」のために死ぬ用意ができてる者が相手では、「再調整」も容易ではない。旧秩序の存続よりは死を選ぶ人間が多くいるとき、敢えて変革を試みても過激な指導者が死ぬだけで、それ以上の具体的な成果は望めない。近視眼的な愛国者は、誰のためにもならない。

人間とは高貴な存在である。成功する見込みのない「大義」のために生すら諦め、死を選ぶのが人間である。新しい生に参加できない事実を甘受できるのが人間である。自分が所属する階級や国、また自分の子供や理想のために死ぬ覚悟ができていない人間は、如何なる形であれ歴史に名を残すことはできない。子供の誘拐犯と戦う勇気がない両親や、燃え盛る客船から乗客を救い出すために命を危険に晒すことを躊躇う船乗りなどは、果たすべき義務を放棄した人間の名に値しない人間である。幸いなことに、大多数の人間は命を懸けることを選ぶ。いかなる「政体 body politic」であれ、その存続に命を懸けることができる人間はいるものである。

既存の秩序のために死ぬ用意ができていない人間がいる限り、革命は成功

失われてしまったが、かならずや再生を果たすに<sup>は</sup>違<sup>ちが</sup>いない。

## 第14章 伝統を打ち砕いた石臼

### 第1節 抑圧されていた過去の復権と大衆の登場

第一次世界大戦でヨーロッパの一体性が失われた結果、新しい革命のメカニズムが動きを開始した。「再調整 readjustment」のメカニズムである。古代のトロイやカルタゴは敗戦で消滅した。しかし近代の国民国家は、敗戦によって消滅することはない。たとえば、アイルランド・ポーランド・リトアニアが国家として消滅することは考えられない。「再調整」のメカニズムが作動するからである。しかし国制の在り方を宗教や信仰の問題と考えていた国民にとって、「再調整」は容易ではなかったはずである。「国民 nation」が食料や避難所を求める何百万もの個人の集まりに過ぎないなら、「再調整」も容易である。しかし「国民」は、単なる個人の集まりではない。国の歴史・伝統のために死ぬ用意ができてるのが「国民」である。「大義 cause」のために死ぬ用意ができてる者が相手では、「再調整」も容易ではない。旧秩序の存続よりは死を選ぶ人間が多くいるとき、敢えて変革を試みても過激な指導者が死ぬだけで、それ以上の具体的な成果は望めない。近視眼的な愛国者は、誰のためにもならない。

人間とは高貴な存在である。成功する見込みのない「大義」のために生すら諦め、死を選ぶのが人間である。新しい生に参加できない事実を甘受できるのが人間である。自分が所属する階級や国、また自分の子供や理想のために死ぬ覚悟ができていない人間は、如何なる形であれ歴史に名を残すことはできない。子供の誘拐犯と戦う勇気がない両親や、燃え盛る客船から乗客を救い出すために命を危険に晒すことを躊躇う船乗りなどは、果たすべき義務を放棄した人間の名に値しない人間である。幸いなことに、大多数の人間は命を懸けることを選ぶ。いかなる「政体 body politic」であれ、その存続に命を懸けることができる人間はいるものである。

既存の秩序のために死ぬ用意ができてる人間がいる限り、革命は成功

しない。軍隊が群衆に向かって発砲するような国、警官隊が群衆を蹴散らすような国、僅かであれ正統性を認められた政府を守るために武器を取る人間がいる国では、革命は成功しない。革命が成功するのは、群衆が命を懸けて旧い秩序と戦うことを選ぶ国である。それは旧い秩序が存在価値を認めらなくなった国である。旧い秩序が存在価値を認められているか否かは、そのために群衆が死ぬ用意ができていないか否かで決まってくる。

フランスの「政体 constitution」が1934年の過激な右翼の騒擾を乗り越えることができたのは、1789年に共和制を確立した者たちを鼓舞した理念がフランス人の中で生きていたからであった。フランス人にとってロシアの共産主義体制は、さほど大きな意味を持たなかった。しかしヨーロッパで最初に革命を経験したイタリアは（ヨーロッパ最初の革命である「教皇革命」はイタリアで展開された）、ボルシェビキ党による実験からフランスの6倍規模で影響を受けている。イタリアは、「第一次世界大戦が齎した革命的な変化 world revolution of the World War」に最も早く反応した国であった。第一次世界大戦後のヨーロッパで、戦後世界を象徴する人物として最初にムッソリーニが登場して来たのも当然であった（ムッソリーニ内閣の登場は1922年）。宗教改革でホーエンツォレルン家とハプスブルク家に分裂したドイツが戦後世界に反応したのは、イタリアよりも10年以上も後のことであった（ヒトラー内閣の登場は1933年）。イギリス・アメリカ・フランスの各国もそれなりに革命の成果を守るのに成功しているが、イギリスはフランスよりも抵抗力があったし、フランスはイタリアよりも抵抗力があった。

ヨーロッパ各国が第一次世界大戦にどう反応したか、また「第一次世界大戦が齎した革命的な変化」にどう反応したかを確認する作業は、重要な意味を持っている。反応が機械的なもので、単に革命を否定するだけのものではあったら、説明は「惰性 inertia」で済ませることができる。あるいは卑しさ・間抜けさ・生き残りたかっただけと言うことで説明できる。しかし実情は簡単でなかった。まずイタリアでは、「皇帝派」と「教皇派」の

対立が解決された。イタリアの統一に反対する教皇の問題が解決されたのである。いまイタリアでは、ローマ帝国が再現されている。たしかに1200年以降、「皇帝」という言葉はイタリアでタブーであった。しかしムッソリーニは、ローマ皇帝そのものである。この400年間イタリア人が気にしていたのは、誰もがイタリアの政治を馬鹿にしていると言うことであった。イタリアは立派な音楽家・画家・俳優・枢機卿・外交官を輩出してきたが、それ以外の分野では「過去の聖遺物 Holy Sepulcher of a past civilization」でしかないと言うのが、イタリアに対する評価であった。乞食が多くて列車の運行は遅延続き。汚物と騒々しい無秩序の国でしかないと言うイタリア評に、イタリア人は我慢ならなくなっていた。ムッソリーニは、そんなイタリア評を変えようとしたのである。芸術と宗教の国でしかなかったイタリアを、「大国 hegemonic power」にして見せたのである。三十年戦争後のヨーロッパをルイ14世が支配したように、ムッソリーニは第一次世界大戦後の「中欧 Central Europe」を支配しようとしている。1500年も続く長い歴史において、イタリアは初めてアルプス以北に進出することができた。ドイツの「領邦君主」たちはルイ14世を真似ていたが、戦前にオーストリア帝国に属していた貧しい敗戦国は、ムッソリーニのファシズムを真似ている。かつてイタリアは教皇に活躍の場を提供することで世界に貢献していたが、ムッソリーニはイタリアの外で政治のゲームに興じている。ムッソリーニはローマ帝国を真似てみせ、神聖ローマ帝国であったドイツでは「ゲルマン部族 völkischer」の伝統が復活している。ナチズムとは「領邦国家 Territorialstaat」の重みに耐えかねた民衆のエネルギーの爆発であり、ヒトラーは「教養ある階級 Gebildeten」に抑圧されていた農民と中産階級を象徴する人物なのである。ナチズムとファシズムを混同する者がいるが、1200年（インノケンチウス3世が教皇に就任）から1517年（ルターによる宗教改革の開始）までに起きていたことは、第一次世界大戦後のドイツで何一つ忘れられていなかった。ところがイタリアでは、それが忘れられていたのである。ドイツでは最近400年間に起きた出来事は忘れられ

ているが、ジャンヌダルクの時代に起きたこと、たとえばフェーメ裁判 Vehme(Feme)gericht（中世ドイツの裁判制度。公的な権力が機能しないところでは自警団が代役を果たす）・ドイツ農民戦争・宗教画家マティアス＝グリユネワルト Matthias Grünewald・ドイツ騎士修道会の城塞・辺境伯領などは忘れられていない。

カトリック派の「領邦国家」とプロテスタント派の「領邦国家」に分裂していたドイツでは、両者を1つに結びつける「救世主 Messiah」が必要とされていた。宗教改革の結果、登場して来た官僚制度は見直しが行われ、国家による厳格な統制に代わって「ドイツ人のための教皇 sort of nationalistic papacy」が登場してきた。ドイツ人は中世に存在していたような教皇（教皇は死後の救済を保障して将来の安心を提供してくれる存在であった）、それも世俗化された教皇（現世で将来の安心を保障してくれる存在）を待望するようになっていた。ムッソリーニがイタリア人のための皇帝であったように、ヒトラーはドイツ人のための教皇であった。ドイツには、もはや強力な国家は必要でなくなっていたのである。政府による干渉があり過ぎて、ドイツ人は自発性を失っていた。

「ナチ党による人種革命 Völkishce Revolution」は、資本主義や共産主義が生み出した問題を解決するための革命ではなかった。それはアーリア人が構成する無階級社会の実現を目指した革命であった。若者を動員するため、ドイツでもイタリアでも「革命」という言葉が多用されたが、それが意味していたことは違っていた。イタリアでは「対外進出 imperialistic effort」を意味したが、ドイツでは「古代ゲルマン世界 Germania antiqua」の再現を意味した。「領邦国家が登場する以前の押さえつけられていた本能 repressed instincts of pre-State existence」が大切にされたのである。ドイツ人は経済的に一体化した世界で「部族社会 tribal organization」を再登場させようとしたが、それは数値化され機械化された大規模な組織に代えて、顔が見える小さなグループが住む人間的な世界を登場させることを意味した。

イギリス人も革命前の時代に戻ろうとしていた。1934年11月に成立し

た法律のおかげで、「イギリス人の家は城でなくなった Englishman's house has ceased to be his castle」（家庭内の問題に干渉してくる政府のやり方を拒否するイギリス人の個人主義が否定されるようになった）のである。国王が中央集権化された政府・警察・行政の中心として復活してきた。また音楽も英語圏の国々に帰ってきた（17世紀後半に活躍したパーセル Henry Purcell）。ピューリタンは体系的な思想を嫌ったが、新しく知的作業が好まれるようになり、哲学が帰ってきた。労働党出身のラムゼー＝マクドナルド James Ramsay MacDonald が「挙国一致 national」内閣の首班に納まったのも、この時のことである（それは労働党に対する裏切り行為とされた）。こ最近の（1938年頃の）イギリスでは、まるでチューダー王朝時代が帰って来たかのようであった。コモンロー裁判所の裁判官であった最高裁判事 Lord Chief Justice のヒュワト卿 Lord Gordon Hewart は、『新しい独裁政 The New Despotism』を書いてイギリスでは、行政権の肥大化によって「法の支配 rule of law」が危機に晒されていると主張していた。また国王エドワード8世（シンプソン夫人と結婚するために王位を捨てる）は、ヘンリー8世が離婚を実現するために導入した首長制の教会（離婚を認めようとしぬ教皇に代えて国王自らが教会の長となる）と結婚問題を巡って対立していた（教会は離婚経験者であるシンプソン夫人との結婚を教会は認めない）。

フランス人も地方自治の時代に戻りつつあった。騒擾がパリでなくて地方で起きようになっていたが、フランスでこんなことは初めてである。ブルターニュ人・アルザス人・バスク人は（それに多分、カタロニア人も）、1789年の統合理念を捨てて連邦制を要求するようになっていた。

ヨーロッパ中で抑圧されていた過去が息を吹き返している。革命が抑圧してきた過去が息を吹き返し始めたのである。何世紀ものあいだ沈黙を余儀なくされていた過去が息を吹き返し、バランスを取り戻す試みが始まったのである。このことから、革命によって形作られた「国民性 national character」が決して不変でないことが判る。そんな偏見を受け入れるほど人間は愚かでない。人間はバランスが取れた完璧さを求めるものである。

いまさら革命が成し遂げたことを否定することはできないが、革命が犠牲にしたことは取り返すことができる。ヨーロッパ人は、人間としてより完璧な状態になることを目指しているのである。しかし忘れてならないのは、ヨーロッパで再び革命は起こすことは出来ないということである。第一次世界大戦後、「革命」という言葉が乱用され過ぎため、その意味することが安易なものになってしまった。第一次世界大戦後の革命はヨーロッパ各国に大きな影響を与えたが、本書で扱ってきた「本当の意味での革命 real revolutions」に比べれば、それは「革命」の名に値しない。第一次世界大戦によってヨーロッパは「革命化されて revolutionized」、世界も大きく変わることとなったが、それは世界が戦後の状況に「適応しただけであって one general world-adjustment」、[「真の革命 one genuine, complete revolution」]が始まった訳ではない。

革命の結果、登場して来た新しい「国のあり方 national system」のお陰で、「影の存在 underdog」と化していたものが再び姿を現し始めた。ここで言う「影の存在」とは個人を意味しない。我々は物事を個人単位で考えることに慣れていて、「抑圧 oppression」とか「不正 injustice」は個人に対して行われるものだと考え勝ちである。しかし、ここで言う「抑圧」や「不正」は、集団の「生き方 way of life」に対して行われるものである。ドイツでは中世に農民が「ドイツ農民戦争 Deutscher Bauernkrieg」で敗北し、ドイツの農民は「抑圧」されてしまった。またイタリアでは、ローマ帝国の伝統が教皇たちによって「抑圧」されてしまった。さらにイギリスでは、1688年に国王の「良心 conscience」が「抑圧」されてしまった（名誉革命で国王は下院の統制下に置かれる）。そしてフランスでは、1789年に「地方 pays de France」の声が「抑圧」されてしまった。革命の結果それぞれの国で、ある種の「行動様式 whole systems of behavior」がタブー視されるようになり消えてしまった。「心理的な抑圧 inhibition」が働くようになったからであった。「イギリス紳士 gentleman」は体が痒いからと言って人前で体を搔かない。そんなことをすれば「社会的に葬り去られる outlawed」からである。「イ

ギリス紳士」は体が痒くても我慢するしかない。しかし、そんな恐怖心だけで「国民性 national character」の維持が説明できるであろうか。フランス人も「礼儀正しさ・上品さ bon ton」がないと「社会的に葬り去られる」。「国民性」は、むしろ理想とされる姿を国民が積極的に求めるが故に維持されるのではないだろうか。「イギリス紳士」が「イギリス紳士」らしくしようとするのは、それが自分の「責務 must」と考えるからである。まるで庭師が植栽を剪定するように、自分の姿を剪定しているのである。ある種の習慣や信念のあり方が「国民性」を形成していると信じている「司祭たち priesthood」の存在が、重要な意味を持っているのである。

そんな「国民性」に危機を齎したのが第一次世界大戦であった。エリート層が大量に失われ、国民的な伝統を守るはずの「司祭たち」が不足するようになった。非エリート層と違って、エリート層には若い世代が欠落するようになった。兵隊の数に比べて将校の数が足りなくなり、国民的規模の「再調整」が必要になって来たのである。「聖なる伝統 divine tradition」を引き継ぐはずの高等教育を受けた国民の代表がいなくなり、リーダーを欠いた大衆は巨大な機械の歯車に翻弄されることになった。

しかしヨーロッパの主要国は、そんな事態にも対処できるだけの知恵を持っていた。高等教育を受けたエリート層が多数、戦死したおかげで「司祭たち」が不足するようになり、戦後生まれの若者にとって、イギリスの「准貴族 gentry」の伝統やドイツの「役人制度 civil service」の伝統、さらにフランスの「靈感に満ちた inspired」個人主義の伝統は無縁なものになっていた。しかし、それでも第一次世界大戦を戦い抜いたヨーロッパの主要国は対処法を用意していた。アメリカのお陰で国家財政が滅茶苦茶めっちゃくちゃにされたドイツですら、対処法を用意していた。第一次世界大戦は、ヨーロッパの主要国にとって一時的な停滞に過ぎなかったのである。

「国民的な伝統 national tradition」を「大衆」に引き継がせるために、間接的な方法が採用されることになった。「司祭たち」が担っていた任務を、そのまま「大衆」に負わせるには荷が重過ぎたからであった。そこで「革

命前に存在していた神々 gods belonging to a pre-natal stage of national character」が登場して来るようになった。

望むらくは、「大衆」に十分な「精神的活力 moral vitality」が残っていることを。「大衆」にエリート層と「同じこと standards」を期待するのは無理である。そこで彼らに奨励されたのが「古代に戻ること primeval」であった。革命によって「抑圧」されていた「影の存在 underdog」を再現することが期待されたのである。そのとき指導者の立場を引き受けたのがムッソリーニとヒトラーであった。一方で2人は「影の存在」の再現者であり(ムッソリーニは「労働者たちの皇帝であったローマ皇帝 proletarian Caesar」、ヒトラーは「宗教改革以前のドイツで農民たちを見守っていた教皇 peasant pope」)、他方で2人はイタリアとドイツの「国民的な伝統」の継承者でもあった。

こんな状況下にあってドイツでは、もはや戦前のような公教育で「領邦君主」や役人を養成することは不可能であった。第一次世界大戦後、「大衆」が初めて教育制度にとって大きな課題として登場して来たのである。「大衆」が「国民的なリーダー leaders for the nation」を生み出すことは無いにしても、彼らを組織することが必要であった。こうして「大衆」は訓練され、「歴史に参加する準備 preliminary in the real national history」を始めることになった。「国のあり方 national institutions」を讃美・賞讃する方法で民主制を「大衆」に教えてきた旧いやり方は、通用しなくなっていた。革命前にあった「抑圧されていた本能 suppressed instincts」が登場して来るようになったのである。

「適応の新しいメカニズム new mechanism of adaptation」の登場であった。宗教改革以前(たとえば1500年)に一旦戻ること、ふたたび1517年の宗教改革で登場して来たような責任感あふれる役人が戻って来ることを期待されて、ナチ党が登場して来たのである。またフランス革命の影響で、イギリスの「紳士 gentleman, gentry」は「フェアプレー good sport」ができる中産階級に取って代わられていった。「フェアプレー」の人が必ずしも「紳士」であるとは限らないが、彼らは「紳士」によく似ていた。キツネ狩りを趣

味にしていた「紳士」の日常生活を律していた「儀礼 ritualism」を、浴槽(まず貴族の間で流行)を持てるようになった中産階級が真似するようになったのである。宗教改革によってプロテスタント国になったところでは、神学に代わって哲学が重視されるようになった。1800年に活躍したヘーゲル・フィヒテ・シェリング・シュライエルマハー Friedrich Schleiermacher が商店主たちに対して、学ぶべきことは神学でなくて哲学にこそあると説得したのである。

しかし現在(1937年)のドイツに於ける反ボルシェビズムは、哲学とは無縁である。「大衆」は哲学などに関心がない。彼らは、むしろ「国のあり方を決めた革命以前の本能 pre-natal instincts」に訴える、心理学的な手法を好んでいる。その結果、従来の「国のあり方」はその輝きと権威を失っていくことになった。「大衆」のリーダーたちが模倣すべきモデルとして自らを「大衆」に示さなくなったが、似たような現象は過去にもあった。教皇によって独裁政が行われていたボルジア家時代のイタリアである。この時も支配者たちは、自身が支持・承認していないリーダーや運動に「大衆」を委ねていた。リーダーたちに対する教育・育成の仕方と、「大衆 common men」に対する教育の仕方が意図的に分けられていたのである。そのお陰で機能不全に陥っていた教皇庁も、そのあと何百年ものあいだ教会を1つに纏めて置くことができた。エラスムス Erasmus of Rotterdam が現在行なわれているような宗教育と世俗教育の分離を提唱したのも、この時のことであった。「キリスト教について教えるのは、古代ギリシャや古代ローマについて教えた後からで善いのではないか」というのが彼の言い分であった。いま大学では社会学や人類学のような「とんでもないこと barbarism」が教えられていて、「教えられてしかるべきこと sanctuary of "real values"」が後回しになっている。そのうち先史時代や石器時代、古代エジプト史などが教えられることになり、ギリシャ語や古典古代を教える時間など無くなるに違いない。ましてやキリスト教を教える時間など無くなってしまふことであろう。またもや教育制度に強引に手が加えられようとしている。いま

(1937年) 古典古代を教える代わりに人類学が教えられるようになっていくが、キリスト教の代わりに古典古代が教えられるようになった時と、その目指しているところは同じである。つまり政治的な理由から、簡略化が行われているのである。第一次世界大戦後のヨーロッパでは、独裁権を掌握した集団と「抑圧されていた本能 repressed instincts」を解き放った「影の存在 underdog」の集団が登場してきた。さらに何年かの間国家に主権を取り戻させようとしている訳だが、すでにその時代は終わっている。

「本能が抑圧されていた者」が登場して来たということは、世界が経済的に一体化される準備が始まったことを意味する。「大衆」には、とても「国のあり方」を維持してきた「祭司たち」の重責は担い切れない。つまりヨーロッパ各国は、「国民的な伝統」が時代遅れであることを認めるようになっていくのである。「自国民第一主義 nationalism」が要求するような忠誠心を「大衆」に期待することが無くなり、「新しいタイプの人間 new human image of God」が登場して来ようとしている。

## 第2節 古い神々との決別

現在は心理分析が盛んな時代のようなのだが、それには第一次世界大戦が大きく貢献している。古い神々との決別を全欧的な規模で実現したのが第一次世界大戦であった。参戦国の「自国民中心主義」がどこまで通用するのかが試されたのが第一次世界大戦であった。戦争遂行に全精力を注ぐことを国民に要求するために過去の思い出が利用されたが、利用し過ぎて効果が失われてしまった。こうした結果になるとは、誰も予測していなかったのである。

若い国のアメリカですら、戦争中には過去の思い出を利用していった。アメリカ派遣軍の司令官だったパーシング将軍 John Joseph Pershing は、フランスに上陸したときに「ラファイエット、アメリカ軍がやって来ぞ Lafayette, nous voilà」と言ったとされている (Gen. John J. Pershing, My

Experiences in the World War, New York 1931, p. 93)。アメリカが参戦して呉れたお陰で、連合国は同盟国に勝利できたのだが、それ以前にもアメリカはヨーロッパの戦争に介入したことがあった。1812年、イギリスと戦っていたフランスを支援していた時のことである。この戦争は、アメリカにとって新しい原理・原則を勝ち取るための戦争であった。1812～15年の米英戦争は、フランスとの同盟関係が重要な役割を果たしたというのが教科書的な解釈だが、独立戦争 (1776年) の総仕上げの意味もあったことを忘れるべきでない。

果たしてアメリカの参戦が「十字軍」であったか否かはともかく、1917年の情勢は1812年や1776年の時と違っていった。そもそも「十字軍」とは、失った領土を取り戻すとか領土を失わないようにすることを意味する。新世界を求めて西部に移動して行ったアメリカの開拓民と、ヨーロッパの民主制のために戦ったアメリカの「十字軍」兵士では、その意味は同じでない。かつて900年前に中東を目指した宣教師と十字軍も、その役割は同じでなかった。宣教とは福音 (善き知らせ) を初めて聞く異教徒をキリスト教徒に改宗させることを意味したが、十字軍はキリスト教発祥の地を取り戻すことしか意味しなかった。つまり「十字軍」は「保守」を意味するのである。西部を目指していたアメリカ人開拓民を、アメリカ発祥の地ヨーロッパが呼び戻したのである。ベツレヘム (キリスト生誕の地) とエルサレム (キリストの聖墳墓がある) がイスラム教徒に占拠されて十字軍の呼びかけが行われた時と、アメリカがヨーロッパで「十字軍」として参戦した時は意味が同じであった。

つまり「十字軍」という言葉は、1917年にはアメリカ人にとってのみ意味ある言葉であった。ヨーロッパ諸国は、ベツレヘム・エルサレム・ナザレ・トランスヨルダンのように1つの世界を形成していたにも拘らず、お互いに戦うことで「約束の地」を破壊していた。しかし新世界アメリカにとって、「十字軍」という言葉は西に向いていた関心を東に向けさせ、その故地に関心を抱かせる言葉であった。

「十字軍」とは言葉に過ぎないが、日々の灰色の生活から抜けだす手掛かりになる言葉であった。支配地を広げることしか考えない事業から自由な言葉であった。根性の狭さや粗暴さと戦う「十字軍」に対する感謝の気持ちは、何百年・何千年後も存続し続けることになるであろう。

「十字軍」という言葉こそ使わなかったが、今次の大戦を戦った国は似たような考え方を採用しており、過去にあった戦争を褒め称えていた。ヨーロッパのどの国も、士気を高めるような思い出には事欠かなかったからである。以下にその例を挙げてみよう。

第一次世界大戦で各国が士気を高めるために利用した過去の戦争の記憶

ブルガリア：バルカン戦争（1912～13年）

フランス：普仏戦争（1870年）

イギリス：ナポレオン戦争（1800～15年）

ポーランド：ポーランド分割（1772年、93年、95年）

アメリカ：独立戦争でフランスと同盟（1776～83年）

プロイセン：フリードリヒ2世の七年戦争（1756～63年）

オーストリア：マリア・テレジアのオーストリア継承戦争（1742～48年）

ベルギー：スペインとの戦争（1568～79年）

ロシア：トルコがハギアソフィア教会を占拠（1453年）

チェコ：フスの処刑とフス戦争（1415～34年）

アメリカ：十字軍の戦い（1099～1274年）

イタリア：ドイツ皇帝による侵略（951～1268年）

戦争の記憶は、ラジオの周波数が放送局ごとに違っているように国ごとに違っていた。フランスは普仏戦争の敗北に対する「報復 revanche」に燃えていたし、ブルガリアはバルカン戦争で失った領土の回復を目指していた。この2国は比較的新しい記憶を思い起こしていたが、他の国はもっと古い記憶を思い起こしていた。イギリスはナポレオンとの戦いを思い起こしており、ロイド＝ジョージの「ドイツ皇帝を吊るせ Hang the Kaiser」という言葉は、1810年に掲げられたスローガンでもあった。プロイセンは

七年戦争で、またオーストリアはオーストリア継承戦争で国家の基礎を確立したが、両国とも第一次世界大戦で国家の存続が危機に晒されることになった。トマス＝マンは、1914年のドイツによるベルギーの中立無視と1756年のプロイセンによるザクセン侯国の中立無視を擁護している。第一次世界大戦後にドイツとオーストリアは、170年前に確立した国家の基礎を失ってしまうことになるが、第一次世界大戦の開戦時に過去の亡霊を呼び出すことに成ったのも当然であった。人間は溺れそうになると走馬灯のように過去の経験が蘇ってくると言うが、そうすることで何とか助かる方法を見つけ出そうとするのである。チェコやポーランドの場合も同じだし、イタリアに至っては更に古い過去が蘇ってくることになった。イタリアは唯一、ローマ教皇の影響下にあった国であった。第一次世界大戦では、オーストリア皇帝（中世にドイツからやってきた神聖ローマ皇帝の子孫）と最後の対決を行っている。つまりイタリアが思い出した過去は、アメリカが思い出した十字軍と同じくらい古い過去だったのである。どの国も第一次世界大戦に自国の偉大な過去を重ねていたが、どの国も自国の過去に満足していなかった。第一次世界大戦は、いかなる過去も超えた戦争であった。あるドイツの歴史家に至っては、第一次世界大戦に丸で興味が持てないと言っていた。第一次世界大戦は、その歴史家の思考枠組みに収まり切らないような戦争ではなかったのである。

戦後の世代に自国の歴史を教えて国民意識を持たせようとしたとき、ヨーロッパ各国は戦争中の戦意高揚に利用した過去より古い過去に頼らざるを得なくなった。そのことは、既に説明した通りである。抑圧されていた過去を思い起こさせる旅行者なら、どこの国に行っても大歓迎ということになった。

ところが「十字軍」をヨーロッパに送り出した新大陸のアメリカは、旧大陸のヨーロッパとは違っていた。アメリカが1776年に革命（独立戦争）を開始した時、アメリカの人口は1789年のフランスの人口（2400万人）にすら及ばなかったのである。それから150年。アメリカには国内の人口増

の外に、国外（とくにヨーロッパ）から1億人もの人間を受け入れて、アメリカ革命の理念を教え込んで行ったのである。そこで第一次世界大戦後の教育に於いても、問題はヨーロッパほど切迫していなかった。抑圧されていた過去の復権は、ヨーロッパほど必要とされていなかったのである。

### 第3節 ヨーロッパの将来

1914～17年には、ヨーロッパの主要6カ国がすべて参戦していた。5カ国は、既に過去に人類の発展に貢献した国であったが、ロシアは人類の未来を示す「黙示 self-revelation」の時代を迎えていた。1917年にヨーロッパは身動きできない状態に陥り、ヨーロッパで始まった戦争は世界戦争と世界革命へ向かい始めたのである。もはや問題はヨーロッパに収まり切らないものとなっていた。

1917～20年にアメリカが休戦を実現し、表面的には平和が実現していた。しかし、その後の武器の発展は急速で、人間はそれに対応できる速さで新しい軍事思想を展開することが出来なくなっていた。ナポレオン戦争や三十年戦争、あるいは百年戦争のときの武器は扱い難くて戦争は簡単に終わらず、戦争の継続中に新しい世代が育っていた。ところが現在の戦争は5年しか続かない。つまり次に戦争を開始する世代は、前の戦争の影響が消えない内に育って来ることになる。

戦間期は第一次世界大戦後とは言っても、戦前の考え方を引きずっていた時期であった。「自国民中心主義 national sovereignties」ということ言えば、「小春日和 indian summer」のような時期であった。それが吹き飛んでしまったのが1931年であった。この年アメリカのフーバー大統領が、フランスの反対を無視してドイツの債務支払いを猶予したのである（フーバー＝モラトリアム）。そのときプライドを傷つけられたフランスは、つぎのように言って嘆いたそうである。「アメリカの大統領は我々のことを、ニカラグア並みにしか考えていない On nous a traités comme Nicaragua」。

さらにもう1つ、外交の世界でも問題が登場してきた。ポルトガル・ポーランド・バルト3国・バルカン諸国に権威主義的な独裁者が登場して来たのである。さらにドイツに於けるヒトラーの登場、イタリアによるエチオピア併合、フランクリン＝ローズベルトのブエノサイレス訪問（善隣外交）、ブルジョア国家フランスにおける社会主義政権の登場である。

まず問題が表面化したのがスペインであった。第一次世界大戦前にバルカン諸国が「自国民中心主義」の戦場と化したように、戦間期にはスペインがイデオロギー対立の戦場と化した。ベルサイユ条約（対ドイツ講和）やサン＝ジェルマン条約（対オーストリア講和）が実現した平和の代わりに、「もう1つの平和 second peace」を実現するのが目的であった。

つまり何も新しいことが始まった訳では無かったのである。ただ新しい世代が第一次世界大戦後の新しい状況に組み込まれただけであった。スペインで勃発した内戦では、急速に発展する武器に人間が対応できないという問題を抱えたままであった。新しい武器の破壊力は凄まじく、1936年7月18日のフランコ將軍の蜂起で見えてきた問題は、見過ごされることになった。つまり蜂起した將軍たちの子供じみた短絡思考と、アナキスト・共産主義者・サンジカリスト syndicaliste の救い難い教条主義はその後も生き残り、後の時代に影響を与えることになったのである。スペインの内戦で「殲滅 elimination」という新しい言葉が登場して来ることになった。しかし「殲滅」は問題の解決にはならなかった。何万という数の婦女子・労働者・プロテスタント・司祭・尼たちが「殲滅」されたが、それで問題が解決された訳ではなかった。内戦が齎した破壊の結果は、後の世代にとって重い負担として残されることになった。航空機は時間単位で機能が高度化され、人間はとてもその速さに付いていくことが出来なくなっていた。

こうして新しい政治科学は、技術の世界で流れる時間と政治の世界で流れる時間を区別する必要に迫られることになった。将来の政治家は、自分の行動と技術の進歩の間にタイムラグがあることを計算に入れて行動すべきである。大衆が現実を受け入れるようになるには、時間が掛かるからで

ある。

1931年に始まった「心理戦 mental war」は、この技術と政治のズレの結果であった。ふたたび馬鹿げた無意味な戦争準備が始まったのである。各国の政治家が採った態度を分析してみると、彼らが何をしようとしていたかが見えてくる。つまり彼らは先の大戦で犯した失敗（簡単に勝利できると確信して開戦した）を繰り返さないよう、可能な限り開戦を避ける努力をしていた。ただし、彼らは技術と政治のズレの問題を理解しておらず、ただ本能的に行動しているに過ぎなかった。大不況時に大衆を落ち着かせるように努力していた政治家が、軍事技術の進歩（凄まじい破壊力）に人間が付いていけなくなっている現実を無視していた。

ローズベルト大統領は、ライオンの洞窟（旧約聖書『ダニエル書』6：17）とも知らずにベルサイユ宮殿に赴いたウイルソン大統領の失敗を繰り返すことを避け、ヨーロッパを訪れる代わりにブエノサイレスを訪れたのは賢明であった。バルーク Bernard Baruch（アメリカの戦時経済体制構築に貢献）やナイ Gerald Nye（アメリカの第一次世界大戦参戦と軍事産業の関係を調査する委員会を立ち上げ、戦後の中立法の成立に貢献）の協力を得て社会政策の実現に努め（ニューディール）、1932年に退役軍人が要求する恩給の早期支払にも応じている。1200万人の失業者を社会問題と捉え、個人の責任で解決できる問題ではないと考えたのである。アメリカで失業問題が発生してきたのは、第一次世界大戦後に海外市場が失われてしまったからであった。アメリカのヨーロッパに対する経済支援も、問題を先送りしただけであった。すでに1929年、第一次世界大戦のコストは誰が支払うべきか（資本家？労働者？農民？）という問題が提起されていた。ローズベルトはウイルソンの政策が抱えていた問題を問題として認めただけで、とくに新しいことをした訳ではない。

その「前兆 handwriting on the wall」（旧約聖書『ダニエル書』5：5）は、既に1928年にあった。化学者のリトル Arthur Little は、戦後の好景気に沸くアメリカで次のようなことを書いていた。「第一次世界大戦で献身的な人々

が登場してきた。新しい武士道の登場であり、新しいサムライ階級の登場である。戦争中の緊急時に、国民のために for common good 働いていた人々である。献身的な女性たち、そして陸・海・空軍で不可能とされていた作戦に敢えて挑戦し、それを実現してみせた勇敢な若者たちである。過去の失敗に拘るあまり、このとき登場してきた仲間意識や協力体制を無くしてしまっただけだろうか。新しく登場してきた人々は、国の発展のために貢献すべきでは無いか。いまこそ真剣に考えてみる必要がある」（Arthur D. Little, *The Handwriting on the Wall : A Chemist's Interpretation*, Boston 1928, p. 25）。

イギリスとフランスは、ドイツとの「心理戦」で賢く振舞っていた。1919年には戦勝国として講和会議に傲慢な態度で臨んでいたが、1932～37年にフランスはドイツのベルサイユ条約無視を対独開戦の理由にすることは無く、ラインランド進駐の時もそれを黙認していた。ドイツが「心理戦」で勝者として振舞うことを許していたのである。なぜなら、ベルサイユ体制はフランスの期待に込めていなかったからであった。

東部戦線でドイツは敗北しておらず、ドイツのお陰でヨーロッパがロシアのツァーリ体制によって支配されるのを防いでいた。またバルト3国がロシアの支配から解放されたのも、ドイツのお陰であった。イギリスやフランスには出来なかったことであった。第一次世界大戦末期に中欧と東欧を統合する試みがなされたことがあったが、それがオーストリア併合によって再び試みられようとしている（ドイツによるオーストリア併合は1937年、この本が刊行されたのは1938年）。ドイツとポーランドの同盟（1934年の不可侵条約締結）、バルカン諸国での親フランス派の排除などが更に続きそうである。ドイツは東部戦線で敗北しなかったが、勝利したとも言えなかった。かつてロイド＝ジョージとクレマンソーが採った傲慢な態度は、いまはヒトラーのものになっている。現実から目を逸らして正義の実現を諦めた者は（たとえばロイド＝ジョージ）、2倍の自己欺瞞と不正義（ヒトラーの登場）を受け入れざるを得なくなっている。ヨーロッパの戦跡記念碑の

片方にロイド＝ジョージとヒトラーの肖像を刻み、その裏に喪に服するヨーロッパの姿を刻まない限り、ベルダン<sup>ベルダン</sup>の戦線だけで80万人もの戦死者を出した兵士たちが浮かばれることは無いであろう。

「もう1つの平和」が実現するには、「自国民中心主義 nationalism, sovereignty of national states」が放棄される必要がある。人はいま<sup>しょうけつ</sup>猖獗を極めている熱狂的な「自国民中心主義」の存在を指摘するが、この暴力を伴った「自国民中心主義」は、じつは「本物の愛国心 patriotism」を食い物にしているのである。第一次世界大戦で「自国民中心主義」は、中身の無い偶像で無意味な夢でしかなかったことが証明された。「自国民中心主義」は金儲けの手段と化していたのである。旅行会社が商品として売りに出し、声を上げて宣伝する商品になってしまっていた。

その結果、ポーランド・ハンガリー・イタリア・ドイツ・スペインの支配者たちは、新しく国際的な結びつきを持たざるを得なくなった。共産主義インターナショナル（コミンテルン）に負けじと、「兵士のインターナショナル Warriors' International」が変革を目指すようになった。つまり第一次世界大戦の結果、ヨーロッパに「自国民中心主義インターナショナル nationalist-international」（これは語義矛盾であることに注意）が登場して来たのである。意に反して、彼らは国家主権を消滅させている。独裁者たちは、かつてマルクスとエンゲルスが1847年に「万国の労働者、団結せよ」と呼び掛けたように、「万国の兵士たち、団結せよ」と呼び掛けている。ただし兵士たちが信条としている哲学は、彼らの預言者ニーチェ Friedrich Nietzsche が「金槌の哲学 Philosophy of Hammer」（ニーチェ『偶像の黄昏：人はいかにハンマーで哲学するのか』ちくま学芸文庫1994）と呼んだように、「兵士の哲学 soldiers' philosophy」である。それが何を目標しているかは定かでない。特に教養ある人々には理解できない哲学である。なぜなら、教養ある人々は1789年の「理念の革命 Revolution of Ideas」を思い起こすように習慣づけられているからである。「金槌の哲学」と「理念の哲学 Philosophy of Ideas」は真逆の関係にある。古いタイプの理想主義者は、大衆が行動で応えるよ

うな演説を政治家に期待するが、残念ながら第一次世界大戦は理念と無縁な「モノ革命 material revolution」を実現した戦争であった（過大な破壊力をもつ武器が登場）。イデオロギーを否定し、ブルジョアジーを否定し、自由の理念を否定するような革命の戦争であった。

その推進者は「革命を追い求める理想主義者 revolutionary idealists」などではなく、「動員された大衆 materially revolutionized masses」に過ぎないのである。既に「革命を追い求める revolutionary」という言葉は、「時代にそぐわない out of date」言葉になっている。それは余りにも「意図的 conscious」・「能動的 active」である。現代の大衆に「自由な心 conscious philosophy of liberal mind」は相応しくない。ロベスピエールは「革命を追い求めた」が、現代の大衆は「革命に動員されている revolutionized passively」に過ぎない。1789年に使われた「革命家 Revolutionary」という言葉は、第一次世界大戦では使われなくなった。「革命」でも何でも無い1688年の名誉革命を「革命」と呼んだように、1789年の「革命家」に代わって「革命によって動員された大衆 revolutionized masses」という言葉が新しく登場してきた。

「ファシストのインターナショナル Fascist International」が、その意に反して主権国家を死刑に処することになっても驚くことはない。ユーラシア大陸の一隅を占めているに過ぎないヨーロッパで「自国民中心主義 nationalism」の評判は悪くなり、「自国民中心主義」は終焉を迎えさせることになるのも当然である。ロシアは、既に1917年にこの「自国民中心主義」を放棄して世界統一を目指していた。そんなロシアにとって、統一されたヨーロッパなど取るに足らない問題の**はず**である。古いヨーロッパ世界の統一問題など、ロシアが掲げる「国際主義 international radicalism」に比べれば屁みたいなものであろう。それに大西洋の彼方にある広大な大陸国家アメリカが、ヨーロッパの国と同じように反応することも期待できない。アメリカはヨーロッパ各国からの移民が創りあげた新しい別世界と考えるべきである。

つまり広大なロシアやアメリカは、ヨーロッパと同じ問題に直面することは無いのである。ところがヨーロッパでは、ジブラルタル海峡からグダンスク、ダブリンからイスタンブールと、その全域で第一次世界大戦を教訓に国家主権を終わらせる試みが始まっている。もはやヨーロッパでは、どの国も1国だけで戦争を始めることは不可能になった(著者の予想に反して1939年にドイツが戦争を始めることになるが、この本が出版されたのは1938年)。つまりアメリカやロシアのように(すでに広大な大陸国家を1つの経済圏に統合することに成功している)、ヨーロッパを経済的に統合する何らかの組織が必要になって来たのである。ヒトラーの反共演説は、単純に「共産主義体制」を攻撃しているだけだと解釈されるべきでない。ヨーロッパは「ロシア風にやっけて行く go Russian」訳にはいかないからである。カトリック教会とプロテスタントの長い伝統を持つヨーロッパでは、そんな伝統がないソ連と同じような実験を行うことは不可能である。つまりヨーロッパは、ロシアと違った独自の統合方法を探るしかないが(著者のこの予測はEUとして実現した)、それは「兵士のインターナショナル」には出来ない相談である。「兵士のインターナショナル」は国家主権を消滅させているが、新しい理念を実現しているわけではない。多様な内情の国が存在するヨーロッパで統合を実現することは、至難の業なのである。

ヨーロッパにとって解決策の手掛かりになりそうなのは、アフリカ統合の試みである。アメリカの13州が連邦国家を形成した時のように、ヨーロッパ各国は共通の目標としてアフリカ統合を考えてみる必要がある。アルゲーニー山脈(アパラチア山脈の一部)の西側には広大なアメリカ大陸が広がっていたが、その併合を目指すということでは13州の意見は一致していた。連邦国家の形成が可能になったのは、そのお陰である。不幸なことにヨーロッパ各国はアフリカ統合どころか、その分割を巡って対立しているが、いまが最後のチャンスである。ヨーロッパはいま各国間で展開されている「心理戦」のお陰で、初めて統合の問題を真剣に考えざるを得なくなっている。

ヨーロッパ統合が実現するか否かはまだ不透明である(この本が出版されたのは1938年)。イギリスはヨーロッパへの帰属意識を持っていないし、フランスはここ150年のあいだ「自国民中心主義 nationalism」と「中央集権主義 centralism」を煽ってきただけであった。「自国民中心主義」を超えられなかったということでは、1815年のウエリントン Arthur Wellesley, 1st Duke of Wellington と変わるところはない。もしイギリスがヨーロッパを弟分として大英帝国に迎え入れる用意ができていて、さらにフランスが地方分権制ないしは連邦制を受け入れる用意ができていれば、そのときこそ「もう1つの平和」が実現する時である。しかし残念なことに、イギリスやフランスにその意図はない。伝統的なやり方を踏襲しているだけである。

現在、展開されている「心理戦」が終わるときに実現するであろう「もう1つの平和」は、せいぜい「休戦 armistice」の形を取らざるを得ないであろう。日本・インド・中国・南アメリカ・アフリカ・オーストリアは、ヨーロッパ各国のようにお互いに緊密な関係にはない。いずれ緊密な関係を持つことになるだろうが、それまでは「休戦」と呼ぶしかない状態に置かれることになる。「休戦」なら平和主義者も軍国主義者も受け入れ可能であろうし、納得いく「休戦」なら無理な平和より長続きするはずである。

いま(1938年に)我々が置かれているのは、平和でもなく戦争でもない曖昧な状態である。この曖昧な状態の中で第一次世界大戦までの外交慣行に従って問題を解決しようとしている外交官は、まるで無力である。たとえば「パネー号事件」(1937年の南京攻略の時、揚子江に停泊していたアメリカの軍艦パネー Panay 号を日本の爆撃機が故意か誤ってか撃沈してしまった事件)のように、戦争状態とも平和状態とも言えない事態(日本とアメリカは戦争状態にない)が外交官を困らせていた。「兵士のインターナショナル」に言わせれば、そもそも明確に区別できる状態など有り得ないのである。「半分戦争 half belligerent」・「半分平和 half peaceful」という状態が今では普通なのである。この新しく登場して来た事態に、外交文書は無力である。必要なのは中途半端でもよいから解決を図ることであり、そのために迅速な行動

を起こすことである。道義的に許されるか否かとか、制裁を科すべきか否かといった問題より、戦争でも平和でもない状態の中で起こす行動が大切なのである。「あれかこれか either-or」といったフランス風の明晰さなど、もはや存在しない（伝統的に外交用語とされていたフランス語も、もはや外交用語でなくなっている）。エネルギーに満ち溢れた新しい世界では、昼と夜・平和と戦争・光と影が同時に存在しているのである。今どの国も本心を語り始めた。ときにはお互いに怒鳴りあったり、お互いに嘔みついたり引っ掻きあったりするが、それは外交辞令を使わなくなったことを意味する。つまり世界は1つに纏まとまろうとしているのである。そんな世界にとって外交辞令など不要である。

## 第15章 アメリカ革命

### 第1節 独立戦争

あるアメリカの歴史家が、学生時代の面白い経験を話してくれたことがあった。学生時代に歴史の先生が、アメリカ革命（独立戦争）の原因を1つだけ挙げるようにと言ったことがあったそうだ。1つだけと言われて学生たちは困ってしまった。原因は幾つも考えられたからである。先生が挙げた正解はこうであった。「アメリカの植民地がイギリス本国から3000マイルも離れていたからである」。アメリカの植民地とイギリス本国との距離を知っているのは専門家だけで、アメリカ史の専門家でない私は知らない。私の専門は革命論であり、この答えに対しては「説明としては正しいかもしれないが、それなら独立戦争は革命と呼べなくなってしまう」としか言いようがない。誕生と再生は別物である。遙か彼方にある植民地が独立しても、それで植民地に革命が起きる訳ではない。新生児の臍へその緒おを切ってみせたところで、それは革命と呼べないからである。

果たしてアメリカ革命は革命の名に値するのだろうか。そこで実現された変革は、果たして生活様式を永久に変える様なものだったのだろうか。幸いなことに、同じ様な問題提起はアメリカの歴史家も繰り返し行ってきた。我々は彼らの言い分に耳を傾けるだけで十分である。私が利用できる史料は限られているが、アメリカ革命が革命の名に値するか否かという問いに対する答えは用意できている。以下で、なぜアメリカ革命が革命として重要であったかを示してみよう。

「アメリカの独立戦争を革命と呼ぶのは簡単だが、そのおかげで誤解や混乱が生じている。ジョン＝アダムズ John Adams は手紙の中で、伝聞で得た知識を根拠に不正確なことを口にする頑固な世代を繰り返し非難している。1815年にこう書いていた。『アメリカ合衆国が行った最初の戦争とアメリカ革命は同じでない。…革命は戦争が始まる前に既に始まっていた。

を起こすことである。道義的に許されるか否かとか、制裁を科すべきか否かといった問題より、戦争でも平和でもない状態の中で起こす行動が大切なのである。「あれかこれか either-or」といったフランス風の明晰さなど、もはや存在しない（伝統的に外交用語とされていたフランス語も、もはや外交用語でなくなっている）。エネルギーに満ち溢れた新しい世界では、昼と夜・平和と戦争・光と影が同時に存在しているのである。今どの国も本心を語り始めた。ときにはお互いに怒鳴りあったり、お互いに嘔みついたり引っ掻きあったりするが、それは外交辞令を使わなくなったことを意味する。つまり世界は1つに纏まとまろうとしているのである。そんな世界にとって外交辞令など不要である。

## 第15章 アメリカ革命

### 第1節 独立戦争

あるアメリカの歴史家が、学生時代の面白い経験を話してくれたことがあった。学生時代に歴史の先生が、アメリカ革命（独立戦争）の原因を1つだけ挙げるようにと言ったことがあったそうだ。1つだけと言われて学生たちは困ってしまった。原因は幾つも考えられたからである。先生が挙げた正解はこうであった。「アメリカの植民地がイギリス本国から3000マイルも離れていたからである」。アメリカの植民地とイギリス本国との距離を知っているのは専門家だけで、アメリカ史の専門家でない私は知らない。私の専門は革命論であり、この答えに対しては「説明としては正しいかもしれないが、それなら独立戦争は革命と呼べなくなってしまう」としか言いようがない。誕生と再生は別物である。遙か彼方にある植民地が独立しても、それで植民地に革命が起きる訳ではない。新生児の臍へその緒おを切ってみせたところで、それは革命と呼べないからである。

果たしてアメリカ革命は革命の名に値するのだろうか。そこで実現された変革は、果たして生活様式を永久に変える様なものだったのだろうか。幸いなことに、同じ様な問題提起はアメリカの歴史家も繰り返し行ってきた。我々は彼らの言い分に耳を傾けるだけで十分である。私が利用できる史料は限られているが、アメリカ革命が革命の名に値するか否かという問いに対する答えは用意できている。以下で、なぜアメリカ革命が革命として重要であったかを示してみよう。

「アメリカの独立戦争を革命と呼ぶのは簡単だが、そのおかげで誤解や混乱が生じている。ジョン＝アダムズ John Adams は手紙の中で、伝聞で得た知識を根拠に不正確なことを口にする頑固な世代を繰り返し非難している。1815年にこう書いていた。『アメリカ合衆国が行った最初の戦争とアメリカ革命は同じでない。…革命は戦争が始まる前に既に始まっていた。

既にアメリカ人の心の中で始まっていた』。(Arthur Meier Schlesinger, *New Viewpoints in American History*, New York, 1922, p. 161)。

ところが当の本人は1821年に、つぎのように書いていた。「革命前からアメリカには、既にイギリスからの独立を願う気持ちが満ち満ちていたと言うが、それは間違っている(天頂 zenith と天底 nadir ほど違っている)…私はと言えば、革命前の状態に戻れるなら、どんな犠牲を払ってもよいと思っていた。安全を保障されることが唯一の願いであった。私は革命が私自身や私の家族に破滅を齎すことを恐れていた。そして事実、革命は破滅を齎すことになった」。

さて、どちらの言い分が正しいのだろうか。歴史においては、ときに相対立する事実が登場して来ることがある。つまり、両者の言い分を共に真剣に受け止める必要があるということである。

1750～75年に2つの違った「革命観 concepts of revolution」が登場してきた。フランスの「革命観」とイギリスの「革命観」である。イギリスでは、1688年の名誉革命で革命以前の伝統が復活して来ることになった。こんな例を挙げることができる。エドワード＝ランドルフ Edward Randolph の叔父ジョン＝ランドルフ John Randolph(ジョージ＝ワシントンの友人であった)がジョージ＝ワシントン George Washington の手紙を捏造したことがあったが、それは次のような内容の手紙であった。「革命の原則を大切にす雰囲気の中で育ったおかげで、間違いなく立派な人たちの足跡を自分も辿れると確信していました。何て素敵なことでしょう。しかし、我々に反対している勢力も同じ原則を大切にしている筈です。つまり我々の不幸と間違いの始まりは、我々に反対している勢力が大切だと言っているだけの原則を、実行に移してしまったことなのです」。

バレット＝ウェンデル Barrett Wendell は、アメリカ革命の指導者たちの保守的な考え方を次のように説明している。「長い歴史の流れの中で考えれば、我々が主張していることもイギリスのコモンローという人権保障の制度から登場して来たものなのである。…我々は誰かに、またどこかの国

に新しい制度を押し付けようとしているのではない。我々はイギリス軍と戦っているが、我々が目指しているのはイギリスのコモンローが保障し、イギリスの国王ですら手を触れることが出来ないとされている権利を守ることなのである。我々の革命が他の革命と違っているのはこの点である。我々は新しいことを始めようとしているのではなく、古い制度を守ろうとしているのである。新しい法制度や統治制度を創ろうというのではなくて、我々の先祖が長い経験の中で信頼できることを証明してきた法制度や統治制度を守ろうとしているのである。…アメリカ人がやろうとしていることは間違っていない。アメリカ人は何か抽象的な原則のために戦っているのではなく、自らの既得権を守るために戦っているのである。…さしあたり今は反逆者ということになっているが、既存の制度を守る側の優れた選良たちと今敵対せざるを得ないことを不幸なことだと考えている。ジョージ王戦争(オーストリア継承戦争)で活躍したウイリアム＝ペッパーレル William Pepperrell の旧邸(メイン州にあって連邦政府が歴史遺跡に指定している)が象徴している様に(独立戦争のとき王党派であった孫がイギリスに逃亡して旧邸は州政府に没収された)、アメリカの独立は多くの善きアメリカ人を失い、高い代価を支払うことになった」(Barrett Wendell, *Stelligeri and Other Essays Concerning America*, New York, 1893)。

1688年のイギリスの名誉革命と、1776年のアメリカの独立宣言の間に密接な関係があることは、ブラックストーン William Blackstone が自身の『英法釈義 Commentaries on the Laws of England』のアメリカ版に寄せた1689年の議会に関する脚注からも伺える。「独立宣言を注意深く読めば、独立宣言の起草者が1689年の『権利宣言 Declaration of Rights』を念頭に置いており、『権利宣言』に従うことを意図していたことが判る」。

既得権擁護のためということが90%、反乱者の汚名を敢えて受け入れるということが10%で、1862年に(南北戦争で最大の犠牲者を出したアンティタムの戦い Battle of Antietam があった)独立戦争の意味が再確認されることになったのである。

「1776年のアメリカ革命を見てみよう。…アメリカ革命が革命なら、南部連合の連邦離脱（1861年）など革命でも何でもなし。南部連合の連邦離脱でアメリカ社会のあり方が変わった訳でもないし、統治機構が崩壊した訳でもない。ただ統治機構の一部が分離したに過ぎないだけである。独立戦争を一緒に戦った仲間が政策を異にし、風潮を異にするがゆえに分離しただけなのである。植民地が新たに併合された訳でもなかったし、イギリスの役人たちが大挙してアメリカから出ていった訳でもなかった」（Rev. Joseph Clark, *The History and Theory of Revolutions*, Philadelphia, 1862）。

アメリカの独立戦争で実現した「革命」は、フランス革命以上に抽象的であった。アメリカに居たフランス政府のスパイも、またフランス本国に居た大臣たちも、「帝国の革命 les révolutions des empires」（Constantin-François Volney, *Les Ruines ou Meditations sur les Revolutions des Empires*, Paris, 1791）には無関心で居れなかったはずである。そして1776年、どのアメリカ人政治家よりもフランス哲学に詳しくモリス Gouverneur Morris は、つぎのように母親宛の手紙で書いていた。「戦争の結果がどうなるかは、誰にも判りません。革命に不幸な出来事は付き物ですが、最悪なのはアメリカのために自分を犠牲にすることです。しかし人類普遍の権利を守るためなら、征服者たるイギリス人よりも幸せです」（モリスはイギリス人でありながらアメリカの独立を支持し貢献していた）。

ドニオル Henri Doniol やタイン Claude Van Tyne が書いた独立戦争に関する本からも、既に1760年代、フランスの外務大臣ショワズール Etienne-François de Choiseul や独立宣言の起草場面（2ドル札の裏面に再現されている）を版画にしたデュランド Asher Brown Durand たちは、アメリカ革命の勃発を予測していたそうである。仏領西インド諸島では、「アメリカの独立のために！」が乾杯に際しての挨拶言葉であった（*New England Chronicle*, May 2, 1776）。もっともレイナル Guillaume Thomas François Raynal は、1770年に「イギリス革命 English Revolutions」（複数形であることに注意。ピューリタン革命と名誉革命を指す）について書いていたし（*L'Histoire philosophique des*

*établissements et du commerce des Européens dans les deux Indes*, Amsterdam, 1770）、デュランドもショワズールに次のようなことを書いていた。「想像力のないイギリス人は、いつか植民地アメリカが独立する日が来ることを認めようとしないが、私が望むのはアメリカが独立する形で実現する革命である。…もしニューヨークにクロムエルのような人物がいたら、イギリスで実現しなかった共和国をアメリカで簡単に実現できたはずである。…そんな人物を登場させることができるのは、フランスとスペインだけである」。

そのころ指導的な立場にあった人物は、既に1769年にフランスから支援が来ることを期待していた。「ポントルロワ Nicolas Sarrebourg de Pontleroy（仏領カナダで対英要塞建設に携わっていた技術将校）は、独立戦争でアメリカ植民地の住民の待遇を改善しようとするイギリスの努力が水泡に帰すだろうと信じていた」。

当時フランスの政治家たちがアメリカ革命について書いたものには、名誉革命への言及を匂わせる記述は丸で見当たらない。アメリカ革命は数多くある革命の1つに過ぎず、フランス人はその中身について無関心であった。早い時期にアメリカを訪れていたあるフランス人は、アメリカの独立と新政府の形態について次のように書いていた。

「シミチエール Pierre Eugene du Simitière と名乗るフランス出身の画家がいるが、この人物は大変な詮索好きで、アメリカ革命の歴史を書くべく資料の収集をしている。まずイギリスからアメリカに紅茶を運んできた船に関する記事を新聞から切り抜き、さらに断片的な情報や将来への臆測を集めていた。…アメリカの独立に関する一連の臆測と将来の新政府に関する臆測である」（John Adams, *Letters of the Continental Congress*, II, No. 77, p. 49 ff., August 14, 1776）。

2種類の臆測をリストにして見せたところなど、見事と言うしかない。1つは「代表なくして課税なし」というイギリスの統治原理である。イギリス人に認められている原理がアメリカ人には認められず、そこで彼らは独立を考えたのである。もう1つは新しい政府のあり方を巡る問題であっ

た。ホイッグ的な原理（「代表なくして課税なし」）に立ち返るために独立を目指したことは、アメリカ革命の一面に過ぎない。

## 第2節 2つの「平等」

アメリカ人はイギリス人と同じ権利が認められることを望んでいた。フランス人が1789年に要求していた「平等 égalité」はフランス人同士の「平等」であって、職業の違いに係わりなく全てのフランス人は「平等」であるべきだという意味であった。しかし、1776年にアメリカ人が要求していた「平等 equality」は、植民地の「統治体制 body politic」を本国イギリスの「統治体制」と同じにして欲しいという意味であった。マサチューセッツの植民地は自分たちのことを「マサチューセッツ州 Commonwealth of Massachusetts」と呼んでいたが（他にケンタッキー州・ペンシルベニア州・バージニア州も State を使わない）、これは「合衆国 United States」が「連合王国 United Kingdom」を想起させるようなものである。ジョージ＝ワシントンは立派な「イギリス紳士 English gentleman」ということになっていたし、アメリカの公文書は「イギリス議会で使われていた英語 parliamentary English」で書かれていた。アメリカ革命も格別に新しいことではなく、ただ新世界にもイギリス流の「平等な equal」権利を認めるべきだと主張していたに過ぎなかった。

独立当初のアメリカ人がイギリスに対して抱いていた不公平感の証拠は、この他にもある。ヨーロッパの圧倒的な影響力に代えて、新興国にも諸王国と「平等な」立場を認めるべきだとか、『独立宣言』の序文にあるように「列強諸国と同じ地位 equal station among the Powers of the Earth」を認めることをアメリカ人は要求していた。1776年に『独立宣言』でアメリカ人が要求していた「平等」は、いまでもアングロサクソン系の国々で大切にされている。ところがフランスで1789年の『人権宣言 Déclaration des droits de l'homme et du citoyen』が要求していた「平等」は、個々の人間が当然のこととして持つ権利であった。2つの『宣言』の違いは、奴隷制に対

する態度の違いから来ている。1776年には、アメリカで誰もジョージア州や南カロライナ州の「有力者たち gentlemen」に奴隷制の廃止を強制することなど考えていなかった。それに当時は、アメリカ以外の植民地にも奴隷制は存在していた。『人権宣言』が念頭に置いていたのは、奴隷制などではなかった。もちろん『人権宣言』が奴隷制と全く無縁だったということではない。

1776年の『独立宣言』に登場して来る「平等」は、イギリス本国との「平等」を意味していた。それに対して1788年の『合衆国憲法』に登場して来る「平等」は、全ての人間が「平等」であるという信念の表明であった。革命に於いては、そこで使用される言葉の意味が十分に理解されることなく、その言葉が如何なる希望、如何なる恐怖を国民の間に呼び起こすかも十分に理解されないまま使用されていた。その言葉に隣人が示す反応、敵や使用人が示す反応から判ることは、革命の将来を見通すのが如何に困難かということである。革命で新しく使われるようになる言葉は、まるで暗闇の中で新しい土地に撒かれる種の様なものである。その言葉に対する応えは、外の世界からやってくる。アメリカの友人であったフランス人や「自由主義者 free-thinkers」、黒人が住んでいた「非イギリス的な世界 non-Whiggist world」では、「平等」は言葉の意味を変えてしまうほど強い反応があった。「平等」は奴隷・移民・ネイティブ＝アメリカ人（インディアン）にとって、「希望の言葉 word of hope」となったのである。1776年の段階では、だれも彼らのことを念頭に置いていなかったからであった。

1784年にジェファソンが起草した『領土法 Land Ordinance』は、2つの「平等」が妥協した最初の例である。1787年の『北西部領土法 Northwest Ordinance』の成立以前に実現したバランス感覚の成果であった。アメリカ政府は新しく「領地 territories」を獲得することになり（イギリスに代わって旧イギリス領の統治を担当する政府が必要であった）、アメリカはイギリスと対等な立場を手にすることができた。七年戦争を終わらせた1763年のパリ条約でフランスは北米の領土を放棄して、イギリスに代わってアメリカが

入植と開拓を担当することになった。このようにアメリカ革命は、英仏戦争で実現したのである。植民地アメリカは母国イギリスと対等な地位を獲得し、将来における発展の可能性を手に入れた。こうしてアメリカは、北米大陸に対して責任を負うことになったのである。

『領土法』によれば、アメリカが新しく獲得した「領地」あるいは新しく獲得する予定の「領地」は、名前を与えられて「州 State」となり、しかるべき時に新しく州政府を構成して独立 13 州の 2/3 以上の同意を得た上で『連合規約 Articles of Confederation』が規定する「国家連合 Confederation of States」に参加することが可能になった。こうして「西部 the West」も、「the East 東部」と対等の地位を保証されることになったのである。新しく獲得した「領地」にも、「独立 13 州と同じ地位 equal footing with the original States」が認められることになった。

しかし『領土法』では実現できなかったことがあった。もともと「平等」は「信念の言葉 word of faith」ではなくて「希望の言葉 word of hope」になるはずであった。ジェファソンは『領土法』に、つぎのような文言を挿入するつもりでいた。「1800 年以降に新しく州となる領土においては、奴隷制も強制労働もあってはならない」。この文言こそが「平等の信念 faith in equality」と「平等の希望 hope of equality」の間を取り持つ「最初の愛の言葉 first word of love」になるはずであった。しかし「連合会議 Congress of Confederation」にニュージャージー州の代表が 1 人欠席していたため、ニュージャージー州は州として議決権が行使できず、この文言は採択されなかった。13 州のうち 6 州はこの文言の採択に賛成したが、7 州が反対であった。

この文言が採択されたのは 3 年後の 1787 年のことである（フランス革命の 2 年前）、『北西部領土法』に於いてであった。ただし奴隷制が禁止されたのはオハイオ川の北西側にある地域だけであって、オハイオ川の南側については禁止が明言されなかった。しかしマサチューセッツ州の代表デイン Nathan Dane のおかげで、「当該の領土においては奴隷制も、また強制労働もあってはならない」とされることになった。その結果、アメリカは奴隷

制を認める州と認めない州に分断されることになったのである。各州の権利は「平等」になったが、個人の「平等」は北半分では認められなかった。

この問題を再提起したのが、独立戦争を戦った世代の曾孫たちであった。1860 年のことである。彼らは、フランス革命のように個人の「平等」を重視することにした。各州の「平等」の支持率は、かつての支持率の 1/4 から 1/8 となり、逆に個人の「平等」が重要視されるようになった。この現象は、とくにアメリカに限られたことではない。ロシアでも同じころ農奴解放が実現していた。安価で自由な労働力が市場に登場して来たのである。アメリカで資本家たちが奴隷に「希望の言葉」を与えることにしたのは、工場制度が登場してきたお陰であった。それは新世界に相応しい「信念」の産物などではなく、新世界に新しく登場してきた工場制度が必要としていたからであった。アメリカ革命が実現したのは「宗教的な信念 religious faith」のお陰であったことは確かだが、資本家が黒人を仲間として受け入れることにしたのは、工場制度が何を必要としているかを冷静に見抜いていたからであった。奴隷制を残した「南部諸州 Southerners」では、相変わらず各州の「平等」が重視されていた。メリーランド州の州歌『メリーランド、我がメリーランド Maryland, My Maryland』の歌詞には、そんなアメリカ革命が実現した各州の「平等」に対する「宗教的な信念」がよく表れている。

アメリカ革命で使われていた「平等」の意味は曖昧であった。そのことから、政治用語の難しさがよく判る。「平等」という言葉は、まず「信念の言葉」として登場してきた。アメリカの植民地は、母国イギリスと「平等」であるべきだと主張されたのである。それが奴隷にも「平等」を認めるべきだという「希望の言葉」として登場してきたのは、1784 年の『領土法』と 1787 年の『北西部領土法』に於いてであった（1776 年の『独立宣言』では「全ての人間は自由で平等である」と書かれているだけで、奴隷の問題には言及されていない）。その時すでに作業の半分は終わっていたのである。あとは「信念の言葉」と「希望の言葉」を同時に意味する「普遍化 universal appliation」

が待たれるだけとなっていた。それが実現したのが南北戦争の時であった。この時は戦争が戦われており、1787年の時のように委員会の投票で決められた訳ではなかった。1776年に「信念の言葉」として「平等」が主張されたのは南部であった。北部の工場主が「平等」を「希望の言葉」として聞くようになり、しかもその実現（奴隷解放）に熱心になったのは、世界で自由主義が蔓延しつつあったからでもあった。ヨーロッパの中心部からロシアへ、さらにアメリカへと自由主義が広まって行ったのである。両国の支配者は、洪々ながら「希望の言葉」の実現を目指すことにしたのである。

革命は「信仰＝強い信念 faith」があって初めて可能になる。「希望 hope」だけで革命の惨事を乗り越えることはできない。しかし「絶対神に対する信仰 faith in the Creator」と「人間の尊厳に対する強い信念 faith in the dignity of humanity」が生まれる前に、惨事を齎す革命に対して「絶望 Despair」（フランス革命の「大恐怖」）がまず登場してくる。「信仰＝強い信念」とは、「目に見えないもの things unseen」を信じることである。「信仰＝強い信念」があれば、「希望」が持てないときにも敢えて挑戦することができる。いかなる困難も物ともせず、成功の可能性が低くても果敢に挑み、あらゆるチャンスに賭けることも可能になる。自らの使命を信じる者なら、既存の法体制という壁を壊すことも可能になる。『旧約聖書』でアブラハムがハランの地を去ってカナンを目指したのも、神の約束を信じたからであった（『創世記』12:1～4）。「信仰＝強い信念」が本当に必要とされるときは、その正しさを疑うべきでない。たしかに「受け身の passive」姿勢ではあるが、それが「難局を打開するための唯一の方法 strike in impasse」なのである。

「希望」が「信仰＝強い信念」に取って代わるのは、革命がある程度経過してからである。「絶望」と革命の暗い時代に「希望」の言葉を口にした者は、たとえ本人が死んでも、その声を聴いた孫たちが後を引き継いでくれる。「希望」は「活動的 active」である。しかし「信仰＝強い信念」か

らくる「最悪の事態に耐える bear the worst」覚悟、これが無ければ「活動的」な「希望」も具体的な成果を手にすることはできない。

「信仰＝強い信念」・「希望」・「愛」は特定の集団だけが有するものではなく、全ての人間に共通の「力の源 religious forces」である。歴史を動かすのも、政治を動かすのも、また言葉を生み出すのも「信仰＝強い信念」・「希望」・「愛」の3つである。この3つがあればこそ人間は言葉を交わし、時空を超えてコミュニケーションを交わすことができるのである。

南北戦争のとき、「信仰＝強い信念」・「希望」・「愛」がアメリカで失われてしまった。北部から利権を求めてカバン1つで南部にやって来た「一旗組 carpet-baggers」は、リンカン Abraham Lincoln が懸命に守ろうとしていた政治信念の「平等」を裏切っていた。1868年以降になると「信仰＝強い信念」が約束した夢は放棄され、利益優先の「合理性＝至上主義 rationalism」や「無神論 scepticism」が蔓延り、ペテン師や「商売人 trader」が幅を利かせるようになって、「未来を切り開くはずの希望の言葉 our creative words」は紋切り型の演説に取って代わられることになった。自分たちが何を考えているかを悟られないために、表面を取り繕ったのである。

このアメリカ人の経験から、つぎのような教訓を引き出してることができる。つまり「信仰＝強い信念」・「希望」・「愛」は個人のものではないし、教会やシナゴグ（ユダヤ教徒の礼拝堂）の構成員のものでも無いということである。それは個人の「意図 intentionality」を超えたものなのである。「信仰＝強い信念」→「希望」→「商売 trade」と、それが支配的になる時期は順番に訪れることになっており、その時期を生きる世代は全身・全霊をそのために捧げる。個人にできることは、それぞれの時期に「愛」に従って行動するか、「恐怖 peur」に従って行動するかどうかだけである。「無私の精神 self-forgetfulness」を発揮するか「虚栄心 self-conceit」を発揮するかで、歴史に残る個人の姿は違ってくる。リンカンは「無私の精神」の権化であり、だからこそ彼だけが「信仰＝強い信念」と「希望」の2つ、「恐怖」と「利益追求 salesmanship」の2つを橋渡しできたのである。

### 第3節 失敗した「先駆けの革命 precursor」

「平等」は『独立宣言』が実現を約束した重要な項目の1つであった。ところが保守派のロッジ Henry Cabot Lodge は、この項目の重要性を認めようとしなかった。アメリカ革命には植民地アメリカとイギリス本国の「平等」の他に、「普遍的な universal」な要求が存在していた。それが何故、外ならぬアメリカに登場してきたのか不思議に思えてくる。アメリカ人は人類を代表して、「普遍的な」ものを目指す冒険に打って出たのである。ロッジは、つぎのようなことを書いていた。

「当時のアメリカ人にとって、アメリカ革命の勃発は決して『起こるべくして起こった inevitable』ことではなかった。容易に避けることができたイギリス政府の対応の不味さがアメリカ革命の原因であった。しかし見方を変えれば、以前から始まっていた変化を求める諸勢力の結集の結果であって、『起こるべくして起こった』革命であったとも言える」。

「18世紀末にまず民主化を求める動きが始まったのはイギリス本国に於いてであり、それはイギリスに専制君主が存在せず、個人に自由が保障されていて、『政治的な自由 freedom』が大幅に認められていたからであった。イギリスの貴族や国王による特権の乱用は、アメリカに比べれば無いに等しかった。ジョージ3世の臣民は重税に苦しめられることもなく、傭兵として外国に売り飛ばされることもなかった。政府の統治に失敗がなかったわけではないが、貴族や国王に抑圧されることはなく、地球上で最も自由を謳歌し、最も優れた統治下に置かれていたのである。イギリス人のみならず、アメリカ人の間でも民主主義を求める運動は盛んであった。彼らも抑圧を経験しておらず、そこで自分たちの自由が侵されると直ぐに反応したのである。イギリス人は国内に住んでいる者も外国に住んでいる者も、このアメリカ人の運動から影響を受けていた。『ウイルクス John Wilkes 事件』（ウイルクスは国王や貴族による寡頭支配的な議会政治を批判した急進派の下

院議員。ジョージ3世が信任した内閣に批判的で、ジョージ3世の議会開院の勅語を批判して下院から除名され、裁判所から有罪判決を受けてフランスに亡命するが、逮捕される危険を覚悟で帰国してミドルセックス Middlesex 州選出の議員となる。下院による4回もの除名にも関わらず、ミドルセックス州の選挙民はウイルクスを議員に選出し続けて彼を支持した）、『ジュニアスの手紙 Letters of Junius』事件（ジョージ3世の内閣に批判的な匿名の手紙を集めた本が1772年に刊行されて出版元が反逆罪で訴えられるが、無罪判決が下される）の他に、さらにパーク Edmund Burke が王権の強化に反対して議会改革の必要性を主張していた。有力議員が役職や議席の配分によって議会を支配していた、腐敗体制を変えようとしたのである。このようにイギリスの政界にも嵐が近づいていた」。

「アメリカの植民地で革命が起きていなければ、イギリスで革命が起きていたことであろう。…アメリカの植民地は統制が緩やかで統治は上手くいっており、イギリス領の中で一番、自由を謳歌していた。…アメリカの植民地が反乱を起こしたのは抑圧されていたからでなく、自由を謳歌していたからであり、だからこそ圧政を耐えがたく感じたのであった」（Henry Cabot Lodge, The Story of the Revolution, I, New York, 1898, pp.14 ~ 16）。

これぞ大英帝国であった。問題になっているのは植民地の独立を認めるか否かということより、「思想 idea」と「思想」の対決であった。1797年に国教会の牧師にして王党派のジョナサン＝ブシェ Jonathan Boucher は、つぎのようなことを書いていた。「いまやアメリカ革命は、お互いに優位を占めようとするホイッグ党とトーリー党の争いの場と化している」（Jonathan Boucher, A View of the Causes and Consequences of the American Revolution, London, 1797）。あるいは博物学者にして収集家（コイン収集とか独立戦争に関する新聞記事の収集）、画家（初代アメリカ大統領ジョージ＝ワシントンの肖像画を描く。またアメリカ国章の考案者として有名）のシミチエール Pierre Eugene du Simitière が、1776年8月に「政体のリスト lists on forms of government」を作成していた頃には（John Adams, Letters of the Continental Congress, II, No.77, p.49

ff, August 14, 1776), すでにホイッグ党はアメリカ革命を支持しなくなっていた。

メイソン George Mason は合州国憲法の原型となった『バージニア権利章典 Virginia Declaration of Rights』を起草し、またバージニア州を代表して憲法制定会議に出席して合州国憲法の制定に参加するが、個人の権利を保障しない憲法案には反対であった。のちに憲法修正第1～10条を成立させて個人の権利を保障するが、これはイギリスに範を求めたものであった。しかし第5条では立法権・行政権・司法権の三権分立が定められ、この点では議院内閣制を採用するイギリスと違っていた。またキケロ Marcus Tullius Cicero の『法律論』を根拠に (De Legibus, I, 2, a), 役職の世襲化や終身制を排除するよう勧告している。彼が起草した『バージニア権利章典』には、こうある。「第5条：立法と行政は分離されなければならない、さらに司法も立法・行政から独立していなければならない。また立法と行政の構成員は人民が抑圧を受けないよう配慮する必要がある、そのために定期的に辞任しなければならない、人民によって改めて選ばれる必要がある」。

この周期的な役職者の交代こそが民主制の原則なのである。ジョージ＝ワシントンが3期目の大統領職を拒んだのも、この原則による。また第18代大統領 Grant Ulysses Simpson Grant が大統領職を辞任後、借金返済のために自伝を書いたのも民主制の原則に忠実だったからであった。貴族制が残るイギリスでは、このようなことはあり得ない。「一旦、社交クラブの会員として認められれば、生涯その権利を失うことはなかった once a member of society, always a member」のである。しかしアメリカでは、会員になったり辞めたりすることは当然視されていた。

また、「自然権 nature, laws of nature」という考え方がアメリカ革命の原則であり、その精神的な推進力でもあった。トマス＝ペイン Thomas Paine が政治パンフレットを書く際に依拠していたのも、この考え方である。しかも、それは彼に限られなかった。憲法制定会議 Constitutional Convention にペンシルバニア州代表として出席していたモリス Gouveneur Morris も、ペ

インを「大陸会議 Continental Congress」から追放したあと（「大陸会議」は1774年にイギリスに対する植民地の抵抗運動の連絡機関としてフィラデルフィアに召集され、1789年に合州国憲法下で新政府が登場するまで事実上の中央政府として機能）、同じような考え方に依拠して『アメリカ革命 Observations on the American Revolution』を書いている。この本は1779年に「大陸会議」によって発行されているが、その冒頭で彼は次のようなことを書いていた。「大切なことは、人間が生まれながらにして自由であるということである。創造主に対して責任を負う者として、当然のことである。神による正義という考え方を前提にする限り、人間は自由でなければならない。自由の権利は奪われることがあってはならず、それは今の世代のみならず、将来の世代にとっても同様である…」。

1814年に「アメリカ人よ、喜べ。ブルボン王朝が復活した」と叫んでいた保守派の政治家モリスですら、こうであった。「自然権」の女神は、全ての信条と信仰の自由、全ての人間の自由を実現するはずであった。チャーウッド卿 Lord Charnwood は『リンカン伝 Abraham Lincoln』(1916)のなかで、つぎのように書いている。「彼はアメリカという国を愛し、その制度を愛していたが、それは善き人間として当然やるべきことだったからである。その真剣さには微塵の疑いもなかった」。

そしてリンカン自身も次のように言っていた。「独立戦争を戦った将校や兵士たちの苦勞に思いを馳せていたが…問題は、アメリカの植民地が母国イギリスに別れを告げたことだけに留まらない。『独立宣言』に謳われていた自由、それもアメリカ人だけでなく、将来にわたって世界中のすべての人間に自由が与えられるべきだという考え方があった。全ての人間の肩に掛かっている重りを、必ず取り去って見せるという約束があった」(1861年2月22日、フィラデルフィアでの演説より)。

このようにアメリカ革命では、「個人の自然権 nature of the individual man」(自由もその1つ)が提唱されていた。ただしアメリカの「革命派 Whigs」は、イギリスの「革命派」と違った言葉を採用する必要があった。そこでピュー

リタン革命の「過激派 Levellers」が1648年に主張していた「至高法 law paramount」という考え方が、アメリカで成文憲法として実現したのである。アメリカの植民地が必要としたトマス＝ペインは、代表的なイギリスの「過激派」であった。彼はイギリス人が取って越えようとしなかった約束の地カナンを越えて（神はアブラハムにカナンの地を与えると約束していた）、さらにその先に行ったのである。そこは「自由の空間 free space」であった。ペインはこう書いている。「世界を新しく作り変える力を我々は手に入れた。ノアの時代以来、このようなことはかつて無かったことである」。ペインは「神の約束 Revelation」すら越えて見せたのであった。

フランス革命もよく似た側面を持っていたが、1688年（イギリスの名誉革命）～1770年（ボストンでイギリス軍が群衆に発砲して虐殺事件が起こるが、ジョン＝アダムズがアメリカに導入されていたイギリスの裁判制度を使って指揮官を弁護し、指揮官の無罪を勝ち取っていた）の時期は、「自然権」という考え方が支配した時期であった。ただし革命は、中世にキリスト教世界の中心地であったフランスのパリでなくて、アメリカのボストンとフィラデルフィアで起きていた。洗練された文化を持つフランスで起きたのではなくて、新大陸の荒野に人工的に建設された都市で起きた革命であった。この革命は、「生得権・自然権」という考え方によってイギリス植民地の住民を動員した革命であった。

「自然権」という考え方を使って独立を達成する方法は、3つあった。そのうちの2つは、アメリカ以外の革命にも見られるもので、とくにアメリカ革命に特徴的なことではない。アメリカ革命が他の革命と違っているのは、つぎの1点である。

アメリカ革命は、フランス革命の「先駆け precursor」であった。ロシア革命・イギリス革命・イタリア革命（ルネサンス＝第2の教皇革命）にも「先駆け」が存在していたが、すべて失敗に終わっている。しかしアメリカ革命は成功していた。

ふつう革命の第2段階では、過激派が主導権を握る。ロッジ Henry Cabot

Lodgeによれば、自由な国ほど革命の第2段階は準備し易いということになる。

たとえばナポレオン3世治下のフランスには、他の国には見られなかったほど多くの「共産主義者 Communist」がいた。1871年に首都パリで「革命政権 Commune」を樹立したのは、彼ら「共産主義者」であった。しかし「革命政権」は崩壊し、5万人ものフランス人が国外に追放された。パリはロシアの首都ではなかったからである。「革命政権」が目指したプロレタリアートによる独裁は、パリでは実現不可能であった。パリは集団主義に馴染まない「靈感あふれる inspired」個人の集まりだったからである。

ドイツで宗教改革が進行していたとき、左派のカルバン派は教会を下層民の手に委ねようと、チェコ地方で徹底した改革を進めていた。ハプスブルク家出身のチェコ王に代えて、カルバン派のプファルツ選帝侯（イギリス国王ジェームズ1世の娘婿）がブラハで一冬限りのチェコ王に選ばれるが（そこで「冬王 Winterkönig」と呼ばれる）、のちのウイリアム3世（名誉革命でイギリス国王になる）と違って、プファルツ選帝侯は1620年5月ビーラーホラ Bílá hora（白山）の戦いで皇帝軍に敗れてオランダに逃れ、彼と一緒に戦ったピューリタンはイギリスに逃れることになった。その結果、イギリス国王ジェームズ1世がピューリタンの攻撃目標とされることになり、その次男チャールズ1世は断頭台で死刑に処せられることになった。ヨーロッパ大陸の中心に位置していたチェコでは中央集権国家しか機能せず（チェコが海沿いの国とされたのはシェイクスピアの『冬物語』だけである）、地方分権や「信徒集団 Congregation」による民主制は島国のイギリスで初めて機能できたのである。

教皇革命でも「先駆け」は失敗している。アルナルド＝ダ＝ブレシア Arnaldo da Brescia とサボナローラ Girolamo Savonarola による改革の試みである。両者は、ともに既存の制度の中心部で改革を試みて失敗している。サボナローラは1495年にメディチ家が去った後のフィレンツェで改革を試み、アルナルドは1146年にローマで改革を試みていた。4つの改革が失

敗したのは（1146年のアルナルド・1495年のサボナローラ・1620年のピーラーホラの戦い・1871年のパリ＝コムニオン）、いずれも古い制度の中心地で実行されたからであった。それが成功するためには「種 seed」を中心部から周辺に移し、新しい「種 specimen」として栽培する必要があった。

失敗に終わった「先駆け」を念頭にアメリカ革命の場合を考えてみよう。まず革命によって追放される直前のスチュアート王朝（イギリス）とブルボン王朝（フランス）だが、ルイ14世もジェームズ1世も革命の「先駆け」を支持して、結果的に自分を標的にする革命の成功を助けたことになる。神の采配とは判らないものである。そこから、つぎのような結論を導き出すことができる。つまり他の4つの革命と同様、イギリスでも国王の専制に反対する勢力が次にくる革命を用意していたが、アメリカ革命の勃発がイギリスの革命を防いだのである。

もともとアメリカの植民地がイギリスの一部であったことを考えると、アメリカ人に新しく「思想 ideas」を提示する余裕など無かったことが判る。独立と独立後の国家経営は容易でなかった。フランスの場合は貴族制を排除すれば済んだが、アメリカの植民地は前人未到の世界を目指した個人が目の前の課題を解決することに追われて、とても抽象的な「思想」など弄んでいる余裕が無かった。独立したばかりのアメリカは、「自然 nature」の存在に常に脅かされていた。油断をすれば僅かな人間しか住まない国は再び荒野と化し、農業や牧畜のために獲得した領地を失い兼ねなかったのである。

開墾地を切り開く斧の音こそが「アメリカ人の自然哲学 natural philosophy of America」であった。ニーチェの「金槌の哲学」など、アメリカ西部を目指した樵たちの「自然哲学」に比べれば抽象的に過ぎる。新世界で問題だったのは「事実だけ facts,facts,facts」であり、必要とされていたのは「人間だけ men,men,men」であった。アメリカを動かしていたのは「サロン」を主宰していた貴婦人などではなく、「男の実力者たち bosses」であった。アメリカで必要とされていたのは「靈感あふれる作家 inspired writers」や「天才

genius」などではなく、「敏腕な政治家 shrewd politicians」であり「叩き上げの男たち self-made men」であった。

1780年以降になると、アメリカ革命は終焉を迎えることになる。トマス＝ペインの反英活動も影響力を失っていく。1776年の『コモンセンス』の登場は、革命の始まりでなく終りを意味していた。

アメリカ革命が「徹底した total」革命でなかったことは、ヨーロッパの革命と比較しても明らかだが、アメリカ人自身もそのことは認めていた。ジョン＝アダムズが1818年に、ジャーナリストで雑誌編集者のナイルズ Hezekiah Niles 宛に次のように書いていた（John Adams, Works, X, 282）。「革命は、すでにアメリカ人の心の中で始まっていた。職務や義務に対する考え方に変化が訪れていたのである。国王や国王の配下にあった全ての大臣が正義と慈悲を旨とし、神より与えられた先祖伝来の法制度に従って統治していると信じられている間は、アメリカ人も国王とその妃のため、また王族全員のため、さらにその配下にあった大臣のために祈ることが義務だと考えていた。ところが彼らが統治の原則を無視し、自分たちの安全を脅かし、自由と財産を奪おうとしていることを知ったとき、アメリカ人は大陸会議と各州の議会のために祈ることを始めたのである」。

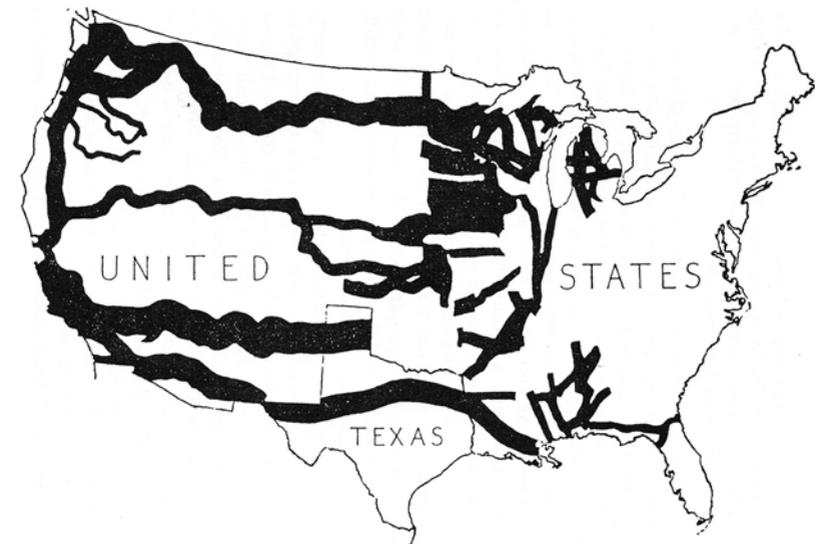
見事な指摘と言うほかない。近代の「脱宗教マニア rationalists」には想像も付かないことだろうが、アメリカ13州の家庭や教区では、祈りの言葉を変える必要に迫られたのである。1776年には、それが「宗教的な回心 religious conversion」・「生き方の根底からの変革 deep break in the life」と意識された。祈りの対象が「全体から部分 from the whole to a part」、つまり「イギリス連邦 British Commonwealth」から「マサチューセッツ州 Commonwealth of Massachusetts」に変えられたのである。いまでもアメリカ各州の裁判官は、裁判の開始に当たって「自州の安寧のために for the common weal of his State」祈ることになっている。

日曜日の教会でアメリカ人が国王ジョージ3世のために祈ることを止めた時、アメリカで新しい歴史が始まった。しかしアメリカ人にとって、祈

りの対象を国王から大陸会議に変えるのは容易なことではなかった。大陸会議は、飽く迄も国王の「代わり substitute」であって、国王と「同等のもの equivalent」ではなかったからである。大陸会議で「アメリカ国民 nation」という言葉が初めて使われたとき、会議場が「一瞬、静まり返った dead silence prevailed」そうである。国王と大陸会議を置き換えることはできても、自分たちを「イギリス国民」でなく「アメリカ国民」と呼ぶことなど考えられないことであった。

「国民 nation」という言葉はヨーロッパで創られた言葉で、アメリカ人には馴染みのない言葉であった。「マサチューセッツ州 Commonwealth of Massachusetts」（メイフラワー号で知られたピューリタンが作った他宗派に非寛容な州）や「ロードアイランド州 Rhode Island and Providence Plantations」（マサチューセッツ州を追われた非ピューリタンが他宗派に寛容な州を作ってクエーカー教徒・ユダヤ教徒らを受け入れる）のような様々な植民地を、すべて包括するような「国家・国民・帝国 state, nation, empire」のアメリカは存在しなかったのである。「アメリカ America」は政治制度を超えた存在であった。彼らが住んでいる広大な大陸は、国家でもなければ帝国でもなかった。それは「自然」そのものであった。大陸会議のために祈ることなど無意味であった。それは祈らないことと同義だったからである。「アメリカの植民地は、それぞれ独自の政治制度のもとで発展してきた。宗教も違い、出身国も違い、慣習もマナーも丸で違っており、相互の行き来すら稀で、相手のこともよく知らない、そんな彼らを同じ原則で纏めて、同じ制度の下で行動させるなど至難の業であった」（John Adams, X, 283）。

アメリカ革命は「先駆け precursor」であり、「先駆け」であるがゆえに同じ「先駆け」であったアルナルド・サボナローラ・フス派、あるいはパリやフィレンツェで起きた革命の「先駆け」と同様、新しい自己表現の言葉を見つけ出すことができなかつた。詩人マクリーシュ Archibald MacLeish がアメリカ人であることの不思議さを謡った詩「アメリカからの手紙 American Letter」のように、アメリカ人はイギリス革命とフランス革命が生



アメリカ人による共同事業：1823～70年に連邦政府とテキサス州が馬車道・運河・鉄道建設のために1億9900万エーカー（約7960万ヘクタール）の土地を開放

み出した2つの生活様式や教育制度の間で困惑していた。アメリカ人は古い伝統を捨ててはみたものの、新しく何をなすべきか判らずにいたのである。アメリカ人は「茫然自失 psychic loss」の状態であった。フランス革命では、石造りのバスチユ監獄を攻撃すれば「徹底した total」革命を実現できた。本国イギリスから3000マイルも離れたところで起きた革命は、砂漠の真ん中でダイナマイトを爆発させるようなものであった。この章の冒頭で紹介した歴史の先生の答えは、逆の意味で正しかったのである。つまりアメリカ革命は本国イギリスから3000マイルも離れていたが故に、「本物の true」革命になれなかつたのである。

#### 第4節 「中途半端な革命 half-revolution」

植民地アメリカが本国イギリスから遠く離れていたお陰でアメリカ革命

は成功した訳だが、その事実から距離の問題が革命の成功にとって重要なことが判る。ポーランド各地（不毛な砂地が多い）を支配していた「準貴族 gentry」（ポーランド語でシュラフタ szlachta）も、中心部からの距離のおかげで中央政府の支配を免れることができた。イギリスで「准貴族」と言えばイギリス人の栄光と誇りの源泉だが、ポーランドで「準貴族」は国政の分裂と対立の原因でしかなかった。ベルギー貴族のリーニュ侯 Prince de Ligne の言葉を借りれば、「ポーランドにはイギリスのように海がなかった」からである。ポーランドの「準貴族」が始めた革命は失敗であった（「準貴族」による様々な特権獲得の結果「議会 Sejm」は満場一致が原則になり、1人でも議員が反対すれば何も決めれなくなった。結果的に18世紀末、ロシア・プロイセン・オーストリアによるポーランド分割と国家消滅を招くことになる）。ではアメリカ革命の場合はどうか。アメリカ革命は、ポーランドのような失敗した革命と、主要なヨーロッパ各国による「本物の革命 great revolutions」の中間を行くものであった。「本物の革命」が起きた所では、「高揚の時期 period of pride」と「屈辱の時期 period of humiliation」が交互に訪れているが、それぞれの時期の長さは革命によって異なっている。

「中途半端な革命」は、「本物の革命」に付随して起きた革命であった。「本物の革命」と違って、「中途半端な革命」が中心的な役割を果たすことはなかったが、見た目には「中途半端な革命」も成功していたように思える。しかし「中途半端な革命」は後で「破壊の時期 period of demolition」が訪れて、その成果を台無しにしてしまうのである。スペイン・スエーデン・オランダの革命がそうであった。

スペインは1566～81年の短い期間にオランダ・ポルトガル・トルコを制圧して大国となり、スペインで結成されたイエズス会はローマの教皇庁を影響下に置いて、スペインはヨーロッパ中でその権威が認められることになった。1658年のクロムエルの葬儀は、スペイン風の葬儀であった。ピューリタン革命の指導者がフェリペ2世と同じ葬儀を経験した訳だが、これが17世紀にヨーロッパを制覇したスペインの影響力であった。18世

紀初めにプロイセンのフリードリヒ＝ウイヘルム1世が将校団に求めた儀礼作法も、スペイン騎士の作法であった。またオーストリアでは、国王と女王が寝室を別にするというスペイン風の作法が、最後の皇帝カール1世によって1917年に廃止されるまで続いていた。その後、皇帝は皇妃ツィタ Zita と寝室を共にすることになり、おかげで皇妃の国事介入を許すことになった。皇妃は大臣に直接、電話で指示するまでになっていたそうである。恐れ多い皇帝夫妻が、中産階級の夫婦と変わらない生活を始めたのである。ハプスブルク家の統治の終わりを象徴する出来事であった。こうして、スペインの栄光は終焉を迎えることになる。もっとも、スペインの凋落はすでに1700年のスペイン継承戦争で始まっていた。継承戦争後の12～13年間、スペインはヨーロッパ諸国の単なる操り人形に過ぎなくなっていたのである。継承戦争を終わらせたユトレヒト条約で、すでにスペインは大国であることを止めていた。

スエーデンの場合もスペインと似ていて、その凋落は急であった。1630年（スエーデンが三十年戦争に参戦）から1651年（グスタフ2世アドルフ Gustavus Adolphus の娘クリスティーナ Christina が退位）までがスエーデンの最盛期で、ヨーロッパ全域で影響力を誇っていたが、1700～21年のカール12世の治世に、スエーデンは凋落期を迎えている。ボルテール Arouet Voltaire が書いた伝記『カール12世 Histoire de Charles XII』を読むと戦慄を感じる。復讐の女神ネメシスがいたとしか思えない話だからである。グスタフ2世アドルフとその宰相オクセンシェーナ Axel Gustafsson Oxenstierna の偉業が、ことごとく無に帰っていた。20年間も続いたヨーロッパにおける影響力が、その後の20年間の戦争で失われたしまったのである。

スペインも自国で革命を起こすことなく、すでにある旧いやり方をヨーロッパ全域に強制しようとして失敗している。フェリペ2世は歴史の歯車を逆回転させようとして（スペイン継承戦争）、スペインを台無しにしてしまった。オランダも同様であった。スペインとの見事な戦いぶりと独特な貴族制度、クロムエルに似た「総督 Stadtholder」のお陰で、1620年にフス

派戦争を思わせる高揚期があったが（三十年戦争の一環として戦われた独立戦争でスペインに勝利する）、その後の凋落は急であった。

「中途半端な革命」が「本物の革命」と決定的に違っていたのは、自国で犠牲者を生まなかったことである。「本物の革命」は、その国が徹底的に屈辱を味わっていたときに最も生産的であった。屈辱ゆえに「不滅の精神 immortal soul」を手に入れていたのである。しかし「中途半端な革命」は、この「不滅の精神」と無縁であった。「中途半端な革命」はすぐに終焉を迎え、過去に達成した成果もすぐに忘れ去られてしまった。変革は表面的なものに過ぎなかったのである。ただし念のためにお断りしておくが、これで考察が終わりということではない。「中途半端な革命」の比較研究は、さらに進められる必要がある（一冊の本になるほどの可能性がある）。政治の残酷な側面を示すことになるかもしれず、心理的な衝撃、「強い信念・信仰 faith」に対する疑念、希望や「隣人愛 love」に対する信頼を傷つける結果を招くことになるかもしれない。

「南北戦争 Civil War」と呼ばれている「アメリカの連邦離脱戦争 American War of Secession」（「スペイン継承戦争 Spanish War of Succession」に掛けた言葉）を、果たして「中途半端な革命」と呼んでよいのかどうか自信がない。しかし、それがイギリスで起きていた「本物の革命」と関係があることだけは確かである。長期的に見れば、どの革命にも何らかの後日談が存在する。空間的な距離だけでなく、時間的な間隔にも「本物の革命」と「中途半端な革命」との間に何か関係が見つかるはずである。時間的な間隔の研究が始まったばかりだが、何か素晴らしい結論が得られるかもしれない。そのためには個々の出来事を確かめるだけであってはならず、また無意味な原則の確認だけで終わってはならない。

時間的な間隔は規則的な場合もあれば、規則的でない場合もある。なぜなら、人間が作り出す制度は「無限の可能性 forever opening」を秘めており、また「絶えず変化している forever changing」からである。ドイツで30年間続いた宗教改革は、三十年戦争の開始で終焉を迎えたが、それは26年間

続いたフランス革命や20年間続いたイギリスのピューリタン革命と同じ様な革命であった。また68年間続いたイタリア革命（ルネサンス＝第2の教皇革命）と、その結果始まった教皇のアヴィニオン幽閉も、同じ様な革命の結果であった。このように革命は様々な形で起きていたが、「革命が続いた期間に規則性があった periods are rhythmical」ことは判る。

私がこんなことを指摘して見せるのは、お互いに無関係に思える個々の出来事の間にも、関係があると言いたいからである。とくにアメリカ革命（独立戦争）と南北戦争の間に繋がりがあることを指摘して置きたい。独立戦争と南北戦争の間に繋がりがあることは、「誰もが感じ取っていた everybody feels」。1861年に「合州国からの独立」を目指して反乱を起こした南部諸州は、「合州国」形成の「制度的な前提 fictions of a Constitution」を問題にしていた。さらに「合州国の独立」が意味していたことを問い直す意味もあった。南部諸州は、「合州国の独立」が必ずしも各州に独立する権利を認めた訳では無いことを思い知らされることになった。合州国の「独立宣言 Declaration of Independence」は、特殊な歴史的時点における特殊な出来事であった。独立する権利が全ての州に普遍的に認められた訳ではなかったのである。「諸州の権利 States' Rights」に代わって、フランス革命の「個人の自由という考え方 liberal ideas」がアメリカに浸透して来たのである。そこで奴隷解放が実現することになった。

それにしても、果たして「独立戦争」が戦われた期間は「連邦離脱戦争」（南北戦争）が戦われた期間と何か関係があるのだろうか。あるいは、それがイギリス革命の「高揚期」（1640 - 88）や「屈辱期」（1776 - 1815）と関係があるのだろうか。こうした疑問に答えるのが、将来の革命研究の課題である。

## 第5節 アメリカ革命の特異性

1776年に独立したアメリカ合州国は、革命ということでは特異な事例

となっている。これまで、戦争と革命には密接な関係があることを指摘してきた。ロシアでは革命が戦争と同時に始まっており、フランスでは革命は戦争で終わっている。あるいはドイツとイギリスでは、戦争が革命の中心であった。以上の事例では、革命と戦争の関係は明白である。たとえば三十年戦争は、ドイツで宗教的な対立が引き起こした戦争であった。ところがアメリカ革命の場合、このような戦争と革命の密接な関係は見られない。アメリカ革命の場合、戦争と革命はお互いに無関係のように思えてくる。それも政治家や扇動者が意図してそうなったのではなく、彼らの意図とは無関係にそうになっていた。

アメリカ史には3～4の転換点があったが、いずれもその前に戦争が起きていた。しかし戦争があった事実は忘れ去られ、変革が必要だったことだけが共通の認識になっている。戦争が変革の契機になっていたことが忘れ去られているのである。アメリカでは、戦争と革命は目に見えない形で結び付いていた。

アメリカでは、戦争から1世代(30年)、あるいは約15年後に変革が始まっているが、アメリカ史が「ボストン茶会事件 Boston Tea Party」とか『独立宣言』で始まったと考え、戦争と革命の関係は見えてこない。戦争と革命が相互に結び付いていることを示すために、つぎのような対応表を作成してみた。

1756～63年	対仏・インディアン戦争
1776～83年	アメリカ革命(独立戦争)
1812～15年	第2次英米戦争
1829～37年	ジャクソニアン＝デモクラシーと「獵官制 spoils system」
1845～46年	「米墨戦争 Mexican War」
1860～68年	「南北戦争 Civil War」
1917～18年	第一次世界大戦
1933～	ニューディール政策

この対応表から独立戦争と第2次英米戦争の違いがよく見えてくる。内

戦の形で始まった独立戦争は、対仏・インディアン戦争でフランスをアメリカから追放した結果であった。1756年の対仏・インディアン戦争と1776年の独立戦争を結び付けているのが、ジョージ＝ワシントンである。すでに1756年の対仏・インディアン戦争で彼は有名になっており、独立戦争で総司令官に選ばれたのも、その結果であった。

1812年の第2次英米戦争は、アメリカにとって内政と無関係な対外戦争であった。しかし当時のアメリカ人は、まだ1776年の独立戦争のことを覚えており(フランスはアメリカの同盟国であった)、イギリスと戦っていたナポレオンがアメリカの敵と考えられることは無かった。この戦争は如何なる理念とも、また制度的な改革や変革とも無縁で、1775～1815年のイギリスの「屈辱期」の結果であった。つまりアメリカは、1756年の時と同様にヨーロッパの政局に巻き込まれていただけであった。

しかし1812年の第2次英米戦争は、アメリカに新しい種類のリーダーを登場させた。ジャクソン Andrew Jackson である。ジャクソンが大統領に当選したのは1829年のことだが、彼が導入した「獵官制」のお陰で、アメリカは新しい時代を迎えることになった。アメリカに残っていた「イギリス風の革新派 English Whiggism」が姿を消し、ニューイングランド地方(マサチューセッツ州・コネティカット州・ロードアイランド州・ニューハンプシャー州・バーモント州・メイン州からなるイギリス的な伝統が強い地方)が公然と反対した第2次英米戦争は(とくにマサチューセッツ州が強硬に反対)、道義的な裏付けを欠く戦争であった。イギリスに対する反英感情と偏見から始まったこの戦争のお陰で、「イギリス人とは無縁なタイプの、平民的でフロンティアを目指すアメリカ人 un-English type of man, the man of the people and of the frontier」が登場して来ることになった。ただしそのためには、さらに15年の歳月が必要とされた。

メキシコとの米墨戦争(1846～48年)で、アメリカはスペイン領を手に入れることになった。その結果、それまで個々の入植者や船員によって拓かれていたテキサスやカリフォルニアへの道は、東海岸とスペイン領を

結ぶ鉄道によって拓かれることになった。ユニオン＝パシフィック鉄道 Union Pacific Railroad は、アメリカに新しい時代が到来したことを象徴していた。アメリカの東部・中西部・西部が初めて1つになったのである。鉄道は、大規模事業の展開・大規模資本の蓄積・移民（＝安価な労働力）の流入を促すことになった。

米墨戦争によって引き起こされた経済問題は、南北戦争のお陰で制度的・政治的に解決されることになった。南北戦争後に、「イギリス風の革新派」（独立13州で重要な役割を果たしていた）と「連邦派 Federalism」（新しく合州国に加入した西部とは無縁であった）は「共和党 Republicanism」に取って代わられるが、「共和党」の登場はアメリカで「工業革命 Industrial Revolution」が始まったことを意味していた。まず新しく合州国に参加した西部では、初期資本家とも言うべき「一発屋 fortune-hunters」が活躍を始め、「工業革命」によって大資本と何十万人もの労働者が登場して来ることになった。

米墨戦争による広大なスペイン領の獲得は、かつてのように畑ごと・農場ごとに実現したのではなくて、工業資本家のために一気呵成に実現したものであった。彼らが雇った労働者は、かつて中西部に入植してきたアメリカ人とは違った人たちであった。鉄道建設に従事し、鉄道建設に必要な鉄や銅を製造していたアイルランド人・ポーランド人・イタリア人・中国人は、かつて中西部に入植してきた農夫や公有地占拠者（独立以来アメリカが獲得したり購入したりした領土は連邦政府が所有する公有地となり、それを払い下げて開拓を促すことが連邦政府の重要な仕事となる）と違って、工場で雇われて働く労働者であった。

南北戦争後に3つの憲法修正条項が制定され（第13条：奴隷制度の禁止、第14条：奴隷にも公民権を付与、第15条：奴隷にも選挙権を付与）、個人の権利や財産が保護されることになった。サムナー Charles Sumner を始めとする「奴隷制廃止論者 Abolitionist」たちが追い求めた「理想 hopeful ideology」が、憲法の条文となったのである（ただし、それが実際に実現するのは1950年代になってから）。1868年に成立した第14条は、『北西部領土法 Northwest

Ordinance』の条文を引き継いでいた。「何者も適法な手続きを経ることなく生命・自由・財産を奪われることがあってはならない No person shall be deprived of life, liberty, or property without due process of law」。リンカーンは1787年の『北西部領土法』の条文を使えば、奴隷制廃止に反対する者も説得できると考えていた。

連邦最高裁判所も、当初は「人 person」を「自然人 human beings」の意味に解釈していたが、やがて「会社 corporation」（法人 legal person）も「人」に含めるようになった。1787～1868年にオハイオ川以北で個人の自由を保障していた「権利章典 Magna Carta」（『北西部領土法』）が「会社」の「権利章典」に変わり、それが『デラウェア州会社法 Delaware Corporation』（デラウェア州はアメリカで最も会社の設立・解散が容易な州として知られている）として結実することになった。1868年に憲法修正第14条が制定されて「会社」が勝者になれたのは、1846年の米墨戦争が齎した問題を解決できたのが、「会社」の「組織能力 organizing capacity」だけだったからである。

1812年の第2次英米戦争が本当の意味でアメリカの独立戦争を終わらせたように、「工業革命 Industrial Revolution」を本当の意味で終わらせたのは第一次世界大戦であった。第2次英米戦争でも第一次世界大戦でも、アメリカに「戦う意志はなかった too proud to fight」が、「ヨーロッパの激流 European maelstrom」に飲まれてしまったのである。

1763年に七年戦争を終わらせるパリ条約が締結され、フランスがアメリカ大陸から排除されお陰で、1776年にジョージ＝ワシントンが独立戦争を戦うことができた。また1846年の米墨戦争の結果、アメリカはテキサス・ニューメキシコ・カリフォルニアをメキシコから獲得して奴隷制の拡大を許し、それが1860年のリンカーン大統領の登場を促すことになった。さらにアメリカにとって、1812～13年の第2次英米戦争の経験と1917～19年の第一次世界大戦の経験はよく似ていた。1829年のジャクソン大統領登場の時のアメリカは、1933年のフランクリン＝ローズベルト大統領登場の時に似ている。

1812～28年の「幸福な happy feeling」時代（第4代大統領マディソン James Madison・第5代大統領モンロー James Monroe・第6代大統領クインシー＝アダムズ John Quincy Adams）と第一次世界大戦後の繁栄の時期を比べてみると、第30代大統領クーリッジ John Coolidge・第31代大統領フーバー Herbert Hoover は、第6代大統領クインシー＝アダムズとよく似た保守派であったことが判る。しかしアメリカを国際連盟に参加させなかった第29代大統領ハーディング Warren Harding と、「モンロー主義 Monroe Doctrine」（孤立主義 isolationism）で有名な第5代大統領モンローとの間には、何の共通点も見い出せない。アメリカが置かれていた国際情勢が違っていたからである。しかし外交政策の指針を決めていた「考え方 spirit」には、共通点があった。だからこそ彼らは評判がよくて、大統領に選ばれたのである。その政策が非現実的であった点でも、2人はよく似ていた。

とくに戦後すぐの外交政策は非現実的であった。1815年・1919年に戦争で疲弊したヨーロッパは、繁栄を謳歌していたアメリカと平和条約を締結することになっていた。ところが繁栄を謳歌していたアメリカを率いていたのは、戦後の新しい問題が何を意味するか判っていない旧い世代であった。1828年に突如として「フロンティア frontier」が登場してきて旧世代はショックを受けていたが、1933年に就任した第32代大統領フランクリン＝ローズベルト Franklin Roosevelt が直面した問題も、誰も予期していなかった新しい出来事であった。労働組合・社会主義・ブレイントラスト Brain Trust・政府補助金などがそれである。

第一次世界大戦は、憲法修正第14条によって保護されることになっていた「大企業 big corporations」に不利に作用することになった。それまで50年間アメリカを動かして来た「大資本家 collective capital」に代わって、「組織化された労働者 collective labor」や「移民 collective groups of immigrants」が登場して来たのである。第一次世界大戦で、それまで労働者や移民たちが持っていたヨーロッパ的な背景が壊されてしまった。第一次世界大戦までのアメリカ人は、徹底したヨーロッパ志向であった。「ヨーロッパに負け

ないアメリカ Equality」と言いながら、技術者・歴史家・医者・労働者・神父・社会事業家・森林労働者・農夫たちはヨーロッパの同業者に自らのモデルを求め、思想・嗜好・改善策・着想のヒント、美しさ・創意工夫を生み出すために頼ったのはヨーロッパの同業者たちであった。それが第一次世界大戦の結果、失われてしまったのである。美しさ・信仰の強さ・学術研究の在り方・議会制度・職人技などを測る基準は、もはやヨーロッパで無くなっていた。ボルシェビキ党・ファシスト党・大恐慌・オーストリア＝ハンガリー帝国の解体によって、古き善きヨーロッパが無くなってしまったのである。アメリカ人の方も、ヨーロッパとの違いを意識するようになっていた。その違いを埋め合わせるために突如として登場して来たのが、「スカンディナビア熱 enthusiasm for Scandinavia」であった。しかし、それは一時凌ぎの解決策に過ぎなかった。

結局のところ、アメリカはヨーロッパを再生できなかったのである。たとえば1917～18年にオーストリアを襲った予期せぬ運命は（オーストリア＝ハンガリー帝国が解体される）、アメリカからやって来た十字軍が失敗だったことをよく物語っている。ヨーロッパは「バルカン化 Balkanization」（細分化）され、その文化は衰退していくことになった。アメリカは、ヨーロッパの変化に適應する必要に迫られた。

アメリカで「移民 immigrant」という言葉は、公の場で口にされることは好まれない。ただし、それは個人の場合であって、同化を前提にした人種や文化の違いが問題になるときは、それほどでもない。かつて移民は集団としてやって来て、ヨーロッパの出身国と結び付けて考えられていた。特にそれが悪いことだとは考えられていなかった。ところが事情が変わってしまった。かつて移民が個々にやって来ることは稀であった。ここ100年間に集団としてアメリカにやって来た移民は、すでに同化してアメリカ人になっているはずである（もし同化していなければ問題になっていたはず）。予言は我々がやるべきことではない。しかし今ここで言えることは（著者はこの本の原稿をニューディール政策が発表された1933年から翌年にかけて書いた

ている)、経済の再生がニューディール政策の目的ではなかったということである。それは景気の動向とは無関係に導入されたものであった。ニューディール政策の導入は、資本制経済の失敗を意味していた訳でもない。それは第一次世界大戦の結果が齎したものであった。戦後のヨーロッパは荒廃して市場としての価値が無くなり、それまでアメリカの活力源であったヨーロッパからの移民も途絶えてしまった。「新世界 New World」(アメリカ)は、本当の意味で「旧世界 Old World」(ヨーロッパ)と縁を切ることになったのである。

いずれにせよ、1756年の七年戦争は1776年の独立戦争、1812年の第2次英米戦争は1829年のジャクソン大統領の登場、1845年の米墨戦争は1860年のリンカン大統領の登場、1917年の第一次世界大戦(アメリカは3年遅れで参戦)は1933年のフランクリン＝ローズベルト大統領の登場を可能にしたが、すべては1756年の七年戦争に始まっていた。独立戦争を経験したアメリカ人にとって、そのとき「アメリカが掲げた原則 true American principle」は、「いかなる政治的な原則も超えたもの lay beyond any political principle」であった。いかなる政体論も、いかなる政策論も「星条旗 Star-Spangled Banner」が象徴するアメリカの原則に比べれば物の数ではなかった。アメリカ合州国は、建国の時から「非の打ちどころがないもの completeness of America」に出来あがっていたのである。

しかし、このような「アメリカの創設者 fathers of the Constitution」の「確信 faith」に言及する前に、つぎのことは指摘しておきたい。つまり歴史の転換期において「アメリカの創設者」は、その変化を予測し準備していた訳ではなかったということである。戦争によって種が撒かれ、培養期間を経ることで果実を手に入れていた訳だが、それは新しい集団が突如として現れ、戦争によって齎された新しい状況に応じた新しい政体を登場させることで可能になったのである。どこかの教科書に答えが書いてあった訳ではなかった。「戦争は万物の母 War is the father of all things」とは、古くからよく言われてきた言葉だが、それを実際に政治現象の説明に使った者はこ

れまでいなかった。アメリカ史の特徴は、対外戦争が長い時間を経て政体に変化を齎していることにある。

歴史の古いヨーロッパなら、支配層もアメリカ以上に洗練されていて、その考え方も多種多様で、出来事が持つ意味を理解できていたはずである。ただし第一次世界大戦の後だけは、さすがのヨーロッパも戦争の意味を理解するようになったのは、戦後15年も経ってからであった(まるで「素朴で無邪気な innocent and ingenuous」アメリカのようであった)。たとえばドイツに於けるヒトラー人気の高さは、ドイツが無思慮・無目的で、将来に対する見通しもないまま第一次世界大戦に突入したことを示している。「無名戦士たちの運動 movement of the unknown soldier」が新しい世代の若者によって担われるようになるのは、戦争が終わって15年も経ってからのことであった(著者は第一次世界大戦後、成人学級を組織することで戦争を体験した世代に働きかけ、キリスト教の伝統に根差す新しい社会をドイツに作ろうとしたが、その試みはヒトラーの登場によって失敗する)。

戦争が「統治制度 body politic」を変えるのである。戦争を一緒に体験することによって、新しい「仲間意識 community」が生まれ来るからである(Eugen Rosenstock=Huessy, Kriegssee und Rechtsgemeinschaft, Akademische Festrede, Breslau, 1932)。平時に作られた「統治制度」は、戦時にその有効性が試されることになる。権利・自由・特権などの在り方は政治指導者の個人的な意志によるのではなく、戦時にどの程度「統治制度」が手痛い傷を負うかによって決まってくる。人間の問題は、個人の意志や個人が手にするチャンスによって決まって来るのではなく、個人が直面する試練や個人が払う犠牲の大きさによって決まって来るのである。戦争の試練に耐えた「統治機構 government」だけが「統治機構」として機能し得るということから(戦争は長い時間をかけて気付かないうちに「統治機構」に影響を与える)、社会を動かしているのが「個人を超えた力 super-individual forces」であることが判る。フランクリン＝ローズベルトは、第一次世界大戦時の大統領であったウイルソンに言及することは無かったし、第一次世界大戦に言及することも

なかった。しかし1933年の緊急事態に対処するためのニューディール政策は、1918年にあった経済体制を問題にしている。1918年の戦時体制を、平和目的に合うよう「改変 rebuilt」せざるを得なかったのである。それは文字通りの「改変」であった。

戦後における各国の「改変」は緩慢であったが、個人の意志からは自由であった。戦争は犠牲を意味し、平和は利益を意味する。戦争をするか平和を実現するかは、政府が決めることである。欠乏と自制が要求される場合は戦時にあることを意味し、豊かさと幸福感が謳歌されている場合は平時にあることを意味する。

社会の在り方は戦争を経験することによって変化するものであり、戦争を経験するからこそ戦時の動員体制を平時の再建にも利用可能になる。戦時体制とニューディール政策の関係を否認すれば、戦後危機の解決という偉業は理解できないことになる。政治家たちは大衆の要求に屈して、深刻な現実を直視しようとしなないものである。たとえ過去を忘れまいとする勇氣ある政治家がいたとしても、大衆の忘却癖がそれを妨害することになる。アメリカも第一次世界大戦後の戦争と平和の関係を受け入れていなければ、直面する国際問題は何一つ解決できなかったであろう。アメリカは戦後にヨーロッパの問題に関与することを拒否するが、それは戦争が古い社会秩序の終焉だけでなく、新しい社会秩序の登場を意味する現実にアメリカが驚愕したからであった。

## 第6節 新世界アメリカ

アメリカ革命の同時代人は、1756年に始まった七年戦争によって北米大陸にあったフランス領が無くなり、イギリス領であった植民地が独立を果たすことで実現した新世界の「夢 promise」をよく思い起こす。

アメリカ革命で登場してきた国家は「アメリカ合州国 United States of America」と呼ばれることになるが、この国名は「イギリス連合王国 United

Kingdom of Great Britain」を想起させる。「アメリカ合州国」は王国ではなかったが、「統合された国家 unity」であった。18世紀末この種の「統合された国家」は、前代未聞であった。それは単に法的・形態的に珍しいというだけではなかった。「連邦派 Federalists」の政治家は単なる制度の問題だと考えていたが、それは間違いであった。ジェファソンだけは、そのことが判っていた様である。彼が1800年に大統領に選ばれることになったのも、そのお陰であった。ここで言う「統合された国家」とは、「出来あがった統合国家 unity in being」ではなくて「形成過程にある統合国家 unity in becoming」という意味である。単に「領土を1つに纏める togetherness of possession」という意味ではなくて、「外に広がっていく可能性 potentiality of unfolding」を秘めているという意味である。トマス＝ペインもこう言っている。「新しく世界を切り開く力を我々は手に入れた。新世界の誕生は間近い。ヨーロッパ中の人間が自由を手にするようになる」。トマス＝ペインは1776年の『独立宣言』や1787年の『合州国憲法』には無関心で、彼が関心を持ったのは「時間を掛けて広がっていく世界 world in spac and time」,「新しい世界を切り開いていく begin the world all over again」ことであった。

俗物歴史家にその意味は理解できないであろうが、冷徹なフランスの外交官ベルジェンヌ伯爵 Charles Gravier, comte de Vergennes は、1775年に似たようなことを言っていた。「イギリス植民地の独立は、新世界における革命を意味する。…彼らの征服欲は独立を果たす以前から強かった」(Charlemagne Tower, Marquis de La Fayette in the American Revolution, I, 93, Philadelphia, Lippincott, 1926)。

「アメリカの使命 America's calling」を理解するうえで、ベルジェンヌ伯爵の言葉は重要である。彼にとって13州の独立は当然のことで、独立後のアメリカの政体にも彼は無関心であった。しかし彼はアメリカの独立が、新世界では革命を意味することを見抜いていたのである。「アメリカ人がスペイン領を征服するかもしれないことを考えれば、革命がフラン

スにとって必ずしも有害だとは言えない」。新世界に現れた「火の玉 fiery nucleus」が、革命を永久に継続することになるのである。アメリカ革命とは、僅か250万人の集団が新世界で実現していく「永久革命 permanent revolution」であった。「無限の空間に飛び出していく彗星のように、我々は目の前に広がる果てしない世界を征服して行くことになる」(Fisher Ames to Gore, October 3, 1803; Works, I, 324, Boston, 1854)。

それは無為で実現できることではなかった。革命によってのみ実現可能な事業であった。それは「連邦政府 federal government」だから実現できたのではなくて、「拡大する統一国家」だから実現できたのである。なぜなら、それだけが無限の可能性を秘めた未来を約束されていたからである。「イギリス連邦 British Commonwealth」の祈りに込められた「古い計画 old desire」に対抗するには、それしか方法が無かった。「バージニア州 Commonwealth of Virginia」(アメリカ最初の権利章典を制定して、後の合州国憲法権利章典のモデルになる)や大陸会議(独立戦争の開始後に独立13州の連絡機関として機能した事実上の中央政府)を超えて、「永遠に新世界を求める endless desire for a new world」しか他に方法が無かったのである。「無為の神 God of Nature」(アメリカ人にとって「無為の神」とは、「アメリカ人によって乗り越えられるのを待つ自然 Nature waiting for them」を意味していた)からは何物も生まれないのである。「800年に渡りイギリスを支配してきた神 God of eight hundred years of English history」は、「創造的な未来の神 God of a creative future」によって乗り越えられたのである。

そのことは既に1780年に、パウナル Thomas Pownall (イギリスの政治家としてニュージャージー植民地副総督・マサチューセッツ植民地総督を経験。アメリカの独立に同情的であった)によって指摘されていた。「アメリカはヨーロッパ世界にとって、新しく登場して来た惑星であった。この惑星の存在が他の惑星に影響を与え、さらに重力の中心にも影響を与えて、ヨーロッパ世界を変えることになるであろう」(T. Pownall, A Memorial ..to the Sovereign of Europe on the Present State of Affairs between thee Old and New World, p.4,

London, 1780)。さらに彼は次のように続けている。「新世界アメリカが…その特性によって旧世界ヨーロッパに影響を与え続けるなら、アメリカはヨーロッパの全ての国から移民が押し寄せてくる国、絶望した人々が希望を求めて押し寄せてくる国、さらに抑圧され傷ついた人々が押し寄せて(亡命して)くる国になるであろう。世界の富が押し寄せてくる国、諸国民の富が押し寄せてくる国になるであろう」。

トマス＝ペインは「現在のアメリカがノア Noah の時代の再現である」(罪人を滅ぼす洪水によって義人ノアの一族だけが生き残って人類は再出発する。旧約聖書『創世記』9:11～19)と言っていた。またイエール大学のスタイルズ Ezra Stiles 学長(プロテスタントである会衆派 Congregationalist の神父であり神学者であった)も1783年の説教で(『栄光と名誉の国アメリカ The United States Elevated to Glory and Honor』)、トマス＝ペインと同じことを言っていた。アメリカでは、ノアの時代と同じことが繰り返されていると彼は考えたのである。しかも彼は、アメリカ革命が新世界を切り開くと確信していた。「神はアメリカにヤベテの子孫をお遣わしになったのである。ヤベテの子孫はまずヨーロッパに入植し、ついでアメリカに入植して来ることになった。第2の入植地は、第1の入植地を凌駕する人口を持つことになるであろう。…200～300年の間にアメリカの人口は、3000万人に達することであろう。…そのうちの2000万人は白人が占めることになる。…こうしてノアに対する神の約束、ノアの3人の息子シム・ハム・ヤベテの子孫が地上に満ち溢れるという神の約束が実現することになる」(J.N.Thornton, Pulpit of the Revolution, pp.405 ff., Boston, 1860)。

アメリカが目指していた目標は「モンロー主義」や、セオドア＝ローズベルト大統領の帝国主義的な対外政策を超えたところにあった。アメリカは硬直的な制度によってその動きを封じられることなく、建国当初から北米大陸に全ての人間を入植させるという目標の実現を目指していた。あらゆる種類の生活様式、あらゆるタイプの人間、統治と教育の分野で達成されたあらゆる成果を現実化することが、アメリカの義務だと考えら

れていた。アメリカ革命を実現したアメリカ人は、単に世界に向かって革命の大義を訴えるだけでなく、さらに1つの新しい提案を行っていた。新世界に「全てのヨーロッパ国民を包括したヨーロッパの似姿 complete image of Europe」を築き上げるといふ提案である。ヨーロッパには、嘗てローマ帝国という統一国家が存在していた。アメリカは、建国当初から新世界に統一国家を建設するといふ目標を掲げていたのである。「新世界の革命 revolutionary idea of the New World」は、政治的な「統合 unity」の他に「全人類の包括 humanly complete」を目指していた。「アメリカ革命 American Revolution」の「革命的な性格 revolutionary element」は、「革命 Revolution」といふ言葉ではなくて「アメリカ American」といふ言葉の中に存在すると考えるべきである。

植民地の人間がアメリカ人になるには、2つの段階を経る必要があった。まず大陸会議に参加すること、ついで新大陸に於いて「フロンティア開拓 pioneering」に参加すること（少なくとも「そうしたいと考えること at least speculating」）であった。

「統合」の実現と「フロンティア開拓」といふ2つの理念、これこそがアメリカをアメリカたらしめている条件である。しかし「全人類を包括」するためには、「統合」をうまく実現する必要があった。「フロンティア開拓」を進めながら、同時にヨーロッパから移民を受け入れ続けたからである。独立13州は、一方で「フロンティア開拓」を進めながら、同時に新しく移民を受け入れることで、新世界に於いて革命を実現して行ったのである。つまり「統合」と「全人類の包括」は、どちらも欠く訳にはいか無かったのである。すでに指摘してきたように、革命は「徹底的であること totality」を要求する。アメリカ革命の場合、それは「人類の雛型になること epitome of the race」を意味した。

アメリカは今その「寛容さ tolerance」と「親切心 hospitality」ゆえに、ヨーロッパから様々な影響を受けて「大混乱 pandemonium」に陥っている。分裂し敵対しあっているヨーロッパから、あらゆる国民が押し寄せ、あらゆる

意見が押し寄せ、あらゆる宗教・教義が押し寄せて来ているが、これで終わるはずはない。これは単なる始まりに過ぎない。多言語が使用されている現状は、人類の様々な意見を1つに纏めることを可能にする「多言語研究 panchronion」を可能にするかもしれない。

アメリカ人は、自分たちが成し遂げた偉業に気づいていないようである。既に見てきたように、アメリカ人が自らの偉業に気づくのは、戦争によって新しい事態の登場に気づかされた時だけである。しかも戦後になっても、自らの偉業に気づくためには15年の歳月が必要であった（たとえば1812～15年の第2次英米戦争と1846～48年の米墨戦争の後がそのよい例である）。アメリカ人が新しい事態を把握するのは遅い。『アメリカからの手紙 American Letter』でアメリカ人であることの不思議さを謡ったマクリーシュと同じように（第3節 失敗した「先駆けの革命 precursor」を参照）、詩人のローウエル James Russell Lowell もアメリカの不思議さを詩に書いている。「若さを失った新世界の不思議さ。若さが失われたのは、止むを得ない事情から。自由と偉業に助けられて、彼らは新しく国を建国する。まるで旧世界の人間がテントを張るときのように（簡単に）」。しかしアメリカ人は人類のことを忘れていた訳ではない。「自らの運命を自らの力で変えることが叶わないことを知り、また不運な民に（アメリカの）扉が開かれることが無いことも知る」。

ローウエルと同じようなことを、メルビル Herman Melville も男盛りの30歳のときに書いていた。「我ら（アメリカ人）の父母とは誰のことか。（ローマ人の先祖だといふ）ロムルスとレムスが我らの祖先か。（ならば）我らの祖先は世界なのか。ならばシーザーとアルフレッド大王、聖パウロとルター、ホメロスとシェイクスピアは、ジョージ＝ワシントンが我々アメリカ人の英雄であるように世界にとっても英雄であるのか。「我ら（アメリカ人）は（ヨーロッパの）全過去を継ぐ者であり、全過去の遺産を全国民と共有する者である。西半球（南北アメリカ）に住む全ての民は1つになって、同じ未来を目指すことになる。迷子になったアダムの子供たち（人類）

を懐かしのエデンの園（アメリカ）に帰すことにこそ（人類の）未来がある」。

いまやヨーロッパ全体をアメリカに移し替えることが求められている。第一次世界大戦で壊滅したヨーロッパに代わって、アメリカがメルビルの言うようにヨーロッパの遺産を相続することになる。ヨーロッパで2000年の間に築かれてきた全ての文物がアメリカの保護を求めている。外国生まれの移民を「アメリカ化する Americanization」とは、個々の移民を教育すれば済む問題でなくなっている。アメリカは豊かで多様性に富むヨーロッパの様々な文物を1つに纏めて、アメリカの生きた伝統にしなければならぬ。美術館や科学博物館を建設するのも結構だが、やるべきことはそれを超えたところにある。メルビルが書いているように、「迷子になったアダムの子供たち（人類）を懐かしのエデンの園（アメリカ）に帰すことに（人類の）未来がある」ということになる。

アメリカは新世界であるということから、全世界に責務を負っていることになる。アメリカが世界革命を起こすことは無いであろうが、その存在理由が変化することで「世界大戦 World War」を「世界革命 World Revolution」に変えることになるであろう。

## 第7節 「アメリカに対する神の約束 promise of America」と 「自然法 natural law」

「イギリスには『コモンロー common law』と呼ばれる最上位の『法 law』があり、アメリカには『自然法』と呼ばれる最上位の『法』があるが、このように世界には制定法や憲法を超えた『最上位の法 fundamental law』が存在しており、これを宗教家は『神の法 law of God』、哲学者は『自然法』、法律家は『人権法 law of human society』と呼んでいる。これは普通に考えられている『法律 a law』ではなく、個人の権利を守るために存在する『最高位の法 the law, supreme over all other law』なのである。…こうした個人が所有する権利を無視する国は、その国民にとって敵であるばかりか人類

全体の敵と見做されるべきである」(Theorists of the American Revolution, in Robert Mcelroy's The Social and Political Ideas of the Revolutionary Era, London, 1931)。

イギリスから独立と自由を勝ち取ろうと戦っていたアメリカ人は、「徹底した革命 total revolution」を実現することには関心が無かった。母国（であるイギリス）との関係をなるべく維持し続けようと努力していたことから、その政治用語にも古い意味が残されることになった。「コモンロー」も放棄されることなく残されたのである。ただ部分的に強調点が「変更 shift」されただけであった。

しかし、それでもその「変更」は、政治用語の世界においてアメリカに独特な地位を与えることになった。宗教思想史や政治思想史に於いてアメリカは、「世界が関心を持つ universal interest」国となったのである。ただし、アメリカはイギリス的な言葉に「若干の変更 Umlaut」を加えただけで、新しく独自の政治用語を創ることはしなかった。

「神の約束 promise」・「自然法」・「法として適切であるか否か due process of law」の3つは、とくに「若干の変更」が加えられた好例である。ボルテールが神について言ったように、「存在しないなら創るしかない il n'existait pas, il faudrait l'inventer」ことになっていたはずである。革命当初からアメリカは、独自に「変更」を加える必要があると考えていた。私としては、アメリカ人による研究（Charles Grove Haines, The American Doctrine of Judicial Supremacy, 1932 ; R. L. Mott, Due Process of Law, 1926 ; B. F. Wright, American Interpretations of Natural Law, 1931）に幾らかでも寄与することが出来ればと願っている。ヨーロッパで600年に渡って受け入れられて来たものが、アメリカでどのように変更されたのか、その過程を辿り直してみたいと願っている。アメリカの「自然法」もキリスト教的な伝統に忠実であるということでは、ヨーロッパの「自然法」と同じである。アメリカ的な特徴は、法思想全体における「自然法」の位置づけをヨーロッパと比較したときに見えてくる。内容や用語は変えていないが、その位置づけを微妙に変えている。

クロムエル Oliver Cromwell やブレイク William Blake をはじめ、多くのイギリス人にとってイギリスは「約束の地 promised land」であった（「約束の地」については『創世記』12:1を参照）。神によって選ばれた人々の従うべき法、その法を使って人々を裁く裁判官、人々が守るべき安息日（祈りのために仕事を休む日）と信仰が、ロンドンの街頭で「イスラエルよ、自分の天幕に帰れ」（『列王記』上12:16）（王が民の言い分を聞き入れようとしなかったことを知ったイスラエルの民は王から離れる）という声がピューリタンに武器を取るよう促した時、蘇って来たのである。「イスラエルの神 spirit of the God of Israel」は「イギリス共和国の神 Spirit of the British Commonwealth」でもあった。こうしてスチュアート王朝の専制が齎したファラオの悪政が打ち破られ、モーゼに対する神の約束が実現することになるのである（イスラエルの民はファラオの圧政を逃れて「約束の地」を目指すことになる。『出エジプト記』を参照）。

アメリカも「約束の地」であった。17世紀にマサチューセッツ州やコネティカット州に登場してきた「神政政治 theocracy」は、「善きイギリスの統治 good English Rule」が生み出したものであった。ニューイングランド地方（マサチューセッツ州やコネティカット州のほか、ロード＝アイランド州・ニューハンプシャー州・バーモント州・メイン州がある）のピューリタンたちは、裁判所が存在しなかったので聖書に従って自分たちで判決を下していたが（William MacDonald, Select Charters and Other Documents, p. 53, New York, 1899）、1640年にピューリタン革命を開始したイギリス人も、教会法裁判所や国王裁判所が廃止されていて、同じ問題に直面していた。そこで1641年に「必要とされる法律が存在しない場合、神の言葉に従って判決を下してよい」ことになっていた（F.N. Thorpe, The Federal and State Constitutions, I, 529, Washington, 1909）。緊急事態に対処するための方策として、アメリカでもイギリスでも「神の言葉である聖書 word of God, promises of the Bible」が法廷で使われていたのである。ところが18世紀の後半になると、「約束の地」がイスラエルからアメリカに広がって行くことになった。このことについては、すでに第3節「失敗した先駆けの革命」で論じた通りである。また

第6節「新世界アメリカ」では、アメリカの登場がノアの時代の再来を意味したことを示して来たが、ノアに対する神の約束はアブラハムに対する神の約束よりも、アメリカが置かれていた状況を説明するのに適している。シナイ半島で神とモーゼが交わした「聖なる契約 Holy Covenant」に代わって、「神がノアやその息子たちと交わした自由な空間に関する契約 natural covenant」が登場して来たのである。「アメリカに対する神の約束」・「アメリカは神の国 God's country」などといった言葉の背後には、このような事実が存在していた。

キリスト教の伝統において、ノアは「自然法」と密接に結び付いていた。中世に登場してきた神学者サン＝ビクトールのフーゴー（ユグ）も、ノアを「自然法」と関連づけている（第10章:第6節「十字軍とスコラ学」を参照）。現在では「秘跡 sacrament」という言葉は死語になっているので、その代わりに「自然法」という言葉を8つの「秘跡」の1つの意味で使うことにするが（8つの「秘跡」についても第10章:第6節「十字軍とスコラ学」を参照）、「自然法」は「秘跡」のなかでも「特に重要な sovereign」意味を持つ。現在では「自然法」は「時空と無関係な概念 idea outside time and space」とされているため、その本当の意味が判らなくなっているが、その重要性を理解するためには8つの「秘跡」の1つを構成するものとして「自然法」を理解する必要がある。「この世の始まりから終わりまで、神が自ら創造した世界を見捨てることはない」（Migne, 176, 802 A）からである。ヨーロッパがキリスト教化されて以来、「自然法」が抽象的な規則の体系であったことは一度もない。生物の歴史において、人類が進化を遂げてきた過程の中で登場して来たのが「自然法」であった。人類の救済史においても、また社会秩序においても、「自然法」は独特な地位を占めていた。サン＝ビクトールのフーゴーの説く8つの「秘跡」も、かつては大きな影響力を誇ったものだが、いまでは「そうかもしれない potentialities」としか考えられていない。しかし1150年には、実際に存在した秩序であったし、社会生活の在り方であった。「自然法」は、歴史において正当な地位を認められるだけでは

不十分で、日常的な現実にも対応していなければ影響力を失ってしまう。

キリスト教的な考え方によれば、人類の始祖アダムの破戒（エデンの楽園にいたアダムは神の禁令を破って知恵の木の実を食べ、楽園を追われる）からアブラハムの契約（神の指示に従って息子すら生贄に捧げるつもりであったアブラハムは、「約束の地」と子孫の繁栄を神から約束される）までは、まだ人類には希望があった。平和で、「誰もが納得できる reasonable」秩序形成を可能にする協力体制を、無理なく築くことが出来たからである。合意形成の能力が残っていたお陰であった。ただし、それは完璧からは程遠いものであった。なぜなら、人間は合意形成の「始動者 author and legislator」であったが、同時にその「産物 product」でもあったからである。ひとり一人の人間は、自分だけの「理屈 reason」に従って秩序形成を行う訳でなく、他者の「理屈」も考慮に入れる必要があるからである。こうして「出来上がった社会秩序 natural order of society」があって初めて、何事かを実現することが可能になるのである。何事も「個人間の同意 agreement between individuals」が無ければ実現不可能である。この成功体験が記憶され、歴史において繰り返されることになるのである。

ここ 1000 年間の歴史において、まず大きな役割を演じることになったのが、フーゴー Hugo de St. Victor の 8 つの秘跡（第 10 章：第 6 節「十字軍とスコラ学」を参照）で最後に挙げられていたキリストが再臨して行う「最後の審判」であった（998 年のクリュニー修道院による「死者の日」の制定。第 9 章：第 4 節「死者の日：最後の審判の民主主義」を参照）。ついで革命によって実現すべき目標として復活してきたのが 7 つ目の秘跡（教会：1075 年のグレゴリウス 7 世による教皇革命。第 10 章「教皇による革命」を参照）、さらに 6 つ目の秘跡（新約聖書：1517 年のルターによる宗教改革。第 7 章「ドイツ革命」を参照）、5 つ目の秘跡（旧約聖書：1649 年のクロムエルによるピューリタン革命。第 6 章「イギリス革命」を参照）であった。5 つ目の秘跡が復活してピューリタン革命でイギリスがイスラエルの再現と考えられたとき、「自然法」の登場がその後に続くはずであったが、自らを神の選民と考えていたイギリス人は、

革命を徹底的に遂行することをしなかった。こうしてノアの契約、つまり「合意 consent」を「最上位の法」とする「自然法」がアメリカに登場してくることになるのである（4 つ目の秘跡）。それがモーゼの契約を可能にし、平和を実現するための説得力ある「自然法」の登場を可能にしたのである。

18 世紀に登場してきた「自然法」は、恣意的に選択された訳でもなく、神学的な伝統を放棄した訳でもなかった。神学を放棄して、直ちに物理学を受け入れるということにはならなかったのである。イギリス革命で示されたという「神の意志 revelation」にはイギリス革命に特徴的な「醜悪さ abomination」が付随しており、そこで「自然法」が代わりに登場してくることになった。イスラエルの再現になるはずであったイギリスの議会（最高裁の役割も担う）が「神の意志」を無視したとき（ピューリタン革命を認めなかったとき）、アメリカがノアの契約と「自然法」に正統性を付与することにしたのである。こうして「理を尽くした説得 reason」にもアメリカ特有の意味が付与されることになった。アメリカの「理を尽くした説得」には、フランス語 (raisonner) やドイツ語 (rasonnieren) のような「屁理屈をこねる private reasoning」といった悪い意味はない。「誰にも長所はある。短所を論うのではなくて長所を褒めてやれば、それが全員のためにもなる There's good in everybody. Boost. Don't knock」(第 29 代アメリカ大統領ハーディング Warren Harding の言葉) という訳である。アメリカ人にとって大切なのは「合意」であり、「個々人の理屈 individualistic reasoning」ではない。「善意の人間の協力を可能にするような理屈 co-porative reasoning of the men of good will」をアメリカ人は重視するのである。アメリカ人にとって大切なのは「協力する co-operate」という言葉である。アメリカ人に「理性 reason」が与えられたのも、哲学的・抽象的な思考のためでなく「具体的な協力関係 concrete co-operation」を実現するためであった。

アメリカが他の国と大きく違っているのは、国民が「自由な選択 free choice」によってやって来たという点である（1620 年にやって来た「巡礼の父祖 Pilgrim Fathers」であれ、19 世紀に最後の移民船でやって来た者であれ、「自

由な選択」によるという点では同じ)。何百万人という人間の「自由な選択」、これが繰り返されて来たのがアメリカであった。もともと「自然法」は法廷で使われてきた概念であった。それがアメリカでは、「自発的な同意 spontaneous agreement」(それが社会問題を解決してきた)の意味で使われるようになった。アメリカで「自然法」と言えば、それは統治制度や法典は意味せず「生き方 design for living」を意味する。その特徴は「何事も固定化されていない nothing in it is fixed」ことである。「アメリカ人は考え方を固定化することを嫌う The mind of America is not set and does not want to be set.」「アメリカの都市が永続することはないし、アメリカ人にとって死守すべき先祖伝来の農地など存在しない。ましてや不変の慣習など存在しないのである。液体が容器の形に合わせるように、アメリカ人は社会の要求に自分を合わせる。その変わり身の早さは、他の国なら革命と間違えられるほどである」(Fourth-of-July editorial, 1936, New York Times)。

#### 第8節「法として適切であるか否か due process of law」条項

1776年の『独立宣言』のあと、フランス革命とかロシア革命の影響をアメリカ人が受けていても良かったはずである。事実何人かのアメリカ人は影響を受けていたが、全体としてアメリカ人は独自のやり方を貫いてきた。なぜなら、7つの革命に恐怖したヨーロッパ人と違って、アメリカ人には7つの革命の背後には同じ「精神 spirit」が貫かれており、その「精神」は失われるたびに復活して、革命を再生してきたことが見えていたからである。革命どうしの違いは単なる形の違いに過ぎず、再生を可能にする大切な要素が存在していたことにアメリカ人は気づいていた。それこそが人類にとっての「自由憲章 Magna Carta of Freedom」であった。どの革命も、「自由憲章」を実現するためだとアメリカ人は信じて来たのである。そんなアメリカ人の「権利 liberty」こそが『合衆国憲法 Constitution of the United States』の基本となっている「自然法」であった。

こうしてアメリカで重視されるようになったのが「移動の自由 mobility, flexibility, free movement all over the new world」であった。ドイツでは「移動の自由権 Freizügigkeit」と呼ばれているこの権利が、アメリカでは特別な名称では呼ばれていない。しかし『合衆国憲法』は、全てのアメリカ人に「無限の空間に彗星のように飛び出していく」(Fisher Ames to Gore, October 3, 1803: Works, I, 324, Boston, 1854) 権利を保障している。この権利を守っているのが、「法として適切であるか否か」条項であった。

これこそがアメリカの「自然法」なのである。「法として適切であるか否か」条項は、アメリカ人の基本的な権利を守るための「自然法」なのである (Daniel Webster in the Dartmouth College case. 1816年にニューハンプシャー州議会は、1769年にイギリスがダートマス大学設立時に認めた『特許状 charter』の内容を変更して、私立校であった大学を公立校にしようとした。そのとき弁護士ウェブスターは『特許状』の内容は契約であり、州議会のやろうとしていることは『合衆国憲法』に違反していると主張して連邦最高裁にこの主張を認めさせた)。イギリス人なら「旧い old」ことを重視するし、フランス人なら「新しい new」ことを重視するが、アメリカ人は「征服すべき自然に関わる natural」ことを重視するのである (因みに「デッカイ big」こともアメリカ人は重視する)。またイギリス人は「議会における議論 parliamentary procedure」を重視するし、フランス人は「熱の籠った議論や会話 passionate discussions of conversations」を重視するが、アメリカ人は「法として適切か否か」ということを重視するのである。全ての人間にチャンスが与えられるべきであるということがアメリカで大切にされてきたが、この権利を守ってきたのも「法として適切であるか否か」条項という名の城壁であった。

しかし折角の城壁も夜警なしでは無意味である。都市を守るのは、結局は城壁でなくて人間だからである。『合衆国憲法』の規定が守られているか否かを監視するのも人間である。新しく登場してきた「アメリカ的な生き方 a design for living, the American pattern」は、どうすれば守ることができるのか。役人は権力を欲しがらるものである。どうすれば役人に権力を持たせ

ないように出来るのか。「全員の合意 common consent」に基づく統治は、「合意」する者に統治の在り方を左右されがちである。1935年になってもロードアイランド州では、「憲法制定会議 Constitutional Convention」が召集できると考えられていた（ロードアイランド州だけは1878年の「憲法制定会議」に参加していなかった）。つまり当時のアメリカ人は、統治の仕方を変更できると信じていたのである。イギリスでは、議会が全権を握っていた。この伝統がアメリカでも受け継がれ、1817年にニューハンプシャー州の最高裁判事は、「法として適切か否か」条項でさえも「議会の権限に制約を加えることはできない。それが可能だということになれば、アメリカの法律は全て無効になってしまう」とまで言っていた（Reports of Cases in New Hampshire, I, 1819, 129 and 131）。「神の選民」たるイギリス人の「公共心 public spirit」は、「最終審でもあったイギリス議会 High Court of Parliament」が代表していた。ピューリタン革命時代のイギリス議会は、「王の中の王たる神 king of kings」の指示に忠実な「信者の中の信者ピューリタン congregation of congregations」から靈感を得ていた「法廷の中の法廷 court of courts」であった。ところがアメリカでは、イギリス議会にそのような権威が認められることは無かった。独立戦争の時、イギリス議会はアメリカに独立を認めようとしなかったからである。イギリス議会に代わってアメリカに登場してきた「アメリカ議会 Congress」は、アメリカ社会を代表する「下院 House of Representatives」と歴史的な伝統を引き継ぐ「上院 Senate」から構成されているが、イギリス議会が持っていたような「半ば宗教的 quasi-religious」な権威は持っていない。それに代わる「道義的 moral」な権威を認められているのは、『合衆国憲法』の解釈権を有する連邦最高裁判所の「9人の老人たち nine old men」である。「仲の良いノアの息子たち cooperative sons of Noah」の様に、彼らは「憲法制定会議」を主宰した父祖たちの期待に背かなかった。問題が起きた時、セム・ヤペテ・ハムの3人とその子孫は、ノアが神と交わした契約に従うことにしていたが、そんな「仲の良いノアの息子たち」を見習ったのである。「アメリカ議会」には、イ

ギリス議会のように「善意の個人を自発的に協力させるような精神 spirit enabling the individuals of goodwill to co-operate」が備わっていなかったからであった。

こうした理由から、イギリス議会は「法として適切か否か」を解釈する権限を認められていたが、「アメリカ議会」はそれが認められていなかった。しかし、独立13州から48州に構成州を増やすことが出来たのは（1959年にアラスカ州とハワイ州が加わって現在では50州になっている）、「アメリカ議会」がイギリス議会のような権限を持っていなかったからであった。ノアの3人の息子たちが人類の祖先となれたのは、そのことを神がノアに約束していたからであった。アメリカにやって来た移民たちは、「法として適切か否か」条項を用意した父祖たちのお陰で権利を保護されていたのであり、またその「精神」を体現していた移民の代表によって守られていたのである。

連邦政府の司法部が存在感を示すようになるのは、行政部や立法部に比べてかなり遅れることになる。その理由は偶然と考えて良さそうである。「憲法制定会議」を主宰した父祖たちの影響力が失われ、連邦政府の権限を強めようとした「連邦派 Federalists」が死に絶えた後になってから、その「精神」が不死鳥の様に生き返って来たのである。それに貢献したのが、連邦最高裁の違憲立法審査権を確立したマーシャル John Marshall であった。連邦最高裁こそが「憲法制定会議」の父祖たちを蘇らせたのである。「法として適切か否か」条項によってアメリカ人の「自然権 natural rights」を守ることで、「アメリカに対する神の約束 promise of America」を現実のものとしたのである。

## 第16章 時代区分の意味

### 第1節 歴史の教科書について

新しい経験をすると「時代区分 historical periods」の仕方も新しくなる。我々はよく「恐慌後」とか「戦後」とか言うが、こうした言い方で我々は時代を区分しているのである。「革命後」と言う場合も同じである。新しい発見が数多く行われて、技術や科学の成果を誇った19世紀がルソーやボルテールに「触発され inspired」、学校の教科書で大きく取り上げられるようになったのも当然であった。

しかし忘れてならないのは、それが「当然視されていること dogmatism」である。今ほど学校の教科書が重視されるようになったのは、これまで無かったことだということを忘れてはいけない。短い人間の生涯と長く続く歴史を関連づけるには何か特別な方法を採用する必要があるが、我々は2つの方法を採用してきた。1つは祝日・慣習・古い家具の形で過去を残す方法であり、もう1つは子供たちに年配者の話を聞かせる方法である。話を聞いた子供たちは、まるでレキシントン Lexington（独立戦争の激戦地）やゲティスバーグ Gettysburg（南北戦争の激戦地）にいるかのように感じたものである。ところが現代人は年配者の話を信じなくなり、まるで彼らが古い家具のように博物館に相応しい存在だと考えるようになっていく。今や人が信用するのは、歴史の教科書だけなのである。

こうして教科書が政治的に重要な意味を持つことになった。独裁者が教科書の書き換えに熱心になったのも当然である。トルコの学校では、すべての言葉（英語・ロシア語など）はトルコ語から派生したと教えないと、先生は首になるか減給されるそうである。これはトルコに限られたことでない。民主制の国に於いても、新しい発見が行われるたびに「時代区分」の仕方が変わってきた。私自身が経験したことだが、近代が始まったとされる時期は2通りあったし、古代が終わったとされる時期も3通りあった。さら

に歴史研究に携わるようになってからは無数の「時代区分」や、時代を分ける画期的な出来事に出会うことになった。新しい「時代区分」や新しい画期的な出来事に出会う度に、まるで新種の蝶を見つけて喜ぶ収集家になった気分であった。

さまざまな「時代区分」が登場して来ることになって、混乱は増す一方である。歴史研究が進めば進むほど何が本当の事なのか判らなくなり、五里霧中のような状態になってくる。そこで学者先生がお出ましになって、白黒を付けるということになる。

しかし、失礼ながら教科書の著者たちは、「時代区分」の意味が判っていない。アメリカ史の教師たちに対して行なわれた調査で明らかになったのは、「近代 modern times」とか「西暦紀元 A.D.」が持つ政治的な意味に、彼らは無関心すぎるとのことである。「事実 facts」ばかりに気を取られ過ぎて、「時代区分」に無関心なのである。「事実」はいくら数多く集めてみたところで、「特定の世代 a generation」の価値観を反映している「時代区分」を変えることはできない。「中世 Middle Ages」は相変わらず「暗黒 dark」であって、かつ「冒険物語的 romantic」なままである。

いま「時代区分」のあり方を決めているのは、大学の先生方である。彼らは新しく発見された史料を使って新しい「時代区分」を決める特権に恵まれているが、その史料たるや『エレウオン Erewhon』（バトラー Samuel Butler がビクトリア朝のイギリスを風刺した小説で、この小説のタイトルは「どこにも無い所 nowhere」を逆に綴ったもの）の古文書館で発見されたという代物である。だれもが「時代区分」など勝手に決めることができると考えており、せいぜい歴史書に章名として登場してくるに過ぎないと考えている。しかし、「古代 antiquity」・「キリスト教時代 Christian Era」・「近代」などは、現代の意味を理解するうえで重要な役割を果たす大切な目印なのである。

ドイツのハレ Halle 大学に中世史担当の教授と近代史担当の教授がいたそうだが、1490～1510年の期間を扱った論文が提出されたとき、2人とも評価を断ったそうである。その理由が振るって、中世史担当の教授

に言わせると紀元 1500 年で中世は終わっているので中世史担当の教授の出る幕ではなく、近代史担当の教授に言わせると近代は 1500 年から始まっているので、近代史担当の教授の出る幕ではないと言うことであった。2人とも紀元 1500 年で中世と近代を分けるという学会の「時代区分」に、揺るぎない信頼を寄せていたという訳である。

しかし「時代区分」は、歴史家が自由に決められるものでないことに留意する必要がある。数学者が2つの違った数字を区別するように、歴史家は中世と近代を区別できると考えているなら、それは間違っている。革命によって「時代区分」をしている本書の著者としては、「時代区分」と歴史家の関係を論じない訳にはいかず、この問題についてここで少し論じて置きたい。私としては、「時代区分」の仕方を1つに限定することに反対である。歴史家が相手にするのは「人間集団 society」であって、物言わぬ自然ではないからである。

こう言い換えてもよい。歴史家は何を研究対象にしているのか、あるいは歴史家にとって「史実 facts」とは一体、何なのか。こうした質問に対して普通、返ってくる答えは、自然科学で言う「事実 facts」と同じく、歴史家にとっても「事実」とは、よく吟味された客観的な「事実」であるというものである。「食虫植物 Drosophylum」に捉えられた昆虫は、自ら出す尿酸で「食虫植物」に刺激を与え、「食虫植物」はその刺激で消化酵素を出して獲物を消化吸収するが、その様子を植物学者が描写・説明するように、歴史家も人間の「行為 actions」を描写・説明すべきであるというものである。しかし、これでは歴史家が自然科学者と同じにされてしまうことになる。歴史家が「科学的な歴史家 scientific historian」になったところで、読者には何の益もない。なぜなら、歴史学は自然科学とは別物だからである。歴史家が問題にするのは、生命体や自然ではない。このことが理解できれば、歴史家を自然科学者と同列に論じることが如何に馬鹿げているか理解できるはずである。やっていることが丸で異質なことが判れば、歴史家を自然科学者と一緒にするなど無くなるはずである。そうすれば「時代区分」

が歴史家の気紛れや、「勝手に作り上げた理論 subjective theories」と一緒にされることも無くなるはずである。「時代区分」をする歴史家は、単なる研究者と言うより国民の「指導者 leader or prophet」なのである。

事実 19 世紀の歴史家は、国民の「指導者」であった。歴史家は人類や国の過去を知る者として、国民に信頼されていた。過去に関する知識が、現在や未来の「指導者」にとって邪魔になるとは考えられていなかったのである。「歴史家とは国民の記憶そのものであり、国民の善き良心である Historians represented both the memories and the good conscience of the community」と考えられていた。フランスのギゾー François-Pierre-Guillaume Guizot・テイエール Louis Adolphe Thiers, ドイツのダールマン Friedrich Christoph Dahlmann・ゲルピヌス Georg Gottfried Gervinus・モムゼン Theodor Mommsen・ジーベル Heirich von Sybel, イギリスのマコーレー Thomas Babington Macaulay, アメリカのバンクcroft George Bancroft たちは、皆そんな歴史家たちであった。

しかし、彼らの「黄金時代 golden days」は終わったのである。いまや歴史家は国民の「指導者」で無くなったし、国民に信頼される存在でも無くなった。いまや歴史学は、特定の国民の記憶や伝統とは無縁になっている。19 世紀の歴史家たちが担っていた役割は無視されるようになったが、第一次世界大戦を経験した世界では当然と言えば当然のことである。もはや歴史家は国家の旗手で無くなったし、教会の善き伝統の担い手でも無くなった。単なる研究者になってしまったのである。

## 第 2 節 「国民の記憶 nation's memory」とは何か

では「国民の記憶」(あるいは伝統)とは一体、何なのか。パーク Edmond Burke が「国民の記憶」を定義している(もっとも、彼が定義しているのは「国民の記憶」というより「国民そのもの nation itself」である)。

「国民とは、狭い地域で一時的に形成された集団のことではない。それ

は時間的・数的・空間的に大きな広がりを持った集団を意味する。それは 1 日だけ存在する集団とか、限られた人数の集団だとかを意味せず、偶然に任せて気紛れに選ばれた集団を意味する訳でもない。それは長い時間・何世代も掛けて周到に選び抜かれた集団を意味する。否、選ばれるというより、独特な環境や機会が生み出す性格や習慣が、時間を掛けて作り出す集団のことである。『国民の記憶』は、そんな集団に着せるために作られた衣装のようなものである。個人も集団も思慮には欠けるが、十分な時間さえ与えられれば『(人)類 species』として思慮ある行動を発揮できる」(Edmond Burke, Works, London, 1856, VI, p.146)。

このパークによる定義を前提に、「歴史叙述 history-writing」について考えてみよう。「科学的な歴史家」を自任する歴史家は、「前人未到の領域 virgin territory」について歴史叙述をしたりしない。すでに征服されるか、発見されるか、犠牲の対象になるか、情熱の対象になった世界だけを叙述する。つまり「科学的な歴史家」の言う「事実」とは、ふつう我々が考えている「事実」ではなくて「体験 experiences」なのである。

ドイツ語で「体験された生 erlebtes Leben」(Rudolf Binding, Erlebtes Leben, Berlin, 1927 を参照)という言い方があるが、それは単なる「生 life」以上のことを意味する。たとえば、フランス革命を終わらせた「ワーテルローの戦い battle of Waterloo」という戦闘名の登場も、「体験」が前提になっている。戦場の兵士たちは、何も判らないまま作戦に翻弄されているだけである。村の男たちは罵り、子供たちは泣き叫び、馬は走り回り、女たちは日用品を守ろうと懸命である。そんな状況の中で、兵士たちは前進するだけである。個々人が何も判らないまま広大な戦場で右往左往している様子を、スタンダール(『ナポレオン伝』ほか)やトルストイ(『戦争と平和』)は見事に描いて見せているが、個々人は困惑・混乱して危機的な状況に追い込まれると、かえって「体験や情報の共有化 establish a common experience and a common intelligence」に熱心になるものである。「ワーテルローの戦い」で個々人が直面した困惑・混乱が余りにも酷かったので、それが原因でこの戦い

は人々にとって印象深いものとなり、有名になった。個々の戦闘で個人が経験した理解不能な苦難にも拘らず、戦闘の特徴や作戦の様子、人物像が記憶されるべきものとして登場して来るのである。恐怖と希望、度量の狭さと広さが一緒になって、「ベルアリアンス Belle Alliance」（ワーテルローの勝利後にイギリスとプロイセンの司令官が顔を合わせた宿屋の名前。勝利を記念する場所名として記憶される）や「ワーテルロー」という地名が登場して来たのである。人間は「命名の名人 name-giving animal」である。そして「命名」には「体験」が欠かせない。

歴史が「命名」するのではない。人間が「命名」し、その意味を決め、訂正を加えるのである。歴史家が「命名」するのでもない。ある出来事が重要か否かを歴史家が決める前に、既に「記念日を決める作業 commemoration」は始まっているからである。ゲティスバーグの戦い（南北戦争の転換点となった戦闘）・サラトガの戦い（フランスがアメリカの独立戦争を支援する切っ掛けとなった戦闘）・ヨークタウンの戦い（アメリカの勝利と独立を決定づけた戦闘）・マラトンの戦い（古代ギリシャの都市国家アテナイがアケメネス朝ペルシャに勝利した戦い）などは「事実」ではなく、「国民の記憶」なのである。何千という兵士や民間人が、出来事の意味も判らず右往左往している中で生み出される「国民の記憶」なのである。ペロポネソス戦争はトゥキュディデス Thucydides が最初の科学的な歴史書として書き上げる以前に、すでにギリシャ人の「心 hearts and bowels」の中に「国民の記憶」として根付いていたのである。

「国民の記憶」は歴史家が作り出すものではない。「国民の記憶」は、勝利や敗北といった決定的に重要な体験をした国民が選んでくる。それは文学や科学とは無縁である。なぜなら、「国民の記憶」は知識人が作り出すものではないからである。深刻な「体験」をした国民は危機的な状況に陥るが、「命名」は深刻な「体験」が国民によって「受け入れられる assimilated」ために最低限、必要な作業なのである。深刻な「体験」が国民の「強迫観念 obsession」となら無いためには、「体験」が国民に「受け入

れられる」必要がある。「国民の記憶」を保持するために記念碑が建てられ、記念式典が行われる様になるのは、そのためである。

「時代区分」は、そんな過程の中から生まれてくる。十字軍・宗教改革・中世・古代・名誉革命などは「時代区分」をするために必要な出来事だが、それは「集団の価値観 group-morale」が生み出したものであって、「科学的な研究 scientific research」によって生み出されたものではない。いまは第一次世界大戦で「時代区分をする date things in relation to the World War」ようになっているが、歴史家がそう決めた訳ではない。歴史家は、すでに存在する「時代区分」に訂正を加えているに過ぎない。

こうした作業の最終段階で登場して来るのが、記念日の制定である。「国民の記憶」が「国民歴 calendar of a nation」として登場して来るのである。760年前のトマス＝ベケットの死が自由のための殉教であったとして、「教会歴 calendar of the Christian Church」にベケットの日（12月29日）が取り入れられることになった。イギリス国王の犠牲にされたベケットは、最初の殉教者ステファノ（『使徒行伝』7～8）に次ぐ聖人として、「理想的な国王 ideal of true righteousness」とされていたダビデ王（『サムエル記』下）に取って代わったのである。それはベケットが殺されて2年後のことであったが、当時はまだカトリック教会が深刻な意味を持っていたことが判る。カンタベリー大聖堂が巡礼地となり（ベケットはカンタベリー大司教であった）、ベケットの日が教皇革命の「7月14日」（フランス革命の開始日とされるバスチーユ牢獄の襲撃事件が起きた日）となって、1174年（グレゴリウス7世による教皇革命が開始された年）から1535年（ヘンリ8世の『国王至上法』に反対した大法官トマス＝モアが処刑された年）まで、イギリス人の自由を象徴する『大憲章 Magna Carta』となったのである。また、ジョージ＝ワシントンが大統領2期目の任期を終えるに当たって、アメリカ国民に宛てて公表した文書（1796年）が今も上院で読み上げられているが、これなど「国民の記憶」を保持している良い例である。そうすることで、過去の伝統を思い起こすのである。「過去を忘れなければ過ちを繰り返すことも無い」（ジョージ＝

サンタヤーナ George Santayana)。パークも指摘しているように、十分な時間さえ与えられれば、「(人)類」は賢明な行動を採る。記念日や記念碑になるような出来事は、伝統の一部に過ぎない。「国民の記憶」は専制君主である。一部の出来事しか選ばず、選ばなかった出来事は排除してしまう。その意味では「不公平 unfair」だが、それが現実というものである。このように「国民の記憶」は、「いわゆる事実 alleged facts」と歴史家の仕事を結び付ける役割を担っているのである。

### 第3節 「国民の記憶」と歴史家がやるべきこと

つぎに歴史家がやるべきことについて論じてみたい。ギリシャの歴史家トゥキュディデスは、最初の「科学的な歴史家 scientific historian」と言われている。なぜなら彼は歴史家として、現実との間に「距離 distance」を置く必要があることを知っていたからである。彼は特定の集団がその「体験」ゆえに、神々に捧げることにした「記念碑 agalma」の建設に反対であった。つまり敵側の意図や目的にも配慮することで、それまでであったアテナイの伝統を変えて見せたのである。彼が描いた『戦史 Historiai』（アテナイがスパルタと戦ったペロポネソス戦争の歴史）は、いずれの側にも受け入れ可能なものであった。彼の歴史叙述は、上辺だけを取り繕うだけのものでは無かったからである。これが彼の新しい歴史研究の方法であった。我々が現在、使用している歴史研究の方法は、彼のやり方を発展させただけである。法廷で原告と被告の双方が発言の機会を与えるように、彼は敵・味方の双方に発言の機会を与えることで、「国民の記念碑 national monument」を「永久保存 possession for ever」されるようにし、「国民の伝統 partial tradition」を「どこでも受け入れられる歴史 universal history」にしたのである。トゥキュディデス以降、歴史は「敵味方に分かれた2つの見方 two unilateral memories」から「双方に配慮した見方 bilateral restoration」に変わったのである。歴史とは、「修正が加えられて、偏見から解放された伝統 corrected and

purified tradition」・「敵の見方にも配慮した記憶 enlarged and unified memory」と考えられるようになった。

なぜ第一次世界大戦の歴史叙述が必要なのか。それは偏見によって歪められた戦争の記憶を正すためである。戦争に対する嫌悪感から、誰もが第一次世界大戦を思い出すことを嫌がる。ベネ Stephen Vincent Benét が書いた詩『ジョン＝ブラウンの死 John Brown's Body』（日本で『オタマジャクシはカエルの子』の歌として知られているメロディーが同じタイトルの『ジョン＝ブラウンの死』行進曲が本歌になっているが、この行進曲とは別の南北戦争とジョン＝ブラウンの死を主題にした詩）は、南北戦争がアメリカ人に残した心の傷を伝えている良い例だが、アメリカの優れた歴史家モリソン Samuel Eliot Morison は『ジョン＝ブラウンの死』を、南北戦争がアメリカ人にとって何を意味したかを良く伝えている詩として高く評価している。この詩は限られた数の指導者たちの様子だけでなく、戦っていた両軍の伝統もよく伝えているからである。さらに兵士たちの「体験」だけでなく、銃後の庶民の感情にも配慮したバランスのよい内容になっている。ウエルギリウス Vergilius は『アエネーイス Aeneis』（アエネアスの歌）のなかで、カルタゴの女王デイドの質問に対して、トロイア戦争とその敗北がアエネアスにとって「言葉にならないほどの苦痛 infandum dolorem」だったとアエネアスに答えさせているが、『ジョン＝ブラウンの死』も同じであった。

歴史家は「傷ついた記憶を治療する医者 physician of memory」であり、また傷ついた記憶を癒すのが歴史家の仕事である。治療法が正しいか否かに関わらず、ともかく医者は治療しなければならない。歴史家は「国民の記憶」を回復せねばならないという心理的な圧力を感じており、何とかして「国民の記憶」を回復させようと努力することになる。抑圧された本能を解放し、恐怖や言葉にならない苦痛を癒すのが歴史家の仕事である。歴史家は偉大な歴史的瞬間を再現して、それを「国民の記憶」に変えなければならない。

ヘーゲルやマルクスのような「科学的と称する法則史観 scientific

interpretation of history」,あるいはヘンリ = アダムスのような「科学の発展に対応できない人間」といった悲観的な歴史宿命論 (Henry Adams, A Law of Acceleration, 1906) は、歴史家による「国民の記憶」修復作業に死刑宣告を下すことを意味する。とくに19世紀の歴史家が負うべき責任は大きい。彼らは歴史家の作業に、死刑宣告を下すことを目指していたと言っても過言でない。ヘーゲル・マルクス・カーライル Thomas Carlyle (『英雄崇拜論 On Heroes, Hero-Worship and the Heroic in History』1841)・シュペングラー Oswald Spengler (『西欧の没落 Der Untergang des Abendlandes』1918, 1922) は、歴史家の能力を過大に評価していた。患者を治療することよりも、病理学の方に関心を示していた有名なウィーンの医学校と似て (かつてウィーンには有名な医学校があった), 彼らは手段と目的を取り違えていると言わざるを得ない。もっとも、偉大な歴史家は何が重要なことなのかは本能的に判っていた様である。ただ残念なことに大衆が好んで読むのは、偉大な歴史家の方ではなくて「法則史観や歴史宿命論 laws and generalities」の方なのである。

歴史家に「国民の記憶」保持の役割が期待されるようになったのは、かつて存在した伝統が19世紀に失われてしまったからであった。伝統の代わりに登場して来たのが、歴史叙述と文学であった。いわば緊急時の救済手段がこれであった。「工業革命 industrial revolution」の結果、教会の影響力が失われ、古くから家族や職業が保持してきた伝統も失われて、歴史家に救済が期待されるようになった。こうしてロマン主義を標榜する歴史家が登場して来ることになる。今日の歴史学があるのは、このロマン主義の歴史家の「信念と情熱 faith and passion」のお陰である。伝統が忘れ去られ、失われていった時代に「国民の記憶」を救ったのは、ほかならぬ彼らであった。

しかし、歴史叙述が「国民の記憶」に取って代わることはできない。過去の記憶を育み、未来を信じるのは国民の生まれながらの権利だからである。この2つながらの国民の権利を1つに結び付けるのが、歴史家だけに

許された特権であった。ところが国民の生まれながらの権利と歴史家の特権を奪って見せたのが、デカルトに代表される近代哲学であった。近代哲学のお陰で、非科学的な迷信や万能の自然科学者という神話の登場が歴史家の所為にされることになった。ただし現在では、自然科学者が自分たちの万能性を振りかざすことも無くなった。物理学や数学だけで「創造の謎 riddle of creation」が解明できるなどとは、もう誰も信じ無くなっているからである。しかし19世紀に自然科学に追随する近代哲学が跋扈することになり、「国民の記憶」を救うはずであった歴史家も、その名誉ある役割を放棄してしまった。歴史家は、抽象的な自然科学の信奉者に成り下がってしまったのである。

「国民の記憶」が歴史叙述と無縁なものとなってしまった結果、新たに登場して来たのが「さまざまな神話 national, social and racial mythologies」であった。「神話 myth」が「失われた記憶 lost memory」に代わって登場して来たのである。「科学的であることを標榜する歴史学 scientific history」は、自らが「神話」と違って「証拠 empirical reality」に基づいていることを示さざるを得なくなった。「嘗ての歴史学の伝統 previous group-traditions」の復活である。過去を再現する手段は歴史学しか無いということになれば、歴史学も「独断的な arbitrary」学問になってしまう。それでは「神話学 mythology」と何ら変わらなくなってしまいが、もし「失われた記憶」を再現する手段が他にあれば、歴史家による歴史叙述も他の手段と組み合わせることで、「複合的に synthetic」過去を再現することが可能になる。ところが現在、何百万という数の人間が歴史的な経験 (たとえば第一次世界大戦) の持つ意味を理解できないまま、出来の悪い歴史書を読まざるを得なくなっている。そうすると歴史家の意図がどれほど善意に満ちていても、叙述内容は読者にとって退屈なものでは無くなってしまふ。つまり読者が自らの貴重な経験を生かすことが出来ないのである。

「記憶ぬきの歴史叙述 history without memory」を実現した歴史家の代表例が、シュペングラー Oswald Spengler であった。彼が書いた『西欧の没落』は、

同時代を生きた人間の言葉に全く言及しないまま、歴史叙述を行っている。まるで人間には「記憶」する能力が無いかの如きである。彼が読者として想定しているのは、「記憶」や伝統を失った人間か大人になることを拒否した子供の様である。

では、そんな本が何故あれほど読まれることになったのか。それは第一次世界大戦を経験した読者の受けた衝撃が余りにも大きく、読者が自らの伝統や「記憶」を放棄してしまったからである。シュペングラーの本を読んだ読者は西欧の伝統を忘れて、紀元前2～3000年前の時代に逆戻りしている。父祖以来の伝統をゴミ箱に捨ててしまっ、非西欧的な「文明」を甘受することにしたのである。特に第一次世界大戦後のドイツでは、父祖以来の伝統が奪われ、過去の伝統を想起させる名前や年代が、まるでサハラ砂漠の文明の様に自分たちと無縁なものと思えるような結果を招いたのである。

つまり歴史家は「国民の記憶」を回復させるばかりか、ときにはそれを放棄させることもできるということである。「国民の記憶」が存続可能になるか否か、あるいは新しい「国民の記憶」が定着するか葬り去られてしまうか否かは、歴史家次第なのである。1815年の段階では、まだヨーロッパ世界は新しい未来を信じるだけの余裕があったが、1918年にシュペングラーは、そんな余裕を消し去ってしまった。

どれほど第一次世界大戦がヨーロッパの伝統を荒廃させたかを理解するには、100年前に歴史家が築き上げた「力強い神話 powerful myth」と比べてみるとよい。そのとき歴史家は、「フランス革命が掲げた進歩と自立した人間という目標 Jacobin scheme of progress and self-made manhood」に沿った、新しい「時代区分」を生み出していた。

#### 第4節 「近代はルネサンスに始まる」：19世紀の神話

いま学校で生徒たちが教わっているのは「フランス製の神話 French

myth」である。100年近くに渡って「フランス式の時代区分 French periodization」が正しいと信じられ、誰もがそれを受け入れてきたが、以前にも同じことがあった。クリュニーのオディロは、キリスト教徒も異教徒も受け入れ可能な人類史の枠組みを構築していたし、フィオーレのヨアヒムは、彼の時代までの教会史（旧約の時代と新約の時代）と、彼以降の時代に始まる新しい時代（聖霊の時代）に時代を区分して、それを誰もが受け入れていた。またルターの弟子たちは中世（ルターまでの時代）と近代（ルター以降の時代）に時代を区分していた。このルターの弟子たちの時代区分の他に、フランス人も独自の時代区分を行っており、その過程で1450年頃（公会議優位論を説いた公会議派の解散と教皇独裁制の開始）に始まり1517年（ルターによる宗教改革の開始）に終わる「ルネサンス Renaissance（再生）」という時代が登場して来たのである。いまでは誰もが「ルネサンス」を輝ける「黄金時代 golden age」と考えている。

しかし1450～1517年は、最悪の暗黒時代であった。都市が全欧で衰退を始め、仕事が無くなった職人や商人たちは、フランスでフランス王家と争っていたアルマニャック派に雇われるか、ドイツで「傭兵 Landsknecht」にならざるを得なかったような時代であった。各地に登場してきた専制君主が、伝統的に認められていた権利を踏み躪っていた。カトリック教会は公会議の混乱とフス戦争の結果その権威を失ってしまい、常軌を逸したことが罷り通るようになっていた。ゴシック様式の大聖堂に見られる怪物（彫刻）のような人物が教会の指導者になったり、聖人になったりしていた。彼らは側近に自分が掲げた功績を記録させて、列聖（教会に聖人として認めてもらふ）の機会を逃すまいと必死であった。フランス国王のルイ11世は、悪徳君主の1人であった。教皇は枢機卿を殺し、国王は自分の兄弟や父親を殺している。また神聖ローマ皇帝の息子が、イタリアの小さな都市で捕虜にされることもあった。スペインで異端審問が始まったのもこの頃だし、有名な魔女狩りの手引書『魔女への鉄槌 Hammer of Witches』が書かれたのも、この頃のことであった。当時のヨーロッパでは、王政・貴族政・民主

政の全てが腐敗・衰退して、専制体制が蔓延していたのである。

この最悪の時代が1813年以降、「黄金のルネサンス時代 Goden Age of Renaissance」と称賛されるようになった。1789年のフランス革命は、宗教改革が中世の暗黒時代を終わらせ、「近代 modern times」を切り開いたことを認めなかった。1517年にドイツのプロテスタントが開始した「近代 Neuzeit」が、1789年の「偉大な革命 Great Revolution」が持つ意義を軽減させることを恐れたのである。こうして「本当の近代 genuine modernity」は1789年に始まるとされることになった。それ以前のは、全て「旧い ancient」（「旧体制 ancien régime」!）とされることになった。しかし当時のフランスは、「新しさ newness」を掲げたプロテスタントの国々に囲まれていた。そこで重視すべき時代を少し前に移動させて、宗教改革で否定された宗教改革以前の時代を「素晴らしい時代の始まり great beginning to the more splendid age」とすることにしたのである。ルターの宗教改革が始まる以前から既に始まっていた聖職者の権威失墜の時代が中世と切り離されて、「世俗世界が宗教的束縛から解放された時代 period of alleged secular emancipation」とされることになった。「宗教的な放縦 religious laxity」が理由でギリシャ・ローマの古典古代が重視されるようになったことが、「15世紀の偉大な成果 greatest asset of Quattrocento」とされ、聖職者はギリシャ人やローマ人の服装を真似るようになった。たとえば教皇ユリウス2世はユリウス＝カエサルを気取っていたし、当時イタリアのパルマ地方にあった女子修道院の壁面には、ギリシャ神話の女神の格好をした修道女が描かれたりしていた。こうした異教復活のお陰で19世紀にギリシャが注目されるようになり、オリンピック大会が再開されることになるが、これを「人間中心主義 Humanism」が「復活 Renaissance」したと考えたのである。この現象は特定の個人の思い付きなどではなかった。こんな考え方が登場してくる以前、既にプロテスタントの衰退が始まっていたのである。かつてプロテスタントが有していた権威が失われつつあった。残酷な数々の事件や怪物（たとえばアレティーノ Pietro Aretino は有力者を脅迫して金品・美術品を手に入れている

た恥知らずだが、自らを「神の庇護下にある自由人 per la grazia di Dio uomo libero」と称していた)が登場した15世紀は、ポーマルシェの『フィガロ』が登場したフランス革命直前の時代とは無縁な時代であった。神聖ローマ皇帝カール5世の統治下で登場してきた新しい時代のことが忘れ去られていたのである。「ルネサンス」が登場してくる以前、既にルターが忘れ去られていた様子は、パリに住んでいたフンボルト Wilhelm von Humboldt が「古代 antiquity」・「中世 Middle Ages」・「近代 Moern Times」に関して書いたエッセー（1796年）によく現れている。フンボルトの言う「古代」には旧約聖書の時代は含まれておらず、「古代ギリシャ・古代ローマ」の意味しかない。彼にとって旧約聖書の舞台であったエルサレムは存在しないのである。そこで「中世」も「新しいエルサレム」と考えられたカトリック教会とは無縁の存在であった。「中世」は「よき趣味と科学が衰退した時代であり、その再生が実現したのはその後の時代のことである」。こうしてフンボルトは「人間中心主義」を尺度として採用することになった。しかしルターによる宗教改革の影響が無くなった訳ではなかった。なぜなら、彼が「近代」の始まりと考えるのは、後に「人間中心主義」の始まりと考えられるようになる1450年（公会議優位論を説いた公会議派の解散と教皇独裁制の開始）ではなくて16世紀だからである。そこで彼はこんな言い訳をすることになる。「中世は14世紀中頃から16世紀中頃まで続くことになる。なぜなら、100年以上も前から始まっていた科学復興<sup>はじ</sup>の成果は、このとき（1550年）になって初めて花開くことになるからである Da erst um diese Zeit die Folgen der mehr als hundert Jahre früher geschehenen Wiederherstellung der Wissenschafter recht sichtbar zu werden anfangen」（Werke, II, 24）。フンボルトは「ルネサンス Renaissance」史観の登場を、すでに予兆していたのである。カトリック教会について彼は丸で無関心であり、そこでルターによる宗教改革で「近代」が始まったことについては言及すらしない。「近代」の始まりは、あくまでも1450年なのである。こうして「人間中心主義」による歴史叙述から宗教が消えてしまうことになった。歴史家は修道士ルターによる信仰告白

に代えて、フランス革命を称賛することになった。こうして「ルネサンス」史観は、19世紀の進歩的な知識人にとって常識となって行ったのである。この新しい「時代区分」（1825年頃に確立する）は、まずフランスからイギリスとスイスに広まって行き、さらにイギリスとスイス経由でドイツとイタリアに広まって行った。スイスの美術史家ガイミュラー Heinrich von Geymüller は『ルネサンスの文化 Die Kultur der Renaissance in Italien』の著者として有名なブルクハルト Jaob Burckhardt との往復書簡の中で、「我々、ルネサンスの申し子 We citizens of Renaissance」という言葉を使っている。このようにイギリスの「保守党 Tories」・プロイセンの「貴族 Junkers」・スイスの「保守党 Conservatives」・オーストリアのカトリック教徒は、フランス革命を嫌悪していたにも拘らずフランス革命の「時代区分」を受け入れていたのである。フランス革命の「人間中心主義」（政教分離）は、既に1450年に予兆されていたと考えられるようになった。ニーチェ Friedrich Nietzsche やブルクハルトに影響されてアメリカの歴史家ベレンソン Bernard Berenson・レーダー Ralph Roeder も、400年前に消えて無くなっていた時代に実現したという「宗教からの知的解放 intellectual emancipation」を賛美するようになっていた。

「ルネサンス芸術 Renaissance Art」とか「人間中心主義」といった考え方を美術史家たちが批判するようになったのは、つい最近のことである（この本の初版は1938年）。たとえば大恐慌中に出版されたハーマン Richard Hamann の『美術史』（Geschichte der Kunst von der Altchristlichen Zeit bis zur Gegenwart, 2nd ed. Berlin, 1935）は、「ルネサンス芸術」という言葉を使っていない。「ルネサンス」という言葉すら使っていない。

こうしてフランス革命は有力な味方を失ってしまった。中世と近代を分ける分水嶺であったはずの「ルネサンス」が、発祥元であった美術史の世界から姿を消してしまった。有名な「ルネサンス」期の研究者であったレーダーですら、期待していた「本物のルネサンス real Renaissance」はこの時期には存在せず、「腐敗と絶望 decay and despair」しか存在しなかったと書

いている。1885年という早い段階にワグナー Richard Wagner の女婿トーデ Henry(Heinrich) Thode は、ブルクハルトらと違って「ルネサンス」は1200年にアッシジのフランチェスコによって始められた主張している (Franz von Assisi und die Anfänge der Kunst der Renaissance in Italien, Berlin, 1885)。我々も1200年に新しい時代が始まったということでは、このトーデ氏の主張に賛同するのに吝かではないが、キリストの5つの聖痕（十字架上でキリストが両手・両足・脇腹に受けた傷）が体に現れたという聖人（アッシジの聖フランチェスコ）がカトリック教会の「異教化 repaganization」に貢献したとは、とても思えない。「（神を否定した）人間中心主義のルネサンス humanistic Renaissance」が1200年に始まったとするトーデの主張は、語義矛盾でしかない。

第8章と第12章のポリビュオスの政体循環論、および第11章の「第2の教皇革命 Guelphic revolution」で説明したように、1450年から1517年までの時期は、995年（オディロによる修道院改革）から1517年（ルターによる宗教改革）まで続いた長い改革の時代の中で発生した例外的な時期であったことが判る。そのことを無視した歴史叙述が無意味であることは勿論だが、ここで言いたいのはそんなことではない。ここで言いたいのは、ある種の歴史家に見られる無自覚な自惚れである。彼らは自分が特有の偏見に囚われていることに気づいておらず、それでいて自分は如何なる偏見からも自由であると信じ切っている。自分が恵まれた立場にあることを忘れ、結局は手にした特別な社会的地位を失うことになるのである。

しかし相手が歴史家でないとすると、話は別である。歴史家でない彼らは「ルネサンス」神話を信じて莫大な資金を提供し、博物館を建て、大学に「ルネサンス」の講座を用意してきた。その結果、生み出されることになった盲目的な「ルネサンス」賛美を歴史の教科書から消し去るには、長い時間が必要になるであろう。否、それを完全に消し去ることは不可能かもしれない。なぜなら、「ルネサンス」賛美にも効用が認められるからである。ドイツの宗教改革に対する高すぎる評価を減ずることで、プロテ

スタント国民の反カトリック感情を弱めることに貢献しているからである。またルターによる宗教改革以前の「暗黒時代 darkness」(1450～1517)を「嘆かわしい中世 deplorable Middle Ages」と区別して、ローマ帝国・フランク王国・クリュニー改革・教皇革命・「第2の教皇革命」の全てを「中世」に包括してしまったルターたちの「間違い trick」を指摘することに成功しているからである。言い換えれば、「宗教改革に対する高すぎる評価を正す purified our denominational memory」のみに貢献しているのである。しかし「科学的な歴史叙述 scientific treatment」は、もっと厄介である。何時から何時までを「ルネサンス」期とするかは教科書によって様々だが、実際に深刻な問題として体験され、曆に「記念日 holiday」として残されているような出来事に、そのような曖昧さは無い。イギリスの詩人にして「ルネサンス」賛美の歴史家シモンズ John Addington Symonds は、『大英百科事典 Encyclopedia Britannica』(1911)に執筆した「ルネサンス」の項目の中で「ルネサンスの時期は特定することができない indefinite space of time」と書いている。ダンテの時代からミルトンの時代までなら、何時を「ルネサンス」と呼んでも構わないと言う。しかしそんなこと以上に大切なのは、「ルネサンス」という考え方が19世紀に登場して来たことなのである。このシモンズの説明からも、我々の指摘してきたことが正しかったことが判る

同じ様なことを、イギリス人も歴史の教科書で行っている。フランス革命を認めたくないイギリス人は、それに代わるものとして「工業革命」を登場させている。「ルネサンス」の場合も「工業革命」の場合も、「革命的であること revolutionary」より「漸進的であること evolutionary」を重視する考え方が前提になっている。もっとも、「斬新的な工業化 Industrial Evolution」とか「芸術と科学のルネサンス Renaissance of arts and sciences」という言い方をするならまだ許せる。「斬新的な工業化」なら、イギリス的な統治原理に反するというでフランス革命を全面的に否定し、それに代わるものとして「工業革命」を前面に押し出している訳ではないからである。また「芸術と科学のルネサンス」という言い方も、1453年のト

ルコによるコンスタンチノーブル占領や、印刷術の発明のような無関係なことを理由に挙げて、1499年とか1498年に「人間中心主義を否定する inhuman」(つまりプロテスタントによる神中心主義の)宗教改革が「人間中心主義 Humanism」を終わらせたとはまでは主張していないからである。ルターによる宗教改革が持った意味を矮小化することまではしていない。「ルネサンス」とか「工業革命」は、深刻な意味を持つ出来事として体験されて「記念日」にされた出来事と違って、「あとから意味づけ・命名された出来事に過ぎない It would be unfair to call them artificial; but secondary they are」。「公正さ candour」にも「偉大さ elementary greatness」にも欠ける出来事である。それは「人類の偉業が達成された時代 Great Year of mankind」として記憶されるべき出来事ではない。「ルネサンス」や「人間中心主義」をナイーブに信じてきた時代は、第一次世界大戦で終わったのである。1870年(普仏戦争に敗北してフランスの第2帝政は崩壊してナポレオン3世は退位し、パリコミューンも失敗してビスマルクによるドイツ統一が実現)から1914年(第一次世界大戦の開始)までの時期は、「近代の理想が実現した黄金期 golden fulfilment to the ideals of Modern Times」であり、ヨーロッパが「幸福な時代 care-free days」を満喫した時期と言えなくもない。中世を終わらせたと言う「ルネサンス」と同様、後世の歴史家はこの時期を「ヨーロッパに平和と安全があった最後の時代 epilogue to pre-War peace and security」と呼ぶことになるかもしれない。しかし、ニーチェがこの時期に「神は死んだ Gott ist tot」と言っていたことも忘れるべきでない。15世紀にルターも似たようなことを言っていた。「神は手にしていたカードを投げ出してゲームを続けることを拒否した God threw the cards on the table and refused to play the game any longer」(神が奇跡を起こすことは、もうない)。

## 第5節 「細部に拘る microscoping」か

「遠い過去を見通す telescoping」か

この章では批判的なことばかり書いてきたが、それは「創造的な歴史の

瞬間 creative moments in history) に対して敬意を払うべきだと考えるからである。「科学的」と称する歴史家の偏見も批判してきたが、大切なのは「創造的な歴史の瞬間」を実際に体験した者に語らせることである。たとえばランケ Leopold von Ranke は、歴史家や研究者が後から付け加えた解説は評価しない。歴史家は、「創造的な歴史の瞬間」を体験した者に直接、語らせるべきなのである。そうすればシュペングラーのような過ちを犯すことも無くなる。

私は日々・月々・年々の出来事で歴史書を一杯にしようとする同僚諸氏と違って、もっと長期的な視野で出来事を捉えるようにしている。なぜなら、いま読者が関心を持っているのは日々の出来事などではなく、100年あるいは1000年も続く出来事のことなのである。歴史家も、そんな読者の関心に沿った歴史を書くべきである。読者はアルフレッド大王の秘書官の日記とか、ウェブスター Daniel Webster がマサチューセッツ州やニューハンプシャー州の友人と交わした私信を読みたいとは思わないはずで、「もっと大きな歴史の流れ bigger unit of history」に関心を持つはずである。そして「もっと大きな歴史の流れ」を把握するためには、「国民史家 national historian」が好んで利用する日記・私信・記録などでなく、むしろ「記念日 holidays」・「記念碑 monuments」・「風俗習慣 fashions」・「演説で使われる言葉 words and names of speech」などを重視すべきなのである。こうしたものが「国民の記憶」を形成する上でどのように影響したか、それが「国民性 national character」の形成にどう影響したかを教えることで、歴史教師は無意味なほど細かすぎる史実探求も、安易で無責任な大局史観も避けることができる。

確かさを大切にす歴史家が「細部 detail」を追求しがちなものに対して、「面白さ thrill」を求めがちな素人の読者は「文明の行く末 march of civilization」のような「歴史の大きな流れ broad view」を知りたがるものである。「細部」と言えば、ここ何千年間に起きた事実は無限にあり、その全てを知ることなど不可能である。それも初期の何千年間なら、まだ大枠

で捉えることも可能かもしれない。地質学の「洪積世 diluvium」とか「石器時代 stone-age」といった万年単位の捉え方がそれである。このように同じ人類史でも、現代からの時間的な距離によって、「細部に拘る」か「遠い過去を見通す」かの違いが登場してくる。「欧米共通の歴史観 common historical perspective」を作り上げるのを妨げているのが、この問題である。

いま我々の思想や行動の仕方に影響を与えている「目前の現在や遠い過去を正しく評価する attacking our own immediate present and past」ためには、この「細部に拘る」と「遠い過去を見通す」の対立を何とか解決する必要がある。そこで私が提案したいのが「大局を見る macroscopical」方法である。この方法によれば、「記念日」・「記念碑」・「風俗習慣」・「演説で使われる言葉」等がどれほどの「生みの痛み birth throes」を経て生まれ来ているか、言い換えれば「国民教育 national education」の在り方を決めた革命の実態がどんなものであったかを知ることが可能になる。その結果、良心的な歴史家を励ますこともできるし、無責任な作家どもが調子に乗りすぎるのを防ぐこともできる。歴史家と作家が協力できれば最高だが、それが出来なくても、せめて「細部に拘り無意味な事実を収集するだけに終わることを避ける、あるいは事実に根拠づけられない歴史法則を主張することを避ける avoid the Scylla of disordered detail and the Charybdis of meaningless generalities」くらいのは出来そうである。

「欧米に共通の歴史 unity of man's history」を再認識し、かつ個人にその貴重な体験を語らせることが出来ればと願うのみである。神が「人を創ろう」と言ったとき（『創世記』1:2）、「歴史を作る人間、様々な種類の人間 historical man, the varieties of man」を創り、その全てに自分の体験を語らせる積りだった筈である。全ての種類の人間・全ての部族・全ての国民は、それぞれ体験を語るために歴史の舞台に登場してきた。彼らは新しく名前を与えられ（もしくは新しい名前を自ら名乗り）、自分たちが解決すべき問題を言葉にしたが、こんなことが出来るのは人間だけである。こうして「革命前 before」と「革命後 after」が歴史に登場してきたのである。

## 第17章 革命の将来

### 第1節 個人の生の声を聴くべし

この本の構想は20年以上も前に（バーマンの「序文」によると1917年）、ベルダン Verdun の塹壕で冬の朝、思い付いたものである。その後、何度も考えたり、訂正を加えたり、忘れてしまったり、また思い出したりして、やっと読者の前に本の形で示すことができた。これで私も一息つくことができる。肩の荷を読者の皆さんに渡すことが出来たからである。著者である私も読者である皆さんも、ともに同じ革命を経験してきた者の子孫である。同じ革命経験者の子孫として、今後の指針として役立ちそうな結論を一緒に引き出したいものだと願っている。我々の父祖たちが情熱と信念で生み出してきた長い革命の歴史から、どんな結論を引き出してくることが出来るのだろうか。それが信用できるものになるか否かは、それがどこまで「我々の本性 our own nature」に適っているかに掛かっている。もしそれが「政治とまったく無縁のものであったら quite independent from politics」、それは現実とは無縁な「絵空事 mere theory」に過ぎないということになる。しかしこの本に書かれていることは、「皆さんのこと de te fabula narratur」でもある。つまり「人生の大切な時期には in the volcanic hours of his own life」、*「だれでも any real man」* 革命の渦中にある人間と同じように行動するはずだということである。革命は「恐ろしい extreme and terrible」。しかし、そんな時にこそ人間は平穏な日々には見せない「本性 unity of human nature」を見せるものである。いま流行りの行動心理学 behaviorism は、逆に平穏な日々を過ごしている人間から結論を引き出しているので信用できない。

物理学者は「物 things」について語る。なぜなら「物」は自らについて語る事が出来ないからである。また数学者は、数字と方程式を使って「目に見えないこと mysteries of the matter」を説明する。しかし人間は「物」でもないし、「目に見えないこと」でもない。人間とは、つまり我々自身の

ことである。他者が本人に代わって「本人の問題 his own secret of existence」を語ることはできない。「人間を理解するには、本人の言葉を直接に聞くしかない Man can only be understood by listening to his own word」。そのことがよく判るのが、革命の時である。革命の試練<sup>なか</sup>の中で、人間は初めて「本気で洞察力を獲得する reaches the height of its sincerity, penetration and clairvoyance」。個人の場合も同じで長い人生のうちに、1回や2回は本気で自分のことを語る時が来るものである。

セールスマンや兵士が自分ほど優れた者はいないと考える「自己陶醉 self-complacency」と、これを混同することがあってはならない。シェイクスピアの戯曲（『ヘンリー4世』・『ウインザーの陽気な妻たち』）に登場して来る、陽気で自慢好きの老騎士フォルスタッフ John Falstaffではなく、『ヨハネ黙示録』（1:17）で「私はその者を見た時、まるで死んだかのように、その足もとにばったり倒れた」という聖ヨハネを念頭に置くべきである（そのとき聖ヨハネは、キリストの幻影を見ていた）。日常生活で似たような例を挙げるとすれば、夫となるべき男に対して「結婚に同意します Yes」と答えて両親の家を去る花嫁であろう。この一言に花嫁は、自分の人生の全てを託すのである。同じ言葉でありながら、この一言は「無意味なおしゃべり gabbling」とは無縁で、『創世記』（1:3）で「光あれ」と言った神の言葉にも相当する「神聖な divine」言葉である。革命の「雄叫び cry」に似て、この一言は英雄的な行為でもある。これは女性の将来と過去を決める「取り消し不能な心からの irrevocable, true」言葉なのである。

このような言葉を発する機会は、個人の場合も集団の場合もそう多くない。日常生活に於いては、何事も「中途半端なまま half measures and half lights」で済むからである。危機的な状況のなかで自分の生死が掛かってくると、人間は「冷徹な計算 cold reason」・「日常の使い慣れた言葉 conventional language」・「関わり合いを持ちたくないという気持ち fear of committing ourselves」が消え失せ、「紛れもない真実 unmistakable and unique sounds of truth」を受け入れるようになる。

これだけでも十分に驚くべきことだが、更に長いあいだ当然視されてきた慣習を拒否する、小さな集団の「雄叫び outcry」が暗闇を照らす最初の言葉となることがある。このとき個人も集団も、それまで心に秘めてきた言葉を発するのである。歴史を変えるべく真剣勝負に出るのである。

絶望と高揚感の中で、初めて人間は自らを顕わにする。このとき哲学者などに出番はない。人間の「魂 soul」が「雄叫び」をあげる瞬間に、その意味を解釈したり注釈を加えたりする哲学者など呪われてあれである。出来事の背後を探ろうとする哲学者や社会学者も呪われてあれである。そんな時に我々がやるべきことは、「雄叫び」に「よく耳を傾ける listen better and better」ことしかない。しかし、それが相当に難しい。日常生活に慣れた国民は、偉大な出来事の「深刻さ sincerity」に尻込みをするからである。日常生活の虚構や楽しみに気が取られて、目前の出来事の「隠された意味 deeper symbols」に気づかない。安っぽい噂話に興奮する余り、「本当に大切なこと true creations of life」に耳を貸さなくなるのである。しかし危機的状況が目前<sup>もくぜん</sup>に迫ると、人間は「原始的な感情 simplest emotions」を取り戻して「運命の轍 ruts in which the car of destiny is driven」に飛び込んでいく。

つまり、こういうことである。偉大だとされている出来事の周辺とか背後を探る必要などなく、偉大な出来事は偉大な出来事として受け入れたら良いのである。偉大な出来事が起きた後に生まれ、その出来事の影響下に生きている我々は、出来事の表面だけを見ていずに、「その奥底から湧き上がってくる声 voice from the depths」に耳を傾けるべきなのである。ふつう我々は「表面だけを見て内部を見ようとしない judge depth by surface-standards」が、それは「地球のことは良く判っていると称する者 globe-trotter」の「自己陶醉」に過ぎない。『ジョン＝ブラウンの死 John Brown's Body』でベネ Stephen Benét が警告している様に、「あなたが見ている表面は実はあなたの心の奥底に住む魔物であり、(幸運を齎してくれる)眠れる女王(美女)なのである」。

「預言者が炎を前にして、恐怖に怯えたり炎を崇め奉ったりする時、あな

たは預言者の様に、呪いの様だとか恵の様だとかとは答えず、炎を在りのままの姿で受け入れるべきなのである」。

そうすれば希望の夜にも悲しみの夜にも、「奥底から湧き上がってくる声」を聞くことができる。そうすれば過去から続く希望と恐怖に拘束され続けるか、それとも過去を葬り去って「神に忠実な者だけに与えられる新しい国 the new country of the soul given to the faithful by the Lord over Life and Death」に入ることが出来るかが見えてくる。

## 第2節 国民同士の対話にも耳を傾けるべし

「個人の声」だけに耳を傾けていると、それが全てだと誤解するかもしれないが、既に指摘したように、もっと大切なことが存在する。それはヨーロッパ人同士がお互いに交わす対話である。たとえばイギリス人が「下院 Lower House」を重視することにしたのは、ドイツ人が「高位 Hoheit」を重視したからであった。またフランス人が「良識 bon sens」を重視したのは、既にイギリス人が「イギリス連邦 British Commonwealth」で「常識 common sense」を重視していたからであった。さらにドイツ人が「父権 paternal methods」を重視したのは、イタリア人がカトリック教会の「母権 maternal ways」(マリア信仰)を重視したからであった。またアメリカ人が「現代に似た情勢はノアの時代以来なかったことだ」と言ってノア Noah を称えるのは(トマス＝ペイン『コモンセンス』岩波文庫、98ページ)、イギリス人が自分たちを「神の選民 chosen people of Abraham's seed」と考えていたからであった(アメリカ人は、自分たちこそノアのように新しく国造りを始めた「神の選民」であったと主張)。さらにソ連時代のロシア人は、「自由人 L'homme libre」を自称するフランス人「ブルジョワ bourgeois」の欺瞞を暴くべく、労働者を動員したのである。

このように後<sup>あと</sup>から起きた革命は、先行する革命の主張に対抗して新しい主張を掲げることになる。だからと言って後から起きる革命が「真剣さ

sincerity」に欠けるとか、「自発性 spontaneity」に欠けると言うことにはならない。なぜなら、後から起きる革命が先行する革命に対抗して新しい主張を提示するとき、まだ権力は手にしていないからである。教皇グレゴリウス7世の『教皇令 Dictatus Papae』は教皇の独り言に過ぎなかったが、8世紀経つ間に大きな成果を生むことになった（6つの革命を引き起こす切っ掛けとなった）。またルソーの『告白録 Les Confessions』はロベスピエール登場の切っ掛けになっているし、ハッチンソン大佐 Colonel John Hutchinson の熱心な祈り（大佐は熱烈なピューリタンであった）は、クロムエル登場の切っ掛けになったのである。こうした歴史的事件を、嫉妬心・模倣・依存関係のような「安直な cheap」人間的弱さで説明するのは間違っている。こうした国民同士の対話は、注目に値する重要な出来事なのである。

偉大な革命は、ヨーロッパ人の一体感を試す善い機会でもあった。ダーウインの「適者生存 survival of the fittest」理論は国民同士の優劣競争を煽るような「社会ダーウイン主義 Social Darwinism」を生み出したが、偉大な革命はそんな理論を認めておらず、かつてヨーロッパ人が共通の枠組み（カトリック教会と神聖ローマ帝国）に縛られていたことを示しているだけである。偉大な革命は、ヨーロッパが国民国家に分断されていることを認めようとしなかった。もともと祖先を共通にしていた者が、ただ分かれたのが国民国家であった。

どの革命も国境線によって遮られることはなかった。植物と同じで、根づくためには国民国家という苗床を必要としていたが、その果実はヨーロッパ全域で様々な国に輸出されて行ったのである。ドイツの神学・イギリスの統治制度・イタリアの絵画・フランスの文学などは、それぞれの国が人類全体のために貢献してきた成果であった。

### 第3節 自然の摂理に抗して

人間は一生の間に、様々な段階を経て成長していく。子供・青年・大人・

老人と変わっていく訳だが、人間はこの年齢の違いが生み出す可能性を最大限に利用している。年齢の違いによって組織の在り方も違って来るからである。紀元1000年のとき皇帝が支配していたのは、年齢の違いを無視した組織（部族制）であった。しかし、その900年後には、皇帝は年齢の違いをうまく使って支配していた。

教皇庁・イタリアの自由都市・ドイツの役人制度・イギリスの議会制度・フランスの民主制度・オーストリアの帝国・ロシアのソ連邦は、人間が老人・母親・父親・夫・妻・息子・娘と、違った成長段階にあることを利用して作られていた。「ヨーロッパは諸国民の家族 Europe a family of nations」と古くから言われているが、本物の家族をイメージすべきではない。年齢による役割の変化や家族構成の違いは、「国民性 national characters」の違いとして現れて来るからである。人間には、老人もいれば子供もいる。また、男もいれば女もいる。そこでイタリア・フランス・オーストリアの文明の在り方を「女性 womanhood」に例えるのも、1つのやり方である。人間には男性的な側面と女性的な側面が存在するからである。イタリア人やフランス人を「女性」に例えたからと言って、別に彼らを侮辱している訳ではない。天才的な芸術家は、尋常でない構想力や製作能力を有している。つまり芸術家は人間として無限の可能性を秘めているのである。しかし、それでも彼らは「どちらかと言うと女性的 nearer to the feminine side of life」である。彼らは「受動的で神秘的で動物的であって receptive, magic, creature-like forces」, 「我らが母なる大地 Sister, our Mother Earth」(聖フランチェスコ『太陽讃歌 Canticle of the Sun』より。第11章：第7節を参照)に深く根差して生きているからこそ、天才なのである。だからこそ「男らしい芸術家 virile artist」でも、花嫁や母親のことを「甘ちゃんのダメ女 spoiled flapper」より上手く描けるのである。芸術家に限らず、同じことは聖職者や思想家についても言える。また政治家・探検家・兵士は「男らしさ masculine elements」が求められるが、ドイツ人女性は、「女性」らしさを失うことなくドイツ人の「家父長主義 paternalism」を体現することもできる。

それぞれの革命を精査してみると、どの革命も無視され危機に直面していた「人生のそれぞれの時期 life-cycle」に対応して、新しく「制度 national institution」作りをしていたことが判る。そのために、「形の定まらない人間 plastic humanity」を文化的な特徴を持った国民に作り変えるのである。

たとえば「老人 old age」が少数派であった「教皇革命」の時期には、意図的に「老人」を作り出すことが行われていた（第10章：第2節「遠い過去に投影された新しい未来」を参照）。その後の革命は「老人」から母親と父親・男と女・娘と息子と世代を遡って行って、最後のロシア革命のときの労働者は、出身地が特定されない20歳の男性の革命家で、金遣いの荒い息子ということになっていた。しかし、これは「勝手な想定に基づく革命 arbitrary revolution」であって、そのお陰でロシア革命が成功することは無かったのである。革命は、「人生のそれぞれの時期」に上手く対応した形で起きないと成功しない。「人生のそれぞれの時期」が、革命の形で「再現されること representation」を要求するからである。「人生のそれぞれの時期」が順番に次の時期の登場を要求するのである。こうして革命は「意図的に conscious」「老人」から「人生のそれぞれの時期」を逆に辿り、一連の事業を完結するのである。

革命に切っ掛けを与えることになった「靈感 inspiration」の中身は、革命ごとに違っている。たとえば教皇革命は教皇の「聖職者 Spiritual」意識が切っ掛けになっており、ドイツ革命は「新しい教え neue Lehre」を説くことになった「精神 Geist」、イギリス革命は「公共心 Public Spirit」、フランス革命は「靈感 esprit」、ロシア革命は「労働者の階級意識 Class Consciousness」が切っ掛けになっていた。中身は違っても、革命の切っ掛けになったのは「靈感」であったということでは、どれも同じである。もっとも、革命の終わり頃になって現われてくる「本能 instinct」や、人種論的・ファシスト的な反階級意識が生み出した「靈感」は、これとは別物である。

違った「靈感」によって違った革命が登場しているが、今後も革命は起こり得る。なぜなら、まだ人類が死に絶えることは無いからである。で

は、その革命はどんなものになる可能性があるのか。すでに見てきた通り、地球規模の経済的な統合が進行すると、過度の商業化や「民族間の対立激化 disintegration」と均衡を保つため、遠い過去の「部族的な組織 tribal organization」が復活してくる。小さくなる一方の地球は、技術的にも経済的にも一層の協力関係を人類に要求するようになるはずである。そこでバランスを取るために「全ての人間に共通の元型 primitive archetypes of man's nature」が復活してくる（「元型 archetype」とはユング Carl Gustav Jung の言葉）。

ユングはアメリカやヨーロッパの精神病患者が、インド人・中国人・マレー人とも共通する幻覚や妄想を抱くことに気づき、これを「元型」と呼んだ。このユングの指摘は重要である。なぜなら、キリスト教は「揺り籠の中の赤ん坊 child in its cradle」（生まれたばかりのイエス＝キリスト）を信仰の対象にしているからである。キリスト教が世界中に広がり、イエスの生き方が人間のモデルとされるようになった。イエスは33歳で処刑されて、成熟した大人として生きたことは無かった。そのためにキリスト教会が「老人 old age」・母親・父親の世代を象徴する制度を創るとき、イエスの生き方は基準にできなかった。そこで1075年のグレゴリウス7世による教皇革命（意図的に聖職者の「老人」化を実現）、インノケンチウス3世が枢機卿会議で『帝国の現状に関する考察 Deliberatio de statu imperii』と題する演説を行った1200年のカトリック教会の「母教会 mother church」化（第11章：第1節「教皇あつてのイタリア＝ルネサンス」を参照）、1517年のルターによる宗教改革でドイツに「家父長的な国家 paternal state」が登場したことなどは（第7章：第4節「ドイツの役人」を参照）、イエスの生き方を基準にした批判を受けることが無かった。とくに聖フランチェスコが「母教会」に寄せた信頼は絶大であった。教皇革命・イタリア革命（インノケンチウス3世による）・ドイツ革命（ルターによる）・イギリス革命（「準貴族 gentry」による）の全てが、キリスト教から「靈感」を得ていたのである。「キリスト教に基づく良心 good conscience granted by Christianity」に依拠して革命を遂行していたのである。

ところがイエスが死んだとされる年齢に近くなってくると、様相が一変することになった。フランス革命とロシア革命に対応した「人生それぞれの時期 life-cycle」はイエスが生きた時の年齢に近く、イエスの生涯を無視できなくなったのである。イエスはキリスト教徒にとって「死後の復活 re-birth」を象徴する「普遍的な universal」な存在であって、ロシア革命に「靈感」を与えた若いプロレタリアートや、フランス革命に「靈感」を与えた「自由な天才 liberal genius」を超えた存在であった。そもそもフランス人が大切に考える芸術家や作家は「世俗の secular」存在であって、イエスとは無縁である。彼らは、むしろギリシャ神話に登場してくるプロメテウス・ヘラクレス・アルキビアデスなどの英雄たちと比較すべきなのである。またロシア人はイエスを裏切ったユダを崇拜していたが（第4章:第18節「裏切者のユダ」を参照）、そうすることでロシア人はイエスとの関係を断ったのである。ユダは「現実を大切にする者 realist」であり、独裁者になることを夢見ていた。そんな人物であったからこそ、ユダは15～21歳の若いプロレタリアートを組織することを夢見ていたロシア人に「靈感」を与えることが出来たのである。

だからと言って、フランス革命やロシア革命がキリスト教と無縁だった訳ではない。むしろキリスト教的な考え方に助けられており、またキリスト教が理想としていたことを実現しようとしていた。「キリスト教徒 any member of the Corpus Christi」の義務の1つに「敵 other forces of humanity」を助けるということがある。ロシアの無神論者（共産黨員）が信者たちと和解することができたのは、そのお陰であった。今後、世界が1つの経済圏を形成するようになったとき、キリスト教徒と無神論者が協力することも可能になるはずである。また「非キリスト教徒 un-Christians」も「地球上で進行しつつある一体化の実現 process of reimplantation of every branch of mankind into the one tree」に貢献することになるはずである。教皇革命から第一次世界大戦までの1000年間に、分離・対立していた各国民は1つの世界を構成するようになっているからである。

「少子化の世界 senile world」で生き残るためには「子沢山の時代 age of “childhood regained”」（ミルトンの『楽園の回復 Paradise Regained』を振った表現）を再現する必要がある、「白人 white man」に「抑圧してきた本能 buried instincts」たる部族時代の生き方を取り戻して貫うことが必要になるかもしれない。ここで言う「少子化 senility」は文字通りの意味である。一人っ子家族・老齢年金・産児制限・病死の減少で、再び若者が少数派となりつつあるが、もしこのまま何の対策も講じられなければ1000年前、教皇グレゴリウス7世の時代に聖職者が「名誉老人 honoary old men」とされたような対策が必要になってくる。大人3人に対して子供が1人しか居ない現状では、子供の様に踊る・行動する・忘れる・夢見ることが憧れの的とされるようになってくる。20歳までが「大人 old age」になるための準備期間と考えられていたが、それが大切にされるべき時期と考えられるようになってくる。世界中で「子供崇拜 cult of childishness」が広まるのである。とくにドイツでは、そんな傾向が300年間も続きそうな気配である（お陰で、伝統的な「父権 paternalism」が弱まりつつある）。若者の力を必要としているドイツでは、「子供崇拜の元型 archetypes of childhood」と「原始時代 primordial dawn」の再現、言い換えればゲルマン部族の「通過儀礼と異教の犠牲祭 rites of intiation and pagan sacrifice」が復活しようしている（ヒトラーユーゲント!）。しかし世界経済の一体化がまだ実現していない現在、この「試み dream states」は破滅を意味する。

合理性を欠いた非現実的な神話や先史時代の魔術を復活させるためには、生産活動を継続できるような世界規模の組織が食料や住処を保障することが必要である。現在のドイツに戦争遂行能力があるとは、とても思えない。プロレタリア革命の可能性に直面したナチ党は「階級のない国民 classless nation」形成を目指したが、彼らが実現できたのは「原始的な部族 primitive tribes」の復活でしかなかった。ヒトラーは平和を約束しているが、それを実現するためには彼らもゲルマン部族のように森に帰る必要がある。その可否を決めるのが「普遍的な人類史 universal history of mankind」を

代表するユダヤ人である。ユダヤ人なら国際的な生産組織を作り上げて戦争を防ぎ、ドイツ人に「部族ゴッコの場 playground for tribal primitivism」を用意することができる。「世界的規模の経済体制 world-wide economy」の存在こそが「原始的な元型 primitive archetypes」復活のための前提条件である。また「原始的な元型」復活のためには、「抑圧してきた本能」たる部族時代の生活を復活させることが必要とされており、ナチ党がやろうとしていることはイギリス革命・アメリカ革命・フランス革命のような「哲学的 philosophical」な革命でもないし、教皇革命・イタリア革命・ドイツ革命のような「キリスト教的な Christian」革命でもない。

もはや「理屈で説明できるような革命 deliberate or logical revolutions」の時代は終わったのである。「原始時代の本能に逆戻り relapses into instinctive phases of primitive life」して、「元型を再生産する reproduction of archetypes」しか方法が無いのかもしれない。将来登場してくるのは、特殊なタイプの「元型」であるように思われる。

「それは普遍的なタイプとは逆の、文明の退行を意味するかもしれない A relapse toward the dawn of civilization is opposed to any world-wide generalization」。「特殊であること、特定の地域や集団にしか通用しないこと anti-universal and limited to a single local or social group」を誇りとするようなタイプの文明である。経済体制は世界的な規模であっても、「神話は地域限定的 mythology regional」である。世界的な経済体制を構築するときは、「多くの部族の様々<sup>さまさま</sup>な反応に対応する必要に迫られる to be bought off by a great number of tribal reactions」ことになるであろう。これまでのような「聖職者による革命 clerical revolutions」や「世俗革命 secular revolutions」が起きることはない。しかし、かつて教会統治や国家統治が王政・貴族政・民主政を経てきたように、「将来の部族 tribes of the future」もこの3つの政体を繰り返すことになるかもしれない。

もしそうなれば、現在のイタリアやドイツの独裁政は崩壊することになる。ただし、それはシュペングラーが考えたような四季とは無関係に展開

していくはずである。シュペングラーが言うように、人間が作る文明が人間と無関係に春・夏・秋・冬と永久に繰り返すことなど有り得ない。なぜなら、「人間は自然現象に抗して英雄的な努力を払うことができる man answers the threats of nature by heroic efforts which counterbalance her eccentricities」からである。まず「文明の春 spring of civilization」には、聖職者を「名誉老人」にすることで危機を乗り越えてきた。「文明の冬 its character of an end and a terminus」と思われる現在、「若者 youth and boyhood」の復権のために大変な努力がなされている。「重力に抗して進む力 power of going up-stream」を持っているのが人間である。それをシュペングラーの様に、四季の変化に例えるなど論外である。「自ら作り上げた慣習に反して行動することができる go against the inertia of his own habits」のが人間なのである。

人間は宇宙にできた裂け目を修復する能力を与えられている。制度崩壊の危機に直面したりすると、国民なり個人はその進行を止めようとする。人間は重力に抗して坂道を登ることができる。「自然現象 inertia inherent in nature」に抗することができる。水は低きに流れて海に達するしかないが、人間は山を登り、山の反対側にある道を降りて行くこともできる。ここに、自然界における人間の独特な地位を見ることができる。水と違って、敢えて重力に抗して上に登っていくことが出来るのである。年齢の進行を一時的に止めて、人間の生理的な制約を排して将来の世代のために生活の場を用意することも出来るのである。

#### 第4節 必要とされるときに必要なことをなすべし

革命が成功したのは、「必要とされていたこと necessity」を実現したからであった。本物の政治家なら、本能的に何が必要とされているかを感じ取れるはずである。個人にとっても国民にとっても、何が必要とされているかを考えずに行動することは死を意味する。他者に不必要な行動を強制するのは、いかさま師か独裁者だけである。偉大な革命なら、かならず必要

とされていたことを実現する。そうすることで偉大な革命は専制君主の気紛れを排除してきたし、無政府状態の発生を防いできた。

何が必要とされているかは、善悪の判断を超えたところで決まってくる。「どうしても必要とされていること inevitable necessity」が未来の在り方を決めるからである。アメリカ史でいう「天命 manifest destiny」（アメリカ人が北米大陸を征服することは神より与えられた使命であると考えられた）のようなものである。いま直面している困難も「聖なる目的 sacred goal」のために耐えていれば、やがて未来からの一条の光がそれを希望に変えてくれる。何が必要とされているかを考えるときは、過去のことも未来のことも考慮に入れなければならない。ところが善悪の判断しかできない「道学者 moralist」は、歴史上の出来事や政治の問題を考える時、過去や未来を念頭に置くことをしない。しかし「創造的な者 creator」なら「道学者」と違って、政治の問題を道徳の問題と混同することはしない。何が必要とされているかを的確に判断することができる。

現実から目を逸らさない者なら、何が必要とされているかよく判るはずだし、良心に従って実現のために努力するはずである。ただし「道学者」のように、目の前の現実を無視する者には、過去・現在・未来の違いが判らなくなる。子供や未成年者には判らないことかもしれないが、真面目な大人なら将来のために変化を齎す<sup>もたら</sup>ことが、善悪の問題とは別であることくらい判るはずである。過去・現在・未来の違いに関係なく「善とは何か」などと考える夢想家は、物笑いの種になるだけである。「時宜を得ていること timeliness」が全てである。丁度よいときに登場してくる現実には「善き good」現実であり、登場するのが早すぎたり遅すぎたりする現実には「悪い bad」現実である。この「善し悪し」の違いは、「時機が熟しているか ripeness」それとも「時機が熟していないか immaturity」の違いでもある。注意深い者なら、改善のヒントに気づくはずである。その1パーセントでも実現しようと全力を尽くせる者は「賢人 wise man」の名に値する。しかし「100パーセントの道学者 always idealist」は無力である。「現実とは抽象的



人類の始祖アダムに命を授ける複数形の神：神の周囲に天使や聖霊が控えているのが見える。天使や聖霊をアダムの側に移した神は単数形になる。教皇庁のシスチナ礼拝堂にミケランジェロが描いた図

な善悪問答を嫌う Reality hates the abstract good」からである。

現実を改善するためには、それが「必要とされているか」とか「時宜を得ているか」といったことを判断する必要がある。「時宜を得た形で」「流行らせ bring into fashion」, 「関心を持たせる create a fresh interest」ことができれば、「どうしても必要なこと」であることが判り、それは現実の一部となる。

「流行り」は「世論の動向 tendency」そのものであり、それが「時宜を得て」いれば「抵抗することは不可能であり irresistible」, 「天命」ということで「未来に向かう力 driving force into the future」となる。未来の在り方を決める上で重要なのは「必要とされていたか否か」であって、「流行りか否か modes and fashions」は「時宜を得ているか否か」を判断するための手掛かりでしかない。

「真に必要とされている行為 true action」は、いわゆる「倫理問題 ethics」とは無関係である。既存の善悪の判断基準は、「生死に関わる様な大切な問題 vital issue」を判断する時は役に立たない。なぜなら、「生死に関わる様な大切な問題」は「結果が見えない it leads into the unknown」からである。結婚は善か悪かなどと考えること自体、馬鹿げている。結婚は善に決まっ

ているからである。しかし、「必要なことか否か Is it arbitrary or necessary?」が問題になった場合は判断を下さなければならない。もし誘拐犯が侵入してきたら、私は躊躇なく銃で撃つ。それが善か悪かを判断する基準など存在しない。私は、それが止むを得ない行為であったことを説明するだけである。ただ恐怖に駆られたから撃ったでは説明にならない。子供が誘拐されるかもしれない可能性を示す必要がある。撃てたから撃ったでは、侵入者を撃退できなかったのと同じことである。腰抜けか腰抜けで無いかを判断する基準は、それが「必要だったか否か」だけである。緊急事態に直面した時にどう行動するかによって、人類の将来との関わり方が決まってくる。

「深刻な意味を持つ行動 crucial actions」がどんな結果を招くかは、我々に判らない。成功するか否かを我々は予め知ろうとするが、それが上手く行った試しがない。予定していた結果が実現することは稀である。もちろん実現することもあるが、それは不測の事態が起きる可能性を予め排除しているからである。厳しい交通規制下での車の運転、柔軟性に欠ける時間割の授業、きっちり10時半に終わることになっている集会などは、新しい未来の登場を可能にするやり方ではない。いずれの場合も、予め決められた行為を繰り返しているに過ぎないからである。そんな人生に未来はない。同じことが繰り返されるだけで、そこに「新しさや本当の意味での未来 novelty and real future」は存在しない。

女の子に結婚を申し込むには、それなりの覚悟が必要である。また住む場所を変えたり難しい本を読み始めたりする時も、覚悟を決めて取り掛かる必要がある。ところが女の子にデートを申し込んで、お茶を飲むために車で喫茶店に乗り付けたり、『サタデー＝イブニング＝ポスト Saturday Evening Post』（アメリカの一般的な総合雑誌）を読む場合は、とくに未来が掛かっている訳ではないので、左程の覚悟は必要とされない。70歳の男にとって新しい人物との出会いは、さほど重要な意味を持たない。残された時間が少ないからである。ところが男の子が女の子とデートに出かけると

きは、場合によっては自分の未来が変わってしまうかもしれない。デートが突如として単なるデートでなくなり、彼の人生は変わってしまうかもしれない。そうなれば、デートで守るべき約束事など無意味になってしまう。こうして全人生を掛けたゲームが始まることになる。ジュリエットとのデートで伝統的な約束事を破ったロメオは、悲劇的な恋愛感情をその理由に挙げることだろう。彼らは未来を生きることにしたのである。それくらいのことなら、恋愛感情と無縁なオールドミスでも判ることである。悲劇の主人公は、過去の伝統と現在の約束事を捨てて未来に生きるのである。ところが道化芝居で笑いのネタにされるのは、古臭い慣習である。そこにサプライズはない。あるのは既知の筋書きだけである。悲劇と喜劇の違いは、主人公が過去を志向する人物か未来を志向する人物かという違いと、物語の筋書きが過去のものか未来のものかという違いだけである。

残念なことに政治の世界で見かけるオールドミスは、詩の世界で見かけるオールドミスほど利口でない。しかも政治の世界で見かけるオールドミスは、男性的である場合が多い。彼女たちは、ロメオとジュリエットのような未来志向の恋愛劇が政治の世界にも存在していることを認めない。しかし既存の秩序から抜け出ることを願う国民や個人を動かしているのは、恋愛感情や憎悪なのである。変化が必要とされているところでは、合法か非合法かと等といったことは問題にならない。もちろん、気紛れな大衆感情や群衆の暴力行為は許されるものではない。無責任な政治屋はそれを合法化したがるものだが、形だけの合法化は公然と法律を無視する以上に卑劣な行為である。現在は形だけの合法化が盛んに行われているが、既存の秩序をただ長引かせるだけの奇策は未来の創造には貢献せず、むしろ未来の可能性を排除する危険な行為である。

責任感ある人間なら、「本当に必要とされていること real demand」に応えようとするはずである。人間の生死に関わる問題を解決できた英雄は、嘗てはギリシャ神話の様に「神々 gods」と呼ばれていた。それが我々のような場合は、「人間 man」なのである。ところが奴隷はそうではなかった。

奴隷には名前もなく性別もなく、奴隷は自らの意志で語ることもない「物 thing」に過ぎなかった。では「物」とは何か。対話に登場してくる「問い questions」と「答え answers」、これが「物」である。なぜなら、「対話の題目 theme」は「客体化された世界 objectivated world」を構成する「客体 object」の1つに過ぎないからである。その意味では絶対神ですら議論の「題目」でしかない場合、たとえば単に「聖なるもの the Divine」としか考えられていない場合は（人間に善きことを実現するよう働きかける存在でない場合は）、やはり「物」に過ぎなくなる。しかし太陽・地震・危機・革命などでも、それが「我々に働きかけてくる力 power urging questions upon us」として意識される場合、それは「神々」となる。

絶対神・人間・世俗世界の3つは、人間が生きていく上で欠かせない。人間が思考・言語・「靈感 inspiration」の能力を発揮できるのは、「世俗世界が提示する課題 subject matter」を解決するように「絶対神からの働きかけ divine question」があり、それに対して「人間の側から解決策を提示 answer」する時である。なぜこのような形を取るようになるかと言うと、「人間にとって深刻な意味を持つ問題 serious question」に個人が応えようとしても、個人では対応できないからである。人間全体に対する「絶対神からの働きかけ」が必要になってくる由縁である。また「世俗世界が提示する課題」、つまり「対話の題目」には人間による解決策の提示が必要とされる。ただし、「呼び名 names」に騙されるようなことが有ってはならない。絶対神が単なる言葉でしかない場合もあるし、世俗世界が絶対神にされてしまうこともあるからである。そこで上記の3つ、つまり絶対神・人間・世俗世界のワンセットが不可欠となってくるのである。全てが「聖なるもの」にされてもいけないし、全てが「世俗化 worldly」されてもいけない。また全てが「人間化 social or human」されていてもいけない。もし「世俗世界が提示する課題が無くなり no question」、 「絶対神からの働きかけも無くなって no command」、 「善悪の判断基準も良心も無くなると no standard, no conscience」、絶対神も人間も存在しなくなって、有るのは「自

然だけ only brute nature」ということになる。あるいは「人間が崇拜の対象とされ worshipping society or humanity」、 「人間が聖なるものとされると put all the divine power into man」、人間は存在しなくなって、絶対神と世俗世界しか存在しないことになる。

「科学の時代 age of science」である近代に起きていることが、正にそうであった。人間は丸で「絶対神が提起するような課題 divine question」を提起する。しかし、それでは「絶対神を真似ているだけで imitate God's divine power」、人間に相応しい役割、つまり「絶対神から与えられた課題 powerful and overwhelming questions or demands」を解決することを人間は忘れてしまう。その結果、人間は「不要な課題の解決に夢中になる got drunk on arbitrary, unnecessary problems」ことになる。科学は「人間的であることを止める reduce his human side into a natural organism, a part of the world's mechanism」ことになる。19世紀の「自由主義 liberalism」は「肉体 body」と区別された「精神 mind」は論じてきたが、人間にとって最も大切なはずの「絶対神からの問い掛けに感応する能力 soul」を軽視してきた。19世紀に書かれた本の殆どは「精神」を論じるだけで（デカルトの「肉体と精神」分離論!）、 「絶対神からの問い掛けに感応する能力」が意識されるようになるのは、20世紀になってからのことであった。「神の如き行為 God-like behavior」（深刻な問題を解決するよう人間に問い掛ける行為）を、「世俗的な問題を解決する人間本来の行為 world-like behavior」の様に「人間のもの only human features」だと考えるべきでない。たとえ人間が絶対神のごとく振舞うようになったとしても、絶対神からの「問い掛け question」とそれに対する人間の「答え answer」、さらに「解決すべき課題 object」の「三位一体 triunity」は、我々が決して忘れてはいけないことである。

さしあたり絶対神とか世俗世界とかいったことは脇に置いておくとしても、つぎのようなことはキリスト教徒でない者でも認めざるを得ないはずである。つまり我々の内に何か「非凡な能力 genius」が秘められていて、それが我々に問い掛けてくるのである。芸術家とか研究者の場合がそ

うである。たとえば研究者は、自分の時間・睡眠・健康を犠牲にしても研究に専念する。つまり、何でもないことが各人にとって「神々 gods」になり得るのである。無神論者は絶対神の有無を問題にするが、それは絶対神を「物 matter」扱いすることを意味する。彼らが問題にしているのは「神学的な定義 definition of theology」であって、それは人間に「問い掛け」をする「生きた神 living God」ではない。「生きた神」は単なる「神の概念 concept of God」ではない。それは「人格 person」を持つ絶対神であり（人間は神に似せて創られているので神は人間の「元型」）、我々は他者に神からの「問い掛け」に応じる様に「問い掛ける」義務がある。

たとえばスポーツマンに、「スポーツは何か役に立つのだろうか」と聞くとする。そのスポーツマンの返答は、必ずしも私を満足させるとは限らない。スポーツマン精神を実現するのがスポーツマンの義務のはずで、私はスポーツを何にも増して優れたものと考えているスポーツマンを傷つけているかもしれない。この場合に私が前提にしているのは、人間は平等なはずだということと、平等な人間を超える権威が存在するはずだということである。そのことは、そのスポーツマンが肩を竦めて「スポーツマン精神なんて自分の知ったことか」と返事をするとハッキリする。そのスポーツマンはスポーツマン精神に何の意味も認めていない訳で、もし私が大学のチームに属していてスポーツマン精神に揺るぎない信頼を寄せていたとしたら、このスポーツマンの返事に大きな衝撃を受けるはずである。

私にこのような質問をさせるのも、またその質問に対してスポーツマンに答えさせるのも、実は絶対神なのである。無神論者に無神論を説かせているのも絶対神である。絶対神は口頭試問をしている試験官などではなく、絶対神の「問い掛け」に人間は言葉で答えたりはしない。人間は絶対神からの「問い掛け」に応えようと「自らを掛ける he gives himself」。男が女に結婚を申し込む時、男が女に期待している応えは言葉ではない。男は彼女に自らを捧げて呉れるかどうかを知りたいのである。その捧げ方が完璧であればあるほど望ましい。我々が命を捧げてもよいと考えている「神々」

も、「口先だけの服従 lip-confession」では満足してくれない。芸術・科学・性愛・貪欲・社会主義・スピード狂といった「神々」は、我々の命まで要求してくる。しかも、我々がどこまで本気が常に監視している。ここで注意しなければならないのは、「答えを要求する者 master, asker」と「答える者 servant, answerer」が「種類の違った存在 different units」だということである。私があなたに対して「私を愛せよ」・「私に従え」と命ずると、あなたは「判りました」とか「厭です」と答えることになるが、あなたに命令する「私 the I」（絶対神）の「能力 powers」と、それに答える「あなた the you」の「能力」は同じでない。持っている武器が違うのである。「私」（絶対神）からの「問い掛け」は「穏やか meek」かもしれないが、それは「あなた」の「ころ heart and soul」に響くような「有無を言わせない irresistible」ものであり、それに答える「あなた」は「有らん限りの知的・社会的手段 thousand devices of our intellectual and social equipment」を当てにすることができる。なぜなら、我々に「最善の解決策 vital truth of an issue」を「求めてくる ask」絶対神は、「解決策を講じてくれる全ての善き天使たち all the good angels of truth」を自由にすることが出来るからである。

ゲルマン語起源のこの「求めてくる ask」という言葉は、もともと「命令する command」とか「強要する demand」といった強い意味を持っていた。ところが近代になって自然科学が隆盛を極めるようになると、その意味が「知的な作業に限定して purely intellectual process」使われるようになった。つまり「最善の解決策」を「求めてくる」絶対神と、それに答えようとする人間の間にあった違いが無くなってしまったのである。デカルトは、彼の「ころ」に潜む絶対神と、絶対神の「問い掛け」に答えようとする自分を一緒にしてしまうという「とんでもない過ち heroic fallacy」を犯してしまった。この両者を一緒にして、「われ思う故にわれ有り」の「われ Ego」だとしたのである。近代が生み出した「空想の産物 chimeric」がこれであった。「絶対神でもなく人間でもないが、同時に絶対神の様でもあり人間の様でもある者 who was neither God nor man, but Godlike and yet anthropomorphical」

の登場である。人間に特徴的な性・年齢・皮膚の色・人種の違いを全て「超越した transcended」存在である「われ」は、同時に「人知を超えた能力 superhuman powers」も否定された存在と化している。科学者は「超人的な能力 superindividual, transcending capacity」の持ち主でありながら、飽く迄も「絶対神ではない not divine」のである。この現実存在しない「われ」が登場してきたとき、「絶対神・人間・世俗世界 God, Man and World」の「三位一体」は消えて無くなってしまった。

絶対神と一体化した人間など存在しない。かつて絶対神でもあり人間でもあるとされたキリストですら、「わが神よ、なぜ私をお見捨てになったのか Eli, Eli, lama sabachthani」(『マルコによる福音書』15:34, 『マタイによる福音書』27:46) と叫んでいた。この福音書の言葉は、デカルトの「われ」が間違っていることをよく示している。人間とは、飽く迄も絶対神と世俗世界を仲介する存在に過ぎないのである。

「絶対神・人間・世俗世界」の「三位一体」、つまり「人間に問い掛けする絶対神 questioning power」・「その問い掛けに答えようとする人間」・「人間が解決すべき問題 discussed subject matter」(世俗世界の問題)の「三位一体」が再認識された今、我々は「やるべきことが理解できた enter the last era of history」ことになる。我々の前に現れる「神々」に怯える必要も無くなる。

我々から感謝の言葉やサービスを要求してくる「神々」が我々を奴隷扱いすることも無くなる。止むを得ず「神々」を信じるがあっても、それは一時的なことに過ぎず、我々が「神々」に命を捧げるようなことは無くなる。たとえば子供なら自然科学を妄信することもあるだろうが、成熟した大人が自然科学を妄信することなど無くなるであろう。また愛と美の神ビーナスは老人には無縁な存在だし、社会主義も60歳の老人には迷惑でしかない。若者が強欲の神に取り付かれることも無くなるであろう。「神々」に対する信仰は、時が経てば消えて無くなる。そのあとに登場して来るのは、「必要なはただ一つ unum necessarium」(『ルカによる福音書』10:38-42)ということと、必要な時に必要なことを実現するよう要求し

てくる絶対神だけである。その結果、我々は「特定の規則や伝統的な教義 all specific codes and traditional creeds」から解放されて、「完全な自由 complete liberty, the unbelievable freedom of the children of God」を手に入れるのである。

聖書には「2種類の神 two names for God」が登場してくる。1つは「複数形の神 Elohim」で、もう1つは「単数形の神 Jahve」である。「複数形の神」の背後に「単数形の神」を見る者は、過去と未来を区別できている「一人前の大人 grown person」である。「複数形の神」のいずれかに取り付かれて、それに仕えている者は「一人前の大人」とは言えない。絶対神からの「問い掛け」に答えるという「人間の生まれながらの権利 birthright」を奪われているからである。

シスチナ礼拝堂(バチカン)の天井にミケランジェロは、指と指を接触させて人類の祖先たるアダムに命を授けている神と、神の聖衣の周りに控えている天使や聖霊を描いて見せた。世界が創造される時、天使や聖霊などの「聖なる力 divine powers」は、その全てが神の側にいた。そのときのアダムは孤独であった。ところが世界の創造が終わってみると、「聖なる力」はアダムの側に移って、アダムは「聖なるもの the divine」に変わっている。アダムの周りに「複数形の神」が控え、神は「単数形の神」に変わっていたのである。

## 第5節 第一次世界大戦後の世界

以上で個人の問題として論じてきたことは、そのままヨーロッパの各国民についても当て嵌まることである。いま(1938年)ヨーロッパの各国民は、「自国民という神 national deity」に忠誠を誓って戦争を開始するか、それとも「別の新しい神 a new faith」に賭けて生き残りを図るかという選択肢に直面している。学者の中には研究のために、結婚・健康・市民生活を犠牲にして、研究以外のことには無関心な者がいるが、国民はそうはいかない。なぜなら、国民とは農民・学者・法律家・実業家などを意味するか

らである。そこには実に多様な職業の者や利害関係者が含まれている。国民は、金銭・土地・知的財産・物質的な利益を追求する者だけで構成されている訳ではない。国民は、その多様な職業の者や利害関係者を生かせなくなった時、問題に直面するのである。

ヨーロッパの各国民は、それぞれが「人類 human family」の違ったタイプを代表している。それぞれの国民は、それぞれ独自の目標を目指して努力しているが、それが正当と認められるのは、他の国民のやり過ぎに対する安全弁になっている場合だけである。それぞれの「国民性 national type」の起源を調べると、「国民性 national character」はお互いに影響を与え合っていたことが判る。影響を与え合うことで、バランスを取っていたのである。たとえ何れかの国民が特定の方向に突っ走ることがあっても、お互いに協力することで人類の再生を果たしてきた。いわばオーケストラの中で自分のパートを演奏していたのである。それぞれが違った言葉を使って話しているが、同じドラマを演じていたのである。究極の目標は、それぞれの国民が目指していることを超えたところ、「人類のあるべき姿 a true form of mankind」の再生であった。

ところが今では、その正当性を誰も信じなくなっている。我々は、お互いのことを余りにも知り過ぎてしまったのである。ドイツ人がイギリス人の「男らしさ virility」を知ったり、イギリス人女性が若いオーストリア人女性の魅力を知ったりしたとき、彼らがそれに憧れて真似るようになったりして、お互いに影響を与え合うようになるのは当然である。なぜなら個々の「神々」に忠誠を誓うより、「人類全体を縛る絶対神 one God of all mankind」に忠誠を誓うことを誰もが望むからである。

第一次世界大戦の結果、個人も国民もこのことを理解するようになった。イギリス人でさえ他国民を無視して、イギリス人だけでやって行くことが不可能になっていることを認める様になっている。他の国民についても同様で、そのことに彼らはショックを受け、またショックを和らげるために逃げ口上を口にしたり予防線を張ったりしているが、そのこと自体が相互

に影響を与え合わざるを得ない現状の証拠になっている。

各国民は、もはや自分たちの独特な制度とか生き方に閉じ籠っていることは出来なくなっている。レーニン・スターリン・ムツソリーニ・ヒトラーだけでなく、ルドルフ＝ヘス（エジプトで生まれ育つ）・ヘルマン＝ゲーリング（妻がスウェーデン人）・リヒャルト＝ダレ Richard Darre（アルゼンチン出身）・アルフレッド＝ローゼンベルク（エストニア出身）のようなドイツの二流どころの指導者も、外国出身か外国人と結婚あるいは外国滞在の経験があつて、外国からの影響を受け入れている。つまり「超・自国民中心主義者 ultra-nationalist」であっても、自国と違った環境や経験の持ち主なのである。

このように特定の国の特殊性とか基準が通用しなくなったことは、近代と「世俗革命 secular revolutions」（フランス革命・ロシア革命）の時代が終わったことを意味する。第一次世界大戦とその結果、登場してきたロシア革命は、「全員を1つの型に押し込める cast all men in one mold」タイプの最後の「全体革命 total revolution」であった。今後も革命が「人の心 souls of men」にアピールするためには、多様なタイプのモデルが必要になってくる。「個々の神々 each separate god」が全員を支配する時代は終わったのである。

「個々の神々」は、人間の年齢や置かれた状況に合わせて対応するしか無くなった。生涯を通じて忠誠を要求することなど不可能になったのである。かつてキリスト教徒になることは生涯の問題であったが、それが中年になって入信する形に取って代わられることになった。人間は「個々の神々」からの「問い掛け」に答える義務があり、生涯を通じて特定の「神々」に忠誠を誓う訳に行かなくなったからである。若者と大人・男と女・子供と老人は、それぞれ違った「神々」に忠誠を誓うことになる。「機械化が進んだ世界 mechanized world」では、とくにその変化が求められることになる。

以上のことから、いわゆる「革命家 revolutionaries」とか「反革命家 reactionaries」という縛りで議論することが、如何に不毛なことか納得して

頂けたと思う。「特定のタイプ one-type」の革命の時代は終わったのである。マルクスは、「階級戦争 class-war」の存在を主張し始めた時に人間は、全員がプロレタリアートになると考えていた。しかし自身がプロレタリアートでなかったマルクスは、そう誤解していただけである。マルクスでない我々には、プロレタリアートが個人や集団の一時的な姿でしかないことが判っている。若者に象徴されるプロレタリアートは「遊牧民 nomadic」特有のダイナミズムから、他の人生の時期との違いが明らかである。「国民 citizen」でもあったフランスのブルジョア（中産階級）は、貴族の「寄生的な superfluous」な性格を見抜いていた。しかしプロレタリアートは、起業家抜きでは自分たちが存続できないことを知っていた。人間は、生涯プロレタリアートでいる訳ではない。人生の違った段階で違った職業を経験するものなのである。

マルクス主義者は1つのタイプの経済体制のことしか考えないが、いま必要とされているのは様々なタイプの経済体制である。これまで人間が1つの経済体制の元で生きていたことは無かったし、これからは無いからである。現在は資本制と共産制のどちらが経済体制として優れているか議論されているが、どちらも封建制よりは優れた経済体制だということになっている。資本制が嫌いな人も共産制が嫌いな人も、封建制については議論せず、封建制について知ろうともしない。彼らに言わせれば、封建制は資本制に取って代わられることに決まっているからである。

しかし、これほど無茶な議論はない。資本制の前には、封建制以外に3つの経済体制が存在していた。そのいずれもが現在も部分的に存続しており、近代の経済体制はこの4つの経済体制のお陰で機能しているのである。まず「荘園制 manorialism」として始まったヨーロッパの経済体制は、いまや「大陸規模の経済体制 continent-wide economy」として機能している。「荘園制」は「教会支配制 curialism」に取って代われ、「教会支配制」は「君主支配制 cameralism」, 「君主支配制」は「植民地制 colonialism」に取って代わられることになった。経済体制の一覧は、つぎのようである。

荘園制

教会支配制：とくにローマ教皇と中央集権化された修道院によるもの

君主支配制：とくにドイツの領邦君主によるもの

植民地制：とくにイギリス連邦によるもの

資本制：工業化した地域

共産制：ユーラシア大陸

どの経済体制も他の経済体制に対して優位を占めていただけで、1つの経済体制に収斂されたことは一度も無かった。サン＝ビクトールのフーゴー（ユグ）Hugo(Hugues) de St. Victorの表現を借りれば、「対話の中で目立つ存在であり、陽のよく当たる場所を占めていた more manifest in their conversation and in a more shining station」に過ぎなかった。統治体制は王制・民主制・独裁制・貴族制の要素が入り混じったものになっていたし、経済体制も上記の一覧に挙げた体制が入り混じったものになっていた。経済体制を論じるとき、1つだけに限定して論じることが有ってはならない。経済学者が犯しがちな過ちは、分析枠組みと「理念 ideals」を混同しがちなことである。上記の経済体制は「理念型 ideal types」に過ぎず、「理念型」は変化することがない。1つの経済体制だけが孤立して存在していることは無く、そのうちの幾つかが共存しているのが常である。たとえば現在の大学生は、一生のうちに全ての経済体制を経験することも可能である。まずは農民の息子として「荘園 manor」と変わらない家庭に15年間暮らして、その後で教会に似た基金団体から奨学金を得て大学に通い、卒業後に君主国家で兵役に就くことになる。あるいはプロレタリアートになって工場で働くかもしれない。商店主になれば経営者として資本家の一人になる訳だし、イギリスが植民地として統治している上海・ペナン・マラッカ・シンガポールにある会社の株主になるかもしれない。

経済的な側面だけに注目して歴史を説明するやり方も、荘園制から大陸規模の経済体制にまで、教会支配制・君主支配制を経て大規模化していく過程を説明するだけなら問題ない。アメリカは、かつてイギリスの植民地

として搾取されていたから資本制の登場が遅れたと説明することも可能である。「全体革命」が起きると、社会秩序も経済体制も大きく変化するが、経済体制の問題だけが原因で「全体革命」が起きることはない。ロシア革命は丸で経済体制が原因で起きた革命の様に思えるが、そう思えるのは、それまでの革命が経済体制を余りにも軽視していたからであった。社会制度は経済の在り方だけに左右される訳ではない。「ころ soul」・「身体 body」・「精神 mind」・「技量 hands」・「教育 breeding」などが革命の中心的な課題になることもあり得る。たしかに物質的な問題は、歴史の展開に重要な役割を果たしている。しかし人間が大切にするのは、必ずしも物質的な問題だけではない。人間には多様な選択肢が存在するからである。人間は1つの社会制度や経済体制に縛られている訳ではない。人間は自分が作った道具の奴隷となることは無いからである。1つの経済体制だけにテーマを限定して議論をすることほど「不適切な in-humane」ことはない。社会の成員である個人にとって、ある経済体制から他の経済体制に生活の場を変えて行くことは自然なことである。実際に機能している経済体制は多様なものであり、そこで働く<sup>はたら</sup>個人の働き方は、人生の時期によって当然ながら違って来る。子供には「父親が管理する経済体制 patriarchal economy」が必要だろうし、若者になれば「共産制のキャンプ場 communistically organized camp」が素敵だと思えてくるはずである。また40歳の男女にとって大切なことは、貯金や個人的な資産の額であろう。さらに老人になると、世捨人のような孤独を大切に思うことであろう。生涯のある時期には消費意欲が大きくなり、他の時期には消費欲が小さくなるものである。人間は複雑な存在で、特定の生活パターンに閉じ込められることは無い。社会主義が悪いのは、社会主義しか考えないからである。社会主義者は資本制を諸悪の根源のように考えているが、それは素朴に過ぎる考え方である。人間は「神の被造物 creature」であるが、同時に「創造者 creator」でもあることを忘れてはいけない。経済で全てを説明するのは簡単である。しかし人間は、もっと複雑な存在であることを忘れてはいけない。神ならぬ人間には、全

てを説明してくれる簡単で便利な説明方法など知る由もないのである。

今後「全体革命」が起きることは無いであろう。我々を待ち受けているのは、古い時代からの遺物たる「部族的な性格 tribal characters」や近代になって登場してきた「国民性 national types」などが繰り返し現れる社会であろう。第一次世界大戦後の混乱期に、共産制や独裁制が政治の世界に登場して来ることはあるかもしれない。しかし共産主義は19世紀最後の世代のものに過ぎず、「その先行者たる自国民中心主義 nationalistic predecessors」と同様、間違った考え方であることは明らかである。第一次世界大戦がそのことを証明して見せた。第一次世界大戦を経験した我々が必要としているのは、「新しい世界変革の構想 new concept of world's revolutions」である。

## 第6節 人類の多様性

偉大な革命とは、人類に「新しい多様性 new variety」を付け加えるような革命のことである。ヨーロッパ国民のなかで、1000年を超える歴史を経験している国民はいない。どの国民も、登場するとき既に違った国民が以前から存在していた。つまりヨーロッパ国民は人類の一員として多様性に貢献するという、「歴史的な役割 revelation」を果たすべく登場してきたのである。この点で人類の多様性は、「偶然に支配される自然界の多様性 chance variation in nature」と違っている。人間は自然界の動物や植物と違って、自分とは違った人間が存在することを知っているのである。

もちろん、人間も自然界の一員であることに変わりはない。ダーウインの『種の起源』で紹介されているように、生物は「多様性 divergence of character」を生み出すのに熱心である。それぞれの「属 genus」には何十万という「綱 class」が存在しているが、同じように人間の言葉も、いくつもの方言などに分かれている。人間の生活圏は、つねに変化に満ち溢れているのである。「変化 change」や「変容 differentiation」無しの人生など有り得ない。「生きる to live」とは、「変化 change and differentiation」を追い求め、「変

化」を経験することなのである。植物・動物・人間を含めた全ての生物に共通する「自明の理 axiom」がこれである。

しかし、それでも「自然界の再生 natural reproduction」と革命の間には「歴然たる違い deep gap」が存在する。すでに確認してきたように、ヨーロッパ人やアメリカ人は「無意識に展開されてきた進化の申し子 offspring of unconscious evolution」などではない。あくまでも革命が「生み出した者 product」なのである。革命では、様々な過去の思い出や出来事が「渾然一体 melting-pot」となって登場してくる。人間は「国民の集合体 family of nations」であり、人々が「心と魂 heart and soul」を捧げる革命によって、その在り方が決まってくる。革命でそれまで存在しなかったタイプの人間が登場してくるが、それでも過去のヨーロッパ人と新しいタイプのヨーロッパ人の間には、「目に見えない繋がり secret harmony」が存在する。この本で見てきた1000年の歴史がそれを証明している通りである。また1000年の歴史から、19世紀の「考え方 dogmas」は、その殆どが間違っているということが判る。

人間は革命の産物である。「人間を11人の個人として理解しようとする speak of man in the singular」と「大きな誤解 grave misunderstanding」を生むことになる。個人を「人類 unity of mankind」の代表と考えることも可能だが、19世紀に考えられていたほど単純なことではない。人類を代表するような個人が存在していることも事実で（誰もが「偉大な変革者 great divide and transformer」になり得る）、誰もが「革命家になり得る revolutionizable」。その意味では誰もが同じ可能性を有していると言える。社会学では人間を「如何様にも変わり得る capable of any change」と考えるし、神学では人間を「改心可能な罪人 sinners to be converted」と考える。「世界規模の全体革命 total and world-wide revolution」によって、人間は誰も想像しなかった者になり得る。これは全ての人間に当て嵌まることで、その意味で「我々は全員が仲間 brothers of us all」である。全員が「革命の申し子 sons and descendants of certain creative acts called revolution」である。全員が革命の「生み出した者」

でありながら、それでも革命ごとに違った人間が生まれている。現在のヨーロッパ人は、過去のヨーロッパ人が「生み出した者」なのである。

ヨーロッパで新しく国民が登場してくるのは、既存の国民が味方として、あるいは敵としてそれを望むからである。ヨーロッパでは、国民同士が（階級同士も）相互依存の関係にある。それぞれの国民史において重要な時期は、国民ひとり一人の個人史の重要な時期に対応している。つまり国民は、個人ひとり一人を利用しているのである。それも無意識にではなく、意図的なのである。「人間による社会の再生 rebirth of life through man」は、生理学や熱力学では説明できない。化学や物理学の言葉で人間の「社会再生能力 man's power for the "re"-making of life」を説明しようとする、説明そのものが意味を失う。この“re-”が接頭語として付く様々な言葉が示しているように（「革命 revolution」・「復古 restoration」・「ルネサンス renaissance」・「更新 renovation」・「回復 recuperation」・「復帰 reversion」・「再生産 reproduction」）、人間は「再 re-」の能力を持つという点で「他の被造物 fellow creatures」とは決定的に違っている。

人間は人間を「再生産」する。「人間は変わりうる存在 homo sapiens mutabilis」であり、「世代の交代 "re"-generation」を大切にする。また社会の「再建 "re"-building」は、他の人間に対する義務である。人間の歴史にとって大切なのは、ただ精力溢れるだけの大男の「再生産」でもなければ、独身を貫くことしか知らない哲学者の「再生産」でもない。大切なのは「自由な人間 free man」の「再生産」である。「跡を継ぐ者 a son, an heir」の「再生産」であり、「創意工夫に富む人間 innovator」の「再生産」である。「革命 revolution」という言葉には、もともと「繰り返す revolve」という意味があり、たとえ新しく変えることしか念頭になく、どれほど古い伝統に失望していても、人間が革命を起こすときには「かつて存在していた何か something pre-existing or prefixed in the order of things」を復活させることを望むものである。人間は無数に存在する選択肢の中から、「再 re-」という接頭語を手掛かりに1つの選択肢を選ぶ。人間が不思議なところは、「変わり得る changeable

kind」人間を「再生産」するということである。人間は天使でもなければ蜜蜂でもない。子供を産めない天使や、巣箱に群がることしか知らない蜜蜂を使って人間の行動を説明することはできない。人間は世紀が新しくなる度に、「天使のような霊感 angelic light of inspiration」と蜜蜂の忙しさを「調和させる re-conciliate(reconcile)」必要に迫られることになる。世紀が変わるたびに「調和させる」やり方が違って来るからである。

どのような「調和 reconciliation」を実現して「新しい多様性」を実現するかは、人間が決めることである。自然界には無数の魚・虫・植物が存在するが、そこで多様性が問題にされることはない。多様性を自覚しているのは人間だけである。熊・狐・狼などのトーテムを使って部族の多様性を表現していたとき以来、人間はお互いの多様性を大切にしてきた。複数の動物がトーテムに選ばれていることは、人間が多様性を原始的な部族の時代から重視してきたことの証拠である。「狼族 wolf」も「狐族 fox」も同じ人間であることをお互いに認め合っており、それぞれがお互いのために存在していることも知っていた。まだ共通の言葉を持たず、ただ「叫び声を上げる yelling and shouting」だけの時代から「狼族」・「狐族」という名前は持っていた。しかも自分たちだけが理解できる言葉では、部族内部に存在する多様性も表現できていたのである。自然界の多様性と違って「階級 Classes」・「国民 Nations」・「国民性 Types」の違いは誇りの対象であり、また侮辱の対象であった。これが社会学と生物学の違いである。「大山吹 Maréchal Niel」というバラが黄色であることと「天地開 La France」というバラが真紅色であることの間には何の関係もないが、国王は騎士や奴隷がいればこそその国王である。母親と娘・父親と息子・芸術家と学者・修道僧と将軍・フランス人とドイツ人・イギリス人とアメリカ人は、お互いに相手がいればこそその関係である。多様な人間は、他者がいればこそその多様性なのである。

マルクスは個人を特定の階級に属するものだと考えていた。ある意味ではその通りかもしれないが、革命がそれを変えてしまう可能性について彼

は考えていなかった。富者と貧者・貴族と召使・王と臣民の関係は、階級では説明できない。マルクスは人間を資本家と労働者に分けることができると考えていたが、文明化された人間社会はもっと複雑である。またマルクスは「資本家と労働者の再生産 Reproduction of Capital and Labor」しか問題にしていなかったが、ヨーロッパのキリスト教徒たちが問題にしていたのは「経済政策 bread-and-butter policy」だけではなかった。彼らは「あるべき人間の姿 truly human type」を実現するためなら、喜んで自らを犠牲にしてきた。「あるべき人間の姿」は、フランス人・ロシア人・イギリス人・ニカラグア人・アラビア人などのように、国別の「孤立した存在 atomistic units」を意味しない。ジュネーブに本部を置く国際連盟には66の国が平等な資格で加盟しているが、この加盟国が人類の全てではない。それは、国際連盟で特別な役割を果たすために加盟した国に過ぎない。

人間は人間に特有の方法で関係を維持していることを忘れるべきでない。人間は言葉を使って話をするができる。人間は言葉を持つことで、その多様性を自覚するようになった唯一の動物である。人間以外の動物が言葉を交わすことができるのは、御伽噺の世界だけである。しかし人間は違う。人間は言葉を交わすことができる。

19世紀の言語学者によれば、世界には約300の言語があり、それはお互いに孤立して存在していて、影響を与え合うことなど無いということであった。たとえばラテン語・フランス語・英語・ドイツ語は個別の言語であって、相互に影響を与え合うことなど無いと言うのである。

言語集団が複数存在するという事は私も認める。しかし、それが相互に影響を与え合うことなど無いという19世紀の言語学者の主張には、賛成しかねる。ダンテのイタリア語・ミルトンの英語・ルターとゲーテのドイツ語・ボルシェビキ党のロシア語は、それぞれが他の国に対して訴え掛けるために起こした革命の成果である。人間として何かを訴え掛けようとした国民の言葉を、そこに見出すことができる。イギリス革命における「国country」概念の登場（第6章：第12節「公共心 Public Spirit について」を参照）

やドイツ革命における「お上意識 Obrigkeit」の登場（第7章：第9節「陛下 Eure Hoheitの意味」を参照）、さらには「国家 state」・「文明 civilization」・「革命 revolution」といった言葉、「目に見える教会 visible church」（第7章：第13節～19節を参照）や「ソ連邦 Soviet Union」（第4章：第16節「第一次世界大戦とロシア革命」を参照）といった言葉の登場は、全てフランス語・英語に特有の名詞などではない。それは革命という「再生の苦しみ throes of rebirth」を味わった人間が生み出した言葉なのである。

革命のヨーロッパに登場してきた新しい人間は、新しい言葉を生み出していた。たとえばスコラ学者のラテン語は、そんな新しい言葉の1つであった。それがヨーロッパ中で使われる言葉となったのである。違っていたのはニュアンスの違いだけであった。19世紀の「自国民中心主義 nationalism」と300の「国語 distinct, permanent, objective languages」の存在が信じられた時代になっても、人間には「相互理解を可能にする言葉 universal speech」が存在するはずだと考えられていた。たとえばベートーベン Ludwig van Beethoven・ベルディ Giuseppe Verdi・ワグナー Richard Wagner・ビゼー Georges Bizet たちの音楽は、人間なら誰もが理解できるはずだと考えられていた。

かつて人間が、1つの共通語だけで対話を行おうとしたことは一度も無かった。同じ単語を繰り返し使おうとしたこともなかった。なぜなら、対話を交わす2人は違った人間であり、違った考え方をしており、違った論理を展開していたからである。人間の会話に多様性が存在するのは当然だと考えられていた。また聖職者と俗人・首長と従者が対話を交わした時、彼らが使った「身分特有の言い方 idioms」は違った言葉であった。言葉には、最初から「身分特有の言い方」や複数の方言が付き物だったのである。方言の多さは、過去に存在した紛争・対話・論争の多さから判る。19世紀の言語学者がそれぞれ別個の「国語」として研究していた多言語状態の象徴「バベルの塔」（天に達する塔を建て始めた人間の傲慢さを罰するため、神は人間同士の言葉を互いに違ったものにして対話不能の状態にした）の麓では、実

は人間同士の「交流 interplay, mutual relation」が存在していたのである。人間の集団は「違った言葉 separate speech, tongue」を使っていたが、それを「共通の言葉 universal language」に翻訳すれば相互理解は可能であった。

有能な言語学者なら、言葉が翻訳可能なことくらい十分に承知しているはずである。「バベルの塔」以降に始まった言葉をめぐる混乱も、1冊の本（聖書）を様々な言葉に翻訳することで解決していた。聖書は300もの言葉に翻訳されており、それが「共通語の不在状態 loss of unity in speech」を解決していた。ヨーロッパやアメリカで起きた革命では、聖書という「共通の思考基盤 common terms of thought」を持つことが「誇り pride and rallying cry」であった。ここ1000年間に起きた革命は、聖書という「共通の思想基盤」を持つことで聖書の歴史に特別なページを用意したのである。

グレゴリウス改革（教皇革命）を推進した教皇たち（ウイクトル Victor 2世・エウゲニウス Eugenius 3世）は、聖書の正典が確立した紀元4世紀を思い出させるし、さらに「第2の教皇革命を推進した教皇たち Guelphic leaders」・聖フランチェスコとその弟子・インノケンチウス3世は、イエスや使徒たちの受難と刑死を体験していた。また「宗教改革の精神 Geist」を体現した「牧師 Predigamt」（文字通りの意味は「説教を担当する役職」。カトリック教会の「聖職者」と違って飽く迄も世俗の役職に過ぎない）を使って世俗権力を統制したルターは、エリヤ（エリヤス）・ヨハネ・イエスたちが登場した預言者の時代を再現していた。さらにクロムエルとウイリアム3世の時代のイギリスは、『士師記』時代とダビデ王国成立までの旧約の時代を髣髴とさせる。フランス革命までのフランスは、原罪（神の禁令に反して知恵の木の実を食べてアダムとイブはエデンの園を追われる）を犯す以前の幸福な「自然人 natural man」アダムの時代に憧れていたし、ロシアとボルシェビキ党の時代は、アダム以前の原始的な労働観や性愛観、若者が支配する部族・氏族社会の活力を髣髴とさせる。

紀元4世紀の聖書の正典確立から人類の誕生（神によるアダムの創造）までの聖書の歴史を逆に辿る形で革命の歴史は展開していたが、革命の指導

者たちは自分たちが、このように聖書の歴史を逆に辿っているとは夢にも思っていなかった。また自分たちがお互いに影響を与え合っていたことも認めようとしていない。しかし彼らは、実はこの「人類の共通語 One Universal Language for all Mankind」(聖書)の「不思議な魔力 invincible spell」の支配下に置かれていたのである。お互いに孤立した存在だと考えられていた国別の革命を1つに結び付けた「不思議な魔力」は、イギリス革命の特徴とフランス革命の特徴を併せ持つアメリカ革命の特徴から、その存在を確認できる。まさかアメリカ革命までが聖書の歴史を逆に辿っているとは逆にも思えないが、独立戦争の時に発行されたパンフレットや当時行われた説教などを見ると、ノアとその息子たちが新しく登場してきたアメリカ合州国の象徴として語られていたことが判る。罪深い人類が洪水で滅ぼされた後の世界で、新たに再出発することになったノアとその息子たちは、罪深いヨーロッパ世界を逃れてアメリカ大陸で新たに再出発することになった合州国と同じであった。

## 第18章 デカルトとの決別

ハーバード大学の三百年祭の年(1936年)は、奇しくも偉大な出来事の三百年祭の年でもあった。つまり今から300年前(1636年)、「合理的な近代科学の基礎 rational foundations of modern science」が確立されたのである。現在の大学設立の出発点になっている「世界観 Weltanschauung」が、1冊の本の形で初めて提示された。その本の著者デカルト René Descartes は、もともと『世界論 Le Monde』と題した包括的な内容の本にするつもりでいたが、宗教裁判で有罪にされる危険性があったので(1633年にガリレオの『天文対話(ブトレマイオスとコペルニクスの2大世界体系に関する対話)』が宗教裁判で有罪とされる)、その一部を『方法序説 Discours de la Méthode』と題して出版することにした。例の有名な「われ思う故にわれ有り Cogito ergo sum」という言葉は、この本で初めて示され、ここに人類による自然征服が本格的に開始されたのである。デカルトのこの言葉は、その後の信じられないような自然科学の発展を可能にした。

デカルトが、この「奇妙な内容の wondrous strange」『方法序説』を引っ提げて登場してきた時、スコラ学を基礎にしたヨーロッパの大学は衰退期を迎えていた。デカルトはカンタベリーのアンセルムス Anselmus Cantuariensis の「知的能力を得るために信じよう Credo ut intelligam」という中世的なモットーに代えて、「われ思う故にわれ有り」というモットーを提示して見せた。スコラ学は「我々の合理的な論理展開の能力 our powers of reason」を「神から与えられたものと信じていた our faith in the revealing power of God」が、デカルトはアンセルムスの「道理に合わない信仰 paradoxical faith」に負けず劣らず「道理に合わない人間存在や、自然の合理性に対する信仰 paradoxical faith in the rational character of existence and nature」を告白して見せたのである。

第一次世界大戦を経験した我々にとって、デカルトの「われ思う故にわれ有り」は中世神学に負けず劣らず一面的に過ぎる考え方である。第

者たちは自分たちが、このように聖書の歴史を逆に辿っているとは夢にも思っていなかった。また自分たちがお互いに影響を与え合っていたことも認めようとしていない。しかし彼らは、実はこの「人類の共通語 One Universal Language for all Mankind」(聖書)の「不思議な魔力 invincible spell」の支配下に置かれていたのである。お互いに孤立した存在だと考えられていた国別の革命を1つに結び付けた「不思議な魔力」は、イギリス革命の特徴とフランス革命の特徴を併せ持つアメリカ革命の特徴から、その存在を確認できる。まさかアメリカ革命までが聖書の歴史を逆に辿っているとは逆も思えないが、独立戦争の時に発行されたパンフレットや当時行われた説教などを見ると、ノアとその息子たちが新しく登場してきたアメリカ合州国の象徴として語られていたことが判る。罪深い人類が洪水で滅ぼされた後の世界で、新たに再出発することになったノアとその息子たちは、罪深いヨーロッパ世界を逃れてアメリカ大陸で新たに再出発することになった合州国と同じであった。

## 第18章 デカルトとの決別

ハーバード大学の三百年祭の年(1936年)は、奇しくも偉大な出来事の三百年祭の年でもあった。つまり今から300年前(1636年)、「合理的な近代科学の基礎 rational foundations of modern science」が確立されたのである。現在の大学設立の出発点になっている「世界観 Weltanschauung」が、1冊の本の形で初めて提示された。その本の著者デカルト René Descartes は、もともと『世界論 Le Monde』と題した包括的な内容の本にするつもりでいたが、宗教裁判で有罪にされる危険性があったので(1633年にガリレオの『天文対話(ブトレマイオスとコペルニクスの2大世界体系に関する対話)』が宗教裁判で有罪とされる)、その一部を『方法序説 Discours de la Méthode』と題して出版することにした。例の有名な「われ思う故にわれ有り Cogito ergo sum」という言葉は、この本で初めて示され、ここに人類による自然征服が本格的に開始されたのである。デカルトのこの言葉は、その後の信じられないような自然科学の発展を可能にした。

デカルトが、この「奇妙な内容の wondrous strange」『方法序説』を引っ提げて登場してきた時、スコラ学を基礎にしたヨーロッパの大学は衰退期を迎えていた。デカルトはカンタベリーのアンセルムス Anselmus Cantuariensis の「知的能力を得るために信じよう Credo ut intelligam」という中世的なモットーに代えて、「われ思う故にわれ有り」というモットーを提示して見せた。スコラ学は「我々の合理的な論理展開の能力 our powers of reason」を「神から与えられたものと信じていた our faith in the revealing power of God」が、デカルトはアンセルムスの「道理に合わない信仰 paradoxical faith」に負けず劣らず「道理に合わない人間存在や、自然の合理性に対する信仰 paradoxical faith in the rational character of existence and nature」を告白して見せたのである。

第一次世界大戦を経験した我々にとって、デカルトの「われ思う故にわれ有り」は中世神学に負けず劣らず一面的に過ぎる考え方である。第

一次世界大戦を経験した我々にとって大切なのは、「神の真の姿 revealed character of the true God」とか「自然の真の姿 true character of nature」などではなく、「真に人間的な社会 truly human society」なのである。「真に人間的な社会」ということから「真とは何か question of truth」ということが問題になるが、我々が目指すのは「真に意味ある事を人類のために実現すること living realization of truth in mankind」である。「真理は神のものであり、神が人間に与えてくれるものである Truth is divine and has been divinely revealed」というのが「知的能力を得るために信じよう」というアンセルムスのモットーの意味であったが、「真実は何物からも影響を受けず、だからこそ科学的に解明できる Truth is pure and can be scientifically stated」というのが「われ思う故にわれ有り」というデカルトのモットーの意味であった。この2つのモットーに代えて、私はこう言いたい。「真実は人間が生きていく上で欠かせないものであり、人間社会の要請に応えるべきものである Truth is vital and must be socially represented」。これをモットーの形にするとすれば、「社会の要請には応えるためなら喜んで自分を犠牲にしよう Respondeo etsi mutabor」ということになる。

我々がデカルトに対して批判的なのは、「外部から影響を受けない pure」という彼の考え方が社会科学全体に蔓延しているからである。歴史学者・経済学者・心理学者たちは「外部から影響を受けない」者だけが「本物の科学者 real scientists」だと信じて疑わないが、とても残念なことである。

私は「外部から影響を受けること impure」を自認している者である。私は傷つき・迷い・動揺し・喜び・がっかりし・ショックを受け・元気づけられる。またそんな自分の経験を他の人に伝えたいと思っている。そのためなら生死を掛けてもよいと考えている。この本を書いたのも、生きていくためにはそうするしか無かったからであった。人は書くことで心理的な重圧から解放される。人は軽々しい気持ちで本を書くことはしない。本を書くのは生きていくためである。この本のことを何度、忘れようと努力したことか。しかし忘れることができなかった。

第一次世界大戦のような「大変な経験 revolutionary experience」をすると、生きることの意味がよく理解できるようになる。こうした経験こそが「すべての科学研究 all our sciences of nature」の出発点とされるべきであろう。「適任者を選択し through constant selection of the fittest」, 「意識的に多様性 consciuos variation」を選ぶことで、我々は「人類の再生 man's revival」を可能にしてきた。経験の記憶が社会の理解には欠かせない。

19世紀の科学（とくに「実証主義に毒された歴史学 history in its positivist stage」）は、自然や社会が秘めている「生物学的な要素 biological element」を過小評価してきた。測定可能で数字で表せる物理現象や、論理的な展開が可能な「抽象的な概念 general ideas」だけが知識の中身だと誤解していた。「物理学 physics」で扱う数字や「思弁哲学 metaphysics」で扱う「抽象的な概念」だけを重視して、「我々が生きていく上で大切なこと central point in our existence」を軽視して来たのである。「物理学」や「思弁哲学」は、「我々の生存にとって不可欠な」生物学や社会学の入口にはなり得ない。「物理学」や「思弁哲学」では、相手が植物であれ動物であれ（ましてや相手が人間社会なら）、「生きていく上で必要なこと realms of life」は解明できないからである。「死んだ物と命ある物 dead things and the living」は区別されるべきであり、数字や「抽象的な概念」は「非現実的な世界 limbo of unreality」の産物であって、「命ある物」ではない。

我々は19世紀と決別すべきである。19世紀は「物理学」と「思弁哲学」の世紀であった。「主観的 subjective」・「客観的 objective」, 「理想主義的 idealistic」・「物質主義的 materialistic」, あるいは両者が混じり合ったもの等いろいろあったが、いずれも科学研究が「物理学」の数字や「思弁哲学」の「抽象的な概念」を基礎にすべきだということでは一致していた。知識の体系は、「物理学」や「思弁哲学」に基づいて構築されなければならないとする点では一致していた。19世紀には「物理学」と「思弁哲学」を基礎にして知識の体系を築いていくべきであると考えられていたが、この考え方は間違っている。マルクスも、デカルト・ヒューム David Hume・ホッ

ブス Thomas Hobbes らと同じ過去の遺物に過ぎない。人間を研究する場合も自然を研究する場合も、つねに「抽象的な概念 abstract generalities」から出発する点ではお互いによく似ている。

我々はこうした彼らのやり方を拒否するものである。「思想と人間存在 thought and being」・「精神と肉体 mind and body」といった2分法では、「生きた人間とその社会 life and society」を解明することはできない。抽象的な物事にしか関心のない「物理学」や、「思想 ideas」にしか関心のない「思弁哲学」では、「生きた現実 reality」は説明できない。なぜなら、「物理学」や「思弁哲学」は「死んだ物」や「抽象的な概念」しか相手にしていないからである。生物の世界であれ人間の社会であれ、そこに存在している「生きた現実 real life」を無視しているからである。この世界に「死んだ物」は無数に存在するし、図書館に「抽象的な概念」を扱った本は無数に存在する。大量の岩石や溶岩、あるいは膨大な数の理論や学説が研究されて来たのは、そうすることで「世界の本質 substances which preponderate in the world」が説明できると考えられていたからであった。しかし、この考え方は間違っている。いくら谷間にある大量の岩石や溶岩の量・重さを測ってみても、そこに生えている植物の何たるかは説明できない。同じように300万冊の本を所蔵する図書館にいる1人の人間の秘密は、この300万冊の本を読んだところで解明することはできない。石炭は木材が地中で死んで炭化したものだが、石炭をいくら調べてみても元の木材のことは解明できない。つまり「物理学」は死んだ木材である石炭しか相手にしていないし、「思弁哲学」は「生きた思想家の抜け殻 formulas from which the life has passed away」しか相手にしていないのである。どちらも「命の抜け殻 remnants of life」に過ぎない。「科学的な研究 scientific treatment」が無意味だとは言わないが、知識の源泉としては2次的なものに過ぎない。「命ある物こそ優先されるべきであり life precedes death」、社会学・生物学の研究こそが「物理学」・「思弁哲学」の研究より優先されるべきである。いまや生物学・社会学が「物理学」・「思弁哲学」に取って代わるべき時なのである。

1934年にマイヤー Adolf Meyer (1938年に結婚して Meyer-Abich と改名) がアメリカ・ドイツ・イギリスの生物学者と創刊した雑誌『ビオス Bios』は、生物学に「革命的な変革 Copernican revolution」を齎すことになった。マイヤーは、「物理学」が「極端な自然現象 extreme case in nature, its most remote appearance」しか相手にしていないことを示して見せたのである。つまり「物理学」は「自然科学の王様 first chapter of natural science」などではなく、「生物学ほども重要でない last chapter of biology」ことを示して見せたのである。同じことが「思弁哲学」と社会科学との関係についても言える。「死んだ物」や「抽象的な概念」を扱う学問は、「生きた人間 life that goes on between heaven and earth」を研究する「社会経済学 economics」や「社会生態学 bionomics」ほど重要な意味を持たない。

ちなみに「物理学」や「思弁哲学」を重視する学問体系の学名は、その殆どが「社会学 sociology」・「文献学 philology」・「神学 theology」・「動物学 zoology」のように -ology という語尾で終わっている。そこで「生理学 physiology」・「心理学 psychology」というと、「物理学」・「思弁哲学」が重視されている旧い学問体系が前提になっていると考え勝ちである。そこで私としては、ドイツ語の「神律 Theonomy」とか(神抜きの「自律 autonomy」でも「他律 heteronomy」でもないと言う意味)、英語の「社会生態学 bionomics」とか「社会経済学 economics」のような、旧い学問体系とは違った学名の使用を提唱したい。

「社会生態学者 bionomist」や「社会経済学者 economist」が「現実世界 reality」を「観察主体 subject」と「観察対象 object」に区分することはないが、我々も「観察主体」と「観察対象」に区分するやり方は採用しない。ユクスキユル Jakob Johann Freiherr von Uexküll を始めとする「社会生態学者」たちは、顕微鏡で観察している「生きた観察対象 living object」が「主体性を持っていること subject」を強調する。研究対象になっている「観察対象」も「主体性の持ち主 Ego」だと考えるのである。「物 the It」が同時に「主体性の持ち主」でもあり、「観察対象」も「主体性の持ち主」であるとい

うことになれば、もはや「観察主体」と「観察対象」を区分することなど無意味になる。

社会学者のマッキーバー Robert MacIver も、同じようなことを社会科学の分野で主張していた。彼は「現実世界」を「観察主体」と「観察対象」に分けて考えることは「無意味な worthless」だけでなく、「有害である misleading」と考えていた。「社会生態学者」や「社会経済学者」に言わせると、「現実世界 reality」を「観察主体と観察対象」・「精神と肉体 mind and body」・「思想と物事 idea and matter」に区分することは、「常識 common sense」に反することなのである。「観察主体」抜きの「観察対象」や「精神」抜きの「肉体」などは、論理的に有り得ないからである。石や遺体を「物」と呼ぶのはまだ許せるとしても、犬や馬を「物」と呼ぶのは既に問題だし、人間を「物」と呼ぶ訳にはいかない。敢えて人間を「物」と呼ぶなら、それは人間を「安価な労働力 cheap labor」・「単なる働き手 hands」・「機械の歯車 cog in machine」と見做すことを意味する。こうして「間違った思弁哲学 wrong philosophy」は「間違った社会 wrong society」を生み出すことになる。

400年に及ぶ「物理学」による支配のおかげで、労働者を単に「数字 quantity」としか見做さない「機械社会 mechanistic society」が登場して来ることになった。政治家も教育者も、この異常で非人間的な状態を「当たり前 norms」と考えている。「現実世界」を「観察主体と観察対象」,「精神と肉体」に分ける考え方は、労働者が「機械の歯車」であることを当然視するだけでなく、「知識に対する冷徹な懐疑主義 cold scepticism of the intellectual」に陥ることを意味する。そうなれば人間に無関心で、自己中心的な「根無し草 déraciné」の考え方を「当たり前」と考える様になる。

特定の個人・階級・国民・人種を単なる「物」・労働力としか考えず、また特定の人間集団や階級だけが専制的な「主体性の持ち主」になることを許せば、革命が起きることになる。「高尚な理想主義者 idealistic subject, the Ego」と「物質視された者 materialistic object, the It」は、ともに人類の木にとっては枯れた葉に過ぎないが、既に見てきたように、革命はこのよう

な人間の存在を許さない。それは「戯画化された人間 deadening caricatures of man's true location in society」に過ぎないからである。ヨーロッパ人は、そのようなタイプの人間を生み出すことを望まない。彼らが生み出すのは、娘・息子・姉妹・兄弟・母親・父親であるような「現実に存在する人間 everlasting man」である。

デカルトやスペンサーの哲学、あるいはマキャベッリやレーニンの政治論に登場してくる「抽象的な人間 abstractions and generalities」は、「生きた人間 living men」ではない。「観察主体と観察対象」・「思想と物体」のように2分する考え方では、「人間の本質 heart of human existence」に迫ることはできない。せいぜい人間の「傲慢さや卑小さ」・「独裁者になる人間と奴隷にされる人間」・「天才になる人間と労働者になる人間」のように、極端な事例が示されるだけである。解明すると公言していた「人間の本質 human nature」に迫ることなど不可能である。「主体性の持ち主 the Ego」も周囲の事情に強制されて「物 the It」のように行動することがあるが、もともと人間はそんなものではない。ひどい状況の下で「物」のように行動する人間は、生き続けることができない。「自己中心的 self-centered」で「全能の如く振舞う人間 sovereign Ego」は、やがて「狂気に陥る runs insane」からである。「現実に存在する人間 real man」は、ときに情熱に任せて自己を犠牲にする。「主体性の持ち主」として行動することもあれば、「物」として受け身で行動することもあるのが「現実に存在する人間」なのである。ときには「主体性の持ち主」となり、ときには「物」と化するのが「現実に存在する人間」である。この間で上手くバランスが取れたとき、「現実に存在する人間」は狂気に陥らずに済む。「神の如き主体性の持ち主 Godlike Egos」や「石の如き単なる物 stone-like It's」のような、「現実に存在しない抽象的な人間像 non-existent abstractions」に基づいて社会を分析する様なことがあってはならない。社会とは、我々のような「欠陥だらけ faulty」だが「現実に存在する real」人間が構成するものである。20世紀の社会科学は、そんな19世紀にはなかった新しい前提で社会を分析すべきである。

ラテン語の勉強を始めるとき、まず我々はプロトマイオス王国時代にアレキサンドリア学派の文法学者が作り上げた動詞の変化表を覚えさせられる。「私は愛する amo」・「あなたは愛する amas」・「彼は愛する amat」・「我々は愛する amamus」・「あなた達は愛する amatis」・「彼らは愛する amant」…この変化表は、その具体的な意味内容を無視して、ただ人称に応じて動詞を変化させているだけである。どうも、それが我々に好ましくない影響を与えてきた様である。その結果、デカルトからスペンサーに至るヨーロッパの哲学やマキャベリからマルクスに至る政治学は、人間を戯画化してしまうことになった。

そもそも人間が自分を自覚するようになるのは何時のことなのか。その答えは、動詞の命令形を考えてみるとよく判る。我々は外部から命令されながら長い期間を生きる。話す能力も考える能力もないときから、我々は母親・子守り・姉・隣人から命令されて育つ。「これを食べなさい」・「これを飲みなさい」・「こちらに来なさい」・「静かになさい」などと言われながら育つ。つまり我々は命令形によって「自意識を獲得して大人になる recognize himself and the unity of his existence」のである。「自意識を獲得して大人になる」までは、名前と呼ばれ、命令されて育つのである。そこで幼児期や子供時代には、名前を呼んで何をすべきか指示してくれる者がいないと不安になる。「何故こんなことになったのか」・「自分が置かれている状況はどうなのか」・「つぎにどうすれば良いのか」と自問自答することになり、名前と呼ばれ命令されるのを待つことになる。これが「現実に存在する人間」であり、社会はこんな「現実に存在する人間」によって構成されている。そんな「現実に存在する人間」を無視する国民は戦争に走ることになるし、「機械の歯車」だけで構成される国民はアナーキー状態に陥ることになる。「現実に存在する人間」は統治可能だし、教育によって考え方も変えるし、呼びかけに答えたりもする。しかし子供時代を卒業して一人前になるには、さらに「愛情 love」を注いでやる必要がある。「おれの名を呼んでいるのは、あれはおれの魂」とジュリエットの呼びかけにロメ

オも自問自答している（小田島雄志訳『シェイクスピア全集』白水社Uブックス⑩「ロミオとジュリエット」第2幕・第2場、74ページ）。この問題をここでこれ以上、論じることはしない。この本で社会科学の在り方について主張してきたことが一般に受け入れられるようになったら、そのときに改めて論じてみたいと思う。

ただ1つだけ指摘しておきたいのは、人間を「精神と肉体」に分けて考えるのではなく、「現実に存在する人間」を前提に考えることの重要性である。すでに指摘したように、「精神と肉体」に分けて考える考え方からは「主体と客体 subject and object」という考え方が生まれてくるが、これは「健全な社会 healthy society」に住む「健全な人間 healthy men」の考えることではない。人間が「主体と客体」に分けて考えられるのは、病気のときだけである。社会を構成する人間の多様性は、革命のときに示される。人間は革命を開始する者であり、同時に革命を継続する者でもある。また「作者 creator」であって同時に「作られる者 creature」でもあり、環境の産物であって同時に環境の作り手でもある。さらに曾孫であると同時に曾祖父でもあり、急激な変革の信奉者であると同時に漸進的な進歩の信奉者でもある。この人間の二面性は、自然科学者が好む「客観性」や「主観性」を超えた新しい言葉を使って表現する必要がある。たとえば「既知の過去から未来を想像する *traject*」とか「未知の未来に果敢に挑戦する *preject*」（著者による造語。-ject を繰り返す言葉遊びになっている）といった言葉である。社会変化の方向がはっきり見えているときは、「平和裏に進行する進歩の船 *boat of peaceful evolution*」に座って「既知のルールで未来を想像していられる *traject*」が、変化の方向が見えず乗っている船が沈みそうになると、未来が判らないまま自ら建造した船に乗り換えざるを得なくなるし、その建造に1世代以上の時間を費やすことになる。緊急事態の中で未知の新しい船を建造すること、これが革命の意味である。この人間の二面性の解明こそが社会科学の担うべき任務なのである。

「われ思う故にわれ有り」というデカルトの考え方を我々は批判の対

象にしているが、この考え方と決別することが齎すリスクは十分に承知しているつもりである。現代人は思想に過敏になり過ぎている。その結果「外国産の foreign-born」思想を余りにも多く取り入れていれることになり、その思想は支離滅裂になっている。つまり精神なるものは、「人となり personality」を決める決め手にはなり得ないのである。

「われ思う故にわれ有り」の影響が余りにも強すぎるため、我々は「為すべきこと imperatives of the good life」が判らなくなっている。我々は、「思う故に」存在している訳ではない。人間を創造したのは絶対神であり、「思想 thought」が我々を創造した訳ではない。絶対神が我々を創造し、我々に社会を形成するよう呼び掛けたのである。「人間が何であればとて…これを心にかけられるのか」(『詩編』8:5, 144:3)。子供たちは大人の愛情を信じ、「思想」などとは無縁な時期から絶対神の呼び掛けに答える様になる。「人間としてやるべきこと human imperatives」に耳を傾け、それを身に着けて社会の一員となっていく。絶対神の呼び掛けに答えることで自分の存在理由を示そうと、我々は「四苦八苦する stammer and stutter」ことになるが、それは個人だけでなく国民の場合も同じである。誘惑に負けることなく、「心 heart and soul」に呼び掛けてくる大切な問題に答えるべく努力するのである。

もはや現代人は「抽象的な論理の力 strength of abstract reasoning」など信じていないが、それでも「この世の不正 decay of creation」を正すべく最大限の努力はする。それが「天からの呼びかけ the call」に対する我々の義務だからである。この本の最終章を書くに当たり、要点を簡単に纏めておきたい。デカルトの「われ思う故にわれ有り」に対抗できるような簡潔な言葉で、これからの社会科学の在り方を示してみたいと思う。デカルトによれば、「主体」が問題を提起し、かつ問題を解決するのだが、たしかに数学や物理学の分野ならその通りだと言ってよい(もっとも現代では、アインシュタインの相対性理論によってそうとも言えなくなっている)。しかし深刻な意味を持つ問題に関しては、問題提起をする者とその解決策を考える者が同

じであることはない。問題提起をするのは、「我々を超えた存在 that always precedes our existence and the existence of our fellow creatures」である(たとえば絶対神・運命・環境など)。危機・不正・死・経済恐慌などが我々の解決すべき課題として与えられるが、我々には当面の解決策を講じるくらいのことしかできない。当面の解決策は我々が持っている知識で何とかするが、それは当面の解決策でしかない。宗教改革や革命のように、根本的な解決策を講じていると思われる場合ですら、1世紀も経てば修正が必要になってくる。

「われ思う」とデカルトは簡単に言うが、そこには「汝この無の深淵を如何にして超えるつもりか How wilt thou escape this abyss of nothingness」という「我々を超えた存在」からの問い掛けと、それに対する我々の命懸けの「これぞ我が答えなり Let this be my answer」が存在している。我々は「汝 thou」という二人称の対象であって、「我々を超えた存在 superhuman power」から呼び掛けられる存在に過ぎないのである。

深刻な意味を持つ問題では、問題提起をする「我々を超えた存在」と解決策を考える人間の対話が交わされることが明らかになった以上、「我々を超えた存在」である一人称が人間であることは有り得ない。それは環境・運命・絶対神のような「我々を超えた存在」のほうである。その呼び掛けに答える人間は、呼び掛けの言葉をただ復唱するだけでは済まされない。我々は呼び掛けられる二人称「汝」の対象に過ぎないからである。我々は急ぎ解決策を見つけてくる必要がある。

統治者が国民の要求を読み誤ると、国民は統治者との対話に応じる代わりに、抗議の声を上げるようになる。傲慢な統治者に抑圧され、「物 the It」扱いされたヨーロッパ人は、絶対神の呼びかけに答えるべく革命を起こしてきた。キリスト教徒に相応しい声を挙げられなくなると、統治者と国民の間に日常的な対話に代わって新しい状況が生まれてくる。1200年にイタリアが教皇の支配下に置かれ、1917年にロシアが西欧諸国の植民地と化していた時のように、死んだと思われていた国民が息を吹き返すのである。統治階級に代わって新しく国民に訴えかける集団が登場し、統治階

級は問題を解決すべしという絶対神からの呼び掛けに答える以外に生き残るすべは無くなる。

国民は我慢づよいもので、当該の問題に対する根本的な解決策がまだ存在せず、統治階級が少しでも問題の解決に努力する姿勢を見せていれば、統治階級による相当な残虐行為にも耐えるものである。こうした国民の姿勢は、「信仰と呼んでもよい程強固なものである may truly be called the religion」。もし個人なり国民（あるいは人類）がこれと違った姿勢を望むなら、我々は「思弁哲学者 Platonic thinker」（デカルト）の研究を止めて「機械化された近代社会 machinery of modern society」を後にし、「我々を超えた存在」からの「呼び掛けに答える者 addressee」（これが「我々本来の姿 our natural situation」である）になる必要がある。そうすれば「呼び掛けを無視する自己中心主義者 over-energetic Ego」になることも、また「惨めな負け犬 suffering under-dog」の無力感に囚われることも無くなる。新しい時代を切り拓けるか否かは我々次第であり、我々は「我々を超えた存在」からの「特別な指示 specific mandate」を待つことになる。我々が「我々を超えた存在」からの指示を聞く術を学び、提示された問題の解決に努めれば、未来を切り開くことが可能になる。こうして2000年もの間、人類は「再生 re-birth」を繰り返してきた。

「特別な指示」は、「我々を超えた存在」がするものであって、我々がすることではない。もし「特別な指示」をする人間がいるとすれば、それは悪魔でしかない。悪魔の指示など不毛な指示でしかない。そんな不毛な指示の例が、ローレンス＝スターン Laurence Sterne の『トリストラム＝シャンデイ The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman』（朱牟田夏雄訳、岩波文庫）に示されている。「特別な指示」は「空 blue sky」から降ってくるものであって、我々はそれに答えるだけだが、我々は「答える者 respondents」であることに誇りを持っている。「答える者」となることで、我々は「我々を超えた存在」と自然を仲立ちすることが出来るからである。

こうして我々のモットー「社会の要請に応えるためなら喜んで自分を犠

牲にしよう Respondeo etsi mutabor」が登場してくることになる。我々が「我々を超えた存在」からの「呼び掛け questioning」に答えるのは、「我々を超えた存在」が我々を「再生 life's re-production on earth」の責任者に任じてくれたからであった。人間とは、必要であれば自己犠牲を厭わない存在である。たしかにデカルトの「われ思う故にわれ有り」も1つの考え方である。しかし、それが有用性を発揮するのは、自然現象を探求する場合に限られている。人間は、混沌とした暗黒の自然を自己の支配下に置くべく、自然を研究対象とするが、そのためには「われ思う故にわれ有り」という呪文で自分を自然から引き離し、自然を「客観化 objectified」しなければならない。こうして「われ思う故にわれ有り」は、人間と自然のあいだに「隔たり distance」を設けることになる。

この「隔たり」が有効性を発揮するのは、課題を設定して答えを探し、答えを公表するときである。そのとき我々は、デカルトが言うように疑い・思考する自分を発見する。自然現象の分析・研究にこの方法は不可欠であり、そこで自然科学者は、この方法がどんな場合にも有効だと考える様になった。しかし既に指摘したように、「人間を超えた存在からの問い掛けに答えること expressing of truth」は、「社会的な意味を持つ行為 social problem」である。「人間を超えた存在からの問い掛けに答えよう」とする場合、デカルトの考え方は役に立たない。また我々の良心が「人間を超えた存在からの問い掛けに答える」ときも、それが「社会的な意味を持つ行為」である点では同じである。「人間を超えた存在からの問い掛けに答える」こと（「知ること learning」・「耳を傾けること listening」とも言い換えることができる）、またそれを他者に伝えること（「教え伝えること teaching」・「話して聞かせること speaking」とも言い換えることができる）の大切さを無視して、「国際的・学際的な international and interdenominational」協力体制を築き上げるなど不可能である。それはデカルトを生み出した過去の歴史についても、また悲惨な第一次世界大戦を経験した我々についても言えることである。

「聖職者による革命 clerical revolutions」（教皇革命・ルターによる宗教改革）

のおかげで「良心 good conscience」が重視されるようになり、また後にデカルトの考え方を登場させることになる「知識 illumination」に対する確信が普及していくことになった。そのとき問題になったのが、「人間を超えた存在」からの「問い掛け impression」を知る方法であった。そこで、もう1つ別の「隔たり」を設ける必要が出てきた。デカルトが「主体」と「客体」の間に「隔たり」を設けるためには、このもう1つの「隔たり」を設ける必要があった。それを実現したのがスコラ学であった。スコラ学が「ヨーロッパ各地に登場してきた様々な自然論 local myths about universe」を1つに纏めていなかったら、デカルトの「われ思う故にわれ有り」の登場は無かったことであろう。そもそもデカルトが「思う」ためには、自然の中に於ける人間の役割を決めた「人間を超えた存在」が、人間より上位にあると考える必要があった。

人間を支配し、危険に晒し、利用する「人間を超えた存在」は、人間が勝手に設定する目的など意に介さない。そんな「人間を超えた存在」を我々は畏敬するが、そうすることで初めて我々は死の恐怖から解放され、「人間を超えた存在」の問い掛けに耳を傾けるようになる。

この最初に設定された「隔たり」を哲学的に論理づけたのが、イギリスの偉大な哲学者カンタベリーのアンセルムス Anselmus Cantuariensis であった。その意味をデカルト式の簡単なモットーにしたのが、「知的能力を得るために信じよう Credo ut intelligam」である。彼は、このモットーによって知的作業と神の間に「隔たり」を置いた。このラテン語のモットーを我々の言葉で表現し直すとすれば、さしずめ「人間が作り出す偽物の真理と神から与えられる本物の真理を区別するためには、神の声を聞く術を身に着ける必要がある I must have learned to listen before I can distinguish valid truth from man-made truth」ということになろうか。このアンセルムスのモットーが重視しているのは、「神から与えられる本物の真理」を「聞くこと listening」である。それに対してデカルトのモットーが重視しているのは、この「神から与えられる本物の真理」を「人間の知識 human knowledge」に変えるた

めに「疑うこと doubting」である。そして我々のモットーが重視しているのは、必要とされる時に必要とされる場所で「他者に向けてアピールすること speaking out...as the proper social representation」である。いま哲学者・神学者・科学者たちは信用されていない。ただ本を書いて他者に影響を与えようとしているだけだと考えられている。アンセルムスが人間と神の間に「隔たり」を設け、またデカルトが人間と自然の間に「隔たり」を設けたように、我々も「他者 listeners」との間に「隔たり」を設けて、「耳を傾けてもらう teach them」方法を考える必要がありそうである。

「知的能力を得るために信じよう」・「われ思う故にわれ有り」は、いずれも一時期は意味あるモットーであった。しかし結局のところ「知的能力を得るために信じよう」は異端審問を招き、「われ思う故にわれ有り」は弾薬工場を登場させることになってしまった。いまや航空機による空からの爆撃が可能になっているが、これは人間にとって不幸なことである。またジャンヌ＝ダルクに異端の疑いをかけて拷問していた時の異端審問官たちは神を信じておらず、世俗権力に加担していただけであった。ノーベル化学賞の受賞者が毒ガスを発明したことは有名な話だが（ハーバー Fritz Haber は第一次世界大戦でドイツ軍のために毒ガスを製造するが、1918年にアンモニアの合成法に対してノーベル化学賞を受賞する）、これも人の道に反する行為である。

「社会の要請に応えるためなら喜んで自分を犠牲にしよう」という我々のモットーは、自然を支配下に置いた人間が新しい状況の登場を自覚していることを示している。社会の要請に答えることで、「社会再生の意味 the secret of death and life」を知っていることが示せるのである。人間は「社会の再生 life's "Renaissance"」に責任を負っている。「社会の再生」を可能にする「革命・人間愛・誇るべき事業 revolution, love, any glorious work」は、「人間を超えた存在」からの問い掛けとそれに答える人間の努力が1つに結び付くことで、「永遠に称えられるべきものとなる bear the stamp of eternity」。「社会の要請に答えるためなら、喜んで自分を犠牲にしよう」という我々

のモットーは、こうして人間の生き方を変え、「目前に迫った人間社会の崩壊 already present death」を防ぐことに貢献するのである。

## 第19章 生き延びるにはユーモアのセンスが必要

最後にもう一度、我々が「尊敬すべき敵手 venerable adversary」にして「近代世界の旗手 great seducer of the modern world」デカルトに話を戻したい。『方法序説 Discours de la méthode』で、彼は人間が「印象 impressions」ばかりを大切に「論理 full power of logic」を大切にしないと嘆いていた。彼は20歳になるまで「印象」に惑わされて頭脳を明晰に保てず、間違った考え方に支配されていたとのことであった。彼が赤ん坊の時から頭脳明晰でなく、20歳になるまで間違った考え方に支配されていたとは真に残念なことであった。

この「近代科学の父として神格化され demigod of modern science」、人間を「精神と肉体に分けて考えていた mind-body dualism」人物の素朴な告白を読んで、我々はどう考えるべきであろうか。笑い飛ばすしかないのだろうか。科学の発展にとって笑いが持つ意味は改めて真剣に考えてみる必要があるが、どうも科学者はデカルトが言っていることの馬鹿しさが判っていないようである。「偉大な真理 vital truth」を発見して、泣いたり笑ったりしない人間は「一人前の大人とは言えない immature」。デカルトは「外部世界に対する好奇心で一杯の青年期 adolescent, full of curiosity」しか評価せず、「子供の精神状態 mental childhood」を嫌い、しかも「大人の精神状態 mental manhood」も獲得できないでいる。

デカルトは人間形成に不可欠な「柔軟な心を持つ年齢 plastic age」である「子供の精神状態」が持つ意味を認めず、「客観的であること objectivity」にしか注目しない「空虚な主体 empty subject」に人間を変えてしまうことを考えていた。言い換えると、人間は自分自身とは無関係な「印象」だけを大切にすれば善いということになる。そこでデカルトの心酔者である現在の科学者たちは、自分が受ける印象は無視して「冷静であること keep cool」・「冷淡であること keep disinterested」・「淡々としていること keep neutral」・「無感動であること keep dis-passionate」が自分の義務だと考える様

のモットーは、こうして人間の生き方を変え、「目前に迫った人間社会の崩壊 already present death」を防ぐことに貢献するのである。

## 第19章 生き延びるにはユーモアのセンスが必要

最後にもう一度、我々が「尊敬すべき敵手 venerable adversary」にして「近代世界の旗手 great seducer of the modern world」デカルトに話を戻したい。『方法序説 Discours de la méthode』で、彼は人間が「印象 impressions」ばかりを大切にして「論理 full power of logic」を大切にしないと嘆いていた。彼は20歳になるまで「印象」に惑わされて頭脳を明晰に保てず、間違った考え方に支配されていたとのことであった。彼が赤ん坊の時から頭脳明晰でなく、20歳になるまで間違った考え方に支配されていたとは真に残念なことであった。

この「近代科学の父として神格化され demigod of modern science」、人間を「精神と肉体に分けて考えていた mind-body dualism」人物の素朴な告白を読んで、我々はどう考えるべきであろうか。笑い飛ばすしかないのだろうか。科学の発展にとって笑いが持つ意味は改めて真剣に考えてみる必要があるが、どうも科学者はデカルトが言っていることの馬鹿しさが判っていないようである。「偉大な真理 vital truth」を発見して、泣いたり笑ったりしない人間は「一人前の大人とは言えない immature」。デカルトは「外部世界に対する好奇心で一杯の青年期 adolescent, full of curiosity」しか評価せず、「子供の精神状態 mental childhood」を嫌い、しかも「大人の精神状態 mental manhood」も獲得できないでいる。

デカルトは人間形成に不可欠な「柔軟な心を持つ年齢 plastic age」である「子供の精神状態」が持つ意味を認めず、「客観的であること objectivity」にしか注目しない「空虚な主体 empty subject」に人間を変えてしまうことを考えていた。言い換えると、人間は自分自身とは無関係な「印象」だけを大切していれば善いということになる。そこでデカルトの心酔者である現在の科学者たちは、自分が受ける印象は無視して「冷静であること keep cool」・「冷淡であること keep disinterested」・「淡々としていること keep neutral」・「無感動であること keep dis-passionate」が自分の義務だと考える様

になった。さらに「ユーモアが欠如した状態 lack of humor」を大切だと考える様にもなった。その結果、「細部に対する拘り passions for trifles」だけを大切にしている。彼らは「ユーモア humor」が、人間にとって不可欠な資質であることを認めたくないのである。

こうして「自分が受ける印象 impressions upon himself」を無視するため、「他者が受ける印象 vestiges and impressions by life on others」に頼らざるを得ないことになる。つまり「外部から影響を受けないで研究する work with pure mind」ということで、せつかく研究対象から得ている「情報 evidence」も見逃すことになる。そのことは、物理学者・地質学者と生物学者・医学者、あるいは「日常的な社会経済学 eco-nomics」と「日常を超えた社会経済学 meta-nomics」の違いを比較してみるとよく判る。

地質学は洪水・地震・火山活動が地表に与えた「影響 impressions」を研究する学問である。山を調べれば、地表が受けた「影響」がどんなものだったかが判る。「母なる地球 Mother Earth」に関する学問の地質学は、進化の歴史に於いてどれ程強い力が地表に働いたかを明らかにする学問である。

それと違って医科学者は、必ず治験によって新しい薬の安全性を確かめてから処方する。血清や解毒剤が注目されるのは、それが人体に「深刻な影響 real impression」を与えるからである。

このように「本物の学問 true sciences」は岩石・金属・植物・動物・人体など、原子からモルモットまで、それが受ける「影響」を研究することを使命にしている。

そこで岩石が受ける「影響」を研究する岩石学が登場して来ることになり、人体が受ける「影響」を調べる医学・生物学が登場して来ることになる。つまり我々は受ける「印象・感動 impressions」（「影響」の意味もある）に心を動かされて研究を行い、科学的な成果を生み出すのである。ところが自然科学を模倣することしか知らない「人文科学の達人たち brahmins of the knowledge of man」は、問題に対する自分たちの「冷淡さ neutrality」や「無関心 impassive indifference」を自慢するばかりである。「印象・感動」を知ら

ない彼らは「実験室 artificial laboratory」でモルモットを相手に実験を行って、その結果を自分の経験とするのである。

偉大なるデカルトは子供時代に経験した貴重な「印象・感動」を忘れ、無味乾燥な自然科学だけが学問の名に値すると考えるようになった。それが自然科学だけを評価するデカルトが払った対価であった。地質学者・物理学者・生化学者たちが、自分の「社会的・政治的な経験 social and political experience」を無視するようになったのも当然である。自然科学の研究者は、社会問題に無関心になってしまった。

「科学的に意味ある事実 scientific fact」は、「強い印象・感動 indelible impression」があつて初めて検証する意欲を刺激することができる。革命・戦争・無政府状態・虚無主義などに我々が関心を持つのは、それが「強い印象・感動」を生むからである。「強い印象・感動」は複雑で強力であるほどよい。なぜなら、その方が長く人間の心に残り、研究心を掻き立てて呉れるからである。なかでも革命は「我々を途方に暮れさせるが throw our minds out of gear」, それだけに理解しようという動機づけが強くなる。「革命は人間の考え方を変えてしまう revolution changes the mental process of man」。「強い印象・感動」と無縁で「自分とは無関係な形の判断 objective judgement」しか下さない科学者は、「目の前の事実を見据える digest the event」という科学者としてやるべきことから逃げているのである。自分が受ける衝撃が怖くて、果たすべき義務から逃げているのである。これを我々は「卑怯な振舞い cowardice」と呼ぶ。

社会学者が革命や戦争から「強い印象・感動」を受けずに「卑怯な振舞い」を選ぶとき、彼らは兵士の制服に付いているボタンの数を数えて見せるとか、反乱を起こした者が殺された大通りの街路樹の名前を論<sup>あげつら</sup>って見せたりする。トルストイの『戦争と平和』では、トルストイ自身が経験した恐怖や希望が「強い印象・感動」として触れられているが、トルストイはそれを「強い印象・感動」として認めるべきか否か迷っていた。そこで彼は、言葉にするには「滑稽と言うしかない funny」二番煎じの「強い印象・

感動」を挙げることにした。しかし当然のことながら、そんなものを読んで誰も笑う気にならない。

そこで重要になって来るのがユーモアのセンスである。「滑稽さは命取り Le ridicule tue」と言うが、ユーモアのセンスさえ在ればこんな事態も避けることができる。化学者なら「笑気 laughing gas」(麻酔に使われる亜酸化窒素)を用意するところだろうが、我々は「印象・感動なしの思考 impassionate thinking」を避ける方法として、「一服のユーモア a strong dose of humor」を提案したい。それさえあれば、この本を書く理由になった「戦傷 war-scar」も癒えようというものである。

我々の世代は第一次世界大戦前の虚無主義、第一次世界大戦中の悲惨な大量殺戮、第一次世界大戦後の無政府状態と革命(著者はこれを「ヨーロッパの内戦」と考える)を経験してきた。世界が狭くなり、一体化していることに我々が気づく前に、失業・空襲・階級闘争・「生きる意欲の欠如 lack of vitality」・「協調性の欠如 lack of integration」などが我々の行く末を決定づけ、我々を駄目にしてしまうかもしれない。我々が何とか生き延びることが出来たのは、奇跡と言うしかない。「我々の死後も精神は生き続ける lead man's mind beyond his physical death in nature」などと戯言をほざくデカルトの「思弁哲学 metaphysics」と我々は決別すべきであり、「不況が齎す非日常的で残酷な事態 brutal "nomical" facts of economics」と「社会的な混乱が生み出す残酷な事態 monstrosities of social volcano」を何とか切り抜ける方法を模索すべきである。

何とか危機を切り抜けることが出来たことが判って、やっと我々にも笑顔が戻ってきたが、「理想を説くだけの教条主義者 dogmatic idealist」や「自然科学しか信用しない唯物論者 scientific materialist」たちは、この笑顔に顔を顰<sup>しか</sup>めている。なぜなら、彼らの予想に反して人類は危機を切り抜け、何が大切かを理解するようになったからである。ユーモアが光を当てるのは、何が本質的でないかを見分ける為である。近代科学は日々研究者の脳味噌を本質的でないことで一杯にして、科学が日々進化していると我々に

信じ込ませている。崩れそうに積み上がった無駄な知識の山に、さらに無駄な知識を積み上げていく。ところが危機を切り抜けて生き残った我々は、新しい目標に向かって前進を開始した。危機的な状況を切り抜けることで様々なことを経験して、我々は自信を取り戻した。70歳にもなつてからやっと、咲いた花の見事に子供の様に驚き、喜んでいる。好奇心は子供ほど旺盛で無いにしても、「驚嘆する能力は寧ろ強くなっている gains in astonishment」からである。この本でいう「日常を超えた社会経済学 meta-nomics」とは、危機的な状況を切り抜けて生き残ることが出来たことに「驚嘆する能力 tokens of the surprise」を意味する。「日常を超えた meta-」「混乱状態が齎す残酷な事態 all-too-mechanical brutalities of social chaos」に対処する為の「日常を超えた社会経済学」である。これをニーチェは『楽しい科学 La Gaia Scienza』(もともと中世プロバンス地方の恋愛詩を意味するイタリア語。これをニーチェは1882年に出版した本のタイトルに使用した。有名な「神は死んだ」という言葉はこの本で初めて使われる)と呼んだ。「日常を超えた社会経済学」は生きることの喜びを意味する。人間が生きる力を失った時に、生きる力を蘇らせるのである。『楽しい科学』は生きることの素晴らしさを称えている。危機的な状況を切り抜けて生き残った者と、新しく生まれてきた者を共に祝福するのである。こうして「非常を超えた社会経済学」は、「人類の自伝 autobiography of the race」となる。死ぬ思いをしながら生き残った者は、何とか手にすることが出来たユーモアの精神を、新しく生まれてきた若者の喜びに付け加えるのである。それは図書館で死蔵すべき知識ではない。喜んで自分の経験を「人類の自伝」の一部として付け加えるべきであり、かつて自分が犯した過ちに責任を感じるべきなのである。もし人類の一員として果たすべき責任を自覚しているなら、あなたの知識が生き延びるのに役立つ知識なのか否かを判断して差し上げよう。つまり「日常を超えた社会経済学」と言えるのか、それとも単なる「思弁哲学 metaphysics」に過ぎないのかを判断して差し上げよう。

我々の世代は、あらゆる種類の「社会的な死 social death」を経験してき

た。また私自身、何十年かの研究・教育の世界を生き延びてきたが (Eugen Rosenstock-Huussy, “Die Krise der Universität”, in Die Hochzeit des Kriegs und der Revolution, pp.204 f, Patmos Verlag, Würzburg, 1920), 誰もが私のことを酷く誤解していた。無神論者は私のことを神学者と誤解していたし、神学者は私のことを社会学者だと誤解していた。さらに社会学者に言わせると私は歴史学者であって、歴史学者に言わせると私はジャーナリストであり、ジャーナリストは私のことを哲学者と誤解し、哲学者は法学者だと誤解していた。そして法学者など地獄に落ちるとまで言われたものである。しかし私は一度たりとも、地獄の様な「この世界 our present world」を去ることは考えなかった。「この世界」を去ることは「精神に異常を来たすこと going mad」を意味する。孤独な者にとって「この世界」は地獄かもしれないが、どんな大惨事に直面しようとも「他者との連帯 common cause with other」があれば人間は生き延びられる。ベスビオ Vesuvio 火山の噴火が収まった後に飲むワインほど**びみ**なワインは無いはずである。私がこの本を書いたのも、人類が生き延びる**いなか**の試みの中で、自分が決して孤独でないことを確認するためでもあった。